異世界行商譚

あさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界行商譚

【Ｎコード】
Ｎ５２４８Ｓ

【作者名】
あさ

【あらすじ】
異世界へと強制移住させられた青年・藍川優斗は、奴隷の少女フレイと出会い、成り行きで行商を始める事になる。元の世界とは違う文化や、ギフトと呼ばれる特殊能力を持つ人々の中で悪戦苦闘しながら、時にはお金を稼ぎ、時にはお金を失いながら旅を続けるささやかな冒険譚。

世界観トレード

雷が落ちた。

森の中にある小屋の中で男が1人、途方に暮れていた。
彼の名は藍川優斗。一生を『この世界』で過ごせと命じられ、着の身着のままで放りだされてしまった不幸な青年だ。
何故彼がこんな目に合っているかと言うと、それは数時間前に遡る。

＊

「世界の均衡の為に、ご協力をお願いしますねー」
何もない空間から発せられた声に、優斗は寝ぼけた目をこすった。
半分以上眠っている頭で、これは夢だ、と判断した優斗は寝なおそうと目をつむる。

「寝てもいいですけど、聞いてないと後々大変だと思いますよ？」
優斗が目を空ける気配はない。しかし、声は気にする事なく言葉を続けた。

「貴方の世界に異世界人がやって来たのは知っていますね？」
質問の形を取りながら、返答に期待していな声色で告げられた言葉に、優斗の意識が少しだけ覚醒に傾く。

（そう言えばニュースで騒いでいたな。夢の癖に凝った設定だ）

「世界とは脆いモノでして。砂粒１つ無くなっただけで崩壊が始まったりするんですよー。
そんな脆い世界から人１人分、他の世界に移動したらもう大変！
このままでは２つの世界が崩壊してしまうのです。
そこで白羽の矢が立ったのが貴方と言う訳です。ぱちぱち」

声のする空間に映像が映し出される。
地球に似た青い、但し大陸等の位置がまったく違う星の映像だ。

「新井式回転抽選器による厳正な審査の結果選ばれた貴方様には、この世界へ行って頂きます。いやぁ、新井さんは偉大です。私が帽子を被っているのも新井さんへのリスペクトなんですよ？　あ、見えないか。
話が逸れました。今回の移動では貴方様の大好きなファンタジー小説の様な特別な餞別は差し上げられませんが、１つだけ選択肢を差し上げます。
君は何処へ落ちたい？」

妙に強調された最後の言葉に、ようやく覚醒した、でもまだ寝ぼけた頭で優斗は行動を起こした。それが運命を決める事になるとは知らずに。

「お前は００２かっ」
声と同時に繰り出されるつっこみ動作は声のする方、即ち映像の映し出されている方へと向けられた。

「ルーナル公国、クロース領ですね。では、良い人生を」

＊

こうして見知らぬ土地に放りだされた青年、藍川優斗は数時間をかけてなんとか平静を取り戻して居た。

平静を取り戻した優斗は、一先ず情報の整理を行う事にした。

まずはここに来るまでの状況。

朝、いつも通りに起きて大学へ行き、昼食を食べてから帰宅。午後は講義を取っていないのでベッドに寝転がりながらレポートを打っていたら眠気が襲ってきた。眠っている間に夢で色々と言われ、現在に至る。

次に所持品。

服装は部屋着のフリースと、シャツが2枚。寝る時に使っていたノートパソコンと周辺機器が入った持ち運び用のジュラルミンケース。

そして現状。

身代りとして異世界に飛ばされた。

「……ファンタジーすぎる」

そう呟きながら立ち上がり、小屋の中を物色し始める。

優斗はここが異世界である事を疑っていなかった。あの姿なき声が語った言葉を、まるで天啓であるかの様に事実と確信しており、

一生をこの見知らぬ世界で過ごすのは彼の中では既に決定事項だった。

もちろん、事実と認識していても、覚悟が決まった訳ではない。

小屋の中に目ぼしい物がない事を確認すると、唯一の所持品であるノートパソコンを立ち上げた。時刻は１７時で、日付は変わっていない。

外を見ると雨が止み始めていたが、森の暗さもあって今が昼なのか夜なのかすら判らなかった。

バッテリーが満タンとは言え、この世界で充電が出来る可能性は低そうだと判断した優斗は、パソコンの電源を切る。

その瞬間、雷とは違った大きな音が聞こえた。

世界観トレード（後書き）

のんびりと更新していきますので、よろしくお願いします。

奴隷の少女

音の原因は崖崩れだった。

大きな物音にどうすべきか悩んだ優斗は、数分後、荷物をまとめてここまでやって来た。

一か所だけ不自然に抉れた道。崖から半分落ちかけているホロ付きの荷車。荷車に馬が1頭繋がれているので、荷馬車なのだろう。優斗が恐る恐る崖の端へ近づくと、崖下に何かが見えた。

「あれは……馬と、人か？」

転落事故だろうと判断し、目を逸らす。優斗は事故の顛末をこう予想した。雨で視界の悪い崖沿いの道。運悪く脆くなっていた部分を馬が踏み抜き、岩ごと崖下へ滑り落ちる。その振動で御者も御者台から振り落とされた。

崖を下るのは不可能ではないが、難しいように見える。真っ赤に染まった身体から、たとえ生きていたとしても助からないだろうと判断した優斗は、静かに目を閉じると助からないであろう、崖下の人影に手を合わせてから荷馬車へ向かった。

（死んだ人の物に手をつけるのは、気がひけるけど）

背に腹はかえらない。そう考えた優斗は、まず馬へと向かった。街へ向かうにしても乗り物が必要だと判断し、地面に落ちている手綱を手に取った。逃げられない様に手近な木にくくりつけると、御者台によじ登って中を覗く。

奥には梱包された荷物と麻袋。その手前に草で編まれた靴があっ

た。御者台の付近には何かの束や枯れ草等が置かれている。暗くてよく見えないが、それ以外にも商品らしい物が幾つかあった。

かさ、と小さな物音が聞こえた。

目を凝らすと、荷物の間に人影が見える。

「あー、すいません」

「……ぁっ」

か細い声。多分、女の子なのだろう。突然現れた見知らぬ男に警戒し、荷物の間に隠れてやり過ごそうとしたのかもしれない。そう考えた優斗は、少しでも警戒を解く為に笑顔を作って話しかけた。

「危害を加える気はないです。事故ったみたいなので、見に来ました」

大丈夫ですか、と続けようとした優斗は、はたと気づく。日本語、通じるのだろうか、と。

「盗賊、じゃないんですか?」

「盗賊とか出るのかよ。って、はい。違います違います」

言葉が通じた事に喜ぶ暇もなく、治安の悪さに頭を抱える。優斗は盗賊に襲われたとしても、勝つ自信も、逃げ切る自信もなかった。

「その、商人さんは……?」

「あー、いや、その」

崖から落ちました、とも言いづらく、優斗は言葉に詰まる。

迷いに迷ってから、どうせ話さなければならないのだから、と言い自分聞かせて口を開いた。

「馬と一緒に、崖から落ちた見たいで……」

「えっ!?」

人影が荷物の間から飛び出し、優斗を押しのけて荷馬車を飛び降りた。
人影は、優斗が予想通りした通り女の子だった。崖の下を確認した少女は、膝から崩れ落ちた。

「そんな……どうすれば」
顔を伏せ、両手で覆った姿を見て、優斗は泣いているのだと判断し、声をかけるのを躊躇した。

「そう！」
少女が唐突に立ち上がり、優斗に振り返った。少女は泣いていなかった。少なくとも、涙は流していなかった。
驚いた優斗が「うおえ！」と叫ぶの気にせず、少女が詰め寄る。

「お願いします」
「な、何を？」
少女に圧倒された優斗が一歩下がる。

「商人さんの代わりに、私を売ってください！」

売るって、どう言う意味でだよ！？
そう心の中で叫んだ優斗は、頭を抱えた。

荷馬車から水の入った袋を取り出し、飲める事を確認してから少女に手渡す。
私を売ってください、お願いします、助けてください。
主にこの３つの言葉を訴え続ける彼女をどうにか宥めた優斗は、何故か自分が落ち着いている理由について頭を巡らせていた。優斗は件の『声』の説明を根拠なしに確信している。信じさせる為の細

工が影響しているのではないか、と言う結論に達しかけるが、単に目の前にもっと混乱している相手がいるせいだと言う可能性もあるな、と思いつく。もしくはもっと魔法的な何かの影響か。

一見して冷静に見える優斗だが、実際のところ彼は十分に混乱していた。それが表に出ず、思考の暴走と言う形で表れているだけで、目の前の少女と同じくらい、もしかするとそれ以上に混乱している。

「とりあえずこれ飲んで落ち着いて」
「すいません。ありがとうございます」
少女は袋に口を付け、二口ほど飲むと優斗に返す。元々彼女たちの持ち物なのだから返す必要はないのに、と思った優斗だが、なんとなく受け取った。

「お願いしたい事があります。えっと」
「優斗と言います」
彼はわざと苗字を名乗らなかった。
この世界で苗字、即ち家名を名乗る事がどんな意味を持つのか判らなかったからだ。一部の人間、例えば貴族等しか家名を持たない、と言うのはよくある設定であり、歴史的な事実でもある。

「私はフレイと言います」
フレイと名乗った少女。所謂金髪碧眼で、優斗の主観では容姿も整っているように見える。絶世の美女、ないし美少女と言う訳ではないが憂いのある雰囲気と決意を秘めた瞳が魅力的だ。
優斗は、私を売ってください、と言う彼女の言葉を思い出しながら、首に巻かれた物を見つめる。

「それで、その。お願いがあるんです」
「とりあえず内容を聞いてから決めてもいい？」

首肯するフレイ。
兎に角情報が欲しい。そう考えた優斗は、お願いを聞きつつ彼女に質問をして情報を得る、と言う方針に決めて説明を促す。

「この辺りで不作が続いているのはご存じですよね？」
「いや。俺はこの森から出た事がないんで、外の事は詳しくない」
キョトンした表情のフレイを見て、優斗はまずったかな、と内心狼狽する。

完全な嘘はボロが出やすい。かと言って本当の事は話せない。故に優斗は、自分の境遇と現状を加味して、森で自給自足で生活している人間と言う設定を考えていた。外の事はまったく知らない、常識も欠けているが、本で知識だけはそこそこある変わり者。これならば彼女を売る為に常識的な事も学ぶ必要がある、と言う建前で色々聞けるだろうと考えた結果だ。

「もしかして、森の隠者様でしたか」
「似たようなモノかな」
フレイは何かを考えるように一拍だけ間を置いてから口を開いた。

「少し長くなってしまうのですが」
そう前置きするフレイに、優斗は無言で続きを促す。

「最近、この辺り一帯の集落で不作が続いています。不作の村がまずやる事は口減らしです。まずお年寄りが捨てられ、子供が売られます。
私の村でも同じ事をする事になりました。でも、大きな街まで売りに行くのは危険も多いです。そこで、一番高く売れそうな1人を村に出入りしている商人さんに売って来て貰う事になりました。それが私です」

フレイが言葉を止め、優斗に視線を送った。彼女の言葉を口の中で反芻していた彼は、少し遅れてその視線に気づき、続きを促す。

「私は多少ですけど読み書きが出来ますし、一応、良い年の女です。売値は高いだろうと言われました。一応程度ですけど、礼儀作法も習った事がありますし」

言葉づかいも、容姿も良く、読み書きが出来る女性。優斗はこの世界の識字を知らないが、人身売買が横行する世界のそれは低いはずだろう、と小説等の知識から判断した。

フレイの言葉が理にかなっている事を、優斗は理解出来た。

盗賊に襲われるリスク。大人数で移動が遅くなり、時間と食料を消費するリスク。それ以外にも様々な問題がある事は容易に察する事が出来る。仲介手数料を払い、旅慣れた行商人に預ける方が可能性は上がるし、より多くのお金を手に入れる為により価値の高い人間を送りだすのは当然の事だ。

優斗は日本で育った善良な大学生であり、それなりの倫理観を持っている。それは体制側に異を唱えて奴隷解放を謳うほどではないが、自分に出来る範囲で目の前の少女を助けてあげたいと思くらいには、人道的な思考の持ち主だった。

「このまま逃げれば？」

「それはダメですっ」

身を乗り出すフレイに、優斗がまた一歩下がった。

「私を売ったお金が無ければ、村は飢えて死ぬしかありません。なんとしてでも、村にお金を届けなくてはいけないんです」

「じゃあ、これ売れば？」

優斗が指差したのは荷馬車だ。持ち主は既にいない。

「……本当に何も知らないんですね」

そう言ってフレイが顎を上げると、そこに付けられている赤い首輪を指差した。

「私は奴隷です。商売どころか、私財を持つ権利すらありません」

ならば奴隷の身分を捨てればいい。そう思った優斗だが、それをそのまま口にする程、愚かではなかった。

「じゃあ、俺が売って君と山分けする、と言うのは？」

「鑑札を持たない奴隷が1人で歩いていたら、脱走奴隷として殺されてしまいます」

フレイが首輪の前方に付いている小さな輪っかを指差す。鑑札とは表に国印と所有者の名前、裏に所有者の身分が書きこまれた物の事だ、とフレイは補足する。

「首輪、外せないの？」

「私のギフトでは外せません。村にも外せる人はいません」

さらりと出てきた未知の言葉に、優斗はそれを確認すべきか悩んだ。悩んだ結果、思い浮かんだのはある諺だった。

聞くは一時の恥、知らぬは一生の恥

「ギフト、とはなんでしょう？」

「……」

帰って来た気まずい沈黙に、優斗は愛想笑いを返す事しか出来なかった。

「では、こうしましょう」
しばらく悩んでいたフレイが切りだした言葉は、優斗にとってありがたい申し出だった。

「ユート様の聞きたい事に、私は何でも答えます。荷馬車と荷物も自由にしてください。その代わり、私を売ってそのお金を村へ届ける契約をして下さい」
破格の好条件。しかし優斗は返答に窮していた。

彼が頷かなかった最大の理由は、人身売買に手を貸す事への抵抗感であった。これは、売られた後に彼女がどうなってしまうのか、と言う懸念でもある。
しかし、後ろだてもないこの世界で生きてい行く為には知識とお金が必要だ。そう考えた優斗は、実際に彼女を売る手伝いをするかどうかは別にして、ひとまず頷いて情報を聞き出す事にした。

「幾つか聞いてもいい？」
「どうぞ」
「じゃあ、とりあえずギフトって？」

フレイが手を差し出す。触って下さい、と告げられた優斗は恐る恐る指先を握った。柔らかい、と油断した瞬間、びりっとした痛みが走る。その感触に驚き、優斗は手を振り払う。

「これが私のギフトです」

（超能力？　もしくはファンタジーらしく魔法の類だろうか）

優斗が分析をしている間にも、フレイの説明は続く。

「私のギフトは天の神の欠片です。空から落ちる光を、少しだけ身体に宿しています。

他にも火の精霊や氷の妖精など、自分と相性の良いモノの欠片を宿していれば、その力を少しだけ使う事が出来ます。これがギフトです」

超能力よりも魔法に近いのかもしれない。ならば自分にも使えるのはないかと、優斗は期待を膨らませた。

「ギフトはどうやって使うの？　どうしたら手に入るの？」

気のはやる優斗の矢継ぎ早な言葉にも、フレイは取り乱す事なく説明を続ける。

「ギフトは生まれる時に神から与えられる贈り物です。使い方もモノごころつく前からなんとなく知っているものですので、使い方は人それぞれだと思います。

同じ欠片を持っていても、使い方が違う、と言うのはよくある事です」

フレイの言葉に、優斗は2つの可能性を思い浮かべた。自分が既に能力を保持している可能性と、生まれが違う自分は能力を持っていない可能性だ。どちらにしても今は使えない、と判断した優斗は少し落ち込みながら次の質問を口にする。

「じゃあ、次はこの国の身分制度と生活を聞いてもいい？」

「構いませんけど、その前に荷馬車を引きあげませんか？」

車輪の1つが崖から落ちかけている荷馬車は、今も危険な状態だ。

フレイの言葉でそれを思い出した優斗は、苦笑しながら頷いた。

はまっていた荷馬車をなんとか引き上げた2人は、すぐに話を再開せずにまず夕食を摂った。
夕食後から眠るまで、フレイが優斗に語った内容は多岐に渡る。
優斗が問い、フレイの答えた内容は常識的な物が多いらしく、何度も彼女を呆れさせる事となった。

＊

干し草の中で眠ると言うフレイから渡された毛布に包まり、優斗は彼女の言葉を思い出していた。

彼女の説明によれば、この世界は基本的に中世と呼ばれるくらいの文化と技術を持っているが、ギフトと言う特殊な力で一部の技術が突出している状態の様だった。
例えば彼女のしている首輪は、無理やり外すと命を落とすらしい。
原理は不明だが、そういうギフトがある、と言う事だ。

ここ、ルナール公国の身分制度は中世らしく、支配者である『公』と少数の貴族、その下に騎士、商人、平民、農民、奴隷の順に身分が低くなっている。騎士、商人までは特権階級に属し、逆に最下層の奴隷は家畜と同等の扱いとなる。

それ以外にもこの国の細々とした文化や治世の話を聞いた優斗だが、最も頭を悩ませている問題は、フレイと交わした約束の事だ。
約束を守ろうとした場合、特権階級である商人になり済まさなければならないのだ。

この世界の商人とは、一定量、一定金額以上の取引を行う権利を有する者の事を指す。それ以外にも市壁を通過する際に優遇されたりもする。

フレイは優斗に、死んだ商人の代わりに自分を売って欲しいと言った。それは即ち、身分詐称をしろ、と言う事だ。

手に入る利益を考えれば、そのリスクはさほど大きくない。現代日本の様に完璧に近い戸籍がある訳でもなく、証明書も国の発行した本物が手元にある事を確認している。登録名こそ違うが、彼の顔を知る人物がいない場所で商いをする分には、支障がない。

フレイによれば、名前に関してはそこまで問題ではないようだ。商売を行う際、本名を名乗らない人間は珍しくない。その事をフレイに教えてくれた若い商人も、別の名前を名乗っていた。証明証の出番も憲兵等に見咎められた時くらいで、むしろ口説く相手に自分の身分を証明する為に出す馬鹿が多かった、と彼女は語った。

生活手段と身分証明を同時に手に入れられるチャンスを得て、優斗は罪悪感を感じると共に少し安堵もしていた。商売をした事がない優斗だが、駆け出しの商人として堅実に商売をし、日銭を稼ぐくらいは出来るだろうと考えていた。幸い、財産はそれなりに手に入ったので、慣れるまでの生活費は別に確保しておく事も出来る。

色々考えた結果、この話を受ける事にした、とフレイには伝えてある。但し条件として生前の彼が使っていた行商路には近づかない、と言う条件を付けて。

亡くなった商人の行商路は基本的にここより南が多い。所持品にあった白地図に書き込まれた線から、フレイの住んでいた街が最北端のようだ。残念ながら文字は日本語とは違ったが、日本語をローマ字で書いている感覚に近い文法のようで、すぐに覚える事が出来

そうだ。

この国とこれからについての考えがまとまった優斗は、フレイが語った身の上話を思い出していた。

村長の家の末娘で、村を含む領主の館で貴族の娘の侍従として働いていた。身の回りの世話をしながら礼儀作法や読み書きを覚え、読書友達としてその娘さんと交流していたのだが、ある日彼女が他家へ嫁ぐ事になり、暇を出されてしまう。戻った村は不作が重なっており、村人を救う為に売られる事になった。商人に引き取られた後は、最寄りの街で奴隷登録を済ませてからマーケットのある大きな街へ向かっていた、と言う事だ。

何故マーケットのある街で奴隷登録をしなかったのかと聞いたところ、市壁のある街に入る際にかかる税金の問題だと言う事だった。人間には人頭税、奴隷には奴隷税がかかり、奴隷税の方が安いのだ。ちなみに商人も平民や農民に比べれば安いのだとか。

彼女の身の上話を聞くまで、優斗はフレイを村に返し、自分はこの身分を利用して生活するつもりだった。しかし、彼女の話を聞いた後はその判断を保留せざるを得なかった。もし、彼女が村に帰っても、また売られるだけではないか、と言う懸念がどうしても消せなかったからだ。

数年間村にいなかった彼女は、既に身内と思われていない、と言うのが話を聞いた優斗の感想だった。自分達が不作で食うに困っている間も、綺麗な服を着て、おいしいご飯を食べていた人間と認識されている可能性がある。奴隷の首輪をしたまま戻れば、迫害どころか家畜扱いをされてもおかしくない。もちろん、優斗の杞憂である可能性もある。

結局なるようにしかならない。
そう結論した優斗は、何時しか眠気に身をゆだねていた。

ルナール公国（後書き）

ランナーズハイならぬライターズハイになっていました。
のんびり更新改め、マイペースで更新して行きたいと思います。

フレイ先生

朝食を終えた2人は、白地図を囲んでこれからについて話し合っていた。

「じゃあ、この街に向かうって事でいい？」

「良いと思います」

優斗が指差したのは、アロエナと言う街だった。亡くなった商人――商取引許可証にはリコスと書かれていた――は主にここ、クロース領で商売をしていた様なので、一先ず別の土地へ移動したいと優斗が主張し、それに対してフレイが自分を売って村へ物資を届ける方が先だと主張した結果、クロース領を脱出するルート上にある大き目の街へ移動する事になった。

「では、早速出発しましょう」

フレイの言葉に頷いた優斗が、荷物を荷馬車へと積み込む。

いざ出発、と言う時になって新たな問題が発生した。2人とも御者の経験がなかったのだ。話し合った結果、優斗が恐る恐る手綱を手にし、その隣でフレイが亡くなった商人リコスがどの様に操舵していたかを説明する、と言う分担となった。覚えようと思って見ていた訳でもないフレイが懸命に思い出しながらながら指示を飛ばし、それに従う優斗がなんとか馬を歩かせられる様になった頃には太陽が真上まで来ていた。

「そろそろお昼にしようか」

「はい」

優斗が手綱を引くと、馬が立ち止まる。これは優斗の腕と言うより、馬が賢く躾けられていたおかげだ。優斗はただ、どう手綱を動

かせば馬がどう反応するか、機械的に覚えて実行しているだけに過ぎない。

馬が逃げない様に木に繋ぎ、荷馬車から食料品を下ろす。荷馬車はずっと揺れていたので、しっかりとした地面に降り立った優斗は、軽い感動を覚えた。

そんな優斗の隣に降り立ったフレイの手には、食料品の入った袋が握られている。

「はい、どうぞ」

「ありがとー」

携行食らしい硬いパンを口にしながら、優斗はこの後の事について考えていた。

（文字の対比表が欲しいな。契約書が読めないとか致命的すぎるし）

幸い、荷物には紙とペンがあった。紙は所謂羊皮紙と言われる分厚い物で、ペンはインクを付けて書く羽ペンだった。

「フレイさんって、字、書けるんだよね？」

「少しですけど」

「じゃあ、後で教えてくれませんか？」

フレイは少し悩んでから、わかりましたと答える。優斗と同じく、商人なのに文字が読めないのでは、自分を売り払うにも支障が出ると判断した様だ。

フレイよりも先に食事を終えた優斗は、荷馬車から紙をひっぱり出し、五十音を順に書き連ねていく。その様子にフレイが目を丸くしている事に。彼は気付かなかった。

「じゃあまず、あ、と書いて貰えますか？」
何か言いたそうな表情のフレイが、出かかった言葉を飲み込んで首肯する。そして優斗が差し出したペンを受け取らず、地面に文字を書き始めた。

優斗が発音した音をフレイが文字にして地面に書く、と言う流れを数十分続けて五十音全てを表にした優斗は、この世界の文字はローマ字に近いな、と言う感想を抱いた。しばらく表を見つめていると、濁点、半濁点の存在を思い出し、余ったスペースに書き足していく。

「こんなもんかな」
「まだ幾つかありますよ？」
そう言ってフレイは数個の文字を地面に書き足した。

フレイが指差しながら発音した音は、日本語で言うところの小文字を用いた物や、『ヴ』等の発音が多少違う言葉だった。その中で最も優斗が面白がったのが、彼が『か』に半濁点で表記した言葉だった。鼻から息を抜きながら発音する、所謂メガネのガだ。

「ユート様」
「ん、何？」
「その文字はなんですか？」
「古い言葉。今はもう使われてないんだよね？」
優斗は既に考えてあった言い訳を口にし、表へと視線を戻した。

表を眺める優斗が、ちらりとフレイを確認する。特に疑っていない事に安堵し、対比表にある文字を地面に書きなぐる。
優斗はそこでまた1つ思い出す。数字を忘れていた。

「数字はどう書くの？」
「数字とはなんでしょう？」
「えーっと、数え方、値段の書き方。で、判る？」
「はい。大丈夫です」
じゃあ、と優斗が指を1本出す。フレイが書いた文字を写すと次は2本。これをどんどんと続けた結果、この世界も10進法を採用していると言う事が判明した。

フレイが知っていたのは1000の単位までだった。組み合わせれば9999までは数える事が出来る様になった優斗が、通貨に付いて尋ねる。

「私が見た事があるのは、公国金貨、公国銀貨、公国銅貨、王国銅貨だけです。公国金貨は見せて貰っただけですけど」
「んー。どのくらいの価値か判る？」
「すいません。判らないです」
物々交換が主流と言う村の出身だったのだ。それも仕方がない。優斗はそう考えてから、侍従としての給金はどうだったのだろうと気づき、訪ねた。

「私の給金はおとうさんに直接支払われていました。額もおとうさんと村の交渉役の方が決めたので、知りません」
奉公に出ていたと言うよりも売られた感じだったのだろう。そう考えた優斗は、やはりこのまま村へ返すのはマズいだろうと考えた。
仮に大金を持って戻ったとしても、苦しくなれば再度売られるだろう事は想像に難くない。

「そうすると、フレイさんをいくらで売っていいか判らないんだけど」
「……それは困りました」

冷やかしで値段を確認し、相場を割り出せばいいのだが、優斗はそれを指摘しなかった。奴隷商の店に入り、何も買わずに出ると言う事が可能かどうか、判らなかったからだ。それ以前に値札がない可能性すらある。

「そうだ。あれがあったんでした」

そう言って荷馬車へと入って行ったフレイは、1枚の紙を持って戻って来た。それを優斗に手渡す。

「それは私の村と商人さんが交わした契約書です。村に送る商品と数が書いてあります」

「そうすると、これを全部足した値段、プラス手数料で売れれば良いって訳か」

「はい」

対比表を使って確認した所、ほとんどが食料品のようだ。指定された量の安い麦――ライ麦や燕麦等――等を村まで届けさせる、と言う文章からすると、リコスと言う商人はもう1度村に向かう予定ではなかったのだろう。これは優斗にとってありがたい事だった。

「他に聞きたい事はありますか」

「ある、けどそれは移動しながらでもいい？」

「はい」

「よろしくお願いします。フレイせんせー」

先生！？　と驚くフレイを無視して、優斗は出発の準備を始める。

こうして2人は、本格的にアロエナと言う都市に向かい、移動を開始した。

職人都市アロエナ

職人都市アロエナ。
クロース領で2番目に大きな都市で、市壁に囲まれた街にはその2つ名の通り、金属製品の加工を行う工房が溢れかえっている。装飾品や生活用品、武具等、質の良い製品はクロース領のみならずルナール公国全土で人気の商品だ。フレイの目的地である奴隷商もあるが、炭鉱や商業都市、城下町程の規模ではない。

市壁が見えてから半日、優斗たちはまだ街の中に入れずにいた。

アロエナに限らず、市壁のある都市に入るには様々な税金を支払わなければならないし、都市によっては持ち込みに税金のかかる商品もある。もちろん、不審者を中に入れない為、と言う目的も存在するが、基本的にはお金、なのである。

「次っ」
中年の男に促され、優斗は愛想笑いを浮かべながら荷馬車を進める。あの森からここまで来るまでの数日間に、馬の扱いは多少ましになっていた。

「どうぞ」
「おう」
横柄な態度の検査官は、優斗が開いた後ろ側からホロの中を覗き込むと、一番手前にあった靴を手に取り、何かを確認するように手の中で回しながら更に奥を確認する。やる気のなさそうな視線は、この馬車で最大の『荷物』を見てにやりと笑った。

「女連れか。羨ましいぞ、色男」

「いえいえ。あれは商品です」
「お、ホントだ。じゃあ、お前の人頭税と奴隷税、商品の方はもうちょい詳しく調べるか？」
そう聞かれた優斗は、内心焦った。あっちの世界から持ってきた物はまとめてジュラルミンケースに入れて、偶然見つけた御者台後ろの隠しスペース入っている。ジュラルミンケースもそうだが、隠しスペースに入っていた宝石や装飾の付いたナイフも見つかると、多分マズい。

実際にはそこまで調査される事はないからこその隠しスペースなのだが、焦っている優斗はそこまで頭が回っていない。

「俺の靴も大分くたびれて来たなぁ」
男の声に、優斗はびくりと反応してしまい、それを見た男がにやりと笑う。

「よろしければそれ、どうぞ」
「そうか？　催促したみたいでわりーな。行っていいぞ。あ、そっちでこれ見せて払うもんは払え」
「ありがとうございます」
あからさまにほっとする優斗を見て、検査官の男が声を出して笑う。その声にまたびくりとした優斗は、逃げるように窓口へと移動を開始した。

この世界で賄賂は珍しいものではないが、市壁を通るくらいで払う事は普通ない。初めて市壁を通過する優斗は、必要以上に緊張していた。それに気づいた検査官にからかわれ、まんまと巻き上げられただけの事だ。市壁をくぐってすぐにそれを聞かされた優斗は、がっくりと肩を落とした。

「フレイさんもその時に教えてくれればいいのに」
「奴隷が持ち主に意見する訳にはいきません。それと、呼び捨てと命令形」
「うっ」
奴隷は奴隷らしく、持ち主は持ち主らしくしていなければ怪しまれる。フレイの言葉に優斗は納得し、了承もしたがまだ慣れていない。

優斗は荷馬車の流れに乗り、街の中央西へと向かっていた。露店などが並ぶ道を進み、しばらくすると食べ物の屋台や酒場らしい看板を掲げた店が増え、ちらほら宿も見え始める。

街についた行商人が真っ先に行う事は、かさばる商品を売りに行くか、宿を取るかである。優斗が追従した荷馬車の主は、後者だった。

「とりあえず宿取ろうか？」
「売りにいかないんですか？」
「相場調べなきゃだし」
「でしたら、多少値は張りますけど、大きい納屋のある、目立つ宿がいいですよ」
「りょーかい」
フレイの助言に従って選んだ宿は、ボロではあるが大きめで納屋が併設されていた。

納屋に荷馬車を預けた優斗は、フレイに貴重品だけを持たせて宿へ入った。優斗としては、女性に荷物を持たせるのは心苦しかったが、用事がないなら納屋にいますと言われて仕方なく持たせている状態だ。

「いらっしゃい。2人、いや、1人か。部屋まで連れてくなら割増しね」
「では、これで」
「部屋は二階の突き当りね」
料金表を見た優斗が少し多めの金額を払うと、店主は下卑た笑みを浮かべて階段を指差した。

鍵が渡されるものだと待っていた優斗は、店主が訝しげな表情を浮かべてもその場を動かなかった。業を煮やした店主が何かを口にしようとした時、それよりも早く優斗に声がかけられる。

「優斗様、部屋へ参りましょう」
「ん、あぁ」
フレイに促されて、優斗は状況が掴めないまま部屋へ向かう。そして扉に鍵がついていない事に驚く。驚く優斗を追い抜いたフレイは、扉を開けて優斗を中へ入るよう促した。

部屋にはベッドとサイドテーブル、椅子がありサイドテーブルには水差しがおかれている。優斗は扉に鍵が無い事に不安を覚えながら、フレイに椅子を勧めて自分はベッドへと腰かける。

「この後、どうするのですか？」
「市場調査、かな。フレイ、荷物番頼んでいいかな？」
「命令して下さい」
「2人きりの時くらいダメ？」
「ダメ。です」
市壁が見え始めた頃から、フレイは自分を奴隷扱いする様に優斗に求め始めた。強硬にそれを求めるのは、怪しまれない為という理由の他に、彼女の心情に由来する理由も存在する。

「じゃあ、命令。今日は荷物番としてこの部屋にいる事」
「はい」
「眠くなったらベッドで寝る事」
「……荷物番が寝たらダメだと思うのですが」
「気のせい気のせい」
フレイは再び言い返そうとするが、何か思い出したかのように「はい」と返事を返す。

フレイに待機命令を出した優斗は、出かける準備を始めた。
優斗はずっと考えていた市場調査の方法を思い出す。まず基本として通貨価値と物価。これは露店と適当な店を巡ればある程度予測がつくだろう、と考えていた。現状、もっとも重要な情報はフレイの村に送る物資の総額と、フレイの売価だろう。

次に、取引の練習。ある程度の経験がなければ、足元を見られ続けるだけだと、先ほど市壁を通過する際に優斗は痛感した。同時に取引のやり方や常識等の知識も手に入れておきたい。その為に比較的安い物とそれなりに高価な物をある程度売ってみる予定であり、優斗の持つ袋の中にはお金の他に売る為の商品が入れられている。

それ以外にも町並みを確認したり、儲け話がないか探してみたりする予定だった。儲け話は探せるのか、というだけで実際に実行する気は優斗にはない。常識、慣習という知識のない事がいかに不利なのか、優斗は既に理解している。

「じゃあ、お土産買って来るから」
「いってらっしゃいませ」
準備を終えた優斗は、フレイに見送られて部屋を出ると、市場調査と言う名目の町中めぐりを開始した。

職人都市アロエナ（後書き）

話に動きがありません。フレイさん、早くはっちゃけてー

値切り交渉

アロエナ滞在2日目。
朝食を終えた優斗は、扉を背にして立っていた。

優斗の耳には階下の喧騒はほとんど入っておらず、扉の中から聞こえる水音だけが響いている。それは部屋の中ではフレイが水にぬらした布をしぼっている音で、次いで聞こえたのは体を拭く為に布を擦り付ける音。

フレイは現在、優斗の命令で身を清めている。命令直後、俯いて表情を隠しながら服を脱ぎだしたので大慌てで逃げ出した優斗は、惜しい事をしたかな、と少しだけ後悔していた。優斗はフレイと、商品価値を維持する為に『そーいうこと』はしない約束をしている。約束の理由から考えれば、見ている分には問題なかったのでは。今からでも戻れば。そんな不埒な思考が、唐突に遮られる。

「お待たせしました」
「じゃあ、行こうか」
優斗はフレイの顔をまともに見る事が自身がなかったので、扉が開く音に振り替えらず歩き出した。

他の客の相手をしている店主からおざなりに見送りの言葉をかけられながら宿を出た2人は、大通りに向かって歩いていた。先導する優斗が目指しているのは、昨日、ある約束を取り付けた店だ。

「いらっしゃい。って、ホントに来た」
「いやいや、約束したし」
「男の口約束を簡単に信じる程、私は安くないよ？」

しかも商人だしねぇ、と朗らかに笑う女性は、この街で最も大きな服飾店の店員で、先日、女性の服を一式買いに来るから見立ててほしい、と頼んでおいた相手でもある。

優斗は市場調査の一環として、多少高価な買い物をする予定だった。どうせ買うなら使える物が良いと考え、フレイに服を贈ることを思いついた優斗は、拒否される事を予想して目的地を告げずにここまでやってきた。

「とりあえず服を買うから」
「私はこれで十分です」
「彼女さん、そう言わず買ってくれるって言うんだから貰っときなっ、へ？」
店員の視線がフレイの顔から首に移り、続いて優斗へ向けられる。少し悩んでから、にや～っと楽しそうに笑う。

優斗は店員が何かを勘違いしている事に気づいたが、あえて訂正しなかった。その代わりに、勘違いを助長させる様な行為――フレイの耳に口を寄せ、考えていた言い訳をささやいた。

「売り物は綺麗な方が高値が付くでしょ？」
「……わかりました」
フレイの返事に満足した優斗は、フレイを店内へ促す。振り替える事なく店内へと進む店員は、既に店の奥へ消えかけている。

「ユート様が選んで下さいね」
「へ？」
「商品の飾りを選ぶのは商人の仕事、ですよ？」
フレイは優斗の間抜け顔を見て、クスリ、と笑ってから店員を追いかけた。取り残された優斗は、こっそりお勧めを聞こう、と思い

ながら2人の後を追った。

贈り物くらい自分で選びましょうね。

貴族の使用人や大き目の商家から売りに出された服が集められていると言う一角に案内した店員の無情な言葉に、優斗は頭を悩ませていた。

優斗は生まれてこの方、女性の服を選んだ事がない。これどう、等と感想を聞かれた時も無難な答えで難を逃れて来たので、1から選ぶと言うのは不慣れと言うよりも苦行に近かった。

服を見ていても考えがまとまらない。そう判断した優斗は、先ほどから一言もしゃべらずに隣に立ちづつけているフレイに視線を向けた。彼女から連想される事柄を基準に服を選ぼうと考えた優斗がまず思い浮かべたのが、奴隷と言う身分だった。奴隷の服、ではこのままと言う選択肢しか思い浮かばなかったので、連想ゲームの様に単語を並べていく。奴隷。従う者。従者。そういえば元貴族の侍従だったと言う事を思い出し、侍女。メイド服？

それはどうだろうと思った優斗は、次に身体的特徴で考える事にした。肩口まである金の髪と青い瞳、白い肌。優斗からすれば絵本にでも出てきそうな外見だったが、街ゆく人を観察した今では、よくある組み合わせだと理解できる。強いて言うなら、街の人よりもフレイの方が更に肌が白い。

優斗は色々と考えた結果、彼女の見た目から連想した『不思議の国のアリス』と言う題材で服を選ぶ事に決めた。これは童話を元にすれば不埒な思考も浮かびにくいだろう、と言う無意識の判断でもあった。並べられた服を眺めていると、お誂え向きにも水色のエプ

ロンドレスが見つかり、手に取る。

「こんなのはどう？」

「お任せします」

素っ気ない返事に、優斗は困った様な表情を浮かべる。しかし、すぐに何かを思いついたのか、表情を崩して口を開く。

「命令。この服の感想を述べよ」

「……それは卑怯ではないですか？」

フレイが「前に似たような服を着ていました。勤め先で」と告げられて得意げに笑っていた優斗の表情が固まる。エプロンドレス＝メイドさん、と言う図式に今さら気づいた様だ。

優斗がいま求めているのは、街を歩く為の服だ。この世界の常識を知らない優斗だが、昨日、街を歩いていてメイドさんを見かけた記憶はなかったので、この服は却下となった。

じゃあ、似たような服を、と考えた優斗は、再度服の山の中を物色し始める。その結果、ノースリーブのワンピースと半袖のブラウスを手に取った。紺色のワンピースは裾にレースがあしらわれており、白いブラウスには袖口を窄める様に青いリボンが巻かれている。

「お客さん、いいセンスしてますね。でも、もうワンポイントあった方がいいかも」

「へ？　じゃあ、カーディガンかケープでも……」

「はいよー。じゃあ、彼女さん、こっちで着替えましょ」

店員は優斗が唐突に現れたことに驚いている内に、手に取っていた服とフレイを浚っていく。その手際に驚いた優斗だが、すぐに我を取り戻して店内を歩き出す。

優斗が向かったのはリボンなどの装飾品が並べられたコーナーだ。アクセサリや髪留め等の小物くらいは選んだ事のあるので、優斗にとって先ほどよりも気軽に眺められ、フレイの着替え後の姿を想像しながら、どれが似合いそうか考え始めるくらいには余裕が出来ていた。

あれこれと悩んだ優斗が2つのリボンを手に取ると同時に、肩を叩かれた。リボンを手放す事なく振り替えると、そこには店員とその後ろから顔だけが見えるフレイがいた。

「こんな感じになりましたよー。あ、ケープは白にしました。青に映えそうだったんで」

「あ、うん」

そう言って横移動した店員の影から、フレイの全身が露わになる。藍色のワンピースと白いケープは似合っていたが、少し野暮ったくもあった。

その姿に無難な褒め言葉を口にしようとした優斗は、手の中にあったリボンを奪われた事でそれを妨害されてしまう。取り上げた店員は、1メートル近くありそう赤いリボンをフレイの腰に巻きはじめる。

「彼女さん、腰細いからこう言うの似合いますよー。お客さん、やっぱりいいセンスしてるね！」

「はぁ。どうも」

腰の後ろでなく横でリボンを結ぶと、もう1つの青いリボンを頭に巻き始める。カチューシャの様に髪に止め、後ろ側でリボン結び。

腰のリボンがくびれを強調し、野暮ったさが消えて少し色っぽい印象に代わる。店員に促されたフレイがくるりと回ると、ふわりと

舞ったケープの下からブラウスが覗く。

「似合ってる」

「どうも」

簡素な受け答えに店員は不満そうだ。それに気づいた優斗は、こっそり深呼吸をしてから更に二言褒め言葉を追加し、店員に向き直る。

「これ、いくら？」

「えーっと。公国銀貨で、このくらいでどう？」

差し出されたのは珠のはじかれたソロバンだった。優斗が、この世界にもあったのか、と言う感想と共に確認した価格は、公国銀貨１０枚と少し、と言った所だった。１枚で１日分の宿代と食費が賄える事を考えれば、それなりの高値だ。

男が女に物を贈る際、提示された価格で買う事が多い。それは、見栄やケチと思われて心証を悪くする事を避けるためで、ついでに男のプライドと言うヤツでもある。故にこういう場合、店員は支払価格を高めに設定する事が多い。

「んー。もうちょい負けて」

「おぉう」

元々ここには、高価な物を値切って買う、と言う目的で来た優斗にとっては当然の、しかし店員にとっては少し不満の残る反応だった。

そんな店員の心情も知らず、優斗は言葉を続ける。

「いい物だと思うけど、ちょっと高いかな、って」

「んー、じゃあこれで」

一気に銀貨1枚も下がり、表面上は平静を保つ優斗も、内心ではかなり驚いていた。店員からすれば、単に適正価格に戻しただけだ。

「ふむ。どうしようかな」

「ご要望通り下着から何から一式全部ですし。ガーターベルトとか、結構いいヤツですよ」

「ガーターベルトっすか」

ついフレイに視線を向けてしまった優斗。それに反応して、フレイがロングスカートをたくしあげる。

「ちょ、ストップ」

慌ててスカートを摘まむ手を下げさせるが、優斗の視線はオーバーニーソックスとそれに繋がれたガーターベルトをきっちりと確認していた。

店員に白い目に気づいた優斗は、咳払いをひとつしてからフレイに「人前ではしたない事はしないように」と耳打ちする。「わかりました」と素直に頷いた事にほっとしながら、優斗は店員へと向き直った。

「じとー」

「で、値段だけど」

目だけでなく口でも訴えられるも、それを無視して交渉を続ける。店員も商売なので、これ以上の追及はして来ないだろう、と言う優斗の予想はあたり、値切り交渉が再開される。

「んー。これ以上は店長に聞かないと」

そう言って店員が視線を向けた先には、スキンヘッドの厳つい男の姿があった。

その姿に、あんまり交渉したい相手ではない、と思った優斗は、早々に交渉材料を場に出す事にした。

「もう一式くらい買おうかな、って思える値段にならない？」

「う。それは」

悩み始める店員。一着じゃなくて一式ですよね、と言う確認に、はい、と答えた優斗は、少しほっとしていた。

優斗が安堵したのは、この世界でも値切りの基本は変わらない、即ち、彼が今まで経験してきた経済活動の知識がある程度流用可能だと確認できたからだ。これから臨む商談の為に、少しでも安心できる材料が欲しかった優斗にとって、それはありがたい事だった。

「じゃあ、合わせて値引くって事でどうです？」

「どれだけ値引くか、聞いてから考えるよ」

優斗の反応に、店員は満足げに頷いた。

その後、優斗自身の服一式と件のエプロンドレス、それに合わせたオーバーニーソックス、替えの下着などを加えたラインナップで行われた値切り交渉は、１時間近く続くいた。

値切り交渉（後書き）

題名に反して単なるお買い物。あれは優斗の心情と言う感じです。

前哨戦

無事に値切り交渉を終えた優斗に、店員が1枚の紙を差し出す。

「これは？」

「たくさん買ってくれたからサービス。これ見せれば安くしてくれると思うよ」

「ありがとうございます」

受け取った紙の表には店のエンブレム。裏返して見ると精巧な地図が描いてあり、それには服と靴、宝石のマークが描かれている。

「最低限、靴は買ったげなよ。その服に合うヤツ」

「了解です。それにしても絵、上手いですね」

地図の出来に関心しながら、優斗はフレイの足元を見る。確かに今の靴では、この服装には合わない。

「あぁ。私のギフトだよ」

「……ギフト、ですか」

何のギフトでどう描いたのか。優斗その疑問を、ストレートにぶつける事にした。

「どんなギフトかお聞きしても？」

「あぁ、いいよ。見てな」

そういって取り出された黒い塊は、木炭だった。それを同じく取り出した紙に押し付けると、紙は真っ黒になる。

次に起こった現象に、優斗は目を見張った。店員が紙に触れると、木炭で出来た汚れが動き、この店の看板デザインに変化したからだ。

「これ、は？」
「土の妖精の欠片さ。ちょっとだけ、動かせるんだよ」
服の汚れとか見えないとこに移動させたり出来るんだよ。優斗は得意げに言う店員に、すごいですね、と答える。褒められて気分が良くなったのか、店員はリボンをもう1つ取り出して、フレイの首に巻いた。

「これもサービスしとくよ。じゃ、私は戻るから」
「はい。ありがとうございました」
先ほどの現象に意識が向いていた優斗は、リボンがさりげなく首輪を隠している事に気づかなかった。

奴隷がその証である首輪を隠すことは珍しくない。外せば違法、と言うか死亡だが、主人の意向に逆らわない限り、問題ない。むしろ主人が隠させる事も多い程だ。

優斗は歩きながら先ほどの現象について考え始める。彼女の説明を真に受けるならば、鉱物を操作出来るのだろうと推測出来る。汚れも移動出来るという言葉から、影響範囲はもう少し大きいかもしれない。

考察は部屋に戻ってからにしよう。そうすればフレイにも質問出来るし。そう考えた優斗は、ひとまず靴屋へ向かう事にした。

靴屋で紙を見せると、何故か褒められ、歩きやすそうな茶色のブーツを値札の半値で買える事になった。そこでようやく、先ほどの服飾店には値札がなかった事に思い至った優斗は、本当に値切りが成功したのか、悩む事になる。

さすがに宝石までは無理かな。そう判断した優斗は、昼食を調達

してから宿へ戻る事にした。宿に戻って昼食を終えるまで、フレイはほとんど口を開かなかった。おかげで優斗は、店で見たギフトについて聞く事が出来なかった。

「午後から商会に行こうと思うんだけど」
「わかりました」
この街に来た本来の目的を果たすために。

フレイは、売られると言う事象にあまり悲観していない。村を救う為だと覚悟はずっと前に決めていたし、自分ならばそれなりに立ち回れるだろうという自信もある。それでも、侍従時代に見た奴隷の扱いを思い出し、身が震える事もあった。

「じゃあ、行こうか」
「はい」
先に行ってて、と言う優斗の言葉に従い、部屋を出る。宿の店主に荷馬車を出す旨を伝える優斗を追い越し、荷馬車へ向かう。荷馬車は今朝と同じ位置にあり、到着したフレイは、心を落ち着ける為に馬の顔を撫でた。

優斗と合流し、荷馬車で向かった先は、この街でも最大級の規模を誇る商会だ。
商会の裏にある荷卸し場の前に立っている男に優斗が「すいません、荷物を売りたいですが」と声をかけると、馬を預けさせられ、荷卸し場の隣にある一室へと案内された。もちろん、フレイも一緒だ。

通された部屋には2人の男がいた。1人は小太りの中年で、もう

1人は若く見える。中年の方が椅子に座り、若者がその後ろに控えている。

「どうもどうも。わがロード商会へようこそ。本日はどの様なご用件で？」

「麦や布、編み靴などを仕入れたので、買い取って貰いたいのです」

「そうですかそうですか。では、実物を拝見させて頂いても？」

「はい。フレイ」

「はい」

優斗の後ろに居たフレイが、真横へと移動する。その姿を見た若い商人が、ほう、とため息をついた。

「荷馬車の売り物だけ、説明しといて」

「わかりました」

優斗が視線を送ると、中年の商人が苦笑いを浮かべた。そして後ろを振り返る事なく、若い商人に声をかける。

「お前、見に行きたいか？」

「もちろんです！」

こちらです、とフレイを連れて出ていく年若い商人。残された2人は顔を見合わせ、笑いあう。その笑顔に促されて、優斗は椅子に腰かけた。

「申し遅れました。私の名はハリスと言います。どうぞ、ハリスとお呼び下さい」

「商売をする時は、優斗、と名乗らせて貰っています」

優斗のセリフ回しは、前日にこっそり覗き見た他の商会での商談からの引用だ。商談用のしゃべり方、と言うのも彼にとっては未知のモノだった。

「それで、どういったご用件でしょうか？」
「ひとまず、これを」
自分の意図にあっさり気づいてくれたハリスに驚きと、それと同じだけの恐ろしさを感じながら、優斗は紙を2枚差し出した。

「これは？」
「そちらが持ち込ませて頂いた品で、こちらが東にある村に届けてほしい物品です」
リストを確認したハリスは、顔を上げる事なく口を開く。

「支払はどの様に？」
「現金が必要であれば準備しますが、手持ちの何かを対価としようと考えています」
優斗の言葉に、ハリスはソロバンを取り出し、はじく。

「あの女性は奴隷ですかな？」
「お察しの通りです」
首輪を隠していても、目ざとい人間ならば気づく。ハリスの様なそれなりの経験を積んだ商人ならば、なおさらだ。そして優斗の様な行商人が、奴隷と言う身分に不相応なモノを連れている理由も、簡単に察することが出来た。

「物々交換で品物を送る契約をした、と言う訳ですか。ご自分でいかれないのですか？」
「少々、北に用事がありまして。出来れば私の代わりに買付に行ける方を紹介して欲しいくらいです」
「行商路を譲ってしまわれるのですか？」
「数年、帰って来れないかもしれませんので、その間、買付がこなければ村が困った事になりますから」
優斗の言葉に、ハリスはこっそりため息をついていた。買い取り

額の予想、奴隷の平均価格からリストの商品を村へ送る出費を引けば、ほとんど残らない計算になる。人頭税、奴隷税に滞在費を引けば、ほぼ間違いなく利益は無くなる。

「ふむ。貴方は誠実な商人の様だ」

それを褒め言葉と解釈した優斗は、ハリスに笑顔を返す。

「彼女の方も買い取り希望ですか？」

「いえ、その気はありません。まぁ、値段次第ですけど。ああ見えて彼女、掘り出し物ですので」

「ほう？」

優斗の言葉を、ハリスはあまり信用していなかった。しかし、年若く、商売慣れしているとも言えない駆け出しの彼がどんな風に騙されて来たのかは、純粋に興味があった。

「彼女は読み書きが出来ます」

「それで？」

この世界の識字率は低いとフレイに教わっていた優斗は、反応の薄さに少しどきりとする。フレイは農村の出で、街の識字率を知らない。優斗はそれを考慮出来ていなかった。

「貴族の館で侍従をしていたらしいので、礼儀作法も中々の物です」

「確かに立ち振る舞いは凛としてましたなぁ」

貴族の館で粗相をして奴隷に落とされた娘、と言うのは多くはないがそれなりに存在する。

ハリスはほんの少しだけ、目の前の駆け出し行商人の評価を上方修正した。少なくとも、情に絆されてただ働きをしている訳ではないらしい、と。

「これは自称ですけど、生娘らしいです」
「ほほう」
ささやく様な声に、ハリスは今までで一番の反応を見せる。それは好色な意味でなく、商人として高価な品に対する感嘆だった。

ハリスは頭の中でソロバンをはじき、買取に使える金額に金貨を3枚ほど上乗せする。女奴隷の平均買取価格は公国金貨7枚前後。これは高級な家具が買える程の大金だ。一方、優斗が示した紙に書かれていた品と配達の料金はざっと見積もって公国金貨8枚と少し。荷馬車の物の値段と行商路を譲るという提案を加味したとしても、これ以上を提案出来る商会はないはずだ。十分な利益と恩を売れる、と内心ほくそ笑んだ。

売るつもりは無いという言葉は、駆け引きの為の嘘だろう。そう判断したハリスは、フレイを買い取る方向で事を考え始める。

目の前の行商人の言葉を信じるならば、読み書きに礼儀作法まで出来、生娘である。懇意の奴隷商は喜ぶし、買取の際に処女である事を確認する必要があるのも、良い点の1つだ。最近がんばっている彼の部下が気に入っている様なので、ご褒美替わりにさせてやるのもいいかもしれない。もちろん、傷をつけないように注意する必要はあるが。

「確かに掘り出し物ですね」
「そうでしょう？」
優斗はにやりと笑い、言葉を続ける。

「それに、彼女にとって私は村を助けてくれた恩人です。故に、忠義心も高いので、役に立ってくれるはずです。いろいろと」
「それは確かに魅力的ですな」

笑みを交わし、交渉に入ろうというタイミングで扉が開き、扉からはフレイと、それに続いて年若い商人が入って来た。

前哨戦（後書き）

優斗くんの拙い商談がはじまりました。

初商談

ハリスは部下の報告を聞き、優斗と名乗った行商人から渡されたリストと見比べる。それがほぼ同じ内容である事を確認すると、紙の裏面にメッセージを書き込んだ。

「どうぞ」

「……私ですか？」

「フレイ、受け取って。で、読んで」

ハリスの意図に気づいた優斗の言葉に、フレイは素直に従った。

「本日は我がロード商会に素晴らしい商品を持ち込んでいただき、ありがとうございます。ところでうちの部下に口説かれませんでしたか」

淡々と読み上げるフレイの言葉に、若い商人が焦り、それを見たハリスが笑う。

その後、フレイの分の椅子が準備された。もちろん単なる好意ではなく、礼儀作法が出来ると言う優斗の言葉を確認する為だ。その露骨な行為に、優斗はただ苦笑するしかなかった。

フレイの価値確認が終わり、荷馬車に積まれた荷物の商談へと移る。

「公国銀貨でこのくらいでどうでしょうか」

ハリスが提示した価格は、露店で確認した物の半値以下だった。優斗の中では半分が最低ラインだった為、顔をしかめる。

「不作の割に、安すぎませんか？」

「不作だからこそ、です。質がイマイチのようですし」
質までは判断できない優斗は、こっそりフレイに視線を送る。その視線が否と言っている気がしたので、優斗は強気で攻める事に決めた。最悪、他の商会に持ち込めばよいのだ、と。

「そこまで悪くはないでしょう？」
「えぇ、その通りです。しかし、このくらいの物は、むしろ売られてくる事が多いくらいでして。
もう少し質が良ければ、飛ぶように売れるのですが」

ハリスの言葉は真実で、最近、例年ならば食用にする程度の物を売り、更に安い食糧を買っていく農家が多い。普段であれば往復のリスクから行われないが、不作の状況で、足りない食糧を少しでも増やしたいと考えるのは当然の事だ。

「それでも安すぎるでしょう。どうにもならいと言うのであれば、他をあたります」
「ふーむ」
ハリスがちらりとフレイを見た。彼にっとてこれは前哨戦だ。もっと大きな利益の為に、ここは少しだけ譲歩すべきだと考え、どこまでならば大丈夫かを考え始める。

「では、これで」
提示されたのは最低ラインである半値よりも少し高い価格だった。

他に行っても大差はないだろうし、手間を考えれば売る方が無難。一度はそう考えた優斗だが、今は経験を積む事が大事だと考え直す。

「ロード商会さんとは、今後も懇意にさせて頂きたいと思っていたのですが」

「それは私どもも同じ思いです。しかし、これ以上は。おお、そうだ」

さも今思いつきました、と言わんばかりに手を打ち、白い紙を取り出す。そしてそこに文字を書き連ね、優斗の前に差し出した。

「契約書、ですか？」

「はい。先ほどの価格で了承して頂けるのでしたら、輸送費をこちらで全額持たせて頂き、品物はその価格でお譲りいたします。どうですか？」

「うーん」

優斗にとって輸送費はそれなりの出費になるが、商会にとっては何かのついでで行う事が可能だ。別途、相手を探す手間、もしくは探してもらう手間賃まで浮くのであれば、優斗にとってそれは、大幅な値上げに等しい。

また、彼が提示した商品の額も、それなりだ。露店で買うよりは安く、大口の取引よりは高い。総合すれば、かなりお得だ。

簡易とはいえ、契約の文言を書き出したのは、これ以上は無理だ、と言うハリスの暗黙の主張だ。優斗も無意識にそれを感じ取っていた。

色々と考えた結果、優斗はここで手を打つことにした。商会の繋がりがどの程度か判らないが、あまりごねると旅先等でロード商会を利用しづらくなると考えたからだ。優斗が集めた情報によれば、ロード商会は北に支店が多いらしいので、これからの旅でもお世話になる事もあるだろう。

「では、それでお願いします」

「ありがとうございます。では、正式な契約についてはこちらで申請をさせて頂き、明日中に連絡させていただきますので」
「よろしくお願いします」
商談が1つまとまった事にほっとしながら、優斗は逗留している宿の名前を告げる。

正式な契約、とは契約見届け人を前に行う契約の事だ。契約を違えると、見届け人の持つギフトによって二度と契約出来なくなる、と優斗は聞かされていた。それがどんなギフトなのかは、説明をしてくれたフレイも知らない事だった。

契約が出来ない、と言うのは商人にとって致命的だ。どこかで働くにしても契約が必要になる事は多いので、実質街の中で暮らすことが出来なくなる。農村住まいならば問題ないが、特権階級である商人が、奴隷を除いて最下層の農民に降るのは、それなりの屈辱なので、進んで契約を反故にする人間は多くない。

商談が1つ終わり、ハリスはパイプを取り出した。そして優斗の許可を取ると、その中に火を落とす。道具を使う事なく。

「……火のギフト、ですか？」
「あぁ、はい。火の精霊様の欠片です。私などでは、火種くらいにしか使えませんが」
そう言って煙を吐き出す。

本当に色々なギフトがあるな。優斗はそう考えながら、次の商談に備えて身構える。

「で、優斗様。そちらの件ですが」
「はい」

フレイに視線が集まり、部屋に緊張が走る。唯一、彼女が奴隷である事に気づいていない人間は、相変わらず楽しげにフレイを見つめている。

「金貨１０枚でどうですか？　もちろん、公国金貨で」
「その値段であれば、お断りさせて頂きます」
優斗の即答に驚いたのは、フレイだけだった。

この交渉で、優斗は出来るだけ値を釣り上げてみるつもりだった。相手の反応から限界値を探る、と言う訓練だ。

「かなりの破格をつけたつもりですが、何か御不満でも？」
「破格なのはわかりますが、それはここでは、でしょう？」
需要の大きい街ならばもっと高値が付く。それは事実だが、あくまで行商人の感覚であって、街商人のそれではない。優斗の場合、輸送費と言う物を甘く見すぎているという事もある。

「しかしながら優斗様、物には相場と言う物があります」
「実は彼女の読み書きと礼儀作法は貴族様の館で教えられたものでして。それ以外にも、色々学んでいるそうですよ？」
その言葉を受け、ハリスが真面目な顔で検討を始める。実は適当に言っただけの優斗は、彼が何に反応したのか疑問に思いながら返事を待つ。

「ですが、うーん」
そこでようやく現状に気づいた若い商人が、目を見開いてフレイの首筋を凝視する。

「でしたら、これで。これでダメだと言うのでしたら、今回は縁が無かったという事で」

提示されたソロバンは１０．７を指している。おおよそ公国金貨１０枚と銀貨２０枚程度だ。

ハリスの提示した金額に満足した優斗は、自然と笑みがこぼれる。それを良い返事が来ると判断したハリスは、ちらりとフレイを見た。

「わかりました。では、今回は見送らせて頂きますね」

「そ、そうですか」

ハリスと、それ以上にフレイが驚く。

笑顔の優斗を見て、ハリスは自分が乗せられた事に気づく。高額商品をチラつかせて他を高値で売る、と言うのは良くある戦略だ。普段の彼ならば気づいただろう。今回に関しては、相手がどう見ても商談に不慣れな、駆け出しにしか見えない行商人だった事もあり、油断していた。

優斗にとって幸運だったのは、ハリスが荷馬車を見ていない事だった。身なりや持ち込んだ商品等から、優斗の資産では奴隷を売らなければ買付が出来ないだろうとハリスは予想した。故に、先だって輸送の契約を行ったのだ。もちろん、この商会で購入した商品を輸送する、と言う文言で。仮の契約書とはいえ、その効力は十分なので、覆される事もない。今回はそれが裏目に出た。

仮に、ハリスがホロ付の大きなめの荷馬車を見ていたら、資産予想はもう少し高くなっていただろう。それはある意味で報告を怠った部下の失態であり、任せきりにしたハリスの責任である。

「では、輸送させて頂く品目は、これでよろしかったですか？　ご確認ください」

「はい。それでお願いします」

「差額の支払いはどうされますか？」
「これでどうでしょう」
優斗が取り出したのは、馬車の隠しスペースにあった宝石とナイフだった。躊躇なく袋の中身を出した事に、ハリスは目の前の商人の評価を更に上げながら、後ろの部下に指示を出す。
しばらくしてからロード商会懇意の宝石商が現れ、鑑定を行った結果、その価値は公国金貨９枚と銀貨２０枚と言う事になった。その中から物資代分だけ引き渡し、優斗の手の中に残ったのは、たった１つだけだった。

荷馬車を受け取り、仮の契約書を受け取った優斗は、フレイと共に宿の部屋に戻っていた。
状況が把握出来ず、まだ放心状態のフレイを椅子に座らせた優斗は、ベッドに座って彼女の反応を待っていた。
「次はどこで売るんですか？」
ようやく口を開いたフレイの言葉は、優斗が予想していたものだった。もちろん、その答えも既に用意されている。
「今のところ、売るつもりはないね」
「でも、お金が」
「俺が買い取った、って事で、ダメ？」
予定通り自分は買われ、村に物資が届く。ようやくそれを理解したフレイは、緊張の糸が切れ、椅子からずりおちてしまった。
「おいおい、大丈夫？」
優斗が差した手を掴んだフレイは、引かれたその勢いで彼の胸へ飛び込んだ。そしてそのまま抱き着く。

「ちょ、まっ。フレイさん、ロープロープ」
「う、あ。うぅ」
静かに、しかし激しくすすり泣くフレイ。優斗はかなり悩んでから背中に手をまわして抱きしめた。
久しく感じていなかった人肌の懐かしさに、いつしか2人は眠りに落ちていた。

初商談（後書き）

ようやく商売らしいシーンです。
通貨価値の説明は……需要がなさそうなので割愛で。

ご主人様

優斗が目を覚ますと、目の前にフレイの顔があった。

状況に驚きながらも、こうなった理由を思い出した優斗は、赤面しながらベッドから抜け出した。火照った顔を冷やすために窓を開ける。外の様子から、どうやら朝らしいと判断する。

「おはようございます、ご主人様」

「おはよう、って、おおう」

むくりと起き上がるフレイに驚きながら、優斗は椅子に腰かけた。フレイの方はベッドの上で、いわゆる女の子座りをしている。

「何故にご主人様？」

「今の私は預かられた商品ではなく、貴方様の所有物だからです」

「うわぁ、予想外の反応」

優斗の言葉に、今度は何の反応も示さなかった。

フレイが、と言うよりも奴隷は登録時に首輪と共に基本的なルールを刷り込まれる。幾つかあるそれの中に、こういう項目がある。

１つ、主人には絶対服従。

１つ、己を殺し、奉仕する。

仮の主人から本当の所有者になった優斗には、それが適応され始めた、と言う訳だ。昨日までは買い付けた商人、リコスが彼女の中では主人と言う扱いだった。それが、買い取った、と言う言葉と村へ食糧を送るという契約がほぼ履行された事をきっかけに、切り替わったのだ。

「えーっと。そんな大げさにしなくてもいいんだけど？」
「奴隷は主人の所有物です。その魂の一片から髪の毛一本に至るまで、貴方様の物です」
「どうしようかなぁ、これ」
色々考えた結果、思いついたのは、とりあえず命令してみよう、だった。

「フレイ、命令するよ」
「はい。なんなりと」
「自分を守る事を最優先し、自分で考えて行動する事。失礼な口をきいたからと言って罰する様な事はないので、しゃべり方も元通りに戻す事。期限は命令解除をするまで」
期限を設けたのは、命令によっておかしな事になった時への対策だ。

優斗は別に、情が移ったとか、倫理的な理由だけで彼女を売らなかった訳ではない。この世界に不慣れな彼にとって、知識がそれなりにある現地人、しかも自分の命令に絶対服従な存在は色々な意味で都合がよかった。彼女の容姿と性格に惹かれた部分もなかったとは言わないが。

「わかりました、ご主人様」
「いや、ご主人様もやめない？」
「何故ですか？　こう言うの、好きなんですよね？」
そう言って昨日買ってきた物が集められている場所へ視線を向ける。

優斗は一瞬だけ考えてから、その視線の意味に気づいた。エプロンドレスだ。

「いや、それ違う」
「侍女をメイドと呼んで慰み者にする貴族の話は、私も聞いた事がありま す」
覚悟は出来ています、と言わんばかりの言葉に、優斗は頭を抱える。そんなつもりは、ちょっとしかなかった、と言うのに。
もちろん優斗の、そんなつもり、は見て楽しむくらいで、それ以上の事は考えていない。
「とにかく、そんな気はないから。無理にご主人様とか言わなくていいよ」
「えーっと、では。この不能？」
「ナニソレ」
突然に飛び出した暴言に、優斗の言葉はカタコトになった。気のせいだろうか、と頬つねるが、痛みを感じて、それは夢かどうかの確認方法だったと思いだす。
「可愛い女の子と一晩同じベッドで寝て何もしない男は、不能か同性愛者だと教わりました」
「誰にだよっ」
正確には、男は狼だから気を付けましょうと言う内容だったのだが、優斗が知る由もない。
「不能ではないのですか？」
「違うっ」
「本当、ですか？」
急にしなを作って近づいてくるフレイに、優斗は焦った。
ベッドを下り、一歩一歩近づいてくるフレイ。真っ直ぐ見つめる

その視線に囚われ、優斗は金縛りにあったように動きを止める。
潤んだ瞳、濡れた唇。ちらりと見えた舌先が、艶めかしい。
優斗の肩に手が置かれる。その感触で囚われていた意識を少しだけ取り戻した優斗は、逃げようと身をひねってサイドテーブルに足をひっかけてしまい、水差しが倒れた。流れ出た水飛び跳ね、スカートの裾を濡らす。
「み、ず。シ、ミに」
「後で洗います。ただの水ですし、大丈夫です。それに、今からもっと……」
もっとなんだ、と言う声は掠れて言葉にならなかった。
完全に気圧されている優斗は、なんとかこの状態を脱しようと身を引く。その努力は報われず、膝の上に跨ったフレイがその胸の中にしな垂れかかる。
「ご主人様。はしたない女はお嫌いですか？」
「いや、ってか、じゃなくって」
目を閉じた顔が迫ってくる。それをなんとか回避しようと更に身を引いた優斗は、フレイを巻き込んで椅子ごと倒れた。
「っつ」
「そこまで拒否するのは酷くないですか？」
さっと立ち上がり、ベッドに戻ったフレイは何事もなかったかの様に元の場所に腰かける。優斗は状況を把握することで精いっぱいで、椅子ごと倒れたまま起き上がる事が出来ない。
「えーっと、ほんとにフレイ？」

「はい。貴方のフレイです」
にこりと笑う顔は、今までに見たことのない表情だったが、それでもフレイである事に間違いはなさそうだ、と判断した優斗はようやく立ち上がり、起こした椅子に腰かける。

「君、生娘だって言ってなかったっけ？」
「そうですよ」
「どこで覚えたの？」
「ご主人様が仰った事ですよ。貴族の教育を受けたって。その中の1つに、男を誘惑するテクニックと言うモノがありまして」
貴族の女子は年頃になると皆が習うそうです、と楽しそうに告げるフレイは、今まで見た事がない、生き生きとした表情をしている。

更に、筋がいいって褒められた事もあるんです、と自慢げに語る姿を見て、優斗の中のフレイ像が音を立てて瓦解していくのが判った。

「それは分かったけど、なんで俺に迫る訳？」
優斗は、からかわれたのでは、と思っていた。しかしそれは、間違いだった。

「だってほら、ご主人様優しいですし。売られたくないじゃないですか？
だから私の売りの1つである処女を貰ってもらって、売値を下げれば売りにくくなるんじゃないなあーって」
納得の理由に、優斗は呆れるしかなかった。早速、自分を守れと言う命令を実行してくれているようだね、と言う皮肉が思い浮かんだが、口から出さず、飲み込んだ。

「ぶっちゃけるね」

「基本、ご主人様の命令は絶対ですから。問いに嘘を返す訳にはいきません。と言うか、やりすぎるとこれが締まってきます」

首輪を指差しながらフレイが愚痴る。言葉づかいはそれなりに丁寧なのだが、如何せん投げやりだったり楽しげだったりするせいであまり敬意を感じられない。

「ところでご主人様、この後どうされるのですか？」

「ご主人様は止めようよ。この後はロード商会の使いを待つ予定だけど？」

「では、甲斐性なしと呼びましょう。そうではなく、今後、この取引の後です」

「……甲斐性なしって、酷くない？」

フレイに鼻で笑われ、優斗はため息を吐いた。

確かに今の優斗は手持ちの資金がほとんどない状態だ。資産としてはホロ付荷馬車に上質な女奴隷とそれなりだが、片方は商売道具で、片方は助言者なので手放せない事を考慮すれば、行商に使える資金は財布の中身と唯一残った宝石が１つだけだ。

元手が少なければ儲けも少ない。これは商売の基本だ。そこから考えれば、現在、優斗が稼げる額はとても少ない。すなわち、事実、甲斐性なしなのである。

「大丈夫ですよ、不能でメイド好きの変態な上に甲斐性なしのご主人様でも、私はちゃんと尽くしますから」

「泣くぞコラ。っつーかさすがに酷すぎだろ、その言いようは」

優斗の発言に、フレイはにやりと笑う。その笑みを不敵な物にシフトさせながら、勝ち誇ったように口を開いた。

「しゃべりかたを戻せとおっしゃったのはご主人様です。失礼な口

を利く許可も頂いています」
「う、確かに」
「お嫌でしたら、命令を撤回してはいかがですか？」
ここで撤回したら負けた気がする。そう思いながら、優斗の頭にはもう1つの事が思い浮かんでいた。
フレイの態度が地だとして、優斗の機嫌を損ねる態度を取るだろうか。彼女は賢い。ならばこの行動にも意味があるのではないか、と。
実際、フレイは本気で優斗が自分に自由を与えてくれるのかを確認する意味も込めて、大げさに悪ふざけを行っていた。逆らえば屈服させられるのであれば、以降も従順な態度を貫くべきだ。しかし数日間一緒に過ごし、彼は本当に、本気で、馬鹿みたいにお人よしなのではないか、という淡い期待をフレイは抱き始めていた。だからこそ、確認が必要だった。とはいえ、全てが演技だった訳ではないが。
「好きにしてくれ」
大きなため息を吐いきながらそう告げた時、フレイはあからさまにほっとする反応を見せた。
自分は間違っていなかった。そう思った優斗は、しかし念のため釘を刺しておくことにする。
「ただし、人前ではちゃんとしてくれよ」
「もちろんです。この状態で貴族の侍従なんて出来ませんから。実はこう見えて、意外と猫かぶるのは得意なんですよ」
全然意外じゃないけど、と思いながら優斗はまたため息を吐いた。

その後ロード商会の使いが来るまでの間、２人は初めてのくだらない雑談に、花を咲かせ続けた。

ご主人様（後書き）

ようやくフレイさん、本領発揮です。

仕事の依頼

ロード商会との正式な契約を終えた優斗は、ハリスに請われて再び商会の一室へと来ていた。

契約は、特殊なギフトを持つ人間立会いの下で、ある特殊加工を施した紙に契約内容を記した血判状を作る、というものだった。結局ギフトの詳細は不明のまま、ただ契約を解除するには正式な手続きが必要だという事だけ説明された。

ちなみに契約書の作成料はロード商会が全額持ってくれた。代わりに頼みたいことがあると言われて、商会に訪問する事となった。

「優斗さんは北へ行かれるのですよね？」

「はい。その予定です」

敬称が「様」から「さん」に変わったのは、客ではなく、曲がりなりにも商売相手と認められたからなのだが、優斗がそれに気づかない。

「ユーシア領の事はご存知ですよね？」

もちろん知らない優斗は、少し悩んでから正直に白状する。

「すいません。最近の状況は知らないんです」

「ふむ、そうですか。実は、ユーシアの街に届けてほしい品物がありまして」

出会って間もない相手に依頼するからには、何かやばい品だろうか。そう考えた優斗は、慎重に言葉を選んでいく。

実際ハリスにとっては、それなりに使える行商人との繋がりを維

持する為の、いわば先行投資に過ぎない。これもまた、買取を担当する彼の大事な仕事だ。

「もしや、ユーシアへ寄るご予定はありませんでしたか？」
「はい。しかし、北へ行く事に変わりはありませんので、条件次第では寄らせて頂きますよ」
「それはありがたい」
ハリスが差し出す紙を確認する。そこには荷物の詳細と期日が書かれている。説明によれば、優斗の荷馬車の半分程の分量になるそうだ。

優斗の現在の手持ちで出来るだけ多くの利益を上げるためには、多少重くて場所を取っても利率が高い物を乗せる必要がある。しかし、2頭引きの荷馬車を1頭で引かせているので、あまり重い物を乗せられない。

その点、ハリスが依頼してきた荷物は石の様に重い訳でもなく、このまま積み込んでも問題はなさそうな品目ばかりだ。

「条件をお聞きしても？」
「はい。それらの荷物を我が商会のユーシア支店まで届けて頂きたいのです。報酬は前払い致します」
積荷を確保出来、更に買付資金まで確保できる好条件に、優斗は内心ガッツポーズをした。

報酬額を提示され、相場が判らない優斗は少し困る。仕方なく提示された金額は適正であると仮定し、話を進める事にする。

「こちらからも条件を出してかまいませんか？」
「なんでしょうか？」

「街に入る際の税はそちらに負担して頂きたい。あぁ、もちろん預かった荷物と私の分だけで構いません」
どうでしょう、と笑いかけると、ハリスの方もにや、と笑い返す。
「荷物の税は現物引き渡しでお支払頂く形でどうでしょうか？」
「良いと思います」
税の支払いには2種類ある。

1つ目は現金での支払。
これは主に人頭税や奴隷税などのある程度金額の決まった税を支払うのによく使われる。

2つ目はハリスの言う現物引き渡し。
こちらは持ち込む商品にかかる税を納める場合によく使われる。
この税は商品価格の何%と定められているので、現金で支払おうとすると、窓口で品物の相場を調べて貰うのに時間がかかってしまう。
その様な理由から、時間をお金と考える商人は基本的にこちらを利用する。

逆に言えば、人頭税や奴隷税を品物で支払う場合、その相場を調べるために時間がかかってしまう。ハリスが人頭税をこちらで指定しなかったのは、これが原因だ。

「人頭税は、すいません。ちょっと無理ですね」
「ふむ、そうですか」
ならば他の方向から攻めるか。そう考えた優斗は、袋から手持ち最後の宝石を取り出し、テーブルに置いた。

「では、これと報酬、合わせた価格分の品物をこちらで仕入れさせて頂く、と言う事でどうでしょうか？」

「なるほど。それならば我が商会としても、優斗様の期待に応えられそうです」
ぶっちゃければ、その分安く仕入れさせろ、という優斗の提案は、あっさり了承される。

その後、荷馬車に乗る程度の安い麦や芋等を格安で譲ってもらう事を条件に交渉は成立し、再度契約を行った。今回の契約費用は、通常通り折半だった。

明日にでも荷馬車で向かい、荷物を預かる約束をし、優斗とハリスは固く握手を交わした。

「では、よろしくお願いします」
「はい。お任せ下さい」
「ところで優斗さん。つかぬ事をお聞きしますが」
そう言ってハリスが視線をフレイに向ける。

彼女は優斗との約束通り、人前ではきっちり猫をかぶり、奴隷として分相応な態度を貫いていた。故に、ハリスが興味を持ったのは、その事ではなく、纏っている衣服の方だった。

「これは優斗さんのご趣味ですか？」
「あ、いや。あははは」
これではそうですと答えている様な物だが、実際に選んで買ったのは優斗なので、ある意味間違ってはいない。

現在フレイが身に纏っているのは、今朝、ロード商会からの使いが来る前に、濡れた部分を乾かすからと着替えたエプロンドレスだ。
着替えの際、部屋から出ようとした優斗を「後ろを向いていてください」と笑顔で引きとめ、衣擦れの音と漏れ出る声で生殺しにし

たフレイは何故か満足げだった。

ハリスの言葉は、やはり彼女を売る気はなかったのですね、という意味だ。売るつもりの奴隷に2着も質の良い服、しかも趣味の物を買い与える商人はいない。

「ふむ。どうやら貴方は良き商人のようだ」

ハリスの口から出た言葉は、先日の「誠実な商人」と言う言葉とは逆の、かなり上級の褒め言葉だった。

もちろんそれを優斗が判るはずもなく、お世辞の類だと思って軽い礼を述べる。

ハリスと別れた2人は、明日の旅立ちに向けた買い出しを行う為にそのまま街に繰り出した。

荷物を運ぶ期限は十分あるが、途中で何があるか判らないので早めに出発する事に決めた為、買い出しの時間は今日一杯しか残されていない。街に滞在すれば、それだけお金がかかると言うのも、理由の1つだ。

「基本的には買付リストの物でいいだろうし。他に何かいる？」

「私用のコップがあるとありがたいですね」

買い出しで購入した品の大半は、フレイ用の生活用品だった。もちろん、旅の荷物にならない程度の、最低限の物ばかりだ。

食糧や消耗品については、ロード商会の買付品の中に入れてあるので、今は買う必要がないし、旅に必要な基本的な物は荷馬車の前持ち主であるリコスの持ち物が残っている。しかし、それは基本的に1人分しかないので、買い足す必要がある物が数点存在した、と言う訳だ。

「そういえば、フレイって何か特技とかないの？」
「唐突ですね」
「フレイが使う分くらいは、自分で稼いで貰おうかなと」
優斗の言葉に、フレイは顎を引き、上目使いになって瞳を潤ませる。それを向けられた優斗は、たじろいで一歩引いてしまう。

「ご主人様、それは余りにご無体ではありませんか？」
「へ？」
「女奴隷に食い扶持を稼げ。それは体を売れ、と言う意味、ですよね？」
その言葉にはっとした優斗は、焦ってフレイの顔を見返す。潤んで泣きそうな表情は5秒と持たず、口元が歪んだ。

「……からかわれた」
「いえいえ、普通に事実ですよ？
私たち奴隷は、その特技がないからこそ、奴隷に身を窶しているのですから」

優斗はフレイの言葉を受け、確かに、と思った。食い扶持を稼げる程の特技があるならば、それを生かしてお金を稼げばいい。道理だ。

「でも確かに、私も何か稼ぐ方法を考えた方がいいですね。ご主人様、甲斐性なしですし」
「甲斐性なしはマジで止めて。事実つきつけられると結構ヘコむから」
がっくりと肩を落とす優斗に、了解しましたご主人様、と言う返事が返される。

「でもまぁ、今んとこ女の子1人の食い扶持くらいはなんとかなるんじゃない？」
「自分で稼いだお金じゃないですけどね」
遠まわしに告げられた甲斐性なし宣言に、今度こそ本気で優斗の心が折れる音がした。

仕事の依頼（後書き）

運送は行商に入るんでしょうか。きっと入りませんね。
相変わらず行商しない行商譚なのでした。

神様からの贈り物

買い出しを終えた2人は、宿に戻っていた。

優斗が椅子、フレイがベッドと言ういつの間にか逆になっていた定位置につくと、優斗はジュラルミンケースからパソコンを取り出した。

このノートパソコンは優斗が異世界からの来訪者である事の証明であり、見つかれば身に危険を及ぼす可能性がある。それでも手放さないのは、精神の安定を図る為だ。

優斗は自分がこことは違う世界の人間だと知っている。しかし、それを証明出来るものは、実は存在しない。目の前のパソコンも、ジュラルミンケースも、有力な証拠だがこの世界で作れないとは言い切れないのだ。

もちろん、記憶なんて曖昧な物が証拠になどなるはずがない。自分以外の全てがおかしいと言うのは、自分がおかしいと言う事であり、自分しか知らない突飛な事実は、基本的に空想だ、と優斗は知っている。

だからこそ、少なくとも記憶よりは有力で、形のある証拠であるノートパソコンを手放す事がどうしても出来なかった。

「フレイ、ちょっとお願いがあるんだけど」

「なんでしょうか。なんであろうと、完璧に応えて見せますよ？」

そう言ってフレイは、誘うように足を組み替える。

そんな彼女の行動にどきりと鳴った心臓を抑えながら、パソコンをサイドテーブルへ置く。優斗がこの世界に来た時には満タンあったバッテリーも、今では1割を切っている。

バッテリーが減っているのは、別に無駄遣いしたからではない。相場を表計算ソフトに入れて整理したり、インターネットの閲覧履歴で使えそうな情報を探したりしていたのだ。

「ギフト、見せてくれない？」
「いいですけど。手にですか？」
優斗は先ほど買ってきた小さな銅の棒を差し出す。それを左右の手に1個ずつ手渡すと、次は水を差し出した。

「棒の先だけここに入れて、やって。あ、もしかして長時間維持するのは無理？」
「出来ますけど、びりっとしませんよ？」
「それでお願い」
不思議そうにしながらもギフトを行使するフレイ。1分ほどして「止めて」と言われても、やはり不思議そうにしている。

「さて、どうかな」
まだ明るいのに、と文句を言われながら貰ってきた火種で付けたランプを水に近づけると、ぽん、と言う音がした。驚くフレイに、優斗はにやりとしながらランプの火を消す。

「水も減ってるし、やっぱそうか」
「何がそう、なんですか？」
フレイの質問に、優斗はどう答えるべきだろうかと少し悩んだ。

優斗がやったのは、水の分解だ。正確に言えば、電気分解。

フレイのギフトを電気だと予想した優斗は、簡易な確認方法としてこれを実行した。結果はもちろん、予想通り。

「フレイのギフトが何か調べた、って感じかなぁ」
「私のギフトは天の神の欠片ですよ？」
「あー、うん。そうなんだけどね」

（ちゃんと説明するのは、無理かな）

説明する事を早々に諦めた優斗は、ひとまず目的を達成する事を優先する事に決める。

「フレイ、今から幾つか命令させて貰うから」
「はい。判りました」
フレイの纏う空気が、少しだけ固くなる。一応、主人とは認識されているんだな、と苦笑しながら優斗は言葉を続ける。

「その前に質問。ギフトは最大どのくらい維持出来るの？　あ、びりっとしない方ね」
「試した事があるのは３０分くらいです」
１日３０分以上使えるなら十分だな、と判断した優斗は本題を口にする。

「まずこれ。パソコンって言うんだけど、たぶんこの世界に１つしかない貴重品だから、俺以外の人間にこれについてしゃべらない事。俺にしゃべる時も周りに人がいない事を確認する事
あ、貴重品だから大事に扱ってね。何かあったら持ち出すのはこれ優先で。もちろん命が最優先」
「承知しました」
「で、これの事なんだけど。動かすのにフレイのギフトを借りたい」

「ギフトを貸す、ですか。どうすればいいのですか？」
「これにびりっとしない方を流してくれる？」
そう言ってコンセントのプラグを差し出す。プラグにはこちらでは使い道のない周辺機器から取った銅線を繋いである。

「こっちの線を右手、で、こっちを左手で持って」
素直に従うフレイに数日前までの彼女を思い出し、懐かしさがこみ上げる。あの彼女は、もう戻ってこない。

パソコンの電源を入れ、バッテリーの詳細残量を表示する。そしてフレイに電気を流すよう、視線で指示する。

「おぉ、充電中になった」
「？？？」
感動する優斗の姿に、フレイの疑問は積もるばかりだ。

これで電気の心配はない、と安心した優斗は、これからのパソコンの利用方法について考え始める。

まず、今まで通りにウェブページの履歴から情報を漁る。
このパソコンを最近貸した相手が料理好きで、しかも貸した理由がレポートの資料探しの為だったので、既にそれなりに使える情報を得ている。続ければ、まだ出てくる可能性は高い。

次に、辞書だ。
今までは時間と言う制約があったので、確実性の高いウェブ閲覧履歴を優先して確認していたが、余裕が出来た今、国語辞典や英和辞典は情報の山だ。広辞苑がないのが残念だが、それでも十分役に立ってくれるはずだ。

「あのー、変態ご主人様」
「変態ゆーな」
「それは命令ですか？」
「いや、願望」
馬鹿な会話を交わしながら、優斗は一先ずパソコンの電源を落とした。

「にやにや笑うのは怪しいからやめた方がいいですよ。いや、変態は怪しい物ですけど」
「さっきまでとの反応の差が酷すぎて、命令に従って貰えるか不安なんですが」
「私、デキる女なんで公私の区別はきちんとつけますよ？　お友達の貴族様にも褒められたくらいです」
「いやまぁ、実行してくれれば文句はないけど」
「ちなみに奴隷に私的な時間はありません。だって所有されている事自体がお仕事ですから」
「嘘でも安心させとけよっ」

激しいつっこみを入れ、肩で息をしながら優斗は命令を解除していない事に気づく。ついでに、彼女の能力についてもう少し把握しておくべきだ、とも。

「電気流すの止めていいよ」
「電気、とはギフトの事ですか？」
「あ、ごめん。そう」
ついつい自分の感覚で話してしまう事に反省しながら、優斗はプラグを受け取る。

「で、ギフト発動中って全身にそれが流れてるの？」
「たぶん。右手で使うときに左手を繋いでいる相手もびりっとしま

した」
「だったら命令追加。ギフト使用中、及び使用直後はパソコンに触らない事。使用後に触る前に地面に両手を付く事」
「わかりました」
優斗は1つ、発見をする。命令だと前置きした事柄には疑問が帰ってこない。帰ってくるのは了承の意か実行の為の質問だ。
これはあまり多様しない方がいいな、と考えながら優斗はまた1つ思いつく。
「フレイ、もう一回買い物に行くけど、ついてくる？」
「もちろんお供します。この格好で」
「着替えない？」
「着替えません」
即答したフレイは、水色のエプロンドレス姿のままベッドから立ち上がった。
優斗は財布を覗き込みながら、使える予算を計算していく。購入したいのはそこそこ長い銅の棒と、鉄の板だ。
前者の使用目的は護身用で、フレイに持たせて離れたところから、電気を流して攻撃する為だ。相手の持つ武器が金属製なら、武器や防具越しに攻撃もできるので有用だと考えた。
後者は、火が付けられない環境で暖を取るのに使えないかと考えたからだ。こちらは電気を流して熱が出ればいいので、鉄でなくてもいい。ニクロム線があれば理想なのだが、この時代にはないだろうと判断し、電熱器は諦める。
「ついでに夕食も食べて来ようか。何か食べたい物ある？」
「酒場でなく、屋台がいいです」

ギフトは色々と応用が利きそうだから、商売に使えない考えてみよう。そんな事を考えながら、優斗はフレイを引き連れて再度街へ繰り出した。

神様からの贈り物（後書き）

フレイさんのギフト紹介でした。

意外性と捻りがないかなーっとも思いましたがこれに落ち着きました。

旅立ちの朝

空が明るくなってからすぐに商会へと向かった優斗たちは、ある服飾店の前にいた。

「あー、なんかすまん」

「しょうがないです。ご主人様はアレですから」

アレ、とは優斗が言わないようにお願いしたあの言葉である。

商会での荷物積み込みに「時間がかかるから適当に待っていてくれ」と言われて追い出された優斗たちがここに来たのは、外套を買う為だった。旅に外套は必需品だと知らなかった優斗は、今朝同じ様に荷物の受け取りに来た商人との会話でそれを知った、と言う訳だ。

朝早く訪れた店は、予想通りまだ営業していなかった。

「ロード商会で都合して貰いましょう」

「だな。なんか理由考えとかないと」

自分はまだしも、フレイにはそれなりの物を買ってあげたいな、と思った優斗は昨夜確認した財布の中身を思い出し、使える予算を検討し始めた。

店を後にした2人は、まだ戻っても時間が早すぎるだろうと考え、少し遠回りして行く事にした。

「あ、占いです」

「占いか。この世界にもあるんだな」

フレイが指差した先には、優斗がイメージする通りの占い師がい

た。

顔は隠れて見えないが、中年の女性だろう。机の上にはカードが並んでおり、タロット占いを連想させる。

「折角だから占って貰いませんか？」

「あー。あんまし興味ない」

元の世界で妙に占いを気にする人間が近くに居た為、優斗はそれをフォローしたりする事も多く、占いにあまり良いイメージがなかった。良い結果の時は頼みごとを聞いてくれやすかったりもしたのだが、マイナスイメージの方が強い。

「あの人、本物だと思いますよ？　ラダルさんから聞いた話と同じ格好ですし」

「いや、本物って言われても」

むしろラダルさんって誰だよ、と思いながら優斗は苦笑する。

その時ふと、優斗は自分が迂闊な発言をしたのではないかと気づく。中世くらいの文明では、占いや神託が絶対だと言う文化、宗教である可能性もある。だとすれば、今のセリフはキリスト教徒に「神などいない」と喧嘩を売った状態に等しいのではないか、と。

「そういえばご主人様は無知なのでしたね」

「悔しいけど事実だなぁ」

「無いモノが多いご主人様を持つと苦労します」

他の無いモノってなんだよ、と聞き返す勇気がなかった優斗は、口を噤んで大人しくフレイの説明を待つ。

「先見のギフトです。未来に起こる事が少しだけ判るんですよ。能力が高い人は国や貴族様、領主様に雇われたりもするそうです」

そんな便利なギフトもあるのか。そう思った優斗は、契約のギフトの事を思い出す。あれも便利系だな、と。

「先見のギフトは、何の欠片なの？」
「世界の欠片です」
また大きく出たな、と思いながら優斗は先を促す。

「昨日行った契約のギフトも同じですね。色々な種類がありますが、世界の欠片を持つ人は希少です。
でも、でしたらご主人様は何のギフトをお持ちなんですか？」
「へ？」
予想外の質問に、優斗は焦る。ギフトが判らないと伝えて特に何も言われなかったので、使えない人間もいるのだろうと勝手に解釈していたのだ。フレイはその考えを一蹴する。

「ギフトを持たない人間はいない、と本で読みました。
てっきりご主人様は希少なギフトをお持ちで、行動を制限されるのを嫌って明かさないのだと思っていたのですが」
優斗は焦る思考でフレイの言葉をかみ砕き、理解しようと頭をフル回転させる。

ギフトを持った無い物はいない。ギフトを教えないのは希少能力を持っているからだ。だからギフトを隠した優斗は、希少能力者であるはずだ。
希少な能力を持っていると行動が制限される。希少なギフトを持っている優斗がそれを隠すのは、行動を制限されたくないからだ。

「いや、単に使えないだけなんだけど」
「使えない、と言うのは止めた方がいいですよ。宗教家が聞いたら、神の恵みを使えないとは何事だ、と激怒しかねません」

神の欠片、と言うだけあってやはり崇拝者がいるらしい。ならば持た無い物は神の加護のない者となるのか、最悪、悪魔だと判断されるのでは、と心配しながら、思わず愚痴が出た。

「使え無い物は使えないしなぁ」

「使い方次第ですよ」

フレイの言葉に、優斗は違和感を覚える。

優斗は件名に違和感の正体を考え、原因に気づく。

フレイはギフトを持た無い者はいないと思っている。だから使えない＝能力が低い、もしくはダメすぎて使えない、と言う意味だと解釈したのだろう、と。

勘違いしているならば好都合、と優斗は、わかったわかった、と言いながら占い師へと近づいていく。

「占い、お願いできますか？」

「今から旅立ちかい？」

「はい。少しでも不安を減らしたくて」

看板にある通りの金額を机に置いた優斗は、許可も取らず椅子に座る。

後ろに立つフレイをちらりと見た後、誤魔化せた事にほっとしながら、優斗は占い師と向き合った。

カードを目の前に置き、そこに血を一滴垂らす様に指示され、優斗は携帯していたナイフを使って指先を切り、一滴の血を垂らすと占いが始まる。

血を求められた事には驚いたが、その後はカードを持ってひたす

ら祈っているだけだった。

「黄金の塊は貴方に大きなチャンスを与えるでしょう。多少濁っていても、目の前に現れたら必ず手に入れなさい」

「黄金の塊、ですか」

そりゃあ金になるな、と思いながら占い師を見返すと、先ほどの血を垂らしたカードを差し出していた。

優斗は、記念にくれるのかな、と受け取ると椅子から立ち上がる。そしてもう一度礼を言うと、フレイと並んで再び商会への道を歩き出す。

「黄金の塊、ねぇ」

「金貨でしょうか。でも、塊だからむしろ金塊の可能性もありますね」

結局、黄金色の物を見たら買うべきです、と言うフレイの言葉でこの話題は終了となった。

「そういえばフレイっていくつなの？」

「年齢ですか？　１６です」

「え？」

予想外の答えに、優斗はフレイの顔を、そして全身へと視線を向ける。

さっと胸元を隠されて焦った優斗は、視線を再び顔に戻す。

優斗が驚いたのは、予想していた年齢よりも実年齢が低かったからだ。知識量、しっかりとしたしゃべり方、顔立ち。ついでに体型の起伏から１８～２０くらいだと予想していた。

「失礼な事を考えていませんか？」

「考えてるけど、たぶんフレイの予想と違う事だと思う」
「私の身体を嘗めるように観察したのに、ですか？」
「してない、とは言わないけど少なくとも嘗めるようにではないから」
「むしろ本当に舐めます？」
「遠慮しとく」

フレイの、残念です、と言う言葉に、むしろ断ったという事実が俺にとっては残念すぎる、と思いながら優斗は昨夜の事を思い出していた。

部屋に戻ると、唐突にフレイが服を脱ぎだした。唖然としたまま見ていたら、スリップとドロワーズと言う、この世界で言うところの下着姿になり、ベッドに寝転がった。そのまま眠ってしまった彼女は、何故か妙に端によっていた。逆側には人が1人くらい眠れるスペースがあるにも関わらず。

そのあたりも年齢を勘違いした原因なんだろうな、と思ったが、出会ったとき、第一印象からそのくらいだと思っていた事を思い出し、優斗は自分への言い訳すら見失ってしまう。

「口が悪いですし、体型もこんなですし。子供っぽく見られるのは慣れています」
「あ、そう」
むしろその逆なんですが、と思ったが口にしない。その体型で子供っぽい部類なのか、と言う驚きも、なんとか飲み込む。

もし口にしていたら、フレイは大人っぽく見られた事を大いに喜んだだろう。そして『お誘い』もエスカレートしただろう。そういう意味では、優斗の判断は間違っていなかったとも言える。

「そういうご主人様はおいくつなんですか？」
「俺？　２１だけど」
優斗の言葉を、フレイが鼻で笑った。

「さすがにサバを読みすぎですよ」
「いや、マジなんだけど」
「別にバラしたりしませんって」
「そう言われても、本当だしなぁ」
優斗の言葉をまったく信じていないフレイと何度か同じようなやりとりをした後、それが真実らしいと認めさせるのにはかなりの時間を要した。

「ありえません。向こうの人は皆、こんなに若く見えるんですか？」
「向こう？」
「だってご主人様、どう見たって１０代半ばじゃないですか
絶対年下だと思ってました」

（東洋人は童顔だって言うけど、そこまで酷いのか）

そう考えながら、フレイが１６よりも更に幼く見えるらしいと言う事を思い出す。そして優斗は、どうやら自分が思う以上にこの世界の人間は老け顔であるらしい、と言う事を理解した。

「どうりで私の誘いに乗ってくれないはずです。
私をいくつだと思っていたのかはあえて聞きませんけど、相当子供だと思っていたんでしょうね？」
実際には見当はずれの言葉だが、理由がわかって納得すればあんな誘いもしなくなるのでは、と考えた優斗は頷いておくことにした。

むしろこれが切っ掛けでフレイの対抗心が燃え上がり、研究を重ねては度々誘惑してくる事になる。反省と対策、研究の期間が慣れを許さず、むしろ効果的に追い詰め、生殺しにしていく事になるのだが優斗はそれをまだ知らない。

「ん？　でも、そんな私にこんな恰好をさせると言う事は……」
「偏見で人を変態呼ばわりしないように」
苦笑する優斗に、フレイはにやりと笑い返す。

気が付くと、ロード商会が目の前にあった。
今日はこの辺で勘弁してあげます、とでも言いたげなフレイの視線に更に苦笑しながら、優斗は自分の荷馬車を探して、荷揚げ場へと向かった。

旅立ちの朝（後書き）

旅立つ日の朝の話で、朝に旅立つ話ではないという感じ。
出発は次回か、その次くらいを予定しています。

竜神の加護

荷物を満載にした荷馬車を受け取り、荷揚げ場を出た優斗たちを待っていたのはハリスだった。

「ハリスさん、色々とお世話になりました」
「いえいえ、こちらこそ」
馬車の上から簡単なあいさつを交わした優斗は、後ろから次が来ている事を確認して、早々に手綱を引く。

「では、ハリスさん。縁がありましたらまた」
「はい。その時はよろしくお願いします。
貴方の旅路に竜神様の加護がありますように」

ハリスに見送られた優斗は、そのまま町の外へと向う。
街を出て少し行った所で、優斗は荷台のフレイに声をかけた。

「フレイ、聞きたいことがあるんだけど」
「街を出てから聞くと言う事は、聞きづらい事ですか？」
察しのいいフレイに、その通り、と返しながら、優斗はフレイが来るのを待った。

フレイが御者台の隣に座ったのを確認して、視線は前方に向けたままで質問を開始する。

「ハリスさんの言ってたのは、旅立つ人へのあいさつか何か？」
「そんな感じです。竜神様のご加護がありますように、って言うのはありふれたフレーズです」
優斗は、なるほど、と納得しながら次の疑問を口にする。

「じゃあ、竜神様って何？」
「……さすがに冗談ですよね？」
どうやらかなり常識的な事を聞いてしまったらしい。優斗はそう思いながらも、常識的であろうとも、むしろ常識的であるからこそ聞いておかなければと先を促す。

「竜神様は竜神様です。説明できる事は……一番すごい神様です、くらいでしょうか」
日本で言うところのアマテラスみたいなものかな、と考えた優斗は、新たに湧いた疑問を解消すべく、口を開く。

「一番って事は二番目もいるの？」
「誰が二番目かは知りませんけど、神である竜族はそれぞれ役割があるので、ある意味で竜神様の下にいると言えるかもしれません」
「えーと、ちょっと整理させて」
こんがらがる頭を整理し、質問に必要な情報を抜出してから、優斗は質問を再開する。

「竜神様は竜の神様なの？」
「はい。一番偉い竜が、竜神様です」
「神と竜は同じ意味だと考えていいのかな？」
「そうですよ。私のギフトは天の神である天竜様の欠片です」
なんとか竜＝なんとか神。そんな等式を思い浮かべながら、優斗はこの世界の宗教が、竜と言う偶像を崇める偶像崇拝的なモノなのだと解釈した。

他にどんな種類の竜＝神がいるのだろう。それを知れば他のギフトも予想がつくかもしれないと考えた優斗は、フレイにその疑問をぶつけた。

「私が知る限りでは、炎竜様、氷竜様、天竜様がいます」
「ふーむ。って、あれ？」
優斗がひっかかったのは、服飾店の店員のギフトだ。彼女のギフトは、土の精霊の欠片だったはずだ。
「土の竜はいないの？　あと、ギフトに出てくる精霊とか妖精は何？」
「土は聞いた事がありません。基本的に大地に関するものは世界の欠片ですし」
「天は違うんだ？」
「世界とは大地の事ですよね？　その上にあるものを作ったのが神様です」
世界は神が作った、と言われると思っていた優斗は少し驚いた。その上で、この世界の宗教では大地は作られるものではなく、そこにあるものだと言う認識なのかもしれない、と予想を立てる。
「精霊と妖精は、ギフトの能力を表す言葉ですね。おおざっぱに言えば、精霊は生み出し、妖精は操作する、と言う意味です」
「ふむふむ。ちなみに神様に会うとか、話をするとか、そういう事をした人の逸話はないの？」
「徳の高い人や、気に入られた人は会えるそうです」
宗教的だなぁ、と思いながら優斗は、これに深入りしない方針を決める。
宗教に深くかかわると碌な頃が無いのは、現代日本でも常識だ。全ての宗教を否定する気はないが、信心の無い人間にとってはまさに、触らぬ神に祟りなし、なのだ。
「ありがと。大体わかった」

「ご主人様は本当に足りませんねぇ。色々と」
年上だと判明した後でも、フレイの態度が変わらない事に優斗は内心で苦笑していた。それが地なのか、単なる意地なのか。どちらにしても、行動が子供っぽい。

「そんなご主人様を支えるためにも、私は寝ます。おやすみなさい」
「何故に」
優斗の質問を無視したフレイは、荷台へと戻ってホロを完全に閉めきってしまった。

どうすべきか、と悩んだ優斗だが、女性が閉じこもった場所へ踏み込むのも戸惑われ、遅い昼食を摂る時間まで一人さみしく御者台の上に座り続ける事となった。

異世界生活に慣れ始めた優斗は、フレイの存在もあり、当初と比べ、かなり不安が払拭されつつあった。しかし、不安が減った分、不満が募り始めていた。

「1日荷馬車の上はしんどい。疲れたから甘い物食べたい。携行食マズい。カップめん食べたい。コンビニ弁当でもいいけど」
現在優斗は、夕食の準備をしてくれているフレイに頼まれ、1人薪替わりの木の枝を探していた。

フレイの前でなら強がっている事も出来た優斗だが、人目がない事もあり、溜まっていたストレスを吐き出すように思考が愚痴となってダダ漏れになっていた。

「さっさと金貯めて、計画を実行に移さないとな」

優斗の言う、計画、とはこうだ。

ある程度行商でお金を貯める。

行商中に見繕った良さげな街で、現代の知識を使って何かを始める。無理ならば店を構える。

ある程度の生活基盤を確保出来れば、定住する。

おおざっぱではあるが、中世程度の技術レベルならば、パソコン内の情報でも産業革命レベルの何かが出来るだろと高をくくっていた。店を構えるにしても、初期資金を稼ぐ程に行商をしていれば、そのノウハウとフレイと言う格安で使える相方がいれば、普通よりは成功率が高いだろう、と楽観視している。

実際のところ、前者は貴族か大きな商会へのコネが無ければ一生暮らせるレベルのお金は手に入らないし、後者はそんな簡単に行く訳がないのだが、その辺りは行商をしながら軌道修正をする予定だとして深く考えずにいた。

「フレイが居てくれるだけまし、なんだろうなぁ」

かなり年下だとわかり、タメ口や呼び捨てにも抵抗が少なくなって来た事もあって大分気が楽になったし、と思いながら優斗は木の枝を抱えてフレイの元へ戻る。

「こんなもんでいい？」

「もう少しお願いします」

その後、3回に渡って森の中で乾いた木切れを探し回った優斗は、昼間の疲れもあってほとんど言葉を発さずに食事を終えた。

夕食後、明日も早いですからさっさと寝てくださいね、と言われた優斗は、荷馬車から2人分の毛布を取り出した。

「フレイはまた荷馬車で寝るんだろ？」
昼まで寝ていた事への嫌味も込めて、また、と告げた優斗をちらりと見たフレイは、手元にある木の枝を炎の中に放り込んでから、毛布を受け取った。

「私は火の番をします」
「火の番？」
「森の夜は危ないですし」
きょとんとしている優斗に、フレイはくすりと笑いかける。

そこでようやく、彼女の意図に気づく。
すぐに森を抜けたアロエナまでの道中と違い、今回は森の中での野宿だ。そして森には動物がいる。動物を避けるには、火を絶やさない事が一番だと言う事くらい、優斗も知っている。

「それとも、添い寝が必要ですか？」
「それはいらない」
笑顔から一転、不満そうな表情のフレイに、優斗は全力で謝罪した。心の中で。

彼女が昼まで眠っていたのは、森の中で野宿をする事の意味を、優斗よりも深く理解していたからだ。そして、疲れ切った彼に木を拾いに行かせたのは、そうしなければ命が危ういと知っていたから。

優斗の猛省を知ってか知らずか、フレイは不機嫌そうに頬を膨らませながら、再度炎の中に木の枝を投入した。

「……火の番、途中で変わるから」
「ずっと御者台にいたんですから、お疲れでしょう？　ゆっくり休

んでください。
あ、私の寝床、使ってもいいですよ」
フレイの言葉に、やはり俺は恵まれているな、と思いながら、優斗はその言葉に甘えて、荷台にある干し草の塊へと倒れこんだ。

＊

日が昇る頃に起こされた優斗は、1人で簡単な朝食を済ませた。フレイは準備だけしてから、早々に寝床へと向かった。

寝床へ向かう際、「ご主人様のにおいをたっぷり堪能してきますね」と言われたせいで、既に眠気は吹き飛んでいる。

昼まで荷馬車を走らせ、遅めの昼食をフレイと摂る、と言う前日と同じパターンを終えた優斗は、隣に座るフレイと雑談に花を咲かせていた。

「明日の夕方には小さな村に着くんですよね」
「予定通りなら」
予定と言えば、当初、優斗は村での滞在は1日だけのつもりだったのだが、今は2〜3日滞在しようかと考え直していた。

それは予想以上に疲れている自分の体力が限界に達する前に、きちんとした休息を取るべきだと言う理由だった。それに、夜通し起きていると言う負担をかけているフレイにも、休息が必要だ。

「小さな村だと、宿があるか心配ですね」
「行商路にしてた人の話だと、街道の中継地として機能してるから、宿はあるらしい」
数年前までユーシアに行商に出かけていた商人の話を聞けたのは、本当に幸運だった。偶然同じ宿だったその商人は、今は西の方を回っているらしく、少しだけ西の方の話も聞く事が出来た。

「そういえば宿ってどうやって選ぶの？」
「私に聞かれても困るんですけど」
宿なんて取ったことないですし、と告げるフレイの言葉は、優斗にとって予想外のものだった。

「じゃあ、なんで納屋の大きな宿を選べ、なんていったの？」
「あー。あれですか」
ばつの悪そうな表情のフレイは、少し悩んでからしぶしぶ口を開く。

「私って奴隷じゃないですか？」
「にしては、態度が大きいけどね」
「それはご主人様の変態的な要望に応えた結果なのでおいといて」
「おいとくな！　人を変態扱いしといて」
「まぁまぁ。で、奴隷な私はもちろん、納屋で眠る事になるだろうと思った訳です」

あー、と唸りながら、優斗はあの時の状況を思い出す。
フレイは売られる気だった。ならば、すぐに売られて別れる相手の財布を心配するよりも、少しでも自分の身の安全を確保出来る様に、そして多少でも快適に過ごせるように誘導する方が良かったに決まっている。

「あの時はまさか、部屋に連れ込まれて慰み者にされるなんて思いもしませんでした」
「誰が、誰に、何をしたって？」
「ご主人様が、奴隷に、侍女プレイを強要しました。そして悦に浸って……」
きゃー、と声を上げたフレイは、両手で顔を隠した。傍から見れば羞恥で染まった顔を隠しているか、泣き顔を隠している様に見える。

それが笑いをこらえていると判っている優斗は、後頭部に軽くチョップを入れてから前に向き直った。

竜神の加護（後書き）

ギフトに続いて神様について。
宗教観は人それぞれだと思いますので、深く考えないで貰えるとありがたいです。

キコ森の村

予定より半日遅れで到着した村は、話に聞いていたよりも寂れていた。

「今思えば、誰ともすれ違いませんでしたね」

「好条件の依頼っていうのは、その辺りが原因、なのかもねぇ」

川沿いの道を行く2人は、遠くに見え始めた村にそんな感想持った。

村に入ると言う事で、今日のフレイはエプロンドレスでなく、もう一方のワンピースを着ている。奴隷＝家畜と言う認識が強い場所では、交渉の場や宿の部屋に連れて行けない可能性がある、とアドバイスしてくれたのは、積荷の主であるロード商会の担当、ハリスだ。

服を着替える際、フレイに「自分では出来ないんです」と言われたので、、頭のカチューシャ風のリボンと首輪を隠すリボンをつけたのは優斗だ。ついでにと頼まれた腰のリボンは、全力で辞退した。

「お、村に客か？」

「あ、どーも」

川沿いにある小さな小屋から男が現れた。

荷馬車を止め、あいさつを交わしながら、優斗は相手の身元について考える。

「休憩ですか？」

「はい。と、言っても仕事がほとんど無いんですけどね」

苦笑する男の言葉に、優斗は自分の予想がほぼ正しいと確信する。

水車の併設された小さな小屋。いわゆる水車小屋は、この世界で粉ひきを行う場所だ。そんな場所に居ると言う事は、彼の仕事は粉ひきなのだろう。服についた白い粉も、それを証明している。

「やはり不作が原因ですか？」

「そうだねぇ。うちの村はそれだけじゃないけど。

まぁ、あんたが来てくれたなら少しはましになるだろうさ。

あ、宿は今、人いねーから村長んとこ行ってくれ。後は行けばわかる」

言いたいことだけまくしたてて、男は小屋へ戻っていった。

優斗は男の背中に「ありがとうございます」と告げてから再び村を目指して手綱を引く。

「宿に人がいないとか、よくある事？」

「うちの村は宿自体ありませんでしたので、なんとも」

聞けば答えが返って来る、と無意識に考えていた事に、優斗は反省した。

頼りっぱなしだから何かお礼がしたいな、と思った優斗は、ちらりと服と不釣り合いなボロの外套を見る。次にまとまったお金が出来たら、もっと良いのをプレゼントしよう。

村の中、大きな建物を探して進む優斗は、居心地の悪さを感じていた。

「すごい見られてますね」

「だねぇ。

丁度いいから村長の家がどこか聞こう」
思考を切り替えた優斗が荷馬車を止めると、２人の男がこちらへと走ってくるのが見えた。他の人間は荷馬車を囲むように一定距離を保っている為、声をかけづらかった優斗は、２人の到着を待って御者台から地面に下りる。

「よくいらしてくれました。それで、本日はどんなご用件でしょうか」
息を切らせ、目を爛々と輝かせる初老の男に気圧されて身を引いた優斗は、真後ろにあった荷台に背中をぶつける。

「あー、いや。宿を借りたいのですが」
「そうですかそうですか。では、さっそく部屋を準備させますので、それまで我が家でお話しでも致しましょう」
初老の男が一緒に走ってきた男に、馬を誘導する様、指示を出す。

「荷馬車は厩でお預かり致しますので、どうぞこちらへ」
「あー、はい。フレイ、荷物取って」
「かしこまりました」
持ち歩く用に貴重品を詰めておいた袋を受け取ると、荷馬車からフレイが下りるのを手伝う。

フレイは１人でも降りられるのだが、連れ合いであると認識させた方が何かと便利だと、２人で話し合った結果だ。

「おぉ、奥様もご一緒でしたか」
「いえ、妻ではありません。旅の連れ合い、と言うヤツです」
その言葉に、真横に下りてきたフレイが優斗の腕を取る。本人曰く子供っぽい、優斗からすればもう子供ではないボリュームの胸を押し当てられて、優斗は内心焦る。

「ほっほ。仲が良いですなぁ。
立ち話もなんです。ささ、こちらへ」

初老の男――この村の村長らしい――の家に招かれた優斗たちは、来客用らしいソファーに腰を掛け、紅茶を啜っていた。

隣にフレイ、対面に村長と交渉役であると言う男が座った状態に、優斗は少し困っていた。

「あの、私どもは宿を借りたいだけでして」
「まぁまぁそう言わず。知っての通り、ここの蜂蜜は一級品ですぞ」
知らないけど、と思いながら優斗は曖昧に笑う。

シールズと名乗った交渉役の男の言葉から推測すると、荷馬車の食糧と村の特産品を交換して欲しいらしい。何故らしいなのか言うと、シールズの態度が積極的に、買って欲しい、と言うのではなく、欲しいなら売ってやってもいい、と言うスタンスだからだ。

その態度に、最初は「殿様商売なのかな」と言う感想を抱いていた優斗だが、村長の言葉と合わせて考えると、どうやら交渉を自分有利に進めるためのポーズらしい、と言う結論に達した。

「それで、どうされますか？」
「仕入れに来た訳ではありませんので。安ければ彼女に少し買い与えてもいいかな、くらいですね」
渋い顔をするシールズ。交渉役ならポーカーフェイスくらい使えよ、と思いながら、優斗は蜂蜜と言う存在に心奪われつつあった。

ここ数日、甘い物が欲しくて仕方がなかったのだ。この世界で砂

糖は希少、もしくは存在しないのか、アロエナに取り扱っている店は存在しなかった。その時から、果実以上の甘さは摂れないと思っていた優斗にとって、蜂蜜が存在する事は涙が出そうなくらい嬉しい事だった。

「大量に仕入れて貰うなら安くするのもやぶさかではありませんが。少量では、ねぇ」

「ほっほ。優斗殿、折角ですから味見して行ってください。そうすればお心も変わるでしょう」

先ほどから視界の隅に入っていた蜂蜜の小瓶が、目の前に差し出される。少し遠慮する素振りを見せてから、優斗は蜂蜜をひと舐めする。

「おいしいですね」

「そうでしょう？　ささ、お連れ様もどうぞ」

視線で優斗の許可を取ると、フレイも指で掬ってひと舐め。その後の表情は、おいしいを通り越して、幸せだと言うのが伝わってくる程の笑顔だった。

「どうです？」

「そうですね。1ビン買っていきたいくらい、おいしかったです」

優斗の言葉に、シールズが更に顔をしかめる。

優斗はこの交渉に乗る気がまったくなかった。何せ、資金がない。荷物と交換するにしても相場が判らないし、参考になる情報もない。何よりこの交渉役、ぼったくる気が満々に見える。こんな状況で、そんな相手と交渉など、無謀を通り越して自殺行為だ。

そんな優斗の態度に業を煮やしたのか、交渉役の男が元から荒っぽかった声を更に荒げる。

「安く買い叩こうってんだろうがそういかんぞ！
商人なんぞ皆そうだ。他にも買う客はいるんだ。こちらの値段で仕入れる気がないなら、お前に売る物は一滴もない！」
「そうですか。残念ですが、そういう事でしたら仕方ありません。フレイ、お暇させて頂こう」
「はい」
優斗の言葉に、交渉役の男はつばを飛ばして叫んだままの状態で、口をあんぐりと開けて固まった。

彼らは優斗の事を、蜂蜜の買付に来た行商人だと思っている。そして出向いた先で交渉が決裂すれば、輸送費全てが赤字になる、と言う事も知っていた。交渉役であるシールズが妙に強気であったのも、この付近で優斗たちの荷物全てと交換できる程、価値のある物を準備出来るのはこの村だけである言う自負があったからだ。

「宿までの案内、お願いできますか？」
「ちょ、ちょっと待ってください！」
慌てた様子の村長に、優斗は自分の予想が正しかった事を確信する。

ここに来るまで誰ともすれ違わなかった。そして見知らぬ自分に好条件で来る仕事の行先が、こちら側より行商人に良い場所であるはずがない。だからこの村に行商人が来る事は、久しくなかったはずだ、と。

他にも宿を準備しなければ使えない事や、旅で疲れているところを無理やり交渉の場に引っ張り出された事なども、予想の一因だ。

「私たちは疲れています。これ以上、引き止めると言うのであれば、

この村によからぬ噂が立つかもしれませんよ?」
「……承知しました。おい、客人がお帰りだ。宿まで案内を頼む」
はーい、と声が返ってきてすぐに、少年が1人、室内へと入ってくる。

「宿の息子でトーラスです。何かありましたら、言いつけてください」
「ありがとうございます。
ところで、この辺りは不作と聞きましたが、この村は大丈夫なのでしょうか?」
ぐっ、と喉を鳴らしたシールズに苦笑し、大体の状況を把握する。

優斗としては、食糧に困っているのならば自分で買った分を売っていく事はやぶさかではない。それにもし不作であれば、今晩の夕食も心配だった。そんな親切心と心配事から出た言葉も、シールズにとっては「欲しいなら売ってやってもいい」と言う上から目線の言葉にしか聞こえない。

「ちっ。村長、こいつに売るのは反対だ。こんなあくどい商人、そうはいないぞ」
「こら、シールズ。すいません。交渉役は周りからの重圧も大きく、少しカリカリしていまして」
「気にしていません」
「そうですか。申し訳ないが、明日また会って頂けませんか?」
「荷を届ける期日は多少ありますし、財布の中身が許せば是非お願いします」
優斗の言葉に、シールズがまた悪態を付く。その反応に、意外と頭はいいのかもしれない、と苦笑しながら優斗は部屋を辞した。

村長の家を出ると、トーラス少年の先導で宿へと向かう。

「トーラスくん、だっけ？」
「はい。ええっと」
「優斗。こっちはフレイ」
「そうですか。それで何のごようでしょうか、ゆうとさま」
普段は使わないのだろう、不慣れな敬語に、優斗はフレイと顔を見合わせて笑う。

「呼び捨て、がアレならさんでいいよ。さまは仰々しいし。あと、敬語もいらない」
「でも、お客様にそれはしつれいにあたると」
「宿の外ならいいでしょう？　私もフレイさんかお姉さん、って呼ばれる方がいいな」
ふわりとした笑みを浮かべるフレイに、優斗は少しだけ見とれた。

「えーっと。じゃあ、ユートさん。フレイお姉さん」
「うんうん。って、どうしたんですか？」
「あー、なんでもない。ところでトーラスくん。蜂蜜売ってるとこない？」
「ありますけど」
「教えてくれない？」
トーラスは、うーん、と考え始める。もしかして売っている場所がいくつもあるのかな、と思いながら優斗は答えを待つ。

「どのくらいいるの？」
「とりあえず小さなビンに１つくらい」
「だったらうちのヤツ出す。安くしとくよ？」
「ほぉ」
１０歳か、もう少し上かくらいだろう。小さいのに、中々商売人だ、と感心しながら優斗は頷く事で返事を返す。

俄然はりきるトーラスの後ろを歩きながら、優斗は、蜂蜜で何か作れないかな、と手の中のノートパソコンに良いレシピがある事を祈った。

キコ森の村（後書き）

新しい街とキャラの登場です。
他人がいるとフレイさんがまともなので面白さ半減かな？　と少し心配です。

石臼が音を立てて回っている。

石臼によりすり潰された粉を篩った物を受け取った優斗は、代金替わりの品を置き、お礼を言って小屋から出た。

「むしろ助かった」と笑う男の名前すら聞いていない事に気づかない程浮かれている優斗に、フレイは苦笑しながら後を追った。

「よしよし」

「何がよしなのか知りませんけど、無駄遣いは程ほどにして下さいね」

はーい、と元気よく告げる優斗は、フレイが今まで見たどの表情とも違う、心から嬉しそうな笑顔だった。

トーラス少年から蜂蜜を受け取り、ネット閲覧履歴から蜂蜜を使ったお菓子を探していた優斗は、そのほとんどに砂糖が使われている事に、一時は心が折れかけていた。

フレイからすれば、パンやクッキーは蜂蜜を混ぜるとおいしく焼けないので、仕上げにかけるくらいしか使い道がないのは周知の事実だ。多量にかければ値が上がり、少量では全体に行きわたらないので、一般家庭で蜂蜜が使われる事は少ない。

そんな事実を先ほど知ったらしい優斗は、それでもめげずに蜂蜜のみで甘さを付けたレシピを探し、ついにそれを発見した。

「んーでも、きなこが存在しないのは予想外だった」

「大豆は茹でて食べる方がおいしいですから。粉にする手間もかかる上に、マズくなりますから。わざわざ不味くして食べようなんて、ご主人様は相変わらず変人ですね」

優斗が作っていたのはきなこで、フレイが知っているのは大豆粉なのだが、それに気づいている優斗が説明をしないのは、サプライズの為、等ではなく説明する時間も惜しんでいるからだ。

フレイが部屋に入ると、優斗は既に準備してあった材料を混ぜ合わせていた。

「あー。折角おいしい蜂蜜が」

「ちゃんと美味しくなるって。あ、フレイ。蜂蜜温めといて」

「つまみ食いしても良いのでしたら、喜んで」

「ひと舐めだけね」

機嫌のいい優斗の返事に、フレイは宣言通りひと舐めだけしてから鍋に入った蜂蜜を火にかける。

窓際とはいえ、室内で火を使うのは危ないと指摘したのだが、レシピを知られたくないと言う優斗の意見に従い、自分が見張っている事を条件に、フレイは室内での調理を承諾した。

もちろん、主人である優斗はそんな許可を取る必要はまったくない。フレイがそれを指摘しない一番の理由は、子供の用になんでも聞いてくる年上の主人が、とても可愛いからだ。ちなみに次点は、彼に色々言うのが楽しいからと言う理由だ。

「粉、足りるかなぁ」

「ぐつぐつして来ましたよ」

「お。じゃあ、こっち頂戴」

沸騰する鍋を火から外して手渡すと、優斗は躊躇なくその中にき

なこを放り込んだ。その光景に、フレイは心の中で何度目かのため息を吐く。

「あぁ。こんな浪費癖のある主人に仕える事になるなんて、私はなんて不幸なんでしょうか」

「おかげでおいしい物食べれるんだから、気にするな」

「おいしく出来るといいですねぇ」

フレイは昔、大豆を潰した物を混ぜた食べ物を口にした事がある。だからこそ、確信を持ってこれは失敗すると思っていた。

「っし、こんなもんかな」

そういって優斗が完成品を口に放り込んだ時も、絶対に渋い顔をするだろと思っていた。だが、フレイの予想が当たる事はなかった。

「いい感じ。これなら長時間口に入れとけるし、移動中に食べるようにとっとくか。

あ、フレイも1個食べてみ」

「へ？　いや、私は」

反論する間もなく口元に持って来られた物は、指の先くらいのサイズに切られた黄色い塊だ。

味が楽しめないなら他で楽しめばいい。そう考え、からかう目的で優斗の指ごと咥えたフレイは、口に広がった甘い味に、思わず優斗の指に歯を立ててしまう。

「いたいいたい！　指は食べないで。手で捏ねてたから甘いけど、中身は甘くないから」

優斗が引いた手に、フレイの唾液が糸を引く。それに対して何か言う事も忘れる程、フレイは口の中にある物に集中していた。

「噛まずになめてればしばらく楽しめるから」
「ほんとですかっ！」
「その為に作ったんだし」
長時間甘さを維持し続ける食べ物。絶対に嘘だと思ったフレイは、それでも一心不乱に口の中の物を嘗め続ける。

「ハチミツきなこ飴は成功、っと。次はハチミツきなこミルク飴に挑戦しますか」
ハチミツきなこ飴、と言う名前を心に刻みながら、フレイはそれに歯を立てた。ぐにゃりと言う感触と共に2つに割れた飴は、やはり甘かった。

作業を続けている優斗は、先ほどと同じように蜂蜜ときなこを混ぜている。今回はそれを粉を敷いた板に乗せず、容器の中に放り込んだ。そこに宿で譲ってもらったミルクを流し込み、木べらで混ぜ始める。

作業を観察しながら、フレイは先ほどの作業、ハチミツきなこ飴の作り方を思い出していた。
まず、蜂蜜を鍋にかける。ぐつぐつとして来たら火から外して大豆の粉を入れ、固まった物を粉を敷いた板に乗せ、細長く伸ばしてから切る。切ったものに更に粉をまぶして袋に仕舞えば完成だ。

絶対にこのレシピを忘れまいと心に誓うフレイの前で、優斗は先ほどと同じように蜂蜜ときなこを混ぜた物を板の上に乗せる。粉の無くなった板の上で四角い塊を作った優斗の手が、唐突に止まった。

「……しまった。冷蔵庫がない」
「レイゾウコ、ですか？」
聞きなれない言葉に、フレイは焦る。材料が足りず完成しない、

なんていうのは神への冒涜だ。あれもきっとハチミツきなこ飴と同じくらい、いや、手間と材料が余分にかかる分、それ以上においしい物に違いない。

「あー、フレイ」
「なんでしょう！　なんなりとお申し付けください！」
「気合入ってるなぁ。まぁ、気持ちはわかるけど」
「そんな事より、何が必要なんですか？」
「あぁ。これを冷やしたいんだけど、そういうギフトってない？」
「氷雪の神の欠片ですね。村に居るかもしれませんので、聞いてみましょう」
優斗に見送られて部屋を飛び出したフレイは、トーラス少年を見つけ、即座に詰め寄る。

「トーラスくん！」
「はいい！？」
「氷雪の神の欠片を持つ人、いませんかっ！」
「そ、それなら弟が……」
「すぐにでも部屋に来てもらえませんか？
報酬は払うからっ！」
払うのは優斗なのだが、今のフレイにはどうでもよい事だ。

その後、トーラス少年に連れられてきた弟くんの力により、優斗の試作品2号、ハチミツきなこミルク飴は無事、完成した。

「すごくおいしいです。なぁ、兄ちゃん」
「だな。でも、本当に御馳走になってよかったの？」
「あぁ。その代り、頼みがあるんだけど、いいか？」
「もちろん！」
威勢のいい返事を返すトーラスの横で、フレイは口の中に広がる

幸せに心奪われていた。

ハチミツの甘さとミルクのまろやかさ。そして何より、あんなにまずいはずの大豆の粉がそれを引き立てている。これはきっと、神が作った食べ物に違いない。

多少、思考が暴走しているフレイの横では、優斗の指示を受けたトーラスが、弟と共に外へ飛び出していった。

「さて、吉と出るか凶と出るか」

不敵に笑う優斗。フレイは相変わらず、トリップしている。

次を口にしようと手を伸ばし、目の前にあったはずの物が全てなくなっている事に気づいたフレイが怒り狂うのは、数秒後の事だった。

異世界のお菓子（後書き）

作中のお菓子は実在します。
おいしいので、是非作ってみて下さい。

優斗の商品

一晩経ち、昼食を食べるまでの時間をゆっくりと過ごした優斗は、出かける支度をしていた。

行先は村長の家。午前中に来た使いに、お昼を食べてから向かうと伝言してある。

「交渉が上手くいったら、もっと作ってくださいよ？」

「わかってるって」

今日も優斗に強請ってきなこ飴の方を1つ食べたにも関わらず、フレイは不満そうだ。どうやら彼女は、ミルク飴の方がお気に入りらしい。

宿の入り口には、トーラス少年が立っていた。事前に村長の家までの案内を頼んであり、ここで待ち合わせと言う事になっていた。

お互いに笑いあい、親指を立ててにやりと笑う。昨日、優斗がトーラスに依頼した内容は恙なく実行され、この交渉が成功すれば、別途報酬を支払う予定だ。

村長の家に着くと、昨日と同じ部屋へ通され、勧められるままにソファに腰掛ける。娘なのだろうか、中年の女性に今日もお茶を出してもらい、一口すすった。

「お待たせしてすいません。少し仕事が長引いてしまって」

「村長さんも、色々とお忙しいでしょう。お茶を頂いていましたから、平気ですよ」

にこりと笑う優斗とは対照的に、村長の方は昨日と違って余裕のない表情だ。

「交渉役の方はどうされましたか？」
「あぁ、それは。ちょっと用事があって同席できません。代わりの者が来ますので、少々お待ち頂けますか？」
「ふむ、そうですか。出発の準備もありますし、出直した方が良いかもしれませんね」
「えぇ！？」
素っ頓狂な声を上げる村長。

確かにこれは交渉役が必要だな、と思いながら優斗はフレイに目配せする。

「そう言わず、少しくらい待ちましょう」
「フレイがそう言うなら、そうするか」
打ち合わせ通りの会話を聞いて、あからさまにほっとする村長に、2人は笑いをかみ殺しながらお茶に口を付ける。

優斗があえて悪戯レベルの駆け引きを行ったのは、これ以降にフレイの力を借りなければならない時の為の予行演習のつもりだった。本物の商人相手には通じないだろうが、それ以外の人間と交渉のテーブルに着く機会があれば、役立つだろう。
落ち着かない村長の姿に再度笑いをかみ殺していると、その人は五分と経たず現れた。

「初めまして。ミルドと申します」
「ほう。女性の方ですか」
「はい。今回は臨時でお願いしました。もしや、女性相手の商売はお嫌いでしたか？」
「いえいえ、とんでもない。見目麗しい女性と話をする機会を不意にする様な事は致しません」

優斗の言葉に、フレイが指で彼の腹を抓った。それに「うっ」と反応してしまい、優斗は乾いた笑を浮かべる。

「連れ合い様の前で他の女性を褒めるのは、失敗でしたわね」
「ははは。以後、気を付ける事にします」

「ところで優斗殿。お聞きしたいことがあるのですが、よろしいですか？」
「もちろんです」
交渉役が来て急に落ち着いた村長は、交渉役のミルドに目配せをする。

ミルドと言う女性を観察しながら、優斗は言葉を待つ。

「実は昨日、村の一部にあるモノが配られまして」
「あるモノ、とはなんでしょうか？」
「説明はミルドが致します」
「はい。説明し、いえ。させて頂きます」
こういう席に慣れていないように見える彼女が、何故交渉役に選ばれたのだろう、と疑問に思いながら、優斗は視線を上下に動かす。

くすんだ茶色の髪は長く、瞳の青い、２０代くらいに見えるそれなりの美人だ。胸元の開いた服を着ているが、慣れていないのか頻りにその部分を気にしている。もしかして色仕掛けのつもりなんだろうかと考えながら、優斗は視線を顔に戻す。

「村の子供と一部の大人に、ハチミツで作ったらしいお菓子が配られていたのです」
「さすが蜂蜜が特産の村ですね」
「えっと、そうではなくてですね」

優斗の言葉に、ミルドが戸惑う。意地悪だったかな、と思いながら笑顔で先を促す。

「それで？」

「それが、我が村の品ではなかったのです」

「ふむ」

優斗はどういう方向に誘導するか、考え始める。

ここに来るまでは、出来る限り悪辣に攻め、交渉役の男を黙らせてから少しだけ譲った条件を出すつもりだった。しかし、目の前に居るのは、あの腹の立つシールズではない。

考える。シールズに最もダメージを与える方法は、彼女が交渉をそこそこ成功する事ではないだろうか、と。成功させられる交渉を失敗したとなれば、彼の評判は地に落ちるはずだ。

基本方針を固めた優斗は、とりあえずフレイに詳細を話さなかった過去の自分を褒め称えた。目の前の美人に惑わされて交渉の手が緩んだと思われたら、後が怖い。嫉妬でなく、甘い物の恨みで。

「私も口にしましたが、とても美味でした。それをくれた少年から話を聞いたのですが、あれを作ったのは貴方なんですよね？」

「こら、ミルド。貴方とはなんだ、貴方様、か優斗様、だろうが」

「気にしないでください。美人と親しく話すのは大歓迎ですから」

今度はフレイからの攻撃がないな、と思いながら優斗は微笑んだ。

微笑みの効果か、ミスによる羞恥か。ミルドの頬が少しだけ赤く染まる。

「そうだとして、どうしました？」

「実は私、お菓子を作るのが趣味でして」
「へぇ。女性らしくていいですね」
「ありがとうございます」
はにかむミルドに、こういう交渉法もあるか、と思いながら優斗は懐に忍ばせた袋を、服の上から確認する。

「ハチミツとミルクが使われているのはわかるのですが、あの粉だけが、何かわからなかったんです」
「そうですか」
「あれ、粉はまぶすだけじゃなく、混ぜ込んでありますよね？」
「おぉ、凄い。正解です」
「ハチミツとミルクを混ぜてもああはなりませんでしたので。試しに色々な粉を混ぜましたけど、あの味にはなりませんでした。あの粉が何か、教えて頂けませんか？」

優斗は、どう軌道修正をしようか、と考えていた。
当初の予定では、追及されたらこの場で試食させ、作り方のレシピを売る交渉を始める予定だった。しかし、レシピがほぼバレているのであれば、こちらの交渉材料はきなこの作り方のみ。

「実は、あれが大豆の粉だと言う事もわかっているのですが」
「本気で驚きました。何故わかったんですか？」
「粉にした人間に聞きました」
そりゃバレるわな、と自分の迂闊さを反省しながら、優斗は口を開く。

「そこまでわかっているのでしたら、私が教える事はないと思うのですが」
「大豆の粉で作ったんですが、あの味にならないのです。それどころか、色が違います。

実は大豆の粉だと言う確信はありませんでした。大豆と偽って別の豆を潰させたと疑っていたくらいです」

（カマかけに乗るとか、迂闊すぎた）

優斗は代理で女性だと言う事で少し緩んでいた警戒を、少しだけ強める。

「ミルドさんの言いたい事は大体わかりました」

「では！」

「それで、この村はこの粉に、いくら出してくれますか？」

懐からきなこの入った袋を取り出す。

この村にきなこが存在しない事、水車小屋の男とフレイが大豆を粉にする事にあそこまで反対した事から、優斗はこれを切り札にすると決めていた。どうすれば場に出した切り札を有効に使えるか、優斗は慎重に言葉を探す。

「ミルドさん」

「は、はい」

「一度作ってみませんか？」

「いいんですか？」

「どうぞ」

優斗の言葉に、村長が人を呼び、ハチミツとミルクが届けられる。

厨房に移動しなかったのは、袋を持って行かれると困る、と優斗が告げたからだ。

しばらくの後、ミルドが悪戦苦闘して作り上げた物は、彼女が食べたものとは別の味だった。

「えっと、本当にこの粉で作ったんですよね？」
「えぇ」
失敗の原因が判っている優斗は、ソファの隅で小さくなっているミルドに、悪い事をしたかな、と思いながらもこれでレシピも売りつけられる、と心の中で喜んだ。

「私から少し良いですか？」
優斗の言葉に、村長とミルドが同時に首肯する。

「このレシピは、遠い国の物でして。これのおかげでここと似た境遇の村が復興した、と言う話もあります。
ですので、この村でもお役に立つのではないかと思ったのですが、如何せん、売れると言う証拠がありません。ですので、失礼かと思いましたが実際に作り、村人に食べて頂いた次第でして」
「そうでしたか。それはそれは、ありがとうございます」
ミルドを押しのける村長に優斗が少し眉をひそめる。

「ところで村長さん。この菓子で村を復興出来ると思いますか？」
「えぇ、もちろんです。こんな素晴らしい物、売れないはずがありません。なぁ、ミルド」
「はい！　絶対売れます！」
その言葉を待っていた、とばかりに優斗はようやく売り物の詳細を開示した。

「これのレシピと粉の作り方を買いませんか？」
「えっと、おいくらでしょう？」
ミルドが間髪入れず、そして恐る恐る尋ねる。村長の方は、ほっとした様子だ。

ミルドはレシピを秘伝の技術だと認識している。そんなものを買おうと思えば、かなりの大金を積まなければならないだろう、と言うのが彼女の考え。

一方村長は、彼の思うところである魔法の黄色い粉を高値で売り付けられる事を心配をしていた。作る分だけ買わされる事を思えば、加工法がお金を出して買える事は、嬉しい誤算だった。当然ながら、支払う想定金額は、ミルドの思うそれと比べてかなり安い。

「村の経済状況が判りませんので、無茶を言う訳にもいきませんし。そうだ、ミルドさん。どの程度なら買えますか？」

「えっと」

ミルドが、交渉に使ってもよいとされた上限金額を告げる。

「おい、ミルド！」

「は、はいいぃ」

「優斗殿、少し失礼させて頂きます」

「どうぞ」

内心焦りながらも、予想していましたとばかりに落ちつた声でそう伝えると、紅茶を口に含む。

真っ青になった村長と、びくびくと怯えるミルドが部屋に戻ってきたのは、数分後の事だった。

「あ、その。実は村は不作で、しかも1年ほど前に新たな街道が通ったせいで行商人の方も来なくなり、恥ずかしながら、村人全体が食うに困っている状態でして」

村長の言葉に、優斗は一瞬、状況の把握が出来なかった。

隣のフレイが「情に訴えかけてるんです」と呟くのが聞こえ、よ

うやくこれが値切り交渉なのだと理解した優斗は、ならばと反論する。

「そうですか。何人か話をしましたが、そこまで飢えてはいないようでしたが」

「皆、危機感が足りないのです。行商人の方々が来なくれば特産の蜂蜜が売れなくなるだけでなく、彼らの滞在費などの収入もなくなる事が実感できていないのです。

このままでは次の収穫まで備蓄は持ちません！」

感情的になってきた言葉に、あと1押しかな、と思いながらも、優斗はまだ口を開かない。

「どうか、我が村の為にレシピを教えて頂きたい。

出来うる限り、支払は致します。そう、誰かを奴隷として引き渡してもかまいません！」

想像以上に食いついたな、と思いながら隣のフレイを見る。予想通り、複雑な表情をしていた。

「気に入った娘を言ってくだされば、いやいや、お連れ様がいらっしゃるのですから、高く売れる、力のある者がよろしいか！？」

このままだと道連れが増えかねない。そう考えた優斗は、業と勘違いさせるよう、口元に怪しい笑みを浮かべる。

「ミルドさんとお話がしたいですねぇ。出来れば、ここじゃない場所で」

「おぉ、そうですかそうですか。ミルド、行ってこい」

「えぇぇぇ！？」

「村の為だ！　逆らうなら」

耳元で何かを囁いた村長が何を言ったのか、想像するのは難しくないが、優斗は考えないようにする。

「……わかりました。優斗様に従います」
「そうですか。では、行きましょう。フレイ」
「なんですか？」
「行くよ？」
「私もですか？」
「もちろん」

部屋を出てすぐに振り返り、安堵している村長を見た優斗は、どうしてやろうかな、と思いながら、女性2人と共に部屋を出た。

優斗の商品（後書き）

村長さんはこの世界基準で言えば悪人ではありません。
多くの村人の未来を最小の犠牲で得ようとしているだけですしね。
もちろん、善人でもないですけど。

有利な交渉

横にミルド、後ろにフレイと言う並びで歩き出した優斗は、背中からのプレッシャーに冷や汗をかいていた。

プレッシャーの発生源であるフレイからすれば、自分に手を出す事をあそこまで拒否しておいて他の女を買った様に見えているのだから、不機嫌になるのも頷ける。

「それで、えっと。私はどうなるんでしょうか」

「村の蜂蜜を貯蔵してるとこと、食糧を貯蔵してるとこに案内して貰える？」

「は、はぁ。わかりました」

予想外の答えに、ミルドは拍子抜けしながら「こっちです」と先導する。

優斗の目的は、実際この村がどのくらい出せるのか、と言う調査だ。食糧に手を付ける気はない、と言うか自分の積荷も置いていく気の優斗は、開いたスペースに出来うる限り、蜂蜜などの高級品を詰め込んでいきたいと考えていた。

同時に、この村に壊滅的な打撃を与えたくない、とも思っていた。それは目の前の女性の立場を悪くするし、協力してくれたトーラス少年やその家族にも迷惑をかける事になる。

「こ、ここです」

「おー。結構あるね」

倉庫に詰め込まれた蜂蜜が入っているらしいビンの山。それに目を光らせて感動しているのは、優斗だけではない。

ミルドの話によれば、村で採れた蜂蜜は、ほとんど村が買取り、ここに保管されるらしい。今年の分は村の有志が街まで売りに行ったが、帰ってこない者が多いのだとか。

事故か、逃亡か。まとまったお金が手に入る事を思えば、後者の可能性も高そうだ、と思った優斗だが、契約と言うギフトがあるのだからそうでもないか、と考えを巡らせる。

「今年の物はほとんど残っていませんが、去年とれた分はほとんど残っています。もう白く固まってしまい、売り物になりませんけど」

その言葉に、ん、と疑問を抱く。優斗の記憶では、ハチミツは温めれば元に戻るはずだ。それを指摘すると、ミルドは苦笑いを浮かべた。

「確かに柔らかくなりますけど、味が悪くなるので」

採れたてに比べてかなり安い値段になってしまうのだ、と言われて優斗は納得する。

確かに蜂蜜に火をかけると風味が落ちる。だが、低温で湯煎すれば風味を損なわずに元に戻す事が可能である。これは昨日、ウェブ履歴を調べていて知った知識だ。

ハチミツを沸騰させて作るきなこ飴も、一度湯煎してから使うべきなんだろうか、と考えながら周りを見渡した優斗は、よく考えれば、ハチミツを持っていきすぎると売り物がなくなってしまう、と言う事に気づいた。優斗は蜂蜜がどの程度の頻度でとれる物なのか知らないだが、加工して売るならば、手元にまったくないのはマズいと言う事くらい理解できた。

村長が奴隷として誰かを引き渡してもいいと言った理由はその辺にあるんだろうな、と思いながら優斗は大いに反省した。あの状況では、それを望んで交渉を進めたと思われても仕方がない。

「んじゃ、食糧……は見てもわからないか。
ミルドさん、実際のところ、食糧の備蓄はどうなんですか？」
「足りてませんが飢え死にするほどではないですっ」
ミルドが従順なのをいい事に、優斗は様々な事を聞き出した。

やはりこの街に、行商人はほとんど来ていないと言う事。
来た行商人もユーシアから逃げてきた者がほとんどで、滞在せずほぼ素通りだった事。

ユーシアの状況に関しては、数か月前に王国との小競り合いがあったらしい、と言う情報を得る事が出来た。戦争寸前の地域へ荷物を運ぶと言うのがこの仕事の実情だったと知り、ハリスがユーシアの説明をあまりしなかった事に合点が行く。

事情を知った優斗だが、特に彼を恨むつもりはなかった。予想していた範囲内だった事と、受けなければ商売を続けられていなかった可能性もあるので、むしろ感謝している。

「ミルドさんの予想でいいんですけど、どの程度なら支払えると思います？」
「すいません！　村の経済状況はあまり知らないんです」
さすがに気の毒になって来た優斗は、もうそんなに聞く事もないだろう、とフレイに目配せする。

「なんですか？」
「奴隷を買う気はないんだけど、俺が説明しても説得力ないかなー

って」
「それで私に、ですか？」
「フレイは理解が早くて助かるよ」
結局、ミルク飴をもう一度作る事を条件に、フレイはミルドに説明をしてくれる事になった。

なんとか落ち着かせたミルドから「秘伝を買うならば大金が必要だと思った」と聞かされた優斗は、予想以上に高く売れそうだと言う事実に、少しだけ困っていた。

村に壊滅的な打撃を与える気はない。しかし、適正以下で売ってしまうのは、一応商人と名乗っている以上、抵抗がある。そう考えた優斗は、何か良い方法はないか、と考えを巡らせる。

「この付近に蜂蜜を作ってる村ってあります？」
「ありますけど、そこはここより小さい村です」
脅しが効いていない状態で得た情報をどこまで信用していいか微妙だが、少なくとも村はあるのだろう。ならば、そこには安値で売り付けてはどうだろう。

そこまで考えて、日持ちのし辛いミルク飴の方は、街道沿いに無い村に教えてもあまり意味がない事に気づく。かと言って大きな街に売りつけると、ここが潰れてしまう。

どうするべきかな、と考えながらミルドを見つめる。３人寄れば文殊の知恵、自分だけで考えていてもしょうがないと、目の前の２人にも協力を要請する事にした。

「普通に売ろうと思うと、それこそミルドさんを奴隷として貰って行くくらいしか無理そうですねぇ」

びくり、と反応するミルド。フレイには適当に話を合わせてほしい、と視線で訴えておく。

「どうにかお金を準備するいいアイディアありませんか？　例えば近くの村と共同で買うとか」

「えっと、誰かに相談して来てもいいですか？」

「有力な相談相手がいるなら、一緒に行きますよ？」

逃げようとしても無駄だ、と言外に伝えながら、優斗は不敵に笑う。

結局良いアイディアが浮かばなかった優斗は、とりあえず解散し、宿へ戻る事となった。ミルドには村で話し合ってくれと伝え、村長の家へ帰した。

「しっかし、情報を切り売りするのがこんなに難しいとは思わなかった」

「売る事を諦めるか、もう安値で売るしかないんじゃないですか？」

「あの村長とシールズってのが喜ぶのが、なんかヤダ」

子供ですね、とフレイに笑われ、優斗は項垂れる。

結局のところ、フレイの言うとおりにするしかないのだ。一介の行商人でしかない優斗には、買い取って持ち運べる品物の量にも限りがあるし、村の支払い能力にも限界がある。

諦めた瞬間、何かを得ると言うのは良くある話だ。優斗は今、何かの端を掴んだ気がした。

「あー、そうか。そう言う手があったか」

1人納得する優斗に、フレイは気でも触れたのかとジト目で彼を見つめる。

結局、もう少しアイディアを煮詰めたいと言う優斗の言葉で、その日は就寝となった。

朝になり、朝食を終えた優斗は、トーラス少年に連れられて、ある場所へと向かっていた。

「で、どうよ、トーラス」
「んー。ミルドおばさんはいい人だよ。いい人過ぎて、村の厄介事、結構押し付けられてる」
「あの人、村の外から来たんだったりする？」
「えーっと。確かそうだったと思う。嫁いできたヨソモノだー、って、死んだばあちゃんが言ってたし。
あと、ミレネがお父さんはいないって言ってた。あ、ミレネはミルドおばさんの娘」
やっぱり彼女は確保すべきだな、と未亡人だった事が判明したミルドの事を思い浮べる。

あの見た目でおばさんかぁ、と思い、でもトーラスから見たらそんなもんか、とも考えながら、優斗は次の質問をぶつける。

「あの人の味方って誰かいそう？　あ、結婚してない男以外で」
「んー。いないんじゃないかなぁ」
どうりであっさり売られた訳だ、と変な納得していると、目的地へと到着する。

「ここ？」
「あぁ。俺のししょーの家」
優斗が探していたのは、契約書を作るギフトの持ち主だ。蜂蜜と言うそれなりに高級な商品を扱っている村になら、もしかしたら居

るかもしれないと言う優斗の予想は的中した。

ちなみに、トーラスも同じギフトの持ち主らしい。世界の欠片は希少なので、無理やりどこかへ連れて行かれないよう、両親の指示で秘密にしている、と彼は語った。それでも街の外へ、大きな街へ行ってみたいと言う野望を抱えたトーラスは、その何時かの為にお金を貯め、こっそり同じギフトを持つ者の元で修業をしている、と言う事だ。

「おじゃまー」
「お前か。ん、余所者か、トーラス？」
「ししょーに契約の立会いをして欲しいんだってさー」
「契約内容に問題がないかも、見て頂きたいんです」
トーラスの師匠に睨まれ、優斗は愛想笑いを浮かべた。

その後、なんとか彼を説得した優斗は、ミルドを説得しに行っていたフレイと合流し、寄り道をしながら村長の家へと向かった。

突然の来訪に急ぎで準備された紅茶に口もつけずに待っていると、慌ただしく村長とシールズが現れた。

「お待たせして申し訳ありません。その、村の支払い能力を見極めていたそうですが、その、売って頂けるのでしょうか？
おぉ、そうだ。シールズが謝りたい申しておりまして。シールズ！」
「あくどい商人などと暴言を吐いてしまい、申し訳ありませんでした」
まったく気持ちのこもらない謝罪を受け、優斗は、やっぱりこいつらが無暗に儲けるのはなんとなくヤだなぁ、と再度実感する。

口で説明するのが面倒だ、と考えた優斗は、先ほど作ったばかりの、まだ正式でない契約書をテーブルへ落とす。

「これは。
拝見してもかまいませんか？」
「どうぞ。出来れば、私達が焦れる前にお願いします」
慌てて契約書を手に取る村長。シールズも胡散臭げな目で横から覗き込む。

優斗の言う、私達、とは隣に座るトーラスの師匠さんと、後ろ立つフレイとミルドだ。トーラスも着いてきたいと言ったのだが、師匠さんのひとことで、部屋前に待機させられている。

契約書の文頭に書かれた金額を見て真っ青になった村長が、同じくその金額を見て叫びそうになったシールズを止める。

「優斗殿。この金額をお支払する事は出来ません」
「えぇ、そうでしょうね。ですから、その契約書を準備させて頂きました」
読み進めろ、と目で訴えると、しぶしぶと言った体で村長が続きに目を向ける。

先に読み終わったのはシールズの方だった。村長の方は、中ほどで意味を理解できず、躓いている。

「おい、ミルド。さてはお前さん、村を売ったな？」
「え、え？」
「違いますよ。昨日、ここで何があったか、ご存じないのですか？」
交渉役から外され、今日は不意打ちでやって来たのだから、聞く暇などなかっただろう。シールズは忌々しげに優斗を睨みつけ、村

長に説明を求めた。

「昨日は誰か奴隷として引き取ると言う事で手を打って貰えないか提案し、優斗殿がミルドを連れて出て行った」

「ミルドを買うって言う言質は取ったのか？」

「いや、取ってないが……」

「くそっ。だから俺を呼べと言っただろうが！」

「ど、どういう事だ？」

「ヤツはミルドを奴隷にするなんて一言も言って無いんだろうが！仮にミルドを抱いてたとして、個人的に謝礼を払った、って言われちまえば村と関係なくなっちまう！」

おぉ、その手があったか、と優斗は感心してしまう。知っていたところで、フレイを連れて他の女を買う勇気など、優斗は持ち合わせていない。

「くそっ。その様子だと、他にも何人か味方に引き入れたんだろう」

「ご名答」

既にこの件はトーラスの家族にもお願いしてある。

あの一家が信用できるかは賭けだったが、ミルク飴を作るのに弟君の力が必要なので、どうしても巻き込む必要があった。

「村長、この契約はアイツが得するばっかだ」

「レシピが手に入るんですから、村として生産して貰っても構いませんよ？」

「粉の作り方に触れてないのはわざとなんだろう？」

最低限の情報共有はしていたらしい彼が、即座にそれに気づいた事に心の中で拍手を送っておく。

契約書の内容は、ハチミツきなこミルク飴のレシピのを伝授する代金の支払いについてだ。

まず、物品として蜂蜜。今年採れた物を半量と、去年からの在庫全て。今年の分は売りに出されているので、量はさほどでもないし、去年の物は結晶化しているので、合わせてもさほどの値段ではない。

物品以外では、この村で蜂蜜菓子店を構える許可。店に蜂蜜等の材料を生産者から直接、優先的に仕入れる権利。店舗となる建物を一定額で借り続ける権利。後ろ盾となるロード商会への使者を出す為に、アロエナまでの往復する為の人材と旅費。それ以外にも細々とした条件が書き連ねられている。

昨日、優斗が気づいたのは、別に代金を物品で支払わせる必要はないんじゃないか、と言う事だった。権利や優先権を買い取り、それを利用して商売をしたり、権利自体を転売すればいいのだ。後者は支払い能力のある相手にレシピを売る方が手っ取り早いのだが、今ここで蜂蜜を手に入れたいと思っている優斗は気づいていない。

「そういえば、きなこがないと作れませんよねぇ」
「はっ。白々しいな、おい」
「シールズさん程ではありませんよ」
もう少し音量下げて欲しいな、と思いながら優斗はまた1つ交渉のカードを場に出す。

「では、こうしましょう。実は粉の作り方、既に教えちゃった人がいるんです」
「……は？」
「ですから、その人から買ってください」
「おいおい。そんなモン、どこの誰が買ったっていうんだよ」

はったりだろ？　と言う表情のシールズに、1枚の契約書を向ける。

契約相手は粉ひき小屋の男。彼はトーラスの父親でもある。

「なるほどね。利権を分散して、色んなとこから金とろうって算段か」

「いえいえ、単に商売を始めようと思っただけですよ。今の仕事を途中で止める訳にきませんので、しばらくは誰かに委託する事になりますけど」

「ちくしょう。腹立つな」

吐き捨てるような言葉。頭の良い彼は、優斗の持ち出したこの契約が、村の為になると言う事も、十分理解していた。

「村長！」

「……っは」

呼びかけられて、放心していた村長がようやく我を取り戻す。

「シールズ、優斗殿に謝れ！　そしてなんとしてでもレシピを買え！」

「買ってもいいが、あっちも同じレシピで商売始めるつもりだぞ？しかも、アレを作るにはヤツらから粉を買わなきゃなんねぇ」

「そ、それは困る。

だが、行商人が来なければ、村は潰れてしまうんだぞ！」

「そうだよ。結局俺らは、買うしかないんだよ。なぁ、外道」

「私の事ですか？」

「あぁ、お前の事だよ。極悪商人」

やっぱりこいつ嫌いだ、と思いながら優斗は口元をゆがめる。

「暴言を吐かれてまで、契約する必要はないんですけど？」

「いーや、するね。お前、既に粉の秘密を教えたんだろう？　だったら、この契約はしなきゃ困るはずだ。
　それにあの荷物、お前のもんじゃないんだろう？」
　シールズの指摘に、優斗は驚いた。自己資産を多く見せるためにあえて説明しなかったのだが、どうしてわかったのだろう、と。

「常識的に考えて、あれ全部うちで蜂蜜かなんかにした方が儲かるんだよ。んで、街でこれ作って商売すればいい。
　なのにまったく売る気配がないって事は、そう言う事だ」
「半分正解です。実は半分は売ってもかまわないんですが、いりませんか？」
「お前の利益が増えるなんて真っ平御免だ。と、言いたいところだが、是非買わせて貰う」
「値段は、こんなもんでどうですか？」
　アロエナで買った、立てても珠が落ちないソロバンを弾き、価格を提示する。ちなみにこのソロバン、特注品と言う訳ではなく、古道具屋で見つけた動きが悪くなりすぎた一品だ。

　ソロバンを持った手をそのままに、売ってもよい品目を口で伝えると、シールズが驚いた。

「……安いな」
「適正価格だと思いますよ？　この場で契約書にサインしてくださるのでしたら、もう少し下げてもかまいません」
　実際、提示した価格で売っても優斗は十分な利益が見込める。何せ、ここまでに通行税という物を払っていないので、丸儲けなのだ。

「村長、俺は契約すべきだと思うぞ」
「な！　お前まで何を言い出すか！」
「状況的に足元見られちゃいるが、それを差し引けばそれなりに好

条件の契約だ」
「どこがだ！　未来永劫、あの粉を買い続けなければならないのだろう！？」
「粉の秘密を研究すればいいじゃないですか」
優斗の言葉に、村長がまた固まる。

優斗は粉の販売で得られる利益を計算には入れていない。蜂蜜を普通に買取り、それを加工して売っても十分に利益を得られるだろうと考えていたし、何よりも技術的な秘密を抱えていると、命を狙われる可能性があるとフレイに指摘されていたからだ。ロード商会に一枚噛んでもらってある程度の牽制は行う予定だが、トーラスの父親にリスクを背負わせる訳にはいかない。その為にも、自分が去ったら適当に恩を着せて公開してくれ、と既に頼んである。

「実物が目の前にあり、材料も判っているんです。作れなくはないでしょう？」
「うーむ。確かに。しかし。おぉ、そうだ」
村長が何かを思いついたらしく、手を打ってシールズの方を向く。

「別にレシピを買わんでも、店と材料を提供すれば行商人が戻ってくるではないか！」
「アホか。買わなきゃここで店開かないって脅されて仕舞いだ」
優斗が、大正解、と言わんばかりに笑顔で村長を見つめると、がっくりと肩を落としてしまう。

「村長、あんまり時間かけると、こいつら諦めて村を出ちまうぞ」
「それは困る！」
結局、その言葉が決め手となり、村長が決断した。

契約する事は決まったが、優斗にはまだ決めなければいけない事

があった。

「では、支払額の詳細を詰めましょうか」
「シールズ、任せるぞ」
「あぁ。で、優斗さんよ。何をいくらで買ってくれるんだい？」
挑戦的な言葉に、一瞬だけ無茶な値段を提示してやろうかと思ったが、ぐっと堪える。

「このくらいでどうでしょうか」
優斗は事前に用意して置いた買取価格一覧表を机の上に投げる。

蜂蜜に関しては、今年採れた良い物は適正価格で、固まって結晶化したものは適正価格よりも安い値段で買い取る旨を記した部分を見たシールズは、また胡散臭そうに優斗を見つめる。

「ほとんどこっちの言い値で買うってか。しかも、去年のも全部買い付けるたぁ、また豪快だな」
「残した方がよかったですか？」
「いらん。去年のはどうせ売りもんにならんからな。
いや、待て。加工にはアレを使っても平気なのか？」
「あのまま使えなくはないですが、味が落ちないようにするのは無理ですねぇ」
「本当か？　ちょっと待て。絶対何かある。損してたまるか」
「元々が不良在庫なんですから、損するも何もないでしょ」
ニヤリと笑う優斗に、シールズが歯ぎしりで答える。

「そういや、奴隷で買い付けるって話はどうなんだよ」
「貴方が志願するなら考えますけど？」
「糞が。確かそいつの娘がいい年だったぞ。それで手を打たないか？」

「ミルドさんは娘さん共々、私が雇う予定なんで村でこき使うのは止めてくださいね」
「ちっ。村長、なんか出せるもんねーか」
「おお、そうだな。確か未婚の娘がまだ居たような」
「奴隷以外でお願いします。連れ合いが煩いので」
「奴隷以外ですか……」
結局、優斗の雇った従業員に村の仕事を押し付けない、と言う契約を結ぶ代わりに結晶化した蜂蜜の買値を少しだけ上げる事になった。

利権関係の値段交渉は難航したが、それなりの高値で決着がつき、不足分は次回の収穫で支払われる事も決めた。

契約後、借りる店舗の場所や家賃などを決め、優斗不在時の管理責任者をミルドとし、彼女に何かあった場合は、全権利を一時ロード商会預かりとする事とした。ロード商会に許可を取るどころか所属もしていない優斗だが、揉め事があると言う事は儲かると言う事なので、きっと引き受けてくれるだろうと考えていた。条件付きで、だろうが。

村長たちが見守る中、ミルドとも契約を結んだ。内容は雇用契約書に近い物だが、娘と2人で生きていく為には稼ぐ手段が必要なので、裏切る可能性は低いだろう。優斗がいない間に発生するかもしれない、多少の使い込みや横領は目をつむる予定だ。

ロード商会へ優斗の手紙と商品見本を届ける役は、シールズに決まった。モメた場合に問題を解決する能力がある方がいいし、何よりハリスと知り合いだと言う事で彼が任命された。

もちろん優斗は反対するつもりだった。昨日なら確実に反対して

いたが、今日の交渉で、村の為ならちゃんとやるだろう、と思えたのでしぶしぶ了承した。自分で行く事が出来ない以上、他に知り合いもいない優斗に、選択肢はなかったに等しい。

トーラスの師匠によって全ての契約書が仲介され、優斗のこの村での商談は終了となった。

有利な交渉（後書き）

トーラスの師匠さん、重要な役割なのに出番これだけです。
交渉中は他の人が空気になってしまうのは、私の未熟ですね。

新たな道連れ

練習と言う名目で大量のハチミツきなこ飴を作らせ、自分用に確保した優斗は、予定よりも長い滞在を終えて出発の朝を迎えた。

ちなみにこちらの飴の作り方は優斗とフレイ、そしてミルドしか知らない。村との契約は、ハチミツきなこミルク餅の方を教えると言う内容だったので、契約違反ではない。

ミルドには頻りにお礼を言われたが、利用したと言う部分が大きかったので、少し困った。

配達が終わったらここに戻ってきて暮らすか、それとも権利をどこかの商会に売ってしまうかはまだ悩んでいるが、前者であれば長い付き合いになるので、好印象である方が都合はいいと考え、困りながらも無碍には出来なかった。

「ゆうとさん！」
「あん？　改まってどうした、トーラス」
「俺も連れてってください！」
朝食を取りに来た優斗は、その言葉を受けてカウンターへと視線を向ける。

にこりと笑う彼の母親の意図が判らなかった優斗は、とりあえず断る事にした。

「跡取り息子が家出てどーする」
「俺は元々継ぐ気ない。おとーとかいもーとが継ぐだろーし」
「粉ひきの方はどうするんだよ」
「あれはギフトないからムリ。つーか継ぐやつ決まってるし」

どうにかしてー、と助けを求めて視線を向けると、カウンターでは彼の両親がそろってにやにやと笑っていた。

「息子さん、こんなこと言ってますけど」

「うちは放任主義なんでね。本人が行きた言ってんなら行かせるつもりだよ」

トーラス母の発言に頭が痛くなる。

「あのな、トーラス。俺の行先、ユーシアなんだぞ？」

「知ってる」

ちらりとトーラス母を見るが、動じていない。最近戦争があった地域に息子が行くと言うのに、心配する気配すらない。

「報酬。くれるって言ったじゃん」

「言ったな」

「じんとーゼーだっけ？　あれは自分で出すから、連れてってくれるだけでいいからさー」

「もっと安全なとこにしとけ」

「えー。あそこの騎士団、かっけーじゃん」

話がかみ合わない、と優斗は頭を抱える。

「どうしました？」

「あ、フレイ。ヘルプヘルプ。トーラスが着いてくるって言い出した」

「いいですね」

笑顔と共に返ってきた予想外の言葉に、優斗は唖然とする。

どうやら優斗以外の説得は既に終わっていたようで、結局、周り全てが敵となった優斗は、断りきれず条件付きで承諾する事となった。

出発の時間が近づくと、宿にはミルドとその娘、ミレネが姿を現した。

蜂蜜菓子店の開業は、店の改装をしているので半月ほど後になる予定だ。現在は練習も兼ねて半年ほど日持ちするらしいきなこ飴の在庫生産を行っている。シールズがアロエナで見本を売り込み、ここまで買付、もしくは行商人が話を聞いてこちらの道に来るようになるまでの時間を考えれば、今は店を開けるよりもそちらの方が重要だ。

調理の腕はそれなりで、正式なレシピと失敗した幾つかの原因――冷やす必要がある事等――を教えると、あっさり優斗が作った物よりも美味しいミルク飴を作り上げた。更に上を目指して研究している様なので、優斗も楽しみにしている。余談だが、手伝いをしている娘のミレネと、冷やす係のトーラス弟の仲が急接近しているらしい。

「誠心誠意、働きます。どうかお気をつけて」

「私もがんばります！」

母娘の言葉にやはり困り顔の優斗は、よろしくお願いします、とだけ告げて荷馬車へ向かう。

勢いで店員として雇う事になってしまった娘のミレネは、１２歳くらいのソバカスがあるチャーミングな少女だった。トーラスとも仲が良いらしい彼女は、優斗たちと言うよりは彼の見送りに来たようだ。

「じゃな、ミレネ。こっち来たら会いに来いよ。で、またあそぼうぜ」

「うんうん。情けなく帰ってきても、ちゃーんと優しく迎え入れて

あげるからね」
「んだと！」
「はいはい。ほら、うちのオーナーさんが待ってるから、早く行きなって」
「くっ。絶対来いよ！　立派になって見返してやるからな！」
「ふっふ。楽しみにしてるよん」

じゃれあう子供たちを温かい目で見守った後、荷物の確認をして出発となった。

御者が出来ると言うトーラスに手綱を譲った優斗は、荷台の上で苦しんでいた。

「ぎぼぢばぶい」
「軟弱なご主人様ですねぇ」
結局、数時間と経たず御者台に戻った優斗は、風に当たりながらぐったりと背もたれに体を預けた。

「ユート兄ちゃん、かっこわりーぞ」
「トーラスくんもそう思いますか？」
「もちろんですよ、フレイ姉さん」
笑いあう2人を見て、優斗は自分の心配が杞憂に終わった事に安堵していた。

旅に同行する事になったトーラスに、フレイが奴隷である事を隠すのは、不可能ではないが難しい。それを知れば大なり小なり態度が変わると思っていたのだが、むしろ親しくなっている様に見える。

実のところ、優斗に対して自然に辛辣な言葉を吐いているところ

を見て、この人は只者ではないと感じ取り、取り入るならフレイだと判断しただけだ。奴隷が主人に暴言を吐くなどありえない事なので、何かあると勘違いしたと言うのもある。

「少し早いですけど、お昼にしましょうか？」

気遣わしげなフレイの言葉を、しかし優斗は素直にその言葉を受け取らなかった。

一見、地面に下りられるこの提案は優斗にとって救いである。だが、今から食事をして再度荷馬車に揺られたら、大変な結果になるのは目に見えている。ついでに後で「昼食が早かったのでお腹が空きました」と責められそうな気がする。

「トーラス、お前、腹減ったか？」

「ぜーんぜん」

「疲れは？」

「へーき。兄ちゃんみたいに軟弱じゃないし」

一言多いヤツめ、と思いながら、さすがは宿の息子だと感心もしていた。専ら裏方だったそうなので、客の荷馬車を移動させる他に、力仕事もしていたのだろう。

優斗がそんな風に感心していると、荷台からくすくすと笑う声が聞こえた。

もうどうにでもしてくれ、と自棄になった優斗は、御者台で膝を抱え、いじける事にした。

＊

火の中に枝を放り込むと、ぱちんと言う音がした。

フレイと不寝番を変わった優斗は、毛布にくるまってただ火を見つめ続けていた。

トーラスに御者を任せられる事が判った時からこうするつもりだったのだが、夜に1人、火に向かい続けるのは想像以上に辛い事だった。

数日間、この役目を、文句は言っていたが、きちんとやってくれていたフレイを思い、やはり頼りすぎているな、と反省する。

当のフレイは、遠慮するでもなく、むしろ「昼間足手まといだったんですから当然ですね」と言って、トーラスと共に荷馬車で眠っている。この荷馬車には2人分しか毛布がないので、同じ毛布に包まっているはずだ。

羨ましいヤツめ、と心の中でトーラスに嫉妬しながら、優斗は昼間聞かされた彼の夢を思い出していた。

民の味方、国を守る正義の騎士団と評判のユーシア騎士団のある街でギフトを生かした仕事を初め、ゆくゆくは従軍契約者として騎士団の役に立ちたい。昔は騎士団に入りたかったが、従騎士として仕えるよりも、ギフトを生かして貢献する方が役に立つはずだから。

ししょーの受け売りだけどね、と照れ臭そうに語る彼を見て、優斗は別の人物を思い出していた。

優斗の弟で、名前は賢治。父の営む輸入代行業を継ぎたいと、優斗を巻き込んで一生懸命勉強していた。続いて、「じゃあ、おばさ

んの店は私達で継ぐ？」なんてふざけて提案してくる幼馴染を、さびれた商店街の一角で輸入雑貨店を切り盛りしている母を思い出し、目じりに涙が貯まっている事の気づく。

父の買付エピソードを誇らしげに語る弟。無理やり誘われ、やる気のない優斗にも関税や為替について丁寧に教えてくれた父。自分の家なんだから手伝わなきゃダメ、と無理やり、でも一緒に店番をしてくれた幼馴染。どう見ても嫌々な俺を追い払う事なく、仕事を教えてくれた母。

元来理系の優斗が、商人なんて立場で生き延びていられるのは、間違いなく彼らのおかげだ。当時は迷惑で、うっとおしかったのだが、今は只々感謝するしかない。直接お礼を言う事は、出来ないが。

夜に1人だと、湿っぽくなってダメだな。そう思いながら、『むこう』の事を考えないよう、優斗はこちらに来てからの生活を思い出し始める。

フレイに出会ってからアロエナにつくまでは、昼間は慣れない御者をして、夜はその疲れで眠るだけだった。

アロエナ滞在中は、慣れない事ばかりで四苦八苦していたし、考えなければならない事も多かった。初めての商談は、父の様に上手くはいかなかったが、及第点だったのではないだろうか。

街を発った後も、やはり慣れない荷馬車生活で、考え事をする暇もなく疲れて眠る日々。昼食を摂る為に無防備に眠るフレイを起こす羽目になった時は、かなり緊張した。

村では買付に頭を悩まされた。最初は通過するだけのつもりだっ

たのだが、段々滞在予定時間が長くなり、結局、一週間も滞在してしまった。滞在後半にフレイが体を洗っている事を知らず、部屋に入ってしまうと言う事件もあった。それ以来、女の子と同じ部屋で眠っている事を改めて意識してしまい、色々な意味で困った。そういう意味では、トーラスが同行しているのは良い事と言える。おかげで、押し倒してしまう可能性が、ぐっと減った。

この世界に来て約半月。優斗にとって人生で最も波乱万丈な日々は、もう戻れない『むこう』の事を考える暇すら与えてくれなかったし、余裕が出来てからも、他に考える事が山ほどあった。

辛い事があった時は、何も考えられないくらい忙しいのが丁度いいって本当だったんだな。そう思い、でもそれは誰か死んだ時の話だっけ、と優斗の思考はどんどん逸れていった。

こういうシチュエーションならフレイが「眠れなくって」と言って毛布に潜り込んでくる展開が普通ではないか、というリビドー溢れる妄想まで思考が到達した優斗は、ありえても後が怖いと言う結論に達し、今は亡き過去のフレイ像に思いを馳せる。

「これからどうするかねぇ」

届け物が終わってから村に戻れば、生活基盤は問題ない。しかし、身分詐称している優斗としては、最低限クロース領内から出ておきたいと思っていた。どこに居ても身分詐称をしている事実は同じなのだから、村で生活するリスクはリコスの知り合いと会ってしまう事くらいなので、選択肢としてはありなのだが。

甘い物が恋しくてあんな交渉をしてしまったが、そういう意味ではあれは失敗だった。そんな風に思いながら、優斗は大いに反省し

た。

落ち込んだ思考がまた『むこう』の事を吐き出し始める。

帰れない。もう会えない。約束も破ってしまった。

そんな鬱々とした思考は、日が昇ってフレイが起き出すまで続いた。

新たな道連れ（後書き）

過去回想回です。
ようやく優斗の事が少しだけ語られました。
今まで語られなかったのは、間違いなく私の未熟と怠慢です。スイマセン。

ユーシアへ

交代で不寝番をし、進む事四日。優斗たちは立派な関所に到着した。

道中は至って平穏で、強いて言えば、フレイ姉ちゃんはもうちょいボリュームが欲しいよな、と言うトーラスの頭を張り倒して、フレイに怒られる、と言う一幕があったくらいだ。

「今さらなんだけど、俺、通れるの？」
「大丈夫です。ご主人様が捕まっても私はちゃんと逃げますから」
「おいおい、それは大丈夫じゃないだろ」
「女を逃がすために犠牲になるのは、男の仕事だろ、ユート兄ちゃん。てーか犯罪者だったの？」
「黙れエロガキ」

最近口が悪くなってきているな、と反省しながら優斗は荷馬車から降り、受付らしいカウンターへ向かう。そこに居たのは、鎧を着た小太りで中年の男兵士だった。

「すいません、ここを通りたいんですけど」
「あー、はいはい。どっちに行くの？」
「ユーシアです」
トーラスの説明によれば、この関の先はまだクロード領で、その先の道を北に行けばユーシア領、東に行けばカダル領へ抜けられるらしい。

「いくら貰うか調べるから、荷物を見るぞ」
「どうぞ」

カウンターから出て来た兵士の腰には、剣がぶらさがっている。

「ん？　親子連れ、にしちゃデカいガキだな」

「女は奴隷です。子供はちょっと色々ありまして」

事情は察して欲しい、と言う視線に、兵士は興味なさそうに品物を確認していく。

関所と市壁の積荷確認で大きく違うのは、検査をする人間と環境だ。市壁では確認する人間とは別に衛兵が存在するが、関所では検査専門の人間はおらず、兵士が検査を行う。武器を持つ相手の機嫌を損ねると言うのは恐ろしい事なので、関所を超える際は貴重品をいつも以上に厳重に隠すか、取られる事を覚悟で出さなければならない。無茶な要求をされにくくする為に少人数でなく商隊を組んで行くべきだし、もし少人数で行くならば女を連れて行かない方がいいと言われている。理由は推して知るべし、である。

そういう意味では、複雑な事情を抱えた少年と奴隷の女を連れた行商人が、人通りが減って廃れかけている関に来ると言うのは、愚の骨頂だ。いいがかりを付けられ、武器で脅されれば、抵抗も出来ず奴隷を含む積荷の大部分を持っていかれる可能性があるし、最悪、殺されて全てを奪われるだろう。比較的平和な公国領ではあまり見られないが、治安の悪い王国領ではよくある光景だ。

商売、と言う観点で見るならば、関所は価格変動をリアルタイムで知る事が出来ない、と言う点が利用できる。普段であれば誤差の範囲だが、大きな変動があった場合、情報よりも先に関を抜ければ、多大な利益を得られる場合もある。

「食糧と蜂蜜か。食糧はユーシアから優先的に通せって通達来てたな」

「物資が不足していると聞きまして。それで急ぎ、運んできたと言う訳です」
「んじゃ、奴隷税と人頭税だけ貰うわ。積荷の分はマケてやるから、今日は泊まってけ」
「へ？」
宿はそこ、と指差された先には、小さな建物が１つ。

「誰もこんから暇なんだよ。話し相手になれ」
「あー、了解です。でも、いいんですか？」
「もっと、ボン、キュ、ボンの女だったら一晩貸せって言ったんだけどな？」
がっはっは、と豪快に笑う兵士。後が怖いから聞こえていませんように、と願いながら、あの声の大きさじゃ無理だろうな、と優斗は肩を落とした。

ターキンと名乗った兵士は、優斗がこっそり積んで置いた酒を出すとニヤリと笑った。

「どこに隠してやがった？」
「隠してませんよ。ちょっと蜂蜜と一緒に木箱に入れてあっただけです」
なるほどな、と大声で笑うターキン。やはり賄賂的なモノは有効らしいと判断した優斗は、携行食の中でも塩の効いた、つまみに合いそうなものを取ってくるよう、フレイに指示を出す。

「１２～３か？　将来有望だな。うまそうに育ったら相手して欲しいな、おい」
「いや、ああ見えてもう１６らしいです」
「は？　１６だと」
あれで１２～１３歳に見えるって、発育早すぎだろ。そう思った

優斗だが、いつか見た外国の「そーいう」写真を思い出し、そんなもんなのかな、と納得もしてしまう。

腰が細いから相対的に大きく見えているだけ、と言う可能性もあるなぁ、と思っていると、フレイが頼んだものを手に戻ってきた。

「どうぞ」
「ん、これは？」
「お酒に合うかと思いまして」
1口食べて、うまい、と更に次を口に。酒が欲しくなるな、とグラスの中身を飲み干し、優斗が追加を注ぐと上機嫌にまたグラスの中身を傾ける。

「イケる口ですね」
「おう。ひさしぶりの美味い酒だからな。今晩は若いのに全部押し付けて、楽しむと決めた！」
1瓶を開け、かなり酔っぱらったターキンに今度は安酒を勧め、1時間ほどかけて酔い潰す事に成功した。

「あー、この人が酒に弱くてよかった」
ターキンを若い兵士に任せ、部屋に戻った優斗は一人ごちた。

「どういう意図でお酒を？」
そんな独り言に答えたのは、相部屋のフレイだ。トーラスの方は、気を効かせて別の部屋で眠っている。ちなみに、気を効かせたのはターキンだ。

フレイは言葉の端から、また無駄遣いですか、と言うオーラを発している。確かに優斗も飲んでいたので、単に飲みたかっただけと誤解されても仕方がない。

「もう一回来るかもしれないから、印象良くしとこーと思って」
「あぁ、そうでしたね。ミルドさんがお待ちですもんね」
悪意のある言葉を受け、多少とはいえお酒が入っている優斗は、座っているのが億劫でベッドに倒れ込みながら反論する。

「別に俺は人妻好きじゃなーい」
「……実は意外と酔ってますか？」
珍しくたじろぐフレイが面白くて、優斗は更に言葉を放り込む。

「フレイの方がかわいーし」
「どうせ私は子供っぽいですよ。ぼんきゅっぼーんじゃありませんし」
２１の男が１２～１３に見える女の子に可愛いと言うのはそう言う意味になるかー、と思いながら、次の言葉を投げる。

「それはそれでいーじゃない」
「はぁ。そうですね。何を言っても明日には覚えていなさそうですし、とっとと寝てください」
実はそんなに酔って無いんだけどなー、と思いながら優斗はフレイの言葉通り、眠りについた。

翌朝、二日酔いのターキンに見送られ、優斗たちは無事関を通過した。

酒のお礼だとフレイの奴隷税もマケてくれたターキンが建物の中へ引きずられて行く姿が見え、３人で顔見合わせて笑う。

ターキンの代わりに説明をしてくれた若い兵士によれば、ユーシア領方面には関がないらしい。ユーシアは領地が狭く、都市と言え

るのは領主のいる街だけなので、税はそこでのみ取り立てているそうだ。

都市へ入らずとも、領内の道を使う者には税が課せられるのが一般的なのだが、2国と接し、公国の端にある半島型の領地に来る者はほとんど都市に用事がある物なので、関を維持する費用が無駄だと判断され、設置されていない。

「そういえば、ここより北は帝国と接してるんだっけ？」
「地図によればそうなりますね」

帝国と言うのは、公国の北にある、帝が支配する国の事だ。
正式名称はオーランド帝国。諸事情で公国との戦争が一時休戦となっており、王国とは犬猿の仲だ。現在は陸続きに国境が接している部分がないので、専ら海戦をし、高い勝率を誇っている。

「村で買った地図を見てるとさぁ」
荷台で過ごす事にも慣れてきた優斗は、肩をくっつけて座るフレイにも見えるよう、地図を広げた。

「北へ逃げたの、失敗だったかなぁ、って思う」
「確かに、何時休戦が終わるかわからないから気を付けろ、と言っていましたね」
狭くて良く揺れる荷台に一緒に座っていると、色々とハプニングも多い。今回もその1つで、地図のある場所を指差そうとしてフレイが、揺れに対処しきれず優斗の方へ倒れ込んだ。

「……いたい」
「ドジだなぁ」
フレイの身体を支えようとして失敗し、下敷きになった腕に柔ら

かい感触を感じながら、優斗は荷馬車の外を見た。

遠い目をしている優斗をジト目で見上げているフレイは、倒れたままの姿勢で反転した。

「何してるの？」

「たまには労わって貰おうかと」

「その心は？」

「ご主人様、その返しは意味不明です」

日本語と同じなのに伝わらない言い回しがあるのは面白いな、と思いながら優斗は解説を口にする。

「本当はどうして欲しいの、って意味」

「膝枕してください」

許可も得ず、フレイは目を瞑った。

今日の不寝番はフレイの予定だ。だったらゆっくり寝かせてやろう。そう考えた優斗は、大人しく枕になる事を決めた。フレイが眠った後、髪やら何やらに触れたいと言う欲望を抑えるのに苦労した。

関を出てまた数日が経った日の午前。昨日「俺も不寝番をやる」と言ったトーラスは、荷馬車で眠っていた。真夜中頃に交代したと言うフレイは、御者台の隣に座っている。

「後で褒めてあげてくださいね。トーラスくん、ちゃんと火の番してましたから。半分寝てましたけど」

「微妙に褒めにくいだろうが、そう言われると」

「でも、褒めてあげるつもりなんですよね？」

「わかっててやった、と。相変わらず性格悪いな」

「ちょっとした悪戯心です。私、子供っぽいらしいので」
俺が言ったら怒る癖に、こういう時はさらっと言い訳にするんだよなぁ。

そんな風に思いながら、前方へと視線を戻す。遠目で判りづらいが、道の真ん中に人影らしきモノが見えた。

「フレイ」
「私にも見えます」
どうすべきか、と優斗は頭の中で様々な可能性を思い浮べる。

怪我や荷馬車の故障等で立ち往生している。これならば問題ない。

盗賊や傭兵など、荷物を狙っている連中。これだとすれば逃げ出すのが一番だ。

近くに村がある、と言う可能性もある。1つしか都市のないユーシア領にも、小さな村は幾つか存在するそうだ。

「どう思う？」
「避けるべきだと思います。でも、道、わかります？」
「迂回路は調べてない」
そんな事も想定していなかった自分に、優斗は呆れる。崖崩れや水没で道が使えない可能性だってあるのだから、迂闊だったとしか言いようがない。

「無理やり通過、は難しいかな？」
「山賊なら矢を射かけられます。切羽詰まった何かだったら、馬の前に飛び出してくるでしょうね」
「打つ手なし、か」

一先ず荷馬車を止め、人影を観察する。

幸い、まだこちらは発見されていない、はず。そう考えた優斗は、ここで人影が去るの待つ、と言う選択肢を頭の中に追加する。

「あれ、子供じゃないですか？」

「へ？」

「ほら、片方、妙に小さいですよ」

目を細めるが、ぼんやりと人影がある事しかわからない。

どうやらフレイの方が視力が良いらしい。そんな事実を発見した優斗は、観察をフレイに任せてこれからの方針について考え始める。

子連れで街道の真ん中に立つ理由として、優斗が考え付いたのは立ち往生、捨てられた、囮の3つだった。唯一、危険の高い囮に関して考えるうちに、それは無いのでは、と言う考えが思い浮かぶ。

現在、ユーシアに来る行商人はかなり少ないらしい。ならばこの道を行く人間も少ないはずで、何時通るかも判らない相手を待ち続けるのは非効率的だ。それに、子供を使って、と言う要素を足せば、ありえないんじゃないか、と言うレベルになるのではないか、と。

優斗の考え方は楽観的と言える。攫ってきた子供を囮に使う事は珍しくないし、人通りが少ないからこそ、狙い目でもあるのだ。

それに気づかない優斗は、手綱を引いて馬を進ませる。

「大丈夫なんですか？」

「大丈夫なんじゃない？」

楽観的な優斗に、何か言おうとしたフレイは、言葉が見つからず

黙り込んだ。

十数分進み、人影が小さな子供と背の高い男である事が判る。

子供は協会のシスターが被る様なベールをしており、顔だけが見えている。その顔には大きな傷も汚れも見えない。男の方はがっしりとした体格で、子供を守るように少し前に立っている。

盗賊ならば同情を引くように子供を前にし、何かあったら盾にするはずです、と言うフレイの呟きに優斗は安堵した。それが自分に言い聞かせる様に呟かれた言葉だとは知らずに。

「手、振ってるな」

「振ってますが、止まらない事をお勧めします」

「スピード、上げた方がいい？」

「個人的には上げてほしいですね。でも、子供が飛び出してくるかもしれません」

「あー、確かに。止めとくか」

何か切羽詰まった状況なら、それもあり得ると先ほど聞いたばかりだ。

軽く手を振って通り過ぎよう。そう決めた優斗は、若干スピードを上げて道の真ん中を通り抜けようと決める。

優斗が止まらない事に子供ががっくりと肩を落とすのが見え、罪悪感を感じた優斗は、手綱を握る手が緩んでしまい、僅かにスピードが落ちた。

「速度上げてください！」

「へ？」

手綱を握り直した時にはもう遅かった。

前に2人、右に1人。後ろは見えないが、先ほどの男がいるはずだ。雑草の中や木の後ろに隠れていたらしい男たちは、全員が鎧姿で腰に剣を下げている。まだ抜いてはいないが、抵抗すればどうなるか、と言う意味では十分に恐ろしい。

前方に現れた男が何かをしたのだろうか。馬が足を止める。立ち止まった馬は優斗が何をしても、その場を動く気配がない。

何かのギフトか、単なる技術か。その判断がつかない優斗は、フレイの耳に口を近づける。

「馬が止まった理由、わかる？」

こくりと頷くフレイに、優斗は質問を重ねる。

「どうすれば、元に戻る？」

「前に人がいなくなれば」

ぼそりと呟くフレイ。ならば、と優斗は財布と宝石が入った袋を手に取った。

「あいつらどかせるから、隙を見て逃げて。追っ手が来るだろうから、トーラス起こして武器準備して」

「何か妙案が？」

「適当にご機嫌取るだけ。こっちはなんとか飛び乗るから、気にせず逃げるように」

フレイの返事を待たず、荷馬車を飛び下りる。

右の男は放っておいても平気だろうと、前に居る2人に近づいていく。

正直、勝算はなかった。殴られれば命乞いしたくなりそうだし、脅されれば言われるままに全てを差し出してしまいそうだ。彼女だけは逃がす、なんて格好良い自己犠牲精神は多少あるが、それも叩けば砕ける程のモノだろう。

冷静に分析する自分に、優斗は苦笑した。目の前の男が眉をひそめるのも気にせず。

出来れば死にたくないな。そんな思いを抱きながら、優斗は一歩前へ踏み出した。

ユーシアへ（後書き）

小競り合いがあった土地、ユーシア領へ突入しました。
この後、優斗くんは全てを奪われて1人放り出され、二度と2人には会えなくなります。

もちろん嘘ですよ？

狡猾な罠

人生最大のピンチを切り抜けた優斗は、あからさまに安堵のため息を吐いた

「申し訳ない。荒っぽい方法だが、こうでもしないと止まってくれそうになかったからな」

「確かに通り過ぎようとしましたし。気にしないでください」

「ふむ。我々が嘘をついているとは考えないのかい？」

「嘘でも本当でもやる事は一緒ですから。妹さんの身なりと立ち振る舞いが良いので、そんなに疑って無いって言うのもあります」

ほう、と感心した金髪の男は、ユーシア騎士団の団長でルータスと名乗った。

「それで、申し訳ないのだが、お願い出来ないだろうか？」

「乗り心地は保障できませんが、それでもよければ」

彼の依頼は、ひさしぶりに見回りに参加した元団長にして彼の父親が腰をやってしまったので、荷馬車に乗せて街まで運んで欲しい、というものだった。

優斗があっさりと依頼を受けたのは、報酬の人頭税免除と特権階級である騎士にコネが出来ると思ったからだ。

「妹さんも荷馬車に乗りますか？」

「いいですか、兄様」

じぃ、とこちらを見ていた少女は、兄の許可を取ると、てくてくとこちらへ歩いてきた。

「私はアイントの娘でクシャーナと申します」

「これはご丁寧に。私は商人の優斗と申します」
優斗の丁寧な挨拶に、クシャーナは口元に手をあててくすりと笑う。

「私はまだ１０になったばかりの子供です。どうぞ、普通にお話下さい」
「んー。そっちも普通にしゃべってくれるなら、そうしようかな」
「では、お願いします」
丁寧な返答に、まぁ追々でいいか、と笑顔で「よろしく」と返しておく。

彼女とも仲よくしておいた方がいいよな、と思いながら荷馬車に戻る。彼らの父親を乗せる為にホロの後ろ側を開けていると、いつの間にかフレイが真後ろにいた。

「実は幼女趣味で、私は中途半端だったりしますか？」
「いや、俺、ロリコン違う」
「ロリコン？」

ロリータコンプレックス、略してロリコン。
海外の古典文学など読んだことのない優斗が、その語源を知っている訳もなく、故にこちらで通じない事に気づかず口にした言葉は、もちろんフレイには通じなかった。

「もしかして、私の事嫌いですか？」
「嫌いじゃないけど、もうちょい態度がマイルドになって欲しい」
「えーっと、結構真面目に聞くんですけど。ご主人様って、あれですよね？　被虐主義者」
被虐主義、と言う言葉が一瞬理解出来ず、優斗は首をひねる。

被る、虐め。そんな文字が浮かんだのは、たっぷり１０秒が経過してからだった。

「断じて違う！」

フレイが本気で驚いて居るように見え、優斗はかなりショックを受けた。俺はそういう目で見られていたのか、と。

回りの人に聞かれないよう小声で、でも語調は強く優斗は主張する。

「そんな事はないから、普通にしてくれ」

「実は私、罵る事に快感を覚え始めたりしてるんですが、どうしましょうか？」

「マジで止めて」

「こっちは冗談です」

「さっきのは本気だと！？」

不毛な言い争いをしていると、男２人によって運ばれてきた男性が、荷台に積みこまれる。騎士って力持ちだな、と思いながら優斗は水の入った皮袋を手に取った。

運んできた２人は従騎士で、彼らは騎士でなく平民扱いなのだが、優斗には関係ない。

「これ、喉が乾いたら飲んでください」

「おぉ、すまんな若いの。っつつつ。出来れば、揺れないように頼むぞ」

中々美形なおっさんだな、と思っていたら、心の中で美中年と言う単語が生まれた。ルータスが２０代半ばくらいに見えたので、４０過ぎくらいだろうか。なんとも若々しい。

「了解です。フレイ、悪いけどトーラス起こしといて」
「はい」
悲しいかな、馬の扱いも手綱さばきも、優斗よりトーラスの方が上手い。年季が違うと言えばその通りだが、少し悔しい。

誰に着いていけばいいのか確認しないと、と優斗が荷馬車を飛び下りると、それを待っていたかのように小さな人影が駆け寄ってくる。

「すいません」
「ん？　どうかした？」
「乗せて貰えますか？」
両手を差し出される。これはいわゆる、だっこ、と言うヤツを求める仕草だ。

まぁ、子供相手だし良いだろうと、小さな体を持ち上げ、御者台に座らせる。念のため、変なところに触らないように注意はしておく。

クシャーナがきちんと座った事を確認してから振り返ると、目の前に騎士らしい男が来ていた。

「商人殿。我々が前後を固めますので、それに着いて来て頂くと言う事で構いませんか？」
「わかりました」
「準備にもう少しかかりますので、少々お待ちください」
上り下りが多くて疲れた。そんな事を考えながら、まだそこにいたクシャーナに詰めて貰い、御者台へと上がる。

「トーラスは？」

「起きませんでした。無理やり起こすのでしたら、許可をお願いします」
「あー、寝かしとこう」
「承知しました」
フレイの機械的な返事に、人目がある事を再認識した優斗は、フレイへの言動に気を付けなければと気を引き締める。アホな会話を繰り広げている場合ではない。

そういえば、と優斗はハチミツきなこ飴の存在を思い出した。大量に詰め込んである袋の1つを手に取ると、中身を1つ摘まみ出し、口の中に放り込む。

うん、美味しいと満足しながら、袋の口を開けてクシャーナへと差し出す。

「よかったら食べて。甘くておいしいよ」
「ありがとうございます」
屈託なく笑うクシャーナは、袋から1つ取り出すと、その小さな口へきなこ飴を放り込む。

反応が楽しみだ、と思いながら見つめていると、表情が驚き、喜びと変化し、最終的には大きな瞳が見開かれ、驚愕となる。その反応に驚いた優斗は、少しだけ慌てて声をかける。

「どうしたの？」
「優斗様、これは何ですか？」
「ただのお菓子だけど」
説明になっていない、シンプルな答えを返した優斗を、クシャーナは大きく見開いたままの瞳で見つめ続ける。

居心地の悪さを感じ始め、その視線から逃げるように目をそらした優斗は、ついでだから他にも売り込んでおこう、とフレイに袋を渡し、騎士全員に1つずつ配ってくるよう、指示を出した。

「ここから見える範囲だけでいいから」

「わかりました」

無いとは思うが、どこかに連れ込まれたり、攫われたりしたら困るし、とフレイを目で追う。

彼らの騎士団長が良い人間であるのは、優斗にもわかる。騎士団の士気とモラルは高そうだ、と言うのも周りを見れば予想できた。しかし、それが末端まで行き届いているのかまでは判らないので、注意するに越した事はない。それでなくとも、先ほど大きな失敗を犯したばかりなのだから。

優斗の持つ中世の特権階級のイメージは、好き放題する偉そうな貴族だ。平民にすら横暴な人間が、奴隷をどう扱うのかは予想に難くない。

「貴重な物、なのですよね？」

「いや、クロース領のある村で販売予定の新作菓子。宣伝も兼ねてる」

「なるほど、そういう事でしたか」

納得と同時に安心したのか、固くなっていた表情が和らいだクシャーナは、改めて口の中の物に舌を這わせ、その甘味に幸せそうな表情を浮かべた。

その後、菓子を売っている村について根掘り葉掘り聞かれている間に出発となり、騎士達に飴を配っていたフレイが戻ってくる。彼女をひっぱり上げ、荷台に入った事を確認してから、移動を開始す

る。

整備された道をゆっくりと進む。馬も勝手に前方に追従してくれるので、正直優斗は暇だった。

「お暇でしたら、お話しませんか？」

「あー、そだね。ってか、荷台へ行かないの？　お父さん、苦しんでるけど」

「お父様は自業自得です。年を考えて頂かないと」

僅かに頬を膨らませる姿は微笑ましく、可愛らしい。口にした事で気になってしまったのか、少しだけ視線が荷台へ向くのもまた、微笑ましい。

そんな風に彼女を見つめていた優斗の目に、ベールの下から一筋垂れている黒い髪が映る。

「って、黒髪？」

「はい。優斗様と同じ、帝国の血筋です」

俺は帝国の血筋だったらしい。いや、それはない。そんな馬鹿らしい自問自答をしているうちに、彼女がベールを脱いだ。

黒い髪に空色の瞳。伸ばされた髪は腰まであり、髪先が御者台に触れた。服装はシンプルだが、リボン１つとっても緻密で繊細な意匠が施されており、良く見れば身なりが良いのが判る。ここまで馬に乗って来たのか、スカートでなく、乗馬用らしいパンツルックだ。

「どうされましたか、優斗様」

「あーいや。優斗様って、止めない？」

「では、どうお呼びすればよろしいですか？」

さんを付けて、と自分で言うのはどうなんだろう。そう思った優

斗は、呼び捨てや他の敬称はどうかと考えるが、いい物は思いつかなかった。

優斗は、一応、騎士は商人より階級が上だと聞いていたんだけどな、と思い、もしかして言うほど差はないのかな、とも考える。ここで考えても結論は出ないし、とりあえずこの場は深く考えず流れに任せよう。貴族相手と言う訳でもないし、口のきき方くらいで罰せられたりはしないだろう。

「あー。やっぱ好きにして。出来ればもうちょい砕けて欲しいな」
「努力します。言葉づかいはこうだと教育されていますので、その分、他の事で親しませて頂きますね」
そう言ってぴったりと体をくっつけてきたクシャーナは、嬉しそうに優斗を見上げる。

「優斗様も、私の事はクーナとお呼び下さいね」
「クーナちゃん、でいい？」
「クーナ、です」
クシャーナの押しの強さに、クーナね、と了承させられ、2人で笑いあう。

後ろから低音と高音の呪詛が聞こえた気がしたが、優斗は気づかなかった事にした。

街の正面門が開かれ、騎士団と共に街へと入ったのは、日も暮れた頃だった。
途中、昼食を摂る際に起きたトーラスは、憧れのユーシア騎士団の団員達に質問攻めをしていた。騎士の方もまっすぐな憧れの視線

に、呆れながらも楽しそうにそれに答えていた。

「でも、ほんとにいいの？」

「はい。是非我が家へ招かせて下さい」

招かれたのは優斗とその従者フレイ。奴隷でなく、従者としたのは風習か、彼らの心遣いか。

「トーラスはここでお別れだな」

「おう！　ユート兄ちゃんの荷馬車に乗れて、ほんとラッキーだったよ」

「トーラスくん、お元気で」

「フレイ姉ちゃんもな」

あっさりとした別れだが、同じ街の中にいるのだから、また顔を合わせる事もあるだろう。

トーラスはルータスとクシャーナの父であるアイントに気に入られ、従騎士見習い兼従軍契約者見習いとして働く事になった。入団の口利きをした元騎士団長は、同時に入ってからは優遇しないと宣言もしていた。もしかすると、娘の婿候補にでもするのかもしれない。

今日から寮に入ると言うトーラスには、餞別としてきなこ飴をプレゼントした。優斗が、自分の村の宣伝をして来い、と言って渡したのは、話すきっかけになれば良いと言う理由もあるが、単なる照れ隠しだ。人頭税を払わずに済んだのでお礼にと渡されたりもしたが、それも餞別だと言って押し付けた。

「すまないが、先に屋敷に行っていてくれ」

「畏まりました、お兄様」

ルータスは父・アイントを腕のいい医者に見せに行くと言って、

数名の部下と共にどこかへ行ってしまった。我が家専属になってくれれば楽を出来るものを、と愚痴っている姿は、優斗の想像する特権階級の人間とはかけ離れたものだった。

ここの騎士は評判通り、良い人間が多いようだ。そんな風に考えながら、クシャーナの案内で彼らの屋敷へと向かう。途中で、娘、ないし妹を今日会ったばかりの男に任せると言うのはどうなんだ、と思ったが、道行く人に手を振っているクシャーナを見て、なるほどと納得した。ここで変な素振りを見せたら、笑顔で手を振りかえしていた連中に袋叩きにされるに違いない。

「ここです」
「ここって。えーっと、ここなの？」
「はい」
案内されたのは、この街で最も大きなお屋敷。住んでいるのはもちろん、街の最高権力者。

唖然とする優斗の袖を引き、クシャーナが馬車から降ろしてほしいと訴える。先に飛び降り、同じく飛び下りたクシャーナを慌てて受け止めると、同時に降ってきた甘い匂いに少し後ろ髪を引かれながら、そっと地面に降ろす。

「改めて自己紹介させて頂きます。
ユーシア領主、アイント・ユーシアの娘で、クシャーナ・ユーシアと申します。
以後も変わらぬお付き合いを宜しくお願いします」

ズボンなので無いスカートの裾を掴む振りをして、恭しく頭を下げる。手を放し、顔を上げたクシャーナは悪戯っぽい笑みを浮かべていた。幻覚のドレスが見えそうな程、完璧なそれを見て、優斗は、

やられた、と思いながら額を押さえる。

「ちなみに、敬語様付にしたらどうなるの？」

「領主は一応ですが、貴族扱いとなっています。不敬罪か反逆罪、どちらがお好きですか？」

「ちなみに、どっちが軽い？」

「どちらも最高打ち首が許可されています」

盗賊よりましだけど、十分厄介な相手に引っかかったなぁ。

優斗はそんな感想を抱きながら「クーナ」と呼びかけると、少女は屈託のない、花の様な笑みを浮かべた。

狡猾な罠（後書き）

ようやく目的地に到着、そして新キャラの登場です。
あんな引きをしておいて、何事もなく進めてしまいました。
優斗が痛い目に合うのはもう少し先になりそうです。

思い出の欠片

準備が出来ていない、何よりも家の人間がほとんど不在、と言う事で夕食はクシャーナと2人で摂る事になった。

「礼儀作法とか判らないんだけど」

「2人だけなんですから、大丈夫ですよ」

貴族の会食と言うと、無駄に大きなテーブルの端と端で、というイメージを持っていた優斗は、こじんまりとした部屋でちょっとだけ豪華な食事を出され、少し戸惑った。

ちなみにフレイの分は直接部屋に届けられた。この屋敷で下働きをしている者と同じだと言うメニューは、行商の旅をしている優斗たちから見れば、十分に良い食事だった。

「おいしい」

「お口に合った様で何よりです」

のんびりとした食事は、しかし1時間とかからず終了した。

優斗とクシャーナの前には、お茶が準備されている。領主の娘、手ずから淹れた紅茶が。

「なんか、こう。領主の娘ってもっと何もしないものかと思ってた」

「普通はそうだと思いますよ。嗜む程度なら別ですが、率先してこんな事をするのは珍しいと思います」

変わり者なのかー、と言う優斗の思考は、口に出さずとも伝わってしまう。

「仕方ないです。我がユーシア家は貧乏領主ですので」

「あー、それで商人は大歓迎なんだ？」
「それもありますけど」
口ごもるクシャーナ。もしかして、と浮かんだ自意識過剰な思考を即廃棄しながら、続きを促す。
「同じモノを持つ相手に、初めて会ったので嬉しくって」
「同じモノ？」
「髪と肌の色です」
なるほど、と納得しながら、優斗は今まで見てきた公国民のそれを思い出していた。
髪はほとんどが金か茶、もしくはそのバリエーション。肌は、優斗の感覚で言うところの白人の色。
目の前の少女は、少しだけ色のついた肌に、カラスの濡れ羽色の髪。優斗は黄色人種である日本人特有の肌色と黒髪を持っている。
「お兄様は典型的な帝国寄りで、黒い髪と黒い肌をお持ちです。お兄様――失礼しました、ルータスお兄様は金髪碧眼と言う典型的な公国民の容姿をお持ちです。他の兄弟も、やはりどちらか寄りで、私のような中途半端な者はおりません」
言ってから失言に気づいたのか、あっ、と開いた口を手で隠す。
「優斗様が半端者だと言った訳ではありません。その、」
「気にしてない。と言うか、俺は自分の肌の色も髪の色も気に入ってる。それに」
少し躊躇したが、優斗は思い切ってクシャーナの髪に手を入れる。
さらさらで柔らかい感触に、この上ない心地よさを感じながら、

優斗は一房掴み取る。

「クーナの髪も綺麗だと思う。クーナは自分の髪、嫌い？」

ぶんぶんと首を振るクシャーナに、優斗は掴んでいた髪を手放し、苦笑する。

「肌の色だって、同じ。クーナは可愛いんだから、ちょっとくらい皆と違っても、気にする事ないって。

むしろ、自分だけの魅力なんだから、自慢するぐらいでいいと思うよ。俺は」

帝国民、公国民と言う括りの中で、どちらにも属さない容姿を持つ少女は、これまでずっと悩んでいた。褒めてくれる人間はそれなりに居たが、そのほとんどが身内か、おべっかを使う商人や貴族だった。身内の贔屓目を除けば、彼女の事を本気で褒めてくれた人間は、数少ない。

「あの、優斗様」

「ん？」

頬が上気するのを自覚しながら、クシャーナは優斗を見つめる。

陳腐な励ましの言葉でも、少しくらい気休めになったかな、と考えている優斗は、クシャーナの少し朱が差した頬を見て、この部屋少し暑いかな、などと考えていた。

クシャーナがぎゅっと手を握り込み、目の前の彼の横へ移動しようと腰を浮かせた瞬間、勢いよく扉が開いた。

「クーナ、商人が来ていると言うのは本当か！」

「……本当ですわ、ルエインお兄様」

口をとがらせて不満げな妹に気づくことなく、ルエインお兄様と呼ばれた男は質問を続ける。

「どこに居る？」

「ここですわ」

「おぉ、君が食糧を運んで来てくれた商人か。助かるよ。で、いくらで譲ってくれる？」

唐突に始まった商談に、優斗はばつの悪そうな表情を浮かべた。積荷は全て、ロード商会に持っていかなければならないのだから、当然だ。

「申し訳ありません。私は運搬を依頼されただけでして。蜂蜜とそれを使った甘味でしたらお譲り出来るのですが」

「軍用の備蓄食料が欲しいのだ。甘ったるい物に興味はない」

「そうですか。どうしましょうか」

売り込みに失敗した優斗は、提案だけはして置こうと、口を開く。

「では、私がロード商会に引き渡しに行く所に同行して頂くか、商会の担当をこちらへ呼び出して頂く、と言うのはどうでしょうか？」

「で、あそこから買え、と。高く売りつけられるのが目に見えてるな。

少しでも構わない。なんとか譲ってくれないか？」

届ける荷物の量は決まっているので、中抜きをしたら契約違反だ。それは優斗も困ってしまう。

契約内容を思い出していた優斗は、ふと、妙案を思いつく。

「ルエイン様、提案があるのですが」

「聞こう」

「聞きません」
突然割り込んできたのは、クシャーナの拗ねた様な声だった。
ついつい話を進めてしまったが、優斗がここに居る理由は、クシャーナの話し相手になる為だ。無視され、放置された彼女が拗ねるのも、無理はない。
「仕事の話だ。クシャーナ」
「私が交渉をしていた場にお兄様が割り込んで来たのです」
「なるほど。それは悪かったな」
にやりと笑うルエインは、クシャーナの座るソファーにどかりと腰かける。
黒い髪に黒い肌と言う、典型的な帝国民の容姿を持つルエイン。
優斗はそんな彼の視線を真っ向から受けながら、黒人はこっちでも迫力があるな、と見当違いの事を考えていた。
「何故、お座りに？」
「妹の商談を見守ろうと思ってな。商人、構わないだろう？」
「クシャーナ様が了承されるのであれば、私が反対する理由はありません」
兄弟間で何か確執でもあるのだろうか。そう考えた優斗は、一先ず口調と呼び名を改めておく事にする。
「では、優斗様。申し訳ありませんが先ほどの続きをお願いします」
「はい、かしこまりました」
続きって言っても、実際は商談なんてしてないし、どうしようかな。
優斗のそんな思考を読み取ったのか、クシャーナは頬りにウィン

クをして、こちらに何かを訴えかけている。

「では、僭越ながら説明させて頂きます。
私はロード商会と食糧を輸送する契約をしています。ですので、商品をお売りする事は出来ません。
ですが、契約書にはこう書かれています。商品にかかる税は現物で支払う事」

ルエインはそれだけで何かを察したようだが、クシャーナはよく判っていない。

（きっとクーナの言葉が嘘だと判っててやってるんだろうな）

自分の説明が追い打ちだった事に気づかない優斗は、今、自分がすべき事は、商談をまとめる事だ、と思考を切り替える。

クシャーナに恥をかかせず、ルエインに認められる、と言うレベルのフォローと説明が出来れば良いのだが、如何せん優斗はそんな才能を持ち合わせていない。ならばせめて、クシャーナの顔を潰さないくらいの商談をすべきだ。優斗はそう考え、気を引き締める。

「ですので、税として支払ったと言う形でお渡しし、その証明を頂ければ問題なく契約を果たせます」
「今んとこ食糧の持ち込みには税を課していないんだが、その辺りはどう思う？」
意地悪な質問だな、と思いながら、ハリスが税に関してあっさり譲った理由が判明して、優斗はこっそりショックを受けた。同時に、やはり彼はやり手の商人だったんだなと、納得もする。

そんな事よりも、と頭を全力で働かせ、なんとか思いついたのは

とても陳腐な策だった。

「毒入りの食糧が運び込まれたので、一時検査を厳重にし、その費用として税率をあげた、と言うのはどうでしょうか？」

「毒、ってのはマズいが、他の適当な理由をでっち上げればいいな。よし、それで行こう」

結局ルエインと商談してしまったな、とクシャーナの顔色を伺うと、何故か申し訳なさそうな顔をしていた。

「では、クシャーナ様。私は明日、この街に来ると言う事でお願いします」

「え？」

「税率と代金。いえ、クシャーナ様から頂ける褒美につきましては、後日、お話をさせて頂くと言う事でよろしいでしょうか？」

「その、それで構いません」

「では、本日はこれにて失礼させて頂きます」

もっとフォローしてやりたいが、この辺りが引き際だろう。そう判断した優斗は、深々と礼をした後、へたくそなウィンクを残して部屋へと戻った。

部屋に戻り、ベッドに倒れ込む。

ひさしぶりの1人部屋に、少しだけ感動しながら、ごろごろとだらける。

この世界に来て初めて見る黒髪。活発そうな丸い瞳を礼儀と言う猫で隠している、と言う印象の彼女は、トーラスとは違った意味で『むこう』の知り合いを髣髴させた。

「未練だねぇ」
思い出していたのは、元恋人にして幼馴染。名前は、思い出すと泣きそうなので、アイツとだけ呼ぶことにする。

瞳が青い事を除けば、クシャーナは昔のアイツに似ている。活発で、悪戯好き。少し甘えたがりだったが、人前に出るとお行儀よく、猫かぶりの達人だと言って怒らせた事もある。

アイツと過ごした時間は長いが、その中でもほぼ1日中一緒にいたのが、今のクシャーナと同じ、１０歳の頃だ。

父の仕事が急に忙しくなり、それを手伝うために母はまだ小さい弟と共に海外へと渡った。その時、友達と別れるのが嫌だと我儘を言った優斗は、アイツの家に預かられる事になった、と言う訳だ。

寝食を共にし、風呂にも一緒に入った記憶がある。アイツと一緒に入るのは照れ臭かったし、抵抗を感じはしたが、アイツが気にしていないようなので何か負けた気がして、意地もあっておばさんの言うとおり、何度か一緒に入った。

思考に没頭していて気付かなかったが、いつの間にか部屋の中に人の気配があった。
入口の扉が開いた気配はなかった。ならば誰だ、と警戒を強めながら、体を起こして身構える。

「ご主人様、まだ起きてますか？」
「あー、フレイか」
「クシャーナ様だと思いましたか？」
「それはない」

いつも通りの軽口に、沈んでいた意識が浮上してくるのが判る。

意識が浮上しても心は沈んだままの優斗を、何か落ち込んでいると感じたフレイは、これはチャンスとばかりに静かに近づき、ベッドの端へ腰かける。

「ご主人様、ご一緒してもよろしいですか？」

「今日はまた直球だな」

「特殊な性癖をお持ちでないのなら、こちらの方が効果的かと思いまして」

（本気でマゾだと思っていたのか、それとも放っておいた事を根に持っているのか）

どちらにしても、いつも通り、優斗はフレイを抱く気はなかった。アイツを思い出した後ならば、なおさらだ。

「ところでご主人様。本当に普通に接した方が良いのですか？」

「何度もそう言ったと思うけど。なんでそんなに疑う？」

「最初の命令で、無礼を働いても問題ないとおっしゃいました。基本的に主人の、してもいい、はこなすべき内容だと教わりましたので」

「マジで？」

「マジです」

そういえばそれ以降は極力命令しないようにしてたな、と思い出し、命令だと前置きして命令した事が数えるほどしか無い事に気づく。

もしかしなくても自業自得？　むしろフレイは気を効かせてくれていた？

「てっきり、そんな事も知らないんですか、このグズ、と罵られたいのかと思ってました」
「だからそんな趣味はないって」
確かに子供でも知っているような常識的な事ばかり聞いたけどさ、と優斗はため息を吐いた。

やっぱり自分の予想は正しいのかもしれない。そう思い始めた優斗は、ならばきっちり命令で否定して置こうと決める。

「じゃあ、命令。
無暗に暴言を吐かない事」
「了解しました。無暗でない程度に吐く事にします」
「おい」
どこまで本気なんだか、と思いながら、優斗は脱力する。

ベッドにどさりと倒れ込むと、フレイもそれに続いてベッドに上り、優斗の方へと這い寄る。

「では、失礼して」
「失礼すんな」
「満足して頂けるよう、誠心誠意ご奉仕させて頂きますから」
「せんでよろしい」
「何でも言う通りに致しますよ？」
「……はぁ」
優斗が諦めたようにため息を吐き、反論を止めたのを承諾と取ったフレイは、自分の胸まで誘導しようと、彼の手を取る。

優斗は掴みに来た手を逆に掴み返し、自分の頬へ押し当てた。

「えっと、その。どうしました？」
「んー。ちょっとフレイの体温を確かめたくって」
手を離した優斗は、大の字に寝転ぶ。

この世界の奴隷と言うモノと、フレイの性格をある程度理解した優斗は、当初考えていたフレイに手を出さない理由が、既に意味のないモノだと判っていた。

この世界の奴隷は逃げ出せない。ならば、無理やり何かをしても問題ない。

フレイは自分に、方向性は不明だが、ある程度の好意を持っている。だから抱いても無理やりにはならない。

この世界のナビゲーター兼アドバイザーがいなくなるのが困るから、と言う理由も、奴隷だからと言う理由で無理やりするのが趣味じゃないから、と言う理由も、既に意味をなさない理屈だ。

「フレイは、好きな人とかいなかったの？」
「私はご主人様一筋です、と言う方が喜ばれる気がしますが、実はいました」
「その人とはどーなったの？」
「あっさり振られました。当時の私は、今以上に子供な外見でしたので」
そっかー、と答えながら目を瞑る。

残っている理由はもう少ない。他の女を抱くのに抵抗がある、と言うのと、この世界の人間は、自分と同じ人間なのか、と言う疑問。
後者は体を隅々まで確認したとしても判らない可能性のあるので、理由にすらならない気もするが、それでも一応、理由は理由。

この世界の人間はギフトと言う特殊な力を持っている。これは、人の別進化と言うよりも、別の生き物だと考える方が、しっくりくる。

そういえば、何度かちらりと見たフレイの身体は普通の人間っぽかったなー、と思い出す。全て事故で、決して故意であった事はない。

何故か円滑に、どうでもいい事に思考が流れた。体のつくり、ないし種族が違うのであれば、交配によって後世に遺伝子を残す行為は不可能ではないだろうか。

擬似行為、と言う単語が浮かんだ瞬間、それを見計らったかのようにフレイが声をかける。

「ご主人様、私の事を考えていますね？」

「何故わかる」

目を開けると、フレイに覆いかぶさられていた。顔が、文字通り目と鼻の先にあり、まつ毛の数まで数えられそうだ。

優斗は顔の横に置かれた腕に目が行き、そこを伝って真っ白な鎖骨に到達する。重力に逆らわず、胸元に大量の空間を作ったネグリジェは、白い膨らみを隠す事なく、危うい角度でその先端を隠すのみ。

「すこうしだけ、いやらしい目をしていました」

ゆっくりと、その身体が降ろされる。

全身にフレイの体温を感じながら、優斗は再び目を瞑った。フレイの方は、今日こそは引き離されまいと首に手を回してぎゅっと抱

き着き、僅かに腰を動かす。

ふと、同じように抱き着いてきたアイツの事が頭に浮かぶ。

「あー、フレイ」

「今、他の女性の事を考えましたね？」

「だから何故わかる」

「女の勘です」

優斗は思った。女の勘は恐ろしい。きっとあれは、超能力の類だ。

やはり同じように女の勘だ、と似たような事を言ったアイツの事を思い出す。今日は本当にアイツの事ばかり思い出すな、と思いながら、自分がフレイを抱かない理由が、アイツに悪いからでなく、アイツを思い出すからなのかもしれない、と少しだけ思った。

「で、フレイさんや」

「なんですか？」

「この状態で他の女の事を考えてる男に、何か言う事ない？」

「代わりでもいいので、抱いてくれませんか？」

あっさり言うなぁ、と思いながら、いつも通りフレイを引き離し、ベッドの端へ転がす。

「もう、ご主人様のイケズ」

拗ねるフレイ。優斗はふわふわと不安定な精神をなんとか繋ぎとめながら、天井を見つめ続ける。

「なんでシテくれないのか、教えてくれませんか？」

ぼぅっとしていた優斗は、フレイが自分に質問していることに気づき、何か答えなければ、とそれがどういう意味を持つかも考えず、最初に浮かんだ言葉をそのまま口にした。

「ほら、性病とか怖いし」
「張り倒してもいいですか？」

そう言いつつもさらにいじけるフレイに、さすがに悪い事をしたな、と思った優斗は、誤魔化すように言葉を継ぎ足す。

「何でも言う事聞くって言ったのに、勝手に色々やるフレイが悪い」
「じゃあ、何か指示してください」
頬を膨らますフレイに苦笑しながら、優斗は何時もとは違う言葉を口にした。

「独り寝は寂しいから、添い寝して」
「やりました。私はついにここまで来ました」
何やら感動しているフレイに、優斗はしれっと追加の指示を出す。

「添い寝だけで、襲わないように」
「えー」
「後、今からある事は明日の朝には忘れる事」
そう言って優斗は、フレイを抱き寄せた。

目じりにまで上ってきた涙をフレイに見られないよう、彼女の胸元に顔を押し付ける。そして、静かに泣いた。

ひたすら泣き続ける優斗に、フレイは困った顔をしながらも、優しく頭を抱え、彼が眠るまでその背中を撫で続けた。

思い出の欠片（後書き）

フレイさんががんばるお話でした。
むしろ前半のクーナの方が活躍している気がしますが、それはそれで。
後半も別の存在に食われかけていた気もしますが、それもそれ。

ご褒美と逢引

二度寝の誘惑に打ち勝った優斗は、最高の抱き心地を誇る抱き枕を、未練ごと消し飛ばす勢いでベッドから転がり落とした。

「い、ったーい」

「あー、ごめん。つい」

「ついじゃありません！」

布団ごと放り投げたので大丈夫だろうとは思ったが、念のため優斗は抱き枕が壊れていないか確認する為、ベッドから降りる。

「失礼な事を思われている気がします」

「気のせい気のせい」

どうやら大丈夫そうだ、と判断した優斗は、抱き枕ことフレイの手を取り、立ち上がらせる。

ふわり、と寝癖の付いた髪が舞い、同時にネグリジェも空気を孕んで膨らむが、その隙間から見えたのがドロワーズだったので優斗はこっそりとがっかりした。

「その服、どうしたの？」

「そこに入っていたので失敬しました」

指さした先にはクローゼットが1つ。きっと気を効かせてくれたんだろうな、と思いながら顔も知らない使用人の心遣いに感謝した。

そしてその心遣いをドロワーズを履くと言う暴挙で無にした目の前の女性に、心の中で、残念な娘、と言う称号を与えておく。

「男を誘いに来た割りに、色気のない恰好だねぇ」

優斗の言葉に、フレイは膝をついて崩れ落ちた。

優斗がどうしたのかと顔を覗き込むと、きっ、と睨まれた。

「何時か絶対に、私を抱きたいと言わせて見せますからね！」

「また唐突な決意表明だなぁ」

「これならいけると思ったのに！　相談に乗ってくれたお姉さんのお墨付きだったんですよ！」

「んなもん相談すな」

胸元が見えるくらいネグリジェをひっぱって主張するフレイに、だったら何故中にズボンを履いているのか、と言う疑問を浮かべながら優斗は目をそらす。

この世界では、ドロワーズは下着だ。もちろん、普段フレイが着ているスリップも。しかし、優斗の感覚としては、ドロワーズはハーフパンツと見分けがつかないし、スリップはキャミソールとの区別が出来ていない。この感覚の違いは、2人の認識に大きな溝を生み出している。

フレイからすれば、それ以外脱ぐものがない、上も下も1枚きりと言うギリギリかつかなり恥ずかしい恰好で迫っているのに、優斗はそれに対してあまり反応してくれないので、子ども扱いされていると思っている。

一方優斗は、ドロワーズ＝この世界の生地で作られたハーフパンツと認識しており、当然その下には下着を付けている物だと思っている。スリップに関しては、パジャマ替わりのキャミソールだと勘違いしており、フレイは眠るときは下着、優斗の感覚で言えばブラに相当する物は付けずに寝る人なんだな、と言う認識しかない。

ずっと一緒にいても、洗濯はフレイの仕事なので、優斗がわざわざ彼女の下着を漁るような機会はないし、中に何を着ているかなんて言うのも、着替えをまじまじと観察している訳ではないので、知る由もない。

下着姿で迫っているつもりのフレイに対して、優斗はわざわざ部屋着のズボンに着替えてから迫ってくる妙な子だと思っていた、と言う訳だ。恰好に色気がないと指摘する優斗と、自分に色気がないと言われていると思い込んでいるフレイの思惑が重なる事は、当然ない。

「何がダメなのか、教えてくださいよ」
「何って、全部？」
あまりに酷い暴言に、膝をついていたフレイが、更に床に両手を付いて落ち込み始める。服装全般にダメ出しをしたつもりの優斗に対し、フレイは女としての魅力、全てを否定されたと取ったのだから、これくらいの落ち込み方で済んでいるのは、軽い方だ。

その姿に、さすがに言い過ぎたかな、と思った優斗は、少しだけフォローしておく事にする。

「昨日はまぁ、何時もよりましだったんじゃない？」
「やっぱりお姉さんの見立ては間違っていなかったんですね！」
そろそろそのお姉さんと言う人がどんな人物なのか気になり始めた優斗は、一先ず身なりを整えようと荷物を漁り始める。

寝癖を直し、汲み置きされていた水で顔を洗うと、フレイに着替える様に指示し、彼女に割り振られた部屋へと追いやった。ちなみに従者の部屋との間には、直通の扉がある。どうやら昨晩は、これを使ってこちらに来たらしい。

「よろしいでしょうか」
「あ、はい。どうぞ」
ノックに続いてかけられた言葉に、そう返答すると扉が開かれた。
入って来たのは女性だった。この屋敷の侍女なのだろう、簡素なワンピースにエプロンをつけている。

「昨夜はお楽しみでしたか？」
「犯人はお前か」
フレイにアドバイスしたと思われる人物は、お姉さんと言う呼称通り、２０代半ば程の女性だった。

「お嬢様から気さくな方だと聞いていましたけど、想像以上ですね」
「なんじゃそりゃ。じゃない。何かご用でしょうか？」
「適当で構いませんよ？　私も公式の場以外は適当ですし」
「それでいいのか」
「仕事さえちゃんとすれば、意外と平気だったりします」
お客様を丁重に、かつ敬意を払って迎えるのは仕事のうちじゃないのか。そう思ってから、貴族の侍従と商人はどちらが偉いのだろうと言う疑問に辿り着く。

主人と同じ貴族を迎えるならばまだしも、こちらは一介の商人でしかない。ならばそんなものなのだろうと納得した優斗は、気にしない、と言う結論に達した。

「ちなみに、さっきまで同じベッドに居た」
「おー、ではお楽しみだったんですね？」
「全力で拒否されたので、本当に添い寝だけでした」
「あら、意気地のない子」

不当にフレイを貶めた優斗は、朝食は昨日と同じ場所に準備したと伝えられ、最低限の持ち物を引き寄せた。フレイの食事に関しては任せてもいいそうなので、そのまま部屋を出る。

ゆっくりと歩き、目的地のドアを叩くと、中からくぐもった返事が聞こえ、扉を開く。

「おはよう、クーナ」
「おはようございます、優斗様」
これじゃどっちが貴族か分かったモノじゃないな。優斗のそんな心境を無視して、クシャーナは自分の隣に腰かけるよう、手招きした。

「ソファーどうしたの？」
「ちょっと汚してしまいまして」
申し訳なさそうにするクシャーナ。

昨日、この部屋に来た際にはテーブル2つに椅子2脚、テーブルを挟んで対面になったソファーがあった。それがある意図によって、1つだけ持ち出された、と言う訳だ。

「朝食はソファーで？」
「小さなパンですし、大丈夫ですよね？」
既に並べられた食事を、わざわざ椅子のあるテーブルへ移動させるのも面倒だと思った優斗は「そうだね」と返してクシャーナの隣に腰かける。

優斗が腰かけると同時に、クシャーナは手ずから淹れた紅茶を彼の前に移動させながら、さりげなく体を寄せる。

「ありがと。じゃあ、食べようか」
「はい」
のんびりとした朝食を終え、お茶のお代わりを注いで貰った優斗は、ふと昨日の事を思い出していた。

「そういえばクーナ」
「なんでしょうか？」
「昨日の話、結局どうなったの？」
ああ、そうでした、とクシャーナは立ち上がり、食事をしていない方のテーブルの上に置いてある、長方形の浅い箱の蓋を開ける。そして中から1枚の紙を取り出すと、優斗に手渡した。

「読んでも？」
「はい。どうぞ」
そう言われ、優斗はそれに目を通す。

紙は税の納付を証明する用紙だった。これに書かれた分量だけ、荷馬車から降ろしておかなければならない。

「じゃあ、後で降ろしとくから」
「すいません、ルエイン兄様が既に降ろすよう、指示を……」
納付証明に関しては仕事が早いくて良い事だが、勝手に荷物を降ろされたのにはさすがの優斗も眉をひそめる。

「申し訳ありません。本来ならばきちんとお支払を済ませてから、と言うのが筋なのですが。
お兄様が、税を受け取るだけなのだから問題ない、と強引に」
建前上、その対応は間違ってもいない。だが、商売と言うのは信用あってのモノだ。

ルエインは商人ではない。自分の都合を優先するその行動に、優斗は自分のイメージする貴族像と似たモノを感じていた。

「それで、その。
えっと、怒ってらっしゃいますか？」
「あー、いや。ちゃんと報酬、じゃなくて褒美か。
うん。クーナからちゃんとご褒美が貰えるなら問題ないよ」
「ご褒美、ですか」
ご褒美を上げる、と口の中で呟いてから、クシャーナは嬉しそうに顔を上げた。

「では、そのご褒美についてですけども」
「うん」
ご褒美と言う言葉が気に入ったらしいクシャーナは、先ほどまでの申し訳なさそうな顔から一転、笑顔で話し始める。

「我がユーシア領では公国貨幣が不足しています。同じように、王国貨幣も」
それはお金がないって事では、と思ってから、少しだけ持っている偽王国銀貨の事を思い出す。

「帝国貨幣なら多少の備蓄があるのですが、公国内ではあまり流通していないので、優斗様にご不便をかけてしまうのでは、と懸念しております」
初めて聞く名前のお金に、優斗は、帝国があるならそこのお金もあるよな、とそれに気づかなかった自分に呆れた。

帝国貨幣は、帝国全般と公国の中でも帝国との交流がある幾つかの領内でのみ流通している。種類は金貨、銀貨、銅貨以外にも青銅貨が存在する。

「ですので、我が家の所有する品から、幾つか進呈する事で、その、ご褒美とさせて頂こうと思っています。どうでしょうか？」
「いいと思う」
「では、優斗様。本日のご予定は大丈夫でしょうか？」
「今日？」
優斗の予定は、ロード商会に荷物を届ける事くらいだ。幸い、税の納付証明も手に入ったので、出来るだけ早く届けて置きたい。

「もしお暇がおありでしたら、実際にお渡しする品物を見て頂こうと思いまして」
「なるほどね。じゃあ、見てから出かけようかな」
午前中に終わらせ、ついでにお昼を調達しよう。そう考えた優斗は、さっそくとばかりにソファーから立ち上がる。

「では、馬車を手配しますので」
「馬車って、この家にはないの？」
「はい」
外へ出かけ、戻ってくるとなるとそれなりに時間がかかる。

ならば先に商会へ行き、向こうで合流すれば、効率が良い。そう考えた優斗は、クシャーナに行先を訪ねた。

「南外輪の壁際にある工場なのですが、あの辺りは似たような建物も多く、見つけるのは容易ではないですよ？」
「そういえば土地勘どころか地図すらないのに、無謀か」
「馬車でお連れしますよ？」
「ついでに積荷を置いて来ようかと」
優斗の言葉を聞いたクシャーナが、口元に手を当て、何かを考え

る素振りを見せた。

「では、こうしましょう。
私が道案内として荷馬車に同乗致します」
「んー。その方が助かるかな」
「では、準備が終わりましたら玄関へお越しください。荷馬車を回しておくよう、手配しておきます」
「自分で取りに行くからいいのに」
「ふふ。では、私も準備をしてきますので、失礼します」
さっと部屋を退出するクシャーナは、とても嬉しそうだった。

急いで準備を終えた優斗が玄関に到着すると、そこには既に荷馬車が置かれていた。

フレイも連れてくるつもりだったのだが、部屋に居なかった為、仕方なくメモだけ残して来た。フレンドリーとはいえ、さすがに、貴族様を待たせる勇気はなかった。

貴族を、と思った時に、だったら荷馬車で連れ出すのは失礼にあたらないのかと言う疑問も浮かんだが、本人が了承しているので大丈夫だろうと考え、それでも次回からは気を付けようと反省はしておく。

「お待たせしました」
「じゃあ、行こうか」
フレイよりも早くクシャーナが到着してしまい、仕方なく彼女は置いていく事にした。

先ほどとは違う恰好のクシャーナは、ベージュの簡素な服と、昨

日と同じベールを被っていた。

「では、乗せてください」

「かしこまりました、お嬢様」

優斗がおふざけ半分、見送りの目が気になったのが半分で発した言葉に、クシャーナは恭しく、片手を伸ばす。

昨日は両手だったのにな、と思いながら手を取り、体を引き寄せると、右手を首の後ろから回して肩を支え、左手は膝の裏へ通して、持ち上げる。こっちに来てから少し力がついたかな、と思いながら御者台に乗せ、優斗は逆側に回り込んで飛び乗る。

「では、お嬢様。お気をつけて」

優斗は見送ってくれる中年の女性に頭を下げ、荷馬車を進める。

クシャーナの案内で街を進むと、すぐにロード商会の建物が見えた。

「そういえば、お付きの人とか一緒でなくてよかったの？」

「街から出ない、優斗様と離れないと言う条件で、お兄様の許可を頂きましたので」

どっちのお兄様に許可を取ったんだろうか、と思いながら、ロード商会の裏へと回り込む為、細めの路地へと入っていく。

「商会に用事があるのですよね。入らないのですか？」

「大体、荷揚げ場は裏にあるんだよ」

まさか自分が教える立場になるとは。そんな風に思いながら、優斗は荷揚げ場の前で暇そうにしている男に声をかけた。

「すいません、アロエナからの荷物を持ってきました」

「ん？　あぁ、運搬か。ちょっと待ってくれ、今、呼んでくる」
誰を呼んでくるんだろうな、と思いながら待っていると、すぐに大柄な男が扉の中から現れた。

「どうもどうも。この度は遠いところからようこそおいでくださいました。
ハリスから連絡を受けておりますので、どうかこちらへ」
「わかりました。クーナはどうする？」
「ついて行ってもいいんですか？」
「邪魔しなければね」
嬉しそうに、では、お願いします、と告げるクシャーナと共に、大柄な男に先導されて部屋へと向かう。

商談用スペースらしい部屋にはソファーが2つあり、片方に大柄な男、もう片方に優斗とクシャーナが肩を寄せ合って腰かける。

「申し遅れましたが、私はプラートといいます。この度は我が商会の依頼を受けて頂き、本当にありがとうございます、優斗様」
「いえ、こちらこそ」
良い言葉が見つからなかった優斗は、誤魔化すようにそう返す。

フレイの時は気にならなかったのだが、横で商談を見られていると言うのは、緊張するな、と優斗は思った。それは、見られている事を気に出来る程度には商談に慣れてきたと言う事でもある。

「将来有望な、可愛らしい女性をお連れだと聞き及んでおりましたが、確かに綺麗な顔立ちをしていらっしゃいますな」
「あー、どうも」
それ、違う人です、とも言えず、優斗は流されるように相槌を打つ。

会話の指針や方向性が掴めず、戸惑っていた優斗は、こっそりと深呼吸する事で心を落ちつける。ここまで形振り構わずやって来た優斗だが、慕ってくれる子供の前で格好悪いところを見せたくない、と思う気持ちくらいはあった。

「これ、契約書と税の納付書です」

「税の納付書、ですか？」

プラートの目つきが、商人のそれに代わる。

まず、納付書を確認したプラートは、ざっと契約書にも目を通した。そして重要だと思われる部分、税の支払いは現物で、の部分だけを三度読み返す。

「税の変動があったと言う話は、聞いていないのですが」

「そうなのですか？　しかし、現に私はここへ入る際、その額の税を支払いましたよ」

プラートが手元のベルを鳴らすと、すぐに現れた男にお茶の準備を指示する。その際、何かを耳打ちしている様だった。

「ところで優斗様、蜂蜜を持ち込まれた様ですが、お引き取り希望ですか？」

「あれはこちらの貴族様に売り込もうと思っておりまして」

もちろん、値段次第ではお売りしますが、と言う言葉を優斗は口にしなかった。

高く売れるのならば売っておくに越した事はないのだが、目の前の商人は時間を稼ぎたがっている。ならば、今、蜂蜜の商談をしても、無駄に交渉を長引かせられるだけで、何の得もない。

「荷下ろしが終わり次第、お暇させて頂きますので」
「そう言わず、お茶くらい飲んで行ってください」
こちらに聞こえる様、あからさまに大きな声でお茶を頼んだのはその為かと気づいた優斗は、念の為もうひと押しして置こうと、隣に応援を求める為、視線を送る。

「どうされましたか、優斗様」
「あー。そうだった」
隣のクシャーナが不思議そうな顔でこちらを見ている。

今さらフレイを置いて来た事を思い出し、どうしようかな、と思いながら、優斗は一人、方策を練る。

「申し訳御座いません。この後、用がありまして」
「そうですか。実はまだ荷を下ろし始めておりませんので、お急ぎでしたら、後程改めて来て頂いてもかまいませんが」
「まだ時間がかかる、と？」
「荷物の確認も必要ですので。優斗様を信用していない訳ではありませんが、そう言う契約ですのでご容赦ください」
主導権を握り損ねた、と感じた優斗だが、一先ず蜂蜜の話題から遠ざかったので良いか、と思いながら隣を向く。

「クーナ、悪いけど少し時間がかかりそうだ」
「私が着いてくると言ったのですから、かまいません」
少しくらいは牽制にならないかな、と思ったのだが、効果はなさそうだ。

状況は有利ではないが、不利でもない。ならば交渉するのに何の問題もないはずだ、と自分に言い聞かせた優斗は、交渉のカードを場に出す事にした。

「ところでプラートさん、お願いがあるのですが」
「なんでしょうか。私どもに協力出来る事でしたら、なんなりとおっしゃってください」
儲かる事なら、と言うのが大前提なんだろうな、と思いながら優斗は鞄から小さな袋を取り出す。
「これの売り込みをお願いしたいのです」
袋の口を開け、テーブルに置く。
「これは？」
「ここに来るまでに立ち寄った村で売り出す予定の新作菓子です」
「ほう。１つ頂いても？」
「どうぞ」
プラートの反応は、ほぼクシャーナと同じだった。ただし、最後は幸せそうな顔ではなく、儲け話を見つけた商人特有の笑みだった。
「これはすばらしい。貴族や、お金持ち相手にそれなりに売れると思いますよ」
「ありがとうございます」
「売り込みを希望と言う事ですが、我が商会が直接買い取らせて頂く形でどうでしょうか。
どんなに良い物でも、知られていなければ買い手が付きません。その点、我々の商会は独自の流通経路を持っていますので」
「実は、既に店を開いて売り出す準備がしてありまして。そこで売っていくつもりです」
「そうですか。それですと、我が商会がお力になれる事は少ないかもしれませんね」
宣伝して欲しければ分け前を寄越せ、と言う事か。それも予想済

みだった優斗は、更にもう一枚、紙を取り出す。

「実は既にハリスさんにこういう文章を届けていまして」

「ほう。拝見します」

ハリスに出した手紙の写しを手渡す。

この手紙通りに話が進んでいるといいな、と思っていると、扉が開いた。どうやら、お茶が届いたらしい。

お茶を1口啜りながら待っていると、手紙を読み終わったプラートが、顔を上げる。

「お伺いしたいのですが、何故貴族に売る事を条件としたのですか？」

「より正確に言えば、行商人や市井の人には売らないで欲しいのです。

村の方では、そちらをターゲットに店を構える予定ですので」

ハリスへの手紙に書いたのは、後ろ盾となって貰う代わりに、ロード商会にだけ格安で蜂蜜菓子を卸すと言う物だ。

優斗としては、成行きで出してしまった、レシピと言う大きすぎる商品を取り扱う上で、どうしても後ろ盾は必要だ。店としてもゆくゆくは他の物も出したいと言う希望もあり、その時には仕入れの必要もある。

プラートの疑問への答えは、実はもう1つある。商会へのレシピの公開も視野に入れている優斗は、市場を独占される事を恐れた。その対策として、ある程度の知名度を得てしまえば、商会が契約違反をした場合に様々な相手が介入してくれるに違いない、と言う思惑がある。レシピの公開をチラつかせれば、別の商会も動かせる可

能性がある。

矛盾するようだが、同時に優斗は、しょせん蜂蜜菓子1つの事なので、そこまで大きな問題にはならないだろうとも思っていた。これは他の、もっと重要で、大きな技術や情報を売る際の予行練習でもある。故に、なるべく大げさに、最悪な状況を想定している。

「ハリスさんにはアロエナ側から、プラートさんにはこちら、ユーシア側から、この村へ寄るよう、誘導して欲しいのです」
「ふむ。なるほど、新街道の開通によって寂れた村ですか」
優斗が提示した白地図を見て、瞬時にそう答えたプラートに感心しながら、村のある場所を指差し続ける。

「他にもここを通る行商路を持つ方に連絡を取って欲しいのです」
「そのくらい、お安い御用です」
どうやら金になると判断されたらしい、と思いながら優斗は袋の口を縛る。

「これは差し上げますので、お使いください」
「良いのですか？」
「実物があればやれる事も多いと思いますので。その代り、しっかりとお願いしますね」
「それはもちろん」

その後、こちら側にも納品して欲しいと依頼されるが、同じロード商会とはいえ、ハリスに無断では約束出来ないと断ると、タイミングを見計らったかのように荷下ろしが終わったと連絡が入る。実際、見計らっていた可能性は高い。

当然だが、納付証明は本物であり、優斗は税を支払って来たと言

う事が確認されたようだ。

「では、またの起こしをお待ちしております」
「はい。よろしくお願いします」
ほっとしながら商会を出た優斗は、事前に教えられていた南外輪へと馬を進める。

空を見上げると太陽がかなり高い位置にあった。だいぶ待たせてしまったお詫びにと、優斗は鞄から先ほどと同じ袋を取り出した。

「1つ食べていいよ。待たせたお詫び」
「ありがとうございます」
遠慮せず、ぱくりと1つ口に放り込む姿を横目に道を進んでいく。

飴を口に、ご機嫌なクシャーナの案内で到着したのは、織物工場だった。

「こちらが我が家の所有する倉庫と機織り工場です」
「これまた立派だね。本当に貧乏領主なの？」
「騎士団の維持費、聞いたらきっと驚きますよ」
楽しげに微笑むクシャーナと共に荷馬車を下り、入口で預けると中へと入っていく。

まずは倉庫へ行きましょうと言われ、後に着いて行くと、大量の荷物の詰め込まれた場所へと到着する。

「我が領土特産の絹糸です。隣の工場で布地を作っている、その材料ですね」
「糸で売らずに布地にするんだ？」
「布地に出来る数にも限界がありますので、ほとんどは糸のまま売

っています」
「へぇ」
「確かに高く売れますが、その分費用が掛かるのであまり成功したとは言えませんが。
何より、最初にお金をかけすぎました」
初期投資は仕方ないな、と思いながら絹糸を確認していく。

この世界でも蚕が居るのだろうか、と思いながら眺めていると、クシャーナが不安げにこちらを見つめていた。

「どうしたの？」
「あ、その。先ほどの様に、商売の話を始めないのかな、と」
「あー、そういえば交渉しに来たんだっけ」
直前の事で、優斗はかなり精神を消耗していた。何せ、契約に違反していないとは言え、相手を騙したのだ。身分詐称の身でこんな事を言うのはおこがましいが、ああいう事には慣れていないのだ。

「その前に、布地の方も見たいな」
「そうですね。では、こちらへ」
倉庫から出た優斗は、クシャーナに先導され、工場内へと入っていく。

工場内には数十台の機織り機が並べられていた。作業しているのは、ほとんどが女性。何故か1人だけ黒髪の男が混ざっている。

「クーナ」
「私は見ていません」
「こっちに向かってくるけど？」
「逃げましょう、優斗様」
「そう邪険にするな、妹よ」

1人機織りに参加していた男は、クシャーナの兄のルエインだった。

「お兄様、どうしてここに？」
「お前が兄貴のところに外出許可を取りに行ったと聞いてな。ここで待ち伏せしていた」
「どうしてここが？」
「現金を使わず交渉しろ、と言ったのは俺だからな」
口をへの字に曲げるクシャーナと、不敵に笑うルエインがにらみ合う。

優斗の方は、こちらに来て初めて見る機械に目を奪われている。じっと見ていると、何故か違和感を覚えた。

「優斗様、どうされましたか？」
「いや、なんでもない」
そう口にしながら、優斗はようやく違和感の原因に気づき、後で調べてみようと心の中に留めておく。

「……そうですか」
クシャーナの反応に、ルエインが「ん？」と声を漏らす。そして彼女の耳元で何かささやき、首肯するのを見て嬉しそうに口元を歪める。

「我が家の機織り機に、何か思う所がおありかな？」
「いえ、そんな事はありません」
優斗を見つめているクシャーナが、ルエインの袖を掴み、引く。彼はそれを無視して、優斗に向けて口を開く。

「他の国では、もっと効率の良い方法があるらしいな。商人殿はそ

れをご存じなのだろう？」
「残念ながら」
無視されたクシャーナがまた袖を引く。それでもルエインは無視し続ける。

「その技術、教えて頂けないか？」
「あの、会話がかみ合ってないと思うのですが」
「だが、お前は知っているのだろう？　生産性を上げる、何かを」
「知らない、と答えたつもりなのですが」
更に袖をひっぱって自己主張するクシャーナが可愛そうに思え、優斗は話を中断しようと口を開きかける。

「仕方がない。商人、最後に１つ答えろ」
「なんですか？」
「クーナの事は嫌いか？　それとも好きか？」
「まぁ、好きですけど」
その言葉に、クシャーナは真っ赤になった。

初心な子だな、と思いながら微笑ましく眺める優斗。その姿を見て、クックッ、と不敵な笑みを浮かべるルエイン。

多大な誤解を招くこの光景は、３人を見守る機織りの女性たちによって、様々な人の耳に入る事になる。

ご褒美と逢引（後書き）

お使いも終わり、ユーシア編、本格始動です。
落としどころをどこに持ってくるべきか、悩ましいです。

嘘と真実

作業の邪魔になると応接室へ移動させられた優斗は、ユーシア兄妹の正面に置かれた椅子に腰かけた。

「俺は商人じゃないんでな。面倒な交渉は好かん」

「はぁ」

相変わらず隣で兄の袖を掴んでいるクシャーナに、何か声をかけるべきかと悩んだが、今は自分の事を優先、と雑念を追い払う。

「お前が何か隠しているのは判っている。こいつは審判の恵みを得ているから、嘘は通じん」

「審判の恵み、ですか」

「世界の恵みの中でも、それなりに珍しい部類だからな。聞いた事がないか？」

嘘をついても仕方がないので、優斗は正直に頷いておく。

「まぁ、我が妹は相手の瞳を覗き込みながらでないと判断出来ないから、そんなに強くはない」

「なるほど。避けるのは難しくなさそうですね」

でも今はやらない方がいいな、と優斗は考えた。避ければ疑われ、同じ様な質問を重ねられて根掘り葉掘り確認される事になるだろう。その為のネタばらしと言う訳だ。

「も、もー。お兄様、なんでばらしちゃうんですか！」

今まで大人しく座っていたクシャーナの反応に、優斗は余り驚かなかった。

「お前の猫かぶりが余りにも愉快だったんで、つい、な」

「猫かぶりじゃないです。私は淑女だから、あれが普通なんだもん」
「口調を変え、わざわざ小難しい言葉を選んで使うのが猫かぶりでないと？」
「成長しただけだもん！」
「いい感じに地が出て来たな」
「っは！？」
慌てて口を押さえるが、もう遅い。優斗はばっちり、彼女本来の姿を見てしまった。

これはこれで子供らしくて可愛らしいな、と思いながら、微笑ましい兄妹のやりとりを見つめていた優斗は、クシャーナに向けて笑いかけつつ声をかける。

「今までの方も悪くないけど、今の方が可愛いと思うよ？」
「う。でも、子供っぽいですし」
「子供っぽいっていうか、子供なんだからそれでいいと思うけど」
優斗の言葉に、クシャーナは、え、と言う声と共に固まる。ルエインは何故か大爆笑していた。

「子供、ですか」
「自分は１０歳の子供だって言ったのはクーナでしょ？」
「確かに言いましたけど。いえ、それは。でも」
納得がいかないらしいクシャーナ。そんな彼女の姿に、優斗はルエインと顔を見合わせ、釣られて笑いだす。

「もー。お兄様も優斗様もひどいです」
「悪い悪い」
「よく判らないけど、ごめん」
腕を組み、頬を膨らませるクシャーナの姿に、再度浮かんできた笑いの気配をかみ殺しながら、優斗は再びルエインと向かい合う。

「それで、私はどうなるのでしょうか？」
「お前の考えていた方法を買ってやるから、全部話せ」
「おっしゃっている事の意味が分かりかねます」
「クーナ」
「嘘です」
クシャーナが敵に回った事を少し残念に思いながら、優斗は緩んでいた気を張り直す。

「お前はあの機械の改善方法を知っている。そうだな？」
「そんな事はありません」
「真実です」
ルエインが眉をひそめる。クシャーナの方を向いて再度確認するが、首を横に振られ、激しく瞬きを繰り返す。

調べるあてがあるだけで、実際にはまだ知らないし、確実にあるとも言えないので、実際に嘘ではない。こういう場合も真実だと認識されるのだと判った優斗は、なんとか言い逃れる方法を探して頭を働かせる。

「知っている人間に心当たりがあるのか？」
「ありません」
「真実です」
眉間にしわを寄せながら、ルエインは更に質問を浴びせ続ける。

「書いてある書物に心当たりがあるのか？」
「ありません」
「真実です」

「布地自体を高く売る方法を知っているのか」

「知りません」
「真実です」

「ちっ。クシャーナ、お前も何か聞け」
「はい、お兄様」
クシャーナはルエインの袖から手を離すと、真っ直ぐな眼差しで優斗を射抜く。

「では、優斗様。優斗様であれば、我が家の財政難を解決する事が出来ますか？」
ルエインとは違うおおざっぱな質問に、優斗は内心、狼狽する。

財政難の解決は、たぶん可能だ。優斗が今持っている知識だけでも、蒸気機関や、それに伴う産業のオートメーション化で売り上げを伸ばし、小さな産業革命を起こす事が可能だ。もちろん職人や技術者達の協力と、ある程度の予算を得る事が大前提だが、曲がりなりにも貴族の家なのだから、そのくらいは揃うだろう。

さんざん悩んだ結果、優斗はイエスと答える事にした。クシャーナにすぐバレる嘘吐くのは忍びなかったし、仮にこの場を凌いでルエインから逃げ出したとしても、すぐに捕まるのは目に見えている。ここは彼の父親の領地で、しかも館にはフレイを残したままなのだ。

「私に全てを任せてくださるのならば、可能です」
「真実、です」
「ふん。喰えないヤツめ」
ようやく出たルエインの求める言葉に、しかし彼はあまり嬉しそうではなかった。

交渉中にも関わらず、優斗はため息を吐く。嘘もはったりも通じ

ない事が、これほど不便だとは思っても見なかった。

「厄介なギフトですね」

「だろう？　おかげで才能のない俺でも交渉の真似事が出来る」

そう話すルエインは、どこか誇らしげだ。どうやら兄妹間の関係は良好らしい。

優斗はそんな風に考えながら、厄介なコンビにどう言い訳するかの、算段を開始する。

「正直に申しますと、私自身はその方法を知らないのです」

「嘘です」

「言い方を間違えました。どういった方法で行うのが最適か、判断出来ていないのです」

「真実です」

儲けの見込める商売方法、もしくは技術か知識のどれかを持っているのだと予想していたルエインは、その言葉に軌道修正をせざるを得なかった。

ルエインは、優斗の言葉の意味として2通りの可能性を考えた。自分で方法を開発するつもりか、複数の方法を所持しているか、だ。

「お前は学者か何かなのか？」

「学者ではありませんが、学徒ではあります」

「ほお、そうなのか」

この世界で学徒と言えば、師を取って、師の知識を伝授される者の事で、そのほとんどが教会関係者か、貴族の子弟だ。

これはとんだ拾いものだ、と考えたルエインの口元に、人の悪い笑みが浮かぶ。

「実はな、商人殿。先ほど、私の元に報告が来たのだ」
話の繋がりが判らず、優斗は居住まいを正してルエインの言葉に耳を傾ける。

「うちの者に、門兵のところへ行って商人殿がやって来たら丁重に館まで案内しろと伝える様、命じたんだが、どうしてか、それが街の門兵にまで届いてしまってな」
どうだ、とばかりにルエインは優斗に視線を送る。言葉の意味と視線の真意が理解できず、優斗は困惑する。

「まぁ、撤回すればいいだけなのだが。それも面倒だなぁと思っていたところだ」
優斗は戸惑う心を必死に静め、頭の中で情報を咀嚼し、整理する。
門まで来たら館へ案内してくれる。これは問題ない。街の門で同じ事が起こると言う事は、そこから領主の館へ連行される、と言う事だろう。街に到着したらまず館を訪ねないとならないのは不便だが。

「っあ」
「ようやく気付いたか。まぁ、気づけただけでも中々のものだ」
門から館に連行される。それは即ち、街の外へ出られないと言う事だ。

街から出られない人間と言うのは、多くはないが少なくもない事を優斗は知っている。
希少なギフトを持つ者は、他国や他の領地へ移動されては不利益となる。特別な技術を持つ職人達も、同じ理由で街から出るには許可が必要な場合もある。

「残念だったな。我がユーシア領は貧乏なんでな。稼げる手段があるのなら、手間と面倒を惜しむ気はない」
その迫力に気圧されながら、優斗は完全に手詰まりである事を理解する。

「クーナ、嘘の時だけ教えろ。商人、お前は貴族なのか？」
「違います」
「では、教会関係者か？」
「違います」
身分に関する質問が続き、優斗は心臓が早鐘を打っているのを自覚する。

もし、彼が「商人か」と聞き、イエスと答えたらどうなるのか、優斗にも予想がつかない。

「では、商会に所属しているのか？」
「していません」
質問の意図が理解できなかったが、予想と違う質問に優斗は安堵した。

ルエインがそれを確認した理由は、大資本で圧力をかけられれば、この領地の財政など軽く吹き飛ばされてしまうからだ。商会と言うのは助け合いの意識が強い。優斗が大きな商会に所属していた場合、そこに助けを求められると厄介な事になる。

「あの、お兄様」
「なんだ、クーナ」
「優斗様はお父様を助けてくださいました。あまり無茶な事は……」
「ほぉ」

にやにやと笑いながら、ルエインはクシャーナの額をつついた。

「実はな、クーナ。俺はあいつを雇おうと思う」
「え？」
「へ？」
２人の反応に、ルエインは声を上げて笑った。

「しかも、お前付きとして」
「えぇぇえぇ！？」
「はい？」
話に着いていけない優斗は、ただひたすらクエッションマークを頭に浮かべ続ける。

このまま流されるのはマズい。直感的にそう感じた優斗は、頭に浮かんでいる全ての疑問を一時追い出し、今必要な情報だけをより分け始める。

「元々、そのうち対外交渉役をお前に任せるつもりだったんでな。折角有利なギフトがあるんだ、利用するに越した事はない」
「それはそうですけど。あ、それで私にあんな本がたくさん届いたのですね」
「お前の性格だ。全部読んだんだろう？」
「はい。ただ、理解している訳ではありませんけど」
「十分だ。交渉の矢面にはソイツを立たせればいい。交渉は得意そうだからな」
目の前で行われている会話の内容も加味しながら、優斗はなんとか自分に関する部分だけを抜出し、思考をまとめ始める。

雇われる、と言う事は給料が出る。給料が出れば生活が出来る。自分が行商をしているのは、あくまで生活基盤を確保する為であっ

て、行商自体はその方法の１つに過ぎない。

この話、実は美味しいんじゃないだろうか。そう考え始めた優斗は、もう一度深呼吸をする。

「商人」

「はうぃ」

深呼吸の直後に声をかけられた優斗は、焦りから声が裏返る。

それでも少し平静を取り戻していた優斗は、確認すべき事項を頭に浮かべ、口に出していく。

「本気ですか？」

「もちろんだ」

「間違えました。正気ですか？」

「人の正気を疑うとは、失礼なヤツだな」

「昨日今日会ったばかりの男を妹付きとして雇う人間が、正気とは思えません」

「普通ならそうだな。だが、審判のギフトを持つ我が妹に気に入られる人間ならば、十分信用に値する」

どうやら本当に雇うつもりらしいと言う事と、それなりに思惑があるらしい事が確認出来た優斗は、ならば条件面次第だな、と思考を切り替える。

「給与はどのくらいでしょう」

「お、ようやくその気になったか。

そうだな。住み込みでよければ衣食住は保障しよう。給与は銀貨２０枚程度でどうだ？」

銀貨２０枚あれば、宿賃込で２０日、食費だけなら2か月近く生活できる計算だ。

これはあくまで優斗の感覚であり、こちらの感覚で言えば、食費はもっと安くなる。優斗は1日に3食摂るが、こちらでは貴族やお金持ちを除けば、1日2食が普通だ。食事の回数が多い事を喜んだフレイが指摘しなかった為、優斗はそれを知らない。

「それは、っと」
「ほう、気づいたか」
「はい。何銀貨か、教えて頂けますよね？」
先ほどの計算は、公国銀貨である事を前提としている。

これが王国銀貨ならば価値は6分の1以下になるし、偽王国銀貨ならば更にその半分以下になる。帝国銀貨については、優斗は相場を知らない。

「実は公国銀貨20枚は出せない」
「思いっきり騙そうとした訳ですね」
「衣食住込みなら十分破格だ」
「否定はしません」
優斗は、こっちに来てからの出費は、税を除けばほぼ衣食住だけだったな、と思い出す。菓子などの嗜好品を食に当てはめるのは間違っているのだが、優斗は気づかない。

「賃金の話をすると言う事は、雇われる気になったと思っていいのか？」
「嫌だといったら、素直に解放してくれますか？」
「うちはそれなりに領民の評判もいいからな。領主の願いを断ったと噂になれば、肩身は狭いだろうなぁ」
あんたは領主じゃないだろう、と思いながらもその状況を想像してみる。

街から出られず、領民からは冷たい視線を受け、まともな職にも就けない。これはもう、立派な脅しではないか、と優斗は頭を抱えたくなった。

「仕事内容も知りたいですね。具体的には、何をすればいいんですか？」

「引き受ける気になったんだな？」

「話を聞いてから考えます」

ルエインのしつこさに、最悪、ロード商会に相談して脱出方法を考えよう、と思いながら優斗は、強気で行くぞと胸を張る。

「何、そんなに難しい事ではない。

まず、我が領の財政難をなんとかしてくれ。方法は問わない。

次に、クシャーナと共に対外交渉を担当して貰う。貴族相手は領主か次期当主が出る必要があるから、お前たちが担当するのはその代理人か、街商人だ」

「十分めんどくさそうなのですが」

「クーナのギフトがあれば、俺にでも出来る事だ。それに対抗出来たお前が出来ない訳がないだろう？」

「財政難をなんとかする方は、かなり難易度が高いと思うのですが」

「お前には何か秘策があるのだろう？」

「無茶苦茶な方法で、むしろ悪化する可能性もあると思うんですけど」

実際、改革には失敗が付き物だと優斗は思っている。失敗するだけの余力がなければ、成功する事が一層難しくなる。

「その辺りはクーナが判断する。一応、お前の上役だからな」

「私がですか？」

「あぁ。と、言っても何でも1人で決める必要はない。俺に相談したり、報告書を流してくれれば、こちらでも検討する
間違っても他のヤツには相談するなよ？」

ルエインの言葉に、クシャーナが苦笑いを浮かべる。
どう言う意味だろう、と優斗が不思議そうにしていると、クシャーナが説明をしてくれた。

「我が家は代々、騎士の家系で、一族のほとんどが騎士団に所属しています」
「脳まで筋肉の集団だからな。あてにならん」
「お兄様」
咎める口調のクシャーナに、ルエインは悪びれなく「はいはい」と返事をしてから優斗を見据える。

「領主からして財政の事は、騎士団の人員増員費用と装備の購入費を増やせ、くらいしか言わないところだ。好き勝手にやれるぞ？」
「それは魅力的ですね」
「だろう？」
好きな事をして給料が貰え、衣食住が保障される。これ以上の環境は、きっとない。

最初に経済方面だけどうにかすれば。解決するには何が必要か。元資金を最速で得るには。どこまでのレベルならば作成可能なのか。

「何か条件があれば聞くぞ？」
ルエインの言葉に、優斗は思考の海から浮上する。

実際に優斗が財政改革を行うとすれば、単純に収入を増やす方針で行う事になるだろう。支出に関しては貴族の仕来たりや長年の付

き合いで、等と言う部分が理解出来ないので、絞っていくにしても専門の知識がある人間に委託する方が効率が良い。

そうであるならば、この国に現存しない技術や知識で生産量を増やしたり、新しい物を開発、と言う名目で何かを作成して行く事になる。その利益は、きっと莫大な物になるだろう。

「そうですね。報酬は歩合制にして貰えませんか」
「歩合制、とはなんだ？」
聞きなれないのか、それとも歩合制自体存在しないのか。後者ならば面倒だな、と優斗は思った。

「私が成した利益に応じて報酬を受け取る、と言う事です。例えば、去年の売り上げよりも金貨１０枚増やせたら、報酬はその１割の金貨１枚、と言う感じです」
「出来高払いか。どうやら相当自信があるようだな」
そう言う言い方もあるな、と思いながら、形式が存在した事に優斗は安堵する。

利益が莫大ならば、固定給よりもそちらの方が都合が良い。だから優斗は、概念がなければ説明してでもこちらにして貰うつもりだった。

「だが、一割は多すぎる」
「あくまで例え話です。割合は後で話し合うとして、どうです。出来高払い」
「衣食住完備、基本給０の出来高払いでどうだ」
「基本給０は酷くないですか？」
「自信があるのだろう？」
「そうですね。では、その分だけ出来高払いの取り分を多くして貰

う事にします」
「それは困るな。何か希望があれば聞くから、他の条件を考えておけ」
「わかりました」
この短い間に優斗が雇われる事が決まってしまった事に、最も驚いたのはクシャーナだった。

「えっと、お兄様。本気ですか？」
「それは商人。いや、ユートにも聞かれたぞ」
「それに、私を対外交渉役にしようと言うのも」
「俺がこの家で頼れるのはお前だけだからな。色々な意味で」
意味深な会話に口を出すことも憚れた優斗は、居住まいを正して2人を見据える。

「……わかりました。対外交渉役、謹んでお引き受け致します」
「だ、そうだユート。我が妹をよろしく頼むぞ」
「了解しました」
優斗の即答に、ルエインは嬉しそうに微笑み、すぐにその口元を意地の悪いそれへと変化させた。

「大きな手柄を立てたら、ソイツを嫁にやろう」
「へ？」
「それは遠慮しときます」
年齢差11もあるしなぁ、と思いながら、クシャーナにも同意を取ろうと視線を送る。

しかし、優斗の予想とは裏腹に、クシャーナの顔には苦笑も怒りも、はたまた羞恥も浮かんでおらず、ぽかん口を開いたまま固まっていた。

「おいおいユート。つい先ほど好きだと言った相手との結婚を、即答で拒否するのは如何な物かと思うぞ？」
「そう言われましても、年の差１１は離れすぎでしょう。クーナが可愛そうですよ」
その言葉を受け、サバを読みすぎだと笑うルエインの表情が、クシャーナの方を見たとたん、固まる。

優斗は完全に失念しているが、彼の外見年齢は、フレイ曰く１０代半ばなのである。普通に考えれば、年の差は５つ程度で、貴族の結婚ならば珍しくもない年齢差だ。

「クー、ナ？」
「真実、みたい、です」
さすがに驚きすぎだろうと思いながら、優斗はひたすら苦笑し続ける。

数分後、なんとか正気を取り戻した２人は、口ぐちに年齢の数え方について説明を始めた。そして、優斗が本当に２１年を過ごして来た人間だと納得するまで、かなりの時間を要する事となった。

「うーん。でも、まぁ。そのくらいの年齢差の妾を娶っている男もいるし、いいんじゃないか？」
「えっと、その。私は別に」
「特殊な趣味の話はおいといて、俺はルエイン様がそこまで押す意図が気になるんだけど」
延々と説明をさせられ、段々交渉口調が面倒になって来た優斗の言葉遣いに、ルエインは特に何も指摘せず返答を返す。

「まず、お前が本当に有能ならここに留めておきたい」
「クーナ」

「真実です」
条件反射で出た言葉に、クシャーナは口を押えた。
「それに、クーナも嫁にやりたくないんでな。嫁がれるより、婿をとって欲しい」
「兄馬鹿？」
「違う、とは言わんが、もっと実利的な意味もある。機会があったら俺たちの姉の話を聞かせてやろう」
「なるほど。シスコンな訳だ」
「シスコン？」
「姉や妹が好きすぎる人の事」
「否定はしないが。姉は今では尊敬しているし、妹は可愛いからな」
ダメだこの人、と思いながら、さすがに無礼な事を言い過ぎたなと反省した優斗は、口調を元に戻す事にした。
「では、ルエイン様。雇用契約につきましては後日、詳細を話し合うと言う事でよろしいでしょうか」
「構わない」
「ところでクーナ。ご褒美を物品で貰う件、行商が続けられないから撤回していい？」
「そういえば、その為にここに来たんでしたね」
結局、クシャーナからのご褒美は保留となり、この場は解散となった。彼女の下で働きだしてから、何かしら優遇して貰う方向で話を進めようと考えながら、優斗は館に向かって荷馬車を進めた。何故か、ルエインも乗せて。

嘘と真実（後書き）

相変わらず行商から離れ安い行商譚でした。
ユーシア家の方々（主に男性陣）の出番をもっと増やしたいのですが、話が脱線し、冗長になりそうなので考え中です。

騙し合い

昼食を手に部屋に戻ると、聞かされていた通りフレイがいじけていた。

「ただいま」

「おかえりなさいませご主人様」

少し棒読みな口調をあえて無視して、優斗は昼食用に貰ってきたパンをテーブルに置く。

フレイの分、と伝えると、すんなりとパンに手を伸ばしたのを見て、あえて言い訳をせずに本題に入った。

「フレイ、確か奴隷から解放って出来るんだよね？」

「出来ますけど。する気なんですか？」

「考え中。フレイはどう思う？」

フレイは少し考えた後、手に持ったパンを籠に戻した。

食べながらでいいのに、と思いながら、既に昼食を終えている優斗は、水差しからカップに水を注ぎ、口に含んだ。

「私はご主人様の奴隷で居続けたいと思っています」

「理由を聞いても？」

「そりゃ、もう。あれです。愛ゆえに」

「嘘吐け」

フレイの態度に、何か真面目な事を話すつもりなんだな、と優斗は居住まいを正す。

フレイのこう言う癖も、最近になって気づくようになって来た。

「ご主人様は元奴隷を見た事がないんですよね？」
「ないな」
そうですか、と言いながらフレイはリボンをずらして首輪を露出させた。

「これを取っても、一生首には痣が残り続けます」
「なるほどね。でも、隠して過ごせばいいんじゃない？」
「嫁の貰い手がなくなるから、と言えば大体判りますか？」
なんとなく予想はついたが、詳細な理由までは判らなかった優斗は、聞き返していいものか、悩む。

その表情を読み取ったフレイは、優斗に気づかれないようにため息を吐いてから、少し長めに息を吸い込んだ。

「男性でしたら、農村で力仕事をして過ごす事は可能です。ですが、女は力が弱く、そういう訳にもいきません。
力仕事以外を探そうにも、元奴隷に技術を教えてくれる職人はいませんし、好んで雇うお金持ちが居ても、元奴隷と言う付加価値に何を求めるか、想像は難しくないです」

言葉を止めたフレイが、もう一度長く息を吸い込む。

「もちろん働く場所がない訳ではありません。元奴隷と言う経験と肩書を最も生かせる職業は、娼婦です」
人に命令される事に慣れ、何をされても文句を言わない。

優斗はそんな思考を振り切り、フレイの言葉に集中する。

「普通の女性ならどこかに嫁ぐと言う選択肢もありますが、あえて

奴隷を嫁にと言う人は少ないです。
何をされていたか判りませんし、それによって子を成せなくなっている可能性もありますから」

確かにな、と思いながら、でも彼女にはそれを否定できるかもしれない要素がある事を思い出す。同時に、フレイも優斗が気づいた事に気づいた。

「ご主人様、視線がいやらしいです。
一応、言っておきますけど、生娘であったら、今度は性病を疑われます。性病の人間は子を成せませんから、やはり結果は同じです」
「性病って、別に子供が出来なくなる訳じゃないと思うけど」
「そうなんですか？　でも、私はそう聞いています」
噂やデマが浸透し、事実が意味をなさないと言うのは珍しい事ではない。

語り終わったらしいフレイの肩から力が抜ける。
優斗としては、解放していなくなるならそれもよし、残ってくれるなら平民と言う身分を生かして2手に別れる行動がし易くなると考えていたので、それ以前の問題を指摘され、少し戸惑う。

「じゃあ、奴隷解放しつつ、俺に雇われるって言うのは？」
「今と何か変わるんですか？」
「平民の利点はそれなりにあると思うんだけど」
「元奴隷は、農民扱いです。しかも元奴隷となれば、ほとんど奴隷と変わりませんよ？
結局は首元を隠して行動する事になりますし」

その後、更に話し合いは続いたが、金銭的利点などから、今は奴隷解放をしないと言う結論になる。その際、フレイの「奴隷でなく

なったら、無理やり襲いますよ？」と言う言葉が決め手になったのかは、定かではない。

フレイとの様々な話し合いを終えた優斗は、ルエインに呼び出されて彼の書斎に来ていた。

「契約内容ですけど、こんな感じでどうですか？」

黙ったままそれを受け取ったルエインは、渋い顔で文面を確認していく。

クシャーナは早速仕事に関する文章を読まされているそうだ。彼女が居たら、女をあてがって貰うような条件も考えているので、席を外させたいとルエインに依頼するつもりだった優斗は、手間が省けた事に内心喜んだ。

「実はあの後、お前があっさり頷いた理由を考えていた。あんな不利な条件で納得する理由、よければ教えてくれないか？」

「了承しなければならない状況に追い込んだのは、ルエイン様でしょう？」

気づかれないといいな、と思いながらも優斗は平静を保つ事と、書斎が珍しくてキョロキョロしている、と言う風を装いながら、口を開く前になるべく別の方向を向く事を、心がける。

優斗が警戒しているのは、クシャーナだ。姿はなくとも、視線を捉えられる位置に潜んでいる可能性はあるので、その保険だ。

「まぁ、口を割るとも思っていなかったが。

その理由を俺はこう考えた。利益が増えた分、と言う前提を我が

領内全てに適応するつもりではないか、と」
「そう言うお話ですよね？」
笑顔でそう返すと、ルエインはくつくつと笑う。
「何をするつもりかは知らんが、金を稼ぐと言う事は、人と物が動くと言う事だ。
人頭税を初めとする通行税や、人が増えれば様々な使用料が我が領土の収入として加算される」
「さすが、鋭い考察です」
そう言いながら、手元にある契約内容の草稿を書いた写しに目を向ける。

優斗の書いた契約内容はこうだ。

前月よりも増えた収入分から、話し合いにより決定した割合で報酬を受け取る事。
収支が減った場合に、その減額分の保障を優斗に求めない事。
雇用期間中は衣食住の保障を行う事。
五日に1度休暇を与える事。休日に緊急で働く場合、別の日に休みを振り替える事。
契約期間は、1か月とする事。
仕事内容は財政の立て直しであり、方法は問わない。

わざと無茶な内容を織り交ぜた内容に、ルエインはきちんと気づいたようだ。

「まず、収入分と言うのは却下だ」
「そうですか」

収入分であれば、人や物を増やす、いわゆる初期投資分が無視出来る。

これが通った場合、利益にならなくとも売り上げを増やし続けると言う手で収入を増やす事が可能だ。優斗はそこまでやる気はないが。

「それに有効範囲もきちんと定めたい。お前が関わった、とすると自分のおかげで人が増えたとか言われそうだな。

お前が売り買いした範囲、でどうだ？　もちろん、直接でなく、代理人を立てた場合も含むぞ」

「物を売るだけが商売ではありませんので」

優斗の言葉に、ルエインは悩み始める。現在進行形でこの家は赤字なので、このままの条件では、例え見かけ上は黒字になっても、優斗の報酬で赤字に戻ってしまう。それすらも無視出来るほどの利益が出るのであれば良いのだが、そう都合よくはいかないだろう、と考え、ふと気づく。

「では、我が領土の全収支から利益となった分の何割か、と言うのはどうだ？」

「急に条件がよくなりましたね」

条件の意味を、優斗は頭の中で考える。

「あぁ、利益が出たら何か大きな買い物をする気なのですね？」

「バレたか」

「危ないところでした」

「そろそろ真面目に提案しようと思うんだが、いいか？」

「なんですか？」

「今月の収益から前月の収益と、お前の使った改革費を引いた数字、

でどうだ」
「初期投資を考えると、妥当な判断ですね。でも、最近の収益の数字を見ない事には、お返事出来ません」
「そう言うと思って準備しておいた。これだ」
「これが正しいと言う保障は？」
「信じろとしか言えないな」
「そうですか。では、とりあえずこれで行きましょう」
ルエインは驚きながらも、訂正される前にと次の話を始める。

「次に雇用期間だが、もっと長くする気はないか？」
「もしかすると、まだ無茶な文言が入っているかもしれませんよ？」
う、と唸ってからルエインは紙を睨みつけるように読み直し始める。

優斗にとって重要なのは、書いてある事ではなく書いていない事だ。気づかれなければ、かなりの稼ぎが期待できる。ついでに、この街の脱出するあても確保出来るかもしれない。技術を置いて行くのだから、いきなり追われる可能性はそう高くないだろう、とも思っていた。

優斗の目的はこの世界での生活基盤を築く事だ。先ほどは交渉しなければと言う意識が先行し、条件面にばかり目が行って利益を得ようとしか考えていなかったが、フレイと相談して落ち着きを取り戻した事で、自分が１つ失念している事に気づいた。それは、ここが最近まで戦争地帯だったと言う事だ。今は逃げ出そうにも既に街を出られない状態なので、仕方なく期間を区切って逃げる算段をする事にした。

「無茶な内容を訂正出来ないのは困る」
そう言いながらも、ルエインはこのままでもいかなと考え始めて

いた。

優斗が居てくれるなら、それはそれで使える人間が増えて良い事だ。だが、契約を延長しない事になっても、技術やノウハウは残る。後々に効果が出ても報酬を支払う必要がないのも、魅力的だ。

「なぁ、ユート。本気でアイツを嫁にする気はないか？」

「身内になれば、どれだけ利益を上げても家のモノに出来るから、ですか」

「それもある」

他にないだろうに、と思いながら、優斗は道具扱いされているクシャーナに同情した。

貴族と言うのは自由に結婚出来ないんだろうな、と言う漠然としたイメージはある。しかし、お金の為だけに、身分の低い、しかも１１も年上の男に嫁がせるのは、かなり酷い仕打ちだ、と優斗は、元々低いルエインの評価を更に下方修正する。

「そういえば、クシャーナと共に対外交渉をする件が抜けているな」

「とりあえず財政改革に集中したいと思いまして」

「まぁ、いいか。クシャーナは怒りそうだが、しばらくは俺が出張ればいいだけだしな」

通ると思っていなかった優斗は、少しだけ驚いた。

まぁ、無いなら無いで、むしろ助かると思いながら、優斗は先を促す。

「私の希望は提示しました。納得頂けるのであれば、報酬の割合と衣食住の詳細を話し合いたいのですが。

あ、そういえば私の所有する奴隷の扱い、どうされるおつもりで

すか？」
「お前の部屋に放り込んで置けばいいだろう。と、言いたい所だが、我が妹の頼みでな。別室を準備する予定だ」
「今のような形で、でしょうか？」
「いや、完全に別室だ。住み込みの使用人の部屋をあてがうつもりだが、どうだ」
相談相手が遠くに居るのは不便だな。そう考えた優斗は、この提案を辞退する事にした。

「まぁ、男には色々あるだろうからな。クーナには恨まれそうだが、金がかからないのはありがたい」
「出来れば食事は準備して欲しいんですが、可能ですか？」
「断ったらお前の食事条件を水増しするつもりだろう？」
「さぁ、どうでしょうね」
お互いに牽制をしながら、流れで衣食住の条件交渉が始まる。

結果、衣服は自前となってしまったが、代わりにフレイの分の食事が支給される事になった。
食事に関しては1日3回、現在使用人に提供されている物と同等か、それ以上の内容で提供される事に決まった。時間内に取りに行くか、行かせなかった場合はその限りではない。
住居はそこそこ良い、寝室がドアを挟んで別になっている部屋を与えられることになった。

「さて、報酬に関してだが。公国銀貨１０枚で、１割を与えると言う事でどうだ？」
「１割ですか？」
「お前の提示だ。異論はないだろう？」
ルエインは、この数字が実際にどれ程の金額になるのか、判っていない。だが、そう高くはならないだろうと予想していた。

優斗が何をするのか判らないが、どんな手を使っても、たった1か月で出来る事など、高が知れている。ならば、今回の契約では譲歩しても構わないだろうと判断した。彼は財政改革を1年以上かけて行うつもりであり、次の契約では、結果が出ていない事を理由に、割合を減らせば良いと考えていた。想像以上の結果が出た場合は、本気で取り込む事も考えなければならないが。

「公国銀貨10枚、って言うのも少し驚きました」
「本当に0にする訳にもいかないだろうが」
フレイに調べて貰った事だが、この屋敷の従者、具体的にはあのお姉さんの月報酬は銀貨1枚だと言う事だ。

本人曰く、衣食住込みでこの給与は、他と比べてかなり破格なのだそうだ。この国の農民は、食うに困らなければ十分、程度の稼ぎしかなく、平民でもさほど大差がない。

もちろん立場が違うので単純にどうとは言えないが、それなりなんじゃないかな、と優斗は判断した。

「内容はこれでいいか？」
「はい。正式な物が出来ましたら、読ませて頂きます」
こうして優斗の雇用条件が決まり、館勤めが始まった。

優斗がまず手をつけたのは、機織り機の改良だ。ウェブ履歴にある産業革命関係の記事からその説明等を元に、なんとかそれを作り上げ、実際に設置した。試行錯誤の後、情報漏洩を防ぐ為にユーシア家の抱える職人だけでなく、外の職人にも部品単位で作成を依頼し、全ての機織り機に設置できる数を準備するにはそれなりに時間

がかかった。

手が空いた時間は、この世界の伝承や常識を本で学ぶ時間にあてた。伝承や絵本の類はクシャーナも好きらしく、何度か話もした。

「この魔女は、実は聖女様だったと言う説もあるんです」

「ほう」

読んでいたのは、よくある魔女狩りの話だ。

絶世の美女が居た。何年も年を取らない事に疑問を持った者がそれを告発し、火あぶりにされた。火は燃え狂い、街ごと魔女は焼かれてしまった。

「聖女を火にくべた事に怒り、火の神が街を焼いた、と。そのせいで火のギフトを持つ者は少ないとか」

「へぇ」

火のギフトを持つ者が少ないから、そこから想像して作られた裏話と言う可能性もあるな、と優斗が考えていたのは、クシャーナにも伝わったようで、彼女は苦笑を浮かべた。

「確かに火のギフトは余り有用ではありませんので、あえて持っていると言わない人も多いですね」

そんな風にクシャーナと過ごすのも日課の1つだ。

一方フレイは、寝室に鍵がついている事を嘆いていた。おかげさまで最近の優斗は、安眠を妨害されずに済んでいる。が、それを少し物足りなく感じているのも、事実だ。

＊

全ての機織り機に飛び杼を設置して、きちんと作動させる事に成功した優斗は、1か月間の成果を報告する為にルエインの書斎にやってきていた。

「と、そんな具合です」

「生産量が2倍以上になるとは。凄いな、あの飛び杼とか言うヤツは」

「そうですね」

「一時的なモノでなく、ずっとああなのか？」

「はい。ところでルエイン様、少し良いですか？」

「なんだ？」

興奮気味のルエインは、次の改革案かと期待でそわそわしている。

「私の契約の話です」

「延長する気になったのか？」

「いえ、私の役目は十分に果たせたと思いますので」

「そうか。それは残念だ」

ルエインは残念そうに肩を落とした。

ルエインが残念がったのは、優斗が辞める事に対してではなく、更なる改革がもうない、と言う事への落胆だ。

普通に考えて、そんなに多量の知識を持っている訳がないな、と判断したルエインは、考えていた通り大きな利益が出る前に手放すのも良いか、と考えた。同時に、残らせるのであれば、きちんと対処しなければならないと口を開く。

「ユート、もう一度聞くが、アイツと一緒になる気はないか？」

「申し訳ありませんが」
「そうか」
初期投資に対し、利益はまだ出ていない。だから、ルエインは銀貨１０枚でこの技術が買えたと喜んだ。破格と言うレベルですらない、大儲けだ。そう考えるルエインの口元には、自然と笑み浮かんでいる。

優斗は懐から紙束を取り出した。それは職人達による飛び杼の設計図と、その組み合わせ方を書いた紙だ。

「これが飛び杼の設計図です。では、私はこれで失礼します」
「すぐに発つのか？」
「いいえ、明日の朝発つ予定です」
「そうか。クーナには会ったか？」
「既にお別れは済ませました」
残ってくれませんかとねだられたが、もちろん断った。

「これでお別れだな」
「はい、では」

あっさりと解放された事に安堵しながら、優斗は館を出てある場所へと向かった。その後は館に戻らず、宿へ向かう予定だ。いざと言うときの為にフレイを街中へと避難させてあったのだが、杞憂に終わりそうだ。

優斗はここ1か月、２つの商品をロード商会に売り込んでいた。

１つ目は蜂蜜。あんな事の後だったのでさすがに渋い顔をされたが、とりあえず買い取ってくれた。

２つ目は飛び杼。最初に持ち込んだ時は、作業性が倍になると言う話を眉唾物だとしていたプラートも、実際に倍以上出来ている事実を突きつければ納得した。

一介の行商人が持ち込んでは、夢物語と否定される物でも、貴族付きの肩書きがあれば話だけは聞いてもらえる。そこに実績を加えれば、食いつかない商人はいない。

苦心してレシピを売り、村を出た当初、優斗は情報をお金にする為には、コネと大量の資金が必要だと考えていた。何かを改良するにしても改良する品その物が必要になり、開発するならば試作品を作らなければならない。それを使える物だと証明するのも、かなり難しい。不本意とは言え、両方を手に入れる機会に恵まれた優斗は、これはむしろチャンスではないかと考えた。

今回の件に関して、振り返る。

ざっと計算しても、機織り機本体と飛び杼の試作品を作る資金、それを動かし続ける維持費として人件費、糸代、場所代。更に、自分に相手を信用させるだけの肩書や実績がなければ、実際に使える物か確認して貰う必要があり、それにもお金がかかる。その際、技術が盗まれる可能性もある。

優斗が個人で売り込もうとすれば数年越しになる計画が、今回の仕事では、機織り機は工場から借り、飛び杼の試作品のオーダーメイド代は改革費から出し、実績作りの為の維持費は、日常業務の延長としてこれも借りた形になり、データの比較をする際にも、飛び杼設置前の生産情報が既にある。ユーシア家が資金難であるが故に、

短い間隔で作成した布地を売っていたので、流通量でそれを確認できた事は幸運だったと言える。さすがに工場内に連れて行く訳にはいかない。

実のところ、優斗は他の技術の再現にも手を出していた。大きな結果は出なかったが、僅かに成功と言える物もあり、だがそれ以上に失敗もした。もちろんその資金は全て改革費から出されており、ユーシア家持ちだ。飛び杼に関しても、いきなり成功した訳ではなく、何度か失敗している。余力があったからこそ、失敗を重ねながらもなんとか成功させる事が出来たのだ。

要するに、優斗は開発費を全額負担させ、その結果を他に売り込んだ。

優斗が到着したロード商会は、無人のようだった。辞めた足で売り込みに行ったと言う流れになる予定だったので、おかしいなと思いながら踵を返し、宿へ向かう。

宿に戻り、フレイと合流した優斗は、これからの予定を確認した。

「帝国へ行くんですよね？」

「うん。帝国の商取引許可証、手に入れる算段がついたからね」

ロード商会は北を本拠地としている。そして帝国方面にも支店を持っている。

飛び杼の効果が予想以上に大きく、ルエインがその技術と莫大な利益を独占しようと命を狙ってくる可能性がある、と告げたプラー

トは、帝国へ渡るよう、勧めてくれた。

実際に暗殺を心配した訳ではないが、帝国の商取引許可証を得られるよう取り計らってくれると言われ、これを機会に身分詐称を解決出来ればと、帝国行きを決意した。帝国には紹介して貰った護衛付きの商隊に便乗して行く事になっている。

「ミルドさん達はどうするんですか？」

「ロード商会に委託中。戻るにしても、帝国経由かな。あっちのがあればこっちでも取得し易いかもしれないし」

良い土地があれば、そこで暮らすのもいいし。そんな風に思いながら、その土地での暮らしを想像する。

少し不安そうな表情を浮かべるフレイが目に入り、穏やかな思考が中断され、物作りに没頭する日々が終わった頃からよく浮かんでいた思考が頭を占拠し始める。

優斗はこちらに来てから、生き延びる為に色々な事をやってきた。だが、この街に来てからの行動は、本当に生きる為に必要な事だったのだろうか。自己満足とその場凌ぎの連続で、その行動の意味とそれが及ぼす影響を、きちんと考えていなかったのではないか。国外へ逃亡する羽目になった事が、その良い証拠ではないのか。

手に汗をかいている事に気づき、服で拭う。過ぎてしまった事はしょうがないと自分に言い聞かせ、優斗は眠って忘れようと、上着を脱ぐ。

そろそろ寝ようか、とフレイに声をかけ、ベッドに横になる。

ひさしぶりに夜這いが出来ますと、のしかかるフレイ。マジで眠いから今日は勘弁、と優斗が言うと、では後日ならいいのですか、

と相変わらずの会話が続く。

ふざけあいながら、優斗は先ほど考えていたこれからの事について思いを馳せる。この子と添い遂げると言う選択肢も、悪くない、と。

幸せな時間は、王国の大軍が攻めてきたと言う知らせが届くまで続いた。

騙し合い（後書き）

さて、そろそろ物語が大きな『転』を迎えようとしています。
フレイに惹かれ始め、だからこそ、今の状況が苦しい優斗。
この先、どんな試練が彼を待ち受けているのでしょうか。

四面楚歌

王国の大群が攻めて来た。そう叫びながら部屋に飛び込んで来たのは、騎士団に入ったはずのトーラスだった。彼の慌てた様子に、ただ事ではない、と判断した優斗達は、言われるがままに準備を整え、部屋を出た。

ひさしぶりに見るトーラスは、たった一か月で逞しく成長していた。

「ユート兄ちゃん、こっち！」
「わかった。フレイ！」
「はい」
いつの間にか二頭目が繋がれている荷馬車に乗り込んだ優斗は、御者台の上からフレイ引き上げ、荷台へ放り込む。

「しっかり捕まってくださいね！」
トーラスはそう叫ぶと、荷馬車を急発進させた。

裏路地を抜け、しばらく進んでから人の流れとは違う方向に向かっている事に気づいた優斗は、揺れる荷馬車に翻弄されながら、大声を出した。

「どこ行く気だ！」
「騎士団用の抜け道っ」
脱出路は確保済み。ならばトーラスの集中を乱すべきではない。

そう考えた優斗は、ここに居ても邪魔になるだけだと判断し、揺れに合わせ、転がり込む様に荷台へ飛び込む。

「って、おい。トーラス」
直前の判断をあっさり無視し、優斗は目の前の事象に対し、説明を求める。

「念の為だって言われたけど、たぶん」
「すまん」
末席とは言え、騎士団に所属する人間にその言葉を言わせるのは忍びなかった。

揺れる荷馬車の中でも、何度か深呼吸すれば落ち着きを取り戻す事が出来た。多少とは言え落ち着きを取り戻した優斗は、まずフレイに話しかける。

「どうすべきだと思う？」
「私たちがどうこう出来る状態じゃないと思います」
「確かに。トーラスには感謝しても仕切れないな」
会話をしながらも、２人はお互いを見ていない。その視線は、ここにあるはずのない光景に向けられている。

商品の絹が敷かれた荷馬車の一角。そこにはユーシア家の末娘である、クシャーナが横たえられていた。
揺れる荷馬車の中にも関わらず、まったく反応がない事が気になり、優斗が這うように彼女に近づくと、フレイもそれに続いた。

「泣いてるな」
「泣いてますね」
泣いた跡でなく、流れ続けている涙に、起きているのでは、と体を揺すってみるが、反応は返ってこない。

「寝込みを襲うなら、私にして下さい」
「余裕あるな、おい」
「つっこむ余裕があるなら、大丈夫ですね」
効果は絶大だな、と深呼吸に大絶賛を送った優斗は、現状把握に努めようと、思考を開始する。

今判っている情報は、王国軍が攻めて来て、戦争になっているらしいと言う事。トーラスのおかげで、街からは脱出出来そうだ、と言う事。

「トーラス、これからどこへ向かう予定だ!?」
「俺の村っ」
その返答を聞き、トーラスが歯を食いしばっている事に気づいた。

何か、思うところがあるのだろう。優斗はフレイと視線を合わせ、頷き合う。

「俺たちは何をすればいい?」
「じゃあ、寝ててっ」
こんな状況で寝られるか、と思った優斗だが、手探りで藁を集めて寝床の準備をしているフレイを見て、言葉がひっこんだ。

「じゃあ、寝ましょう。添い寝、しますか?」
「余計眠れそうにないから遠慮しとく」
脱力しながら、ふと気づく。

俺たちは今、逃げている。逃げている人間が、のんびり休憩している暇などない。だが、荷馬車があるならどうだろう。交代で眠り、ずっと荷馬車を走らせていた方が、効率的だ。

「了解。とりあえず寝る」
トーラスの真意を全て理解出来た訳ではないが、今はそれが最善だ。
そう考えた優斗は、ただひたすら眠る事だけに集中した。

昼は優斗、夜はトーラスと言う役割分担で荷馬車を走らせ続けた結果、既に関までの道を半分近く走破していた。夜に出発したので、1日と2晩でここまで来た事になる。

水が尽きたので荷馬車を止めた一行は、疲れ果てていた。

「水は私が汲んで来ますので、2人は休んでいて下さい」
「悪い、よろしく」
「ありがと、フレイ姉ちゃん」
フレイが川へと移動していったのを確認し、優斗はトーラスに声をかける。

「事情、聞いてもいいか？」
「見習いは邪魔だってさ。で、匿える場所があるのはお前だけだから、ってこの任務」
トーラスはまだ眠り続けているクシャーナを示すように、荷馬車へ視線を向ける。

騎士団員のほとんどは、街の住人か帰る場所を持たない者だ。だから、トーラスに指示を出した人間の言葉は間違っていない。

「この子は子供だから、1人で逃げられないからって。ちゃんと準

備出来なくて悪いって。
団長が俺なんかに頭下げて、こいつを守ってやってくれって」
涙を堪え、ぽつぽつ語るトーラスは、更に歯を食いしばり、拳をきつく握る。

かける言葉を思いつかなかった優斗は、フレイが戻るまで続いた呟きを、ただ聞き続けた。

水を補給し、馬の休憩も終わると、優斗が手綱を握って出発した。
優斗には暗闇で御者をする技術も経験もないので、この役割は代わりようがない。

優斗はこの一か月で、幾つか出来る様になった事がある。馬に乗る事。火をつける事。それ以外にも、行商中に必要だと思った技術を幾つか。

しかし、そんな技術は、今の状態ではまったく役に立たない。

「ユート兄ちゃん、代わるよ」
「暗くなったら俺じゃ無理だから、今はいい」
「でも」
「それより、状況を教えてくれ」
何もしていないと不安なんだろうな、と思いながら優斗はちらりと御者台の方へ首を出しているトーラスを見る

トーラスがクシャーナを連れて逃げる事になった理由は、大体判ったのだが、状況はまだ何も把握していない。

「王国軍が攻めて来たっていうのは言ったっけ？」
「聞いた」

「それがすごい数だったらしくて、国境からそのまま突っ込んできて」
似たような言葉が続いても、優斗は口を挟まず、耳を傾け続ける。
「王国軍は帝国の人に容赦しないから、早く逃がさなきゃいけないって言われて」
クシャーナの髪は黒。帝国系だ。それは優斗も同じ。
「気を失ったままのお嬢様を連れて馬には乗れないしどうしよう、って思ったらユート兄ちゃんの荷馬車思い出して。そういえば、ユート兄ちゃんも危ないって思ったから」
「それで来てくれたのか」
「うん。宿の場所、フレイ姉ちゃんに聞いてたし」
きっと見送りをしてくれるつもりだったのだろう。
優斗は俯いたトーラスの頭をがしがしと撫でる。しばらくそうしてから腕を止めて手綱を握り直すと、キョトンをした顔でこちらを見ていた。
「助かった。ありがとう、トーラス」
「え、っと。あ、うん」
「とりあえず、どこまで逃げれば安心だと思う？」
「関を超えれば、さすがに平気だと思うけど……」
言葉が尻すぼみになり、表情も暗くなっていく。
どうかしたか、と聞こうとして、気づく。逃げなければならないと言う事は、追手が付いていると言う事で、それは騎士団は敗北し、街が敵の手に落ちた事を意味する。
辛くとも、確認しなければならない事はある。そう考えた優斗は、

今まで遠慮していた言葉も、ぶつける事にした。

「実際、追手は来そうなのか？」

「わからない。でも、街は確実にダメだと思う」

「そうなのか？」

「住人を逃がしたら撤退するって。数の差が酷いから、城壁で時間稼ぎするって聞いた」

それがトーラスを励ます目的でかけられた言葉だったならば、後ろから来る可能性が高いのは追手だろう。だが、事実ならば騎士団が来ている事になる。

とはいえ、騎士団と追手がセットで来る可能性も高いので、急いで逃げる必要がある事に、代わりはない。

日が傾き始め、遠くの空が赤く染まり始めると、優斗は御者台を譲って、夕食を摂った。

更に3日経ち、優斗たちは関の近くにまで来ていた。

さすがに馬に無理をさせ過ぎたので何度か長い休憩を取ったのだが、それでも疲労が重なってペースが落ちてしまった。

「ユート兄ちゃん、なんで止まるの？」

「昼休憩。それと、ちょっと来い」

荷馬車を道の脇に寄せた優斗は、トーラスと共に下車し、森の中へ連れて行く。

「関所、もうすぐじゃん！　なんで止まるの？」

「聞け。確か、カダル領は王国と接してたよな？」

「うん。それがどうしたの？」

「王国がカダル領を攻めて、そのままこの辺りまで来ている可能性

は？」
「……」
関が目の前だからこそ、気を引決めなければならない。
様々な事を楽観視して痛い目を見た過去の自分を思い出し、怒りと共に情けなで泣きそうだったが、ぐっと堪えて口を開く。
「俺が行ければいいんだが、髪の色、マズいんだよな？」
「うん」
「悪いけど、頼む」
「任せといて。それに、これは俺の仕事！」
そう言ったトーラスは、ちらりと荷馬車に視線を送る。
クシャーナは、３日前に目を覚ました。それ以来、ずっと膝を抱えて俯いている。優斗もトーラスも余裕がなかったので、面倒はフレイに任せきりだ。
「ユート兄ちゃん」
「ん？」
「お嬢様の事、頼む」
「あぁ。何か話しかけとく」
何を話していいかわからないが、責めない様に気を付けよう。優斗はそう思いながら、荷馬車へと戻った。
トーラスは荷馬車の中から鞍を取り出し、手際よく馬に着けて跨る。トーラスが繋いだ２頭目に着いていた物らしく、ずっと荷馬車の隅に転がっていた。
トーラスが出発した後、食事を摂った優斗は、約束を守る為にクシャーナの隣に腰かけた。

「クーナ」
「……」
「一先ず、トーラスの村へ行く事になってる」
「……」
「そこまで行ったらお別れだな」
ぴくりと反応があった事を、優斗は見逃さなかった。

色々と思うところはあるが、ここ1か月間、毎日のように笑顔で接してくれた相手を無下に扱えるほど、優斗は冷淡な性格ではなかった。

「行商も再開しなきゃいけないし」
「――あの」
か細い声。だが、間違いなく、彼女が発した声だ。

「優斗様も、私を捨てるの？」
「捨てるって。逃がされたんだろ？」
「私だけ、違うから。でも、おんなじゆうとさままで……？」
トーラスの話では、彼女の兄弟の何人かは各自で脱出を図り、何人かは騎士団と共に戦場に残ったらしい。

正確には、帝国系の人間は帝国方面へ逃げ、公国系の騎士は戦場へ。これは、捕虜になった際の扱いの関係だ。王国は、帝国民に容赦しない。

そんな中、誰かに預けられたクシャーナだけが、皆と”違う”

もちろん、幼さ故、1人で脱出する事が出来ないと判断されたからだ。しかし、そんな理屈を今の彼女が理解できるはずもない。

「みんな、いなくなる」
「トーラスが着いて来てる」
「さっき、いなくなりました」
そういえばそうだったな、と思いながら、無駄だろうなと思いながら偵察に行った事を伝える。

予想通り、虚ろな目をした少女は、碌に反応も示さなかった。

「そーいや、荷馬車反転しといた方がいいかな」
何もなければ単なる2度手間だが、トーラスが逃げ帰って来た場合、こちらも即出発しなければならない可能性がある。

フレイとクシャーナにはちょっと奥に隠れて貰うか。そう考えながら腰を浮かした瞬間、袖に抵抗を感じた。

「ん？」
ずっと俯いていた顔が、目が、こちらを見ている。

空色の瞳に吸い込まれるように、優斗はそれを見つめ返す。

「優斗様」
呼びかけられたが、返事をしようにも声が出ない。

まるで金縛りにあったように動かない2人にフレイが気づき、向かってくる音がする。

「またすてられるんですか？」
答えに迷った。だが、即座にその迷いに意味がない事に気づいた。

「そんな事はない」
果たしてそれは真実だったのか、それとも嘘だったのか。優斗自身にも判らぬまま、唯一それを知るクシャーナは、その場に倒れ込んだ。

一瞬、焦った優斗だが、フレイに「寝てるだけです」と言われ、安堵した。
とりあえず、予定通り2人を少し奥に避難させ、眠っているクシャーナには毛布を被せておく。

「悪いけど、見張ってて」
「はい」
「荷馬車が走る音が聞こえたら、しばらく出てこない事」
「別の荷馬車が通過した時は、すぐに教えに来てくださいね」
「了解」

フレイと別れ、御者台でトーラスの帰りを待ちながら、今後の事を考え始める。

行商を再開するつもりだったが、クシャーナが落ち着くまで村に滞在した方がいいのかもしれない。不本意ではあるが、自分は懐かれている。

優斗は世話になったトーラスに、恩の1つくらい返したいと思っていた。そして彼女は、彼の守る対象だ。

「どうするかな」
そう呟きながら、空を仰ぐ。

こんな事に巻き込まれたのは、間違いなく自分のせいだ。フレイを巻き込んでしまっているのも、１００％自分が悪い。だが、それでも考えてしまう。ルエインがあんな事をしなければ、すぐにあの街を発っていたのではないか、と。彼さえいなければ、こんな目に遭わずの済んだのではないか、と。そして彼は、彼女の。

首を振って思考を飛ばす。

全て自分が悪い。だから、クシャーナに責任はない。むしろあんなに慕ってくれていたのだから、大人として受け入れてあげるべきだ。

延々と迷い続ける優斗の前に、トーラスが1人の男を連れて現れたのは、1時間ほど後の事だった。

トーラスと共に現れたのは、関の兵士のターキンだった。

「どうも、おひさしぶりです」

「よう、元気だったか？」

何故ここに、と言う疑問を込めてトーラスに視線を送るが、首を横に振られる。

状況が判らないし、とりあえずフレイたちの事は伏せておこう。そう決めた優斗は、営業用のスマイルを浮かべて、ターキンと向かい合う。

「ちょっと話がある。お前に関する事なんだが、坊主、ちょっと外せ」

「ちぇ。じゃあ、散歩でもしてくる」

フレイ達と合流して貰おう。そう考えた優斗は、ターキンに背を向けてトーラスを見送り、彼女たちの居る方向を視線だけで示した。

トーラスの姿が見えなくなると、ターキンは真面目な顔で話しを切り出す。

「お前、関には来るな」

「いきなりですね」

予想範囲内の言葉ではあったが、同時に最悪より少しだけまし、程度でしかない展開でもある。

「俺は詳しい事は知らん。聞いた話をそのまましてやるから、黙って聞け」

「はい」

優斗がそう答えると、ターキンは腕を組んで語り始める。

「関に公国の正規兵が来た。帝国が攻めて来るかも、つってな」

何故に帝国、と思いながら、約束なので口には出さない。

「帝国に支配されてたユーシアを取り戻してくれたお礼に、あそこから一緒に攻め込むんだと。

抜けてきた時、ユーシアは関がないから、うちとカダルに兵が来たって訳だ」

イマイチ状況が把握仕切れない優斗は、頭を整理したいなと思ったが、ターキンの口は止まらない。

「で、帝国と通じてたユーシアの奴らをとっ捕まえるって話になってる。そこの娘が、お前さんと同じ黒い髪で白っぽい肌なんだと」

ターキンの言葉に、どきりと心臓が跳ね上がり、無様に驚いてし

まう。

「んな、驚かなくても捕まえたりしねーよ。ただ、関まで来られるとそうはいかねーけど」

戸惑う優斗を見て少し気まずそうに頭をガリガリとかき、それでもターキンは言葉を止めない。

「今、そいつの捜索隊がこっちに向かってるらしい。悪い事は言わねぇ。カダル方面へ逃げて、関の手前で山に入れ。

山小屋か、小さな集落でも探してそこにしばらく隠れてろ。そいつが捕まりゃ、多少ましになる」

荷物は坊主に預けりゃいいだろ、と言ったきり、ターキンは口を閉ざした。

とりあえず疑問を解消して置こう。そう判断した優斗は、思い浮かんでいた事を、順次、外に出す。

「何故、敵は帝国なんですか？」

「色だろ。俺も、色つきは苦手だ。お前は薄いから気にならんがな」

「ユーシアはどうなりましたか？」

「おちた。領主は死んだらしい。それ以上は知らん」

「俺が関の向こう側へ行く方法、ありますか？」

「森を抜けりゃいいが、あそこは狼の縄張りだ。お勧めはしない」

「荷馬車の中に隠れるとか」

「正規兵の検査から逃れるのはキツイと思うぞ」

「かつらとかで」

「肌の色は隠せんだろ」

結局のところ、クシャーナを連れていてはどうしようもない。

一瞬、彼女を付きだせば通れるかもしれない、と言う思考が浮かんだが、すぐにかき消す。それは絶対にしない。

しかし、状況は最悪だ。東西に関があり、北からは追手が迫っている。南は森で、狼の縄張り。

「これ、餞別だ。もってけ」
「ありがとうございます」
「馬に乗ってすぐ出発すれば、逃げ切れるはずだ」
「へ？」
優斗の上げた素っ頓狂な声に、ターキンは呆れた顔でため息を吐いた。

「追手が迫ってるって言っただろうが。勘違いでも捕まりたくなけりゃ、今すぐ逃げろ。
早馬が来てからそれなりに経ってるからな。荷馬車でちんたら進んでたら、分かれ道までに追いつかれるぞ」
想像以上に切迫した状況に、優斗は、まだ自分が楽観的であった事を戒める。

「しょうがねぇなぁ」
ターキンが馬にまたがる。そして、優斗に向けてにやりと笑った。

「この先でちぃっとだけ足止しといてやる。1時間したら帰るから、それまでにカダルの方へ入れ」
「ありがとうございます。
あっ」

優斗の反応に、ターキンが何事かとこちらを見ている。少しだけ迷ってから、迷惑ついでに頼まれてください、とターキンにある事

を頼み込む。しゃーねーな、と快く了承してくれたターキンに感謝しながら、彼の背中を見送る。

やれるだけの事をやるしかない。優斗は固い決意と共に、急いで3人の元へ向かった。

四面楚歌（後書き）

男キャラ2人再登場です。
商売で下手を打って逃げ出すのも行商の一環ですよね。
逃げた原因を無視してそう言い張ってみたり。

逃亡者

森の入り口に差し掛かると、後ろから声をかけられた。

「ユート兄ちゃん」

声に振り返ると、そこにはトーラスとフレイが居た。

フレイが居た事は少々予想外だったが、むしろ説明の手間が省けた、と優斗は顎を引き、2人を見据える。

「俺とフレイはターキンさんが言ったようにここから山へ逃げる」

「ちょっと待って！」

トーラスの叫ぶような静止に、優斗は少し焦りながらどうしたのかと尋ねる。

「ここからは止めた方がいいよ。森を抜けてから山登りじゃ時間かかりすぎるし、ここの森は野生の獣が多いし」

ターキンがカダル方面から山に入れと言った理由はそれか。

急がなければならない。だが、焦りは禁物だ。優斗はそう自分に戒め、深呼吸をする。

「悪い、トーラス。じゃあ、とりあえず馬で逃げる。トーラスはどうする？」

「どうするって。一緒に行くに決まってるだろ！」

クシャーナも居るし当然か、と思いながらフレイに目配せする。

急いで準備しろ、と言う優斗の視線を受け、彼女は森の奥へ走り去っていく。クシャーナを迎えに行ったんだろうな、と思いながら、

トーラスに視線を向ける。

ここ数日、世話になりっぱなしのトーラス。アイツに似たクシャーナ。しかもどちらもまだ１０歳の子供。そんな2人を積極的に見捨てて行くと言う行為は、優斗には難しい。足手まといであろうと、結局連れて行くしかない。

「荷馬車はそのままで怪しまれないか？」

「怪しいかも」

荷馬車から荷物を引っ張り出しながら相談した結果、車輪を壊して事故を偽装して置く事に決め、すぐに実行する。

捨てて行く物、持って行く物を大雑把に餞別し、全てを各自に振り分けるのに十分以上、それを鞄に詰め込むのに更に時間を使ってしまう。

「ユート兄ちゃん」

「ん？」

「鞍なしで馬、乗れる？」

「……自信はない」

馬に乗れるようにはなったが、鞍なしで乗った経験はない優斗は、新たな問題に焦りが増していく。

焦るな、と思えば思うほど焦る心を落ち着けるようとするが、上手くいかない。

「俺は乗れるけど……」

そう行ったトーラスが、ちらりとクシャーナの方を見る。

その視線が何を意味するのか、優斗には判らなかった。

「では、私がトーラス君と一緒ですね」
「それでいい、ユート兄ちゃん？」
それで何が解決するのか理解出来ないが、それが最善ならば仕方がないと結論した優斗は、今は時間が惜しいので聞き返す事無く首肯し、馬に跨る。すぐに持ち上げられたクシャーナをフレイから受け取ると、自分の前に座らせる。

「兄ちゃん、これ」
「ん？　あぁ、そうだな」
優斗は渡された麻布を受け取り、自分の背中に回す。それをクシャーナの胸元で合わせ、落ちない様にしっかりと結んでいく。

クシャーナは優斗が胸元に手を伸ばした瞬間、ぴくりと反応したが、それ以外はされるがままだった。

「じゃあ、行くぞ！」
「はい」
「うん！」
荷馬車に残した商品に少しだけ後ろ髪を引かれながら、優斗は手綱をひいた。

出発して1時間、カダル方面に入った優斗達は、山沿いの道で馬を止めた。

トーラスが馬から降りたのを確認すると、きっとここから山に入るつもりなのだろう、と判断した優斗は、同じく下馬しようと麻布を解く。

「信じます」
一瞬、誰がしゃべったのか判らなかった。
馬の横では、フレイが呆けている優斗を不思議そうに見つめている。両腕をかかげて居るので、クシャーナを降ろせと言う事なんだろう。そう判断した頭が、自然な流れで彼女を手渡す。
「ありがとうございます、フレイさん」
「へ？　あ、はい、クシャーナ様」
フレイがたじろぐ姿を数えるほどしか見た事のない優斗はそれに驚き、それ以上にクシャーナの反応に驚いた。
優斗の記憶では、クシャーナは基本的にフレイに話しかけない。ルエインも同じだったので、基本的に貴族は奴隷を無視するものだと優斗は思っていた。
「ところでフレイさん」
「なんでしょうか」
「優斗様とは、その、いわゆる男女の仲なのでしょうか？」
自分も馬から降りようとしていたところにその言葉が耳に入り、優斗は横向きに落下した。
痛い、と思いながら顔を上げると、こちらを向いているフレイのスカートが揺れ、白い膝がちらりと見えた。
「残念ながら、違います」
「本当なんですね。意外です」
確かに1か月もの間、同じ部屋で暮らしていた男女がそういう関係でないのは不自然かもしれない。

優斗はそう考えながらも、でもなんでそれを１０歳児に指摘されなきゃならないんだ、と心の中で絶叫した。

「フレイさんでダメなら、私なんてもっと無理ですね」
「幼女趣味の可能性もありますし、試してみては？」
「コラ、余計な事吹き込むな」
そして馬を繋いでくれた上、今も火の準備をしてくれているトーラスの様に働け。

何もしていない自分を棚に上げてそう思った優斗は、これ以上２人に話をさせるのは危険だと、急いで立ち上がり、間に割って入る。

「フレイ、食事の準備して。クーナ、そんだけ元気ならトーラスにお礼の１つも言って来い」
「それなら、まず優斗様にお伝えしなければいけませんね。ありがとうございます」
「俺は何もしてないぞ」
「ならば、彼は役目を果たしているだけです」
もちろんお礼は言いますけどね、と言ってクシャーナは微笑んだ。

よく判らないが完全復活だな、と思いながら自分も何か手伝おうと、優斗は背負い袋を降ろしながらトーラスに近づく。

「何か手伝う」
「じゃあ、燃やすもの拾ってきて」
最年長者であるにも関わらず、サバイバル能力は最下層レベルの優斗に文句などあるはずもなく、トーラスの指示通り乾いた木を探す事になった。

夜の山歩きは危険だ。体力が低下している時ならば、なおさら。
話し合った結果、そう結論した一行は、少し山に入った場所で野宿をする事になった。

まず火の番をする事になったトーラスは、遠くに見える灯りをじっと見ていた。

「ユート兄ちゃん、あれやっぱり」
「可能性は高いな」
誰か来た、と交代の時間より早く起こされた優斗は、起こした本人であるトーラスと共にその光景を見つめていた。

追手が来た。そう判断せざるを得ない状況だ。灯りの数から十人以上はいる、とはトーラスの弁だ。

「山に逃げ込むか？」
「馬を残すと、山狩りされるかも」
「隠すのも連れて行くのも難しいか」
一先ずフレイだけを起こそう。そう決めた優斗が振り返ると、そこには既に起き出した2人の姿があった。

「ご主人様、何か思いついているんですよね？」
「いや、まぁ、一応」
なるべく使いたくない手だが、優斗は1つ案を思い浮べていた。

眠そうに目をこするクシャーナ以外の視線が集まる。気が乗らない提案なのだが、最悪の場合は実行せざるを得ない、と口にだけは出す事にした。

「単なる消去法になるけど、俺とクーナが見られたらマズくて、馬

は二頭。となると、トーラスとフレイが出向いてここでやり過ごすしかない。俺たちはその間、山の中へ隠れる」
「いいと思います」
「それしかないかな」
「俺は反対」
提案者に反対され、2人が驚く。
「相手がまともとは限らないからな」
怪しい場所で野宿している2人に、何か適当な理由をつけてからんで来る可能性がある。
主にフレイの心配をしながら、優斗は次点の策を考え始めるが、良い案は浮かんでこない。
「じゃあ、俺が偵察に行って、大丈夫そうならフレイ姉ちゃんだけ呼ぶ、ってのはどう?」
「ダメだったら?」
「大声で叫ぶから、先に逃げて」
「お前の危険度が高すぎる」
「お嬢様を守る騎士なら、このくらい当然だって」
やる気満々のトーラス。代案もない優斗は、偵察に行くにしてももっと安全に出来ないか、と考え、今すぐにでも飛び出していきそうなトーラスを足止めする意味も込め、思いつくままに言葉を紡いで行く。
「叫んで知らせると仲間がいる、逃げたと判断されるから、他の方法が良い」
「たとえば?」
「とりあえず、従順にしながら女を連れている事を伝えて、隠れさせているから呼ぶ、と言う」

「そっか。叫ぶ前に口封じされないようにだね」
「違う。叫んだ後も安全を確保すべきだ」
「どうやって？」
「叫ぶ以外の方法を使うか、叫ぶ内容を不自然でないものにする」
少しでも危険を減らす為に、ひたすら思考する。

トーラスが行ってしまえば、優斗は安全な場所に居るしかない。
ならば今しか役に立てる時間はない、と必死に考える。

「名前を幾つか準備しておく。
例えば、ニールと叫んだら相手が危険だから3人で逃げる。ミールと叫んだらトーラスが戻ってくるのを待つ。フレイだけ呼ぶ時はフレイでいいかな」
「おー、さすがユート兄ちゃん。それ、いいじゃん」
これでもトーラスが危険な事に変わりはない。

もう少し案を練りたいが、時間がない。そう判断した優斗は、仕方なくそれでゴーサインを出した。

「じゃあ、行ってくる」
鞍のついた馬に乗り、トーラスが灯りの方へ消えていく。

「じゃあ、俺たちも準備だな」
「はい、ご主人様」
「はい、ご主人様」
連なった言葉に、優斗は驚いて振り返る。

その先には、ぺろり、と舌を出したクシャーナと、ジト目で睨むフレイが居た。

「あほな事やってないで、行くぞ」
優斗は返事を待たず、準備を始める。

火を消し、馬を少しだけ奥に繋ぎ直す。各自荷物は背負っており、逃げる準備は万端だ。トーラスの荷物は、彼が身軽になれるよう、手分けして持っている。

暗闇の中で待つ事数十分、火がすぐ近くまで来た、と言うフレイの報告に続いて、トーラスが彼女を呼ぶ声が聞こえる。

「では、行ってきます」
「気を付けて。危なかったらすぐに逃げる事」
「かしこまりました」
預かっていたトーラスの荷物を渡す。

音を立てる事すら恐ろしい状況に、優斗とクシャーナはまったく口を動かさず、その場に待機し続けた。

「ご主人様」
おかえり、と口だけを動かし、戻ってきたフレイに呼びかける。

フレイが行ってから、1時間以上。そういう種のものではなくとも騒ぐ声が聞こえていたので、優斗は気が気でなかった。

「抜けて来て大丈夫？」
「見張りの人以外は眠りました。出てくる時に手洗いに行くと伝えてきましたので、着いてくる様な無粋な人は殴り倒せばいいと思います」
それに、トーラスくんに見張りを頼んでますから、と言いながら、フレイは優斗が返答する暇もなく言葉を続ける。

「北から、クシャーナ様を探しに来たそうです。道中に荷馬車を見たらしく、持ち主だと告げたら、そこまで行って修理してくれるそうです」

嘘ばかりで騙すのは難しいから、真実を混ぜて話せ。

優斗のアドバイス通り、荷馬車が壊れ、逃げる為に仕方なく馬だけでここまで来たと説明したのだろう。その結果がこの状況と言う訳だ。

「数人を残してカダルへ向かって行きました。向こうへ着いたら関の兵と交代して巡回するそうです」

「マズいなぁ」

最初の判断を失敗した、と優斗は悔やむ事になった。

見られたからには、馬を捨てて山に入れば怪しまれる。馬を預けに行ってもらい、街道沿いに潜んで合流しようにも、時間がたてば巡回が始まる。

もう今すぐに4人で山に入るべきか。優斗はそう考えながら、クシャーナに視線を向ける。

「子供の足で逃げ切れる相手じゃないかな」

「そうですね」

現状、有効な案は1つだけあるが、実行するには問題がある。

優斗の案はこうだ。

合流地点を決め、2手に別れる。

片方はフレイとトーラス。荷馬車を回収したらカダルに入り、山

へ向かう。もう一方は優斗とクシャーナ。人目を忍んで山を登り、カダル領へと入る。

この案は問題点が多い。まず、合流地点を決める為の地図と土地勘がない事。携帯もＧＰＳもないこの世界で、おおざっぱな地点情報だけで合流すると言うのは、難しい。

次に、優斗とクシャーナには山を登るスキルがない事。途中で迷うか、力尽きる可能性がかなり高い。

あの集団がどの程度信用できるのかが未知数である事も、懸念の１つだ。

「何か良い案がおありですか？」

「ない。いや、あるけど成功率が低すぎて案と言えるか微妙」

概要を説明すると、フレイは少し考えてから、真顔になる。

「低い可能性にかけるか、クシャーナ様を差し出すか、どちらかですね」

その言葉に、優斗の心臓が大きく跳ねる。

クシャーナを差し出す場合、その役目は優斗以外、すなわちフレイかトーラスが行う事になる。トーラスは確実にやらない。フレイは命令すればやるだろう。

仮にフレイに命じたとしても、トーラスにより優斗の存在が告発される危険もあるので、良い手ではない。

「差し出す気はないのでしょう？」

様々な理屈を考えながらも、完全に無かった訳ではない優斗は、

すぐには頷けなかった。

後ろでクシャーナがびくりとしたのが判るが、今はフレイの言葉に耳を傾ける事を優先する。

「やっぱりご主人様は変な人ですね」

「今はふざけてる場合じゃ――」

「こんな事に巻き込まれた原因の一端だと思っているのに、助けられるなら助けたいと思ってますね。

いえ、この場合、見捨てたくない、と言う方が正しいのでしょうか」

言葉を遮られた優斗は、続く言葉に絶句する。

「気に入った、と言うよりは、誰かに似ているのでしょうか」

「似ている？」

背後から聞こえる呟きにまで気を配る余裕は、優斗には存在しない。

「ケンジ、と言う方か、ユミ、と言う方でしょうか」

何故その名前を。

そう叫びそうになった優斗は、状況を思い出し、慌てて口を押える。

「反応から察するに、ユミさんの方でしょうか。ちなみに、寝言で聞きました」

フレイと同じ空間で寝泊まりする機会は多い。聞かれていても不思議ではない。

優斗が覚えている限り、夢に出てくるのは家族かアイツである事

が多い。その中で名前で呼ぶのは、その2人だけだ。

両親の可能性は、彼女の年齢から除外したのだろうと考えれば、決してあてずっぽうな推論ではない。

「恋人ですか？」

「元、な」

下手な言い訳は時間を無駄にすると判断した優斗は、素直に応える。

「振った、訳ではなさそうですね。振られた訳でも」

ホント、女の勘って怖いな。

状況を忘れ、優斗は呆れかえる。

「正解。単なる死別。そんなに珍しい事じゃない」

気が済んだか、ならそれよりも優先すべき事があるだろうと続ける優斗を、フレイは何も言わず見つめ続けている。

「早く戻らないと、怪しまれるぞ」

「これからどうすればいいのか、教えて頂けたらすぐにでも」

「だから、怪しまれる前に戻れ」

「戻って、どうするんですか？」

「どうって、とりあえず寝て、それで」

「本当に変な人ですね」

その呟きは、優斗に向けられたものではなく、彼女の独り言だった。

「商いでは貴族すら出し抜こうとする程豪胆な癖に、それ以外だと本当に優柔不断」

呆れた表情のフレイは、ぴしっ、と人差し指を優斗に向ける。

「現在の手札から最大の利益を出してください。ご主人様なら、出来るはずです」

フレイから出された『問題』に対し、優斗の頭は自動的に答えを探し始める。

存在を確認された時点で、2人は逃げられない。ならば、荷馬車まで行かずとも、結局、関を越えなければ怪しまれる。

この状況で最も安全な状況は、フレイとトーラスは荷馬車を回収して関を超える事。優斗とクシャーナは山を越える事。ただし、山越えの技能がないので、迎えを準備する必要がある。

結論を出した頭が、口に指示を出す様に求め、一瞬だけ迷ってから許可が降りる。

「2人は関を超えて、カダル側から山に入って迎えに来て」

「合流の時間と場所はどうしますか？」

「こっちが到着する時間が不明だから、場所だけ指定する。地図買ってここから北に進んだ場所を調べて。行き止まりは基本右へ行く。あぁ、東って事ね」

「北東方面にある集落か山小屋を探せばいい訳ですね」

「寄った場所には目印置いてくから。こんな感じで」

記号と数を書き、数は日数を差し、今夜が明けて朝になった時点を1日目とする事を決める。フレイ用の記号も決め、書く場所の大体の目安も打ち合わせておく。

打ち合わせが終わり、優斗は最も大きな問題について考え始める。それは、トーラスがこの案、すなわち、守る対象から離れなければ

ならないと言う事を納得してくれるかと言う事だ。その対応策を断られないくらい信用があるといいな、と思いながら、優斗は咳払いする。

「あと、トーラスに伝言頼んでいい？」

「どうぞ」

少し長く息を吸い、フレイを真正面から見つめながら、小さな声で、しかし力強く言葉を吐く。

「クーナは俺が責任を持って守るから、お前はフレイを死ぬ気で守れ」

「それ、私が言うのは恥ずかしいんですけども」

「大丈夫。俺も恥ずかしい」

フレイの顔を見ていられなくなった優斗は、背後でくすくす笑うクシャーナを振り返る。

「フレイの足音に紛れて、離れよう」

「わかりました」

「じゃあ、フレイ。また」

「はい。また会いましょう」

必ず会う。そう自分に言い聞かせながら、優斗はフレイと逆方向へ歩き出した。

逃亡者（後書き）

話が進みにくい場所に突入しました。
動きのない、話を進める為の話が続くかもしれません。
書いてて楽しい交渉シーンはもう少しだけ後になりそうです。

溺れる者

優斗にとって初めてとなる山歩きは、想像以上に大変だった。

一日中歩き続けた優斗たちは、風が避けられそうな岩陰を見つけ、そこで夜明かしをする事に決める。

「火は、マズいよな」

「っあ、はぁっ」

優斗がある程度ペースを合わせたとは言え、遅れる事なく着いてきたクシャーナが、疲れ切ってその場にへたり込む。

「休んだら夕食にしよう」

「っ、はい」

息遣いに隠れてしまいそうな小さな返事。

声を出すのもキツイのだろう、と判断した優斗は、腰から蜂蜜で作った飴を取り出し、クシャーナの口元へと差し出す。

「ほれ」

億劫そうに視線を向けたクシャーナは、それが見覚えのある物だと確認すると、優斗の手を取り、手のひらに舌を這わせてそれを口に含む。

「じっくり味わえよ」

精神力の方が戻ったのか、クシャーナはコクコクと大きく首を動かす。

街を出る前にと大量に作っておいた飴は、そのほとんどが優斗の

腰にぶら下げられている。フレイに渡す時の反応が面白いので、いつの間にか優斗が持つ癖がついていた。

優斗は自分の口にも1つ放り込みながら、夕食の準備を始める。準備と言っても、荷物を降ろして水とパンを取り出すだけだ。燻製肉もあるが、これは獣が出た時用の囮に取っておきたいので今は節約しておく。ほとんど居ないと言う話だが、火も焚けないので用心するに越した事はない。

「ちょっとは回復した？」
「はい。山を登るのがこんなに大変だとは思いませんでした」
騎士団に同行して様々なところへ行く機会があったと言うクシャーナは、お昼前までは元気で、何度か話しかけても来た。優斗が体力を温存する為に黙っていろと指示すると、素直に従いながらも少しだけ不満そうにしていた。

この子は少しどころかかなり危機感が足りていないのではないか。少し前の自分を棚に上げてそう考えた優斗は、夕食前に注意しておくことにした。

「それが判ったなら、明日からはちゃんと黙って歩く事」
「はい、優斗様」
素直な返事と共に返ってきた笑顔に、明日はまだ大丈夫だろうと判断した優斗は、食事に手をつける。

優斗に続いてパンを手に取ったクシャーナを見て、そう言えばと昼食時の事を思い出す。

「水は貴重だから、ゆっくり噛んで、味わって食べる事」
「はい。おいしくないですけど、そうします」

貴族の食べる真っ白なパンに比べれば、安い麦で焼かれた黒パンは固くて味気がない。

文句を言うだけならまぁいいか、と思いながら、優斗は水を一口含む。疲れからか、慣れからか、彼女は少し前から不満を口にする様になっていた。

「この後はどうされる予定なのですか？」

「ん？　あぁ、とりあえずクーナは寝て体力を回復。俺は寝ないで見張り」

「優斗様は眠らないのですか？」

「明るくなり始めたら寝る。その間は見張りを頼む事になる」

「わかりました」

子供に見張りを頼むのはどうかと思うが、いないよりはましだろう。

後で気を付けるべき点だけ伝えておこうと考えながら、そのほとんどがフレイに教えられた知識であった事に気づく。

優斗はこの世界において、彼女に依存している事を自覚している。その割合がものすごく大きいとも思っていたが、それでも足りないほど、依存していたのではないかと思い始めていた。

「火を焚かないそうですが、寒くないでしょうか？」

クシャーナの言葉に思考を中断され、優斗は右手外套の端を掴む。

続いて左手でクシャーナの降ろした鞄を指差し、それぞれに彼女が視線を向けたのを確認してから口を開く。

「そこに入ってる毛布とこの外套で暖を取りながら寝る」

「その間、優斗様はどうされるのですか？」
言葉が足りなかったか、と優斗は外套の前を開き、自らの膝を指差す。
「クシャーナがここに座る。２人分の体温を外套と毛布で包み込んで暖を取る。わかった？」
「……なるほど」
子供とは言え、女の子だ。少しは抵抗があるかと予想した優斗は、幾つか考えていた言い訳を思い浮べる。
「では、失礼します」
考え事の隙を突かれ、唐突に立ち上がったクシャーナに、開けた外套の中へするりと侵入されてしまう。
あっさりだなー、やっぱり羞恥心とかまだないんだろうな、と思いながら、優斗は苦笑する。
「もう少し奥へ移動させて。それと、荷物をまとめて毛布も取らないと」
「あ、そうですね」
素直に立ち上がったクシャーナは、荷物を一か所に集め、その隙に毛布を取り出した優斗はもたれ掛ける事が出来る場所へと移動する。彼女は再びそこに収まる時も妙に上機嫌だった。
おやすみ、と言いあってからしばらくすると、クシャーナはすやすやと眠りについた。
山に入って三日。
朝に寝、昼は歩いて夜は見張りと言う繰り返しの３日間を過ごし

た優斗は、火を焚いていた。

歩き疲れたクシャーナが、のろのろとこちらに近づいてくる。山は徐々に寒くなっており、追手は気配もない。不用心だとは思うが、背に腹は代えられず、凍えて死ぬよりましだと言う苦渋の決断だった。

火打石を叩き、火種を作る。トーラスやフレイなら数十秒で終わる作業に、優斗はもう１０分以上を費やしている。

更に１０分を費やし、なんとか作った火種を木に移す際に消してしまい、また火種を作り直す。これを３回繰り返し、ようやくたき火を作り出した時には、辺りは真っ暗だった。

「シンドイ」

「すいません。私が出来ればよかったんですけど」

優斗はそれに返事をせず、燻製肉を取り出して火であぶり始める。

ひさしぶりに温かい食事を摂った２人は、少しだけ回復した体力を無駄遣いしないよう、そのまま眠る事にした。

火があっても毛布が１枚である事に変わりはなく、今日も２人はひとつに固まっている。膝の上で眠るクシャーナを見つめながら、優斗は昔の事を思い出していた。

一緒に住んでいた頃、アイツが優斗の膝の上で眠ってしまった事があった。後でアイスを上げるから、と言うおばさんの甘言に乗せられて、起きるまでそのままにしていた時、ずっと見つめていた寝顔とそっくりだ。きっと、瞳の色が見えないから余計にそう感じるのだろう、と思いながら優斗は相好を崩した。

クシャーナの髪を撫でながら、ここ数日で傷んでしまった事を少し残念に思う。前に触れた時はさらさらだったのだが、今は少しひっかかりを感じる。火が焚けなかった間は、少しでも熱が逃げないように縮こまっていたので、こうやって眠っている姿を観察するのは初めてだと気づき、同時に昨日までの余裕のなさも思い出す。眠ってはいけないとひたすら考え続けた時間は、本当に辛かった。

火の熱とクシャーナの体温に包まれた優斗は、いつの間にか目を閉じていた。

顔の上に落ちて来た水滴で目を覚ました。

「やばっ」

優斗が跳ね起き、その勢いでクシャーナも目を覚まし、目を白黒させる。

「えと、おはようございます」

「おはよ」

完全に寝入っていた事に反省しながら、優斗は空を見上げる。

火を焚いても来ないと言う事は、追手がかかっていないものだと思われる。ならば現状、雨の中を無理に歩く必要はない。しかし、ここには屋根がない。木があるので多少はましだが、体力はひたすら奪われ続ける事になる。ならば雨宿り出来る場所を探すべきだ。そう判断した優斗は、クシャーナを膝から降ろして立ち上がる。

「出発出来るか？」

「すぐに準備します」
クシャーナも色々と限界が近い。それでも優斗の言葉に、素直に従ってくれる。

朝食の代わりに飴を口に放り込むと、2人は黙々と山の中を進んでいく。
空が暗く、しかも雨で視界が制限されている為、歩きにくい上にどれくらい歩いたかも判断しづらい。

雨の中で夜明かしすれば、凍死しなくとも動けなくなってしまう可能性がある。そう考え、焦り始めた優斗のペースは、知らず知らずに上がっていく。

ペースが上がり、しかも雨で今まで以上に体力が削られ続ける。この状況で、それが起こったのは必然だったと言える。

「ん？　あれは山小屋か？」
優斗が喜び勇んで走り出した後ろで、クシャーナが倒れた。

山小屋が無人である事を確認してから、ようやくクシャーナが居ない事に気づいた優斗は、引き返す道がどこか判らず、焦っていた。

「くそっ。とにかく低くなってる方を探すしか」
方向を見失いながら、下りになっている方へと走り出す。

何時からいなかったのか、何故気づかなかったのか。
最後にクシャーナの姿を確認したのは、目に雨が入り込み、立ち止まってしまった時だ。その時からいないのならば、かなり遠い場

所まで戻らなければならない。

そんな優斗の心配とは裏腹に、クシャーナはすぐに見つかった。

「大丈夫か！」

返事が無い事に焦りながら、優斗はクシャーナを抱え上げ、山小屋へと戻る。

山小屋に入ると、荷物をひっくり返して濡れていない布を探す。幸い、ジュラルミンケースの中に入れてあった衝撃材替わりの布が無事だったので、包んであったノートパソコンと食糧の一部を放り出し、数枚の布だけを取り出す。

倒れていた原因は判らないが、どちらにしてもこのままでは風邪をひいてしまう。そう考えた優斗は、悪い、と断ってからクシャーナの服を脱がしていく。

乾かすのは後回し、と脱がせた服を小屋の端に投げ捨て、乾いた布で体を拭いていく。そこでようやく代わりに着せる物が無い事に気づき、彼女の鞄から毛布を取り出すが、たっぷりと雨がしみ込んでいた。

「ちょっと我慢しててくれ」

びしょ濡れの物よりはましだろうと、体を拭いた布を固くしぼり、クシャーナの身体にかける。

山小屋を見渡すと、地べたに薪が少しと木で組まれた座椅子の様な物がおかれていた。これは役に立たない、と視線を上げると、埃まみれの布が掲げられているのが見えた。

「っし」
布を外し、埃を払うとそれでクシャーナを包む。

火を起こすべきだ。
そう判断した優斗は、まず山小屋の換気を確認する事にした。

窓を1つ発見。木の板が嵌められただけの窓を試しに開けてみるが、手を離すとすぐに閉まってしまう。

薪をつっかえ棒にして窓が閉まらないようにすれば。そう考え、薪を拾って窓と板の間に挟み込む。

もう一方は入口でいいか、と優斗は、火打石を探す。
火打石はすぐに見つかったが、共に入れてあった火種用の木屑が湿っていた。

これでは火が付かない。ならば、と先ほど払った埃を集めようと手を伸ばし、触れたところで自分自身も濡れている事を思い出した。

これでは火種が作れない。優斗は、ちらりとクシャーナを確認してから服を全て脱ぐと、クシャーナにかけてある布を一枚手に取り、ざっと水滴を払ってから服を固く絞って着直す。

何とか乾いた手で集めた埃は、数分をかけて火種となり、それが埃を置く台に使っていた薪に燃え移ったのを確認し、他の薪にも火を移していく。

間抜けにも、火が着いてから小屋にストーブや暖炉の類が無い事に気づく。優斗は少し悩んだが、ジュラルミンケースを空にし、外から石を運んで敷き詰め、その上におく事にした。

「火が大きくなり過ぎない様にしないとな」
優斗は自分に言い聞かせる為にそう呟く。今は敷き詰めた石が濡れていたせいもあり、火の勢いは弱いが、乾いて来れば火も大きくなる。

火を確保した優斗は、クシャーナの額に手を当てた。熱はない、と確認すると、次は胸に手を置き、鼓動を確認する。続いて呼吸を、そしてもう一度断ってから全身に傷がないかも確認する。

優斗が思いつく限りの可能性を確認した結果、どれにも該当しない事から、疲労が限界まで達したのだろう、と優斗は結論する。

ならばもう自分に出来る事はない、と優斗は放置していたクシャーナの服をしぼり、木の座椅子――背中に薪を背負う為の物だった――にひっかけて、火の近くに置く。

その後、火を維持しながら、乾かさないと、と荷物を小屋の中に広げる。作業が終わってからしばらくすると、その疲れから壁にもたれ掛けた優斗は、うとうとと微睡に落ちて行った。

また眠ってしまった事に気づき、慌てて飛び起きた優斗は、まず火の確認を行った。そして火が消えている事を確認してから、クシャーナの居た場所へと視線をずらす。

「って、いない！？」
慌てて山小屋を飛び出し、左右を見渡す。

空には太陽が上っており、少しだけ雲がかかっているが文句なし

の晴天だった。
　下を向き、まだ新しい足跡を発見した優斗は、急いでそれを追う。下だけを見て走っていた為、地面が途切れた瞬間、コケた。

「っわぁ」
　ばしゃん、と水の中に飛び込んだ。

　浅い水中で受け身を取った優斗が、起き上がろうと視線を上げると、空色の瞳と目があった。

「おはようございます、優斗様」
　返事を返す事が出来ず、ぽかんとする優斗に、水浴びをしていたらしいクシャーナが言葉を続ける。

「昨日は突然倒れてしまい、申し訳ありませんでした」
「あー、それはいいんだけど。いや、良くないか」
　ああなる前に伝えて貰わないと困る。

　優斗のそんな思考が読める訳もなく、クシャーナは頭を下げ、再度謝罪をする。

「体調は平気？」
「はい。良く眠りましたので」
　昨日、クシャーナが倒れたのはお昼も摂っていない時間だ。詳しい時間は不明だが、今は早朝の様なので、良く眠ったと言うのは事実だろう。

「とりあえず、服着たら？」
「そそりますか？」
「いんや」

そうですか、と残念そうに呟くクシャーナ。

優斗は恋愛に対し、偏った守備範囲を持っていない。故に、目の前の光景を見ても、そういえばこのくらいの時のアイツもまったく隠す気配がなかったな、と１０年以上前の事を懐かしげに思い出すだけだ。

「恥ずかしくないの？」

「もちろん恥ずかしいです」

クシャーナは、裸だった。水浴びをしていたなら当然だが、タオルすら持っていない、文字通り一糸纏わぬ姿なので、長い髪以外に彼女の裸身を隠すものは存在しない。

まったく恥ずかしそうに見えないな、と思いながら、優斗はほとんど膨らんでいない胸に視線を落とす。

「じゃあ、とりあえず隠さない？」

「うーん。でも、もうじっくり見られた相手ですし」

昨日も今日も、と言葉が続く。

クシャーナの言葉に動揺する事もなく、そういえば全部脱がしたんだっけ、とようやく動き出した脳で考える。怪我の確認もしたので、じっくり見たと言うクシャーナの言葉はある意味で正しい。

「とりあえず、恥じらいくらいは持ちなさい。多少は胸もあるんだし」

俺は父親か。そう思いながら、優斗は心の中でため息を吐いた。

「あるうちに入るんでしょうか、これ」

自分の胸を触るクシャーナの姿に、微妙だな、と思いながら立ち

上がり、水から上がる。

陸に上がり、川だったのか、と今さら思いながら、優斗は服を脱ぎ、絞る事で水気を落とす。

「全然気にしてくれないんですね。ちょっとショックです」

「5、6年したら喜んで見させて貰うから気にするな」

わかりました、と返ってきた言葉に、何が判ったんだろうと思いながら、優斗は山小屋へと向かい、歩き出す。

「先に戻る」

「はい」

これは良くない傾向だ、と思いながら優斗はゆっくりと歩き続ける。彼女は自分の家族も帰る場所も、既にないと思っているのだろう。事実、父親は死に、故郷は攻め落とされた。その代替えを自分に求めていると言う事は推測出来るが、優斗はそれに応える事も出来ず、しかし冷たく突き放す事も出来ない。

考えが纏まらないうちに山小屋に到着し、朝食の準備を始めた優斗は「服を忘れました」と布1枚だけの姿で戻ってきたクシャーナが目の前で着替え始めたのを見て、さすがにアレだな、と後頭部にチョップを落とした。

「いたいです」

「レディが見知らぬ男の前で素肌を晒さない」

着替え終えてからするべきだった、と反省しながら優斗はクシャーナが取り落とした服を手渡す。

「レディと認めて下さるんですね。嬉しいです。でも、優斗様は見

知らぬ男ではないです」
「他人である事に変わりはないだろうが」
「じゃあ、家族にしてください」
にこりとした表情とは裏腹に、胸元で服を押さえている手が震えている。

寒さのせいじゃないんだろうな、と思いながら、決心のつかない優斗はそれに気づかない振りをした。

「兄弟は間に合ってる」
「では、お嫁さんはどうですか？」
「子供が何を」
優斗に鼻で笑われても、クシャーナは笑顔を一片も曇らせる事無く、話は続く。

「先ほど、レディだと言ってくれましたよね」
「言葉のあやだ。いいとこリトルレディ、だな」
後出しの訂正をしながら、どう躱すかを考える。

頼られるのは良い。だが、縋り付かれてしまうと、優斗も身動きが取れなくなってしまう。

「5年後、楽しみじゃないですか？」
それは楽しみかもしれない、と思いながら、その頃には子供に見える範囲がそこまで到達してそうだ、とも優斗は思った。

自分が使えるモノ、全てを動員してすり寄ってくるクシャーナ。
文字通り必死な行動だからこそ、優斗は安易に応えない。

「じゃあ、5年後に考えるって事で」

「過程もちゃんと見ていてくださいね」
そう言って胸元から服を退かそうとしたクシャーナの頭に、優斗は再びチョップを見舞った。

朝食を終え、山小屋にマーキングを終えた優斗は、今後の事について相談する為に、クシャーナと向かい合った。

「今日、明日と休んで明後日出発でいい？」
「おまかせします」
風邪をひいた様子もなく、元気な姿のクシャーナに、これなら大丈夫だろう、と優斗は小屋中に視線を巡らせる

「じゃあ、今日は荷物全部洗って乾かすから」
「……へ？」
近くに水があり、荷物は全て雨を被っている。一部、泥を被っている物まであるのだから、出来る時に綺麗にしておくべきだ。優斗のそんな主張に、クシャーナは乾いた笑を浮かべながら、それでも素直に手伝った。

屋根のある場所で休めたおかげで多少は回復したとはいえ、優斗はまだ疲れが残っている。それにも拘わらず行動を開始したのは、何かをしていないと落ち着かなかったからだ。クシャーナも何かしている間は余計な事を考えずに済むだろう、と言う思惑もある。

1日をほぼ洗濯で使い切り、次の日には道を探して歩き回った。
山小屋があるのだからここへ続く道があるはずだ、と言う推測は正しく、川沿いとその逆方向に道に見えなくはない場所を発見出来た。

「川沿いを登ろうと思う」
クシャーナは相変わらず優斗の決定に異論を唱える事なく、水に困りませんね、と言う言葉だけが返ってくる。

「明日は早起きするから、早く寝る事」
「はい」
山小屋の中でも、相変わらず2人はひとつに固まって眠っている。

返事とは裏腹に眠る様子のないクシャーナ。昨日は洗濯疲れであっさり眠ってしまったが、今日はほとんど留守番で体力が余っているのだろう、と優斗は髪に手を伸ばす。

「そろそろ向こうも山まで来てるだろうし、合流も近いかな」
むしろ早く合流したい、と優斗は思う。半日、何もしない時間が出来てしまったせいで、どうしてもずっと隣に居た相手が不在である事が気になってしまう。

「でしたら、ここで待ちますか？」
クシャーナの提案した内容は、優斗も考えていた事だ。

ここで待ち、トーラスやフレイが来るのを待つ。それはクシャーナを連れて歩かなければならない優斗にとって、魅力的な案だ。しかし、彼らが何時ここまで到達するのか判らず、食糧の残りも乏しい状態では、却下せざるを得なかった。

早く人のいる場所へ、と考え、集落に着けば情報収集をしなければならない事、そしてその結果、クシャーナが事実を知ってしまった場合の事に思い当たる。

何かあっても、ここならまだ対処し易い。そう考えながら、優斗

がクシャーナの髪を手櫛で梳ると、彼女はくすぐったそうに身を震わせた。

「クーナ、聞きたい事があるなら答えるよ」

クシャーナの動きが止めても、優斗は髪に入れた手を止めずに続ける。

こちらから語ると言う事をしなかったのは、彼女に心の準備をさせる為だ。その方が突然告げられるよりも、傷は浅く済むかもしれない。その思考の裏に、自分から語る事への忌避感があった事に、優斗は気づかない。

「本当になんでも、ですか？」

「個人的な事でなければ」

クシャーナがずるずると体をずり下げ、胸の前にあった頭が膝へ落ちる。

真っ直ぐに見上げる空色に視線を落としながら、優斗は言葉を待つ。

「ユーシアはもうダメなんでしょうか？」

「陥落したそうだ。騎士団は市民を避難させたら逃げる、と言っていたらしい」

1つ瞬きをしてから、クシャーナは質問を続ける。

「私の家族は？」

「君のお父さんは亡くなったそうだ。それ以外はほとんど行方不明」

瞳に動揺の色が走り、少し潤む。

それでもクシャーナは、泣き叫ぶ事も、口を閉ざす事もなかった。

「私はどこへ逃げればいいのですか？」
「わからない。トーラスが色々調べて来てくれると思うから、それを聞いてから考える予定」
同じ外見特徴を持つ優斗は、その点に関してだけはクシャーナと一蓮托生だ。

現在、優斗が考えている最有力候補は、ほとぼりが冷めるまで、公国内で市壁のない村などを巡って行商をする、と言う物だ。フードで髪や顔を隠しての行動になるので大きな商売は出来ないが、食い繋ぐだけが目的ならばなんとかなるかもしれない。

「優斗様、お願いがあります」
「ん？」
何を言われるのか、優斗は少しだけ予想がついていた。

「一緒に居てください」
「行先が決まるまでは一緒に居る」
今はその返事が精いっぱいだった。

子供1人すら安心させられない自分が情けない。そんな風に考えながら、優斗は話を打ち切り、眠りについた。

山小屋を出発した日のうちに、小さな集落に到着した。

その集落では広場に大勢の人間が集まっていた。

「なんかヤバそうだから、しばらく様子見で」
「はい」

こっそりと覗き見をしていると、集まっていた人間が、先ほど優斗たちが来た道へ歩いていく。

これはもしかしてこっち側から山狩りをしているのでは。ならば即逃げなければと、優斗はクシャーナの手を引く。

「本当にここを探せば見つかるんだな？」

「そう打ち合わせをしたそうです」

慣れない敬語を使わされている、と言った雰囲気の声には聞き覚えがあった。

再度、広場をこっそりと覗き込むと、そこにはトーラスの姿があった。

「帝国との和平を実現する為の重要なお方だ。見つからなかった、ではすまされないぞ？」

「はい。では、俺も探して来ますので」

行け、と指示されたトーラスがこちらに向かってくる。

逃げるべきか悩んだ優斗だが、帝国との和平、と言う言葉が気になり、彼の進路上に麻袋を1つ投げ出す。

「っと、踏むとこだった。って、これ、ってぇ！？」

「しっ」

優斗が驚くトーラスを壁の影に引っ張り込む。

「よかった！　無事だったんだ」

「当たり前だ。で、後ろのその人は？」

トーラスの声に寄って来たのだろう。先ほど、トーラスに指示を出していた男がそこに立っていた。

「詳しい話は馬車の中でする。とりあえず戻るぞ」
横暴な態度に少しむっとする優斗。それでもその言葉に従ったのは、トーラスがそう促したからだ。

馬車に乗り、なだらかな道を下り始める。しばらく無言が続き、優斗が咳払いをする事でようやくトーラスが口を開いた。

「こちらがクシャーナ・ユーシア様です」
「お初にお目にかかります。私は」
「細かい挨拶はいい。
俺はザイル・カートン。カートン侯爵の息子だ」

侯爵は結構偉い位だったかな、と思いながら、優斗は自分も挨拶をすべきか悩む。

「そしてこちらが、商人のユートさんです」
「優斗と申します」
「商人？　騎士か護衛ではないのか？」
「はい。私は単なる行商人です」
ザイルは一瞬だけ胡散臭そうに優斗を見たが、すぐに興味を失う。

判りやすい貴族様だな、と思いながらも、優斗は表面上、営業スマイルを浮かべておく。こうしておけば不況を買いにくい事は、ルエイン相手で実証済みだ。

「審判のギフトを持つ貴方に嘘を吐いて仕方がない。だから必要な事を先に説明したい。構わないか？」

クシャーナは優斗に目配せをし、頷いたのを確認してから首肯する。

その一連の流れに、ザイルは不思議そうな、そして少しだけ不愉快そうな表情を浮かべた。

「ふん。まず、王国軍がユーシアへ攻め込んだのは知っているな？」
「はい」
「奴らはそのまま帝国へ攻め入り、ユーシア騎士団と帝国軍の連合部隊に敗れ、敗走した」
「騎士団は生き残っているのですか？」
帝国軍と共に戦ったなら逃げ切って、生き残りも居るのだろう、と考えた優斗の予想を裏切り、それはクシャーナにとって残酷な言葉となって返って来る。

「領主と次期当主は死亡が確認されている。残りは帝国内に逃げ込んだらしく、今も行方不明だ」
クシャーナの顔が蒼白になる。しかし、ザイルは気にする事なく言葉を続けていく。

「ともに王国軍をひけた事もあり、正式に和平を結ぶ事になった。その使者に、今回共に戦ったユーシアの新領主でもあり、帝国との混血でもある貴方が選ばれた」
ターキンの話では、王国と共に帝国に攻めると聞いていた。あれは誤報だったのだろうか。

優斗が心の中で発した疑問に答える様に、ザイルの言葉は続く。

「要するに、予想以上に帝国が強かったから、王国よりもそっちと付き合いたい、って訳だ。

それでクシャーナ・ユーシア。君はまだ契約の権利を有しているのか？」

「あ、はい。多分」

「ふん、曖昧だな。まぁいい。後で確認させる」

契約の権利の有無を確認するには、意味のない、すぐに効力を失う契約を行って見るのが判りやすい。

国家間、領間の交渉でも、商人と同じ、契約のギフトが使用されている。故に、貴族の当主になるには、契約の権利を保持している必要がある。商人が一番下とは言え、特権階級に属する事が許されているのは、貴族に無茶な契約をしかけるな、と言う意味もあるのだろうと優斗は思っている。

「商人」

「はい、なんでしょうか」

てっきりこのまま無視されると思っていた優斗は、声をかけられた事に驚きながらも、営業スマイルは崩さない。

「クシャーナ・ユーシアを守り、ここまで連れて来てくれた事に対し、後で褒美を取らせる」

「ありがとうございます」

貰える物は貰っておこう、と思いながら、優斗はずっと気になっている事を口に出来ずにいた。

結局、それを口にできないまま、馬車は街へと到着した。

溺れる者（後書き）

山歩きメインのクーナ回でした。
カットしようかと思う部分もあったのですが、結局こうなりました。
早く優斗回も書きたいので、ぼちぼち進めて行こうと思います。

離れた手

ザイルが滞在していると言う館に到着すると、彼はすぐにどこかへ行ってしまった。

「で、トーラス。俺らはどうすりゃいいんだ？」

「ちょっと待って。すいませんーん」

執事服を来た初老の男を見つけたトーラスが、そちらへ向かって走っていく。

執事と2、3言葉を交わすと、トーラスが戻ってくる。

「ちょっと応接室で待てって。こっち」

「了解」

クシャーナの手を引いた優斗が、トーラスに続いて歩き出す。3人で2分程歩くと、目的の場所へとたどり着く。

応接室、と言うだけあって、立派な内装と座り心地の良いソファーが置かれた室内を見回して誰もいない事を確認すると、優斗はずっと聞きたかった事を口にした。

「フレイは？」

「えーっと」

言葉を選んでいる様子のトーラスに、優斗は目を細める。

慌てながらも、トーラスはきちんと言葉を選んでから、早口でその問いの答えを返す。

「お嬢様が見つかるまで預かるって言われた」

「人質か。大丈夫なのか」
後半は独り言だったのだが、トーラスはそう受け取らず、更に慌てて言葉を継ぎ足す。

「お嬢様の不興を買わない様、無茶な扱いはしないでくれーって言ってあるから大丈夫！」
機転を利かせた事を褒めてもらいたいのだろう。お手をした子犬のように瞳を輝かせるトーラスに、優斗は苦笑する。

任務の褒美は主人から貰うべきだろう。そんな風に考えた訳ではないが、優斗は苦笑しながらクシャーナに目配せする。何であっても、する事がある方が良い、と言う優斗なりの配慮だ。

「任務、ご苦労様でした。少し予想と違いましたが、無事に逃げ切れたのは貴方のおかげです」
「いえ、当然の事をしたまでです」
騎士ごっこか、ままごとか。

子供たちのが交わす会話にそんな感想を抱きながら、優斗はソファーに腰かける。

「クーナ」
「はい、なんでしょうか優斗様」
クシャーナが優斗の隣に腰かける。

感情を押し殺した、堅い言葉。
それを少しでも解きほぐせれば、と優斗は彼女の頭に手を乗せる。

「トーラス、扉の前、見張っててくれ」
「あ、うん」

トーラスが素直に部屋を出ると、優斗はクシャーナの頭を引き寄せる。

本音を言えば、今すぐに部屋を飛び出してフレイの所在を確認したかった。

そうしなかったのは、優斗の中で、目の前の少女を放っておけば、そのまま壊れてしまうのではないか、と言う危惧が勝ったからだ。

クシャーナは何も言わず、優斗に全てを預ける様に身体の力を抜いた。そして、静かに泣き崩れる。大事な者を失った悲しみは、優斗にも少しだけ判る。だからただひたすら、空いた方の手でその髪を撫で続けた。

泣き止んだクシャーナが、恥ずかしそうに身なりを整え終えると、扉の前に居るトーラスを呼び戻す。

部屋へと入って来たトーラスが何か言おうと迷っていると、応接間の扉がノックされ、先ほどの執事が男を1人連れだって中へと入って来る。

「少しお時間よろしいでしょうか、クシャーナ様」
「はい、なんでしょうか」
「現在の貴方様の立場を話しておくよう、申しつけられました」
執事は1枚の紙を机の上に置いた。

置かれた紙は、契約書だった。
横目で契約書を覗き込んだ優斗は、馬車での会話を思い出す。すぐに効力を失う、意味のない契約内容。これは契約の権利を有するか確認する為の、契約書だ。

執事に促されたクシャーナが、もう1人の男のギフトで契約を交わす。
この契約書は1人契約と呼ばれるものだ。
他にも人数によって2人契約、3人契約と存在し、文面次第では1対2の契約等も可能だ。

クシャーナがまだ契約の権利を有していると証明されると、契約のギフトを行使し終えた男が退室する。

「これからのご予定を説明させて頂きます」
「よろしくお願いします」
執事がちらりと優斗の方を見て、すぐにクシャーナに視線を戻す。

クシャーナは薄く笑いながら、僅かに首を振った。

「かしこまりました。
貴方様は和平の使者としてハイルでの調印式に参加して頂きます。
調印式は一か月後ですが、2、3日のうちにハイルへと発つ予定です。
また、それに先立って、ユーシア領主任命式を、略式ではありますが行わせて頂きます」
「ザイル様が、でしょうか？」
「いえ。和平調印の為にハイルへと来て頂く事になっております皇族のどなたかが行います」

和平の使者にもそれなりの地位が必要な訳か、と考えながら、優斗はクシャーナの様子を確認する。

その顔に浮かんでいるのは、自分が領主になると言う事への緊張、ではなく、本当に父と兄が死んだのだと言う事を実感し、しかしこの場で泣き叫ばないように耐えている。そんな表情だ。

強い子だ、と優斗は思った。踏みとどまれたのは、隣に自分がいるからだ、と言う事も知らず。

「ユーシアは、今？」

「現在、一時的に公の直轄地として管理しております。騎士団や工場等の所有物も、我がカートン家が一時的に預からせて頂く形を取っております」

「そうですか。お手数をおかけします」

会話を聞きながら、優斗は違和感を覚えた。

その違和感が何なのか考える間もなく、執事は次の話題を口にする。

「次に、そちらの少年についてですが」

「トーラスは我がユーシア騎士団の従騎士ですが、今は私の護衛です。保護して頂いている身で厚かましいとは思いますが。その」

「承知しました。では、貴方様の護衛として傍に置けるよう、ザイル様にも話を通しておきます」

ありがとうございます、と返すクシャーナに、どうやら保護されるつもりらしい、と優斗はほっとする。

もし、今すぐにユーシアへ帰る、もしくは家族を探しに行くと主張されれば、優斗に説得の依頼が来る可能性がある。それをやり遂げる自信は、ない。

「そちらのお方は商人だと聞いたのですが」

「はい。私を逃がしてくださった、恩人です」
「それはそれは。よろしければ本日はこちらへご滞在ください」
「よろしいのですか？」
「ザイル様が褒美を取らせたいとおっしゃっております。予定が空くまで時間がかかってしまいますので、それから街で宿を取るのは厳しいと思います」

貴族の館に逗留する事に少しばかり抵抗はあったが、逆らって不評を買うのも馬鹿らしいと、優斗は「ありがとうございます」と状況を受け入れる事にした。

「それでは、私はこれで。後で迎えを寄越しますので、もうしばらくここでお待ちください」
「あ、すいません。預けた、その、荷物はどこですか？」
「あぁ、そうでしたね」
トーラスの指摘に、執事は立ち上がったまま、返答を返す。

「ハイルまで移動して頂く際、邪魔になってしまいますので、全て処分致しました。
詳しい事は、ザイル様が直接話されると思います」
「……え？」
目を見開き、固まるトーラス。そんな彼を無視して、執事は「失礼しました」と退室する。

「どうした、トーラス」
「え、と。その。あ、あああああああ」
「落ち着け。どうした？」
膝をつき、狂ったように「あ」を繰り返すトーラス。

どうしよう、と優斗がクシャーナに目を向けると、彼女も放心状

態で、茫然自失としていた。

「トーラス！」

「はいぃっ！

がちがちと歯を鳴らし、勢いよく立ち上がると、何故か直立不動でこちらを向いたトーラスに、喝を入れるだけのつもりだった優斗は、やり方を間違えたかな、と反省する。

「何がどうした。説明してくれ」

「すいません！　もうしわけありません！」

「優斗様、少しお待ち頂けますか？　トーラス、落ち着きなさい」

先に平静を取り戻したクシャーナが、優斗の返事を待たず、トーラスの肩を揺する。

「貴方はそこに座って。間違っていたら訂正してください」

「は、はい。わかりました」

少しだけ落ち着きを取り戻したトーラスに、優斗が声をかけようとすると、クシャーナがそれを視線で止める。

「商人である優斗様の荷物が勝手に売られたのです。お怒りはごもっともだと思います」

その言葉に、ようやくトーラスの言う、荷物、の意味を把握する。

優斗の荷馬車には、絹の布地と塩や香辛料などが積まれていた。一部は持ち出したが、さすがにあの状況では全ては持ち出せなかったので、荷馬車にはそれなりの量の荷物が残されていた。

「あー、なるほど。でもまぁ、一度は捨てる覚悟をした物だし。でも、代金はちゃんと請求した方がいいな」

荷物はいいけど、荷馬車は買い直すとなると厄介だ、と思いなが

ら、優斗は代金の計算を始める。

そんな優斗の反応に、クシャーナとトーラスは顔を見合わせた。

「あの、良いのですか？」

「良いも悪いも。仕方ない」

クシャーナを前にして、横暴で自己中心的な貴族に遭ったのは、これが初めてではないし、とはさすがに言えなかった。

優斗の言葉に嘘が無い事が判ったクシャーナがあからさまに安堵し、その姿を見たトーラスが眉をひそめる。

荷物の代金を何パターンかに分けて試算していた優斗は、執事に大事な事を聞き忘れた事を思い出す。

「そういえば、フレイはどこに居るんだろ？」

その独り言に、場の空気が凍る。

トーラスは小さくうめき声を上げ、クシャーナは目の端に涙を浮かべながら、祈るように手を組んでいる。

「優斗様。どうか、どうかお許し下さい。彼も悪気があった訳ではないのです」

「えーっと。意味が判らないんだけど」

その言葉を真正面から受け取ったクシャーナは、判明した事実に驚愕する。

「わかり、ました。彼の失態は主である私の失態です」

「お嬢様！？」

「黙りなさい。トーラス」

年齢不相応の迫力と、強引さに押されてトーラスが引き下がる。
同じ様に気圧された優斗を見据えるクシャーナは、覚悟を決めた瞳を携え、大きく息を吸い、それを声と共に全て吐き出す。
「あの奴隷は売られました」
「……は？」
「優斗様が大事にしてらしたあの奴隷は、売られてしまったのだと申し上げたのです」
フレイが売られた。
たったそれだけの言葉を理解するのに、優斗は5分もの時間を要した。その間、部屋の中はひたすら沈黙が落ち続ける。
「なんで？」
優斗の間抜けな問に、クシャーナに押しのけられていたトーラスが前に出る。
「クシャーナ様の荷物を全部売られた、って執事の人が言ったよね」
「あぁ」
「俺、乱暴な扱いされないように、ユート兄ちゃんのも全部お嬢様のに――」
優斗は言葉が終わるのを待たず、部屋を飛び出した。
部屋を飛び出した優斗は、先ほどの執事を探して廊下を走り回る。
誰かに居場所を聞く、と言う行動を思いつかなかった優斗が、扉の中へ入ろうとしている彼の背中を見つけられたのは、かなり幸運

な事だった。

「すいませんっ」

「はい、なんでしょうか」

突然かけられた声に、執事は慌てることなく反転し、そのまま返事を返す。

「その、荷馬車とか、荷物とか、あれ、俺ので」

「クシャーナ様の所有物だと聞いておりますが」

「いや、そうじゃなくて」

「現在、ユーシア家の財産はカートン家が管理しております。手違いがあったのだと言うのであれば、私でなくザイル様にそうお伝え下さい」

では、と去ろうとする執事の肩を、優斗は必死な形相で掴む。

執事はため息を吐きながら、優斗の手を丁寧にどけると、先ほど入ろうとしていた部屋のドアを開ける。

「フレイ、いえ、奴隷はどうなりましたか！？」

「売り払いました。詳細はザイル様よりお聞きください」

ドアが閉まり、執事がその中へ消える。

その音と共に、優斗の視界も黒く閉ざされた。

気が付くと、優斗は応接間に立っていた。

どうやってここに戻って来たのか、記憶にない。そんな優斗を、クシャーナは悲しそうに、トーラスは申し訳なさそうに見つめてい

る。

フレイが売られた。

その事実を、頭が拒否している。考えがまとまらない。どうすべきか、わからない。

この世界に来てからずっと隣に居た。しかし今、彼女は自分の隣に居ない。優斗の頭に少しだけ芽生えていた夢想、彼女と歩むの未来。彼女と交わした、様々な会話と約束。

ぐちゃぐちゃになった思考が、彼女との思い出を噴出する。その言葉たちには、別れる直前の会話も含まれていた。

「そう、か。そうだよな」

彼女の言葉を、思い出す。

彼女は呆れた表情で、でも確信を持って、優斗であれば、現在の手札から最大の利益を出せるはずだと言った。商いで、貴族を出し抜く程豪胆である、とも。

優斗はこの世界に来てから、ずっと流されるままに生きてきた。目の前に現れた問題にただひたすら答えを出し続けるだけ。守るものが無いのであれば、それでも良い。しかし、優斗には守りたいモノが出来た。その為にはまず、大事な者を、自分の意志で引き寄せなければならない。

クシャーナが視界に入り、その姿があの日々を思い起こさせる。あんな思いは、もうごめんだ。今回はあの時とは違う。フレイにもう二度と会えないと、決まった訳ではない。今度こそ、離れてしま

った手を、もう一度掴んで見せる。優斗はそう決意し、顔を上げる。

歯を食いしばり、拳を固く握る。そして浮かび上がってくる狂気にも似た本能を、理性に溶かし込む。

「クーナ！　トーラス！」

突然かけられた声に、２人はびくりと肩を震わせる。

２人を見据えた優斗の心には、そもそもの原因は、とか、お前のせいで、とか、思う部分も存在する。子供に危ない橋を渡らせる事になるかもしれない事に対する罪悪感もある。それも全て飲み込んで、ただ１つの目的の為に頭を下げる。

「フレイを取り戻したい。手伝ってくれ」

「私に出来る事でしたらなんでも」

「もちろん！」

予想通りの即答。

フレイを取り戻すまでは、その感情すら利用する。そう決心し、脳を高速回転させる。

「とりあえず部屋に案内されてから計画を説明する」

その後、派遣されて来たメイドに案内され、割り振られた部屋に荷物を置いた２人がクシャーナの部屋に再び集まると、優斗は２人に計画を語った。

離れた手（後書き）

優斗くん、初めて明確な目的を持って行動を開始しました。
成否がどうであれ、彼にとって大事な糧となる事でしょう。
主人公らしく成長、出来るといいな。

ザイルは執務室に呼び出した相手をソファーに座らせると、その横へ視線を動かした。

「で、何故クシャーナ嬢が同席を？」

「クシャーナ様にも関係する事柄ですので」

ザイルと優斗が会話する中、優斗の隣に座るクシャーナは、こっそりとその袖を掴む。

「そうか。先にこちらの要件を済ませるが、構わんな？」

「もちろんです、ザイル様」

ふん、とザイルが目配せすると、後ろに控えていた若い従者が、袋を１つ、テーブルへ置いた。

かちゃ、と言う音がし、中に金属が入っている事が伺える。

「商人、お前の褒美だ。受け取れ」

「ありがとうございます。

不躾な質問で恐縮なのですが、これはザイル様個人からの褒美だと解釈してよろしいでしょうか？」

優斗の問いに、ザイルが眉をひそめる。

「何故、そんな事を気にする？」

「商人の戯言ですが、構いませんか？」

「構わん」

「お金の出どころと言うのは、商売に繋がるものなのです。

支払われた金額だけ、私がそこに貢献した、と言う事ですので」

その言葉に、ザイルは興味なさ気に、後ろに控える従者はぴくりと眉を動かした。

「俺からだ。感謝しろ」

クシャーナの手が正面に座るザイルから見えない位置で動く。

優斗の袖口が握りしめられ、それが真実であると判明する。それによって、ザイルが家の命令でなく、個人的に動いている可能性が高いと言う事を、優斗は把握する事が出来た。

「そうでしたか。

ザイル様。この度は本当にありがとうございます」

「あぁ」

では、と優斗は袋に手を伸ばし、そのままクシャーナの膝へと移動させる。

優斗の行動に、2人の視線がクシャーナに集まる。

「ところでザイル様。実はお話がありまして」

「荷物の事だな。お前の物だった、と聞いている」

「そうですね。私の物、でした」

強調された3文字に、従者がまたぴくりと反応する。

そしてザイルの耳に何かを囁くと、彼はまた同じ位置へと戻る。

「お前の荷物であると言う証拠がない以上、俺はあの従騎士の言葉通り、あれをクシャーナ嬢の物として扱わせて貰う。

仮にだが、違うと言う証拠があれば話を聞こう。ただし、あの従騎士に対し、嘘の報告を行った事に対する厳罰を与えた後でな」

ザイルが口の端を釣り上げ、笑う。

ザイルの言葉は、脅しであると共に、真実でもある。荷馬車も商品も、優斗の所有物であると言う証拠はないし、フレイにもその証明は付けられていない。証拠以前に、荷物、特に荷馬車は元々彼の物ですらない。

「いえ、厳罰は必要ありません」
「なら、話は終わりだな」
「申し訳ありませんが、もう少しだけお時間を頂きたい」
そう言った優斗が、1枚の紙をテーブルに置く。

優斗はこの紙を出さずに終わらせられればと思っていた。荷物の所有権を認められ、最低限フレイの買戻しとそれ以外の品の対価が得られれば、それ以上何かを求めるつもりはなかった。

そんな希望は、一歩目から躓いてしまった。荷物の所有権自体を認められず、トーラスまで引き合いに出されて脅しをかけられる。これに対して、優斗は怒りを感じていた。

相手が手段を選ばないのであれば、こちらも選ぶ必要はない。そう判断した優斗は、表面上はにこやかに、しかしその裏でひたすら状況のシミュレートを行う。

「荷物は確かにクシャーナ様、ひいてはユーシア家の物です。正確に申し上げますと、私の荷物だったものが、クシャーナ様を逃がす為の偽装として、騎士団に徴発されました」

非常事態に軍が民間人から徴発を行う。

この世界にそんな風習があるのか、実のところ、優斗は知らない。
だが、それを契約書に仕立て上げれば、それは商人の分野だ。

「荷馬車とその荷物一式を徴発。公国の然るべき相手へクシャーナ様を無事に届けたら返却と共に、褒美として奴隷を与える、と書かれています」

ザイルの従者が、彼が一瞥だけして手渡した紙の内容を、要約して読み上げていく。

「天の神の欠片を持つ、金髪碧眼の女奴隷、フレイ。彼女を契約時の価値を保った状態で引き渡す。

ザイル様、私から質問をしても構いませんか？」

「あぁ。お前に任せる」

ザイルの従者が優斗を見据える。

彼は契約書の文面を優斗に向け、１つ１つ指をさしながら質問していく。

「通常、契約には解約条件や時間制限を設ける物ですが、何故これにはないのですか？」

「急ぎ作ったものですので、詳細を詰める時間がありませんでした。そして、これは私の予想になるのですが」

「なんですか？」

「期限を設けると、切れた時にクシャーナ様が捨てられる可能性があるからではないでしょうか」

「なるほど。では、次に、徴発された積荷の詳細が無い点についてはどうされるおつもりですか？」

「クシャーナ様が保障して下さると、信じております」

「では、クシャーナ様が、荷物などなかった、とおっしゃれば？」

「その時は仕方ありません。大人しく荷馬車の返却と奴隷の譲渡を受け、去る事にします」

従者は一旦質問を止め、ザイルの耳元で「時間がなかったと言うのが本当であれば、荷物を諦め、高価な褒美への記述に徹したのかもしれません」と囁く。

「こほん。では、何故、褒美に関する記述だけ詳細に書かれているのですか？」

「彼女のギフトが必要だったからです」

「他の条件は？」

「ごく個人的な理由です。私も男ですので。察して頂けませんか？」

従者はそれに反論する事なく、契約書を自分の方へと向ける。

文面を読み返してから再び優斗に向けられると、キファは今まで以上に真剣な表情で、口を開く。

「この契約書は、誰と交わしましたか？」

「私とクシャーナ様。そしてクシャーナ様に縁のあるお方の3人です」

「クシャーナ様、間違いありませんか？」

「はい、その通りです」

「その方は今、どちらに？」

「わかりません」

優斗の言葉に、従者が目を細める。

耳打ちにすべきか少し迷ってから、結局ザイルの従者は声を落とさずに、言葉を放つ。

「ザイル様。マズい事になりました」

「どうした？」
「クシャーナ様の身柄と交換で荷馬車と奴隷を引き渡さなければ、クシャーナ様は契約が出来なくなります」
その言葉に、今まで胸を張り、堂々と座っていたザイルの表情が一変する。

今までの話を聞き流していたザイルは、何がどうなっているのか判らず、思いつくままに言葉を発していく。

「何故だ？」
「クシャーナ様が隣にいる商人との契約に違反する事になっていまいます」
「どうにかしろ」
「契約書に解約などの特記事項がありませんので、完遂するか、解約して頂くしかありません」」
「ならば商人、今すぐ解約しろ」
「申し訳ありませんが、出来ません」
「何故だ！」
「これが3人契約だからです」
優斗の言葉を理解出来なかったザイルは、己の従者に目を向ける。

「解約を行うには契約者が全員必要です」
「じゃあ、そいつを連れてくればいい」
「クシャーナ様の縁者は、散り散りになっておりますので」
すぐには連れてこれません、とは口にしなかった。

どうすべきか、と思考を巡らせる従者。彼が口を開く前に、ザイルが言葉を発する。

「ならばソイツが破棄すれば良い。

おい、商人。褒美を増やしてやるから、今すぐこの契約を破棄しろ」

その言葉に驚いたのは、彼の従者だけだった。この反応が幾つか考えていた予想に存在していた優斗は、慌てる事なく準備していた言葉を口にする。

「大変心苦しいのですが、申し訳ありません。契約を破棄してしまうと、商売を続けられませんので」

「逆らう気か！」

「ザイル様、落ち着いてください」

従者が、ザイルを宥めながら状況を説明していく。

これは3人で行う契約、通称3人契約と呼ばれるものであり、解約は先ほど説明した通り難しく、破棄させるのも難しい。

契約の破棄を行う場合、結ぶ場合と違って公国では国営の契約機関で行わなければならない。この機関は契約・解約の他に、相手の契約違反の訴えなども行っており、公の直属機関なので基本的に貴族であろうとも例外なく執行される。この為、契約の破棄や違反に関するギフトを持つ者が、機関に所属せずそれを行使すると、厳罰が課される。

仮に今、優斗を脅して破棄させようとした場合、機関へ連れて行く必要があり、無理やり連れて行けば、そこで契約違反を訴えられる可能性がある。

「なら、キファ。どうすればいい？」

キファと呼ばれた従者は、主人の言葉を受け、目を瞑り考え始め

る。

彼に十分な信頼を置いているザイルは、落ちついた様子でソファーに座り直す。そして正面に座る優斗を睨みつける。

キファと呼ばれた従者は、何とか状況を打破する為に、頭の中で話を整理する。

ユーシアから逃げ出す際に交わされた契約は、クシャーナを保護先へ届け、その代わりに褒美を与えると言う物だ。クシャーナを預けた誰か――多分、戦場に出ていない兄弟の誰かだろう――は優斗がクシャーナを見捨て無い様、幾つか手を打った。3人契約にする事で解約を防ぎ、期限を設けない事で時間切れを防ぐ。身の安全が、無事に、としか記述されていないのは、逃亡中の怪我等で違反とされない様、交渉した結果だろう。

そして現在、その誰かが打った方策により、キファとその主人は窮地に立たされている。

「優斗殿」

「はい、なんでしょうか」

一方、優斗は焦りを感じていた。そして、ここまで押しているにも関わらず、買い戻すと言うフレーズが1度も出てこない理由を幾つか思い浮べる。

「貴方は自分の荷馬車を、正確に記憶していますか？」

一瞬、言葉の意味を理解出来なかった優斗だが、すぐにそれが想定内の内容であると把握すると、返すべき言葉を探す。

「記憶していません。ただ、大きさ等は大体覚えています」
「ホロがついた二頭引きの荷馬車でしたよね？」
「そうですね」
にやり、と笑みを交わす優斗とキファ。

優斗の好感触な反応に、キファは更に言葉を続ける。

「奴隷の方も、同じではないですか？」
「いえ。彼女のギフトを使って新しい商売を興す予定でしたので、色々と教える為に話もしましたし、よく覚えています」
優斗の返答に、キファが顔をしかめる。

この契約は、優斗が自分の荷馬車と商品、そして褒美の奴隷を得れば完遂される。しかしそれはあくまで建前で、実際にそれが別の物と入れ替わっていても、違反だと訴えられなければ問題ない。後で違う物だったと訴えられない様、機関の立会いの下で引き渡しを行い、契約が完遂された事の証明を得る事が出来れば、クシャーナが契約の権利を失う心配はなくなる。

「同じギフトを持っていれば良い訳ですね？」
「彼女でなくては困ります」
「どうしてですか？」
「すぐに商売が始められるよう、その内容を色々と説明しました。それを口外されてしまうと、商売になりません」

商家の生まれであるキファは、その説明で彼が意見を曲げる事はないと確信した。しかし、貴族であるザイルが納得するかは別の話だ。自分の手抜きを疑われない為にも、無意味な問答を続ける。

「買い手が貴族や娼館であれば、その心配はないのではないですか

？」

「そのどちらかに売ったのですか？」

質問を返しながら、優斗の心臓が1拍だけ大きく鳴る。

優斗は、そんな理由で買い戻すと言う意思を曲げるつもりはなかった。だが、そうであって欲しくない、と言うのも、偽らざる本音だ。

「そうです」

表情を変える事なく断言するキファ。

優斗の恐れていた返答。しかし、彼は安堵していた。

「貴族様にはお抱えの商人がおります。娼館にだって、出入りする商人は多いでしょう。確実に安全とは言い切れません」

「そこまで画期的な商売である、と？」

「はい」

優斗の返答に、キファは2つの可能性を思いついていた。

1つ目は本当に画期的なアイディアがある、もしくはそう思い込んでいる。

もう1つは、今までの会話から買い戻しが出来ないのだろうと判断し、保証金目的で話を膨らませている。

どちらであったとしても、侯爵家自体ではないとは言え、その縁者相手にここまでするからにはそれなりの後ろ盾があるのだろうと、キファは不要な嘘を吐いてしまった事を少しだけ反省しながら、今まで以上に言葉を慎重に探す。

「キファ様。事情をお話し頂ければ、私もご協力出来るかもしれま

せん」
「譲歩して頂ける、と？」
「もちろんです。可能な範囲で、ですが」
先手を打たれてしまったキファが、許可を求める様にザイルに視線を送る。

悩む事もなく「お前の判断に任せる」と言った事から、彼がどれだけの信用を勝ち得ているのか、想像に難くない。

「ご存じのとおり、我々はクシャーナ様を帝国との和平の使者に据えたいと考えております」
「それは決定事項なのでしょうか？」
「見つかれば最優先でそうすると聞かされています」
ザイルは手柄を立てる為に、クシャーナを探していた。カートン家の次期当主でなく、息子と答えた事から、優斗もそれを予想していた。

ザイルはクシャーナを探し出す事で手柄を立て、その功績によってエスコート役として調印式に同行する事で自分の価値を高め、何かしらの地位を得る腹積もりだ。あわよくば彼女を妻とし、ユーシア領主の座を得られれば、とも考えていた。

ザイルの年齢は２６。特別見目麗しい訳でもないので、一般的な感覚で言えばまだ１０歳のクシャーナが彼を選ぶ可能性は低い。だが、現在ユーシアは実質彼の家の支配下にあり、彼女の兄弟が戻るまでは、カートン侯爵が後見人となる可能性が高い。侯爵も、自分の意思を反映し易い領地が増えるならば、彼に協力するだろう。

そんな事情を知る由もない優斗は、次期当主の座を狙っているのだろうと誤解している。

「調印式は1か月後に迫っています。一刻も早くハイルに向かい、準備を整えなければなりません」
キファの言う準備とは、領主任命から服の仕立てまで様々だ。

調印式に出る人間が、まったく地位のないと言うのは問題だ。帝国との正式な場であるので、服もそれなりの物を準備する必要がある。格式から言えば、既存の物に手を加えるのではなく、1から縫う必要があり、それなりの時間を要する。

また、クシャーナは最有力候補であるが、唯一の候補ではないので、何か問題があれば次点に譲る事になる。その為、全てを憂いなく、迅速に行う必要がある。

「何時契約が出来なくなるかもしれない人間を、使者には選べない、ですか？」
「その通りです、優斗殿」
時間がない事が判れば、その分無茶を言う。

商人とはそう言う人種であり、キファもそうやって過ごして来た。だからこそ、これを伝えたならばもう1つ伝えなければならない事がある。

「我々はクシャーナ様の目撃情報を聞き、急ぎ駆け付けました。その為、資金の準備をする時間を十分に取れませんでした」

要するに、時間はないが金もない、と言う事だ。必要ならば、キファは己の主人が侯爵家の三男であり、ほとんど実権が無い事も口にするつもりだ。

口にすればザイルが嫌な顔をする事は確実だ。だが、目の前の商人から譲歩を引き出すには、必要な事であると判断した。

「では、どの程度時間が必要ですか？」

「そうですね。半年程あれば」

「そんなにですか？」

実際にはその3分の2の時間があれば十分だが、それでも優斗には長すぎる時間だ。

買戻しをすると言う話が出ない理由が、金銭的な問題である事に、優斗は少し驚いていた。可能性として考えてはいたが、侯爵と言えば貴族の中でもかなり高い地位だ。次期当主でなくとも、それなりに自由になるお金があるものだと、思い込んでいた。

「後払いの契約を交わして買い戻して頂くと言うのは？」

「ザイル様はクシャーナ様と共にハイルへ向かうご予定です。そんな時間はありません」

「では、代理を立てて」

「奴隷と言う高価な品を、肩書のない人間の契約で買い取るのは難しいでしょう」

キファの言葉を最後に、少しだけ長い沈黙が場を支配する。

沈黙の中、キファはクシャーナの腕が、袋を壁にして、不自然でない程度に隠れている事に気づく。そして、捜索の際に見せられた彼女の個人情報からギフトの内容を思い出し、自分の嘘が全て筒抜けであった事を理解した。

その点を責めるべきか考え、その場合、ザイルが怒り狂う可能性があると思い浮かぶ。その弾みで目の前の商人を殺してしまえば、もう1人の契約者が見つかり、解約を行うまでの間、クシャーナの

身柄を確保出来なくなってしまう。彼女の部下の姿が見えない事から、彼に何かあった場合、あの従騎士が何か行動を起こすであろう事は安易に想像出来る。

指摘を断念したキファは、現実的な方策として、自分とザイルの全所持品の総額をざっと計算し始める。

「提案があります」

沈黙を破ったのは優斗だった。

優斗の目的が金、もしくは金になる物だと考えているキファは、計算を続けながらその言葉を待つ。

「荷馬車と商品は、ザイル様の準備が整うまで支払を待たせて頂きます。

奴隷は自分で買戻しますので、買戻しまでの支援と、出来る限りの資金提供をお願いします」

優斗の提案に、キファは主人に目配せする。

「それでクシャーナ嬢の契約が守られるのか？」

「契約機関へ赴き、完遂の証明を行えば」

「商人、それを行う気はあるか？」

「その代りに、ザイル様と契約させて頂けるのであれば」

「ふん。キファ、内容を詰めろ。お前が問題ないと思う内容で構わない。俺は最終決定だけ聞かせて貰う」

「畏まりました」

キファの言葉と同時に、クシャーナが立ち上がる。

今まで静かに座っていた彼女の突然の行動に、３人の視線が集まる。

「では、ここから先、嘘を吐いた方は私が指摘させて頂きます」

「商人の味方をしようと言う訳か」

大げさにため息を吐くザイルに、クシャーナはにこりと笑って見せる。

「いいえ。

私はユーシアの領主になると決めました。家族が帰って来る場所を守る為に。その為には、契約の権利を失う訳にはいきません」

そう言って、クシャーナは優斗とザイルの真ん中まで移動する。

「どうぞ、始めてください」

突然、場の主導権をクシャーナに奪われた事に茫然としていた２人は、すぐに反応出来なかった。

「では、まず私から提案させて頂いてよろしいですか？」

「は？　は、はい。そうですね」

クシャーナの幼い迫力に飲み込まれていたキファが、優斗の言葉で我に返り、焦りからその言葉を肯定してしまう。

同時に我に返ったザイルは、キファとは対照的に、笑みを浮かべてクシャーナを見つめている。

「契約を完遂する前に、ザイル様との契約を交わさせて下さい」

「了承出来ません、と言いたいところですが、ここは譲歩致しましょう」

譲歩した分、他の譲歩を引き出す。それは商売での常套手段だ。

譲歩したと言う形をとり、小さな恩を売る。契約書自体に完遂を行う事を盛り込む事が可能なので、キファに損はない。

「ふふ」

「あ」

了承できない、と言う嘘を吐いてしまった事に気づき、キファは焦る。

しかし、それを指摘する声は、何時まで経ってもやってこなかった。

「契約内容ですが、奴隷の買戻しまでの支援、具体的には販売経路を辿って現在の居場所を突き止めて頂きたい」

「なるほど」

自由に動かせるお金はないが、人材は居る。

ザイルは大きな実権を持たないが、生活に不便しないだけの支援を実家から受けている。それは侯爵家が雇っている使用人をつけると言う形で行われており、今も何名か同行している。

これは、彼が次期当主の座を狙って悪意ある行動を取らない様に見張ると言う意味があり、キファはザイルに直接雇われたが、賃金の支払いは侯爵家から行われている。彼に恩のあるキファは、有事には侯爵家よりも主人を優先すると決めているが、その場合、職失う事になる。

「そして買戻しの資金を、出来る限りで構いませんので、調達して頂きたい」

「出来る限り、ですか」

「はい。幾らまでなら捻出可能ですか？」
先ほどしていた計算から、その８割を口にしようとして、視線に気づく。

どうすれば、とキファは悩む。嘘は通じない。今回も見逃して貰えるかもしれないが、そうでなかった場合、それに対して誠意を見せる羽目に陥る可能性がある。

「金貨１０枚は確実にありますが、それ以上は調べなければ不明です」
「少ないですね？」
「我々はほとんど資金を持たずにここへ来ました。そしてその全てを、捜索で使い切りました」
その穴埋めとして、クシャーナの物だと言う荷物を売り払い、捜索資金に足した。

そこまで言う必要はないだろうと判断し、キファは別の言葉を紡ぐ。

「それを全てお渡しすると、ハイルへの移動もままならなくなります」
「嘘です、よね？」
「あ」

移動用の馬車も、食糧その他も、きちんと伝えれば侯爵家から派遣されている執事によって準備される。ザイルは普段から、必要な物と執事が問題ないと判断した物を、きちんと買い与えられている。これはお金と言う力をザイルに与え過ぎない為の家の方針なのだが、自分で買い物をする機会の少ないザイルは、今までさほど気にしていなかった。

「では、公国金貨１５枚とする、と言う事でどうでしょうか？」
「う。く。判りました」
準備出来ません、と言えば嘘になる事をキファは認識している。
資金を準備出来ずとも、いくらか物品は持っている。貴族の持ち物はそれなりに高価なので、それを売り払えば届く数字だ。
「不足分は後で請求する形でよろしいですか？」
「女奴隷の平均価格からすれば、十分であると思いますが？」
「平均は平均です。実際にいくらで売られているのか、判りません」
「返金不要。奴隷の価格自体がそれ以上であった場合のみ請求、でどうでしょうか？」
「それで構いません」
安く済ませれば優斗の得。高くついた場合は諸経費分損。
これならば安く買う努力をするだろう、と言うキファの思惑通り、優斗も同じように思考する。
これには商品価値がある理由で落ちていた場合の補償を含む事をどちらも認識していたが、口には出さなかった。
「次に荷馬車と商品の価格ですが」
「ちょっとお待ちください」
キファが口を閉ざし、少し俯く。
２０秒ほどの沈黙の後、彼は顔を上げ、口を開く。
「荷馬車はこちらで手配し、現物をお渡しする方向でどうでしょうか」

「荷馬車のサイズや、ホロに大きな傷がないなどの条件を加えて頂けるのでしたら」
「大きな傷、と言う条件は、主観による幅が大きいので、承諾出来ません」
「傷の大きさを指定すればどうですか？」
「使用に問題のない、表面のみの傷が含まれてしまいます」

実物を見る事が出来ない場合、現物支給は落とし穴が多い。少しでも危険性を減らしたい優斗と、支払いを現実的な範囲に収めたいと考えているキファの問答は、ひたすら平行線を辿った。

ザイルは実質、個人資産を持っていない。細々とした所有物を売ればそれなりの金額になるが、まとまったお金を作ればカートン家にいらぬ嫌疑をかけられる。

主人を守る為にも引けないキファの鬼気迫る表情に、これ以上は無駄だと判断した優斗は、別の角度から提案を行う事にした。

「察するに、侯爵家の所有する荷馬車で手を打たないか、と言う事なのですね？」
「そうとって頂いても構いません」
「条件付きですが、それでも構いません」
キファは疑いつつも、優斗に続きを促す。

「実は、荷馬車の中に商取引許可証を入れたままでして」
その言葉を聞いたキファは、歯を食いしばる。

ここに来て、さらに補償内容を増やそうと言う目の前の商人を、静かな怒りを携えながら睨みつける。

「ですが、先ほど指摘されました通り、それが荷馬車にあった事が証明出来ないのです」
「嘘です」
クシャーナの言葉に、優斗は笑顔を返す。キファの方は、意味が判らない、と混乱していた。
「ですので、商取引許可証を頂ける様、取り計らって欲しいのです。ザイル様の口利きがあれば、可能ですよね？」
クシャーナの指摘を無視して話を進める優斗に、キファの混乱は深まっていく。
混迷を極める思考で、キファは考える。優斗は商取引許可証が荷馬車にあった事を証明可能だと、クシャーナが判断した。にも関わらず、証明出来ないからそれの再取得を条件に譲歩すると言っているのは何故か。
「まぁ、確かに可能だな」
キファの混乱を察したのか、ザイルが口をはさむ。
主人の声が聞こえ、キファは、こんな事でどうする、と己を奮い立たせる。譲歩は別の譲歩を引き出す為の武器だ。逆に言えば、他の譲歩を引き出させなければ、それは意味をなさない。これを受け入れ、次を譲歩せず、叩き潰せば問題ない。
「ハイルへ移動後に手続きとなりますので、それなりにお時間を頂く事になりますが、構いませんか？」
「もちろんです」
「では、侯爵家の所有する荷馬車で、一頭引き、ホロ付、あの荷馬車よりも1回り小さい物を準備します」

荷馬車の詳細を紙に書き、そこに幾つかの文言を足してから、優斗はそれを承諾する。

古さからではなく、あるいわくから処分される予定だった荷馬車で片が付いた事に、キファはほっとする。これならば懐が痛まない上に、それなりに美品なので上手くやれば恩も売れるかも知れない。

他にも引き渡し可能な荷馬車は存在するが、侯爵家に交渉する際の手間と根回しにかかる費用を考えればベストな選択肢を押し付ける事が出来たと、キファは少しだけ自信を取り戻す。

「受け取り場所はどうしましょうか？」
「ザイル様は調印式までハイルに滞在する予定です。そこでどうでしょうか？」
「良いと思います」
「奴隷を売った相手もあそこを目指しているはずですしね」
「え？」
突然出た話題に、優斗は驚きを隠せない。

販売経路を辿る、と契約に盛り込む予定ではあったが、運が良ければ売った商会に、悪くとも更にそこが売った先にいるものだと思っていたので、優斗は今日明日中に買い戻せるだろうと、勝手に思っていた。

「式典に便乗した、ちょっとしたお祭り状態になる予定ですので、そこで売る商品を集めているようでした」
「奴隷商に売った、と言う事ですか？」
「えぇ。キャリー商会と言う女奴隷専門の商会ですが、貴族相手に奴隷を売る事も多く、それなりの規模を誇ります」
「貴族御用達ですか。信用出来る商会なのですね」

「信用と言うか、まぁ、ちょっとした特色のある商会ではありますね」

予想外の展開に動揺した心を落ち着けながら、優斗は質問を続ける。

「買付の後、どちらへ向かわれたのですか？」

「ハイルまでにある支店を巡って、商品を集めて来るつもりのようでしたね。お祭りで売れ残りを処分しようとか、考えているのかもしれません」

その商品が人間である事を考えない様にしながら、優斗は1枚の紙を取り出す。

紙に今まで決めた内容を書き出し、他のまだ詳細を詰めていない内容も無理のない範囲で書き連ねていく。その間、文字を書く彼の手には3人分の視線が注がれ続けた。

「これでよろしければ、契約に向かいましょう」

３０分後、数点の修正を加えた紙を手に、４人は契約機関のある場所へ向かった。

妥協点（後書き）

久しぶりの交渉シーンでした。
そして久しぶりの優斗くん活躍回でもあったかもしれません。

没交渉

無事に契約書と契約の完遂証明を得た優斗は、割り振られた部屋でベッドに転がっていた。

色々と仕込んでから臨んだ交渉の結果は、上々と言える。

優斗の計画はこうだ。

まず、優斗・クシャーナ・トーラスの3人で契約書を作り、内容や言動で相手に誤解を与える。

思惑通り、彼らは3人目の契約者をクシャーナの家族だと勘違いしてくれた。念の為、トーラスに席を外させ、契約者がクシャーナの関係者で、現在の居場所が不明と言う状況も作り出した。相手に嘘を見抜くギフトは存在しなかったようなので、これは意味のない保険になってしまった。

これさえ通れば、後はクシャーナの契約する権利を盾に色々と要求が可能だ。

結果、荷馬車とフレイを取り戻すまでの支援・資金を手に入れた。しかも、正式な商取引許可証付きで。

フレイと荷馬車、荷物が即日で戻り、報酬として商取引許可証を得られれば最高だったのだが、現状ではそれは不可能なので、ここまで妥協する事になってしまった。

心配事があるとすれば、フレイをすぐに買い戻せなかった事だ。

こうしている間にも彼女が売られてしまうのではないのだろうか。その結果、どんな目に遭ってしまうのか、想像したくない。

優斗は資金を受け取り次第、すぐにでもここを発つつもりだった。ハイルまでは普通の荷馬車ならば6日ほどかかり、フレイが売られたのが2日前。相手が寄り道をしていた場合、途中で追い抜かす可能性があるので、キャリー商会の支店があると言うアロエナと、テルモウと言う街に寄る予定だ。

人頭税などの出費は痛いが、アロエナでロード商会から資金を得られれば、と考えていた。色々あって、飛び杼の報酬を受け取っていないし、それが無理でも、蜂蜜菓子店を担保に借りるくらいは出来るだろう。

そんな思考をしていると、ドアがノックされ、優斗が起き上がりながら「どうぞ」と返すと、扉が開いてクシャーナが姿を見せる。

「どうした？」
「その、すぐに出発するのですよね？」
「うん。今日中に準備してくれるそうだから、明日の朝に」
そう言いながら椅子を引き、クシャーナが座るよう、誘導する。

優斗も机と対になっている椅子を反転させて座ると、机の上に置いてあった袋を指ではじく。

「褒美、中身は全部銀貨だったよ」
「本当にお金がないんですね」
うちと同じですね、とクシャーナが苦笑する。

優斗が思うほど、貴族の地位が高くないのか、それとも彼らが例

外なのか。そんな風に考えながら、クシャーナの言葉を待つ。

「優斗様」

「ん？」

「少しだけ話を聞いて頂けますか？」

「もちろん」

クシャーナが目を瞑り、一呼吸置いてから再び言葉を紡ぐ。

「ユーシアを守りたい、と言うのは、私の偽らざる本音です」

「そっか」

「ですが、優斗様。私は貴方から離れたくありません」

その言葉にどう返して良いのか判らず、優斗は曖昧に笑う。

「愛しています。私と共に、ユーシアを守ってくださいませんか？」

その言葉を受け、優斗の笑みが困り顔に変わる。

今までの、頼れる者が他に居ない状況での切羽詰まった行動とは違い、その言葉からは真摯な思いが感じられる。

その告白を聞いた優斗は、それが異性に対するモノと言うよりも、いなくなってしまう家族に対するモノに近いと感じていた。とは言え、前者の色がまったくない訳ではない。

だからこそ、どう答える事が彼女にとって良いのか判らず、困ってしまう。

「はは、そんな顔、しないでください」

寂しそうに、乾いた笑みを浮かべるクシャーナ。

「愛してるって伝えて、困った顔をされたら、どうしていいか判りません」

受け入れられれば、抱き着けばいい。拒否されれば、泣き叫べばいい。しかし、こんな時にどうして良いのか、クシャーナに教えてくれる人はいなかった。

「同じ髪、同じ肌。最初はそこに惹かれただけでした。でも、今は、私なんかをどんな時でも見捨てず、ずっと守ってくれた優斗様だから」

涙の気配に、クシャーナが言葉を止める。

俯き、泣くものか、と涙を堪えるクシャーナの頭に、いつの間にか立ち上がっていた優斗が手を置く。

「私なんか、って言われると、見捨てず守ってた俺が馬鹿みた――」

「そんな事はありません！」

勢いよく上げた顔に、一筋の涙が流れる。

優斗は自らの手でそれを拭うと、頭に乗せていた方の手を動かし、少し乱暴に撫でる。

「前にも言ったけど、クシャーナは可愛いし、魅力的な女の子だよ」

「ならっ！」

声を荒げるクシャーナとは逆に、その頭を撫でる優斗の手は、徐々に優しいものに変化して行く。

目の間に居る女の子を泣かせている罪悪感。彼女を傷つけたくないと言う甘さ。向けられる好意を失う事への名残惜しさ。

その他にも色々と浮かんでくる感情に蓋をし、フレイを取り戻すまでは協力者を失う訳にはいかないと自分に言い聞かせ、優斗はなるべく優しい声を出す様、心がける。

「こんな妹なら、ちょっと欲しいかなって思うくらい可愛いよ」
「うっ。妹、です、か？」
「何時だったか、家族にして欲しいって言ってた」
クシャーナから、なんとか聞き取れる程度の音量で、そうですけど、とだけ返って来る。

自分は酷い事をしている。そう自覚しながら、優斗は撫でていた手を後頭部へ移動させ、その頭を自分の胸元へ引き寄せる。

「妹、嫌？」
「嫌じゃないです」
くぐもった声を聞きながら、優斗は2つの意味で顔が見えなくなった事に安堵する。

空いた手をクシャーナの後ろへ回し、背中をさする。しばらくすると、徐々に涙の気配が薄れていき、いつの間にか優斗の背中に、彼女の手が回されていた。

とりあえずこの場をどう取り繕うべきか。そんな思考をしている事に自己嫌悪を覚えながら、優斗は口を開く。

「しばらくは別だけど、ハイルでまた会えるから」
「うん」
言ってから、和平の使者と言う肩書を持つ重要人物に、身元不明な優斗が会えるのか疑問に思ったが、すぐに思考を切り替える。

「結構楽しみにしてるんだけどなぁ。６年後」
「えっ？」
クシャーナが顔を上げ、優斗を見上げる。
目の端にまだ涙が残っている。回されている腕の力が緩んだが、離す気配はない。
彼女の表情、仕草、そして行動。その全てに父性本能をくすぐられた優斗は、可愛いな、とただそれだけを思う。
蓋をした感情が零れ落ちる気配に気づかない振りをして、優斗は笑みを浮かべる。
「えっち」
頬を赤らめながらはにかむクシャーナ。
その言葉と共に、彼女はまだ完全に消えない涙の気配を携えながら、潤んだ瞳を少しだけ細めて優斗を上目使いに見上げる。
「失礼な。そんな目で見た事ないのに」
「そうでしたね」
ぱっと手を離し、クシャーナが一歩下がる。
少しだけ名残惜しさを感じながら、優斗も同時に手を離す。
「でも、１つ訂正してください」
「ん？」
「６年後じゃなくて、５年後です」
そうだったっけ、と思いながら、それを指摘する意味はあるのか、

と言う疑問が浮かぶ。

そして約束の内容を思い出し、これ以上考えるとドツボに嵌りそうだと判断した優斗は、そこで思考を止める。

「5年で、とびっきり可愛くなって見せます」

「それは楽しみだ」

優斗の返事が真実であると判断したクシャーナは、嬉しそうに、満面の笑みを咲かせる。

「だから、ちゃんと過程も見ていて下さいね」

何時かの会話を再現する様な言葉。

ならばと、優斗は手を上げ、そのままクシャーナに向けて落とす。あたる寸前で止めると、思わず目を瞑ったクシャーナの頭にゆっくりと乗せ、優しく撫でる。

「了解」

「あは」

くすぐったそうに笑うクシャーナを見て、優斗も笑みを浮かべる。

しばらく撫で続けた後、そろそろいいかな、と手を戻した優斗は、クシャーナから一歩離れる。

「じゃあ、ハイルで」

「はい。1人は不安ですけど」

「おいおい。トーラスの事、忘れてるぞ」

「あ」

先ほどよりも恥ずかしさの割合が増えたはにかみを浮かべるクシ

ャーナを見つめながら、優斗は裏方ばかり任せているトーラスに対し、一段落したらきちんとお礼をしようと決める。

「クーナ、悪いけど明日は早いから」
「……判りました。では、おやすみなさい」
「うん。おやすみ」
少し名残惜しそうなクシャーナが部屋を出ると、優斗は出発の準備を整えてから、眠りについた。

朝一番の乗合馬車で街を出た優斗は、二日後にアロエナへと到着した。

野宿を前提としない乗合馬車では、夜になる前に寝泊まり出来る場所に止まる為、その早い移動速度とは裏腹に、目的地への到着は荷馬車と同じくらいになる。

「とりあえず、キャリー商会で話を聞くか」
昼を少し過ぎていた為、空腹を感じていた優斗は、露店でソーセージを挟んだパンを買い、ついでに道を尋ねる。

教えられた道を進み、買ったも物を食べ終わる頃に、目的地へと到着する。

「すいません」
「はいはい。どういったご用件でしょう」
出て来たのは、恰幅の良い、中年のおばさんだった。

店番だろうか、と思いながら、優斗は懐に入れた紹介状に服の上

から触れる。

「初めまして。実は、キャリスさんがここにいらっしゃると聞いたのですが」

「どんなご用件で？」

キャリスとは、キャリー商会の主で、商品を集めてハイルに向かっている張本人でもある。

全身に値踏みするような視線を受けながら、優斗は笑顔で返答する。

「実は、ある貴族様からの紹介で、商売の話をする為にやってきました」

書状を取り出し、店員に見せる。

手渡さず、それを2度裏返しながら確認させる。封筒に入ったそれは、見ただけで高級品である事が判る代物だ。

「なるほどね。

残念だったね。キャリスさんは昨日の昼に街を出たよ」

「そうですか。ありがとうございます」

「いやいや。要件はそれだけかい？」

優斗は、はい、と答えそうになった口を、なんとか止める。

キャリスがここを通った事と、その目的は大体判っている。だが、裏付け調査をした訳ではない。

それに、優斗が最も欲しい情報を持っているかもしれない。

「ハイルで売る商品を探していると聞いていたのですが」

「あぁ、そうだよ。ここでも1人、持って行ったよ」
優斗は、持って行った、と言う発言に少しだけ抵抗を感じた。
奴隷商なのだから当たり前だ、と自分に言い聞かせ、優斗は質問を続ける。

「やはり、売れ残りを？」
「はっは、さすがだねぇ」
豪快に笑うおばさん店員に気圧され気味になりながらも、優斗は笑顔を崩さない。

「どんな奴隷を連れていました？」
「なんだ、買付けだったのかい？」
「はい。名前は申し上げられませんが、さる貴族様の趣味の買い物です」
「何をご所望だい？」
人の好い笑顔を浮かべたまま、目の光だけが商人のソレとなった店員に、彼女が単なる店番で無い事が伺える。

優斗は質問内容を吟味しながら、同じ様に商談の体制に入る。

「十代で金髪碧眼の女奴隷とか、いますか？」
「うちは女奴隷しかいないよ。でも、金髪碧眼ねぇ。あの子は２３だし」
優斗の条件に合う奴隷を探しているのだろう、店員はテーブルに置かれた紙に目を落とす。
上から下まで確認すると、ふむ、と息を吐いて優斗へ視線を戻す。
「残念ながら、条件に合う子はいないね。１０代にしか見えない子

ならいるけど、どうだい？」
「すいません」
「そうかい、それじゃ仕方ないね。キャリスさんが連れてた中にならいたんだけどねぇ」
それは本当ですか！　と叫びそうになるのをなんとか堪える。
口から余計な言葉が漏れないように握りこぶしで押さえながら、優斗は少しの間を演出する。
そうやって考えるような素振りを見せながら3秒を待ち、優斗は焦りを表に出さない様に注意しながら、慎重に言葉を選ぶ。
「その子も売れ残りなんでしょうかねぇ」
「そうかもしれないね。つくづく、間の悪い人だねぇ」
はっはっは、と2人で笑いあう。
笑いを止める時に、流れで世間話、と言う体裁を取る為に、優斗は、商談用に浮かべていた笑みを、意識して消す。
「ちなみに、その子は可愛かったですか？」
「気になるかい？」
「可愛い女の子が気にならない男なんていませんよ」
そりゃそうだ、とまた豪快に笑う店員に、優斗は同じ様に笑って見せる。。
「飛び切りの美人なら、個人的に買い取ろうかな、なんて」
「残念ながら、しょせん売れ残りさ。不細工ではなかったけど、美人ではなかったねぇ。
発育もイマイチだったし、どっちかと言うと可愛い感じだった気がするね」

「美人ではなく美少女でしたか」
「それはないねぇ。いいとこ、そこそこ可愛い村娘って感じさ」
そのままひたすらしゃべり続けるおばさん店員は、その女奴隷がほぼフレイであると考えられるだけの情報と、この街の噂を延々と話し続けた。
帰るタイミングを逃してしまった優斗は、店に客が来たのを切っ掛けに、逃げるように店を出た。
外に出ると、ロード商会にある方角へ向かって歩き出す。途中で宿を取るべきか悩みながら歩いていると、目の前に誰かが立ちふさがった。
「やっぱおめえか」
「ん？　って、貴方は」
優斗は目の前の人物に見覚えがあった。
どこで会ったのか思い出せず困っていると、目の前の男は不機嫌そうに、左側を指差す。
「立ち話もなんだ。あそこへ入らねーか？」
「ええっと」
「もしや、俺が誰だか判ってねぇ、なんてこたーねーよな？」
判りません、と答える代わりに、優斗は苦笑いを浮かべる。
この世界に来てから関わった人間は、それなりに多い。だが、この街で出会った人間は、それほど多くない。その中に、目の前の男と合致する相手はいなかった。

商売人なら一度会った相手の顔は忘れるな。そう言っていた父親を思い出し、商人として生きていくならばそれを実践しなければと反省する。

「シールズだ。キコ森の近くの村で、交渉役として色々あっただろうが」

「あ、あぁ。貴方でしたか」

何故ここに、と聞こうとした優斗は、自分が彼をロード商会との交渉役にした事を思い出し、それを声には出さなかった。

シールズは何も言わない優斗から視線をそらし、先ほど指差した酒場へと歩いていく。

ロード商会の状況を聞くのも重要か、と考えた優斗は、素直にその背中を追う。

「マスター、部屋かりっぞ。あと、これ貰ってく」

「ちゃんと金払えよ」

店に入ったシールズは、ずんずんと奥へ入って行き、優斗に扉の中へ入るよう、促す。

個室に連れ込まれるのは予想外だった優斗は、迷った挙句、警戒しながら部屋へと入って行く。

「お前、今何してんだ？」

「ちょっとした買付、と言ったところでしょうか」

椅子に座り、1人で飲み始めたシールズに顔をしかめながら、優斗は聞くべき内容を思い浮べる。

「しっかし、大胆だよな。あんな事になった癖に、まさかここに現

れるとは」
「あんな事？」
気になる言葉に、優斗は思わず聞き返してしまう。
とりあえず考えていた質問を先送りにする事を決めた優斗は、シールズに視線を向け、説明を求める。。
「もしかして、何も知らねぇのか？」
「たぶん」
優斗はそれが最も有効な手段だと判断し、誤魔化す事をしなかった。
知っている振りをして言葉の端々から推測していく方法では、答えを見誤るかもしれない。ここ最近、消せない焦りを感じ続けている優斗は、今のままでは繊細な交渉は出来ないだろうと、考えていた。
「ほぉう。じゃあ、俺が一番にお前の悔しがる顔が見れるって訳だ」
その言葉に何か返そうとした優斗が口を開く前に、シールズは楽しそうに口を滑らせていく。
「お前、ユーシアで阿漕な事やったんだって？
あれに腹立てたハリスのヤツが、店からレシピまで、全部持っていっちまったんだよ」
言葉の意味が直ぐには理解出来ず、優斗は相槌を打つ事すら出来なかった。
茫然自失としている優斗に、シールズは畳み掛ける様に言葉を続ける。

「中々鮮やかな手際だったぜぇ。
ハリスの野郎が何人か若い部下を連れてやって来たと思ったら、三日後には店は廃業。レシピも利権も、全て回収と来たもんだ！」

酒瓶を傾け、中身を減らすシールズを見つめながら、優斗はなんとか思考を再開する。

村の蜂蜜菓子店が廃業？　レシピも利権も回収？

「あの、ミルドさんは？」
「結婚して今はこの街に住んでるよ」

ミルドの顔を思い出し、求婚される事くらいあるかもしれない、と考えた優斗の頭に、寿退社と言う言葉が思い浮かぶ。

「結婚して、旦那の家に引っ越すから店は続けられない、って訳だ。で、アイツに何かあったら全権をどうするって決めたかくらい、覚えてるだろ？」

全権利を一時ロード商会預かりとする。

思い出した文面は、ますます優斗を混乱させる。

「結婚相手は、ハリスの連れてきた部下だったぜ？」
そこまで言われ、ようやく優斗は理解する。

因果応報。自業自得。しっぺ返し。目には目を、歯には歯を。

ユーシアで行った、ロード商会に不利益を与える行動。それに対

し、ハリスは相応の報復行動を取っていた、と言う訳だ。

「シールズさん」

「ん、なんだ？」

にやにやと嬉しそうに笑いながら、シールズが酒瓶を机に置く。

蜂蜜菓子の利権が、一時的にロード商会に渡っている事は判った。問題は、それを取り戻す事が可能なのか、と言う事だ。

「プラートと言う方をご存じですか？」

「プラート、プラート。あぁ、あの大男か？」

「多分、その人です。今、どこに居るかご存知ですか？」

「急に湧いて出たと思ってたが、少し前から見かけねぇな。あの図体なら目立つだろうに」

まさか、と最悪の可能性に思い至った優斗は、それをシールズに気づかれぬ様、情報を聞き出す術を探す。

「ロード商会に詳しいようですが、今も交渉役を？」

「あ？　村の交渉役なら首になった。お前のせいで、村の特産物から他の農作物まで、全部ロード商会が直接買い上げる事になったからな」

店の蜂蜜等の材料を生産者から直接、優先的に仕入れる権利。

店の解釈を商会が運営する大規模な物に置き換えれば、それも可能だろう。そして直接買い取ると言う事は、仲介の交渉役は不要になると言う事だ。

「ならば何故詳しいんですか？」

「街で似たような事やってるんでな。情報は色々入って来る」
「なら、少し聞きたい事があるのですが」
優斗は質の良い物を選んで、銅貨を1枚テーブルに置く。

シールズは、にやりと笑ってそれを自分の前まで引き寄せると、懐に入れる事なく、そのまま手を離す。

「ロード商会は、糸を大量に仕入れていませんか？」
「良く知ってるな。内密にやってる感じだったぞ」
「私にもちょっとしたツテがありますので」
「じゃあ、それに関してもう1つあるんだが、判るか？」
「大きな工場を買い取った、とかでしょうか」
「なんで知ってやがる」

嫌な予感が大きくなっていく。
これは、本格的にマズイのでは、と優斗の心は少しずつ焦りに染まっていく。

「さすがにこれは知らんだろう。やつら、何故か、工場で働く為に安い労働者でなく、奴隷を集めてる」
「情報を漏らさない為か」

つい口にしてしまった言葉に、シールズが驚いている顔が目に入った。

今すぐにこの街から逃げるべきかもしれない。そう考えた優斗だが、自分が何故ここに居たのかを思い出し、逡巡する。

「ロード商会は、大きな商売の為に人を害すると思いますか？」

「いきなりだな」
「ちょっとした儲け話があるんですが、実行するとあそこに敵視される事になりそうなんですよ」
シールズがニヤリと笑い、テーブルの銅貨をポケットにしまい込む。

優斗は静かに大きく息を吸い込むと、息と共に徐々に思考を蝕む焦りを吐き出し、一時的に除去する。そして銀貨を1枚取り出し、今度は手の中で弄ぶ。

「まぁ、出来なくはないだろうな。あれだけ大きな商会なら」

利益の大きさ次第ではあり得る。
そう解釈した優斗は、頭の中で仮説を組み立てる。

報復として行った蜂蜜菓子の利権乗っ取り。優斗が戻れば返却する必要があるにも関わらずこれを実行したと言う事は、恐らくそれまでに販路を整備し、行商人では太刀打ちできない状況を作り出す事が可能だと踏んだのだろう。

それだけならば、優斗とロード商会が敵対すると言う結果だけで終わる。だが、優斗はもう1つ、ロード商会に持ち込んだものがある。

飛び杼。機織り機の生産量を飛躍的に伸ばすそれは、独占すれば大きな利益を得る事が出来る。
しかし、持ち込まれた時点で既に、その技術をユーシア家が所持していた。仮にロード商会が優斗と独占契約を結んでも、外部に漏れて居ては、意味がない。

技術を独占する為に、ユーシアと優斗が邪魔だった。戦争を誘発する事は出来なくとも、準備等で物資等が動けば、攻めて来る事を予想する事は出来るかもしれない。優斗はそう考え、もしかしたらロード商会は王国軍を使い、ユーシアと優斗を消そうとしたのでは、と予想する。

思い出してみれば、匿ってくれると準備された宿は、街の門からかなり遠い場所だった。偶然、騎士団用の門が使えなければ、脱出はもっと遅れていただろう。逃げ遅れていれば、帝国の黒髪を持つ優斗は、容赦なく殺されていた。他にも、その前に商会を訪ねた時に誰も居なかったのは、既に避難していたからだと考えられる。

優斗の想像は半分正解で、帝国との繋がりが強いロード商会は、そちらから王国軍の大規模侵攻を伝えられていた。帝国が王国の大軍を退ける事が出来たのは、事前情報によって迎撃の準備が万全であった事が大きい。王国軍が敗走する事を予想していた商会は、飛び杼が設置された機織り機を回収すべく、既にユーシアに入っている。

「命の方が大事ですので、止めておきましょう。ところでシールズさん」

「なんだ？」

「私と会った事は、ロード商会に秘密にして頂けませんか？」

人差し指と親指で銀貨を挟み、シールズの顔の前に突き出す。

ニヤリと笑い、いいだろう、と告げたシールズに銀貨を渡すと、優斗は資金を得る事を諦めると言う苦渋の決断をし、早々に街を出る事にした。

没交渉（後書き）

男キャラ再登場でした。
副題は他の候補と迷いましたが、インパクトが強そうなのでこれにしました。
今回は字面で選んだので、深く考えないでくれると嬉しいです。

人身売買

その日最後の乗合馬車に乗り込む事が出来た優斗は、窮屈な車内で考え事をしていた。

今、ロード商会の顔見知りに見つかれば捕縛される可能性が高く、可能性は低いが、最悪、殺されるかもしれない。独占したつもりの技術を知っている優斗は、ロード商会にとって邪魔な存在だ。

殺されるのはもちろん、身柄を捕えられれば、フレイを追えなくなる。その間に彼女の居場所を見失ってしまう可能性もあり、それだけは絶対に避けたかった。

しかし、逃げても問題は残っている。このままでは、フレイを取り戻す資金が足りなくなる可能性が高い。

フレイを金貨9枚で購入したと言う商人は、現在も彼女を連れて移動中だ。関を通過し、アロエナと言う市壁のある街に寄っているので、奴隷税が掛かる。更に、食費等の維持費も必要で、そこに商会の利益を足せば、手持ちの金貨では足りなくなる可能性がある。

優斗の所持金は残り少なく、そのほとんどがザイルから受け取ったものだ。具体的には、優斗がずっと持ち歩いていた宝石に銀貨、銅貨とザイルの褒美、買戻し資金。乗合馬車の代金と通行税がかかるので、買戻しまでにまだ減る予定だ。

最初は、何も考えていなかった。その後も、生きていくのに十分なお金がある事に満足していた。ロード商会の手引きで帝国に渡れば、飛び杼の技術と交換で大金が入る予定だった。つい先ほどまで

も、ロード商会から大金が得られるだろうと高をくくっていた。

「今日はここまでです」

小さな村に馬車が止まる。

辺りは既に暗くなっており、御者の案内で全員が宿へと移動する。資金の問題もあり、今回は一番安い乗合馬車を選んだ為、宿のランクも最低な上、大部屋で雑魚寝だ。

荷物を両腕で抱えながら、優斗は横になる。完全に寝入ってしまうと荷物を盗まれる可能性があるので、そうならない様に頭を働かせ続ける。

ロード商会から追われない様にする方法はある。飛び杼の技術を、幾つかの商会に渡せばいい。幸い、新ユーシア領主がその効果を保障してくれるだろうし、絹糸が特産のユーシアならば、率先して使ってくれるだろう。そうすれば独占する意味がなくなり、優斗が狙われる理由もなくなる。実現可能かどうかを無視すれば、どこか特定の商会や、権力者に匿って貰うと言う手もある。

リスクとリターン。

商会は利益にならない事、利益になっても不利益が多い事には手を出さない。故に、情報を得て、状況を利用する事はあっても、実力行使に出る事は少ない。売込みに来た行商人に何かをしたと言う噂が立てば、真っ当な理由があったとしても、売込みを敬遠される可能性がある。だからこそ、利益が期待できなくなれば、もしくはそれ以上の損失が出ると予想されれば、意味なく優斗を狙う事はない。

対策が可能ではあるが、それでは資金の問題が解決しない。

別のところに売込む事で資金を得るにしても、本当に使える技術であるのか、証明する必要がある。それには飛び杼の作成資金と売込む相手へのコネが必要で、後者はハイルでクシャーナ達と合流すればなんとかなるが、前者は集めるのにも、作るのにも時間がかかる。

資金的問題だけならば、ロード商会が実績を出すのを待つと言う手もあるが、一刻を争う優斗には、それを待つ悠長な時間は存在しない。

半分以上眠った状態で、延々と思考を垂れ流しながら朝を迎えた優斗は、１つの結論に達した。

現在の所持金で買い戻せるよう、最大の努力をするしかない、と。

アロエナを出てから眠れない夜を3度超え、テルモウへと到着する。

この街にあるキャリー商会の店舗に向かう前に、優斗は自分の手持ちを確認する事にした。

関と市壁を2回ずつ通った為、出発時よりも所持金はかなり目減りしている。ざっと計算して見ると、公国金貨換算で、１６．５枚と言ったところだ。

キファから、怪しい人間が入り込むのを警戒して警備を増やすと言う名目で、ハイルの人頭税を含む様々な税が上がるはずだと聞いている。ここで捕まえられなければ、更に目減りした金額で、各種税分高く売られる事になるフレイを買い戻さなければならない。

優斗は、ロード商会を当てにし過ぎていた自分に腹を立てながら、寝不足の頭を起こす為に井戸に寄り、顔を洗ってからキャリー商会へと向かう。

何度か道を尋ねながら、どうにかキャリー商会に到着した優斗を出迎えたのは、２０代半ばと予想される女性店員だった。

「いらっしゃいませ。本日はどう言ったご用件でしょうか？」
「実は、キャリスさんがここに居ると聞いてやって来ました」
「キャリス様ですか。実は先ほど、出かけてしまいまして」
一足遅かったか、と優斗が落ち込んだ事に気づいたのだろう。店員は慌てて言葉を足す。

「少し出かけただけですので、少々お待ち頂くか、伝言を頂ければお伝えしますが」
「あ、まだこの街にいるんですか」
「えぇ」
優斗は、追いつけた、と言う事実に、まだ少しだけ残っていた眠気が吹っ飛ぶのを感じる。

ならば交渉開始、とばかりに、優斗は営業スマイルを浮かべ、女性店員に１歩近づく。

「では、待たせて頂く間にもう１つの用事を済ませても構いませんか？」
「はい、なんでしょう」
かなり商売慣れしているであろう店主よりも、目の前の女性の方が与し易いだろう。

ならば戻って来る前に話をつけようと考えた優斗に、彼女も商売用の笑みを返す。

「天の神の欠片、その中でも空に光る雷のギフトを持つ奴隷はいませんか？」

「少々お待ちください」

店員が2枚の紙を手に取り、目を通していく。

アロエナの店員は紙を1枚しか確認しなかった。それだけで確信には至らないが、ここにはあちらよりも多くの奴隷が居るのだろうと言う事が予想出来る。

「3名ほど居ますね。あ、申し訳ありません。1名は売約済みでした」

売約済み、と聞いて心臓が跳ねる。

まさか、と優斗は恐る恐る、しかしそれを悟られない様、静かな口調で質問する。

「売約済みの奴隷は、どんな感じですか？」

「売約済みなのに気になるんですか？」

「他人の物の方が気になるのは、誰しも同じですよね？」

優斗がニヤリと笑うと、店員も楽しそうに笑い返す。

店員は思い出そうとする時の癖で、少しだけ首の角度を変え、天井に視線を向ける。

「髪の長い、２０代後半の綺麗な感じの奴隷でしたよ」

「そうですか」

安堵しながら返した言葉に、少し興味を失うのが唐突すぎたかもしれない、と反省する。

「長い髪は私も好きです」

「では、髪が綺麗で、長く伸ばした奴隷を見繕ってきましょうか？」

「興味はありますが、まずは天の神の欠片です」

「そうでした。ちょっと連れてきますので、少々お待ちください」

ここから先は男子禁制なんです、と言って店員が奥のドアへと消えていく。

連れてこられる人間がフレイでなかった場合はどうするかシミュレートしながら待つ優斗の元に、店員が戻って来たのは１０分後だった。

「お待たせしました」

２人の奴隷を引き連れて戻って来た店員の言葉は、優斗の耳には届かなかった。

連れてこられた奴隷は、フレイだった。

俯き気味に歩いて来る姿は、以前よりも更に小さく見える。

「こちらがご希望された商品です。如何でしょうか？」

「ん、あぁ。何かぱっとしませんね」

優斗が声を発した瞬間、フレイが顔を上げる。

無表情が驚きに変化し、唖然とした表情で固まる。

別れた時には少し丸みを帯び始めていた頬は、この短期間で出会った頃の様に細くなっている。優斗の頭には、ちゃんと食事を摂っているのか、とか、そんな事が思い浮かんだ。

今すぐにでも声をかけたい。大丈夫なのかと確認したい。そんな衝動を抑えながら、優斗はフレイから視線を外し、店員に向き直る。

「何か、憮然としている様に見えるのですが」

「す、すいません。こら、貴方の買い手になるかもしれない人なんだから、ちゃんと挨拶しなさい」

「申し訳ありません。どうぞ、よろしければ私をお買い求めください」

フレイのあんまりな棒読みに、優斗は、定型句なんだろうな、と苦笑が漏れそうになる。

同時に、彼女がそんな事をさせられている事に、腹も立つ。

「初めまして。どうか私をお買い求めください」

その声で、ようやくもう1人連れてこられた奴隷がいる事を思い出した優斗は、怪しまれないようにそちらも観察していく。

クシャーナと同じか、少し上と言った風貌の少女。こんな小さい子も居るのか、と嫌悪感を感じながらも、表面では平静を保つよう、努力する。

「いかがですか？」

「んー。子供はあまり好きじゃないんですよ」

「では、どの程度の年齢がお好みでしょうか。すぐに準備致します」

「いや、ギフト持ちを探してるんで」

「そうでした。申し訳ありません」

まだ慣れていないのかな、と思いながら、優斗はそこがつけ入る隙にならないかと、店員の女性を観察する事も忘れない。

「どっちかと言えばこっちだけど、こっちも十分子供か」

「いえ、これでも彼女は１６です」

聞く手間が省けた、と優斗は内心喜んだ。値切り交渉をするならば、商品にケチを付けるのは有用な手段だ。

一方、フレイは、やっぱり子ども扱いなんですね、と思っていた。

「１６、ですか。もう成長に期待できない訳ですね」

「えっと、そのう」

「ちなみにおいくらですか？」

「公国金貨で２０枚です」

奥で確認して来たのか、値段だけは歯切れよく、すんなりと返って来た。

予算オーバーな価格に、優斗はどうすればそれを下げられるか、シミュレートしていた内容を思い出す。

「んー、高いですね。女性奴隷の平均価格からすれば、１３枚くらいが妥当じゃないですか？」

「あ、まだ説明していませんでしたが、彼女は男性の手が付いていない奴隷なんです」

「なるほど。ですが、それでも高い」

誰が、どうやってそれを確認したんだ。

優斗は逸れる思考を必死に手繰り寄せ、頭の中から次を引き出す。

「スタイルは子供並み。容姿は悪くもなく良くもなく。例え生娘でも、やっぱり２０枚は高いですね」

「えっと、少しだけなら交渉にも応じますが」

「顔も好みじゃないし、他をあたろうかな」

目の前の女性になんとか聞き取れる程度にトーンを落とした優斗の呟きに、店員の動きが止まる。

元々大きな動きがなかったので確信はないが、反応を予測して観察していた優斗には、そう見えた。

「女性奴隷の平均価格が１５枚前後。この奴隷の売りがそれだけなら、１４枚くらいが妥当かと思うのですが、どうでしょうか」

「さすがにそれは。１９枚でどうですか？」

１枚下がった。だが、まだ足りない。

とりあえず揺さぶって様子を見るか、と優斗は交渉を続ける。

「ギフトが重要とは言え、どうせなら可愛い子の方が良いですし、それだけ出すならもっと良い子が買えそうですね。

安ければ買ってもいいんですが、どうですか？」

「品質でなく、好みの問題ですと、値下げるのは……」

「好み、ですか」

鋭く告げる優斗の声に、店員の困り顔が、驚きへと変わる。

「十人並の容姿でスタイルは平均以下。反応から察するに、無愛想で性格も悪そうですね。

女性奴隷の使途を考えれば、少なくとも容姿とスタイルは品質と言って差し支えないのでは？」

優斗の指摘に店員は慌て、フレイは唇の端をひくつかせる。

「幼女趣味の方に売るなら、そっちの子の方が良いでしょうし」

今まで話題にも出なかった少女を引き合いに出す。

既に自分には関係ないと意識を向けていなかったのか、優斗の視線を受けてキョトンとしている。

「しょ、少々お待ちください」

店員は手近な机から紙を取り出し、何かを書きつけていく。

落ち着くまで待ってやる義理はない、と他に使える手札を出そうと、優斗は次を吟味する。

「そういえば、この近くにあるハイルで和平調停があるんですよね」

「え？　はい。それがどうかしましたか？」

「式典には人が多く集まります。そこで売れ残りを捌こうって言う商人が集まっているみたいですね」

にこりと笑う優斗とは対照的に、手を止めた店員は苦虫を噛み潰したような表情をしている。

単に素直な表情が出ただけか、もしくはこの表情を見せた事に何か意味があるのか。念の為、そう考えながら、優斗は先を続ける。

「維持費はもちろん、奴隷税だって馬鹿にならないでしょう？」

「それはそうなんですが」

奴隷税がかかると言う事は、移動させると言う事だ。

ここの奴隷を他の街に移動させる予定がある、と暴露したに等し

い彼女の言葉に、優斗は我慢できずに苦笑が零れる。

「やっぱりハイルで売るつもりなんですね」

「へ？　あ」

指摘されてようやく気付いた店員は、ばつの悪そうな表情を浮かべている。

「金貨１７枚と半分なら」

恥ずかしさを誤魔化す為に大きめの声で告げられた言葉に、優斗は考えています、と言うポーズを取る。

最低でも後、金貨１枚分は値切らなければならない。出来れば後の事を考えて所持金を残したいのだが、決裂しては意味がないのでどこまで押してよいかも確認しながら交渉する必要がある。

「平均価格である１５枚」

「う、それはちょっと」

「じゃあ、初物の分を足して１６枚」

「えっと、少々お待ちください」

あと一押しでイケル。

優斗がそう思った瞬間、勢いよく店の扉が開かれた。

「戻りましたよ、って、来客中か」

店内に響き渡る女性の声。

快活な声と共に登場した女性の笑みに、優斗はひたすら嫌な予感を覚えた。

「大変失礼致しました。

初めましてお客様。わたくし、当商会の代表をさせて頂いております、キャリスと申します」

フレイを買取り、ここまで連れてきた張本人。
彼女に恨みはないが、それでも優斗は少しだけ抵抗を感じてしまう。

「はじめまして、優斗と申します」
「優斗様、ですね。
本日はどう言ったご用件で？」

どう反応すべきか、優斗は頭をフル回転される。
出た結論は、弱気は禁物、攻めろ、だ。

「この奴隷を公国金貨１６枚程で購入させて頂く事になりました」
「え」
女性店員が小さく驚きの声を上げたのを無視して、優斗は懐から書状を取り出す。

「そして、これを貴方様に届けにきました」
「開けても？」
「もちろん」
おろおろとする店員を横目で確認しながら、キャリスが封筒を開けていく。

書状を確認したキャリスは、眉をひそめ、少しだけ口を開けた。
まるで「あー」と言ったかの様に。

「なるほど、この件に関しましては、後日改めてお伺いすると言う事で」

「では、その様に伝えさせて頂きます」
キャリスが書状を懐に仕舞うと、この話は終わりとなった。

書状の内容は、ユーシア復興への協力要請だ。
協力と言っても、労働力となる奴隷を確保して欲しい、商会の支店をユーシアに作って欲しい、など、商売の話と言う側面が強い。

もちろんこれは、優斗がクシャーナに頼んで書いてもらったものだ。
壊れた街の復興には労働者が必要不可欠で、彼らの炊事洗濯や、それ以外にも色々と女性ならではの労働力が必要になる場合もある。労働者が足りない時に奴隷を使うと言うのは珍しい話ではなく、今のユーシアは、戦争により労働人口が減り、新たな労働者が入ってこない可能性がある。

この書状はキャリスを追っている事を説明する為の物であると共に、交渉を有利に進める為の道具でもある。

「ところで、お客様。その奴隷なのですが」
「はい、なんでしょうか」
出来れば相手をしたくなかった。そう思いながら、優斗は腰の袋に手をかける。

「実は、買い手が付きそうなのです」
「……そうですか」
内心の動揺を隠しながら、優斗は笑みを絶やさない様に気を付ける。

「私も先ほど購入を決めたところなのですが、どうされるおつもりですか？」

「高い値を付けた方に、などとは、もちろん申しません」
にこやかに、しかし言葉を挟む事を許さない語調で、キャリスが言葉を続ける。

「既に購入を決められたそうですので、”うちの店員が提示した額”でお売りいたします」
優斗の失敗は、その言葉に喉を鳴らすと言う反応をしてしまった事だ。

それによってキャリスは、優斗の提示額と店員の提示額が違う、と言う事を確信し、楽しそうに笑う。

「ちなみにいくらなの？」
キャリスがそう呼びかけると、店員は彼女に耳打ちする。

提示額は１７と半分、今、１６と半分と言おうとしていたところです。

そんな女性店員の言葉を受け、キャリスは更に楽しそうな表情になる。

「優斗様は商売上手でいらっしゃる」
キャリスの言葉は本心から出たものだ。

どの奴隷がいくらで、どこまで下げても良いか指示したのはキャリスだ。ひよっこ相手とは言え、ほぼギリギリまで下げた交渉術は称賛に値する。提示した１６枚程と言う額も、下限ぎりぎりを指定している辺り、同業者かもしれない、とさえ思っていた。

「では、公国金貨１６枚で交渉成立と言う事で」

「17．5枚。それ以上は負かりません」
きっぱりと言い切るキャリスの姿に、優斗はある事を思い出していた。

優斗の友人が独り暮らしをする際、部屋を借りる為に仲介業者へ行くと言う事で、何人かで付き沿った事がある。そこそこ良い部屋を進められ、それを気に入ったらしい友人は、そこを第一候補にストックして他を見に行こうと提案した。その時、電話が鳴った。

電話を終えた仲介業者によれば、その物件を借りたいと言う人がいる、今すぐに決めないのであればそちらに回す、と言う事だった。結局、友人はその部屋を借りたのだが、後で考えればあの電話は仕込みだった可能性が高い。

今回もそれと同じで、他に買い手がいると匂わせる事でこれ以上、値を下げられるのを防ごうと言う魂胆なのだろう、と言うのが優斗の予想だ。

「店員の方は、16枚と少しで売ってくれると言ニュアンスだったのですが？」
「正式には提示せず、交渉を有利に運ぼうと言うのは、商売人なら普通にやる事ですから」
「まぁ、否定はしません」
引く気はなさそうだ。

そう考えた優斗は、最後の手段を使う事を前提に交渉する事を決意する。

「では、即金で16．5枚。私の手持ち全てです」
手をかけていた袋を机の上に置く。

どん、と言う音に、金属のこすれ合う音が重なる。手の内を全てさらしてしまうのは、普通であれば悪手だ。だが、優斗はあえて、ここでその一手を切った。

「申し訳ありません」

「そうですか」

優斗の賭けは失敗に終わった。

しかし、優斗は袋を手元に戻さない。それどころか、袋の口を開けて金貨を一掴み取り出す。

「では、手付金を支払いますでの、取り置きをお願いできますか？」

数枚の金貨を机に直接置き、手を離す。

女性店員はそれに目を奪われ、キャリスの方は一瞥だけする。

値段さえ問題なければ売ってくれるはず。ならば、ザイルからお金を受け取るまで待って貰えばいい。それが優斗の最後の手段だった。

この方法には、フレイをすぐに連れて帰れないと言う欠点がある。その間に彼女がどう言う扱いを受けるのか不安ではあるが、背に腹は代えられない。

「では、明日1日だけお待ちいたします」

「維持費は別途お支払致しますので、もう少しお待ち頂けませんか？」

「申し訳ありませんが、明後日には出発しますので」

「あぁ、ハイルですね。税もこちらで負担しますので、お願いしま

す」

「いいえ、ハイルではなく、アロエナへ向かう予定です」

予想外の言葉に、優斗は驚きを隠しきれなかった。

「維持費を含め、金貨２０枚お支払致しますので、ここで保管して頂けませんか？」

「申し訳ありませんが、大口の取引の為に奴隷を集めているところなので」

はったりではなかったのか、と優斗は自分の読み違いに気づき、叫びだしそうになるのを堪えて拳を強く握る。

ここからアロエナまでは約3日。ハイルには1日で到着可能だと言う話だが、お金を受け取ってとんぼ返りしても往復2日。ザイルがまだ到着していなければ、もしくは到着していても資金を準備出来ていなければ、更に時間がかかる。そこからアロエナへ向かっても、既にフレイは売られた後、と言う可能性が高い。

「では、今回はご縁がなかったと言う事で」

キャリスの言葉に、優斗はその場に崩れ落ちない様にするのが、精いっぱいだった。

人身売買（後書き）

ようやくフレイさんに追いつきました。
優斗くんは無事、彼女を買い戻す事が出来るのでしょうか。

所有権

フレイの不安そうな表情が目に入り、優斗は自分の無力さを噛みしめる。

「他の奴隷を見ていかれますか？」

キャリスの言葉に、優斗はフレイから視線を外して反射的に返答する。

「いえ、彼女以外を買う気はありませんので」

うっかり出た本音に、どうせバレているのだから問題ないだろう、と優斗は心の中で言い訳する。

金貨１枚。

優斗の所持品でその価格に届きそうな品はない。ノートパソコンの入ったジュラルミンケースが高値で売れそうだと思いつくが、そこまでの値が付くかは怪しい。それ以前に、金属の鞄だと言う事自体を疑われ、相手にされない可能性がある。ジュラルミンケースはその軽さから金属だと思われず、そのおかげで今までの検問でも簡単な偽装で誤魔化す事が出来た。今回はそれが裏目に出た。

「そうですか。では、出直されますか？」

ノートパソコン自体や周辺機器は、売る事自体が困難だ。映画等の映像メディアや男性向けの画像があれば、売れなくはない。だが、残念な事に『アイツ』に貸す際、それ関係の物は全て消してしまい、残っていない。

手詰まり。

そんな言葉が優斗の頭に浮かぶ。

「資金を得るあてがおありでしたら、確認しては如何ですか。私も今日1日は店に居りますので」

資金を得るあて、と聞いて優斗はロード商会の事が頭に浮かんだ。そしてシールズはあの商会について、何と言っていたのかも。

「キャリスさん」

「はい、なんでしょうか」

優斗は思い出す。所持金がないにも関わらず、甘い物が欲しくて、どうしても手に入れたい時に自分はどんな行動を取ったのか。

「商売の話をしてもかまいませんか？」

「もちろんです」

優斗はお金の管理をきちんとせず、行商を続けていた。それでも、今まで問題が起こらなかった理由は、常にお金以外を利用して、商談を行っていたからだ。

「大口の取引相手と言うは、ロード商会の事ですよね？」

「やっぱり同業者でしたか」

優斗が、いいえ、と首を振ると、キャリスは胡散臭げな表情をする。

まずその誤解を解くべきだ。そう考えた優斗は、体の向きを少しだけ変える。

「私は奴隷商ではありません。なぁ、フレイ」

「……その通りです、ユート様」
その会話に、フレイの傍に立っていた女性店員が驚く。
「やっぱり」
キャリスの反応は、店員とは逆のものだった。
「若い男の子が、今から買おうって言う女奴隷にほとんど視線を向けないから、何かあると思ったよ。
まぁ、確信したのはさっきの反応で、ですけどね」
商談用の笑みが消え、口調がぞんざいになったキャリスが、残念そうに優斗を見据える
「私たちはユーシアに居たんですが――」
「同情を買おうって言うのなら諦めなさい。いちいち気にしてたら、奴隷商なんてやってられないの」
白けた、と言うのがキャリスの本音だ。
優斗が上手く立ち回る事が出来れば、彼の提示価格で売る事も考えていた。良い商人との繋がりは、金貨1枚に勝る。
しかし、彼は選択を誤った。そんな商人を商売相手と認める程、キャリスは甘い人間ではない。
「そうですか。では、何故ロード商会が奴隷を集めているのかはご存じですか？」
「労働力にしたい、と聞きいています。大方、貴方の持ってきた書状関係でしょう？」
予想通りの返答に、優斗は笑みを浮かべる。

現在の情勢を考えれば、最も奴隷の需要が高いのは、復興が必要なユーシアだ。奴隷を集めていると聞けば、そこに持っていくのだと言う予想は容易に出来、先ほどの書状がそれを裏付ける形となる。

「ロード商会はユーシアに売る為に奴隷を集めている訳ではありません」

「何故そう言いきれるの？」

持っている情報をどこまで話すべきか、そしてどの様な順で伝えるのがベストか。

優斗の商談は、常に現代知識と言うアドバンテージによって、優位性が保たれて来た。

優斗は金銭の管理が杜撰で、商談に用いた経験も少ない。それは即ち、限られた金銭で何かを手に入れる事に慣れていないと言う事だ。

苦手分野で、専門家に敵う道理はない。だからこそ優斗は、有利に進められる可能性が高い情報戦で勝負を挑む事に決めた。

「私が何故、そんな書状を携えていたと思いますか？」

「私を追う口実。商談のカード。そんなところかしら？」

正解、と口には出さず、優斗はにんまりと笑う。

「ロード商会が求める奴隷と、ユーシアが求める奴隷の種類が同じだからです」

その言葉を聞いたキャリスが、金儲けを前にした商人の目に変わる。

上手く食いついた魚を逃すまいと、優斗は言葉を続ける。

「両者とも、ある事を行う適正が高い奴隷を、一定数欲している、と言う訳です」
「なるほどね」
「まぁ、彼女を追う為に志願したと言う意味では、キャリスさんのご指摘も正しいですね」

キャリスが考えをまとめるだけの時間を確保する為、優斗は少しだけ間を取った。

彼女ならばどうすれば最も利益を上げられるのか、思いついただろう。そう思える瞬間に、優斗は再度口を開く。

「私はその、ある事、が何か知っています」
「証拠はあるの？」
口元の笑みを隠しきれていないキャリスに、優斗は思わず苦笑が漏れる。

「話を聞いて頂ければ、それが真実であると判るはずです」
交換条件が何か、優斗がそれを告げる間もなく、キャリスが行動を開始する。

「じゃあ、こっちの部屋で。
その子を地下へ戻しておいて。で、お茶の準備を。
貴方はこっちへいらっしゃい」

優斗とキャリスが部屋に入ると、フレイもそれに続く。部屋の外では、女性店員がもう1人の奴隷を連れて奥へ消えた。

対面のソファーは今まで見た商会の商談スペースと同じ。1つ違

うのは、商品を置く為の椅子が余分にある事だ。

「じゃあ、早速話を聞かせて貰おうかしら」

「その前に、取引の内容を決めさせて下さい」

情報を開示せず、まず結果を求めた優斗に、キャリスが眉をひそめる。

そんなキャリスの反応を無視して、優斗は言葉を続ける。

「私が支払う情報は、何の為に奴隷が必要なのか、どう言った奴隷が必要なのか、そしてそれによってどう市場価格が変化するか、です」

「市場価格が変化、ですって？」

キャリスが驚くのも無理はない。

もし、何らかの商品の市場価格が変動する事を正確に予想出来れば、それは儲け話に直結する。値上がるならば買占め、値下がるならば先に代金を受け取り、後で引き渡す契約を行えば良い。株で言うところの、空売りである。

「予想になる部分もありますが、ほぼ確実に変動します」

「美味い話過ぎて、逆に真実味が薄いわね」

商談用の言葉づかいが戻ってこないキャリスだが、その目はギラギラと輝いている。

もう1つは後回しだな、と考えながら、優斗はフレイに視線を向ける。

「キャリー商会は、私に何を支払って下さいますか？」

「んー。そうね」

少し考えた後、キャリスはその内容を口に出しながら、机の上にあった紙に文字を書き連ねていく。

「その奴隷と、貴方の話で出た利益の1割でどうかしら？」
「無駄にせずに済んだ経費も利益に換算して頂けるのでしたら、それで構いません」
「それは計算が面倒ね」
どこに、どんな奴隷が必要か判れば、連れて行く人数も最低限で済む。

今回の件で言えば、ロード商会・アロエナ支店が欲しがっている奴隷の種類が判れば、必要な奴隷だけ持っていく事で、無駄な奴隷税と移動費がかからなくて済む。

「奴隷と純利益の半分。ただし、担保として金貨16枚を頂く、ってのはどうかしら？」
「そうですね、その数字を基本内容として、話した後で追加分を考える方向性で行きましょう」
「じゃあ、早速」
暫定とはいえ、自分に有利な条件になった事に、キャリスはほくそ笑む。

ロード商会の欲する奴隷の種類、と言う情報は、ほとんど利益を生み出さない。経費は削減出来るが、それは契約内容に含まない事を確認済みだ。

もう一方の市場価格に関しては、売り買いの量を調節する事で、利益をコントロール可能だ。それ以前に、莫大な利益を得られる情報ならば、書状の主が独占するはずなので、儲けられる額はたかが知れている、と予想出来る。

「ロード商会は、機織り機の作業効率を約3倍にする技術を手に入れました」
「……は？」
予想外な一手目に、素っ頓狂な声を出すキャリスを見て、今度は優斗がほくそ笑む。

「技術の漏えいを防ぐ為に、労働者を使わず、奴隷を欲していると言う訳です」
「ちょ、ちょっと待て。そんな急激に生産量が上がる訳が――」
「これを見てください」
優斗が取り出したのは、飛び杼の設計図の写しだ。

職人ではない彼女になら見せても平気だろうと判断した、優斗の切り札の1つだ。

「飛び杼、といいまして、ユーシアで開発されました。機織りで最も時間を必要とした、横糸を通す工程を一瞬で行う事が可能です」

キャリスがある程度見たのを確認して、机の上に広げた設計図を、手の中へ戻す。
物欲しそうにこちらを見つめるキャリスを無視して、優斗は説明を続ける。

「これに伴い、糸の市場価格が高騰し、布地の価格が低下すると予想されます」
この話に、キャリスは予想以上の食いつきを見せた。

「そうか、ハイルの祭りとユーシアの復興を隠れ蓑に物資を集め、

公国中、いや、帝国も含めて全ての支店で一斉に布を売るつもりね！」

ふふふ、と不気味な笑みを浮かべるキャリスに、優斗の笑みが引きつる。

「ユーシアも情報を持っていると言う事は、復興までの数か月間に量産して、売り浴びせるつもりなんでしょうね。

奴らに気取られる事なく糸を買集めて、同時に布の空売りを行う方法は……うちも小規模な工場を立てれば」

ぶつぶつと呟く内容に、キャリスの先見の目と視野の広さを垣間見た優斗は、その情報を使って軌道修正を行う。

「飛び杼の情報、他に漏らさないのであればお売りしますよ？」

「嬉しい提案ね。でも、利益の半分を持っていかれるのは厳しいのだけれど？」

飛び杼で布を作ると、常にその利益が半分が失われるのでは、堪らない。

担保の金貨１６枚程度ではどうにもならない規模の話に、キャリスは前提条件のマズさに頭を悩ませる。

「ユーシアの協力が必要ならば、間を取り持ちますよ？」

「……なるほどね」

ユーシアが関係している、と提示されたと勘違いしたキャリスは、前提条件を間違えたまま思考を進めていく。

今回の儲け話は、潤沢な資金があってこそ、成功するものだ。かと言って大きな商会に頼れば、ユーシア復興後に様々な利権を貪られるのは容易に想像がつく。

その点、中規模以下の商会であれば、そこまでの心配はない。仮に、その過程で大商会に匹敵する規模を得たとしても、そこまで成長する事が出来たと言う恩を売る事が出来る。何より、ユーシアを基盤に成長した商会が裏切ると言う事は、その基盤を捨てると言う事に他ならない。

「そう言えば、ユーシアの特産は絹糸だったわね」

優斗は声を出さず、首肯する。

高騰した糸を購入して布を作るのはリスクが高い。価格変動はもちろん、需要と供給のバランスが崩れれば、品切れが発生する可能性もある。設備投資をし、布を作る機械と人手があっても、材料が無ければ生産は行えず、無駄に赤字が増えるだけだ。

故に、材料の糸が手に入る事が保障されれば、思い切った設備投資が可能だ。

「これは糸と技術を提供する代わりに、人手を出せ、と言う話なのね」

「糸の紡ぎ手は、手先の器用な女性が最も良いとされていますからね」

キャリー商会は女性奴隷を専門に扱っている。

この商会の特徴は、従業員までも全て女性であると言う点だ。男の手を介さない事。その一点ににより、貴族の好事家等から支持を受け、ここまで成長した。その特性上、若い奴隷が多い。

「長時間労働に耐えうる若い女であればなお良い、って訳ね」

「ご明察です」

「そしてユーシアとの共同経営なら、条件を考え直してくれる、かしら？」
「その件に関しましては、新領主様も交えてお話する、と言う事で」
少し話を大きくし過ぎたかな、と反省しながら、優斗はキャリスから視線を外す。
何はともあれ、フレイを取り返す算段が付いた。
その事にこの上ない歓喜を覚えながら、優斗は契約内容の詳細を詰めて行く。
「では、１年、もしくはユーシアとの共同事業を開始するまでの間に得た利益の半分、と言う事でどうですか？」
「うーん。半年にしない？」
キャリスが可愛くそう告げる。
年を考えろ、と優斗は思ったが、口にはせず首を横に振る。たぶん３０を超えているであろう女性の行動ではない。
そんなふざけた反応をしながらも、キャリスは利益を上げる為に頭を働かせ続けている。ロード商会が動き出すまでが最も儲けを得られる。しかし、その利益の半分は優斗の物になる。それを回避する為にユーシアが復興するまで待てば、得られる利益が目減りする。
「じゃあ、半分をもう少しどうにか」
「それは変えない、と決めましたよね？」
これはもう最速でユーシアの産業を立て直すしかない。
そう考える一方でキャリスは、ここにいる若くて可愛い奴隷全員で囲えば落ちるんじゃないか、とも考えていた。しかし、彼の言葉が嘘であった場合や、派手にやり過ぎてユーシアを裏切ったと判断

され、彼が切り捨てられる可能性を考え、実行には踏み切れなかった。

「じゃあ、１０か月としましょう。１０か月間、もしくはユーシアとの共同事業の本格始動までの利益の半分と、フレイを頂きます。代わりに、ユーシアとの間を取り持ち、共同事業を発足する際には新技術を提供し、更に担保として公国金貨１６枚をこの場でお支払いします。どうですか？」

その条件にしぶしぶ頷くキャリス。

ユーシア側が飛び杼の資料を失っていれば、同様に売り込めるな、と言う思考が頭を過ぎった優斗は、クシャーナ相手にそんな商売が出来るかな、と考える自分の甘さに苦笑する。

解約条件やその保証金額など、幾つかの条件を追加した契約書が完成したのは、更に１時間が経った後だった。

無事に契約を終えた優斗は、奴隷管理局へと向かっていた。

奴隷商であるキャリー商会の支店がある街には、基本的にこの管理局が存在する。

「で、なんで着いて来るんですか？」

「アフターサービスよ」

契約の間も、今も、優斗とフレイの間にはキャリスが立っていた。

そのせいでようやく再会し、無事に取り戻せたにも関わらず、まだまともに話もしていない。

「登録料、こっちで負担してあげるから。
何なら宿も紹介してあげるわよ？」
「あー、是非お願いします」
宿は決めていないし、手持ちも心許無い。

くすくすと笑うキャリスから視線を外した優斗は、頬をかきながらフレイに向き直る。

「登録の前にフレイと話したいんですが」
奴隷管理局の看板が見えた。

キャリスは、わかったわ、と言いながら、建物の前まで移動して、立ち止まる。

同時に立ち止まったフレイに一歩近づくと、優斗はその名を呼ぶ。

「フレイ」
「はい、なんでしょうか」
「どっちか好きな方、選んで」
優斗が左右の手に1枚ずつ紙を持ち、掲げる。

事前に準備してあったそれは、奴隷契約書と奴隷解放手続書だ。

フレイは迷う事なく、解放手続書を手に取った。

「中々、感動的な場面ね」
そう言ってにやにやと笑うキャリスを、優斗は睨みつける。

フレイから視線を逸らしてしまった優斗がそれに気づいたのは、

音が聞こえたからだ。

「っえ？」

「おぉ」

びりびりと、手の中の紙を引き裂くフレイ。

２人分の視線を受けるフレイが顔を上げると、その顔には笑みが浮かんでいた。

再会してから初めて見せる笑顔に、優斗はどきりとしてしまう。

「これからもよろしくお願いします」

優斗が唖然とし、キャリスが爆笑する。

楽しそうに微笑むフレイは、どこか満足げだった。

そんな一幕を終えると、３人は奴隷管理局へと入る。

管理局はさほど大きな建物ではなく、入ってすぐの場所に受付がある。

「商品奴隷の所有契約をお願いします」

「畏まりました」

既に優斗が所持していた書類に、フレイが血で拇印を押す。

商品奴隷と言うのは、鑑札のついていない奴隷の事だ。通常、自分の所有する奴隷には鑑札を付けるが、売り物である場合には、鑑札を外す手続きの煩雑さと、手数料の問題で付けない事が多い。他にも、鑑札がなければ逃げ出す事が困難である事を利用し、多くの奴隷を有する商会では管理しきれない奴隷の逃亡防止措置と言う側面もある。

優斗も、フレイを商品奴隷として所持し続けていた。身分が偽装だから、お金がないから、それ以外にも、人身売買に本格的に加担する事への抵抗等から、鑑札を得る事を避けていた。それが、今回の様な事態を招いた。だからこそ、今回はきちんと、彼女は自分の所有物である、と言う証を得ると決めていた。

だからと言って、優斗は道徳観念を捨てた訳ではない。ただ、誰かを守る為には、自分の意思を曲げてでもルールに従わなければならない、と言う事を学んだ。

「奴隷はこちらへ」

フレイが素直に前へ出る。

首輪の前に付けられた輪に、四角い、金属製のプレートが下げられる。国印と優斗の名前、そして商人と言う身分が掘られたソレに、担当者がギフトで何かを付与していく。

無事、フレイが鑑札を得ると、キャリスの案内で宿へと向かった。その間、頻りに鑑札に触れるフレイを見て、優斗はなんだか恥ずかしくなり、隣でにやにやと笑うキャリスにからかわれ続けた。

宿の部屋に案内され、キャリスを含む3人が部屋へと入る。

「まだ何か御用が？」

「まだ引き渡しの確認をしてないからね」

そう言ってキャリスは、フレイに椅子に座るよう、指示を出す。そして椅子の足元に水の張られた容器を置くと、一歩横へ移動する。

「はい、確認して」
「は？」
「本当に生娘かどうか。後でごねられると困るからね
本来は契約前にすべき事なんだけど、今回は他との絡みがあったから」
そこまで説明され、ようやく優斗は状況を把握する事が出来た。

少しだけ足を開いているフレイ。手を清め、湿らせる為の水。その両方を見比べる優斗の心臓が、早鐘を打ち始める。

「あー、いや。苦情はいいませんので、確認は結構です」
「ふーん。そっかそっか」
にやにやと笑うキャリス。

「折角、合法的に色々出来るチャンスなのに、もったいない。あぁ、後でゆっくり楽しむのかな？」
「しかと受け取りました！　では、またの機会に！」
焦る優斗の姿を見て、声を出して笑うキャリスを、優斗は熱くなっている顔を隠す為に下を向きながら追い出す。

キャリスが立ち去ると、フレイがいつの間にかベッドに移動しており、優斗は先ほどまで彼女が座っていた備え付けの椅子に腰かける。
懐かしい定位置に、優斗は笑みが浮かぶのを我慢出来なかった。

「なんで笑うんですか？」
「いや、なんか嬉しくて」
再会の感動を欠片も感じさせない言葉に、優斗はますます笑みを抑えきれない。

優斗はフレイに、何故、自分の奴隷になる事を望んだのか、もう一度聞いてみたいと思っていた。しかし、それを聞いてはいけない、とも感じている。

「とりあえず、ゴメン。こんな事になって」
「許しません」
笑みを消し、真剣な表情を浮かべた優斗に、フレイは唇の端を釣り上げて怒りをあらわにする。

怒られても仕方がない。
優斗は覚悟を決め、真っ直ぐにフレイの目を見つめる。

「人の事を子供だとか貧相だとか、あまつさえ性格が悪いとまでいいましたね？」
「へ？　いや、まぁ。言ったけど」
「未来がない、とまで言われるなんて。屈辱です」
優斗が、それは商談の為で、と口に出すよりも先に、フレイが口を開く。

「しかも、あの子供の方がまし、とまで言いましたよね？」
「いやいや、あれは特殊な趣味の人にはあっちの方がいいんじゃないかって話で」
「クシャーナ様に色目を使っていた人が言っても、説得力がありません」

色目なんて使ってない。
優斗はそう叫びたい衝動を、なんとか抑える。

「クシャーナ様との２人旅、楽しかったですか？」

「逃亡生活を楽しむ趣味はない」
「でも、裸くらいは見ましたよね？」
びくりと反応してしまった事に、優斗は後悔する。
確かに見た。見たけど、そう言う意味じゃないんだ、と言う言い訳は、フレイのジト目に阻止され、言葉にならなかった。
「鎌をかけただけだったんですが、まさか本当に……」
「本当になんだ！　俺は何もしてないぞ！」
慌てる優斗。そんな反応に、フレイは、耐えきれない、とばかりに吹き出す。
そのままくすくすと笑うフレイの姿に、優斗はようやく、からかわれた、と気づく。
「あー、いや、まぁ、俺は幼女趣味じゃないよ？」
「貧相で子供な私を、わざわざこんなところまで買い戻しに来たのにですか？」
「それは言葉のあやと言うか、仕方なくと言うか」
優斗が言い訳を並べ立てる間、フレイの手は鑑札を撫で続ける。
このままでは精神が持たない。そう考えた優斗は、話題の転換をはかる事にした。
「ところで、大丈夫なの？」
「何がですか？」
「いや、まぁ。大分痩せてるし、何かされたんじゃないか心配と言うか」
直接的な言葉を避けた優斗に、フレイはまたくすりと笑う。

「1日2食、きちんと頂いていました」
それはこの世界において普通の食事頻度だ。
だが優斗は、毎日1食ずつ抜かれていた、と勘違いして心配顔になる。
「大丈夫です。それとも、こっちが心配ですか？」
そう言ってフレイは、座ったままの姿勢でスカートを持ち上げる。
膝が見えるまで持ち上げられたスカートに、優斗の視線が釘付けになる。
その反応に満足したフレイは、ぱっと手を離す。
「さすがに、確認された時は恥ずかしかったですけど」
確認したのは買取を行ったあの人なんだろうな、と思いながら、その時に誰か同席していたのでは、と言う事に思い当たる。
「それもキャリスさんは気を付けていました」
心を読むな、と口に出さず抗議しながら、優斗は安堵する。
あの商会の特性上、確認の為とは言え、男性が立ち会うのはよろしくない。それでも少し思うところがあった優斗は、複雑な表情を浮かべてしまう。
そんな優斗の反応を見たフレイは、楽しそうに立ち上がり、スカートの裾を掴む。
「ご主人様も確認してみますか？」
悪戯っぽい笑みを浮かべたフレイが、スカートをたくし上げる。

太ももが半分以上見える位置まで上げてから、フレイはある事を思い出す。自分が確認を行い易い格好をしていた事を。

「じゃあ、遠慮なく」

２つの影が重なり、同時に可愛らしい声が零れ落ちた。

所有権（後書き）

フレイが誘惑し続けた表の意味は、売らないで下さい。

裏の意味は、貴方のモノにして下さい、その証を下さい。

告白合戦

日が上りきった頃に起き出した優斗は、困り顔でフレイを見下ろしていた。

「私は奴隷になった時に」

ぼそぼそと呟くフレイは、ベッドの上で膝を抱えている。

「無理やりも、乱暴なのも覚悟していました……」

悲痛な声で訴える姿に、優斗は息が詰まる。

たとえ次に来る言葉が、なんであれ。

「でも、全身をくまなく褒めちぎられる覚悟なんてしてません！」

がばっと上げられたフレイの顔は、真っ赤に染まっている。

「いや、ごめん。可愛かったから、つい」

主に反応が、とは口にせず、優斗は反省しています、と言う体で頭を下げる。

名目通り、色々と『確認』してしまった事を、やり過ぎたと反省している優斗だが、顔がにやけるのを抑えきれない。

「笑いを堪えながら可愛いとか言われても説得力がありません！」

「ごめんごめん。でも、可愛かったのはホントだって」

なんとか表情を取り繕って顔を上げた優斗は、赤く染まった頬を膨らませるフレイの姿を見て、また顔がにやける。

「ご主人様の変態！」

「失礼な。変態的な行動はしてない、はず」
「幼女趣味は十分に変態です」
「だから、俺はロリコンじゃないって」
「貧相で子供にしか見えないっていいました！　そんな私の身体を楽しそうに眺めてました！」
楽しかったのは事実だな、と思いながら優斗は昨晩の事を思い出す。

「あぁぁぁ、今、思い出そうとしましたね！？」
「え、や、まぁ」
奇声を上げるフレイに、優斗は思考を中断される

あんな風に自分を誘惑し続けていたフレイが、こんな反応をするなんて予想外だ。そう思いながら、優斗は誘惑の際の恰好は肌の露出が少なかった事を思います。

「もしかして、肌を晒すのが恥ずかしい？」
「恥ずかしくない訳がありません！」
そりゃそうだ、と質問の馬鹿さ加減に今さら気づいた優斗は、出会って間もない頃、服を買いに行く前に体を清めるよう、命じた時の事も思い出す。

身体的接触よりも素肌を露出する方が恥ずかしい。そこまで不自然な事ではないのだが、反応が過剰過ぎて優斗にとっては違和感しかない。

「まぁ、可愛いからいいけど」
「とりあえず褒めておけば解決すると思っていませんか？　ご変態様」
「なにそれ」

「変態なご主人様の略です」
どうやら、恥ずかしいと暴言を吐く癖もあるらしい、と優斗は呆れる。
いちいちつっこんでいたら話が進まない、と優斗は咳払いをして、話題の転換をはかる。
「とりあえず、その話は一旦置いとこう。収集付かなくなりそうだし」
「判りました。蜂蜜飴で手を打ちます」
それでいいのか、と思いながら、優斗は腰に手をやる。
そこに感触が無い事で、己が立たされている現状を思い出した優斗は、ため息をひとつ吐く。
「それは無理かな」
「こんなささやかなお願いすら聞いてもらえないなんて。ご主人様は釣った魚には餌を与えない人間だったんですね……」
鑑札を弄びながらいじけるフレイ。
私の事もこんな風に弄んだんですね、と言われそうな気がした優斗は、本当にそれが飛び出す前に現実を告げる。
「誤魔化しても仕様がないから、正直に告白するけど」
「告白、ですか？」
「実は、お金がない」
「……は？」
その言葉がフレイに与えた衝撃は、優斗が予想していたよりも大きかった。

目を見開き、唖然とするフレイは、優斗が黙り続け、言葉を続けない事に焦れて、質問を返す。

「昨日、すごい大金が手に入りそうな話をしていませんでしたか？」

「あー、あれは多分、ほとんど儲けにならない」

「はぁ！？」

先ほど以上の驚き方に、優斗はどこまで先があるか試して見たい衝動に駆られるが、ぐっと堪える。

とりあえず、とずっと立ちっぱなしだった優斗はベッドに腰掛ける。

ベッドが揺れた瞬間、フレイがぴくりと反応して身を固めた事に苦笑しながら、優斗は口を開く。

「だから、手持ちは公国銀貨で２０枚ないくらい」

それは2人分の乗合馬車代と人頭税、奴隷税を払うには足りない額だ。

人頭税と奴隷税だけならば足りるかもしれないが、ハイルの税額が不明である以上、安易に徒歩で移動するのも憚られる。

「あの、本当にお金にならないんですか？」

続けて状況の説明をしようとした優斗は、フレイの反応に、出かかっていた言葉を止める。

もしかしてお金が無くて手放す様な事態を心配しているのか、と考えた優斗は、説明しかけた内容を中断して話を戻す。

「少なくとも、すぐにはお金にならない。

でも、お金のあてがない訳じゃないから安心して」

「別に売られる心配をした訳ではないんですが」
歯切れの悪い反応に、優斗はその意図を掴みかねる。

「何か気になる事があるなら、遠慮なく聞いて」
「えっと。領分を弁えれば商売の話には口を出すべきではないんですが」
その瞳に、好奇心の色を見た優斗は、ようやく彼女が望む事を把握出来た。

本を読むのが好きだと言っていたフレイ。きっと、知る事自体が好きなのだろう。

「今回の商談でこっちの取り分は、利益の半分だって言うのは覚えてる？」
「はい」
真剣な目で見つめられ、弟に勉強を教えていた時の事を思い出した優斗は、苦笑いにならないように気を付けながら、自らの顔に笑みを張り付ける。

「でも、キャリスさんからすれば、儲けの半分を持っていかれる訳だ。そしてそれは望ましくない」
「でも、契約したんですから、お金は入って来るはず、ですよね？」
優斗は人差し指を一本だけ立てて口の前へと持ってくると、ちっちっち、と左右に振る。

「期限を設けたんだから、切れた後に稼ぐ様、調整すればいい」
「売る時期が重要な商売だから、それは出来ないんですよね？」
優斗が思っていたよりもきちんと話を聞いていたらしく、フレイの言葉は、表面的には正しいものだった。

商機はロード商会が動くまでの間であり、期限はそれを見越したものとなっている。もう片方の条件で期限を短縮可能だが、その場合、それを察知したロード商会が早く動き出す事が予想される。

「実は、全ての利益を期限後に持ち越す方法がある」

優斗はにやりと笑い、フレイに考える時間を与える様に間を取る。

その意図に気づいたフレイは、真剣な表情で悩み始める。

「わかりました」

「はい、フレイさん」

「お金を借りて、後で布を幾つ払って返済します、と言う契約を期限後に設定すれば、期限内に利益は出ません」

自信ありげな表情のフレイを見て、優斗は思わず笑みが零れる。

「残念。不正解」

「えぇぇ」

一転、フレイは不満そうに唇を尖らせる。

拗ねた顔も可愛いな、と思いながら、優斗は正解の発表と間違いの訂正をすべく、口を開く。

「それは空売りって言う手法と同じ扱いで、契約した日が期限内なら利益に換算するって契約書に入ってる」

その返答にフレイがまた悩み始める。

しばらく考えた後「わかりません」としぶしぶ答える姿も可愛く見え、優斗は微笑みながら答え合わせを始める。

「契約はキャリー商会と行ったから、商会として糸や布で利益を上

げなければいい、って言うのは判る？」
「はい」
真剣に耳を傾けるフレイに、優斗は口元の笑みを消す。
「たまたま、工場を経営したいと思っている人が居て、たまたま、その工場を始めるお金をキャリスさんが貸した場合、利息で儲ける事が出来る」
「えっと？」
話の繋がりが理解出来ないらしいフレイを無視し、優斗は言葉を続ける。
「で、工場が、たまたま、機織り工場だったら？」
そこまで説明すると、優斗はまたフレイに考える時間を与える為に、少しの間、黙る事にした。
内容を咀嚼し、話をつなげる事が出来たフレイは、浮かんだ疑問をそのまま口にする。
「でも、それではキャリスさんの利益は糸と布の生産で得た事になるのでは？」
「利息を法外な額に設定すれば、金貸しで儲けた、と言えなくはない。
経営者の役を別名義の身内にやらせれば、その辺りの調整は難しくないだろうしね」
優斗の説明に、フレイは「なるほど」と納得する。
予想通りの反応を引き出せた事に満足した優斗は、にんまりと笑いながら次を口にする。

「まぁ、キャリスさんは別の方法を使うと思うけど」
「え、何故ですか？」
「露骨すぎて俺の印象が悪くなるから」
そこでまた、優斗は間を開ける。
「なるほど、ユーシアですね」
「正解」
ユーシアの復興には、様々な物資が必要になる。
仮に、キャリー商会がユーシアと共同事業を行う事になった場合、それ以外の面でも使って貰える可能性が高くなる。商品が動けば、当然利益が発生する。
「では、キャリスさんはどんな方法を使うつもりなんでしょうか？」
「さぁ？」
優斗の返答に、フレイが「は？」と声を出し、驚く。
「じゃあ、なんで他の方法を使うと判るんですか？」
「契約が結べたから」
優斗の端的な答えに、フレイは困惑した表情を浮かべる。
それを見た優斗は、シンプル過ぎた返答を反省し、きちんと説明しなければ、と説明内容を頭の中で整理し始める。
「利益の大きさから、半分差し出すなんて契約をする訳がないと判る。機嫌を損ねたくないから、露骨な事はしないと判る。
だから、契約したからにはそれを回避する方法があると判る」
「わかったような、わからないような」
ついでに、商談中に思考を誘導する様な呟きをキャリスがした事

とその内容も、別の案がある事への裏付けになっているのだが、フレイを混乱させそうだと優斗は口にはしない事にする。

「あと思いつくのは、金銭にならない利益にしてしまう事、くらいかなぁ」

他には、と考えを巡らせる優斗は、目の前のフレイが不思議そうな顔をしている事に気づき、声をかける。

「どうしたの？」

「いえ。利益が見込めないのにどうして契約をしたのかな、と」

「もちろん、フレイを取り戻す為」

優斗の即答に、フレイが、音のない「あ」の声を口から出したまま固まる。

優斗が今回の商談で至上目的としていたのはそれだ。

新技術も、それに伴う市場変動の情報も、全ては話の信用性と利益の天秤を釣り合わせる為の見せかけだ。

話を疑われない程度に押し、商会の利益を害しすぎない程度に引く。更に、後々の為に良い関係を築いておきたいと思える状況を作れば、ご機嫌取りの為に、執心している奴隷の1人くらい、引き渡しても良いと考えるのではないか。優斗はそう予想し、実際に行動してフレイを取り戻した。

「まぁ、仮に話の通りに進んだとしても、利益が出るのは何か月か後だから、金欠な現状は変わらないけどね」

苦笑しながら、優斗は財布代わりの麻袋を叩く。

余計な話をしてしまったかもしれない。そう考えた優斗は、フレイから視線を逸らしながら中断していた今後についての説明を再開する。

「でも、ハイルに行けばお金を受け取れる予定だから、最低限そこまでの旅費を稼げばなんとなる」

「足りないんですか？」

「うん。日雇いの仕事とか探すつもり」

キャリスさんに頼めば仕事を回してくれないかな、と思いながら優斗はフレイに視線を戻す。

予想外にも、フレイは楽しそうに、そしてどこか悪戯っぽく微笑んでいた。

「実はですね、ご主人様。告白しておきたい事があります」

表情とは裏腹に改まった態度を取るフレイに、優斗はどう反応して良いのか判断出来ず、黙ってその告白を待つ。

「私、商談をしているご主人様を見ているの、好きなんです」

商人なら商人らしく稼げ。

フレイの言葉をそう解釈しながらも、好きと言う言葉に反応してしまった優斗は、現在の手持ちと状況で利益を出す算段を始めている自分に呆れる。

「蜂蜜の飴がいっぱい作れるくらい、稼いでくださいね」

「そう言う本音は隠しとけ」

それでもやる気が萎えない優斗は、思っていた以上にフレイを好いている自分に気づき、苦笑する。

こんな可愛い娘に期待されて、応えない訳にはいかない。
フレイが楽しそうに見つめる中、優斗はそんな風に思いながら、
商売の算段を行う為に、更に頭を働かせ始めた。

告白合戦（後書き）

一難去ってまた一難。

優斗くん、詰めが甘いです。そして相変わらず、甲斐性がありません。

少女の想い

長い時間悩んだ結果、今後の方針を決めた優斗は、フレイと共に商店を巡っていた。

「ちょっと、ご相談したい事あるのですが」

挨拶をし、今日、何度も口にしている言葉で、店主に声をかけた。

店を息子らしい男に任せた店主は、軽く説明をした内容に対し、乗り気な様子だ。

これまでにない好感触に、優斗の説明にも熱が入る。

「私はハイルで物を売る為に、輸送用の荷馬車を必要としています。ですので、ハイルへの往路は私の荷物を、復路はそちらの仕入れを乗せる形で共同出資をして下さる方を探しています。

この店の商品も少なくなっている様ですし、如何でしょうか？」

店の中を見渡す優斗に、店主が苦笑を浮かべる。

「確かに、これからこの街にも人通りが増えるだろうからなぁ。仕入れは一回行かないとな」

もうひと押し、と優斗はフレイに視線を向ける。

優斗の視線を受け、フレイは首輪を隠していた首元のリボンを少しだけずらす。

「現在、ハイルには様々な品が集まりつつあります。その上、市壁の外に市が形成されているそうなので、上手くいけば税を支払わずに仕入れが出来るかもしれません」

これは、決裂した2軒前の交渉で知った事だ。決裂理由は、往復

共に自分の荷物を載せた方が儲かるから、だそうだ。

その結果を受け、優斗は少し小さめの、資金と物資に余裕のなさそうな交渉相手を選んで交渉をしている。

「それは初耳だな」

「市壁の受け入れ能力を超えてしまったようです。ですので、街の方も見て見ぬふりをしているのだとか」

店主は、ほう、と言う声を上げ、優斗の目を真っ直ぐに見つめる。

その瞬間を狙って、優斗はフレイの首元へ視線を向ける。それに釣られる様に、店主の視線もそちらへと向かう。

「商品はまだ仕入れの途中なんですけどね」

「うーむ」

奴隷の証である首輪。

鑑札が見えないように露出しているそれを見て、店主は優斗の思惑通り、フレイが仕入れた商品であると言う勘違いをした。

「内容をもう一度、今度は具体的に説明してくれ」

「そちらに荷馬車を貸りて頂き、往路は私の荷物と貴方様を乗せてハイルへ向かいます。私は荷物と共にハイルで降りますので、復路は仕入れた商品と共にお1人でお帰り頂き、荷馬車の返却を行って下さい。

荷馬車の借り賃は、返却の手間等を考慮して半々で如何でしょうか？」

優斗の提案に、店主は感嘆の息を吐く。

ようやく得た好感触な反応を逃すまいと、優斗が意気込んで口を

開く前に、店主が笑顔で返答する。

「乗せられる荷物の量を考えれば、俺が得だな」
「荷馬車を借りる名義代込みだとお考えください」
「なるほどな。ちなみに、荷馬車をどこで借りるか、こっちで決めてもいいのか？」
「値段次第ですね。それも含めて、借りる荷馬車を見に行きましょう」
「俺の知り合いに、卸をしている奴がいてな」
店主の言葉に、その先が予想出来た優斗は、浮かべていた笑みを一段階友好的なモノに変える。

「では、私の仕入れをそこで行う事にしましょう」
「さすが行商人、話が早くて助かる」
にんまりと笑う店主と共に、優斗はその相手の店へと向かう。

話はとんとん拍子に進み、店主が知人の仕入れの代行を行う事と、優斗が彼の店で仕入れを行う事を条件に、小さな荷馬車を格安で借りられる事になった。

その後も、なるべく店を空けたくないと言う店主の要望により、日が上ったら即出発すると決まり、その日は彼の店の一室を借りて眠る事になった。

「眠いなら寝てていいぞ」
出発早々、気合を入れて手綱を握る店主と交代で御者を行い、ほとんど休憩を挟まない事で時間が大幅に短縮され、一行は日が沈みきる前にハイル付近に到達する。

「おい、にーちゃん」

「なんですか？」
「荷物、どーすんだ？」
すっかり気安くなってしまった店主の言葉を受け、優斗は荷台を見渡す。

優斗がほぼ全財産を使って仕入れた品々は、嵩張る物がほとんどない。
それは、荷馬車が小さい事に加え、人が2人も乗り込む事で積荷を置くスペースがかなり制限されてしまった結果だ。

「持ちきれそうにない分だけ売ったら、残りは担いでいきます」
「そうか。じゃあ、そこでお別れだな」
手荷物を集めているフレイを横目に、優斗は買取をしているらしい商人の方へ荷馬車を寄せて貰うと、早速交渉を開始する。

「これ、買い取って欲しいんですけど」
「んー。公国銀貨2枚でどうだ？」
仕入れ値よりも少し安い価格を提示され、優斗は頬をかく。

「2枚は安すぎますよ」
「商税考えれば妥当だろ、と言いたいとこだが、話次第では3枚で買おう」
「話、ですか？」
予想以上の高値が付いた事に警戒の色を見せた優斗に対し、買取商人がにやりと笑う。

優斗が警戒しながら続きを促すと、彼は、聞きたいのは優斗たちが来た方面の状況についてだと告げ、仕入れが終わった後、どちらに向かうか参考にしたいのだと語った。

それを拒否する理由もない優斗は、自分の見聞きした情報を話し、質問に答えていく。

「と、そんな風でした。こんな話で良かったですか？」
「おう、参考になった。じゃあ、これな」
「では、荷物を降ろしますので」
「手伝うぞー」
気合を入れて、荷物を降ろすのを手伝ってくれた店主とは、その場で別れる事になった。

早く仕入れを終えて帰りたいと言う店主を引き止めつつ礼を言い、商品探しに向かう背中を見送った優斗達は、街の入り口へと向かう。

何時もは荷馬車用の通用門を使うのだが、今回は徒歩用の門へと向かう。列は優斗の想像以上に早く流れ、1時間と待たずに優斗たちの順番になる。

「次、お前」
「はい」
少し不安げな表情で一歩前に出る。

優斗は、この市壁を手持ちの資金のみで通過する方法として、受入れ能力以上の人がいる事を利用するつもりだ。その為、徒歩用の門があまり混雑していない事に、焦りを感じていた。

「お前と、そっちの連れの分は一緒でいいのか？」
「はい。彼女は私の奴隷です」
首元のリボンがずらされ、鑑札が姿を現す。

「そうか。支払いが現金ならこっち、物品なら向こうだ」

「ありがとうございます」
支払うべき税の種類を書き込まれた紙を受け取り、物品で支払う窓口へ向かいながら、優斗は計画を思い出す。

市壁での税徴収は、現物と現金の選択が可能だ。そして今、この市壁は通行能力以上の人が押し寄せている。
街としてはなるべく多くの人間から税を徴収したい。だから、今は手間がかかる事をしたくないはずだ。

優斗はそれを利用する為に、現物での支払いを行う事にした。
計算が面倒な現物払いで、これで足りるはずだと荷物を引き渡す。時間の惜しい彼らがそのまま通過させてくれれば最良で、多めに計算され、中で必要な資金を残しつつ通行可能なレベルまで下がれば十分。最悪、不足を指摘されてもこの場を立ち去れば良い。

この計画は賭けの様なモノで、本命は外の市で商売をして稼ぐ事であり、真の目的は、現在の税がいくらなのかを正確に調べる事だ。

「すいません、これを」
「人頭税と奴隷税でよろしかったですね？」
紙を確認した窓口の担当者が、それに価格を買いてから優斗に向ける。

その価格を見た優斗は、声が出ないほど驚いた。

「こちらから頂く形でよろしかったですか？」
支払用の荷物が入った鞄を差し出しながら、優斗はこくこくと頷く。

声も出せないまま中身の一部を抜き取られた鞄を受け取ると、街

の方へと通される。

「どうしたんですか？」

「いや、ちょっと」

優斗が驚いたのは、税が想像していたよりも、大幅に安かったからだ。

優斗は今まで、荷馬車か乗合馬車でしか市壁を通過した経験がない。だから、荷馬車で乗り入れる場合はそれも税の対象となり、人頭税にそれが含まれる分、高くなる事も知らない。

国境都市ハイルは、東から西へと流れる川によって街を南北に分断されている。

正式には北が帝国領・ハイルで南が公国領・ハイルなのだが、ほとんどの人間が、ここを中立都市・ハイルであると認識している。

「とりあえず、宿の確保かな」

「そうですね」

既に日が沈みかけている状況で宿が取れるのか。

そんな心配が現実になり、優斗たちは街を彷徨い歩いていた。

「人が集まってるんだから、そりゃあ宿もいっぱいか」

「向こう側、行って見ますか？」

帝国方面を指差すフレイ。

帝国と言っても、街を出るまでは中立の不可侵地域なので税はか

からないし、当然ながら関もない。だから問題はないのだが、国を跨ぐことへの不安がある事も事実だ。

「背に腹は代えられない、か」

「言葉の意味はよく判りませんが、ご主人様の髪は目立ちにくくなると思いますよ？」

そう指摘された優斗は、自分がどこに居ても異端であり、目立つと言う事実を思い出す。

帝国人と公国人、両方の特徴を持つ事で苦しんでいたクシャーナの気持ちの一端を垣間見る事が出来た気がした優斗は、彼女たちの到着予定日を思い出す。

「2、3日は自力で生き延びないとな」

「志が低いですよ、ご主人様」

帝国方面へ向かう橋を目指しながら、優斗とフレイは並んで歩く。

「クシャーナ様が到着するまでに幾ら稼げるか、くらいは言ってください。私のご主人様なんですから」

「何、その意味不明な根拠」

鑑札を得てからのフレイは、前にも増しておかしい。

薄々気づいていた事だが、何か理由があるのだろうか。

そう考えてしまった優斗は、自分が禁止していた質問を、無意識に口にしてしまう。

「と言うか、なんで奴隷解放しなかったの？」

「それを今、聞きますか」

フレイが苦笑を浮かべながら、到着した橋へと一歩踏み出す。

「ご主人様は何故、私を解放しようと思ったんですか？」
「その方がいいと思ったから」
それは優斗の、偽らざる本音だ。

「私が一度拒否しているのに、ですか？」
「それは、その」
拒否された事も、その理由も、優斗は覚えている。

その上で、それをどうにかする答えを考えていた。それを実行できるかは、別にして。

「うふ、やっぱり」
楽しそうに笑うフレイ。

そんな姿に困惑しながら、優斗は橋の中央で立ち尽くす。

「乙女心は複雑なんですよ」

振り返りながらそう告げるフレイの顔は、とても楽しそうだった。

フレイの言葉をおぼろげにしか理解出来ないまま踏み入れた帝国の地で、あっさりと宿は見つかった。

「もう真っ暗だな。一部屋だけ残っていて、助かった」
「そうですね。朝も早かったですし、もう休みますか？
一緒のベッドで」

1つしかないベッドに腰掛けるフレイの言葉は、優斗の頭に色々な事を思い浮かばせる。

「昨日はあんな恥ずかしがってたのに、積極的と言うか、何というか」
「今は夜ですから、じろじろと見られる心配もありませんし」
そう言う問題か、とつっこむ気力も無く、優斗はベッドに倒れ込む。

ずっと荷馬車の上だった事に加え、街を歩き回ったせいで優斗の体力はもう残っていない。

「襲うなよー」
「それはこっちのセリフです」
「間違ってないけど、なんか間違ってる」
その言葉を最後に、優斗は意識を手放した。

暗闇の中で優斗の寝顔を見つめながら、フレイはテルモウでの出来事を思い出していた。

掲げられた奴隷解放の為の書類。
商取引の時は驚くほど豪胆で、その癖、普段は押しの弱い優斗。
頭も良く、優しい彼が、一度拒否した内容を再度問うた理由を、フレイは2つ思い浮べていた。

1つは、売られてしまった事により、その身分の危うさを実感し、フレイの気持ちが変わったのではないかと思った可能性。

もう1つは、フレイの説明した、解放しない理由を解決するつもりだった可能性。

前者であれば、言葉を詰まらせる理由はない。後者であったからこそ、優斗は言葉を詰まらせた。

「女の子は、何時も不安なんですよー」

優斗に向けられた言葉に、もちろん返答はない。

あの件で、優斗が順序を間違えた事、そして方法を蔑ろにした事に、フレイは腹を立てていた。

奴隷解放を希望すれば、フレイの指摘した問題を、優斗が解決してくれただろう事は予想出来た。でも、それを言葉にして伝えてはくれなかった。

そして何より不満なのは、順序を逆にする事で『それ』に不純物を混ぜた事だ。

仕方なく、とか、責任があるから、とか、フレイの為、等と言うのは、全て余計なもの。

何故、ただひとこと『それ』を囁いてくれないのか。

だからフレイは、奴隷解放と言う選択肢を選ばなかった。

「うりうり」

頬を突かれ、優斗がうめき声を上げる。

青年と少女。

物語では在り来たりな組み合わせ。フレイの読んだ幾つかの物語では、2人は恋に落ちる事が多かった。そしてその形は、主に2つに分けられる。

少女が青年を求め、追いかけるストーリー。
青年が少女を欲し、抱き寄せるストーリー。

フレイは後者を好み、何時かあんな風に求められたい、と憧れていた。

しかしその憧れは、奴隷となった事で一度は砕かれた。

「がんばって下さいね」

優斗の眠るベッドに潜り込んだフレイは、その腕を枕代わりにして眠りについた。

少女の想い（後書き）

乙女チックフレイさんでした。
優斗くんの方は、商売もそれ以外もまだまだ経験不足ですね。

小さな商売

優斗が目を覚ますと、目の前にフレイの顔があった。

それに対してあまり驚かなくなった自分に、少し勿体ないな、と思いながら、ベッドを抜け出そうと体を動かす。

「って」

腕に感じる痺れと重み。

このベッドに枕は1つ。そしてそれは、優斗の頭の下にあった。だから腕枕か、と納得しかけた優斗は、すぐさま、いやないない、と否定する。

「んー。起こすべきか」

悪戯すると言う選択肢もあるな、と思いつき、優斗はフレイの頬を突く。

昨夜の彼女と同じ行動は、その結果に置いて違う物となる。

「うおっ」

「おはようございます」

突然、目が開いた事に驚いた優斗は、その勢いで後ろへ下がる。

その結果、当然ながら腕枕を抜かれたフレイの頭が、ベッドに落ちる。

「女の子にはもうちょっと優しくして下さい」

「あー、ごめん」

反射的に謝罪の言葉が出たのは、むしろ悪戯しようと考えていた事が原因だ。

それを鋭く察知したフレイは、目を細める。

「私の身体に、何かをしようとしていましたね？」

「してないしてない。あ、ほっぺた突くくらいはしたか」

「起きなかったら、もっと色々なところを突くつもりだったんですね？」

「ないない」

それを実行しても許される立場であるにも関わらず、優斗は必死に否定する。

否定しながらも、自分が掛布団を弾き飛ばしてしまったせいで、半ばまで露出している太ももや、完全に肌蹴る一歩手前の胸元に目が行ってしまう。

その視線に気づいたフレイは、妙に慌ててスカートの裾を押さえる。

「えっち」

「いやいやいやいや」

慌てて否定する優斗の態度に、フレイは少しだけ安堵した様な表情を浮かべる。

「ところでご主人様、お願いがあるのですが」

「何？」

突然の話題転換に、現状を脱したいと思っていた優斗は、一も二もなく乗っかった。

「服、買って下さい」

「……そう言えば。だから、寝る時も同じ服だったのか」
「えぇ」
フレイの服装は、パッと見では別れた時と大差ない。
服は売られた時のままで、半袖のブラウスにノースリーブのワンピース姿。頭と首元のリボンは買取の際に受け取った物を既にまき直し済み。下の方は、ブーツとオーバーニーソックスが無くなっているので、白い足が露出している。そしてスカートの中は。
「あー、そっか」
「じろじろと見ないでください」
手で押さえられているスカートに向けた視線を、優斗は慌てて外す。
購入の際に、確認がし易い様にと配慮された結果を、優斗は『確認』によって知っている。
そして、それを思い出しながら向けられている優斗の視線を察知し、むず痒さを感じたフレイの顔は、ほんのり赤く染まっている。
「お金はそこそこあるし、今日は買い物と言う事で」
「賛成です」
優斗ははっきり、お金がないとフレイに告げていた。だから、遠慮していたのかもしれない。
頭の半分でそう考え、申し訳なく感じながら、もう半分では昨日は1日中その恰好だったのか、と想像して、表情が崩れた優斗の顔面に枕が直撃した後、2人は出かける準備を始めた。
服屋で目的の物を手に入れたフレイが、スペースを間借りして着

替えをしている間に、優斗は支払を済ませる事にした。
この店はアロエナの店の様に試着をする事が出来ない。その為、試着スペースが存在せず、フレイは布で仕切られただけの場所で着替えている。

「支払はこれで」
「銀貨、ですか」
店員が露骨に嫌そうな反応をする。

優斗は、どうしたんだろう、と銀貨を見るが、代わった様子はない。

「他の品はいかがですか？」
「いや、今日は彼女の物を買いに来ただけなんで」
「そうですか。ところでお客様、銅貨をお持ちではないですか？」
何故そんな事を、と思いながら、優斗は財布の中身を確認する。

「銅貨でお支払頂けるのでしたら、こちらをサービスさせて頂きます」
こちら、と言うのは、小さな髪留めだった。

花飾りのついた髪留めは、フレイに良く似合いそうなデザインをしている。

「あー、残念ながら、そこまでの手持ちはないですね」
「そうですか。では、少々お待ちください」
店の奥へと消えていく店員の姿を見ながら、優斗は今の言葉の意味を考え始める。

単純に考えれば、お釣り用の銅貨が切れかけているのだろう。ま

だ午前中で、店が終わるまで持たない量しかなければ、多少サービスしてでも小銭は欲しい。店番が1人しかいないのであれば、猶更だ。

「お待たせしました」

そう言って銅貨を持ってきた店員の後ろに、もう1人の店員らしき姿が見える。

優斗は今までに、大きなお金で買い物をして、嫌な顔をされた経験が何度かある。しかし、あそこまで露骨な反応は初めてだ。

お釣りを受け取り、フレイと合流してから向かった靴屋で、彼女が選んだ編み上げブーツを購入する際にも銀貨で支払ってみたところ、似た様な反応が返ってきた。

「次はどうしますか？」

「お昼の前に、ちょっと行きたいところがあるんだけど、いい？」

「どこですか？」

「両替商」

ほとんど元通りの恰好となったフレイは、んー、と考えてから、街の方へ視線を向ける。

その視線が雑貨屋の並びへと向かった後、勢いよく優斗の方へと戻ってくる。

「私、あそこで待っていてもいいですか？」

「いいけど」

そう言えば、フレイが別行動をしたいと言ったのは初めてではないだろうか。

その事に気づいた優斗は、次いでその理由に思い至り、過去の自分の間抜けさにため息が出る。

フレイは、鑑札の無い奴隷が1人で歩いていたら殺されてしまうと言った。それは大げさだとしても、拉致されて売られる可能性は十分にある。そんな状態で1人歩きなど、出来るはずがない。

今、初めてフレイが別行動をしたいと申し出たのは、鑑札があるからだ。隠している首輪が見つかっても、主人を待っている、もしくはお使いを頼まれたと言い訳すれば、街の警備に捕まる心配もない。

「じゃあ、これお小遣い」
「……いいんですか？」
「貧乏だから少ないけどね」
優斗の無知と思慮の無さが原因で失ったものは多い。

それを少しでも取り返して行こう。
そんな風に考えながら、優斗はフレイと別れ、両替商へと向かった。

行列に並び、それなりの時間を費やして銀貨を銅貨に両替する事を依頼した優斗は、換金レートが安い、とそれを断った。交渉があっさりと決裂した後、フレイと合流する為に雑貨屋に向かう。

両替商に尋ねたところ、全ての金貨・銀貨間の交換レートに大きな変動はなかった。ただ、手数料は全体的に高めなのだ、と前に並んでいた商人が言っていた。これは、両替と言う仕事の需要と供給の問題だろうと、優斗は考える。

しかし、優斗が依頼した銀貨と銅貨の交換レートは、公国・王国・帝国の3種類共に、異常な数字だった。その数字から判る事は、銅貨がユーシアやアロエナに比べて、異常に高いと言う事だ。

また、両替と言えばゲームセンターくらいしか思い浮かばない優斗は、両替手数料がかなりかかる事にも驚いた。

「お釣り不足とか、そう言うレベルの話じゃあない？」

ぶつぶつと悩んでいるうちに、フレイの待つ雑貨屋へと到着する。

そこで、小さな櫛を見ているフレイの姿を発見し、そう言った物も必要だよな、と、自分の気の回らなさを再実感する。

「あ。

って、ご主人様」

手の中の櫛を横取りされたフレイが、吃驚した顔で優斗を見上げる。

「買ってこう」

「大丈夫なんですか？」

「生活必需品を買うお金くらいはある」

真面目に稼がないとなー、と思いながら、優斗は代金を支払う。

予想通り、フレイに渡したお小遣いでは足りない額だった。

受け取った櫛を大事そうに抱える姿を見て、買ってよかった、と優斗はフレイの頭を撫でる。

「また子ども扱いですか？」

「いや、そういう訳じゃないけど、なんとなく」

くすぐったそうに微笑むフレイの表情から、最初の頃はずっと気を張っていたんだな、と言う事が優斗にも理解出来た。

自分がほんの少しであっても、気を許せる相手になったと言う事を実感した優斗は、それを嬉しく思う反面、申し訳なくも感じていた。

「じゃあ、お昼食べようか」
「そうですね」
昼食を屋台で済ませ、街中を散策する。

元から街にある、店舗を構えている店の他に、集まって来た行商人たちが開くフリーマーケットの様な露店もあり、2人はそれらを見て回った。

そんな風景の中に、優斗はある違和感を感じていた。

「どうしたんですか？」
「ちょっと気になる事が」
その違和感は、この街のものではない商人たちから発せられていると言う事に気づいた優斗は、歩きながら彼らを観察していく。

しばらく歩いて、ようやく違和感の正体に気づく。
負けとくよ、と言う言葉が多く聞こえてくる。お祭り状態なので、それ自体は普通なのだが、負ける時のパターンがどの店でも同じなのだ。

価格設定が、銀貨と銅貨が何枚か、と言う商品を売る際、銀貨だけで支払う客に対し、銅貨分を負けると言うパターンが多い。

最初は、銀貨何枚と言う切のいい数字で売る事で、お得感と共に会計速度を上げているのかと思っていた。だが、銅貨の不足と高騰と言う情報を合わせれば、別の答えが浮かんでくる。

「なぁ、フレイ」
「なんですか？」
「お金の流れって、どうなってるか判る？」
首をかしげるフレイに、聞く相手を間違えたかな、と優斗は苦笑する。

「どう言う意味での、流れ、ですか？」
「例えば、さっきの屋台で支払った銅貨は、どこに行くと思う？」
「他の人のお釣りか、仕入れ先ですね」
あっさりと答えが返ってきた事に、どうやら優斗は質問の仕方が悪かったようだと気づく。

好奇心もそれなりにあり、知識もそこそこ多い彼女に商売について知って貰えば、良き相談相手になるだろう。
そう考えた優斗は、自分の考えをまとめる為の思考を、あえて言葉にし、質問として吐き出していく。

「じゃあ、仕入れ先は具体的にどこだろう？」
「肉屋・パン屋・酒屋、あたりでしょうか」
「大きな商会から直接買ってる可能性は？」
「それもありそうですね」
「じゃあ、その後は？」
「卸売り業者か、やはりお釣りですね」
「なるほど。で、次は？」
「ご主人様です」
予想外の言葉に、優斗は驚いてフレイの方へと顔を向ける。

「生産者、もしくはそこから購入した行商人が持ち込んだ物を街へ売る、と言うのが卸売りの仕事だと、テルモウで聞きました」
同じ言葉を、優斗も聞いていた。

その流れからすれば、行商人が商品を売って得た銅貨で仕入れや食事をして行く事で、街の中では銅貨が循環しているのだと言う事が判る。

「今度の商売は銅貨ですか？」
「まだ、出来ればいいな、くらい」
市場で銅貨が不足している理由に、優斗は更に思考を巡らせる。

銅貨が値上がってるいるのであれば、行商人は喜んで手放すはずだ。状況から考えて、銅貨の高騰はこの街限定であり、持ち出す意味はない。

「銅貨を外で仕入れるんですか？」
「いや、それはちょっと」
人頭税を考えれば、利益を出す為にはかなり量を運ばなければならない。

しかも、一定量が賄えれば価値がどんどん下がるので、どの程度準備するのが最良か判断するのが難しい。そして、何より金属は重い。

「そうですよね。荷馬車、凄い列でしたし」
「あー、そっか」
徒歩ではあっさり入れたが、荷馬車の受け入れは市壁の限界を超えている。

故に、仕入れの荷馬車も入れない。その為、卸売り業者は在庫が減り続けている状態で、荷馬車が来たら、同業者に先んじて買い取る必要がある。

すなわち、卸業者が買付資金として銅貨を貯め込んでいる可能性が高い、と予想出来る。

「買付資金を貯め込むついでに、更に儲けが出れば、ってとこか」
「？」
「今は銅貨が値上がっている最中だから、卸業者はまだ持ち続けてるって事」
不足すればする程、値上がりを続ける銅貨。

それを出来るだけ高値で売りたいと思うのは、商人ならば当たり前の思考だ。

「なるほど。両替には手数料もかかりますし、する理由がないですね」
「それもそうか」
銀貨に両替する方が嵩張らず、保管には便利だが、それで買付資金が目減りするのでは本末転倒だ。

商品がはけ、保管するスペースが増えている状態ならば、銅貨で持ち続けている不利益は少ない。

「でしたら、卸業者の人に何か売ればいいんじゃないですか？」
「その通りだけど。って、そうか」
調印式まで、まだそれなりに時間がある。

それにも関わらず、既に在庫の仕入れが滞っていると言う事は、品物が不足する可能性が高い予想出来る。

自分なら、何日も待たされる市壁を通過してまで街に入るなら、もっと利益の見込める、高価な品を持ち込む。もしくは、税のかからない外の市でそこそこの値段で売り払い、別の商品を仕入れて他の街へ移動する。

「生活必需品か食糧の買付が出来れば、儲けが見込める訳か」

徒歩で出て、外の市で仕入れると言う手段が思いつくが、それで利益が出るならば他に誰かやっているはず。

ならば、もっとほかの方法を、と優斗は頭を働かせる。

「いっそ、銀貨と銅貨を交換して貰えばどうですか？」

「それは両替商の仕事だから、って、あ」

銅貨が値上がっているのであれば、それを利用した儲けが見込める。

妙に高い交換レートは、まさにそれだ。

そう考えれば、銅貨は既に両替商が買い占めた後である、と言う予想が立つ。

もしその予想が正しければ、優斗の出る幕はない。

「そういえば、やたら並んでたな。両替商」

「忙しいのは良い事ですよ」

「確かに。でも、忙しすぎると仕入れも出来ない」

両替商が仕入れる品とは、不足している貨幣の事だ。

現在、この街には高価な品を持ち込んでいる商人が多い、と優斗は予想している。

回った露店でも、銅貨単位でなく、銀貨単位の品がそれなりにあった。そして、両替手数料は貨幣の価値が大きければ大きいほど、多くなる。

「利益の薄い銅貨取引は、敬遠されている？」
「敬遠？」
「儲けが少ない仕事より、多い仕事をするって事」
この街には、普段以上の商人が居る。

両替商も、市壁と同じように能力限界に達していても、おかしくない。その結果、銅貨の流通に支障をきたしている。
こちらの予想が正しければ、それを利用して利益が出せるかもしれない、と優斗は考える。

「人頭税と、仕入れ価格。銅貨取引での利益と買取価格。これが釣り合うだけの量を仕入れられれば、利益が見込める訳だ」
「儲けが出そうですか？」
「調査してみないとなんとも」

まずは手持ちを売って資金を作らなければと考え、優斗はフレイに声をかけ、宿へと進路を変える
何件か回るべき場所と相手を頭の中でリストアップしながら。

調査に半日を費やし、翌日の昼前に訪れた卸業者は、優斗の予想通り、大量の銅貨を貯め込んでいた。

「簡単に言えば、仕入れの代行を行うと言う事です」
「それはありがたいけど、引き取る値段は上げられないよ？」
「価格に関しましては、このような方式でどうでしょうか」
優斗は、卸業者に1枚の紙を差し出す。

書かれているのは、重量や嵩に対して値段を付ける、運送業と同じ手法の価格設定表だ。優斗が手一杯まで持てば、人頭税が賄える計算になる。
これを商品1つ1つに対応させ、買取価格に上乗せする、と言うのが優斗の提案だ。

「優先順位が高い物を指定して頂ければ、それも考慮します」
「うーん。じゃあ、ちょっと試しに」
卸業者は紙を参考に、商品を鞄に詰め込んでいく。

どう見ても限界で、もう持ちきれないと言うところまで優斗が荷物を持った時でも、運送費は少しだけ人頭税に届かない。

そんな良心的な価格設定が功を奏したのか、交渉の結果、どうしても必要な数種類の品を代理で仕入れると言う事で、決着した。

さらに次の日、朝早くから市壁の外へ出ると、優斗達はやって来る荷馬車にひたすら声をかけ続けた。荷馬車が来るまでの空き時間は、一緒に来たフレイと、兄弟の話等の雑談をして過ごした。

「やっぱり下の子は我儘だ」
「上が横暴なだけです」

そんな風に一日を費やし、夕方になる前に目的の物を買い付ける事に成功する。

「じゃあ、戻ろうか」
「はい」
２人で大荷物を抱え、市壁を通過する。
通過の際、背中と両肩の鞄に加え、２人で担架の様に運んでいた荷物を確認した担当は、苦笑いを浮かべていた。
市壁に入ると、手配して置いた手押し車に荷物を載せ替え、卸業者の元へ向かう。
「これ、お願いします」
「２人組だったのか。正直、ほとんど在庫がないから、量が多いのは助かるよ」
営業スマイルの優斗は、感謝の言葉と、予定よりも少しだけ多めの代金を受け取る。
まだ行くべきところがある優斗達は、卸業者から早々に立ち去る事にし、挨拶をして手押し車を引いて移動する。
「これでどのくらいの儲けなんですか？」
「んー。銀貨１枚くらい？」
「思ったよりも稼げましたね」
仕入れ代行は、安い運賃と仕入れ原価分の代金しか請求出来ないので、基本的に赤字覚悟の商売だ。黒字になった理由は、優斗が安く仕入れを行った事と、卸業者が色を付けてくれた事。そして何より、フレイの存在が大きい。
小柄な女性であるフレイが持てる荷物の重さは、成人男性に比べ

ればかなり小さい。だが、嵩張るが軽い物ならばそれなりの量を持つ事が可能だし、2人で持つと言う事も出来る様になるので、運搬方法の幅が広がる。更に、奴隷税は、人頭税よりも安い。

「後は銅貨を売るだけですね」

今回の商売は、仕入れ代行だけではない。

むしろ、銅貨の高騰こそがそもそもの発端であり、メインの商売だ。

「お金を売るって言うのも、なんか違和感あるな」

そんな会話を交わしながら、手押し車に乗せられている、卸業者で受け取った銅貨と葡萄酒と共に、目星をつけていた店がある方へと向かう。

「葡萄酒は如何ですか？」

「間に合ってる」

フレイが声をかけるも、適当な言葉が返って来るだけで、一顧だにされない。

店も終わり掛けの時間に女の子が話しかければ、話くらいは聞いてくれるのでは、と言う読みを外した優斗は、慌ててフレイの前に出る。

「そう言わず、一杯いかがですか？」

「シツコイぞ」

「お釣り、たくさん準備してますよ？」

銅貨の詰まった袋を見せると、店主の目が、ようやく優斗に向けられる。

何故こんな回りくどい事をやっているのかと言うと、基本的にお金の売買は禁止されているからだ。正確に言えば、両替商だけが、特別に許可を得て、それを行う事が出来る。

「そういえば喉が渇いていたんだった。いくらだ？」

上手く食いついたな、と優斗は内心ほくそ笑みながら、値札を提示する。

「コップはお持ちですか？　お持ちでしたら、値引きしますよ」

「おう、ちょっと待て」

行商人は、基本的に自前のコップを持っている。

水は皮袋から直接飲めても、お湯を沸かした時には、どうしても必要になるからだ。

商人が差し出すコップに、フレイが葡萄酒を注ぐ。この役目は、さすがに優斗よりもフレイの方が適任だろう、と優斗は横へ移動し、場所を譲った。

「じゃあ、銀貨で払おう」

「お釣りはこちらです」

既に取り分けてあった袋を手渡すと、商人は中身を確認し、別の袋に仕舞うと袋を優斗に差し出す。

「こっちも一杯頼む」

「その次はこっちな」

「俺も。銅貨で払ってもいい？」

「もちろんです」

単に出張お酌を楽しんでいる人も含め、何人かの客を捌くと、銅貨はすぐに無くなってしまう。

しかし、その後も行商人たちが悪乗りしたせいで、優斗のぼったくり価格な酒売りは、多少の値引きをしながらも、葡萄酒の入った瓶が尽きるまで続いた。主に、フレイのお酌目当てで。

最終的に、公国銀貨が２１枚と銅貨が２８枚残り、大体ここの税と滞在費を稼げた計算になる。

無事、商売を終えた達成感を胸に、手押し車を返却した優斗達は、宿へ戻る為に橋を目指していた。

「じゃあ、帰るか」
「そーですね」
俺の奢りだから、と何度か返杯されていたフレイは、酔いが回っているのか、少しふわふわとしている。

「酔ってる？」
「すこうし」
意識して大きく動かされた唇に、優斗の目が釘付けになる。

とろんとした瞳。濡れた唇から覗く赤い舌。
普段よりも少しだけ増した色気に魅入られながら、優斗は先ほどまでの光景を思い出す。

返杯を受けたフレイは、勢いよくそれを飲み干していた。その呑みっぷりから、優斗はなんとなく、飲みなれているのだと思っていた。だが、よくよく考えれば、彼女はまだ１６歳の少女なのだ。

「支えなくて大丈夫？」

「腕、組むんですか？」
油断していた優斗は、あっさりと腕を取られ、抱えられてしまう。
支えを得た事で歩みが定まったフレイを見て、優斗は手を振りほどかない事を決める。決して、腕から伝わる好ましい感触が原因ではない、と優斗は誰にともなく言い訳してしまう。

「明日、行くんですよね？」
「その予定」
今日、外の市で公国の和平の使者が到着した、と言う噂を耳にした。

フレイの言う通り、優斗は明日にでも、待ち合わせ場所であるカートン家の別邸に向かう予定だ。

クシャーナに会い、ザイルから荷馬車と仕入れ資金を手に入れた後の事に思いを馳せていると、橋の帝国側で何か揉めているのが見えた。

「どうしても通せないと？」
「武装したままで通せるわけないじゃないですか！」
どうやら、帝国側から公国側へ向かおうとしている集団が、足止めされているらしい。

よく市壁を通れたな、と思いながら、優斗は橋の上で立ち止まって、その集団を見つめる。

基本的に、この街を南北に分断している川を渡るには、橋を渡るしかない。そしてその橋は1本しかなく、自由に通り抜けられるが、一応は見張りがいる。

優斗は宿に戻る為に、橋を渡り切りたい。だからと言って、武装した5人組の中を突っ切ると言う選択肢は、ありえない。

「って、あれって」

「どーしました？」

やはり少しだけ呂律の怪しいフレイを無視し、優斗は橋を進んでいく。

見覚えのある色のマント。そして、そこに染め抜かれている紋章にも、優斗は見覚えがあった。

「あのー、すいません」

「申し訳ありませんが、取り込み中ですの、もうしばらくお待ちくださいー」

「いえ、そうではなく。あ、やっぱり」

「おぉ、優斗殿」

近づいてみると、集団の中に知っている顔が1人居るのが見えた。

研究の途中経過を見分する為と主張するクシャーナを伴って、街中に工房を持つ職人を訪れる時に護衛をしてくれた騎士。優斗は彼の名前を知らないが、顔は覚えていた。

「ユーシア騎士団が何故ここに？」

「そりゃあ、お嬢、いや、我が主であるユーシア領主をお守りする為に決まっている」

なるほどなー、と思いながら、優斗はもう1つ、疑問が浮かぶ。

「何故、帝国側から？」

「我々は、帝国内に避難した領主様のご兄弟の護衛を任ぜられてい

た」

理由は判ったが、武装集団が他国で自由に移動出来るものなのだろうか。

優斗のそんな疑問を読み取ったのか、彼の後ろから声がかけられる。

「匿ってくれた帝国貴族様の許可を得ています。ご兄弟の皆様は、ユーシアから来た迎えの騎士に任せました」

説明を聞きながら、優斗は場の全ての視線が自分に集まっている事に気づき、居心地の悪さに身を竦める。

「ところで優斗殿」

「はい？」

「クシャーナ様はお元気なのですか？」

ユーシア家で働いていた人間がここに居れば、彼女と一緒だと勘違いするのは仕方がない。

優斗は、腕にしがみ付いているフレイに視線を落とし、その状態を確認してから、再度ユーシア騎士団へと向き直る。

「別行動でここまで来たんですが、明日にでも会いに行く予定です。１０日ほど前に別れた時は、それなりに元気そうでしたよ。少なくとも、怪我や病気はしてなかったと思います」

おぉぉぉ、と騎士団から歓声が上がる。

ここに居ては邪魔になる。何より、フレイを早く部屋で休ませてあげたい。

そう考えた優斗は、騎士団を引き連れて宿へと向かう事に決め、行動を開始した。

小さな商売（後書き）

交渉をメインとしない商売の話でした。
また、優斗にとっては今までと違う部分の多い商売でもあります。

帰れる場所

ユーシア騎士団の酒盛りから「明日は早いので」と言い訳し、早々に離脱した優斗は、その言葉通り、朝早くに宿を出た。

「どうしてこんな早くに？」

「連れてけって言われると、面倒だから」

連れて行きたくない相手と言うのは、もちろんユーシア騎士団の面々だ。

昨日は足止めをされた橋も、武具を外せば通過出来る。ならば、一刻も早くクシャーナに会いたいから連れていけ、と言う展開は、ありえそうな話だ。

「こんな時間に、会って貰えるんですか？」

「多分無理。

だから朝食がてら、時間を潰してから行こう」

早朝から開いている店を見つけ、朝食を調達する。

優斗は、フレイがいつも通りに朝食を平らげている姿を見て、二日酔いではなさそうだ、と安心する。

その後、街を散策して時間を潰すと、頃合いを見計らって目的地であるカートン家の別邸へと向かう。

屋敷の前には、大きな門と、それを守るように2人の門兵が立っていた。

「すいません」

「あん？　なんだお前ら」
「これを」
優斗の差し出した封筒を訝しげな表情で受け取った門兵は、その装丁を見て驚き、取り落としそうになる。
ザイルから受け取ったカートン家の家紋が入った封筒の効果に、優斗は苦笑しながら言葉を続ける。
「こちらに滞在中の、クシャーナ・ユーシア様と約束があるのですが」
「わかった。そこで待ってろ」
そう告げると、門兵は、もう一方にこの場を任せ、屋敷へと向かう。
しばらくして、侍女らしい人物を伴って戻ってくると、その侍女に促され、優斗達は屋敷の一室へ案内される。
「ここでしばらくお待ちください」
「ありがとうございます」
優斗達は、豪華な部屋の、やはり豪華なソファーセットに腰かける。
そして待つ事、約２０分。
高級すぎるソファーが落ち着かず、部屋の中で立っていた優斗は、ノックも無く飛び込んできた人影から体当たりを食らう事になる。
「おかえり、お兄ちゃん」
「ただいま、って？」
優斗の胸に飛び込んで来たのは、見慣れぬ、しかし見覚えのある装束に身を包んだクシャーナだった。

両腕を背中にまで回され、がっちりと捉えられてしまった優斗は、仕方ないな、と苦笑を浮かべながら、彼女の頭を撫でる。

「ところでクーナ」
「なに？」
「何故にお兄ちゃん？」
「説明しましょう」
声のしたドア付近へ向けた優斗の視線の先に、金髪に茶色の瞳を携えた妙齢の女性が居た。

どこか見覚えのある面差しに不敵な笑みを浮かべている女性は、後ろ手にドアを閉めると、部屋の中へと入って来る。

「女として成長するまでの間、とりあえず一緒に居られる関係を築いておくようにと私が助言したのよ。
具体的には、妹になっちゃえ、と」
「あー、いや、なんていうか」
「後はどうにか既成事実を作れば完璧」
「どこが！？」
思わず激しいつっこみを入れる優斗を、女性はにやにやと見つめる。

更に背後からも冷たい視線を感じた優斗は、居心地の悪さを感じながらも、クシャーナの頭を撫でている手は止めない。

「ちなみに、私はその子の姉よ。お姉さまと呼びなさい」
「遠慮しておきます」
簡素な服装から、クシャーナに付けられた侍女かと思っていた優斗は、勢いでつっこみを入れまくった事を思い出し、どきりとする。

そんな優斗の反応に、クシャーナの姉はからからと笑う。

「クーナ、こっちおいで」

「もうちょっと」

「折角お洒落したんだから、ちゃんと見せびらかさないと、ね？」

「……判りました、お姉さま」

しぶしぶと言った体で、クシャーナが優斗から離れる。

そのまま姉の方に戻り、その場で一回転してから、袖を掴んでにこりと笑う。

「どうですか？」

「似合ってるよ」

クシャーナの黒い髪によく映える、白を基調にした菫色の矢絣柄の着物に、同色の袴と言う、いわゆる大正の女学生スタイル。

この世界に来て初めてみる和装に、やはりそう言う国もあるのか、と考えた優斗の思考は、そのままあちらの事を思い出し始める。

父・母・弟・アイツ。そして数少ない友人たち。

この子はあちらを思い出させる要素が多すぎる。優斗はそんな思考を振り切る為に、話題転換をはかる。

「ところで、お姉さんは何故ここに？」

「この子が領主になるって聞いて、私の出番かなって」

「お姉さまは駆け落ちして、行方不明だったんです」

余計な事は言わないの、と姉に嗜められるクシャーナは、嬉しそうだ。

そんな光景を前に、優斗はルエインの言葉を思い出していた。
曰く、自分が仕事に着くまで領地経営を取り仕切っていたが、嫁いで行ってしまった姉。彼の執務室にある資料のほとんどは、彼女がまとめた物だとか。

「なるほど。
噂はルエイン様から聞いています」
「うげ」
妙齢の女性らしからぬ奇声を上げ、顔を歪ませるクシャーナの姉は、心底嫌そうな表情を浮かべる。

「絶対、碌な事を言って無かったでしょ？」
「いえ、そんな事は」
「私達を、親が平民出だからって、外へ追い出そうとしてくれたし。仕事も全部持ってかれたし。何より腹が立つのは」
私達、といいながらクシャーナの肩を引き寄せた彼女は、まだぐちぐちと文句を言い続けている。

優斗の視線を受けたクシャーナが、なんとか姉を宥めてソファーに腰かけさせると、その視線がフレイに向けられ、興味の対象が移る。

「ふーん。なるほどねぇ」
「そう言えば、自己紹介がまだでしたね」
重ねられた優斗の言葉に、クシャーナの姉は視線をフレイに向けたまま、返事をする。

「クーナから聞いてるから大丈夫。で、私の名前はアロウズ。よろしくね」
「はい。よろしくお願いします」

「こちらこそ、アロウズさん」
今まで黙り続けていたフレイに先を越されながらも挨拶を交わした優斗は、ちらりと隣の彼女を見る。

ちょこんとソファーに座り、余計な口を挟む事なく座っているのは何時もの事。だが、今日は少しだけ雰囲気が違う、と感じたが、優斗はそれが何なのか判らないまま、会話を続ける。

「アロウズ様は、クーナ、いえ、クシャーナ様と一緒にユーシアに？」
「様いらない。私は家出娘だし。あと、クーナもクーナでいいから」
「わかりました」
気安い人で助かる。

そんな感想を抱きながら、優斗は作りかけていた商談用の表情も消し、元に戻す。

「で、この後の事だっけ？」
「はい」
「私が居た時は、旦那ともう1人の3人で回してたんだけど、そいつがもういなくってね。ルエインのせいで」
「は、はぁ」
既に質問の答えは十分に得ているが、優斗はそれを指摘出来なかった。

人妻だったのか、と別の事に気を取られている優斗を無視し、アロウズは、勢いのまましゃべり続ける。

「兄さんも父さんもいないし、そうなるとルエインがクーナをお飾りにして、好き勝手やりそうだし、これは年長者の私がどうにかす

るしかない、って。
アイツは人を政略結婚に使おうとした前科があるし、この子にも似たような事をし兼ねないからね」

マシンガンの様に言葉を発するアロウズ。
圧倒された優斗がその光景から目をそらすと、彼女の隣でクシャーナがはにかんでいる姿が見えた。

「兄弟なんですから、仲よくしてください、姉さま」
「私の妹はクーナだけよ。唯一の同腹だしね」
「同腹、ですか？」
言葉の意味が判らなかった優斗は、思わず聞き返してしまう。

数秒間、３つの視線に晒された優斗が、居心地の悪さから苦し紛れに何か言おうとした寸前、それに先んじてアロウズが口を開く。

「貴族は何人も連れ合いが持てるのは知ってる？」
「知りませんでした」
跡取りが必要なら普通か、と思いながら、優斗は正直に答える。

よくよく考えて、優斗は自分が物語などを読んで知っている貴族のイメージでは、一夫多妻制であったり、後宮があったりする事が普通だと気づく。

「で、うちの父さんは違う種類の女性を3人口説き落としたんだけどね。
１人は公国の騎士で、１人は帝国の貴族。そしてもう1人が平民から嫁いできたのが私達２人の母親で、ユウ母さんよ」
「私が生まれた時に亡くなったので、私は会った事がないんですけどね」

「クーナそっくりの黒髪で、私と同じ茶色の瞳をしてたわ」
遠い目をしているアロウズに対し、クーナはどう反応して良いか判らず、曖昧に笑う。

そう言う身分意識も、確執がある理由なんだろうな、と思いながら、優斗はクシャーナに視線を合わせ、お互いに苦笑する。

「話、戻すけど、今後は、主に私が外向きの仕事担当で、うちの旦那が内向きの仕事、騎士団は誰かに任せるとして、優斗君はクーナの補佐兼うちの旦那の手伝いで」
「いや、ちょっと待って下さい」
自分が組み込まれている事に驚いた優斗が、慌てて言葉を遮る。

そのまま否定の言葉を続けようとした優斗は、クシャーナの悲しそうな表情が目に入り、先を口に出せなくなる。

「おやおや、弟君は私の妹を泣かせる気かな？」
「いや、そういう訳では」
「うちにおいでよ。一回出てった私が言うのもなんだけど、それなりに居心地はいいと思うし」
大分減っちゃったから、増えるのは嬉しいしね、と呟いた声は小さく、優斗には正確に聞き取れなかった。

しかし、その声が届かずとも、一瞬だけ見せた陰のある表情に、優斗の心が少し揺れる。

「なんなら、いきなりクーナの旦那でもいいよ？」
「ですよ？」
「いやいや」

姉妹揃っての攻勢に、優斗は隣に助けを求めるが、そっぽ向かれてしまう。

まずは婚約者からかな、等と冗談めかすアロウズ。ここぞとばかりに、是非、と押してくるクシャーナ。

嘘で取り繕うのは無駄である。それを良く知っている優斗は、これからの事と、すぐにユーシアに行けない本当の理由を、少しだけ話す事にした。

「この後は、西回りに公国を巡る予定なんです」

「一緒に居て、くれないんですか？」

寂しそうな声色で返すクシャーナの表情は、俯き気味になっているせいで優斗が窺い知る事は出来ない。

「いや、そういう訳じゃなく」

潤んだ瞳と上目使いをセットにした表情のクシャーナが、顔を上げる。

その表情に再び言葉を止められた優斗の服が、引かれる。

どうやら、フレイが裾を引っ張ったらしいと気づいた次の瞬間、横腹が抓られる。

「っっ！？」

大きな反応こそしなかったが、優斗が口元をひきつらせた事に気付いたクシャーナが、不思議そうな表情になる。

その隣では、相変わらずアロウズが楽しそうにニヤついている。

「自分に足りないモノが何か気づいたから、それを何とかしようと

思って」

痛みに耐えながら、それを誤魔化すように優斗は説明を続ける。

痛みのおかげか、クシャーナのあの表情から解放されたからか、優斗は少しだけ余裕を取り戻していた。

それが何なのか、と言う無言の問いかけを感じ、優斗は予定通り半分だけを口にする。

「経験と見識。だから、色々と見て回りたい」

その言葉に、クシャーナがアロウズを見上げる。

ずっと浮かべていた笑みを消したアロウズは、少しだけ表情を硬くし、優斗を見る。

「理由がそれだけなら、一先ずユーシアの復興を手伝ってくれない？」

「個人的な理由もあるので、出来れば遠慮したいです」

個人的な理由がある、と言うのも真実だ。

優斗が西、もしくは南西に移動しようと考えている理由の1つに、ロード商会の支店が無いからと言う理由がある。飛び杼に関する商売が収束するまで――キャリスの予想では半年以内――はユーシアを含む公国北部と帝国方面には近づきたくない。

それを説明する訳にいかない優斗は、もう1つの理由を口にする。

「ルエイン様を騙す様な事をしたもので、ちょっと居づらいって言うのもありまして」

「アイツが邪魔なら追い出そう」

「お姉さま、ダメですよ」
「クーナ。別に好き嫌いで言ってる訳じゃないの。生死不明な人間を当てにするよりも、確実に使える人手を確保する必要がある。判るわね？」
反論しかけたクシャーナは、葛藤の末、しぶしぶ頷く。
一方優斗は、その言葉にある事を伝え忘れていた事に気付く。
「忘れてました。ルエイン様はご無事ですよ」
「へ？」
「はぁ？」
アロウズとクシャーナが、姉妹らしくそっくりな顔で驚く。
ようやく主導権が握れた、と少しズレた感想を抱きながら、優斗は言葉を続ける。
「実は先日、この街でユーシア騎士団に会いました」
「ほんと！？」
ソファーから立ち上がったクシャーナが、身を乗り出して優斗に迫る。
「もちろん。
で、彼らが護衛していた帝国に逃げた人達は全員無事だって」
前線に赴いた者はほとんど亡くなったが、一部、捕虜交換で戻るかもしれない、とも聞いていたが、あえて口にしなかった。それでもアロウズは、優斗の表情を見てそれに気づいた様だった。
クシャーナの方は、安心したのか、崩れ落ちる様にソファーに座

りこむと、アロウズの腕にしがみつく。

「……お姉さま」

「うん。よかった」

身を寄せ合う姉妹の姿に、優斗は目じりに浮き上がりそうな涙を堪えるのが精いっぱいだった。

クシャーナが落ち着いた頃合いを見計らい、アロウズが呼んだ給仕の侍女が運んで来たお茶を4人で飲む。

ユーシア騎士団の方は、念の為に確認を行うと、アロウズが、騎士団員と直接の面識があるトーラスに会いに行く様、指示を出していた。指示は侍女を通じて行われた為、優斗はまだ再会を果たしていない。

「絶対に、帰って来てくれるんですね？」

「約束通り、会いに行くって」

「でも、ユーシアで働く気はない、とか？」

「そうなんですか！？」

「ルエイン様の恨みを買ったから働くのは、って、これ何回目ですか？」

優斗が説明し、クシャーナが納得しかけるとアロウズがひっくり返す。

黙々とお茶を飲み続けるフレイを除いた3人は、既に何ループ目かの似たような会話を終え、全員同時にカップを手にする。

「フレイも何とか言って」

「私は、ご主人様のお傍に置いて頂けるのであれば、どちらでも構

いません」
「どうする、クーナ。愛人付きだって」
「気に、なるけど、気にしないのでユーシアにちゃんと帰って来て下さい」
「むしろクーナが愛人かも？」
「えぇえぇぇぇ！？」
話の展開が酷すぎる。

優斗がこっそりため息を吐いた瞬間、部屋の扉を叩く音が鳴った。

全員が目を見合わせた後、アロウズが「はい」と返答すると、静かに扉が開かれる。

「邪魔する」
開かれた扉の向こうには、中年に差し掛かろうと言う年齢の男性が立っていた。

「ライグル様！？
どうも、この度は様々な便宜を図って頂き、ありがとうございます」

立ち上がったクシャーナが、ソファーから一歩横へ出ると、スカートの裾を持ち上げ、恭しく頭を下げる。

きっと偉い人なのだろう。そう判断した優斗も、同じ様に立ち上がり、頭を下げる。

「クシャーナ嬢、アロウズ嬢。そちらの商人に用があるのだが、構わないか？」
「もちろんです」

カートン家の当主様だろうか。

優斗のそんな考えは、即座に否定される。

「ライグル・カートン。カートン家の次期当主で、君が契約したザイル・カートンの兄だ」

「はじめまして、優斗と申します」

「ちょっと相談があってな。座って話そう」

その言葉に反応し、フレイとアロウズが移動を開始する。

フレイは優斗の後ろに、空いた席にはクシャーナが移動。そしてアロウズはその後ろだ。そうする事で、2人掛けのソファーの片方が空き、そこにライグルが座る形となる。

「とりあえず、座れ」

「はい」

クシャーナと一瞬だけ視線を合わせてから、優斗はその場に腰かける。

何の用だろう、と警戒する優斗は、目の前のテーブルにあった茶器が無くなっている事に気付く。

「実は、君にお願いがあって来た」

「はい、なんでしょうか」

「ザイルと結んだ契約書。あれを持って管理局へ行って貰いたい」

その言葉を、破棄しろ、と解釈した優斗は、目を見開いて驚く。

「いや、悪い。言い方が悪かった。

うちの父親——現カートン家当主が、ザイルを勘当すると言いだしてな」

その理由を、優斗は少しだけ予想する事が出来た。
これから帝国との関係を築く上で重要な立場のクシャーナ。彼女の印象が悪い人間を、家に残しておくのは百害あって一利無しだ。

優斗の表情からそれを読み取ったのか、ライグルはわざとらしいため息を吐く。

「まぁ、察しの通りだ。
あんなでも弟なんでな。強制的に契約権を剥奪して、罰は与えたからと父を説得するつもりだ」

今まで貴族として過ごして来た人間が、自力で生活すると言う事がどれ程大変な事なのか、優斗には想像がつかなかった。

しかし、それが本心からの言葉なのか、それとも次期当主と言う自分の椅子を守る為の措置なのか。そこまで考えてから、優斗はそれを判断する術を持っている事を思い出す。

「確認しなくとも本当だ」
「申し訳ありません」
即座に謝ると、ライグルは苦笑を浮かべる。

だからと言って、あの契約をなかった事にされるのは困る。
優斗がそう考えていると、ライグルは手元のベルを鳴らした。

「契約通りの額面を、私が個人的に支払おう。もちろん、相応の礼もする。何が良い？」
ドアが開き、金貨を乗せた銀の盆を持った侍女がやって来る。

それをテーブルに置くと、侍女はそのまま部屋を出ていく。

「荷馬車は手続きの後で引き渡そう」

言葉から察するに、これはこの場で受け取っても良いらしい。

大金を目の前に、少しだけ舞い上がっていた優斗が我に返ったのは、ライグルの表情が目に入ったからだ。

その表情から、与し易い相手だと思われている事に気付いた優斗は、少しだけ腹立たしく感じる。軽々しくそう見られる行動を取った、自分自身に。

「ライグル様」

「なんだ？」

「礼、とおっしゃいましたが、何でも良いのでしょうか？」

「無茶な条件で無ければな」

荷馬車と目の前の金貨があれば、優斗が行商を再開するには十分だ。

ならば、と思い浮かんだ案は、優斗を少し不安にさせる。過去に足を引かれ過ぎている自分が、既に泥沼に嵌っているのではないか、と。

そんな思考を、不利益を与える形になってしまったユーシア家への償いだ、と言い訳する事で抑え込みながら、優斗は隣の少女に視線を向ける。

「クシャーナ様」

「なんでしょう？」

「ユーシアで生産する絹の売り先を、私が決めても構いませんか？」

「はい」
躊躇の無い即断即答に、あまり信頼されても困るんだけど、と思いながら、優斗はライグルに向き直る。

そして、それに驚いたアロウズが口を挟む間も無く、優斗の交渉が始まる。

「では、ライグル様。ユーシア復興の為の資金を、貸して頂きたい。出来るだけ多く」
「貸す、でいいのか？」
「はい。その代り、支払いは一年後から開始の、絹で支払いとさせて下さい」
「なるほど。産業の復興と借金返済を同時にやろう、と言う訳か」
「さすがライグル様。ご名答です」
よこせ、と言わなかったのは、なるべく大きな額を引き出す為だ。

ライグルもそれには気づいた様で、それ以上は触れず、別の疑問を口にする。

「もしくは、絹が値下がる情報でも手に入れたか？」
「その通りです。ですので、絹の数は契約書に明記して頂きたい」
「我が家が損をするような取引は出来んぞ？」
ライグルが想像以上に頭の回転が良い人物であった事に、優斗は手間が省けたと内心喜んだ。

ユーシアの代理として話している以上、貴族との関係悪化は避けたい。それが借金をしている相手ならば、猶更だ。
故に、今回、優斗が目指す着地点は、ユーシア家とカートン家が、お互いに得をする状況を作り出す事だ。

「突然、どこかに借金を頼むのは、難しいですよね？」
「そうだな。それがどうした？」
「ですが、ユーシア復興の資金を用立てたい、と言うのであれば、どうでしょうか？」
優斗の言葉を受け、ライグルは少し俯く。
そのまま数秒間黙り続けた後、優斗の目を覗き込んで来た。
「証拠は？」
「ありません」
大嘘だ。
飛び杼の存在を知られたくない優斗は、少し挑発的な笑みを浮かべ、言葉を継ぐ。
「ですが、絹が値上がっても、値下がっても、同じ契約をどこか別のところと交わして頂ければ、ライグル様に損はないはずです。私がお願いしたいのは、カートン家の持つ信頼を使って、今すぐにお金を集めて頂く事です」
ライグルは頭の中で、全ての場合の状況を思い浮べていた。
調査を行えば、値上がるか値下がるかの予想を立てる事が出来る。その結果を見てからどうするか判断すれば、高い確率で利益が見込める。
基本的に領地を持たない貴族は、領主と違って国からの給金で生活している。それでも貯えとしては十分であるが、侯爵家としての箔を付ける為に、お金はあるに越した事はない。

「良いだろう。
復興支援の名目で、無担保・無利子で貸し出そう。額面は後で連絡する」
「ありがとうございます」
「お前の部屋を準備させる。今日はここに居て貰うが、構わないな？」
「もちろんです」
「そちらの契約に関しては明日、うちの者と行って貰う。それまでに荷馬車の準備と、詳細の連絡をする。
それで構わないな？　クシャーナ嬢」
「はい」
クシャーナの返事を最後に、ライグルは言葉を止め、退室する。

優斗が、予想外にあっさりと交渉が成立した事に拍子抜けしていると、前の席にアロウズが戻り、フレイが茶器を並べ直し始める。

「ねぇ、クーナ」
「なんですか、お姉さま」
「ホントに絹は値下がるの？」
「それはお兄ちゃんに聞いてください」
「弟ー、説明ー」
飛び杼の話をして良い物か、と優斗は一瞬だけ悩み、今さらか、と結論する。

飛び杼の説明と、その技術がロード商会にも流れている事。
最初は半信半疑だったアロウズも、クシャーナの証言を聞き、納得せざるを得なかった。

「当面の資金が確保出来たし、産業の復興と返済を同時にこなせる上に、上手くいけば将来の資金繰りまで解決、かな？

やっぱルエイン追い出すから、うちに来ない？」
アロウズの一言に、優斗は苦笑しながらも首を横に振る。
「でも、帰っては来てくれるんですよね？」
「約束は守る」
「じゃあ、それまでにルエインのヤツを黙らせるか、追い出しておくと言う事で」
その言葉に、仲よくして下さい、とクシャーナが返すのを見ながら、優斗は冷めてしまったカップの中身を飲み干す。
空になったカップにフレイがお代わりを注いでくれた事に礼を言ってから、優斗は再び姉妹の会話に視線を戻す。
この世界の人間ですら無い優斗に対して、唯一『帰って』来て欲しいと言ってくれるクシャーナ。
本来帰る場所を髣髴させる容貌も相まって、優斗は彼女の元へ『帰る』事を強く否定出来ない事を自覚していた。
どうするにしても、ロード商会の件が落ち着いてからだ。
そう考えた優斗は、一旦この件に関する結論を出す事を諦める事を決めた。

帰れる場所（後書き）

優斗くんがこちらの世界に馴染み始め、幾つかの大事なモノを得ました。
それが代償として失ったモノと釣り合うのかは、別にして。

即席商隊

優斗が南西へ向かう為の準備は、思いのほか順調に進んでいた。

その理由に、ユーシアと懇意で居たいと言うカートン家の思惑があった。

荷馬車、礼金、ユーシアへの支援。

どれを取っても文句のない好条件で準備されており、優斗が行ったのは支援に関する契約書の細かい文言を直す程度。

また、ユーシアと親交が深い優斗に好印象を与えようと、滞在場所と食事の提供までしてくれたおかげで十分に時間が取れ、仕入れや行先の下調べも予想以上に早く済んだ。

「本当にいいんですか？」

「何が？」

「式典、見ていかないで」

クシャーナと再会してから１０日。優斗とフレイは既に出発の準備を終えていた。

公国内であればそれなりの値がつくとされる帝国の品を仕入れた優斗は、南西に向かって明日出発する予定だ。

出発が明日なのは、護衛を共同で雇う、小さな即席商隊の様なモノの出発が明日だからだ。

「式典後は値上がるだろうし。こうでもしないと、本気で護衛を付けられそうだから」

「少なくとも、クシャーナ様は本気でしたよね」

1年以内にユーシアに帰って来る。

それを条件にクシャーナを説得した時、危険だからとハイルまで駆け付けたユーシア騎士団から護衛を出すと言われてしまい、それに対して優斗が、護衛を雇うから問題ない、と言ってしまったのが事の発端だ。

現在、ハイルに向かって来る人間は多く、それに伴って護衛として同行してくる人間も増えている。

滞在中も護衛の仕事があれば問題無いのだが、そうでない人間は別の依頼を探す事になる。そして競合する相手が多ければ多いほど、仕事は減り、値切られ易くなる。

結果、街の外で別れて、別の場所で仕事を探すか、安めの料金で別の街へ護衛する依頼を探す事になる。

「安く済むならその方がいいし」

「それなら、ここにギリギリまで滞在した方が、安く済むと思うんですが」

フレイの指摘に、優斗は頭をかく。

確かにカートン家の屋敷は滞在費0な上、食事つきだ。だが、行商をしなければお金は稼げない。

「折角、自分の許可書も手に入れたし」

ライグルは契約書にあった通り、商取引許可証も手配してくれた。

とは言え、今まで使っていたリコスの商取引許可証は捨てず、念の為ジュラルミンケースの中に保存している。

「そうでしたね。でも、それだけじゃないですよね？」
優斗の方を見つめるフレイの声は、少しずつ低くなっている。
「まぁ、他にも色々理由はあるけど……」
言いよどむ優斗に、フレイの目が細められ、鋭くなる。
優斗は、ロード商会に目を付けられている件を、まだ誰にも話していない。しかし、行動を共にしていたフレイがそれに気づく可能性は、十分にある。
「クシャーナ様に押し負けそうなんですね？」
「へ？　いや、否定はしないけど」
フレイの言う通り、彼女を取り巻く要素の大部分が、優斗の抗う力を削いでいるのは事実だ。
先日のユーシアを利する取引内容も、数日前にやって来たキャリー商会との間を取り持ったのも、ユーシア家への負い目以上に、クシャーナが領主だからと言う理由が大きい。
「このままだと、ユーシアまで引っ張っていかれそうですもんね」
「説得は出来たけど、納得はしてなさそうだったな」
「そしてそのまま、なし崩し的に結婚させられてしまうのですね？」
「それは無い」
否定しながら、蜂蜜菓子の袋に手を伸ばす。
大量の金貨を受け取った優斗が、まず購入した物がこれの材料だ。
約束を果たす為に作成した蜂蜜菓子の、最初の一袋をフレイに進呈したところ、彼女はその日のうちに完食してしまった。
故に、誤魔化す為に優斗が差し出した飴を、フレイが拒否する事

はなかった。

お互いの口に飴が入ったおかげで、少しだけ静かになった部屋にノックの音が鳴り響いた。

「お邪魔するよ」

「どうしましたか、アロウズさん」

「明日は見送れないから、挨拶しとこうと思ってね」

そう告げて部屋に訪れた客は、今日二人目だ。

一人目のクシャーナは、今日の午後から予定があるのだと、午前中はほぼずっとここに居た。

優斗が旅立つ事にこそもう何も言わなかったが「絶対帰ってきてね、お兄ちゃん」と連呼していたので、フレイの視線が痛い半日だった。

「ありがとうございます。でも、本当によかったんですか？」

「色々と助けてもらった功績と、個人的に、ルエインに大きな顔されずに済みそうだからね。そのお礼」

苦笑で返しながら、優斗は彼女たちと交わした契約を思い出す。

ユーシア家は、優斗に対し、褒美として金貨百枚を提示して来た。ただし、一年以内にユーシアに戻り、かつ復興後に手渡すと言う条件付きで。

ルエインに大きな顔を、と言うのは、飛び杼の設計図の写しと、どこの職人に頼んだのかと言う一覧をアロウズに渡した件だ。産業の復興には、かなり大きな効果を持つカードなので、報酬が増えるくらい稼いで下さい、と優斗は冗談交じりに引き渡した。

「それにしたって、額が大きいですし」
「クーナが、どうしても戻って来て欲しいからって、かなり多めにしたからね」
最初は三百枚とか言ってたんだよ、と告げるアロウズは、どこか楽しそうだ。

「まぁ、私も来て欲しいと思ってるからね」
「そうなんですか？」
「懐かしい、と言うか親しみを感じるし。それにほら、人材としても優秀な訳だから、損して得取れ、ってね」
「金貨百枚の損を、得にする自信はないですけどね」
あはは、と笑う弱気な優斗に、アロウズがにやりと笑って答える。

「その為に経験と見識を広げに行くんでしょ？」
「そうですね。千里の道も一歩からと言いますし、少しずつでも信用に応えられる人間になるよう、努力します」
優斗の言葉に、アロウズは何故か驚いた表情を浮かべる。

しかし、すぐに何時もの笑みに戻り、会話を続ける。

「応えてくれる気があるあたり、クーナに脈ありなのかな？」
「黙秘します」
「あはは。
優斗くんが来るまでに、クーナがどれだけ成長出来るか、今から楽しみになって来た。
私も、見せたいモノが出来たし、絶対に来て貰わないと」

その後しばらく優斗をからかったアロウズは、封筒を数十枚と共に、これでクーナに手紙を出せ、と言う言葉を残して部屋を去った。

「さて、明日は早いし、もう寝ようか」
「そうですね」
夕食後、これからの事について話し合っていた二人が、その言葉を切っ掛けに寝間着に着替え始める。

行先の候補を決め、下調べをして、そこで売れそうな品の仕入れを行う。
そんな真っ当な行商の準備を初めて行った優斗は、出発を明日に控え、少しだけ浮かれている。

「では、おやすみなさい」
「おやすみ」
別々のベッドに横になると、部屋には沈黙が訪れる。

出発を明日に控え、浮かれている優斗は、その沈黙が落ち着かず、ずっと気になっていた質問を、その理由を深く考える事なく、発してしまう。

「そういえばフレイ。もう夜這いは止めたの？」
フレイの顔が燃える様に赤面し、言葉を詰まらせるが、暗闇の中で優斗がそれに気づく事はない。

返事が無い事に、もう眠ったのかと勘違いした優斗が、自分もと目を瞑ってしばらくした頃、フレイが口を開く。

「そう言うご主人様はどうなんですか？」
「どうって言われても」
優斗はフレイの事を好いている。だからこそ、求めれば拒否出来

ない現状で、それを行う訳にはいかないと考えていた。

一方、フレイは自分の感情の変化に戸惑っていた。

生きる為に自分の身体を使う覚悟はあったし、実際にその覚悟を元に優斗に迫ったりもした。だが、色々な事を切っ掛けに、その覚悟だけでは優斗を誘惑するに足る覚悟を得られなくなっていた。

「基本的に、奴隷は命令されて何かをするものです」

「フレイのイメージからは、全然そんな気がしないんだけど」

「個性です」

きっぱりと言い切ったフレイは、赤くなっている顔を布団に埋める。

その音に気付いた優斗が視線を送るが、もちろんその顔を見る事は出来ない。

「ユミと言う方の事はいいんですか？」

「えっと。いや、その」

「死別と言っていましたが、本当ですか？」

「本当と言えば本当、かな」

否応なしに思い出される当時の記憶に、優斗はフレイに続いて布団に顔を埋める。

遺品だらけの棺。何も残らない火葬。一度もしていない墓参り。

「ごめん。寝る」

「私の方こそ、いえ、判りました。おやすみなさい」

二人とも口を閉ざし、布団に包まるが、お互いの起こす小さな音が気になって眠れない。

過去を乗り越える訳でもなく、ただ思い出す事を忘れて、目の前の事だけを考えていた。
そんな事実に、相変わらず自分は目の前の事だけを見て生きている、と気づいた優斗は、中々眠りにつく事が出来なかった。

早朝から起き出した優斗とフレイは、まともな会話もないまま、ひたすら出発の準備をしていた。

荷馬車に乗り込み、出発の準備が万全となった優斗達が門を出ようとすると、そこには豪華な馬車が停まっていた。

「お兄ちゃん！」
「クーナ？」
扉が開きっぱなしの馬車から、着飾った姿のクーナが顔を出す。

予定がぎっしりで見送りが出来ない。
その言葉を信じていた優斗は、驚き、同時に嬉しさを感じていた。

「いってらっしゃい。またね」
「……いってきます。また、会いに行くから」
その言葉に満足し、扉を閉める様、指示を出すクーナ。

満面の笑みで手を振るクーナが居なくなると、優斗は荷台に声をかけ、出発する。

集合場所は公国側の市壁の外。時間に余裕がある為、ゆっくりと移動し、市壁を超えると、打ち合わせで顔を合わせて何名かが既に居た。

「おはようございます」
「早いですね」
「どもっす」
先客の三人の近くまで荷馬車を移動させる。

今回の即席商隊は、複数の商人が出資し、それを代表が集めて複数の護衛を雇うと言う形式だ。護衛は雇い主をはっきりさせる事を好むので、出資額が多い者が代表になるのが一般的であり、複数雇う場合は代表も複数である事が多い。

「ミグルさんは？」
「まだ来ていません」
ミグルと言うのは、この即席商隊を集めた代表者だ。

荷馬車を停める優斗に、１人の若い商人が近づいて来る。
確か、サイルスと言う名前だったかな、と曖昧な記憶を手繰りながら、優斗は笑みを浮かべる。

「集まるまで、話をしませんか？」
「いいですね」
どうする、と問いかける視線と共に優斗が荷台を振り返ると、フレイは首を横に振った。

御者台から降りた優斗に話しかけて来る商人達は好意的で、一部からは少しの尊敬すら感じられる。

名前に年齢、荷物の量。
顔合わせでそれを告げた結果、それなりのキャリアを積んだ、資金の多い商人であると勘違いされてしまった節があり、それが原因だろうと優斗は推測する。

順次集まってくる商人達と挨拶を交わしながら、出発の時刻まで、商隊のメンバーと親交を深めながら話をする。

優斗がこの商隊に参加した理由に、移動中にも情報収集が出来る事と、他の商人と親交を深めて横の繋がりを少しでも得たい言う事があった。この世界に疎く、知り合いが少ない優斗にとって、それはどちらも重要な事だ。

その後、商隊代表のミグルが今回雇った護衛４人と共に現れ、商隊に参加する商人が全員揃っている事を確認すると、出発となった。

「よう、兄さん。女連れだったんだな」
「えぇ、まぁ」
隣でぺこりと挨拶するフレイは、出発まで荷馬車の中に居たのだが、移動開始と共に御者台に座った。

そのせいで、先ほどから入れ替わりに護衛がやって来ては、話しかけて来る。この商隊で女はフレイだけの様なので、気持ちは判るが、と余りに露骨な護衛達の反応に、優斗は苦笑する。

「俺はラズル。よろしく、お嬢さん」
「フレイです。護衛、よろしくお願いします」
「任せとけ！
あのおっさんは知らないが、俺らは信用してくれていいぜ」

今回の護衛は、普段から一緒に仕事をしていると言う若い三人組に加え、風格のある中年護衛が一人、参加している。参加する商人が１０を超えた為、三人では不安だと言う声があり、急遽雇ったの

だと、ミグルが説明していた事を思い出す。

「あの人はどうですか？」
「なんだ兄さん、気になるのか？」
「えぇ、まぁ」
「俺らより出来るのは確かだな」
予想外の答えに、優斗は驚いた表情を浮かべてしまう。

護衛と言うのは、自分の腕前を売る商売だ。
ならば、他と比べて自分は高価である、と売り込むだろうと、優斗は予想していた。それが女の前ならば、猶更だ。

「俺らは仕方なくやってる商売だからな。あのおっさんは本業だろうし。あ、これ内緒な」
「はは」
苦笑を返すと、ラズルは「他も回らないと怒られるんで」と名残惜しそうに荷馬車から離れて行った。

今回の移動では、護衛の一人が馬で見回り、他の三人はどこかの荷馬車の御者台に配置される事になっている。
優斗は与り知らぬことだが、普段ならば面倒な見回りを、今回は若者3人が率先して行っている。理由は推して知るべし、である。

即席の商隊は二回の小休止を挟んで、日が沈む二時間前まで移動を続けた。

そこから各自で野営の準備を行い、出発時間までは自由に行動する。

「あー、フレイ」
「なんですか？」
昨夜の会話以来、優斗はフレイに対して、必要最低限の事以外では声をかけられず、困っていた。
フレイの方はいつも通りなのだから、と自分に言い聞かせた優斗は、なるべくいつも通りを装って、飴の入った袋に手をかける。
「ちょっと手伝って欲しい事があるんだけど」
その言葉に対して、フレイは手のひらを上に向け、優斗に向けて差し出す。
言葉でなく、行動で示されたそれに、いつも通りに見えて少し違うかも知れない、と思いながら、優斗は幾つかの飴をその手に落とす。
「他の人から色々と話を聞きたいから、着いて来てくれない？」
「それだけですか？」
「出来れば、相手のコップにお酌して欲しいな、と」
そう言って、優斗は葡萄酒の瓶が入ったバスケットを見る。
酔わせて情報を引き出す、と言う訳ではない。酒は単に、話しかける切っ掛けと、欲しい情報を引き出す為の対価になる予定だ。
ここで唯一の女――しかも若くてそれなりに可愛い――の酌付きならば、暇つぶしついでに話をしてくれる人もいるだろう、と優斗は考えていた。
「酔っ払いの相手は嫌です」
「まぁ、そう言わずに」
「ですから、ご主人様には他の物を注ぎますからね？」

ようやく見る事が出来たフレイの笑みに、優斗はようやく安堵し、表情を崩した。

フレイの協力もあり、その晩、優斗は幾つかの情報を得る事が出来た。

この商隊が向かう先であるユミズは、神殿が多い。それは竜神様やその使いである竜達を祭っているからで、宗教的な色の強い都市だと言う事が伺える。

そこまでは下調べで判っていた事なので、優斗達は途中でこの即席商隊と別れる予定だ。宗教都市に、慣習やタブーを調べきらずに向かう危険性を、優斗は父親から聞いて知っていた。そんな事すら思い出せない程、目の前の事に必死だった今まで旅を思い出し、優斗は苦笑する。

それ以外にも、ユミズ付近の特産や慣習、優斗達が向かう予定のスートリと言う都市の特色などを聞き出した優斗は、忘れないうちにそれを紙に書き出し、その日は眠りについた。

この即席商隊は、大体3日毎に市壁のない街、もしくは村に滞在する様なスケジュールになっている。

「よう、若いの」
「あ、どうも」
三日目の昼過ぎにそれなりの規模を持つ村に到着した商隊は、各々が宿を取ったり、納屋を借りたりと走り回っていた。

優斗はと言うと、既に宿の確保を終え、フレイと共に街を散策中

だ。

「ちょっとそっちの子、と言うかお前らに頼みたい事があるんだが」
「なんでしょうか？」
話しかけてきたのは、ラズルによれば本業の護衛だと言う中年護衛、ライガット。

彼の心証を良くしておけば、色々と有利かもしれない。
そんな思惑と共に、優斗は営業スマイルを浮かべ、ライガットと相対する。

「若い女が喜ぶプレゼントを買いたいんだが、どんなモノがいいかさっぱりでな」
予想外な言葉に、優斗とフレイが視線を合わせ、疑問をぶつけあう。

もしかして、口説かれてるんじゃない？
そう言った類の視線は感じませんでしたけど。

そんなアイコンタクトをしてから、優斗はライガットを見る。

優斗よりかなり高い身長と太い腕を持ち、ガタイも良い。年齢は４０くらいだと本人が言っていた。

「若い、とはどのくらいでしょうか？」
「ん、あぁ。大体、お前さんくらいかな」
お前さん、と示された優斗の年齢は２１。

念の為、それを確認して見ると、ライガットは首を縦に振って肯定した。

「子供っぽくて可愛いところもあるんだが、最近はそれなりに女っぽくもなってきてな」
２０歳近く年下の女性の事を、嬉しそうに褒める４０歳男性。
優斗の持っていたライガットのイメージは、しかめっ面をした渋めの中年護衛、だった。そこに、腕利き、と付けても良い。
そのイメージは、今、この場で崩れ去り、営業スマイルが崩れないようにするので精いっぱいだ。
「お子さんですか？」
フレイの言葉に、優斗ははっとする。
そう言う可能性もあるのか、と優斗は自分の浅はかさを反省し、真面目な表情を取り繕う。
「あー、いや。違う、ん。違うな」
何故悩む、と思いながら、優斗はフレイを隠すように半歩前に出る。
それは、口説きに来る商人や護衛から彼女を守り続けていたここ数日で、自然と身についた行動だ。
「娘さんは、父親だと思っていると思いますよ」
「そうか。そうだな」
２人で完結してしまった会話に、優斗はようやくその意味を理解し、再度反省する事になる。
「ご主人様、どうしますか？」

「フレイに任せる」
妙な評価をしてしまった詫びは入れたいが、フレイにそれを強制するのは違う気がする。
そう考え、自分は構わない、と言うニュアンスで発した言葉に、フレイは嬉しそうに答える。
「では、次の街で買い物をする、と言う事で良いですか？」
「今からでなく、か？」
「ここの雑貨屋さんは、品ぞろえがイマイチなので」
声を押さえて発されたフレイの言葉に、ライガットがニヤリと笑う。
宿を取っている間、姿が無いと思ったらそんな事をしていたのか。
そう考えながら、優斗はフレイがその娘さんの事を詳しく聞いている姿を見つめていた。
馬車の見張りがあると言うライガットと別れ、優斗達は散策を再開する。
「どうも、ユートさん」
「どうも、サイルスさん」
今までにすれ違った何人かと違い、サイルスは進行方向を変え、優斗の隣を歩き始める。
「どうしました？」
「えっと、ちょっと」
優斗は立ち止まり、サイルスと向き合いながら、彼について知っている事を思い出す。

商隊に参加している若い商人で、数回話した程度。話はもっぱら荷物に関する事で、帝国の珍しい品、と説明した後も、その詳細を聞きたがっていたので、買取の話かもしれない。ならば、と優斗は小さく息を吐き、次の言葉に備える。

「間違っていたらすいません、フレイさんは、奴隷なのですか？」

「そうですけど、それが何か？」

リボンを解こうとするフレイを制し、優斗は彼女の前に出る。

薄いとは言え、鑑札が付いたせいでそれまでより目立つ様になった首輪は、最近購入した首元まで覆うタイプのケープによって、隠されている。

もちろん、隠してあっても気づく人間は気づく。何より、フレイは優斗の事を「ご主人様」と呼んでいるので、商隊に参加している商人のほとんどがそれに気づいている。優斗とフレイのところに、代わる代わる商人達がやって来たのは、優斗の持つ商品を見に来た、と言う側面も存在するのだが、２人はそれに気づいていない。

「その、実は、俺」

頬をぽりぽりとかきながら、サイルスは明後日の方へと視線を向ける。

なんだこいつは、と優斗が彼を睨みつける視線が、更に険しい物になる。思惑は様々だが、この３日間でかなりの人数の男がフレイに会いに来た。それに対し、優斗がどんな感情を抱いているのかは、想像に難くない。

「フレイさんが好きです！

お嬢さんを俺に売って下さい！」

俺はフレイの父親か。

そんな感想と共に、優斗は呆れた表情でサイルスを睨みつける。

その言葉を本当の意味で理解した優斗が、滑稽なほど慌てふためくのは数秒後の事になる。

即席商隊（後書き）

フレイさんがモテモテなお話でした。
幸か不幸か、そのほとんどは本気でなく話し相手としてですが。

分の悪い賭け

宿に戻った優斗達は、相変わらずの位置関係で座っていた。

「売ってくれ、って言われてもなぁ」

「破格の値段でしたよ？」

フレイの言う通り、最終的にサイルスが提示した値段は、相場の倍近い数字だった。

どれだけ気に入ったんだ、と思いながら、優斗は「諦めませんから」と去り際に告げられた言葉を思い出し、ため息を吐く。

「フレイ的に、ああ言う男はどうなの？」

「好みじゃありません」

ばっさりだー、と言う気楽な感想を持てたのは、優斗がその答えに心底安堵したからだ。

もしここで、あの人の方がいいです、等と言われたら、優斗は落ち込んだだろう。そして、最寄りの街で奴隷解放手続きを行ったに違いない。

「あんな大金を積んでるのに？」

「お金の問題でしたら、私を値切って買おうとしたご主人様の評価は最低ですね」

「いやぁ、あの時はああするしかなかったと言うか」

藪蛇か、と思いながら優斗は誤魔化すように乾いた笑みを浮かべる。

嫌われてはいない、だけどどういう意味でどのくらい好かれてい

るかは判らない。優斗はフレイの態度を、そんな風に解釈していた。

「でも、どうするかなぁ」

「どう、とは？」

「どうすれば諦めるのかな、と」

優斗は売る気が無く、サイルスは諦める気がない。

次の街には４日ほどで到着する予定であり、そこで商隊とは別れるつもりなので、それまで辛抱すれば問題無い、と言えば問題ないのだが。

「強硬手段に出られたら、面倒だ」

「ではいっそ、売ってしまいますか？」

その発言に、優斗は驚き、目を見開く。

視線の先に居るフレイは、軽く放たれた言葉とは裏腹に、真剣な表情だ。

自分が危険に晒されてでも、私を売る気はないのですか。

その表情をそう読み解いた優斗は、大きなため息を吐く。

「バカ」

「バカ、ですか？」

「うん。バカ」

フレイの表情が崩れ、嬉しそうな、でもどこか泣きそうなものに変化して行く。

ここは優しい言葉でもかけるべきだろうか。

そう考えた優斗が、かけるべき言葉をチョイスしている内に、フレイが、にやり、と唇の端を釣り上げる。

「では、売られるかもしれないからと、びくびくする必要はない訳ですね」
「もちろん。って言うか、心配なら奴隷かいほ――」
「じゃあこれからは、いつも通りのフレイで行きますので、よろしくお願いしますね」
にっこりと笑うフレイに見惚れた優斗が、一拍遅れて「こちらこそ」と告げる。

その反応に満足したフレイは、さっそくとばかりに口を開く。
「ご主人様に買って頂きたい物があるんです」
「お、何？」
嗜好品か装飾品だといいな、と思いながら、優斗は嬉しそうにそう答える。

フレイが食べ物と生活必需品以外で、あれが良い、これが欲しいと言う機会は滅多にない。食べ物であっても、飴を除けばどんな食事が良いかと言う希望であり、優斗が何かを強請られた事は、あまり無い。

「エプロンドレスです」
「エプロンドレス、って。気に入ったの？」
確かにしょっちゅう着てたけど、と思いながら、優斗はその姿を思い出す。

メイド服でご主人様と呼ばれる、なんて言う経験をする気は一生無いつもりだった優斗にとって、あれは中々に衝撃的な出来事だった。そしてそれが段々と気にならなくなっていた事実に思い当たり、はっとする。

「お好きでしょう？」
「いや、待て。だからそれは誤解だと」
「じゃあ、どんな服がいいんですか？」
あっさりと話題が流れた事に、優斗は危険な雰囲気を感じた。
下手な事を言えば、今度は別の妙な性癖の持ち主だと決めつけられ兼ねない。そう考えた優斗は、答えを慎重に吟味し、口を開く。
「特定の衣服を着ている事を好む趣味はない」
「えぇぇ！？」
似合っていればなんでも良い。
優斗のそんな言葉は、フレイのわざとらしい悲鳴に遮られる。
「服を着ている事を好まない、なんて。
私に、この首輪だけを付けて外を歩けと言うのですか！？」
「いや、待て」
待てと言って待つ訳もなく、フレイは次々に言葉を続けていく。
「まさか、ご主人様にそんなご趣味がおありとは」
「ないない」
「でしたら、ここで全てを」
「脱がんで良い」
立ち上がった優斗が、べしっ、とフレイにデコピンを決める。
あたった瞬間、ぺろりと舌を出したフレイは、そのままベッドへと倒れ込む。その勢いでスカートが空気を孕み、ちらりと中が見えた。

「見えました？」
「残念ながらズボンしか、って、狙って見せるな、はしたない」
優斗が語調を強くしても、フレイは気にする事なく、くすくすと笑う。

そんな反応に、優斗はまたため息を吐きながら、ベッドに寝転がるフレイを見下ろす。

「最近、思ってたんですけど」
「ん？」
「私は何をすればいいのか、って」
外から見れば、奴隷であるフレイは、優斗の命令を聞く事が絶対にして唯一の仕事だ。

しかし、優斗は彼女を奴隷扱いしない。そして、何かを無理やりさせる事も少ない。

優斗からすれば、彼女の持つこの世界の常識や、野宿をする際の手際は重要であるが、それは一般的なスキルであり、替えが利く。

「もう私がいなくとも、ご主人様は困らないでしょう？」
「そんな事は」
実際、優斗がユーシアで学んだ知識に、ある程度の経験が足されれば、１人での行商は不可能ではない。

実用と言う一点に置いて、フレイの存在価値は少しずつ小さくなり始めている。

「私の役割は何なのかと考えた結果、思い出しました」
「？」

「そう言えばご主人様は、被虐主義者だったんだ、と」
「何する気だっ」
その誤解は解けただろう、と続けて訴えると、フレイはまたニヤリと笑う。

「そう言えばそうでしたね。今は幼女趣味なご主人様なんでした」
「それも違うっ。ってか、このやり取り何回目だ」
「クシャーナ様の事、お嫌いですか？」
「だから、クーナはそう言う対象じゃないって」
「子供はそう言う対象ではない、と言う事ですか？」
「そうそう」
「じゃあ、貧相で子供な私にも、手を出したりしないはずですよね？」
ベッドから起き上がり、にっこりと笑うフレイ。

あの事、実は怒っていたりするんだろうか。そんな風に考えた優斗に、冷や汗が流れる。

「いや、その。フレイの嫌がる事はしないつもりではあると言うか」
「私は奴隷ですから、何をしてもいいんですよ？」
「奴隷だからこそ、逆らえないのを良い事に、なんて言うのは趣味じゃない」
あれは誘われたんだから無理やりじゃないはず、と心の中で言い訳しながら、優斗はフレイを見つめ返す。

「やっぱりご主人様は変わってますね」
「否定はしない」
「では、私が奴隷である内は、ナニもする気はない、と思っていいですか？」
「そうなる、かな」

「クシャーナ様と同じく、妹みたいに可愛がって下さいますか？」
「あー、うん。判った」
「私も、クシャーナ様みたいに甘えますから」
何の対抗意識だ、と呆れる優斗は、１つ失念していた。
クシャーナは優斗の主観では本当に子供だが、フレイはそうではない、と言う事を。

「今夜はいっぱい、甘えさせて下さいね」
「……鬼か」
フレイに聞こえない程度の声でそう呟くと、優斗は肩を落とした。
楽しそうな笑みを浮かべるフレイを見て、最初からこの言質を取る事が目的だったと優斗が気づいた時には、後の祭りだった。
その日の夜、ひさしぶりにフレイによる夜這いが行われ、優斗は悶々とした夜を過ごす事になる。

次の日、早朝に出発した商隊が、すっかり野営の準備を終え、商人達が火の回りに集まりだした頃、それは起こった。

「俺の名はサイルス。商人・ユートに決闘を申し込む」
今日も誰かから話を聞こうと、フレイを伴なって火の傍までやって来た優斗は、いきなり浴びせられた言葉に唖然とする。
既に集まっていた商人達は、退屈な時間に良い見世物が現れた、とその様子を遠巻きにしている。

「俺が勝ったら、フレイさんから手を引け。わかったか！」
「ヤダ」
優斗が隣に立つフレイに視線を送る。
昨日に引き続き、今日も一日、御者台でフレイにからかわれ、遊ばれていた優斗は、少しだけ不機嫌だった。
「それでも男か！」
「勝ち目がありそうだからって、暴力に訴えるのは男らしいと？」
サイルスの手元に視線を落としながら、優斗は挑発的にそう告げる。
手に握らている2本の棒。これで立会えば、十中八九、優斗は負けるだろう。体格もサイルスの方が良いうえに、仕掛けてくると言う事から、それなりに自信がある事が伺える。対して優斗は、運動神経こそそれなりだが、武道どころか喧嘩の経験すらほとんど無い。
「なら、別の方法で」
「じゃあ、フレイに決めて貰おう。どっちについて行きたい？」
「もちろん、ご主人様です」
はいおしまい、とばかりに、優斗は周りに「お騒がせしました」と頭を下げる。
もちろん、それでサイルスが納得するはずがない。
「ちょっと待て！」
「ん、何か用？」
「だから、フレイさんを俺によこせ！」
もう少し考えて発言すべきじゃないかな、と思いながら、優斗は辺りを見渡す。

視界の中に目的の相手がいない事を確認した優斗は、ストレス発散とばかりに少しだけからかうような口調で返答し続ける。

「誰か、護衛の人を呼んで貰えませんか？」
「話を聞け！」
「人のモノを盗ろうした場合は、身柄を取り押さえられる、と決めた事すら忘れたんですか？」
「何が言いたい！？」
「私のモノを、突然よこせと言いましたよね？」
「ふざけるな！　俺は正々堂々と決闘を挑んだだけだ」
「それはお断りしました」
「俺はそれを認めていないっ」
真っ赤になって怒り叫ぶサイルス。

優斗の方は、この世界で商人が決闘を申し込まれたら、普通は受けるべきなのか、と言う疑問について答えの無い自問自答をしていた。

「決闘が嫌なら、大人しくフレイさんを解放しろ！」
「それは俺もして欲しいなぁ」
「なんだと！？」
「２回も断られてるんだよ、奴隷解放。なぁ、フレイ」
「はい」
「嘘だ！」
サイルスが、優斗の胸倉に掴みかかりそうな勢いで迫ってくる。

視界の端にライガットが歩いて来るのが見えた優斗は、少しだけ悩んだが、まだ大丈夫、と彼を視線で制する。

「お前が命令して、言わせているだけで、フレイさんだって解放を望んでいるはずだ！」
「元奴隷は色々と面倒だと言う事らしいけど？」
「俺が貰うから関係ない！」
貰う、とは嫁に貰う、と言う事だろう。

その発言に、優斗はあえて考えないようにしていた事を思い出す。
フレイに対し、奴隷解放を提案するのであれば、まず最初に彼女の不安を取り除く言葉をかけるべきではなかったのか、と。

「本人が望んでいない」
「嘘だ。
違うと言うなら、その鑑札を外して質問してみろ」

鑑札が無ければ、服従の強制力は弱まる。
商品奴隷の持ち主は、奴隷自信がそう認識した相手であり、優斗がフレイを手に入れる事が出来たのは、そのおかげだ。

「鑑札さえなければ、無理やりにでも奪える、とか考えてそう」
「さっきから、人を盗人扱いして、喧嘩売ってるのか？」
「高値で買ってくれるのなら」
「ふん。やっぱりフレイさんには俺の方がふさわしい」
その自信はどこから来るのやら。

でも、そろそろ潮時かな、と思いながら、優斗は今まで以上に視線をきつくし、サイルスを睨みつける。

「どちらにしても、お前にフレイを渡す気はない」

言い終えると同時に振り替えると、フレイがどこか嬉しそうな表

情で立っていた。

そのまま歩き去ろうとすると、後ろから肩を掴まれる。確認するまでもなくその相手が判ったが、優斗がそれを振り払う前に、その手が外れる。

「ライガットさん、待って！」

「暴力行為の鎮圧も、仕事の内だ」

「いや、俺の方もちょっと調子に乗って言い過ぎたかなーって」

ストレス発散にはなったが、それが原因で商隊に不和が発生するのはよろしくない。

そんな当たり前の事にようやく気付いた優斗は、自分がサイルスに負けず劣らず熱くなっていた事に気付き、大いに反省する。

「あー、サイルスさん。言い過ぎました。すいません」

「ならば、商人らしい決闘で決めると言うのはどうだ？」

突然割り込んで来たのは、商隊リーダーのミグルだ。

ミグルは、地面に引き倒されたサイルスが起き上がるのを確認してから、言葉の続きを発する。

「決闘内容は、次の街での商い勝負だ」

「いや、それは」

サイルスが言いよどんだ事に疑問を持った優斗は、その理由を考える。

「いいですよ」

「え？」

優斗の答えに、周りのざわめきが大きくなる。

もとより、何らの方法でこの状況を改善すべきだと考えていた優斗にって、今の状況はむしろありがたい。

「私が負けたら、フレイを奴隷身分から解放しましょう」

「だ、そうだが、サイルスくん」

「え、っと。でも、それは」

「フレイに不利な契約は押し付けない事と、荷物の半分を譲る、と言うのも付けましょうか？」

おぉぉ、と周りから歓声が上がる。

自信満々にそう言い放った優斗は、あえて今まで以上に挑発的に、サイルスに語りかける。

「もちろん、そちらがそれ相応のモノを賭けてくれるなら、ですが」

「っ～～～」

わなわなと震えるサイルス。

衆人環視の中、逆に挑まれる様な形になったサイルスは、怒りと焦燥で頭が一杯だ。

「挑まれた決闘を受けないなんて、男ならしませんよね？」

「……わかった。俺は、荷馬車と荷物、全てを賭ける」

何かを思いついたのか、サイルスは妙に落ち着いた風体でそう答える。

それに対し、周りから何度目かの歓声が沸きあがる。

「では、勝負は3日後、街に到着してからだ。

私が準備した物で、より多く稼いだ方の勝ち、と言う事でいいか

な？」
「私に異論はありません」
「俺に不利な勝負だと思うのですが。どうでしょう、ユートさん」
自分が有利な勝負を仕掛けようとした癖に、逆になったら文句があるようだ。
ちゃっかりしているな、と思いながら、優斗は何も言わず、営業スマイルを浮かべる。
「ふむ。経験の差があるのは確かだな」
「ミグルさんもそう思いますよね？」
「だがね、サイルスくん。無理に決闘を挑んだからには、多少の不利は受け入れるべきではないかな？」
「ぐっ」
その後、サイルスはどうにか条件を変更、もしくは自分有利な展開に持っていこうとし続けたが、最終的には決闘自体を無い事にするよりはと、ほぼ平等な条件での勝負が行われる事が決まった。
騒ぎが収まった後、火の回りに集まっていた商人達に謝罪の言葉と共に葡萄酒を一杯ずつ届けた優斗は、その足で自分の荷馬車へと戻っていた。
退屈な行商路で起こった愉快なハプニングに、ほとんどの者が好意的で、応援の言葉を何度か貰う程だった。
もちろん、商隊に不和を起こした事による悪影響を心配し、苦言を呈する者もいたが、優斗が真摯に謝ると、カップを出してくれた。

「よう、災難だったな」
「あ、ライガットさん。見張りはいいんですか？」
「今晩はこの辺の担当でな」
今日まで、野宿を行った回数は3回。巡回に来たのは、いずれも別の若者だった。

護衛場所は持ち回りなのか、と納得しながら、自分たちの荷馬車を見上げる。

商隊は基本的に決められた配置で列を組み、移動している。野営の際には、野営地の大きさにもよるが、ほぼそのままの配置で停車する。

「先ほどはお騒がせして、申し訳ありませんでした」
「若いんだから、あんなもんだろ」
「はは。あ、そうだ。一杯どうですか？」
「お、嬉しいね。是非貰おう」
優斗が自分のカップを手渡すと、フレイが「どうぞ」と瓶を傾ける。

ライガットはそれを一気に飲み干し、満足そうに唇を嘗める。

「うむ、美味い」
「それはよかった」
「ところで、若いの」
「何でしょう？」
「勝算はあるのか？」
初めてかけられた種類の問いに、優斗は少しだけ考える間を空ける。

優斗がこの世界で商売を始めてから、約2か月。周りの評価とは裏腹に、優斗にとってこの勝負は不利であると言える。

優斗が適正価格を把握しているのは、現在まで取り扱った商品と、せいぜい消耗品くらいだ。この世界でずっと生活して来たであろう、サイルスよりも、準備された品について知識がない可能性が、とても高い。

それ以外にも、優斗が品物を直接売買する事にあまり慣れていない、と言う事がある。

何を売りにして良いか判らない商品を、適正価格が判らないまま売るのは愚の骨頂であり、まずそこから調べなければいけない優斗は不利である、と言う訳だ。

「なるようにしかなりませんよ」
「自信がありそうに振舞ってたが、内心はそうじゃなかっただろう？」
「判りますか？」
「伊達に歳は食ってねぇからな」
ライガットからカップを受け取った優斗は、それをフレイに手渡す。

優斗が視線で荷馬車を示すと、彼女はその意思に従い、荷物を片付ける為に荷台に登る。

「正直、勝ち負けはどうでもいいもので」
「ほう。商人の癖に、商品がどうでもいいたぁ、景気がいいな」
「奴隷で無くなっても、付いて来てくれると確信しているだけです

よ」

居なくなったらそれはそれで、と思いながら優斗は視線を荷馬車に向ける。

ライガットもそれに釣られて視線を移すと、フレイが荷台の中へ入っていく姿が見えた。

「言うねぇ」

「でも、そうなったら、別の名目を準備すべき、なんでしょうねぇ」

優斗は、それがそんな状況に陥れた自分の責任であり、果たすべき義務だから、と考えた。

それがフレイの嫌った行為であると知らずに。

「それはまぁ、お前次第だな。ところで、俺は何でここに来たんだったか？」

「いや、それを俺に聞かれても……」

「おぉ、そうだ。

あの小僧が何か仕掛けてくるやもしれん。しばらくはここを重点的に見張る事にするから、よろしく頼む」

「それはありがたいですけど、大丈夫だと思いますよ？」

サイルスは、優斗の挑発で熱くなりはしたが、最終的にはかなり落ち着いて勝負の詳細を聞いていた。

その一部始終を見ていた優斗は、彼に何か策があるのだと確信していた。

自暴自棄で無く、何かによって裏打ちされた自信があるからこそ、全財産を賭けると言う言葉を曲げなかったのだろう。

仮に鑑札の付いた奴隷を無理やり奪っても、解放どころか街でま

ともに生活する事すら難しい。それでも良いと奪うにしても、今すぐに行えば捕まる可能性が高い。

「来ないに越した事はないがな。俺は俺で仕事をするだけだ」
「そうですね。よろしくお願いします」
優斗はもう眠る事を伝えると、フレイの居る荷台へと移動する。

そして荷台で待ち構えていたフレイにより、2人は1つの毛布に包まって寝る事になる。

何事もなく夜が明け、また1日が過ぎる。

サイルスに「正々堂々と戦いましょう。負けませんからね」と言う宣戦布告を受けた以外、その日は概ね平和に過ぎ去った。

いつも通り野営地で話を聞こうとして、逆に昨日の件で質問攻めにあった優斗は、早々に輪を抜け出し、眠る準備をしていた。

「おやすみ」
「おやすみなさい、ご主人様」
腕を枕にし、抱き着いてくるフレイに少しだけどぎまぎしながらも、優斗は目を閉じる。

今まで野宿の最中に絡んで来る事はなかったのだが、昨夜からこの調子だ。商隊に参加しているので、火の番として夜中起きている必要がない事も、理由の1つだろうと優斗は考えていた。

さすがに、布一枚向こうに人が居るかも知れない状況で、それ以

上のお誘いをかけて来る事がない事だけが、優斗にとって救いだった。

大きな音で目が覚めた優斗は、外が妙に明るい事に気付いた。
次いで、物音の正体が人の声である事に気付き、その内容を把握し、一気に眠気が吹っ飛んだ。

「燃えてるぞ！」
「盗賊の襲撃だ！　逃げろ！」
「火の手が移る前に移動しろ！」
優斗は慌てて荷馬車から飛び降り、辺りを見渡す。

各々の寝場所から飛び出し、火の手があがっている方向へ視線を向けた商人達は、一瞬だけ呆けた表情をするが、すぐに御者台と向かう。

「ユートさんも早く！」
「サイルスさん？」
「火を付けたヤツはきっと盗賊の仲間です！」
内部から手引きした人間がいる。

ならばここに居る全ての商人が疑う対象であり、この場に残ると言うのは、下策だ。
少しだけ冷静さが戻った優斗は、一先ずここを離れるべきだと判断し、街道をどちらに抜けるべきかを考え始める。

「わかった。君はどうする？」
「自分の荷馬車へ向かいます」

そう言ってサイルスは、火の上がっている方角へ視線を向ける。

それは無謀だ。

そう思っても彼を止める権利はない。そう考えた優斗は、御者台へ登ろうと、振り返る。

「決闘はちゃんと受けて貰いますからね」

「あぁ。お互い、生き延びられたらな」

「ではのちほ、どわっ」

不自然に途切れた言葉に、優斗は再度振り返る。

するとそこには、地面に倒れたサイルスと、武器を構えたライガットの姿があった。

「犯人はコイツだ！　全員、慌てず火を消せ！」

血の付いた手斧を持ち、ライガットが叫ぶ。

サイルスは、叫ぶ為に出来た隙を利用して、ライガットから離れる様に立ち上がる。

「ライガットさん、突然何を」

「火が付いてんのはソイツの荷物だ。自分で――」

「手引きしたのは護衛だ！　全員、早く逃げろ！」

サイルスの叫びに呼応し、商人達が我先に逃げ出す。

そんな中、優斗はどうすべきか、混乱する頭で考えていた。

サイルスが犯人であれば、その言葉に従うのは危険だ。

ライガットが犯人であれば、逃げ出そうとした瞬間、背後から切りかかられる可能性がある。

「ユートさん、逃げてください！」
「行くな、罠だ！」
どちらが真実で、どちらが嘘なのか。
判断を誤れば、フレイにまで危険が及ぶ。
そんな恐怖に晒された優斗は、じりじりと焦りを募らせながら、
無為に時間を消費する事しか出来なかった。

分の悪い賭け（後書き）

どちらが正解なのか、もしくはどちらも不正解なのか。
例え正解を引いたとしても、確実に逃げられる訳でもない状況は恐ろしいですね。

残った者

サイルスとライガットの睨みあいを見つめる優斗の耳には、様々な声が聞こえてくる。

早く逃げろ。ソイツを捕まえろ。無暗に動くな。護衛にやられた。助けてくれ。火を消せ。

「若いの。その小僧に近づくなよ」
「荷物を奪う為に、混乱に乗じて皆殺しにするつもりか！？」
「黙れ。叩き切ってやる」
少し迷ったが、優斗は2人から視線を外し、辺りを見渡す。

逃げる者。留まる者。隊列の関係上、逃げ出したくても逃げ出せない者もいる。

「ライガットさん、一先ず武器を納めて下さい」
「んな事したら、逃がしちまうだろうが！」
「ユートさん、盗賊に何を言っても無駄です！」
「盗賊はてめぇだろうが」
「あぁ、もう」
どちらが怪しいかと聞かれれば、どちらも怪しい、と優斗は答えただろう。

それでも何か解決策は無いかと、頭を働かせる。
サイルスがここに居るのは怪しいが、偶然、別の場所で寝ていて、フレイを気に入っている事から、まず荷馬車でなく、こちらに来たと言う事はあり得る。

もちろん、血の付いた手斧を持つライガットもかなり怪しいが、サイルスが盗賊であれば職務を全うしているだけと考えられる。ただ、サイルスに怪我も出血も見当たらない事から、他の誰かを切った返り血である可能性が高い。

「ユートさん、何か武器になる物をっ」
「そこで大人しくしてろ！」
怒声と共に、ライガットが踏み出す。

そして武器を振りかぶった瞬間、鈍い音と共に彼の動きが止まる。

「止めろ！」
「ちっ、バカが」
ライガットの後ろには、大き目の石を構えた若い商人が1人、立っていた。

彼もこの商隊に参加している商人であると優斗には判り、混迷する状況にまた頭を悩ませる。

「私達も加勢しましょう」
「フレイ！？」
荷馬車から飛び降りたフレイは、その手に長い金属棒を持っている。

サイルスに向かって歩き出すのを慌てて止めようとする優斗を、フレイは手を上げて制してからゆっくりと頷く。それに対して反射的に頷いてしまった優斗は、その意味が「任せて下さい」と言う内容であると気づいて慌てるが、既に遅い。

「サイルスさん、これを使って下さい。ご主人様はナイフを」

「フレイ、下がって」
「助かります」
フレイは棒の端を持って、サイルスに向ける。

サイルスが棒を掴む為、視線を逸らした瞬間、ライガットが再度踏み出す。
そして振り上げられた手斧は、またしても振り下ろされる事なく、動きが止まる。

「えいっ」
「がげっ！？」
ライガットを迎撃する為、サイルスは思い切り棒を掴もうと、手に力を込めた。

そしてサイルスが棒を握る寸前にフレイがギフトを発動した結果、サイルスは膝を折って地面に崩れ落ちた。

「もう一回、えい」
倒れ込むサイルスに棒を押し付けたフレイは、再度電撃を加える。

ライガットも、石を構えている若い商人も、唖然としている。
突然の事に思考が付いて来ないのは優斗も同じだったが、それでも予想出来ていた分だけ、復帰も早い。

「フレイ、ストップ」
「えいっ」
「だから止め！　戻って来い」
「はーい」
軽い調子のフレイが、今度は素直にその場を離れる。

フレイが戻って来たのを確認すると、優斗はライガット達から視線を外さないようにしながら、荷馬車に近づく。

「ライガットさん、これを」
「お、おう。判った」
こうなれば、フレイの判断を信じて行動しよう。

そう決めた優斗は、サイルスを捕縛する為の縄を取り出し、ライガットへ投げる。

「火消し、手伝いに行ってください」
「は、はひぃ」
次は自分の番かと怯えていた若い商人が、慌てて火の手に向かって走り去る。

次は事情確認と考え、優斗は聞くべき事をざっくりと決めると、フレイの肩を抱き寄せながらライガットに向き直る。

「ライガットさん、あの火はサイルスさんの荷物から？」
「あぁ。コイツが自分で付けた」
現行犯ならば何故そこで捕まえなかったのか。

そんな疑問が顔に出ていたのか、優斗の方を向いたライガットは、はっ、と短く笑い、説明を続ける。

「仲間が居たんだよ。で、足止めしようとしたから切った」
「殺したんですか？」
「あぁ」
血がべっとりとついた手斧から、予想はしていたが、優斗は少しだけ落ち込んでしまう。

「逃げた人達は大丈夫でしょうか？」
「たぶん、ダメだろうな」
「……何故ですか？」
「聞いた事がある手口だ。護衛から引き離して、暗闇の中で襲う。街道に縄を張れば、荷馬車なんぞ簡単に止められるからな」
確かに、この暗闇で街道に張られた縄に気づくのは困難だろう。

そう言えば、と優斗はもう１つ気づく。
ライガットが犯人ならば、火事など起こさず、全員の寝込みを静かに襲った方が効率的だ、と。

「こっちは陽動って訳ですか」
「火の手が上がったらこいつが逃げるように煽る予定だったんだろうな。それと死体の１つでもあれば、普通は逃げる」

火事と殺人が起こった現場に残りたくない。その心理は優斗にも十分理解出来る。

「とりあえず、手斧をこっちに」
「なんだ、まだ俺を疑ってるのか？」
呆れた表情のライガットに、優斗は強張った表情で、なんとか笑って見せる。

「血、洗い流さないと色々と誤解を生みますよ」
「これだけ洗っても無駄だろうなぁ」
暗さで気づかなかったが、手斧だけでなくライガット自信も血まみれだ。

その姿から感じる恐怖から目を逸らしながら、優斗はこれからに

ついて考えていた事を実行するべく、口を開く。

「ライガットさんの雇い主はミグルさんですよね？」

「あぁ。護衛は全員そうだぞ」

「そうですか。ところで、１つお願いがあるのですが」

そう言って、優斗は袋から銀貨を１枚取り出す。

それを手のひらに乗せると、ライガットの方に向け、営業用のスマイルを浮かべる。

「これで、ミグルさんが見つかるまで、私に雇われて下さい」

「は？」

「まだ、侵入者が居るかも知れませんし。どうですか？」

ミグルが逃げ出している可能性を口にせず、優斗は決断を迫る。

盗賊に囲まれているらしい現状を打破する為に、護衛の存在は必須だ。だが、雇い主であるミグルが逃げていた場合、彼らがどう行動するのか、優斗には判らない。

ならば口頭の約束であっても交わしておくに越した事はない。上手くいけばもしもの場合にこの商隊での発言力を増す事が出来るし、身を守ったり、他の者への抑止力にもなる。

「契約が切れる前に他と契約する気はないぞ」

「そんな大仰な事ではないですよ。

これはミグルさんのところに案内して貰う為のチップです」

ライガットの探る様な視線に、優斗はひたすら営業スマイルを返す。

そうして睨みあっている間に、火の手が消え、灯りと共に人影がこちらにやって来るのが見えた。

「ライガットさん、火は消えました、って、女連れの兄さんも一緒か」

「どうも、ラズルさん。丁度いいところに」

ライガットから視線を外した優斗は、護衛3人組のリーダー格であると言う青年に向き直る。

ここは多少強引であっても押しの一手、と考えた優斗は、表情を真剣なモノへとシフトする。

「ミグルさんは無事ですか？」

「ん、いや。見てないな」

「では、しばらく私が指揮を執ります。構いませんか？」

「あ、いや、えっと？」

「ミグルさんが見つかるまで、私が雇い主だと思って下さいと言う事です。そしてこれは手付金です」

そう言って優斗は、戸惑うラズルに公国銀貨を3枚握らせる。

迷っているラズルに対し、考える隙を与えないようにと優斗は畳み掛ける様に言葉を続ける。

「ミグルさんが見つかれば、それはチップとして差し上げます」

「よく判らないがわかった」

ミグルが逃げていなかった場合、優斗は単純に損をする事になる。

しかし、彼はそうなって欲しいと心から願っていた。保険は役に立たない方が良い事なのだと、優斗は十分に理解している。

「見つからなかった時は、次の街まで私が雇うと言う事で良いですね」
「おう、って、それは――」
「手付金、確かにお支払しましたからね？」
何か言いたげなラズルは、しかし手の中の銀貨を付き返す事はなかった。

一度手に入れた銀貨が惜しい、と言う思いが無かった訳ではないが、それ以上に、否定の言葉を吐けば、この状況を許した自分たちを糾弾する言葉が返って来るのではないかと恐れたからだ。

「ライガットさんも、それでいいですか？」
「悪いが、俺は無理だ」
拒否される可能性も考えていた優斗は、驚きはしなかった。

しかし出来れば説得したい、とライガットの方へと体ごと振り向いた瞬間、どさっ、と言う鈍い音が聞こえた。

「どうしたんですか！？」
慌てて駆け寄った優斗の声に、反応はない。

その隣にラズルがやって来るまでの間、徐々に明るくなる視界は優斗にある事を気付かせた。
暗闇では返り血に見えたそれには、ライガット自身が流したモノも混ざっている様だ、と。

「フレイ、水とお湯と布っ」
「はい」
「手当は俺がします。松明、持ってて下さい」
ラズルの言葉に頷いてから、優斗は松明を受け取る。

優斗に医学知識はほとんどない。
ならば今、自分に出来る事はと考え、出来る限りの物資の提供と、言われるままに手伝いをする事だけだと結論する。

「ご主人様、布と水です」
「1枚地面に引いて、その上に並べて。
ラズルさん、必要なモノがあれば言って下さい」
「じゃあ、包帯と薬を」
「判りました」
松明を地面に固定し、フレイに必要に物は惜しまず出し、手伝える事は手伝う様に指示を出す。

先ほどまで火の手が上がっていた方へと走り出した優斗は、残りの護衛2人に事情を説明して手伝いを頼み、残っていた商人から薬と包帯を手に入れると急いで荷馬車の方へと戻る。

一応とは言え護衛と言う仕事をしているだけあって、3人はそれなりに手際よく、ライガットに治療を施して行く。

「後は竜神様に祈るしかない」
止血を終え、血のついた包帯で全身を包まれたライガットを見下ろし、ラズルがそう呟く。

もう出来る事はない。
それを意味する言葉を聞いた優斗が考えた事は、すぐにでも病院に連れて行かなければ、と言うものだった。

「一刻も早く医者に見せる必要があります。急いで商隊をまとめなおして、街へ向かいましょう」

「そいつら、本当に信用できるんですか？」
その声に振り返ると、そこには見覚えのある若い商人が2人、立っていた。
その1人が包帯と薬を分けてくれた商人であると判ると、優斗は頭を下げ、礼を言う。
「いや、代金はちゃんと貰ったんだからそんな」
この状況で吹っかける事なく薬を売ってくれた彼は、キュイと言う名だ。
「それより、この後どうするんですか？」
「残った人間を全員集めて、街へ向かう」
「でも、この中に盗賊の仲間が居る可能性もありますよね？」
その指摘に、優斗は転がしたまま忘れていたサイルスの存在を思い出し、その姿を探して視線を彷徨わせる。
しかし、どこにも見当たら無い。
「サイルスがどこ行ったか知らない？」
「アイツなら、森の方へ逃げましたよ」
「……アイツ、火事を起こした犯人なんだけど」
その言葉に、キュイ達は驚いて目を丸くする。
ライガットの傷は、足が一番深く、次いで肩、腹が酷かった。そんな状況で完璧に縄をかけて置く事を求めるのは酷だ。ならば、これはライガットの傷に気付かず、知った後もきちんと捕縛しておかなかった自分の手落ちだと、優斗は後悔する。
「ライガットさんの話から推測して、暗いうちの移動は危険だと思

う」
沈む気持ちを切り替え、優斗は今後の方策を口にする。
向けられる6つの視線のうち、2つに視線を向けると、確認の為の言葉を口にする。
「ここに残っているのは2人だけ？」
「そうです」
「にしては、荷馬車が多くないか？」
湯を沸かす為のたき火のおかげで、この周辺は多少明るい。
優斗が再度視線を巡らせると、見える範囲だけでも荷馬車が3つある事が判る。
「荷馬車が動かせないから馬で逃げたヤツとか、走って森の中に逃げたヤツとかもいましたんで」
「あぁ、なるほど」
だから違和感なくサイルス見逃したのか、とズレた納得をしながら、優斗は質問を続ける。
「ミグルさんは？」
「荷馬車を見に行ったらありませんでした」
「逃げたか」
彼だけでなく、この商隊のほとんどの全員と、優斗は話をした事がある。
それはサイルスとの一件で謝罪に回った事が原因で、今回の件も彼が原因だと考えると、今さらながら怒りが沸き上がって来るのを感じる。

優斗はその怒りを表に出さない様、なんとか抑えながら、冷静になれと自分に言い聞かせて先を続ける。

「ラズルさん達は、私が雇う事になりました。そうですよね」
「あぁ、そうだな」
「キュイさん」
「なんですか？」
「次の街まで、私の指示に従う気はありますか？」
それは質問の形を取っているが、実質的には脅迫に近い。

盗賊に襲われたこの状況で、優斗は身を守る最大の手段を独占した。わざわざそれを告げてからの質問は、意に添わなければ、ここに捨てていく、と言っているに等しい。

「……判りました」
「ありがとうございます。
では、2手に別れて荷馬車と馬の数を数えて来て下さい。生きている人がいないかの確認も」

護衛1人と商人1人を1組としたチームで調査した結果、焼けた荷馬車を除けば、荷馬車が7つと馬が5頭残っている事が判った。

正確には荷馬車と馬のセットが4つに、馬だけ無い荷馬車が3つ。内、1つは車輪が壊されていた。残りの馬1頭は、護衛用のものだ。

「護衛の皆さんって、御者は出来ますか？」
「出来るが、持っていく気なのか？」
「盗賊にくれてやるのも勿体無いですからね」
他人の物に手をつけるのは初めてではないが、抵抗が無い訳ではない。

しかし、今は不安を煽らない為にも堂々としていなければならないと考え、優斗はさも当たり前のように話を続ける。

「それに、次の街で逃げ延びた人に会うかもしれません」
「なるほど、そう言う事ですか。でも、そうでない場合は？」
「この場に居る全員に分配します」
その言葉に対する反応は、様々だ。

少し嬉しそうにする者、複雑な表情を浮かべる者、無表情になる者。

それでも優斗の意見に異論はない様で、誰も口を開かず、次の言葉を待つ。

「ですので、今から荷物を積み替えます」
「壊れた荷馬車からですか？」
「それもあります」
そう告げてから、優斗は地面に大きな丸を書いていく

1つ書くと間を空け、次は間を空けずに固めて3つ書く。そして最後に、また少し離して1つ。

「ラズルさん達護衛が乗る荷馬車には、一番前と後ろを走って貰う予定です。そして後ろの方の荷馬車には安い荷物を集めます」
「どうしてですか？」
「盗賊に追われた時、荷台を切り捨てて逃げる為です。
逃走中に馬に飛び移って荷台と繋がっている部分を切る、と言う事は可能ですか？」
「出来なくはないだろうけどなぁ」

落ちたら死ぬなぁ、と呟くラズルに、優斗は別の方法は無いかと考え始める。

「あほかラズル。最初から馬に跨ってりゃいい事だろうが」
「おぉ、その手があったか。じゃあ、お前に任せる」
「な、しまった！？」
「あほはお前だな」
白々しい反応を見せるラズル。

どうやら気づいていて口にしなかったらしい、と気づいた優斗は、護衛3人の仲の良い会話を無視して、説明を続ける。

「高い物はこっちの3つに移します」
「残りを先頭に入れる訳ですか」
「その通り」
最悪、先頭の荷馬車も捨てる。

街道が塞がれば時間稼ぎになるし、中身を漁ってくれれば足止めにもなる。それだけで満足して追う事を諦めてくれれば、最高だ。

「では、その人はどうするんですか？」
キュイがライガットを指差す。

護衛3人が息をのむ。
自分で動けない怪我人だと言うだけもで見捨てられる要素としては十分だ。それに加え、ライガットは護衛であり、守る側の人間であるはずだ。

「もちろん、連れて行きます」

その言葉に、護衛3人は安堵し、商人2人が少しだけ顔をしかめる。

2人の反応は、人、しかも寝かせておかなければならない怪我人を乗せれば、それだけ積める荷物も少なくなる。故に彼は自分ともう1人のどちらの荷台にライガットを乗せる様、優斗が指示すると思ったからだ。

「面倒を見る人が必要だと思いますし、私の荷馬車に乗せましょう」

驚く商人2人の顔を見て、優斗は苦笑する。

ちらりと隣のフレイを見ると、何故か笑顔で手を振っていた。

「まず、ラズルさん達はライガットさんの移動をお願いします。キュイさん達は荷物と荷馬車の移動を。あ、薬と包帯、ついでに余っている毛布があったら持ってきて下さい。

質問が無ければ、早速作業を開始して貰います」

優斗がそう告げると、5人はお互いに顔を見合わせてから、のろのろと立ち上がる。

唯一、隣のフレイだけがしゃっきりと立ち上がると、優斗の真横で中腰になる。

「みなさん、がんばって下さいね」

全員が声のした方へと振り向く。

それを予想していたフレイは、優斗の腕を抱きかかえると、しなを作ってこう告げた。

「がんばった人には、ご主人様にお願いして、ちょっとだけ、サー

ビスしてあげますからね？」

その言葉を聞いた5人の反応は、とても判りやすいモノだった。

優斗の腕を包む胸と、中腰のまましな垂れかかっているせいで突き出されたお尻に視線を向ける。そしてごくりと生唾を飲み込むと、目の色を変えて、行動を開始する。

この国の基準で言えば、フレイの容姿と体型はギリギリ子供の範囲に入る。にも拘わらず、その様な反応を見せる5人に、優斗は「若いなぁ」と言う感想を抱く。

「サービスに、お酒でも振舞いましょう」

変な事なら許可しないぞ、と言う言葉よりも早く、耳元で囁かれた言葉に、優斗の口元が引きつる。

「女って怖ぇ……」

「教育の賜物です」

5人の若者を手玉に取る教育ってどんなだ。

優斗はそんな風に考え、腕に感じる感触を極力気にしないようにしながら、先ほどから気になっていた事を口にする。

「そういや、なんでサイルスが犯人だって判ったの？」

「判りやすく話題を変えてきましたね」

まぁいいですけど、とそれに乗ってくれた事に感謝しながら、優斗は次の言葉を待つ。

そんな優斗に、フレイは腕を解放するどころか、更に身を寄せ、囁くように耳元に口を寄せる。

「ちょ、近い」
「色々と理由はありますけど、強いて言うなら目ですね」
優斗の抗議を無視し、フレイはそのままの体勢で説明を続ける。
「ライガットさんは、優しい、子供を見る様な目で私を見ていました。
サイルスさんの方ですけど、あれは奴隷を見る目でした」
「ん。それってなんかおかしい？」
フレイは奴隷で、サイルスもそれを知っていたはずだ。
そう考えながら、彼がフレイに対し、何と言っていたかを思い出す。
「確かに、口説く相手を奴隷扱いって言うのも変な話か」
「一夜限りと言うのでしたら別ですけど、あの金額で買い取ると言うのは不自然です」
「熱心に口説いてたしねぇ」
その発言に、フレイは少しだけ距離を取り、優斗の目を見つめながら呆れ顔でため息を吐く。
反応の意味が理解出来なかった優斗が困惑するのを見て、フレイの表情に、更に呆れの色が増していく。
「えーっと？」
「ご主人様。私はずっと、傍にいましたよね？」
「そうだっけ？」
「サイルスさんが売ってくれと言ってからは、間違いなく」
日中はずっと御者台に並び、村を出てからは夕方も優斗の後ろを

着いて来ていた。夜、寝る時も同じ場所。

「ですから、ご主人様も知っているはずです。
サイルスさんが私を口説いた事はない、と」

優斗は思い出す。
最初の、好きです、と言う言葉は、お嬢さんを下さいと優斗に告げたものだった。その後も、基本的に優斗に話しかけ、売る様、もしくは解放する様に求め続けていた。

「……ホントだ」
「最初は、転売目的かと思っていました。
実際には違ったみたいですけど」

フレイには鑑札が付いており、そのままでは転売出来ない。だから、盗む立場から考えれば、それをどうにかする必要がある。
そして後から荷物を奪うのであれば、どんな高価格で購入しても関係がない。そうと知れば、優斗にもサイルスの行動が如何に怪しかったかが理解出来る。

「じゃあ、なんでこのタイミングに襲って来た?」
「勝負に勝つ自信がなかったからだと思います」
盗賊が、商人相手に商売で勝負して、勝ち目がどの程度あるのか。

実際には逃げる際に手助けをし、その恩でフレイを売るように迫る腹積もりだったのだが、彼らは知る由もない。

「それに、売れなくとも使い道はありますから」
「……」
優斗が奴隷管理局にフレイを登録した際、脱走奴隷は訴えれば始

末出来ると言う説明を受けた。

訴えられない状態にすれば、駄目になるまで楽しめる。逃がしたとしても、それまでの間は楽しめる。救出しようとすれば更に楽しめる時間は伸び、運が良ければ次の獲物になる。そこまで想像した優斗は、込み上げてくる吐き気を噛み殺しながら、フレイの頭を撫でる。

「助かった。
でも、本気で口説かれてないって言うのは先に教えて欲しかったかも」

知っていれば、自分もサイルスを疑う事が出来たかもしれない。あの時点では彼の方が信じられると思っていた優斗は、自分が間違った選択をしそうだった事を思い出し、身震いする。

「相変わらず、ご主人様は鈍いですね」
不満そうに、そしてどこか呆れ顔のフレイは、優斗の反論を待つ事なく、次の言葉を発する。

「転売目的だと思ったって言いましたよね？」
「言ったね」
「それが本当なら、相場の二倍出しても利益が出るんですよ？
ご主人様がそれを知れば、私を売らない保障がどこにあるんですか」

優斗はフレイを売る気はなく、フレイはそれを知っている。
だからこの言葉は、真実ではない。

「だから心配ならさ、」

「鈍いご主人様には直接的なアプローチしかないですね。街についたら、いっぱいご奉仕する事にします」
「マジで止めて」
「私では不満ですか？」
「手ぇ出すの禁止したのはフレイでしょうが」
「さぁ、なんの事でしょうか」

サイルスが交渉に来る度に嫉妬する優斗の姿が嬉しかったからだと言う事は、彼女だけの秘密だ。

残った者（後書き）

相変わらず、色々な意味で強いフレイさんでした。

そしてこの判断が導く結果は如何に。

医療事情

明るくなってすぐに出発した優斗達一行は、途中、幾つかの壊れた荷馬車を発見するも、止まる事なく街を目指した。

まだ生きている人がいるかもしれない。だが、それ以上に盗賊の罠である可能性が高い。そんな中、優斗がそう決断した事に異論を挟む人間はいなかった。

「なんとか無事、街まで行けそうですね」

「まぁ、予想通りではあるけど」

盗賊は、商人達を護衛から引き離す為に策を弄した。

ならば、護衛を引き連れた一行を襲う可能性は低い。そう考えてはいたが、フレイを連れている事で二重の意味で、リスクを承知で襲われる可能性を優斗は考えていた。

「街に着いたら宿取って、病院探さないと」

「病院、とは？」

フレイの言葉に、優斗ははっとする。

名前は違えど、この世界にも医療施設はあるはずだ。しかし、その技術レベルと治療費を、優斗は知らない。

「ライガットさんの怪我、診てくれる場所、あると思う？」

「市壁の無い街ですし、お医者様はいないかもしれませんね。でも、薬師の方くらいなら」

小さくもない街に医療施設が無い。その事実に、優斗は驚き、それ以上に焦った。

ライガットの傷は、それなりに深い。
もし内臓に傷を負っていた場合、治療が可能なのか。そもそも、外科治療や縫合の技術は存在するのか。優斗は、思っていた以上に自分が、今まで培ってきた常識の感覚に囚われていると気づく。

「そういえば、ライガットさんの娘さんが次の街に居るそうです」
「そうなの？」
「ラズルさんからそう聞きました」
何時の間に聞いたんだ。

優斗が口にしなかったその言葉を、フレイは表情から目ざとく察知し、微笑む。

「儲け話だけが情報じゃありませんよ？」
「……返す言葉もない」
商売以外の、もっと他の事も気にしていれば、サイルスの件も見抜けたかもしれない。

これまでに何度も、目先の商売ばかりに気を取られ、後々に残るそれ以外の事象を軽んじていた事を自覚していた優斗は、素直に反省する。

これからは、儲け話に飛び込む前にフレイに相談して見ようかな、と考えていると、開けた視界に町並みが見え始める。

「ようやく到着か」
「キルンの街、でしたか？」
うん、と肯定した優斗は、緊張が解けてしまい、疲れが湧き出てくる。

3人だけの、しかも臨時でしかないとは言え、商隊リーダーになった優斗にとって、この2日間は神経をすり減らすのに十分な時間だった。フレイが適度に話しかけ、それを緩和してくれていたとは言え、優斗の精神はそろそろ限界に近い。

「あの辺まで行ったら、一旦止まろう」

誰に向けた訳でもない言葉に、当然返事はない。

優斗は手綱を握る手に力を込め、馬を先頭へと進ませる。

市壁があればその付近で止まる事になるのだが、ここ、キルンにはそれが無い為、誰かが指示する必要がある。

本格的に街に入らず、道を避けて5つの荷馬車が停められるスペースを見つけて荷馬車を停めた一行は、各々が御者台から降りると、優斗の方へと注目が集まる。

「えーっと、一先ず、この商隊はこの街で解散する予定です。この後、宿を取って休みます。荷物とその分け前についてですが」

「その事についてなんだが」

優斗の言葉を遮ったのは、護衛の1人であるラズルだった。

彼が他の2人に目配せすると、どちらも口元を引き結んで頷く。

「あんな事になって、荷物を掠め取ったとなれば、信用に関わる。だから報酬も、前払い分だけで、それ以上を貰う気はない」

決意を秘めた視線。

それが良い意味で予想外だった優斗は、何時もの営業スマイルを

顔に張り付けると、護衛3人に向き直る。

「それはミグルさんの依頼に関してであって、私の依頼はきちんとこなして頂きました」

「あれは自分たちの尻拭いみたいなもんで――」

「それよりも、ラズルさん達に頼みたい事があるんですよ」

そう言って、優斗は腰に提げている袋を手に取る。

そして優斗は、袋を手のひらに乗せると、ラズル達の居る方へと差し出す。

「盗賊に襲われた人達を、探しに行って欲しいんです」

それは、道中で何があっても馬を止めないと決めた時から、優斗がずっと考えていた事だ。

そこに助けを求める人間が居そうであっても、実際に見覚えのある顔が助けを求めていても、全て無視する様、優斗は指示を出した。そして実際、壊れた荷馬車の中を検める事をせず、ここまでやって来た。

そうして居れば、助かった命もあるかもしれない。にも関わらず、優斗は自分たちの安全を優先した。

「他にも何人か雇ってもいいです」

優斗が放り投げた袋が、放物線を描いてラズルの手の中に納まる。

ラズルは優斗の顔色を確認してからそれを開くと、中身を見て表情が青ざめる。

「多すぎだ！」

「人を雇って、馬を手配して、見つけた人に1枚ずつ渡して貰う予定なので、そのくらいは必要だと思いますよ？」
優斗が投げ渡した袋には、公国金貨が１０枚以上入っている。
それは優斗の総資産の1割以上ではあるが、持ってきた他の荷物を売れば、十分すぎるほどにお釣りが来る量でもある。
「俺たちが持ち逃げするとは思わないのか？」
「金貨１０枚は大金ですし、その可能性は考えました。
でも、それはどうでもいいんです」
優斗の言葉に、護衛の3人だけでなく、キュイ達までも目を見開いて驚く。
前者は発言自体に、後者は金貨１０枚を「どうでもいい」と言い切るその態度に。
「私は彼らを助ける努力をした。その事実があれば十分です」
そう言いながらも、優斗は目の前の彼らはきちんと依頼を完遂するだろうと予想していた。
金貨１０枚程度では、3人が一生暮らすのは確実に不可能だ。ならばまだ働く必要があり、彼らは仕方なく護衛をしている程、選べる仕事がない。
もちろん、優斗なりに彼らの人となりも考慮した。
「これは、彼らの顔を知っている貴方達でなければ出来ない仕事なんです」
これだけ煽れば大丈夫だろう。

そう判断した優斗は、護衛達の視線から目をそむけ、今度は商人2人に向き直り、荷馬車を指差す。

「話を戻します。お2人の荷馬車に積み込んだ荷物は、そのまま持って行って構いません」

「ホントですか!?」

思わず大声を上げたキュイに、優斗は苦笑する。

盗賊に襲われた後に積んだ荷物は、かなりの量になる。高い物を優先して積んだ事もあり、それを売った際の儲けを考えれば当然の反応だ。

「その代り、お願いがあります」

「なんでしょう?」

前言を撤回されるのではとそわそわしている2人に、優斗はにっこりとほほ笑む。

「ある噂を、流して欲しいんです」

そんな事であれだけの物が手に入るのかと更に興奮する2人に、優斗はこう説明した。

南の方で機織りの新技術が開発された。その為、布の値段が下がるかもしれない。

これに対して商人2人は、嘘の情報を流す事で市場価格を操作し、儲け話を作り出そうとしているのだと考えた。実際には、ある商会に優斗が提供した技術は彼が開発したのではなく、既存の物であると思わせる為の謀略の1つだ。

「そんな事、お安い御用です」

「あんまり確信的に話さず、噂程度でお願いしますね」
それを聞いたキュイは、にやりと笑って首肯する。

これが嘘だと信じ込んだキュイが、噂で一時的に値下がった布を買い取ろうと画策し、ロード商会の売り浴びせに手を出して大損する事になるが、それはまた別の物語である。

その後、流れで安い荷物を載せた荷馬車と積荷の所有権を得た優斗は、全員分の宿を確保すると、フレイを引き連れて部屋へと向かう。

護衛3人のうち2人は、薬師が居ると言う場所へライガットを運ぶ準備をしており、もう1人は雇う人間を探すのだと酒場へと出かけ、商人2人は同じ様に部屋へ向かった。

「薬師さん、居てよかったですね」
「だな。俺たちも行く？」
「いえ、私達は娘さんを探しましょう」
「そうだった。じゃあ、そうしようか」
「はい」
「えっと、確か21くらいなんだっけ？」
「ライガットさんと同じ護衛の仕事、主に女性の身辺警護をしているそうです」
そっち方面の情報収集は、フレイに任せるべきかな。

そんな風に考えながら、優斗は彼女を見つけ出す手がかりを聞く為に、質問を続ける。

「見た目の特徴とか聞いてない？」

「子供っぽくて可愛いところもある。最近はそれなりに女っぽくなった、くらいでしょうか」
「抽象的すぎ」
ならば別方向から、と優斗は思考を始める。
ライガットの娘が彼と別行動をしていた理由として、他の仕事をしていた可能性がある。
そして、彼女の主な仕事は女性の身辺警護。
「この街に身分が高い女性が居ないか調べれば」
「なるほど、まずそこをあたるべきですね」
今日は夕食を摂るついでに聞き込みを行い、明日から本格的に捜索を開始する。
そう決めた優斗達は、焦る必要はない、と少しの休憩を挟んでから行動を開始した。
目ぼしい手掛かりを得られなかった2人は、前日に聞いてあった薬師の元へ向かった。
ライガットが意識を取り戻していれば、直接娘の居場所を聞けるかもしれないと思ったからだ。
結果的にその行動は正しく、優斗達が付いた時には、ライガットの隣には既に女性の姿があった。
「もしかして、父が護衛していた商人の方ですか？」
「えっと、はい。そうです」
そう答えた途端、女性は勢いよく立ち上がる。

父親をこんな目にあった原因の1人である雇い主に恨みを抱くのは、間違っているが理解出来る。優斗はそう考え、咄嗟にフレイをかばい、身を固める。

「ありがとうございますっ」

「……へ？」

立ち上がった勢いのまま下げられた頭と、やはり勢い良く放たれた言葉に、優斗は唖然とする。

「おかげで、父は死なずに済みました。本当にありがとうございます」

「いや、その。そう、ライガットさんの事なんですけど」

居心地の悪さから、ライガットの体調を尋ねる事で話題転換を図ろうした優斗の言葉に、女性の頭は更に下がっていく。

「お金は必ず払います。払いますので、待って下さい！」

「ちょ、ま、いや、そりゃ払ってくれるならありがたいですけど」

薬を処方し、傷の手当をし、ベッドを借りる。

その為に、優斗は少なくない額を薬師に支払っている。保険など無い上に、希少な技術である医術の代金は、それ相応に高価だ。

「ですから、傷が治るまでの間、ここで治療をっ」

「とりあえず頭上げて下さい！」

「私に出来る事ならなんでもします。ですから――」

「ユーリス、煩いぞ」

矢継ぎ早な言葉に困ってる優斗を助けたのは、ライガットの声だった。

先ほどまで眠っていたはずの彼の反応に、部屋中の視線が集まる。
「っつつ、怪我に響く。叫ぶな」
「父さん、大丈夫なの！？」
「大丈夫だから、静かにしろ」
顔をしかめるライガットは、文句を言いながらも嬉しそうだ。

親子の再会を邪魔するのも悪い。そう考えた優斗が、フレイを促して外に出ようするが、その前に声がかけられる。

「迷惑かけちまって悪かったな」
「いえ、助けて頂きましたから」
「それが仕事だからな。
動けない護衛なんぞ、見捨てられても文句は言えねぇ」

そんなライガットの言葉に、優斗はようやく彼の娘、ユーリスが何故あれ程感謝したのか、支払いに言及して来たのかを理解する。

わざわざ護衛を助けてくれた事に感謝し、それ以上に連れて帰った思惑があると考えたのだろう。そして商人の行動は、そのほとんどがお金に関する事だ。

「ところで、ここは、痛っ」
「大丈夫！？」
「次の目的地だったキルンですよ」
ライガットを心配するユーリスの代わりに、優斗が質問に答える。

まだ聞きたい事がある様子のライガットが口を開く前に、開けっ放しの扉から、ここの主である薬師が入って来る。
その姿を認めた優斗とフレイは、邪魔にならないように部屋の隅

に移動すると、薬師はライガットの前まで進んで立ち止まる。

「ライガットさん、でしたか」

「おう」

「お話があるのですが。あぁ、空腹でしたら先に食事にしますか？」

「先に聞く」

「では、手短に。貴方の怪我は、ここでは治せません」

その言葉に、最初に反応したのはユーリスだ。

胸倉に掴みかかる勢いで問いただそうとした彼女を制すると、ライガットは表情を少しだけ苦痛に歪めながら、落ち着いた声で質問をぶつける。

「俺は死ぬのか？」

「いえ、死にはしないでしょう。ですが、身体が元通りに動くようになる保障は出来ません」

淡々と言い放つ薬師。

その言葉の意味を全員が咀嚼しきる前に、彼は言葉を続ける。

「首都か、ユミズになら腕の良い医者が居ます。そこで見て貰えばあるいは」

「んな金ねぇよ」

フリーの護衛が稼ぐ金額は、さほど多くない。

そして、大きな街で医者にかかるのにはそれなりの金額が必要だ。

「では、ここから西にある山へ向かうといいですよ」

「そこにもお医者様が居るのですか！？」

ユーリスに詰め寄られた薬師は、特に表情も変えず、掴まれそう

になった手を避ける。

空振りに終わった手のやり場に困って固まっているユーリスを無視し、薬師は窓の外へと視線を向ける。

「万病に効くと言う湯が沸いているそうです」

温泉か、と思いながら、同時に温泉卵を思い浮べた優斗は、窓の外に見える山に視線を向ける。

「それに、腕の良い薬師もいるそうです」

「貴方よりも、ですか？」

ユーリスが失礼を承知で問うた言葉に、薬師の男はあっさりと頷く。

「山に籠っている偏屈らしいですが、腕は確かだと言う噂ですよ」

「そうか、色々と悪いな」

「報酬は貰っていますので、お礼ならそちらへどうぞ」

そう言って、薬師は部屋を去る。

そして、そちらと差された優斗は、あはは、と乾いた笑を浮かべた。

「とりあえず、何か食べる物を買ってきます。ちゃんと食べないと治るモノも治りません」

「そう、だな。ユーリス、頼む」

「うん、父さん、何食べたい？」

「私達で行って来ますので、ユーリスさんはライガットさんについていて下さい」

「いえ、むしろご主人様とユーリスさんで行ってきて下さい」

そう言ったフレイは、ユーリスから見えない位置で、優斗の裾を

引く。

そして、後ろ手に隠し持っていた小さな袋を、優斗にだけ見える様に示す。

少しの間を空けてその意図を理解した優斗は、彼女に了解した旨を目で伝えると、ユーリスに話しかける。

「自己紹介が遅れました。私は商人の優斗です」
「優斗さん、ですね。私はユーリスです」
「で、こちらが旅の連れで、フレイです」
「よろしくお願いします」
「よろしく、って、ん？」
「じゃあ、買い物に行きましょう」
「へ？　あ、はい」

元々ライガットの言葉通りに買い物に出るつもりだったユーリスは、優斗の同行に戸惑いながらも、追い出すような見送りを受け、あっさりと部屋を出る。

ユーリスと言う女性は、見た目だけならば年齢相応に見える。公国では珍しくない、フレイと同じ金髪碧眼でプロポーションはそれなり。容姿は中の上と言ったところだ。

「そのう、商人さん」
「優斗です。それと、言葉遣いも普通でいいですよ。同い年らしいですし」
「えぇぇ！？」
その驚きから、やはり年下に見られていたのだな、と優斗は苦笑する。

驚きの声を上げたユーリスは、失礼な事を行ってしまったと気づき、慌てて弁解し始める。

「いえ、違うんです。決して子供だと思っていた訳ではなく」
「普通にしゃべってください。ね？」
笑顔の優斗に対し、ユーリスは泣きそうだ。

そんな彼女の反応がおかしく、優斗は思わず吹き出してしまう。

「な、なんで笑うんですか！？」
「ユーリスさんが面白いからです」
「優斗さん、酷い」
先ほどまでの殊勝な態度が吹き飛び、ユーリスは頬を膨らませて抗議する。

その表情が可笑しく、優斗がまた吹き出してしまう。すると、ユーリスもそれに釣られ、吹き出して笑う。

「はは。あ、ちょっと待って下さい。ここです」
「お、ここですか？」
「はい。ここの人と知り合いなんです」
そう言って扉の中へと入って行くユーリスの説明によれば、ここは昼は食堂をしている酒場らしい。

ユーリスが病人食が欲しいと注文をし、優斗がそれに４人分の食事を上乗せして代金を支払うと、店主は愛想よく頷き、厨房へと消えた。

「４人分も買うの？」

「戻る頃には昼時だから、俺と、フレイ、薬師さんにユーリスで４人分」
「私の分まで！？」
何故にそこまで驚く、と言う疑問の答えを、優斗はすぐに思い当たる。

優斗が頼んだ食事は、持ち帰りが可能な中で最も高い品だった。
お世話になった薬師への礼をケチる気が無かった事と、同じモノを頼んだ方が早く出来ると考えた結果だ。
慌てて財布に触れるユーリスに苦笑しながら、優斗はテーブルを指差す。

「お昼は俺の奢り。それより、待ってる間、座らない？」
「うん。でも、奢りは……」
砕けてきた口調とは裏腹に、視線に警戒の色が浮かぶ。

ユーリスの経験上、商人がお金を出すのは、利益が出る時か女を口説く時だけだ。彼らは、見栄を張るよりも実を取る。

「別に恩に着せる気はないから」
「でも」
「それより、これからについて少し聞きたいんだけど」
やっぱり来た、とユーリスは体を固くする。

そして促されるまま席に着くと、店員に銅貨を渡し、飲み物を持ってくる様、注文する。

「飲み物代、いくら？」
「私の奢り」
「ん、じゃあ、御馳走になる」

今からする話で優位を保つために食事を奢ると言いだした。

そう思っていたユーリスにとって、それは予想外の反応だった。

実際に食事代を恩に着せる気であれば、食べ終えてから話すべきなので、その予想は大はずれだ。

「ライガットさんの治療、どうするつもり？」

「薬師さんの言ってた山へ行く」

言い切ったユーリスが、あ、っと何かに気付く。

「その、支払いは絶対するから、待ってくれ、ま、せんか？」

「わざわざ丁寧に言い直さなくても」

優位な状況でそれを求めるのは卑怯か。

そう思いながら、優斗は次の言葉を探す。そして、部屋を出る際にかけられたフレイの言葉を思い出し、自分が思った通りに行動する事を決意する。

「ライガットさんが怪我した理由、聞いた？」

「……一応」

どんな要求をされるのかとびくびくしているユーリスの姿に、優斗は悪戯心が沸いてくる。

しかし、そんな事をして後でフレイにバレたら恐ろしいと思い直し、真剣な表情を浮かべて彼女の目を見つめる。

「聞いてる通り、俺たちは盗賊から逃げてきた。で、その中の1人がフレイを狙っている」

九分九厘、演技でだけど、と心の中で呟きながら、驚いているユーリスに話し続ける。

「だからここから逃げ出すつもりなんだけど、街を出た途端、襲われる可能性もある」
「街中でも安心しない方が良いと思う」
返って来た言葉に、優斗は首肯する。

ここ、キルンには市壁が無いので、盗賊も侵入し放題だ。
サイルスの様に市壁があっても入って来る人間は居るが、逃げ道が少ない分だけでも市壁がある街の方がリスクが高まるので、安全だと言える。

「でも、フレイは女の子だし？」
「あれで男だったら、逆に怖いなぁ」
この人、やっぱり丁寧な言葉遣いとか苦手そうだな。

段々と崩れている言葉遣いにそう思いながら、優斗はその提案を口にする。

「だから、女性の護衛を探してるんだけど、心当たりない？」
「……そう来たか」
己の芝居じみた台詞に、優斗は耐えきれず吹き出す。

それを見たユーリスもまた、笑いだす。
何か笑ってばかりだな、と思っていると、飲み物が届き、店員とユーリスに礼を言ってから口をつける。

「お、うまい」
「でしょ？」
「うん。で、仕事内容なんだけど、あの山まで薬草の買付に行こうと思ってるんだけど、どう？」

そんな優斗の言葉に、ユーリスはまた笑いだす。

目の端に涙を浮かべる程笑ったユーリスは、笑いすぎだと呆れる優斗に対し、ごめんごめんと謝罪してから口を開く。

「優斗さん、お人好しだって言われるでしょ？」
「失敬な。ちゃんと商人らしく利益を考えて行動してる」
「うん。代金は絶対に支払うから、よろしくお願いします」
「仕事を頼んでるのは俺なんだけど」

こうして2人は、持ち帰りの食事が完成するまでの間、今後について話し合った。

医療事情（後書き）

無事に街へと到着しました。

そして同行者の増えた旅は、間髪入れず次の目的地に向けて動き出します。

適正な価格

話し合いの結果、出発を明後日と決めた優斗は、昼食を終えると、準備を整える為に一度宿へと戻ってから商会へと向かった。

「相変わらず女性に甘いですね」
「煽った癖にそれをいいますか」
ライガットと一緒に説明を聞いた際には何も言わなかったにも関わらず、今になってそんな事を言うフレイに優斗は苦笑する。

色々と散財してしまったせいで、現在、優斗の所持金は、金貨１枚にも満たない。
街で使う為に分けてあった小銭以外をほとんど使ってしまったので、商品と不要な荷馬車を売り払わなければ、旅の資金にも困る状態だ。

「使った分、ちゃんと稼いでくださいね？」
「総資産は減ってないと思うんだけど」
むしろ増えているかもしれない。

その理由を考えると少し後ろめたいのだが、元々、この生活の始まり方を考えれば、フレイにそれを気取られるのは良い事ではないと判断し、優斗は軽い調子で言葉を続ける。

「まぁ、それも売値次第だけど」
「そうですね。今度こそちゃんと商人らしく稼いで下さい」
その言葉にぎくりとしながら、優斗は首肯する。

そうしている内に、２つの商会が向かい合う場所まで到着する。

優斗から見て右側がラダル商会で、左がレグイ商会。
商会と言っても、ここ以外の支店は存在しない、個人商店に近い小さな店だ。

「どっちに入りますか？」
「ラダル商会」
そう言って店に入ると、中には少年が1人居るだけだった。

「すいません、店主はいますか？」
「すいません、少し出てまして」
「そうですか」
うーん、と悩む素振りを見せる優斗だが、実は不在である事を知っていた。

そして店番の少年を横目でちらりと見ると、彼の反応を伺う。

「どんなご用件でしたか？」
「実は、買い取って頂きたい物がありまして」
「そうですか。では、ラダルの方にそう伝えておきます。すいませんが、お名前と宿を教えて下さい」

はきはきとそう告げる少年に、優斗は少し感心しながらフレイに指示を出す。フレイは事前に受けた指示通り、少年の前に移動すると、宿の名前と優斗の署名を入れた紙を手渡す。にっこりと微笑かけながら。

「詳しい事は全て書いてあります。店主様に、よろしくお伝えください」
「は、はい、お任せ下さい」

店番の小僧だと侮って横柄な態度を取らず、丁寧に対応する優斗に、少年のやる気は高い。

フレイに微笑みかけられた事もやる気になっている理由の1つだろうな、と優斗は内心で苦笑する。優斗がフレイに出した指示は、印象に残れと言う漠然としたものだ。

「じゃあ、フレイ。隣のレグイ商会に行って見ようか」
「はい」
「えっ？」
少年の反応を無視し、優斗達は急いで店を出る。

さすがに店を放置して追っては来ないだろうが、と思いながらも、その勢いで隣の商会へと入っていく。

行商人は大きな商会に物を売る事が多いのだが、それにはそれなりに理由がある。

まず、ほとんどの品を、その場で査定して買い取ってくれる事。個人の店であった場合、店主にその知識が無ければ、買取拒否や査定にかなり時間がかかる場合があるので、結局大きな商会に行く事になる、と言う事態が度々ある。

次に、それなりの契約をした過去があれば、他の街の同じ商会の支店で多少の融通が利くと言う事。
過去の取引の契約書は、その効力を失っても取引をしたと言う証拠になる。ほとんどの商会は、懇意にしてくれる行商人を大事にする傾向があるので、交渉が有利になる事もある。

契約を交わさない商談であっても、どこへ向かうと告げれば簡単

な紹介状や証明の1つくらいは書いてくれる可能性があるので、これも時間短縮等に繋がり、色々と便利なのだ。

「すいません、買取をお願いしたいんですが」
「買取ですか」
出迎えた少年に営業スマイルで返しながら、優斗はフレイに目配せする。

今回、優斗が選んだ2つの商会は、街に根付いた、いわゆる地域密着型の商会だ。そして、お互いをライバル視している一方で、店主同士の仲はそれなりに良好だと聞く。

「申し訳ありませんが、生憎レグイは留守でして」
「そうですか。出直した方がよろしいですか？」
「それには及びません。ご用件を伺い、後程こちらから連絡させて頂きます」
ラダル商会の少年よりも年上らしい店番の子は、そう告げると連絡先と名前を問うてきた。

優斗は前回と同じ様に返答し、フレイもまた同じ様に行動する。

「では、店主によろしくお伝えください」
「判りました」
挨拶をして店を出た優斗達は、その足で更に別の商会へと向かう。

向かった先は、シェーン商会と言う、中規模の商会だ。
公国首都と神殿都市ユミズを繋ぐ街道沿いを中心に支店を持ち、大規模な商会が余り取り扱わない細々とした物を主に取り扱う、隙間産業的な商売をしている。

「すいません」
「はい、何の御用でしょうか」
「私は優斗と申します。買取の荷物が既に届いていると思うのですが」
「あ、聞いております。こちらへどうぞ」
荷物とは、優斗の物ではない二台の荷馬車と、その積荷の事だ。

先ほど宿に戻った際、偶然会ったキュイ達にこちらに運ぶよう、依頼したのだ。
優斗は元々、二往復するつもりだったのだが、彼らは商談に同席させる事を条件に手伝いを申し出た。勉強になるからと言う2人にあえて駄賃を渡した優斗は、その際に別の指示も出していた。

「うちのが何か粗相をしませんでしたか？」
「とんでもない。良い従者をお持ちで、羨ましいです」
案内の男は、言葉と共にフレイに視線を向ける。

羨ましい、の大半はそっちか、と内心呆れ、しかし少しだけ優越感を感じていると、目的地へと到着する。

部屋の中には、ソファに座っている2人の若者と、その対面でにこやかに質問をする中年の商人が居た。

「お待たせして申し訳ありません」
「いえいえ、荷物の査定もありますし、何より若い人から貴重な話を聞く事が出来ました。
私は当商会の支店長を務めております、カルリトと申します」
「行商人の優斗と申します」
恭しく礼をすると、ソファに座りっぱなしの2人を横目で見る。

目の前のお茶や菓子に釣られて余計な事を話していないだろうなと思いながら、視線で2人に起立を促すが、通じない。

「フレイ、目録を」
「どうぞ」
「ありがとう、お嬢さん。お、奴隷か」
「あの2人よりは役に立ちます」
そう言って少しきつく睨むと、優斗はソファへ向かって移動する。

ようやく気付いた2人が席を立つと、代わりに優斗が腰かけ、隣にフレイが立つ。優斗の視界から消えた2人は、どうしていいのか判らず、ただそこに立ち尽くす。

それに対して、フレイがさりげなく後ろに付くように促すと、ようやく自然な配置へ移動を始める。事前の約束通り、反論もせず口を噤んではいる事に満足した優斗は、咳払いをしてから商談を開始する。

「礼儀知らずな振る舞いの数々、2人に変わって謝罪致します」
「いえいえ、とんでもない」
後ろの2人は、優斗の手伝いをしている、弟子の様な者だと言う事になっている。

見た目で言えば逆に見える関係に、カルリトと名乗った中年商人は、何を問う事もなく笑顔で対応する。

「今回は荷物だけでなく、荷馬車までお売り頂けるとお聞きしたのですが」
「はい。既にご存じとは思いますが、街道で盗賊に遭いまして」
ほう、とカルリトが驚く。

もちろん彼は、盗賊が出た事も、それに対して討伐ではなく、襲われた商人の捜索が行われようとしている事も知っている。それでも驚いたのは、自分たちが被害者であると優斗が告げたからだ。

「なんとか逃げ延びましたが、その際、やはりこいつらに荷馬車を与えるのはまだ早いと判断しました」

「それで当商会に売って頂けることになった、と？」

「その通りです。積荷はこいつらが仕入れた物ですので、是非安く買い叩いてやって下さい」

にやりと笑う優斗に、カルリトもそれに答える様に笑う。

優斗が所属した様な即席ではない、きちんとした商隊では、商人志望の若者が下働きをしている事が多い。

生活をしながら商人の手管を間近で見られる上に、運が良ければ弟子入りし、販路や特権を譲って貰えるかもしれないからだ。

カルリトからすれば、後ろの2人は卒業試験に不合格だった不肖の弟子2人に見える事だろう。

「冗談はさておき、不出来な弟子に手本を見せねばならないので、お手柔らかにお願いします」

「それは大変です。ですが手を抜いてはお弟子さんの勉強になりませんので」

前口上の様な会話に、優斗の後ろでキュイ達が顔を見合わせる。

そういう約束とは言え、目の前の会話はあまり気持ちの良いものではなかったのだろう、少しだけ口元がひきつっている。

「今回、買い取って頂きたいのはそちらに書かれている商品です」

「荷馬車の他には、ライ麦、燕麦に靴。これらは農村で仕入れたんでしょうな」
「私は仕入れに関わっていませんが、恐らくそうでしょう」
「ふむ。凶作とは言え、今年はなんとかなりそうですし、あまり高値はつかないでしょうな」
だろうな、と思いながら優斗は話を進める。

「他にも色々ありますし、数が多いので、紙にそちらの希望価格を書き込んで頂けますか？」
「そうですね。1つ1つ話し合っていては日が変わってしまいそうですので、そうさせて頂きます」
カルリトが滑らかに価格を記入して行く中、優斗は隣のフレイに目配せをする。

それに気づいたフレイから2枚の紙を受け取ると、優斗は両方を二つ折りにし、机に置く。

「これでどうですか？」
「確認させて頂きます」
価格の書き足された紙を受け取ると、優斗はゆっくりとそれに目を通す。

次の商談に支障を来さない様に配慮してか、全ての価格はごく妥当な数字となっている。見知らぬ商会に飛び込みで来た事を考えれば、それは十分な価格であるとも言える。

「さすがシェーン商会様、話が早くて助かります」
「いえいえ、それで、荷馬車の件ですが」
「その前に、これも見て頂けませんか？」
話を遮られ、反射的に眉を潜めてしまったカルリトに、優斗が二

つ折りにした紙の1つを広げる。

そこには、優斗がハイルで購入した帝国の品々が列挙されている。

「現品がありませんので、あくまで目安で構いません。
こちらで売ると確約も出来ませんので、品物を見てから値引きしても文句はいいません」

カルリトはこれに対し、どうするか少し悩んでから優斗に一言断り、人を呼ぶ。

「これらの見積もりを頼む」
「判りました」
その時、カルリトが一覧と共に何かメモを手渡していた事に気付き、優斗はほくそ笑む。

優斗の読み通り、メモには価格を高めに設定する様、書かれている。
持ち込んでさえ来れば、値下げ交渉を成功させる事が出来ると言う自負がカルリトにはあり、ならば無茶でない程度に高い金額で釣るのは正しい判断だと言える。

「では、荷馬車の商談に入りましょう」
そう告げる声に続き、優斗の後ろで唾を飲み込んだ音が聞こえる。

荷馬車があっさりと優斗の物になった理由の1つに、売りにくさと言うモノがある。

荷馬車は高価だ。
故にそれを買い取ろうと言う者は限られてくるし、その中でそれ

を必要としている者はもっと少ない。

普通であれば大きな街へ移動してから売るのがセオリーだが、優斗たちは自分の荷馬車を持っているので、移動には別の人間が必要になり、余計な経費が掛かってしまう。

それ以外にも、盗品の疑いをかけられて値切られる等、様々な理由でこの街で荷馬車を高く売るのは難しい。

「はい。今回は買って頂きたいのは、荷馬車の荷台、２つです」
「荷台のみ、ですか」
一瞬だけ困惑顔を浮かべたカルリトだが、若い商人２人を見て、馬は彼らが乗る為に残すのかと勘違いし、合点がいったと言う表情に変わる。

馬が無い。
これもまた、売りにくい理由の１つだ。

正確には一方は馬付きだ。しかし、護衛の馬を返してしまった為、ここまで荷馬車を引いて来た片割れは、優斗が所有する荷馬車の馬なのだ。

「合わせて金貨１０枚でどうですか？」
「それは、そちらの品も合わせての金額でしょうか」
そちら、と示された紙にかかれた品々は、大体金貨１枚分になる。

荷馬車はどちらもホロのない、使いこまれた物だ。しかも、片方はかなりボロボロ。
優斗は市場価格から予想して値段を付けたのだが、出回っている荷馬車のほとんどが中古であると言う事実を知らなかった為に多少

ズレが発生しており、結果、提示額はほぼ適正価格となっている。

「それでしたら買い取って頂けますか？」

「そうですね。ですが、当商会としては今後とも良いお付き合いを続けられればと考えております」

そう言ってカルリトは、優斗の手前にある紙に視線を向ける。

まだ持ち込んでいない帝国の品々。

その一覧を見たカルリトは、大雑把ではあるがその総額を知っている。それは優斗が手持ちの大半をつぎ込んだだけあって、この商談のテーブルに上がっているどの品物よりも高価だ。

元々、南西部の大都市へ行くつもりだった優斗が仕入れた品は、どれも高級品であり、それなりに希少品でもある。カルリトがこの場で値段を書き込めない程度には。

「あれらの売り先は当てがありますので。まぁ、こっちも元々そこで売るつもりだったんですけどね」

次の買取を盾に値下げを迫るカルリトに対し、優斗が取った手は単純だ。

別にここで売る必要はない。そんな純然たる事実を突きつけるだけ。

「盗賊の居る道中では何が起こるか判りません。我が商会は腕利きの護衛を雇っておりますが」

「奇遇ですね。私も先日、個人的に護衛を雇いまして」

商隊単位ではなく、個人的に護衛を雇う。

それは利益の点から見ても、ありえない。故にはったりであると

考えるのが普通だが、現在の状況と目の前の商人の所持する積荷、質の良さそうな服装の女奴隷、そして弟子が2人居て荷馬車を与えた上に、駄目となればすぐに売り払う判断が出来る事を考え、本当にありえないのか、カルリトは迷う。

「シェーン商会様とは、今後も良いお付き合いをしたいと考えていたのですが」

資産と人脈、適切で大胆な判断力を持つ行商人は、シェーン商会の様な中規模商会にとってはそれなりに貴重だ。

懇意にしたくとも、買取価格では本気になった大規模商会に敵わず、彼らが良い行商人を抱える事は難しい。

今回だけの関係と割り切って利益を優先するか、今後の可能性に賭けるか。カルリトにとっても、そしてシェーン商会に取ってもその判断がもたらす結果の影響は、小さくない。

「優斗様は街道沿いを行かれるご予定なのですか？」

「西にある山を目指す予定です」

カルリトは、そこに込められた意味を探る。

まず、山と言う言葉から、薬草の仕入れを行うつもりだろうと予想出来る。偏屈な薬師がふらりと下りて来ては村で売って行くと言う品を仕入れに行く行商人はたまに居るが、訪問が不定期な上に直接売ってくれない為、常に在庫がある訳ではないので、空振りに終わると利益が薄くなってしまう事を嫌い、販路にしている者はいない。それをシェーン商会で買い取る事が出来れば、それなりの利益が見込める。

次に道程に1つシェーン商会の支店がある事を思い出す。ならば彼が望んでいるのは、と考え、条件を吟味したカルリトは、ゆっく

りと口を開く。

「優斗様のご要望通り、公国金貨１０枚で買い取らせて頂こうと思います」

「こちらの商品も含めて、ですか？」

「はい。代わりと言っては何ですが、街道沿いにある我がシェーン商会の支店で山を行くのに必要な物を揃えさせますので、お受け取り下さい」

「それは助かります」

「護衛の方を含めて、何名になりますか？」

「後ろの２人は別の仕事をさせるつもりですので、男が２人、女が２人ですね」

「女性２人ですか。これは羨ましい」

こうして無事契約内容が決まり、価格を書き込んだ紙が戻ってくるまで、優斗とカルリトは雑談を続ける。

契約書を作る事なく、その場で現金と紹介状を受け取った優斗は、帝国の品々も売って欲しいと言うカルリトに、一晩考えててみますと告げて商会を後にする。

弟子と言う名目になっている為、優斗の馬を引いてくれているキュイ達は、商会から十分離れた事を確認してから、我慢できないと言う風に口を開く。

「勉強になりました」

「それはよかった。それと、色々悪く言ってすいません」

「悪いと思って言ってたんですか？」

「もちろん」

商人同士の口上で、身内を貶すなんて言うのは日常茶飯事だ。

これだけの資産を携えた、大物商人に見える優斗が口にした言葉を、キュイは別の意味で解釈し、にやりと笑う。

「でしたら、少し質問に答えてくれませんか？」
「いいですけど」
「盗品の疑いを消す為に、俺たちを弟子としたんですよね？」
「そうです」
「それでも、なんで荷馬車を買い取る事自体を値切らなかったのか、不思議なんです。何か裏がありませんか？」
販売目的以外で荷馬車を多く集めるメリットは少ない。

キュイが指摘したのは、荷馬車の数が十分に足りているから、もしくは今のところ使わないから、その値段では買えないと言う値切りを受けなかった事だ。

「盗賊が居て、荷馬車が壊される事も多いんだから、需要が無い訳がない」
「それでも、口にするのはタダですよね？」
「だったら他で売る、と言われるのが怖かったんでしょう」
「荷馬車なのにですか？」
食糧等の消耗品や生活雑貨は、ほぼ確実に需要がある。

だが、荷馬車は違う。
壊されても再購入の資金が無ければ買えず、新規の購入客も少ない。何より、今、ここから商売を始めようと言う人間は皆無だろう。
優斗が弟子の荷馬車を売り払うと言う名目は、それを後押ししている。

「荷馬車だから、ですよ。需要のある所に売りに行くのは、商売の基本」

「需要がある、ですか？」
優斗が少しもったいぶる様に間を空ける。
すると何故か優斗の隣を歩いていたフレイが先に口を開いて、説明を引き継いでしまう。
「護衛の方たちがシェーン商会に荷馬車の貸し出しを依頼しています」
「え、へ？」
「大人数の移動や、助けた人の移送には馬車が必要ですから」
「売り先を決める所から商売は始まっているって事」
種明かしの役割を取られた優斗は、内心で悔しがりながら補足する。
その後も幾つかの質問に答えながら、優斗達は宿に戻った。
宿の扉が開かれ、４つの人影が中へと入って来る。
宿の一階にある、泊り客用の食堂で果実を突いていたフレイは、その姿を確認すると急いで残っていた果実を口にする。
「この宿に、優斗と言う行商人が居るはずなんだが」
「あぁ、聞いてるよ。あっちの嬢ちゃんに声かけな」
むぐむぐと顎を上下させ、なんとか彼らが来るまでに果実を胃の中へと流し込んだフレイは、唇が濡れたままである事も気にせず、立ち上がる。
「お待ちしておりました。ラダル様とレグイ様でよろしかったでし

ょうか？」
「えぇ、その通りです。って、奴隷か」
「そのようだな」
ラダルとレグイ。そして2人に付き従う少年達。

4人に、にこり、と笑いかけると、フレイはまず机の上に置いてあった紙を、ラダルとレグイに1枚ずつ手渡す。

「そちらが品物の一覧になります」
「ふん」
「ありがとう、お嬢さん」
「では、こちらへ」
厩へ案内します、とフレイが歩き出す。

後ろで何か騒いでいる声が聞こえたが、フレイはそれを気にする事なく扉の前まで進むと、少しだけ待ってから振り返る。

「どうされましたか？」
「いや、なんでもない。なぁ、レグイ」
「あぁ、そうだな、ラダル」
白々しい言葉に、しかしフレイは何言わずに外へ向かう。

厩に到着すると、ホロを後方から上げ、中を見せる。
ラダルとレグイは、品物と1枚の紙を見比べて、何かを確認している。1枚ずつ手渡したにも関わらず、ラダルの持つ紙を2人で確認しながら、だ。

「あれ？　あ、あぁぁ！」
フレイが上げた悲鳴に、4人が振り返る。

少年たちは心底驚いた風に、商会の主人である2人は何か心当たりがある風に。

「すいません、あの、もしかしてその紙には数字が書かれていませんか？」
「あるなぁ」
「ありますね」
しかも、シェーン商会の署名付きである。

それを聞いたフレイは、慌てて自分の持つ紙を突出し、逆の手を空のまま差し出す。

「こっちです！　こっちがお渡しするはずだった紙です！」
「あぁ、うん。だろうな」
「そっちはダメなんです。お願いです、返して下さい」
「どうするよ、レグイ」
「そうだな。お嬢さん、優斗と言う人は、何と言っていたのかな？」
「え？」
目の端に涙を浮かべるフレイは、キョトンとした表情でレグイを見つめる。

そして少しだけ首を傾げ、何かを考える様な仕草で口元へ手を持っていく。

「一覧を渡して、商品を見せて置け。きちんと出来たら明日は街へ行ってもいいぞ、小遣いくらい出してやるから、です」
「ふむ。では、こうしよう。我々は何も見てないし、君はミスをしていない」
その言葉に、フレイははっとし、縋るような視線をレグイに向ける。

それに満足したレグイは、自分の紙に点を打ち、ラダルへと向ける。

「俺が欲しいのはそれだけだ。どうだ？」
「……全部は買い取れんぞ？」
「その辺りは調整しよう。おい、紙をくれ」
あれやこれやと話し合った結果、ラダルとレグイは紙にそれぞれの希望価格を書き込んで行く。

それを終えると、ラダルの持っていたシェーン商会の署名入りの用紙をフレイに返却する。

「ありがとうございます？」
「そう言えば、お嬢さんは明日街へ繰り出すんでしたね」
「あ、はい」
「これで何か買うと良いですよ」
フレイの手のひらに、数枚の銅貨が落とされる。

それとそれを落としたレグイの顔を交互に見つめるフレイの目には、困惑の色が滲んでいる。

「お嬢さんはちゃんと仕事をこなした。これは単なるチップ。そうですよね？」
「は、はい！」
「では、後程使いをやりますので」
「あ、その。主人は明日の午前中に来てほしいと……」
「判りました」
では、とレグイは3人を引き連れて厩を去る。

残されたフレイは、４人の背中を見送ると、悲壮な表情を一変させ、ぺろりと舌を出す。

「上手く行った？」
「はい。ですから、お小遣いは弾んでくださいね？」
「まだ結果が出てないからダメ」
物陰に隠れていた優斗が姿を現す。

そして夕食を摂る為に２人で食堂へ向かうと、少し豪華な食事と葡萄酒を注文する。

「相変わらず、ご主人様はあくどいですね」
「ノリノリで加担した癖に、そんな事言う？」
優斗にとって、今回のメインはこちらの商談だ。

仕入れ値で公国金貨２０枚以上を支払っている品々は、しかし帝国産かつ希少である事が災いし、ラダルやレグイにはその適正価格が判断出来なかった。

そこに、この街では大きな規模を誇る商会の見積書が現れた。わざわざ紙に書かれた見積もりの価格は、普通であればイコール買取価格であり、今回の様に高めに設定して書かれる事は稀である。

「でも、慣れない商品を扱うのを嫌がる可能性もありませんか？」
「小さいとこは、何時でも大きなとこに負けたくないと思ってるもんだよ。それに、ライバル店に差を付ける為にも、どちらかは食いつくはず」
仮にどちらも食いつかなければ、シェーン商会に適正価格で売れば、優斗に損はない。

今回、優斗が行った事は、適正価格を誤認させ、品物を高く売ると言うモノだ。
珍しい手法ではないが、今回は運よく協力者が多かった上に、状況にも助けられた。

上手く行きそうな手ごたえに、優斗はようやく自分の商売で利益を出せそうだと言う実感に、口元が緩む。

「油断して、私の努力を台無しにしないでくださいね？」
「了解。じゃあ、さっくり食べて寝ますか」
優斗の言葉通り、2人は食事を終えて程なく、眠りについた。

翌日、一般的な旅の準備に加え、女性の旅に必要な品と日常品、そして多少の嗜好品を買い揃えて来るよう指示したフレイがユーリスと共に出かけたのを見送った優斗は、ラダルとレグイと相対し、予想以上の利益を得る事に成功するのだった。

適正な価格（後書き）

相変わらず強かなフレイさんでした。
もちろん貰ったチップは優斗くんに渡したりしていません。

4人の旅路

旅の準備を終えた翌日、朝早くに出発した優斗達一行は、野営に適した場所を見つけ、日が沈む前に準備を終える為に荷馬車を止めた。

昨日2人で買い物に出て以来、仲よく話している女性陣が夕食等の準備を担当し、優斗は相変わらず薪代わりの枝や木切れを探す役割を担っている。

「拾ってきた、って、どうかした？」
「早かったですね。ご主人様」
「あぁ。で、どうした？」
優斗が重ねて問うと、フレイは何かを考える素振りで視線を上に向ける。

少しだけ悩んだフレイは、ユーリスに視線を向け、次いで優斗へ視線を戻す。

「ご主人様」
「ん？」
「汗を流してきてもかまいませんか？」
「いいけど？」
人口密度が上がった荷馬車は、南下して来た影響もあり、今まで以上に暑かった。

その暑さは馬にも影響を及ぼしているが、手元に残った馬で二頭立てにした為、荷馬車の速度は今までよりも早い。馬具はそれなりに高価だったにも関わらず、優斗が迷わず二頭立てにしたのは、大

き目の荷馬車なので一頭立てのままでは重い物を運ぶには不向きだと気づいていたからだ。

「そう言う訳ですので、ユーリスさん、着替え持ってきて下さい」
「いや、私は護衛だし、別に」
「汗臭いままでもいい、ですか？」
ユーリスの頬が引きつる。

ずっと風の当たる御者台に居た優斗とフレイでさえ暑いと感じる天候の中、ライガット共に熱のこもるホロ付の荷台に居たユーリスが、相当量の汗をかいていた事は間違いない。

「旅をしている訳ですから、ずっとは無理でも出来る時にはしておくべきだと思います。女の嗜みとして」
「それはそうだけど」
ユーリスが、ちらりと優斗を見る。

優斗が視線の意味を理解出来ずに首をかしげていると、フレイが小さくため息を付き、優斗に囁きかける。

「許可を」
「あー。
ユーリスさん、フレイと一緒に行って貰える？」
「雇い主である優斗さんがそう言うのなら」

真面目なのか融通が利かないのか、と思いながら、優斗は荷台の中に消えていく彼女の背中を見送る。
戻ってくるまでの間、隣に立つフレイが手持無沙汰である事に気付いた優斗は、ふと疑問に思った事を口にする。

「そう言えば、今まではどうしてたの？」
「ちゃんと清潔にしてましたよ。
何時、ご主人様がその気になるか判りませんし」

そうかい、と投げやりに返事をしながら、きっと洗濯のついでや寝ている間にやっていたんだろうな、と考えた優斗は、今までその姿見せる事のなかった徹底ぶりに驚きを通り越し、呆れた。そして自分もなるべくフレイのいない間を狙って体を拭いていた事を思い出し、お互い様かと苦笑する。

「お待たせ、フレイ」
「はい。
戻って来たらすぐ夕食にしますので」
「ゆっくりでいいから」
そう言って見送ると、優斗はその背中が見えなくなるのを待つ事なく振り返る。

女2人が着替えを持って野外で身を清めに行く姿を見送って、邪な想像をしない自信がなかった故の行動だ。

「いかんのか？」
「うおっと」
唐突に声をかけられ、優斗が驚く。

声の主であるライガットは、優斗が拾ってきた木々の中で、大き目の物に短剣をあて、削りかすを火にくべている。
ライガットは現在、誰かの肩を借りれば歩ける程度には回復しているが、左腕にも傷があり、そちらは上手く肩があがらないくらいには酷い。薬師によれば、時間が経てば多少は回復するとの事だが、楽観視出来る状態ではない。

ユーリスの手を借りて荷馬車から降りたライガットは、娘に動く事を禁止され、仕方なく彼女の起こした火の前に座り、番をしていると言う訳だ。

「で、何ですか？」
「俺は止めんぞ？」
「止めてくださいよ」
呆れる優斗は、あんたの娘だろう、と思いながらため息を吐く。

その反応を見たライガットは、何処か楽しそうに笑い、２人の消えて行った先を指差す。

「可愛い娘っこが水浴びしてるんだぞ？　気にしない方が失礼だろうが」
「だからって覗いて良い訳ないでしょ」
「そうだな」
あっさり同意され、優斗は拍子抜けする。

一体何がしたいんだと、じとりと睨みつけると、ライガットは、はっはっは、と笑い声を上げる。

「うちの娘は可愛いだろ？」
「そうですね」
「おぉ、そうか。
やっぱり親の欲目だけじゃなかったんだな」
「……まさか、それを確認したかっただけですか？」
「はっはっは。もちろんその通りだ」
額に手を当て、ダメだこの人、と思いながら、優斗はライガットから火を挟んで正面に腰を下ろす。

「それで本当に行ったらどうするつもりだったんですか？」
返事の代わりに、ライガットの手元が閃く。

何かが通り過ぎた気配を追って優斗が振り向くと、ユーリス達が向かった方向にある木に、先ほどまでライガットが持っていた短剣が突き刺さっている。

「おぉ、手が滑った。
悪いが、拾ってくれないか？」

芝居がかった大仰な声色。
右手には大きな怪我が無いと言っても、影響がない訳がない。それでも正確に短剣を投げられる技量に、優斗はただ感心する。

そして、これだけ元気なら放っておいても平気だろうと考え、立ち上がると短剣には目もくれず、横を素通りする様に歩き出す。

「ちょっと行って来ます」」
「おい、どこ行く気だ」
普段よりも低くなったライガットの声に、優斗は思わず足を止める。

これ以上進むと本気だと思われそうだと直感した優斗は、その場で振り向き、ライガットが左手に持っていた木切れを右手に持ちかえている姿を見る。

「それ、投げる気ですか？」
「娘を不埒な男から守るのは、父親の仕事だろう？」
「勧めて来た人がそれを言います？」

「借金を盾にされて一度は仕方ないと思ったんだが、思い直したんだ」

真実のほとんど含まれていないライガットの発言に、優斗はまたため息を吐く。

そんな言葉に反論するのも馬鹿らしく感じた優斗が、短剣を抜く為に一歩踏み出そうとした瞬間、後ろから声が聞こえる。

「優斗さん……」

「って、うえぇぇ！？」

驚いた優斗が奇声を上げながら振り返ると、そこには水浴びに行ったはずの2人の姿があった。

何故ここに、と思い、それを疑問の形で口にする前に、気づく。ライガットの言葉が、何の為に放たれたのかと言う事を。

「どうした、の？」

「体を拭く布を忘れました。それよりも、優斗さん、本当に？」

「誤解だ！」

「こっちに向かってたのに？」

「ライガットさんが投げた短剣を取りに来ただけで、他意は――」

「通り過ぎてますね」

会話に横入りして来たフレイを、優斗は、きっ、と睨む。

ユーリスの冷たい視線に晒されながら、優斗は必死に頭を働かせる。後方のライガットから楽しそうな気配を感じるが、何かを言う余裕はない。

「例えば、の話ですが」

優斗からの非難の視線を真っ向から受け止めているフレイが、再

び口を開く。

嫌な予感がしてその口を封じようとするが、優斗の行動を予想していたのか、フレイはユーリスの後ろへ半分隠れる様な位置へ移動する。

「ご主人様から覗きの手引きを命令されれば、私は断れない立場なんです」

「誤解を招く発言をするな！」

優斗が一歩踏み出すと、フレイは完全にユーリスの後ろに回り込み、盾にする様に腰を掴む。

同じ金髪碧眼である事もあり、傍から見れば姉の背中に隠れる妹の様で微笑ましい光景だが、優斗にはそれがとても恐ろしい光景に見える。

盾にされているユーリスは、フレイの発言の意味が理解出来ないのか、不思議そうにフレイを見る。

「私は奴隷です」

「へ？」

奴隷に護衛を付ける事が無い訳ではない。それにも関わらずユーリスが驚いたのは、優斗とフレイの関係の歪さ故だ。

奴隷の使い方は自由であり、恋人の様に振舞わせる事は多々ある。だが、ユーリスには2人の関係が、単なる演技や命令によって仕方なく行っているモノには見えなかった。

「そ、そうだったんだ」

「そうなんです。

これまでも、私がどれだけお願いしても、私の望む振る舞いはしてはくれませんでした。特に、ベッドの上では」

優斗を見据えるユーリスの眼に、非難の色が灯り、温度が下がる。

フレイの発言に嘘はない。

ただ、実際にフレイが望んでいたと言う振る舞いと、ユーリスの想像した振る舞いでは、して欲しい内容として欲しくない内容が逆であり、その誤解は優斗に取って看過できない事だ。

真実誤解であり、それを指摘すればフレイは否定しないであろう事は理解していた優斗だが、すぐさまそうする事に踏み切れない。誤解は解けても、代わりに男らしくない等の別の意味で嫌な評価を得る事も、想像出来たからだ。

「フレイ……」

「あくまで例えばの話です。

例え話をして罰を与える程、私のご主人様は狭量ではありません。そうですよね？」

フレイがにこりと笑うと、少し心配そうな表情をしていたユーリスが、よかった、と言う風に安堵する。

そんな光景に、誤解が雪だるま式に増えていく事を実感しながら、優斗は内心で頭を抱える。

しばらく一緒に旅をする相手にそんな風に思われて居ては、色々とやり辛い。何よりも、延々とあの軽蔑した様な視線に晒されて、耐えきる自信はない、と。

「そんな命令出してないし、今、ユーリスさんが考えている様な事

は一切してない、と弁解はしておく」
「本当に、ですか？」
「心配ならこうしよう。
フレイ、もしそんな命令を出していたとしたら、この場で撤回する」
「判りました。もし、命令されていたのであれば、撤回命令を受けた事にします」

優斗が自分の言い回しのまずさに気付いた時にはもう遅い。

背後で笑っているライガットと共に、再度2人を見送った優斗は、疲れ切った様子で短剣を投げ渡し、ただライガットが木を削り続ける光景を見続けた。

特に問題も発生しない順調な旅路により、普通なら3日目の昼に到着すると言う次の街へ2日目の夕方、暗くなる寸前に到着した優斗達一行は、宿に到着すると、男女に別れて部屋を取った。

山へ向かう準備の受け取りや買い物を翌日に行い、更にその翌朝に出発すると決めたので、連泊の手続きを取ってある。

「おーい、フレイ。ちょっといい？」
「どうしましたか？」
「あの親子と一緒に居るのはちょっと、ね」
ユーリスは父親が大好きで、ライガットも同じように娘を愛していると言う事を2日間の旅路で知っていたフレイは、苦笑して優斗を部屋に通す。

フレイがベッドに腰掛けると、優斗は備え付けの椅子に座り、持参したジュラルミンケースを取り出すと、机の上にノートＰＣを置く。

「それを見るのはひさしぶりですね」

「だな」

あの事件以来、優斗は現代知識を売るような商売を控えている。

機織り機の効率化と言う知識がもたらした、そしてこれからもたらすであろうこの世界への影響を身を持って実感してから、優斗はなるべくＰＣに触れないでいた。優斗自身、見てしまえば、思いついてしまえば実行したくなると言う自分の悪癖を知り、広い視野と先を見通す思考能力を鍛えてからでないとリスクが大きすぎると考えたからだ。

「ギフト、いりますか？」

「後でよろしく」

「はい」

ＰＣを使わないと言う事は、充電も不要と言う事だ。

そのせいでフレイが自分の役割が減っている事に内心で焦りを感じていた事など知る由もない優斗は、彼女の嬉しそうな返答に気付かず、起動中のディスプレイを見つめる。

「って、げっ」

「どうしました？」

「ブルーバック。壊れたかな？」

画面に出ている内容を読みながら、優斗は頭をかく。

ＯＳの欠損エラーと表示され、優斗はＣドライブのリカバリーを

行えば良いと言う指示に従い、操作して行く。
幸い、リカバリーディスク内蔵型であった為、支障なく行う事が出来た再インストール中に手持無沙汰になった優斗は、このタイミングでバッテリーが切れては大変だと考え、フレイに充電を依頼する。もちろん、2つ返事で了承される。

「直るんですか？」
「多分」
再インストールを終え、再起動させたＰＣを優斗が操作して行く。

Ｃドライブのデータは、当然ながら全滅。
Ｄドライブのデータは無事だが、そこに入っているのはダウンロードしたフリーソフトや辞書、画像のみ。

ウェブ履歴が全滅した事が、一番の痛手だ。

「壊れなかったけど、これはキツイなぁ」
「大丈夫じゃないんですね？」
フレイの言葉に頷きながら、優斗はフリーソフトのインストールを開始する。

ごく一般的な圧縮・解凍ソフト。
資金的な問題で正規品を入れていない為、解凍前のデータが残っていたフリーの表計算ソフト。

ウェブ接続やエクスプローラー系のソフトはあまり意味がないと判断し、手持ちのデータのみでデスクトップとツールバーを適度にアレンジして、電源を切る。

「まぁ、まとめた内容は紙に写してあるし、使えるソフトがあるか

らまだ使えるかな」
「よく判りませんけど、よかったです」
これを無くしたら一大事だ、と優斗はジュラルミンケースから紙束を取り出す。

ユーシアでの研究を行う際、使えそうな内容を片っ端から書いた紙と、実践した結果をまとめた物。
今は無用の長物でも、当初に考えていた通り、ある程度の信用と資金を得た後であれば、有効活用する機会もあるだろう、と大事にしまう。

「この機会に分解掃除でもするか」
「手伝いましょうか？」
「いや、いい」
優斗が再度ジュラルミンケースに手を入れると、今度はドライバーを取り出す。

これは優斗がこちらに持ち込んだ物ではなく、ユーシアの職人に頼んで作って貰った品だ。もちろん、費用はユーシア家持ち。

頭を潰さないように慎重にネジを外し、内部に溜まっている埃を取り除いて行く。
焦らず、ゆっくりとした手つきで作業する事３０分。かなり汚れていたが、なんとかほぼ全ての清掃を終えて元通りに組んでいく優斗の手が、あるパーツで止まる。

「……これなら作れるかも」
閃いてしまえば実行したくなる。

そんな自分の行動を、売る訳じゃないし、と言い訳を付ける事で

正当化した優斗は、パーツをＰＣから取り外すと、明日の買い物リストを作る為に、新しい紙を1枚取り出した。

早朝から、街に2つあると言う金工職人を順に尋ね、ある物の作成依頼をした優斗は、上機嫌でシェーン商会の支店へと向かった。
そこで紹介状を見せ、受け取った荷物を乗って来た荷馬車に積み込むと、礼を言ってすぐに宿へと戻る。

フレイとユーリスは2人で買い物に出ており、昼食も外で摂る事になっている為、優斗は再度荷馬車を預けた後、宿に頼み、留守番のライガット共に昼食を摂った。

「もう一回出かけて来ます」
「急ぐのか？」
「そんなには。何か用事ですか？」
「暇つぶしに話し相手が欲しいんだが」
多少は動けるようになったライガットだが、娘であるユーリスから無暗に動く事を禁止されている。

娘が居ない間も律儀にそれを守り、半日ずっと木と短剣で戯れていた事に、微笑ましさと共に多少の同情を覚えた優斗は「わかりました」とだけ告げて、椅子に腰かける。

「そういえば、それ、すごいですね」
「あ？　あぁ、元は夜番の時の暇つぶしだけどな」
木から削り出された獣の像。

無事に動く右手で短剣を持ち、左手で木を固定して削っている姿

は手慣れた物で、中々見栄えも良い。

「路銀の足しにもなるしな」
「趣味と実益を兼ね備えてるって感じですか？」
「んなとこだ。そういや、ありがとな」
「何がですか？」
「約束、守ってくれただろうが」
優斗がユーリスに初めて会った時、昼食を買いに行く際にちらりと見せられた物。

それはライガットと約束していた、年頃の女性が喜ぶ贈り物だ。

「おかげで怪我した事を怒られるのが減った気がする」
「そりゃ、よかった」
「代金は嬢ちゃんに渡しといたからな」
優斗は、それ受け取ってないな、と思ったが、追及はしない事に決める。

言えば素直に渡すだろう。だが、言わずに居たらそれをどうするのか、少しだけ興味を持った。

「あー、いや。そんな事じゃなくてだな」
「はい？」
歯切れの悪いライガットの言葉に、言い辛い事を言おうとしているのだろうと予想した優斗は、すぐにその内容に思い当たる。

「恩人に無礼な言い草だとは思うんだが……」
「助けられたのはお互い様です」
「すまん。で、要件なんだが。
支払いはちゃんとする。だからた頼む。ユーリスに無茶な要求は

せんでくれ」

勢いよく頭を下げられ、優斗は困ってしまう。

親が娘を心配するのも、自分のせいで迷惑をかけたくないと思うのも理解出来る。そしてユーリスは年頃の娘で、優斗は男だ。ライガットがそういった想像をしてしまうのも、無理はない。

「しません、と口で言っても説得力がないですよね。フレイを連れてる身じゃあ」

「嬢ちゃんが虐げられていない事は、見てればわかる」

「でも、男女の事はまた別問題だ、と」

「大事な娘なんだ」

言いにくい部分を代弁しながら、優斗はライガットの言葉を引出して行く。

血が繋がっていないらしい親子の、異常に強い絆に、優斗は少しだけ感動を覚える。

ユーリスの方も、何があっても、何をしても払うから怪我が治るまで支払いの件でライガットに詰め寄る様な事は止めてくれと、遠まわしに言われた事がある。

「良い父娘ですね」

「自慢の娘だ」

「自慢、します？」

優斗がにやりと笑うと、ライガットも同じように笑う。

ライガットが、こほん、と咳払いをし、優斗が手渡した水差しを受けって喉を潤すと、語り始める。

「あいつを拾ったのは戦場でな。

王国軍に攻め込まれた村の奪還に参加してる時に見つけた生き残りだ。あぁ、俺は昔、傭兵やってたんだよ」

てっきり、うちの娘はこんなにすごい、こんな事が出来るなどと言う親馬鹿な自慢話が始まると思っていた優斗は、予想外の展開に驚く。

「そん時、母親でも、姉でもないって女から4つか5つくらいのあいつを預けられて、仕方なしに連れて帰ったんだけどよ。孤児院にでも預けるかって時に、なんで素直に受け取っちまったのか、気づいたんだよ。そういやあの女、故郷の幼馴染に似てたな、ってな」

何度か水を口にしながら続くライガットの語りを、優斗は相槌を打つ以外には何もせず、耳を傾ける。

引き取る事を決め、傭兵稼業を止めて比較的安全な護衛を始めた事。

最初は懐いてくれず、ひたすら困った事。

武器に興味を持ち、女らしく育てる計画がおじゃんになったが、内心嬉しかった事。

裸を見せる事を恥ずかしがり始めた頃、お父さん嫌いと言われて本気で落ち込んだ事。

酒の飲み過ぎを咎められ、喧嘩してしまった事。

そんなありきたりで、普通の父娘の様なエピソードを、ライガットは時には楽しそうに、またある時は自慢げに語り続ける。

2時間以上かけて、最近は護衛対象に口説かれる機会が増えて来たので、主に女性の警護依頼を受ける様に言ったせいで別行動が増

えたと言う愚痴まで到着し、ライガットはようやく言葉を止める。

「良い娘さんですね」

「だろう？」

長い話を聞き終え、優斗は今まで以上に、この人の怪我がきちんと治って欲しいと感じていた。

「っと、長居させちまったが、大丈夫か？」

「平気です。

ちょっと帰りが遅くなるかもしれない、と2人に伝えておいて下さい」

「わかった」

この世界の生活や考え方を知る一端として欲したはずの話に、かなり感情移入してしまった事に、優斗は後悔していなかった。

ただ、無理なく治療費を返済して貰えるプランを考えなければ、この付き合いが長く続かない事になりそうだと考え、その方策を考えながら、金工職人の元へ向かう為、部屋を出た。

早朝から荷馬車を持ち出した優斗は、金工職人に大枚を叩き、急いで作らせたそれを積み込むと、出発時刻に遅れない様、急いで宿へと戻る。

「朝帰りですか？」

「うわっ」

夜通し出かけていた優斗を出迎えたのは、ジト目のフレイだ。

一度宿に戻り、出発までには戻る旨は伝えていたが、その理由は

説明していなかった事を思い出し、優斗は彼女がどんな想像をしているのかと、戦々恐々とする。

「あのー、フレイさん」
「何ですか？」
「決して、やましい事はしてませんので」
「別に、ご主人様が何をしていたとしても、私が口出しする事ではありません」
フレイの言葉は正論で、それ故に優斗は反論出来なかった。

ただし、フレイは奴隷と言う立場を、優斗は恋人ではないと言う立場を上げてと言う違いはあったが。

「ちょっと試したい物が出来て、完成したらフレイに手伝って欲しいなぁー、なんて」
「手伝えとおっしゃるのでしたら手伝いますが、私で良いんですか？」
「フレイでないと困ると言うか、出来ないと言うか」
冷や汗をかきながが発した優斗の言葉に、フレイが表情を硬くする。

理由も説明せず、一晩中どこかに言っていた優斗の言葉は、彼女にとってどれも言い訳にしか聞こえない。だが同時に、嘘を吐いていないとも感じていた。

「では、すぐにでも始めますか？」
「いや、時間がかかるだろうから、ライガットさんの療養中にやろうかと思っているのですが」
お伺いを立てる様な言葉は、尻すぼみに弱くなって行く。

憎からず思っている女性に、夜遊び、もしくは夜歩きを咎められ

ると言うのは、優斗にとって初めての経験だ。

『むこう』でも飲み会で日が変わるか変わらないか程度の時間に帰った事はあるが、優斗が『アイツ』に何かを言われた事は、一度も無い。

「あの、ご主人様」

「ん、何？」

「一応言って置きますが、本当にそういうところに行くくらいなら、私に言ってくださいね？」

「あー、それは、どう言う意味で？」

むず痒さを感じながら、優斗はフレイの目を覗き込む。

少し俯き気味の瞳と優斗の眼があうと、そこには悪戯っぽい色が浮かんでいる事が判った。

「私が添い寝してあげますから、ね？」

「添い寝、だけ？」

「それはご主人様次第です」

くすくすと笑うフレイ。

そろそろ生殺しの現状をどうにかしたいな、と思いながら、優斗は乾いた笑いを浮かべる。

そんな空気を破るかのように、ユーリスとライガットが現れる。

2人は優斗とフレイを荷台へと促すと、御者台へと腰かけ、荷馬車を発進させる。

「すいませんけど、お願いします」

「おう、っても、俺は御者はさせて貰えそうに無いけどな」
「当たり前でしょ」
「はは」

職人と共に夜通し起きていた優斗は、眠くて仕方がないと寝床に横たわる。そうでなくとも、夜番をする為には、眠っておかなければならない。

すぐに眠ってしまいそうだ、と言う優斗の考えは、フレイがその隣に現れた事で、霧散する。

「えーっと、フレイさん？」
「添い寝、するって言いましたから」
ただ、横で眠るだけであれば、優斗にとってはとても残念な事だが、慣れてしまったので平気だ。

今、優斗が困っているのは、腕を取られて枕代わりにされている上に、ぴったりと抱き着かれているからだ。

「落ち着かないんで、離れて欲しいなぁ。眠いし」
「私は落ち着きます」
御者台の方から笑い声が聞こえ、優斗はため息を吐く。

優斗はまた1つ知る。
どうやらフレイは、放置される事をとても嫌う様だ、と。

ユーシアでもかなり拗ねていた記憶があるので間違いないだろう。
そう確信した優斗は、以後、今まで以上に気を付けようと考えると共に、今回の仕打ちを甘んじて受け入れる事に決め、その体勢のまま眠る努力をする事にした。

4人の旅路（後書き）

山へ向かう話でした。

優斗くんは懲りずに現代技術の再現に乗り出しました。

山の薬師様

シェーン商会による事前準備のおかげもあり、さほど苦労もなく山道を進んでいく優斗達一行は、既に村と目の鼻の先の距離まで来ていた。

御者台には男2人が座っており、手綱はもちろん、優斗が握っている。

「あの、じっと見るの、止めてくれませんか？」

「それ以外、する事がねぇんだよ」

ライガットの言葉に、優斗は数分前の出来事を思い出す。

到着してすぐにでも山中に居を構えていると言う薬師に会いに行くと主張したユーリスが、身支度をすると言う事で、荷台から追い出された。

そして優斗が覗かない様、ライガットは監視を命じられた。ユーリスからは冗談っぽく、フレイからは無表情で。

見た目は幼気な少女であるフレイを、優斗がどの様に扱っているのかと言う事柄に関しての弁解は出来ていないが、接しているうちに警戒は解け始めており、優斗とユーリスの関係は良好と言える程度には回復している。

「人が居ますね」

「おぉ、ほんとだ」

村と外との境界なのだろう、簡単な柵が建てられている場所に、男が2人立っている。

優斗と目が合うと、男達はぺこりとお辞儀をし、どこかへ誘導する様に歩き出す。

目的地である山の麓にある村は、人口が１００人を切る、小さな集落だ。

住人達の生活を賄えるだけの食糧をなんとか自給し、税には木を切ったり、藁を編んだり、時には蜂の巣を取ったりと、山で採れる臨時収入を当てて生活している。薬師のもたらす薬も、そのうちの１つだ。

「宿とか、なさそうですね」

「ねぇだろな。

でもまぁ、どっかで部屋くらい貸してくれんだろ。金払えば」

優斗はそれに頷くと、先導の２人を追うように、馬に指示を出す。

辺境の集落にまで来る行商人がどれだけ貴重であるのかは、今さら口に出して説明する事ではない。

荷馬車が集落で、最も大きな家の前で立ち止まった２人に追いつく。

優斗は、きっと村長の家だろうと予測し、御者台から降りる前に荷台との間にあるホロを叩き、中に向けて声をかける。

「ちょっと挨拶して来るから、待ってて」

「到着したなら、すぐにでも山へ――」

「居場所も知らないのに？」

「うっ」

「それに、ライガットさんの移動もしないと。フレイ」

「はい」

飛び出さない様に見張っていて、とまではあえて言わず、優斗は

御者台から飛び降りる。

荷馬車の方は任せておけばいいだろうと判断した優斗は、何時もの営業スマイルを浮かべて、いつの間にか1人になっている案内人に声をかける。

「どうもはじめまして。行商人の優斗と申します」

「中に居る」

案内人は、それ以上は何も言わず、家の扉を指差す。

その態度に思うところがなかった訳ではないが、あえて揉め事を起こす事も無いだろうと考えた優斗は、何も言わずに扉に向かい、手をかける。

扉を開けると、そこには小さな女の子の姿があった。突然開いた扉に、反射的に振り返った少女は、緊張した面持ちで優斗の様子を伺っている。

「あー、えっと。こちらにいらっしゃる方に合うよう、聞いたのですが」

「だれ？」

「うんと、行商人をしている優斗といいます。村の偉い人に会いたいんだけど、ここに居るかな？」

「ぞくちょーのおじーちゃん？」

「多分、その人」

族長、と言う肩書から、優斗は少数民族と言う言葉が思い浮かんだが、すぐに頭の隅に追いやる。

次に考えたのは、どこへ向かうべきか、と言う疑問。その答えを得る方法として、年齢が2ケタに届いているかも怪しい目の前の少

女に問う以外に何も思い付かなかった優斗は、少女と目線を合わせる為に、その場にしゃがみ込む。

「ミシャ、どうしたの、って、お客様」
「あ、どうも」
「娘がご迷惑を。どうぞこちらへ」
「どうも」
慌てて立ち上がった優斗は、ミシャと呼ばれた少女に小さく手を振ると、彼女の母親らしい女性に先導され、家の中へと入っていく。

案内されたのは、大き目のテーブルが鎮座する、こじんまりとした部屋だった。
来客など年に数えるほどしかない集落に応接用の部屋などあるはずは無く、普段は族長の一家が食堂として使っている場所だ。ここがこういう場に利用される理由は、大きな机と椅子があるから、と言う理由がほとんどを占める。

「どうも初めまして、族長様。行商人の優斗と申します」
「族長のシェールだ。ようこそ、商人殿。歓迎する」
愛想の無い表情と言葉が飛び出し、案内の女性と入れ替わりお茶を持って入室して来た女性がため息を吐く。

その反応に、何時もの事なんだろうな、と判断した優斗は、あえてそれに触れる事なく、率直に要件を切り出す。

「早速で申し訳ないのですが、２つ程、お願いしたい事があるのですが」
「なんだ？」
「まず、４人分の寝床を貸して頂きたい。もう１つは山の上に住むと言う薬師様に会せて頂きたいのです」

族長は優斗の言葉を吟味しているのか、無言でテーブルに置かれるカップを見つめる。

族長と優斗は、示し合わせたかのように同時にカップに手を伸ばし、中身を半分程飲み干す。そしてカップを置くかちりと言う音と共に、族長の視線が優斗に向かう。

「家を1つお貸ししよう。それと、山に入るのは構わないが、案内は出来ない」

「何故でしょうか？」

「そう言う約束だからだ」

薬師が直接売りに出さないからこそ、この村は差額で儲ける事が出来る。

その辺りに出来ない事情があるのか、他に理由があるのか。どちらにしても、その約束に侵入者の妨害が条件に入っていなかった幸運に感謝しながら、優斗は数枚の銀貨と共に塩の入った小さな袋を1つ、差し出す。

優斗が塩を選んだのは、保存がきく、実用的な物であると言う理由と、単に安く仕入れられたからと言う理由からだ。

「家の借り賃と、こちらは族長様への贈り物です。お納め下さい」

「うむ」

「滞在が長引く様であれば、また追加で支払わせて頂きます」

細かい日数を追及しないまま、家を借りる交渉が終了する。

族長には、品物の売買の際の事を考え、優斗の言い値で貸す事により好印象を与えようと言う思惑がある。言葉遣いや態度で台無しになっている点を除けば、その行動は集落の代表として、正しいモ

ノだ。

その後、世話役を付けると言う族長の言葉を断りきれず、食事の準備だけ人手を借りる事となった優斗は、商売の話は明日の朝からと決め、案内人に連れられて街へ出稼ぎに行っていると言う男の家に向かう。

主人が不在であるにも関わらず家は綺麗に片付いており、納屋にもきちんと飼葉が準備されている。

「優斗さん、私は山へ行きますので」
「待て待て。せめて場所だけでも聞いてから」
「もう聞いてあります。明日中には戻りますので」
そう言って飛び出して行ったユーリスを、優斗は立ち尽くしたまま見送る。

ベッドへ押し込まれているライガットが苦笑いを浮かべている事から、きっと普段からああ言う感じなのだろう、と優斗もつられて苦笑する。

「いいんですか？」
「心配なのは、薬師に口説かれる事くらいだな」
「山の中で1人なのは心配じゃないんですね」
「男と2人の方が危ないだろう？」
護衛と言う職についている人には無用な心配だったな、と優斗は納得する。

その後、昼食を食べ終えた優斗とフレイは、ライガットに追い立てられる様に散歩に出かける。
街を出てからは役割分担の関係や、フレイの近くには常にユーリスが居た為、ひさしぶりの2人きりでの会話を楽しみながら、目的

地へと向かう。

「そういえば、この辺りじゃないですか？」
「あれっぽいけど。なんか、予想と違うな」
優斗とフレイは、万病に効く湯を取って来る、と言う名目でライガットに家から追い出された。

そして、到着した先には、小さな器サイズの受け皿と、そこに流れ出る濁った湯があった。

「万病に効く湯って、飲むのか？」
「普通に考えれば、そうじゃないですか？」
温泉を想像していた優斗と違い、フレイは正しくそれを予想していた。

湧き出るお湯と言えば温泉。
そんな自分の思考が、この世界では常識的でない事に気付き、優斗はがっかくりと肩を落とす。

フレイは不思議そうにしながらも、目的の湯を持参していた皮袋に入れると、この後どうするのか、と視線で優斗に尋ねる。

「とりあえず、ライガットさんにそれ届けようか」
「はい」
「その後は、あれを組み立てようかな」
「お手伝いします」
「ありがと」
「ところで、あれはどんな物になるんですか？」
「それは出来てからのお楽しみ」
あれ、について追及してくるフレイをのらりくらりと躱しながら、

優斗は借家への道を進む。

優斗は、色々な事に口を出し、質問をしてくる様になったフレイの変化を好ましく思っている。

立場を弁え、言われた通り、もしくは主人の望む様に行動するだけだった頃に比べて、彼女の表情は明るくなった、と優斗は感じていた。

もちろん優斗は、それすらも主人の望む行動と取っているだけである、と言う可能性を考えなかった訳ではないが、それに関しては、奴隷解放を望まない理由と同じで、これ以上の追及も証明も難しいと判断して、現状を維持すると決めている。

借家に戻ると、優斗は納屋に停めてある荷馬車からパーツを取り出し、部屋へと運び込む。

家はリビング以外の個室が3つ存在し、各自に1部屋ずつ割り振られている。ユーリスが戻った時に誰と相部屋になるかは、本人に決めて貰う事になっている。

自分の部屋に荷物を運びこんだ優斗は、ライガットにお湯を届けに行ったフレイと合流すると、基本部分の作成に取り掛かる。

優斗がまず取り掛かったのは、コイルの作成だ。

フレイと2人でひたすら丁寧に銅を巻き付け、完成したコイルを使ってモーターを作成する。それに電気を流すが、回転する気配はない。更に流し続けると、熱を発し始め、優斗は慌ててフレイを止める。

「ダメだこりぁ」

「何がダメだったのでしょうか？」
フレイの言葉を聞き流しながら、優斗は自分の知識と、今回行った手順を照らし合わせて行く。
１時間程、ああでもない、こうでもないと繰り返した結果、手順に間違いは無く、優斗の知識が間違っているか、材料に問題があるかと言う結論に達する。
「結局、何を作っていたんですか？」
「ん、あぁ。扇風機」
「扇風機、とは何ですか？」
「風を起こす機械、かな」
優斗がそう告げると、フレイは不思議そうな顔をする。
一体どうしたのかと、優斗も同じような表情を浮かべると、フレイは優斗から少しだけ視線をズラしながら口を開く。
「あの、扇風機を動かすには、私のギフトが必要なんですよね？」
「だね」
「結局ギフトを使うのでしたら、天の流れの欠片を持つ人に頼んで、風を送って貰う方が早いのでは？」
「……そんなのあるんだ」
優斗ががっくりとうなだれる。
こうして扇風機作成は、回らないモーターと言う結果を残して終了となった。
翌日、優斗は約束通り、朝から族長の家に向かった。ライガット

は相変わらず留守番だが、今日はフレイと一緒だ。

「よく参られた。どうぞこちらへ」

「どうも」

「では、早速だが買い取って頂きたい物がある」

そう言って、族長は部屋の一角を指差す。

そこには様々な品物が並べられており、そのほとんどがこの山で採れる品だ。

「確認させて頂いても？」

「もちろんだ」

優斗はフレイに目配せすると、机に紙とインク、ペンを置いてから立ち上がる。

品物を確認しながら、名前を呼んだものを左手方向に置き、右手方向に置く際には何も言わない。

そんな優斗の言葉を受け、フレイは次々に品名を紙へと書き出して行く。

「申し訳ありませんが、こちらの商品は買取を見送らせて頂きたい」

「何故、それらは買い取れん？」

「荷馬車に積み込める量にも限界がありますので」

そう言いながら、優斗はテーブルへと戻る。

フレイが優斗の前へ紙とペンを移動させると、優斗はそれを族長の方に向け、営業スマイルで交渉を開始する。

「こちらの蜂蜜は、銀貨1枚で買い取らせて頂きます」

「む。そうか」

つくづく蜂蜜と縁があるな、と思いながら、優斗は蜂蜜の欄に『公国銀貨1』と書き込む。

これは今までの買取価格からすれば、多少ではあるが高めの値段であり、族長が反応したのはその為だ。

族長はクロース領を中心に、蜂蜜の価格が僅かに値上がっている事を知らない。であれば、ここで安く買い叩くのも1つの手ではあるが、優斗はあえてそうしなかった。

最初に良い印象を付けると言う優斗の作戦は、一歩間違えれば侮られ、他の商品でごねられる可能性が高くなる。今回、それを承知でこの手を打ったのは、昨今の凶作と、最近、この集落に向かう行商人が居ないと言う情報を得ていたからだ。

税は基本的に、取り立てに来る者がおり、彼らも持てる荷物には限界がある。故に、大きな物で税を納められると、一度街に戻るなどの対処が必要になる為、安く見積もられがちだ。その点、貨幣であればあまり嵩張らず、役人にも良い印象が与えられる。特産品がある村ではそちらの方が良い場合もあるが、この集落にはそれが存在しないので、貨幣がベストであると言える。

「その他の物に関してですが、合せてこのくらいでいかがでしょうか？」

「む。しばし待て」

族長は避けられた商品と優斗から差し出された紙を見比べながら、考え始める。

優斗はその姿を見つめながら、内心ほくそ笑む。

荷馬車に荷物が乗り切らないと言うのは、半分真実で半分嘘だ。

全てを乗せる事は難しいが、避けた品の大半を乗せられるくらいの

スペースはある。

「実は、もうすぐ税の徴収が来る」
「ほう、そうなのですか」
「今年は凶作で、村の貯えで食糧を買ってしまってな」
「それで、色々と山で採取されたのですね」
「その通りだ」
族長が言わんとする言葉の意味を、優斗は瞬時に理解する。

役人は現物で納めた場合、かなり安く見積もる。それでは集落で食べる物まで持っていかれる可能性があるので、多少安値であっても、避けた商品を買い取って貰いたいのだ。

「どの程度の金額をお望みですか？」
「いや、それは」
「荷台にはまったく余裕がない訳ではありませんが、どの商品を積んでも同じ金額になる訳ではありません」
族長は優斗を睨みつけ、しかしすぐに何かを思いついたのか、視線を商品に向ける。

その行動に次の言葉が予想出来た優斗は、にこやかに、そしてやんわりと口を開き、言葉を紡ぐ。

「これら全てをこの価格で買い取らせて頂けるのでしたら、追加で他の物を購入する事も、吝かではありません」
「くっ」
優斗としては、交渉役やお抱えの商人を雇えない様な小さな集落であまりに無茶な商売をする気はない。

族長の反応に、下準備としてはこれで十分だろうと判断した優斗

は、更にもう1枚の紙を取り出し、幾つかの品名を買いて族長の前に紙を差し出す。

「これは何だ？」

「私が持っております、商品の目録です。

その値で買い取って頂けるのであれば、そこにある全ての商品を買い取らせて抱きます。この値段で」

そう言って、優斗は端に書いた数字を丸で囲む。

優斗が提示したのは、この集落が払っているであろう、税よりも額面が少し大きい。小さな集落がどの程度の税を支払うのか、優斗自身は知らなかった。だが、同じく地方の村出身であり、村長の娘でもあるフレイは、領の違いによる誤差はあれど、大よその額を知っているので、予想する事くらいは出来た。

「まだしばらく滞在する予定ですので、ゆっくりと考えて下さい」

「そうか。そうさせて貰う」

「あ、蜂蜜だけ先に買い取らせて頂いても構いませんか？」

「もちろんだ」

実行するかは別にして、滞在中に税の徴収が来ればもっと吹っかけられそうだな、と考えながら優斗は族長の家を後にする。

昼食を作る為にやって来た女性が、昨日の人よりも少しだけ若い人に変わっていた事に様々な意図を感じた優斗だったが、当然何事もなく、夕方にユーリスが戻るまで、フレイとのんびりと過ごした。

空が暗くなり始めた頃、宣言通りユーリスが戻って来た。

「優斗さん……」
「ダメだったか」
偏屈な薬師、と聞いた優斗は、ユーリスに様々な助言をしていた。
その中に、何度も断られたら一度引く事が入っており、彼女はそれに従い、しぶしぶと山を降りた。

「小屋の扉すら開けてくれないなんて……」
「難敵だなぁ」
「明日、もう一回行って来ます！」
「その前に、情報を整理しよう」
優斗の質問に答えていくユーリス。しかし、彼女が得た情報は少ない。

まず、住んでいる小屋の詳細な位置。1人で済んでいるらしいと言う事。人に会うのが嫌いらしいと言う事。
逆に、性別から年齢まで、個人情報はまったく不明だ。声も扉越しのくぐもった声では正確に判別出来なかった、と言う事だ。

「お金や贈り物にも全然興味なさそうでした……」
「家族もいないとなると、外堀を埋めるのも難しいか」
肩を落とすユーリスを慰めるように、フレイが背中を撫でる。

その優しい行動と手つきとは裏腹に、優斗に向けられている視線は、とても冷たい。

「次は俺が行って見るから、フレイの護衛、頼める？」
「えっ、そんな」
「女だからダメだった可能性もあるし」
どうあがいても覆せない原因を指摘され、ユーリスが黙り込む。

「山歩きは一応経験あるから大丈夫」
「かなり遠いから、朝から出てもその日の内に帰っては来れないですけど」
「山の中での野宿も、した事あるから平気。それに上手くいけば、薬師さんの小屋に泊まれるだろうし」
優斗はそう言いながら、小屋の近くで野宿すれば獣も出にくいかもしれないと思い付く。

渋るユーリスを言いくるめ、優斗は出発を明日の早朝と決める。
ユーリスを説得する間、フレイはどちらの味方もしなかったし、ついて行くとも言わなかった。後者に関しては、優斗が先手を打って釘を刺していた事もあり、かなり不満そうではあった。

早くに眠った優斗は、日が上る前に置きだし、日の出と共にフレイに見送られて山へ向かう。

「くれぐれも無茶はしないでくださいね」
「わかってる」
「こっちがお昼用で、こっちが夕食用です。持ちが違うので、間違えないでくださいね」
「わかってるって」
「遭難した時は――」
「いや、もういいから」
「むぅ」
拗ねるフレイ。

容姿に合いすぎな子供っぽい仕草。
その姿からは、優斗を誘惑する際に生じる色気や、コケティッシ

ュな魅力の片鱗すら見つける事が出来ない。

「きちんと戻って来たら、ね？」

一転、今度は悪戯っぽく微笑むフレイ。

そんな彼女の頭に手をやり、がしがしと髪を掻き回した優斗は「いってきます」と告げると、振り返らずに山へと入る。

背後から聞こえる「いってらっしゃい」の声ににやけそうになる顔と心を引き締めて、優斗は久しぶりの山登りをする為に、前進する。

日が沈む少し前に、優斗はその小屋の前に到着した。

昼前に出て、同じ様な時間に到着したと言うユーリスの言葉を思出し、溜息を吐いてから、扉を叩く。

「返事がない。すいませーん」

再度扉を叩き、反応が無い事を確かめると扉に耳をあてて目を瞑る。

音がしない事を確認し、目を開けた瞬間、フード付きのローブ姿と言う人影が、飛び込んで来た。

「えーっと、私は怪しい者ではなく、いえ、行動が怪しいのは十分承知しているのですが」

扉に耳をあてたまま、優斗は弁解を始める。

「実は、ここに住む薬師様に折り入って頼みがありまして。その、貴方がその薬師様でしょうか？」

「ん」

肯定とも否定とも取れる声と共に、フードの人物が視線で扉を示す。

そこでようやく自分の体勢を思い出した優斗が扉から離れると、フードの人物は扉を開け、あっさりと優斗を中へと招き入れる。

「私は、行商人の優斗と申します」
「貴方、この世界の人じゃないね？」
予想外の言葉に、優斗の表情が凍りつく。

優斗の視線が釘付けになっている中、目の前の人物はゆっくりとした動作でローブのフードを取り去った。

山の薬師様（後書き）

偏屈と噂の薬師さんが登場です。

そして優斗くんの現代機械再現は、今回は失敗に終わりました。

知る事の意味

取り払われたフードの下から現れたのは、美しい女性の顔だった。

「なんで、って顔だね？」

悪戯を成功させた少年の様な、無邪気な笑みで薬師の女性が笑う。

それに対して、優斗はただ首を縦に振り続ける事しか出来ない。

「この世界に、純粋な人間はもういないからね」

「人間、って、へ？　いますよね？」

そう言ってから、優斗は自分で考えていた、ある事を思い出す。

ギフトと言う特殊能力を持つこの世界の住人は、本当の意味で自分と同じ人間と言う種族にカテゴライズされる者なのか、と言う疑問を。

「その辺は追々説明するから、中で一先ず座ろう」

「……わかりました」

聞きたい事は山ほどあったが、区切られた事で本来の目的を思い出した優斗は、目の前の女性の機嫌を損ねるべきではないと判断し、その言葉に従う。

小屋の中央は地面がむき出しになっており、そこには火を焚いた後が残っている。

女性がそこに何かを放り込むと、たちまち火がつき、残っていた薪が燃え始める。

「ギフトですか？」

「そうだね。本来の意味での、本当のギフトだと言えるかな」
神様からの贈り物。通称ギフト。

様々な能力を発現するそれは、役に立つかを別にすれば、この世界の住人全てが持っている。

「お茶の準備が出来たら、昔話をしてあげる」
「それはそれで興味深いんですけども、実はお願いがありまして」
「君のお願いなら出来る限り聞いてあげる。
でも、その前に懐かしい気配のする君と、楽しくお茶したいなぁ」

これに応じなければ、聞き入れて貰えないのだろう。
そう判断した優斗は、それを言い訳に、自分の興味を優先させる事を決め、いつの間にか火にくべられていたお湯が沸くのを静かに待つ。

「そうそう、私の事はシャーリーって呼んでね、優斗」
「はい、シャーリーさん」
「呼び捨てでいいよ。通称みたいなものだし」
これで通称とか、本名はどんだけ長いんだ、と思いながら、優斗は無言で首肯する。

「さて、まずは君の疑問に答えようかな」
「よろしくお願いします」
「うーん、ますますあの子見たいだなぁ」
流れる様な動作で淹れ終わったお茶を口に含みながら、シャーリーは苦笑する。

普段であれば聞き返していたであろう、あの子、と言う存在について言及する事を忘れる程、優斗は緊張しながら耳を傾け、その顔

をしっかりと見つめる。

「視線があっつーい」

「あっ。すいません」

「いいよいいよ。

で、君がこの世界の住人じゃないと判った理由だけど、そう確信したのは君がギフトを持っていないからだよ」

優斗は唇の端がぴくりと動き、それに被せる様にシャーリーが言葉を続ける。

「まず、ギフトについて軽く話そうかな。

ギフトと言うのは元々、その名の通りこの世界を作った神様から与えられた、世界を調整する能力なんだよ」

世界を調整すると言う割には、発現する能力は弱い上にまちまちだな、と考えていた優斗に対し、シャーリーは心を読んでいるかの様に苦笑し、それについての説明を加える。

「元々、ギフトは創造神が始祖様、人間の言うところの竜神様に与えたモノだったの」

シャーリーが再び、お茶に口を付ける。

優斗はその仕草を見つめながら、その話が本当ならば、ギフトは元々1つだったのだろうと推測する。

この世界の総人口を知らない優斗だが、ここが星である事、そしてここ以外にも大陸がある事を知っているので、少なくはないと言う事は予想出来る。故に、全てのギフトが単一個体に集約した場合、どの程度の能力が発現するのか、予想は出来なくとも恐ろしい程に巨大であった事は判る。

「それを眷属に少しだけ分け与えた結果、天竜とか、氷竜とか呼ばれる竜が生まれたの。
で、眷属もろとも始祖様を滅ぼした人間がそれに成り代わったって訳だよ」

聞いた言葉を咀嚼し、頭に内容をしみ込ませた優斗は、眉を潜めながらも静かにシャーリーの言葉に耳を傾ける。

竜が実在する。
異世界なのだから居てもおかしくないと思う反面、この世界があまりにあちらに酷似していた為、優斗はすんなりと納得する事が出来ない。

「む、信じてないね。
じゃあ、証拠を1つ見せてあげる」

そう告げると、シャーリーは山ほどの薪を火の中へ放り込む。
その結果、一度は火が消えかけたのだが、彼女のギフトによってすぐに炎は勢いを増す。

優斗が、勢いを増した炎が小屋を焼かないか、と心配していると、突然立ち上がったシャーリーが、火の中へ飛び込んだ。

「なっ！？」
「改めて自己紹介。
私は火竜と呼ばれていたモノの馴れ果て。本当の名前はナイショ」

にこりと笑うシャーリーの衣服に炎が移る。
優斗が唖然とする中、火は衣服を焼きつくし、しかし彼女の肌も

髪も、一片も焦がす事はない。

「こんな感じ。
これで信用してくれないとなると、ちょっと困るかな。３０年くらいここで生活してくれれば、老いない証明も出来ると思うけど」
「いいです。判りました。信じます。ですから、一先ず服を着て下さい」

一糸まとわぬ姿で、何故か優斗の方に向かって火から上がって来たシャーリーは、どこか嬉しそうな表情で、優斗から左手にある壁にかけられているローブに手を伸ばす。

優斗は、下着も付けないままローブに袖を通すその姿を直視しない様にしながらも、視界の隅に納め続けている。
今まではゆったりとしたローブに隠れていた上、他に気になる事があったので意識していなかった優斗だが、さすがにこの状況でソレが気にならない程、男として枯れてはいない。何より、最近のお預け状態のせいで普段よりも気になってしまい、目が離せない度合いが大きくなっている。

着替え終わって元の位置に戻ったシャーリーと目が合い、かなり近くから見てしまった豊満な胸と、美しいボディラインの中心にある腰の括れを思い出した優斗の心臓は、ズレたタイミングで大きく鼓動する。

「そんな訳で、この世界には純粋な人間がいないの」
「いや、どんな理由ですか」
「だからぁ、人間が始祖様を殺して、神に成り代わったから、だよ。始祖様を竜神と呼ぶのなら、彼らは人神とでも呼べばいいのかな」

人神。
自分とこの世界の住人はまったく別の生物である、と解釈した優斗は、何故か少しだけ落ち込んでいる事に気付く。

「一応言っておくと、彼らは基本的には人間の身体だから、交配は出来るよ？
私とはわかんないけど」
「……心が読めたりしますか？」
「うーうん。読めない」
優斗の疑わしげな視線に、シャーリーは頬をかいて苦笑する。

「長年の経験ってヤツだよ」
「そうですか」
「じゃあ、そろそろ質問を受け付けようかな」
その言葉を聞いた優斗の頭に、話の間に出来た大量の疑問が浮かぶ。

１０秒程吟味した後、それを口にしようとした瞬間、優斗はある事を思い出す。

「麓の村に怪我人が居るんですけど、診て貰えませんか？」
「お安い御用だけど、山を降りるのは明日ね。
で、次は？」

あっさりと承諾され、拍子抜けすると共に、優斗に新たな疑問が思い浮かぶ。

「何故、先日の女性の依頼を断ったんですか？」
「誰でも診るって評判立つと面倒だしね。
基本的に人は嫌いなの」

「嫌い、ですか？」
「人間じゃなくて人神の方ね。
ギフトを持ってるって事は、私達竜を殺した一族の子孫って事なんだって、判ってる？」
そう告げるシャーリーの眼は、少しだけ冷たい色を帯びている。
「復讐してやろうと思ってた時程には恨んでないけど、好意的にもなれないからね。
これも大昔の話だけど、捕まって処刑されそうになった事もあるしね」
「処刑、ですか？」
「この身体になってからしばらく、復讐の機会を狙って普通に村で過ごしてたんだけどね。
年を取らない魔女だって捕まって、火あぶり」
火あぶりかぁ、と思いながら、優斗はある物語を思い出す。
ユーシアの屋敷で読んだ、魔女狩りの話を。少なくとも、あれは実話を元に書かれていたと言う事実が判明した。
「この身体になる、って言いましたけど、その前は竜の姿だったんですか？」
「想像通りの姿なのか判らないけど、そうだよ。
だから優斗をからかう為に裸になっても恥ずかしくないの」
シャーリーの思わぬ発言に、優斗はがっくりと項垂れる。
わざとかこの野郎、と心の中で暴言を吐きながら、次の質問を口にする。
「では、私がこの世界に飛ばされた心当たり、ありませんか？」

「あるよー」
軽い返事に、優斗はまた項垂れる。

それも数瞬の事で、ここに来て初めて見つかった自分の境遇に関する情報を逃すものかと、優斗は間にある火の中へ顔を突っ込ませそうな勢いで身を乗り出し、質問を重ねる。

「原因は？」
「始祖様と眷属、って言うか竜を狩った時になんかこう、歪んだ景色の中に人が消えたらしいから、その代わりだと思うよ？」
機械でも自然現象でも、仕組みは判らなくとも、原理が判れば利用できる。

ならば、と優斗はそれを利用する方法を思いつくが、言って良いモノか悩む。
悩んだ結果、控えめに、質問と言う形でそれを表明する。

「竜を殺せば戻れる、と言う訳ですか？」
「そうだとしても、竜は絶滅してるから無理かな。
私はもう竜でも神の使いでもないと思うし」

言葉の意味を掴みかねた優斗の表情を見て、シャーリーが苦笑いを浮かべながらローブの胸元を引く。少しだけ見えた胸元を気にしない様にしながら、優斗は次の言葉を待つ。

「私を竜狩りから匿って殺されたシャーリー――この子の事ね――を助けようとしたら、こんな風になっちゃって」
「こんな風？」
「私もいっぱい刺されて死にかけてたんだけど、せめてこの子だけは、って思ってシャーリーに命を送り込む感じで頑張ったんだけど、

何でかこうなっちゃって。
身体を乗っ取ったのか、自分の身体を作り変えてこうなったのかは判らなかったんだけど。きっと、後者なんだろうなぁ」

最後は独り言の様に呟いたシャーリーの言葉を、優斗は、聞き返しておいて申し訳ない、と思いつつも適度に聞き流しながら情報の取捨選択を行う。

そうして現在の自分に関係しない情報を切り捨て、逆に自分に関係する話を聞き出す為に質問を続ける。

「じゃあ、他に戻る方法ってありますか？」
「あるよー。他、とはちょっと違うけど」
またもや軽い返事が返ってきて、優斗は脱力しかける。

狙ってやっているのか、シャーリーはそんな優斗の姿を見て、楽しげだ。

「さっき、竜を殺せばっていったけど、正確にはそうじゃないと思うの」
「何がですか？」
「人が消えた歪みの原因。
あれはきっと、大きなギフトを持った存在が死んだせいだと、私は思うんだ」

シャーリーが、ぴっ、と人差し指を立てる。
優斗がそれに視線を向けると、指先に小さな火が灯り、消える。

「だから、竜並みに大きなギフトを持つ人を作り出して殺せばどうかな？」
「いや、それは」

人を作り出して殺す、と言う部分に抵抗を感じた優斗は、返事を濁す。

それに対してシャーリーは、先ほどの竜を殺せばと告げた時との反応の差に気づき、少し意地悪な、しかしどこか楽しそうな笑みを浮かべて説明を続ける。

「ギフトは調整の能力だって言ったよね。
始祖様が創造神から与えられた使命は、大地に神の恵みが多過ぎず、少な過ぎずの状態を保つ事だったんだ。
私達はそれを、ギフトを意識的に出し入れする事で調整してたんだけど、人は自分の為にしか使わない
でも、人は死ぬ時にギフトを落として、生まれる時に拾って量が調整されているみたいだから、大量に人神を殺せば人の数が減って、数が少ない分だけ質で調整する為に、そんな子が生まれるんじゃないかな？」

息継ぐ暇も無く言い切ったシャーリーの言葉に、優斗は思考が追い付かず、半ば無意識でシャーリーの言葉に返答してしまう。

「1人で人類を滅ぼすのは、無理じゃないですか？」
「確かに1人じゃ、殺すより生まれる方が早そうだね」
「ですよ。他の方法を探す方が現実的だと思います」
「他の方法は思い付かないなぁ」
やはり戻れないのか、と言うのが優斗の感想だった。

こちらに来た当初から戻れないと確信していた優斗だが、一度希望を持ってしまったせいもあり、少し落ち込んでしまう。

「他にも同じ境遇の人を探して、手伝って貰うとか。私も復讐がて

ら手伝うし」
「同じ境遇、って。いるんですか？」
「へ？　君が居るって事は、始祖様・天竜・氷竜の時に消えた人の代わりはいるんじゃない？」
自分以外にもあちらの人間がいる。
1人ぼっちだと思っていたこの世界に、仲間が居る。
その事実に、優斗は自分の心が舞いあがって行くのが判る。
「君は間違いなく、シャーリーの代わりだろうし。気配そっくり」
「その、私の仲間がどこに居るのか、判りませんか？」
「判らないし、知らないよ。
消えたのがどんな人なのか知らないから、気配から探すのは難しいかな。
でも、近くでちゃんと見ればギフトの有無で判ると思うよ？」
レーダーとしては感度が低すぎるな、と思いながら、優斗は他の手を考え始める。
思考に没頭しようとした瞬間、優斗に向かって何か柔らかい塊が投げつけられ、我に返る。
「私、ちょっと怒ってたんだけど？」
「あ、すいません。
いや、ごめんなさい。無神経でした」
優斗が素直に謝ると、シャーリーは、あっさりと許した。
「で、もう質問、終わり？」
「えぇ、っと。
じゃあ、私がギフトを持つ事は可能ですか？」

「無理」
きっぱりと告げられ、優斗はまた少しだけショックを受ける。
優斗も平均的な男の子程度には、不思議な能力への憧れを持っていたので、断言され、可能性すら残して貰えなかった事への落胆は大きい。

「どうやっても？」
「ギフトを贈る、って言うのも変な言い方だけど、それが出来るのは始祖様だけだったし。
私達眷属は、始祖様から1つずつ役割を与えられただけで、正確には神様でもなんでもないからね」

その言葉に、優斗に別の疑問が浮かぶ。
ならば、人神も正確には神ではなく、単なる人が役割を得ただけではないのか、と。

「それは違うよ」
疑問を率直にぶつけた優斗に対し、シャーリーはそう答える。

「始祖様を殺して竜神と成り代わったのが人神。
他の竜は、分け与えられていた能力を取り返す為に殺された」

人の欲望はどこにあっても底知れない。
そんな感想を抱きながら、これ以上詰め込んでも整理しきれないと判断して、優斗は質問を一旦終える事に決める。
もちろん、判らない事があればまた教えて欲しいとお願いする事も忘れない。

「じゃあ、次は私の質問に答えてもらおっかな」

「よろこんで」
その後、シャーリーは優斗の世界について、様々な事を尋ねた。
まず、優斗自身の事。
生い立ちから趣味、特技まで、様々な事を尋ね、優斗はそれに対して丁寧に答えた。
次に、神様について。
宗教について触れれば、似たような事があったと笑い、日本の八百万の神を語れば、今のこの世界にはもっと居そうだと笑う。
そして一番熱が入ったのが、食べ物。
食事には余り重きを置いていないと言っていたシャーリーだが、優斗の話す未知の食事と、何よりも甘味に興味を持った。薬師説得の一手段として持ってきた蜂蜜飴と、村で作った蜂蜜ミルク飴がお気に召したようで、砂糖と言う物にも興味深々だった。
「やっぱり、女性の甘味好きは世界共通なんですね」
「竜は無性だけどね？」
「女性の身体で味わってると言う意味では、同じでは？」
「あー、確かにねー」
そんな風なやり取りを何度も重ねるうちに、夜が更けていく。
いつの間にか優斗が小屋に泊まる事が決定して、何事も無く夜が明け、朝食を摂ってから山を降りる。
山を登って来た優斗も、ひさしぶりに、しかも山ほど人と話したシャーリーも疲れ切ってぐっすり眠ってしまった為、出発の時間は少し遅めになってしまった。
シャーリーを連れて戻ると、優斗はユーリスは頬りにお礼を言わ

れる事になる。
　それは、ライガットを治療するシャーリーに「煩い」と指摘されるほどで、優斗はかなり辟易していた。

「一月ほど薬を塗りながら、徐々に動かす練習をして」
「はい。ありがとうございます」
「元に戻るにはかなり時間がかかる」
　村に来てから無愛想になったシャーリーの言葉に、優斗は違和感を覚えながらも指摘はしなかった。

　それは、老いないと言う彼女の性質に由来する問題なのか、それとも単純に人が嫌いだからなのかは判別出来なかったが、どちらでも関係ない、と優斗は結論する。

　治療を終えると、もうすぐ暗くなるからと言うユーリスの言葉を振り切り、一月分の薬を作ると呟いたシャーリーが薬草を探しに山へ向かい、優斗はユーリスのお礼攻勢から逃れる為、フレイと共に散歩に出かける。お礼を言う相手、どちらにも逃げられる形になったユーリスは、しかし嬉しそうにライガットのリハビリを手伝っている。

「何かあったんですか？」
「あー、うん。わかる？」
「ご主人様は判りやすいですから」
　フレイに指摘され、優斗はぽりぽりと頬をかく。

　これからの行動指針について、どこまで話すべきか悩んでいると、木の影から男の子が１人、現れる。

「旅人の兄ちゃん！」
そう言って少年は、両手にぶらさげていた物を、地面に置く。
まだ１０に届いていない様に見える少年には、その荷物は少々重すぎたのだろう。地面に置く、と言うよりも落とす際に、かなり良い音がした。

「これ、買ってくれ！」
その言葉に答える様に、優斗はそれに視線を向ける。
置かれていたのは、少々不揃いな紙の束だった。
優斗は、何故子供が紙を売りに来るのか、と考え、発展途上国などで行われていると言う、子供と言う立場を利用した押し売りに近い商売の事を思い出す。

優斗の訝しげな表情に、少年は買い取って貰えない可能性を感じ取り、慌てて口を開く。

「俺、シュイっていいます。
実は、その、贈り物を買いたいから、お金が欲しくて」

見た目年齢の割にしっかりとしているな、と思いながら、優斗は少年――シュイの許可を取って、紙を確認する。
厚さも大きさもやや不揃いで、質はイマイチだが、メモを取る事の多い優斗は、安い紙を多めに仕入れる事が多いので、買い取る事自体に問題ない。問題があるとすれば、他の点。

「これ、どうやって手に入れたの？」
「俺が作った！」

小さな男の子が、紙を作る。

それはこの世界で普通の事なのか、と言う疑問を視線に乗せ、優斗は隣を見る。すると、優斗と同じ様に紙を確認していたフレイが、その1枚をシュイの前に差し出す。

「これの事を、お父さんとお母さんは知ってるの？」
「おかーさんにはないしょ。おとーさんは、手伝ってくれた」
「そう。お母さんに贈り物をするの？」
「もうすぐお祭りなんだ。だから、おかーさんと、ミシャも！」
優斗相手と違う、子供らしい、少し弾んだ声色で答えるシュイ。

一転、会話の外に追いやられた優斗は、説明を求めて話を遮るのも大人げないと、黙って2人のやり取りを見つめる。

「どんな物がいいのかな？」
「よろこんでくれる物！」
「そう。じゃあ、お姉ちゃんがお兄さんに頼んであげるから、待っててね？」
「うん！」
「そんな訳でご主人様、あれ、残ってますよね？」
「いいけど、説明……」
反射的に不貞腐れた様な声が出てしまった事に、優斗は、はっとして、交差させた掌で口を塞ぐ。

フレイは呆れ顔で「後で説明します」とすれ違いざまに耳元で囁くと、紙を持ち、シュイを引き連れて荷馬車の止めてある納屋へと向かう。

納屋に到着すると、フレイは荷馬車から鞄を1つ、取り出す。

これは優斗が山に登る際に持って行った荷物で、中には薬師、もしくはその身内を懐柔する為の品が詰められている。

フレイはその中から、初見の人間から贈り物として手渡されても不自然でない程度に安価で、かつ薬師に妻と娘が居た場合にと見繕って来た品を、シュイに手渡す。

「これはどう？」
「これ、何？」
「リボンと髪飾りよ」
２人のやり取りを見ていた優斗は、ふとミシャと言う名前を思い出す。

それが族長の家にいた少女である事まで思い出した優斗は、袋からカチューシャタイプの髪飾りを取り出す。

「こっちのがいいんじゃない？」
「地味じゃないですか？」
「確かミシャって子、あんまり髪が長くなかったと思う」
優斗の指摘に、フレイが目を細める。

その視線から、なんで村の女の子の事に詳しいんですか、と言っている気がした優斗は、慌ててシュイの方へと視線を向ける。

「だよな？」
「あ、うん。この前切ったって言ってた」
「そう。じゃあ、こうしましょう」
フレイは、カチューシャに小さな飾りを器用に取り付けると、満足そうにそれをシュイに手渡す。

最終的に、ミシャ用にカチューシャタイプの、母親用にバレッタタイプの髪飾りを贈る事に決めたシュイは、主にフレイにお礼を言ってから、綺麗に包まれたソレらを嬉しそうに抱えて家路についた。

「フレイ、説明」

「紙はギフトで作るんです」

半ば予想していた言葉に、続くギフト名等の説明を聞き流しながら、優斗は今まで気にもしていなかったそれに納得する。

優斗は、よく考えれば、この世界の技術水準では木から作る紙ではなく、羊皮紙であってもおかしくないのだと、今さら気づいたのだ。

そして、それに現代知識の片鱗を感じた優斗は、その確認の為に製紙技術について調べようと、後でシュイ少年を尋ねる事を決める。

もしあたりであれば、その発祥を調べ、それが仲間を探す手がかりになるかもしれない、と期待に胸を膨らませながら、優斗はフレイに散歩の再開を提案した。

知る事の意味（後書き）

次への繋ぎを兼ねた説明回でした。
そして優斗くんがようやく、少しだけこの世界の事を知りました。

ただし、シャーリーの主観情報で、ですが。

新たな指針

夕食後、買い取ったばかりの紙にメモを書き散らかしていた優斗は、扉の開く音に顔を上げる。

現在、フレイとユーリスは食事の片付けをしており、ライガットは色々な意味で動く事が出来ない。

必然的に、優斗の部屋をノックなしで訪れたのは、夕食の直前に戻って来たシャーリーだ。

「薬作りが終わったんですか？」

「飽きてきた」

彼女が薬草探しから戻って来た時も、同じ様な事を言っている姿を見ていた優斗は、苦笑するしかなかった。

優斗の前に立っているシャーリーと呼ばれる元・神の使いは、基本的に、長時間１つの事に集中する事を苦としない。ただし、好きでもない、むしろ嫌いと言える人の為の行動でそれが発揮される事は無く、今は何時もより集中力が途切れやすい状態だ。

「一か月分、一気に作る必要はないんじゃないですか？」

「そうだねー」

優斗に断りを入れる事なく部屋へ入ったシャーリーは、フレイに割り当てられたベッドに飛び込み、身を沈める。

三室しかない個室のうち、一室をゲストであるシャーリーに譲った時点で、当然の様に優斗とフレイが相部屋になる事が決まっていた。２人が主従の関係であると言う事以上に、確認すらとらずユーリスがライガットと同じ部屋に移っていたからだ。

「これは？」
「シャーリーに聞いた事のメモですよ」
「何書いてあるか全然わかんない」
シャーリーが理解出来ないのも無理はない。
何故ならば、優斗は日本語でメモを書いている。
日本語で書くのは、書きなれていると言う理由と、誰にも見られたくないので、暗号代わりに使っていると言う理由だ。

「ふーん。そう言えば、連れの子には言ってないの？」
「言うべきか、悩んではいるんですけどね」
「どう、言うべきか？」
強調された、どう、と言う言葉に込められた意味は、方法をさすものではない。

どう、いった言葉、ないし方法で誤魔化すべきか。
この先、同郷の人間を探すに当たって、自分の境遇をある程度話す必要がある、と優斗は考えている。しかし、率直に、ありのままを伝える気は無いが、なるべく嘘も吐きたくない、と考え、悩んでいた。

「それを悩むにあたって、シャーリーに聞きたい、と言うかお願いしたい事があるんですけど」
「予想はつくけど、何？」
「仲間探し、手伝ってくれませんか？」
優斗と同じ境遇の人間が、優斗と同じ様に同郷の人間を探しているとは限らない。逆に、関わり合いになりたくないと考える可能性すらある。

優斗はそう言う相手に無理に関わる気は無いが、そのせいで確認が出来ず、無為に探し続けると言う事態は避けたい。ならば、相手の意思に関係なく確認が出来る能力は喉から手が出るほど欲しい。

真剣に見つめる優斗の視線を気にする事なく、シャーリーはベッドでごろごろとしながら、寛いだ声であっさりとした返答する。

「いいよー」
「ホントですか？」
「うん。でも、色々整理するから時間頂戴ね」
「もちろんです」
予想以上に簡単にいった事に拍子抜けしながら、優斗は再度フレイへの説明について考え始める。

シャーリーが付いて来ると言う事は、フレイの前でも彼女に色々質問する事になるし、何よりフレイ自身がそれを行う可能性も高いので、色々と打ち合わせる必要が。
そう考えていた優斗の思考は、続いて吐き出されたシャーリーの言葉によって、遮られる。

「もうそろそろ摘まなきゃいけないのと、植え替えの準備をしてるのもあるし。
出発は一年後くらいでいいかな？」

シャーリーの言葉に、いつも通り快適に動いていた優斗の思考が急停止する。
彼女はまるで、荷物をまとめて着替えるからちょっと待っててね、と言う人と同じ様な声色でそう告げたのだ。

突然夕食に誘った時に、あとちょっとだけ待って、と言われ続け、

最終的に1時間待たされた事のある優斗だが、さすがに一年は長すぎたのだろう、反応を返す事も出来ない。

「どうしたの？」

「あ、いや、その。長すぎません？」

「女は準備に時間のかかる生き物らしいよ？」

声をかけられ、ようやく声の出た優斗は、それにしても長すぎだ、と心の中でつっこむ。

そしてふと、ある疑問が思い浮かび、それが正答ならばそう言う事何だろうと自分の考えを半ば確信しながら、それでも確認の為に口を開く。

「シャーリーって、何歳？」

「女性に歳を尋ねるのは無粋らしいよ？」

竜は無性だと言っていたシャーリーのそんな言葉に、優斗はつい何か言い返したくなったが、これもぐっと我慢する。

代わりに、別の方法でそれを確認しようと考え、質問の方向を変える。

「歪みに消えた人って、どんな人だったんですか？」

「詳しくは知らない、って言わなかったっけ？」

「消えた事を知ってるって事は、大まかには知ってるんですよね？」

ふむ、とベッドで大の字になったシャーリーが呟く。

そしてがばっと起き上がると、優斗のやや上方に焦点の定まらない視線を向ける。

「始祖様と天竜の時に消えたのはどこだったかの王と王子だったか

な。英雄王とか呼ばれてたね。
氷竜の方は、囲んでた騎士団の誰かだったらしいけど、ちゃんと見てた人はいなかったみたい」

そう告げるシャーリーの瞳は、何も移しておらず、空っぽだ。
それを見た優斗が、悪い事をしたとばつの悪そうな顔をすると、彼女はにやりと笑い、次いで優斗はやられたと右手で顔を覆う。

「完全に騙されました」
「ふっふ。私の人真似も中々のものでしょ？」
内心どきどきしながらも、優斗はほぼ予定した展開に持ち込めた事に気付き、質問を重ねる。

「それってどのくらい前なんですか？」
「覚えてないなぁ。
でも、英雄王の国がもう無いくらいには昔だよ」

優斗にはその基準で正確な年数を予想する事は出来ず、前振りまでした質問は徒労に終わる。
それでも、魔女の伝承が絵本になるほど昔の出来事である事や、３０年くらいここで生活してくれれば、と言う発言も合わせて目の前の女性が想像以上に長く生きている事は判っているので、気にはなるが、機嫌を損ねては意味がないと、これ以上の追及は止めて置く事に決める。

竜が長命種であるらしい判断している優斗が予想していた理由。
それは、時間の感覚が違う、と言う、ありきたりなものだ。

「一週間以内に出発するのは、無理ですか？」
「へ？　いきりなり話戻したね」

「すいません。ちょっと脱線してましたね」
「いいけど。
でも、一週間か。折角種から育ててるし、放っておくと枯れるだろうしなぁ」

本気で悩み始めるシャーリー。
そんな姿を見ながら、優斗は別の案を考えていた。

「じゃあ、一年後に迎えに来たら、着いて来てくれますか？」
「あー、そっか。人の寿命って４０年くらいなんだったね」
さすがにそれは短すぎないか、と思った優斗だが、声には出さない。

優斗が立てたプランはこうだ。
まず、一年で公国を周り、お金を稼ぐと共にあたりを付ける。そしてシャーリーと合流したら、怪しいとあたりを付けた相手に会って貰う。

その時点で既に３人共見つかっているのであればそれで良いし、そうでないならば国外にも足を延ばす必要性がある。

優斗がそこまで考えた時に、またノックもなくドアが開く。部屋に入って来たのは、同じくこの部屋を割り当てられたフレイだ。

「片付けが終わりました、って、シャーリー様？」
「何？」
声が少し硬質な物に変化し、表情も消えたのだが、ベッドの上にちょこんと座った姿では、迫力は皆無だ。

美人な女性がベッドに座り、部屋の主である男と見詰め合ってい

る。そしてそこにやって来た女に、無愛想な対応をしている。
見た事実だけを切り取れば、逢瀬を邪魔された女が、乱入して来た女に冷たい言葉を発している、様に見える。

「お邪魔でしたか？」
「邪魔って言うか、むしろ待ってた」
事実、優斗はメモを書いていた時点から、これからの話をする為にフレイが戻るのを待っていた。

しかし、この状況で告げられた言葉に、フレイは少しだけ勘違いを含んだ納得をしてしまう。

「これからの事、ですか？」
「そうそう」
「シャーリーさんもついて来る、と言う事でしょうか？」
「最終的にはその予定」
さすが、フレイは話が早いと、優斗はその誤解を解く事無く、続きを口にしていく。

「実は、探したい人、と言うか人達が出来た」
「探したい人達、ですか？」
「うん。俺の同郷の人間。遠すぎて、故郷にはもう帰れないんだけど、同じ境遇の人が居るらしい」
そう言って優斗は、少しだけシャーリーに視線を向ける。

「シャーリーが教えてくれた」
「その縁で仲よくなったんですね」
「そう言う事になる、かな？」
「少し違う」
シャーリーが口を挟むが、説明をする気は無いのか、それ以上は

何も言わず、口を閉ざす。

再度口を開く気配がない事を確認した優斗は、少し困惑しながらも、話を進める。

「えーっと、とりあえず、それは置いといて、今後の予定だけど」
「……はい」
「ここを出発して、いつも通り行商を続けながら、公国の首都を目指そうと思う」
「ルナール公国首都・ルナール、ですか」
「そうそう。
そこで、情報収集をしようかと」

優斗はそこで一拍置き、フレイの反応を伺う。そしてフレイが首肯で続きを促して来たのを確認すると、再び口を開く。

「その後、ユーシアに向かおうと思う。約束もあるし」
「……なるほど」
何か含むところがあるように見えるフレイの反応。

それに対し優斗は、後で質問を受け付ける形で対応しようと考え、言葉は止めない。

「手がかりが見つかれば、それに合わせて変わるから」
「はい」
「出発日は……ライガットさん達とも相談して決めるから、また明日かな」
「わかりました」
「何か質問ある？」
優斗の視線を真正面から受けながら、フレイは考える。

聞きたい事が幾つか思い浮かぶが、彼女は自分のベッドの上に視線を向け、そこにその女性が居る事と、旅に関係の無い事で口にすべきでないと考えた質問を排除し、残った疑問を口にして行く。

「何人で出発する予定ですか？」

「ライガットさん達次第かな」

「ルナールまで真っ直ぐ向かう予定ですか？」

「キルン経由の予定。後で連絡するって言って出て来たけど、任せっぱなしは悪いし」

伝えた相手は、もちろんキルンまで一緒だった商隊仲間の2人と、護衛達だ。

それにどうなったかも気になるし、と言う小さな呟きを聞いたフレイは、少しだけ迷ってから口を開く。

「キルンは迂回すべきだと思います。ユーリス達さんがここに残るのであれば、特に」

「盗賊が出たから？」

「それもありますけど。

救出、と言うか討伐から逃げ切ったり、街に隠れていたりした盗賊が、逆恨みで襲ってくるかもしれません」

フレイの意見に、優斗は、うっ、と呻く様な声を上げる。

彼女の指摘する可能性を考えていなかった優斗は、むしろ追い払われていて安全であるとさえ考えていた。

「ご主人様はその依頼者ですから、恨まれる可能性は高いと思います」

「ごもっとも」

何度もそれで痛い目にあっているにも関わらず、自分の危機意識の甘さと想像力の乏しさに反省しながら、優斗は別案を考える為に書き込みの増えてきた地図を開く。

首都はここから南東方向にある。

ユーシアはそこから北東に進んだ位置にある事を確認し、今までの道程を指でなぞる。

アロエナから北上し、ユーシアから南東へ。山を登ってから南へ下り、その後はやや北向きに西へ進み、ハイルからはやや南ずれたが、もう少し西進すれば公国北部を横断する形になる。

「一度南へ向かって、この辺りで東に進路を変えるべきだと思います」

「うーん。それだと延々と移動にならない？」

「ルナールへ向かうんですよね？」

「道々、行商と情報集めはしたいな、と」

広げられた地図には、ユーシアやハイルで記入したある程度以上の都市の位置と名前が入っている。

優斗はその中のいくつかをピックアップし、特産と持っていくと喜ばれる品を頭に思い浮かべながら、地図をなぞる。

「ここから南西に向かいつつ、海まで出たら河口まで沿岸を行って、川沿いにルナールを目指す、でどう？」

「ルナールへの到着が一か月は遅れる事になりますけど、いいんですか？」

「どうせまだしばらくはユーシア方面には近づけないし、それにルナールに着く前に少し稼いでおきたいから」

ユーシア方面に近づけない、と言う言葉に、存在を忘れられかけ

ていたシャーリーが、視線で説明を求める。

それに気づいたフレイの反応に気づき、視線を追った優斗は言いにくそうに、そして少し恥ずかしそうに口を開く。

「いや、実は私の国の技術を売った時に、色々とやってしまったと言うか」

「優斗の、国、はここよりも技術が発展していたのか」

食事の時と同じく、一対一の時とは違う言葉遣いに、優斗は少し戸惑いながらも首肯する。

会話を遮られた様な形になったフレイは、ユーリスはさん付で呼んでいるにも関わらずほぼ砕けた口調で、自分には呼び捨てでまだ少し丁寧な言葉遣い、シャーリーも呼び捨てなのに敬語な優斗の言葉選びの判断基準はどうなっているのか、と考えていた。

「そう言えばシャーリー、薬代と治療費はどうすればいいですか？」

「任せる」

「では、後で相場を教えてください」

「わからないから全部任せる。あ、出来ればあの甘い奴を分けて欲しい」

「蜂蜜飴とミルク飴ですか？」

「そう」

「わかりました」

優斗の返答に満足げな表情のシャーリーが、ベッドから降りて立ち上がる。

そして何も言わず、部屋から出ていく。

「っと、ごめんフレイ」

「え、いえ」
「それで、公国の西を巡りつつお金を稼いで、ルナールへ向かうって事でいいかな？」
「いいと思います」
「ルナールにしばらく滞在して、その後はユーシアへ
その時に手がかり無しなら、一年後にここでシャーリーと合流して、助力を得る予定になってる」

優斗の言葉に、フレイはキョトンとした表情を浮かべる。

フレイの反応が遅れたのは、シャーリーが一年後に合流と言う言葉の意味がすぐには理解出来なかったからだ。

「キルンには後で手紙を出さないとな。ついでに、クーナ宛の手紙も書こうかな」
「えーっと、シャーリー様は今回、一緒ではないのですか？」
「あー、うん。用事があるみたい」
フレイが、なるほど、とあっさり納得してくれた事に、その用事について追及されたら何と説明すべきか考えていた優斗は安堵する。

「準備ができ次第出発するんですか？」
「その予定」
「では、ライガットさん達はどうするんですか？」
似たような質問を再度行ったフレイの言葉に不足した部分を継ぎ足すと、ライガットさん達に貸したお金はどうするんですか、となる。

キルンの薬師に支払った薬代とベッド代を含む治療費、シャーリーに支払う予定の薬代と治療費。護衛と言う名目で移動費と中継した街とこの集落での宿泊費、食費等を請求しないとしても、かなり

の額になる事が予想される。
特に、一か月分の薬代は、単位が銀貨から金貨に変わる程に高価だ。

「現金以外で支払って貰う予定」
「持ち物ですか？」
「いや、お金にはならない方法。
商売に支障が出ないくらいの資産は残ってるから、今のところそっちの心配はしなくて大丈夫」

フレイの表情に少し不安の色を見つけた優斗の言葉は、効果を発揮する事はなく、表情から曇りは取れない。

「その、違うとは思うんですが」
「ん？」
「ユーリスさんに身体で払え、と言う訳ではないですよね？」
フレイの言葉に、優斗は勢いよく首を横に振り、全力で否定する。

優斗が焦ったのは、フレイが嫉妬と軽蔑の視線を向けて来た、からではない。不安気な表情から少し俯き気味になり、そうだったら嫌だ、と言う弱弱しい表情に派生したからだ。

「あー、なんていうか」
「一応言っておきますけど、他の女の子の相手をして欲しくないって意味じゃないですよ？」
「違うの？」
「違います。
もしそうだとしたら、私はもっと別の手段を取ります」

別の手段、と言う言葉から、優斗が連想したのはフレイの罵声だ

った。
お金で女の子を無理やりなんて鬼畜です、とか、優しく手を伸ばして陥れるなんて悪魔の所業です、とか。

同時に、ライガットがわざわざ釘を刺した一件と合わせ、優斗は「それ」がこの世界、もしくはこの国では良くある事なのだと言う事を理解する。

「多分ですけど、ユーリスさんは未経験だと思います」
「……聞きたくなかったかも」
優斗は、次にユーリスと顔を合わせた時に、絶対に今の言葉を思い出してしまうだろうと半ば確信していた。

そうなった時、優斗には上手く話せる自信はない。２人きりだったら、なおさらだろう。

「まぁ、それはどっちでもいいんですけど」
「おいおい」
「どうやら、ユーリスさんはライガットさんが好きで好きで堪らない様なんです」
「それは見てれば判るけどさ」
「１人の女として、男の人として」
「えぇぇぇ！？」

大きな声を出してしまった優斗を、フレイが唇に人差し指を当てる事で制する。

ユーリスが優斗と同じ２１歳で、ライガットは４０歳前後。
年の差は、１９以上だ。優斗が大げさに驚くのも無理はない。

「それは、恋人になりたいと言う意味で？」
「むしろ、夫婦になりたいと言う意味です」
「さすがに離れすぎじゃない？」
「クシャーナ様とご主人様より離れてますね」
「それはどーでもいい」
優斗は、これまでの2人の事を思い出す。

言われて見れば、ユーリスは恋人相手のそれでもおかしくない行動もとっていた。対してライガットには、その気がなかった様に見える。あれは間違いなく、父性本能全開で娘を可愛がる馬鹿親のそれである、と優斗は確信していた。

優斗はそう考えながら、フレイの言わんとする事を理解する。

「まぁ、何にしてもそんなつもりはないから」
「ですよね。信じてました」
「なら、わざわざ心臓に悪い反応しないで。
と言うか、俺に話して良かったの？」

ユーリスから直接聞いた話ではないにしても、フレイが彼女と仲良くなり、それを匂わせる発言があった事がそれを確信する要因の1つであった事は、優斗にも想像出来る。
そして口止めされている訳ではないとは言え、それを本人の与り知らぬところで話すのは、あまり褒められた事ではない。

「ご主人様がどう反応するか、気になったので」
「おいおい」
「おかげさまで楽しかったです」
呆れ顔の優斗。

そんな優斗の視線から逃げるように少しだけ目を伏せ、口に出しかけた「だから口説いても無駄ですよ」と言う言葉を飲み込みながら、フレイはくすりと笑った。

新たな指針（後書き）

これからの予定を話し合う話でした。

フレイさんが声に出さなかった言葉は、情報の真偽とそれを知っているか否か、実際にどちらなのかで彼女の腹黒度が劇的に変動したりします。

気付けなかった事

翌朝、朝食を終えた優斗は、片付けを終えて戻って来たフレイを伴なってライガットの部屋を訪ねていた。

「そんな訳で、数日内に出発しようかと思っています」
「そうか。だが、なぁ？」
「うん」
ライガットとユーリスが、困った様な表情で顔を見合わせる。

同郷の人間を探しに行くと言う優斗。
彼に借金のある2人からすれば、それは取り立ての言葉に等しい。

「それで、支払いの件なんですけども、基本的には次会った時で構いません」
「……はぁ？」
優斗は行商人で、ライガット達は護衛。

お互いに固定の販路や護衛路を持たない、いわゆる流れの稼業であるが、再び出会う確率はそれなりに高い。式典が行われたハイルの様に、人が集まる場所で偶然知り合いと再会と言うのは、珍しい話ではない。

逆に言えば、それを避ければ出会う確率はぐっと減る。大きな荷馬車を持つ行商人と、その日暮らしで身軽な護衛では、同じ街に居たとしても、取る宿も、立ち寄る場所も違う。例外は、食事と酒の場くらいだろうが、イベントがある様な大きな街では店の数も多くなり、遭遇率は下がる。

「その代りと言ってはなんですが、ちょっとお願いしたい事がありまして」

優斗が笑顔でそう告げた時に、ユーリスがぴくりと反応した事を、彼は見逃さなかった。

その反応がそう言う意味のものかどうか、優斗が確認する事は無いが、もしそうだったら、と考えてしまい、内心少しだけ落ち込む。

実際、ユーリスが反応した理由は、ほぼ優斗の想像通りだ。ただし、間接的な原因は、そう言う反応をされたら嫌だな、と思って無意識に彼女を観察していた優斗の視線からそれを連想してしまったからだ。

「人探しを手伝って欲しいんです」

「あー、なるほど」

溜息に乗せた様な声を吐き出しながら、ユーリスは少しだけ張っていた緊張を解く。

ユーリスの反応をあえて見ないようにしていた優斗は、準備していた紙を取り出し、1枚ずつ2人に手渡す。

受け取った紙に視線を落とした2人は、顔を上げると同じ様な表情で優斗を見る。

「これは？」

「故郷の文字です。読める人を探して欲しいんです」

同郷の人間を探す手段として、優斗が考えた方法の1つ。

日本語で自分の状況と連絡が欲しいと言う旨を、その下に英語で「Ｐｌｅａｓｅ　ｃｏｎｔａｃｔ」と書いた紙だ。

街に滞在する際、これを数か所に貼って貰ったり、配ったりする事でこちらから呼びかけ、見つけて貰おうと言う作戦だ。

「ここに一生住む、と言うつもりはないですよね？」

「ないな」

「でしたら、少なくとも一度は旅をする事になると思いますので、その道すがら、捜索を手伝って欲しい、と言う訳です。聞き込みをして欲しいと言う訳ではなく、これを人の多い場所に貼って貰うくらいで結構ですので」

言葉を一旦止め、優斗は2人の顔を見比べる。

すると、優斗の顔を凝視しながら説明を聞いていたライガットが、その隙を待っていたかの様に視線の先を指差し、口を開く。

「同郷の人間と言う事は、肌の色はソレなのか？」

「そうかもしれません。と言うか、そうだったら確定かな？」

「だったら、心当たりがある」

「本当ですか！？」

早くも見つかった手がかりに、優斗は椅子から立ち上がってベッドへ詰め寄る。

詰め寄られたライガットは、目を細め、少し不思議そうな表情をしている。

「俺らが出発したハイルで式典があっただろ？」

「ありましたね」

「あれに出席する代表が、公国の白と帝国の黒の間をとった様な肌の色をした子供だって聞いたぞ。知らんのか？」

「あ、あぁ。あ！」

ライガットの指摘に、優斗は自分が致命的な見落としをしていた

事に気付く。

優斗はその道の専門家ではないが、それを常識として知っている。それにも関わらず、ライガットに指摘されるまで気づけなかった。

「商隊でも、お前が関係者じゃないかって噂になってたぞ。お近づきになれば利益になるかしれない、なんて言ってるやつもいたな」

部屋に居る3人――ライガット・ユーリス・フレイの順番に視線を向けてから、優斗は記憶を掘り起す。

「すいません、ちょっと考えさせて下さい」

クシャーナは言った。自分と同じ色の髪と肌を持つ人間に初めて会ったと。

アロウズは言った。彼女たちの母親は、クシャーナが生まれた時に死亡しており、クシャーナは会った事が無いと。

優斗は知っていた。白色人種と黒色人種の間に、黄色人種の子が生まれ事は無いはずだ、と。

すなわち、彼女は公国民と帝国民のハーフではない。

「なるほど」

それを皮切りに、芋づる式に湧き出て来る情報を頭の中で整理し、可能な範囲で可能性を洗って行く

ギフトを持っている事から、クシャーナ自身はこの世界の住人であると判る。ならば、優斗と同じ境遇の人物は、彼女の母親であるユウと言う女性である可能性が高い。根拠としては薄いが、名前も日本風である。

そして、クシャーナから妙に郷愁を感じた原因も、そこに起因する可能性が高い、と優斗は考える。

そして、アロウズの年齢から考えれば、こちらに来た直後に子を成したとしても、少なくとも３０年前後は経過している計算になる事に思い当たり、はっとする。

「全員が同じタイミングに来てる訳じゃないのか……」

１人言を呟く優斗に、集まっていた視線が険しいモノになって行く。

探し人が既にいない、もしくはまだいない可能性に思い当たった優斗は、その辺りはシャーリーに尋ね、クシャーナの件は後程ユーシアで確認を取り、出来れば遺品を見せて貰えるように頼もうと決める。

そう言う民族の女性がたまたまユーシアに流れてきた可能性もあるので、期待のし過ぎは禁物だ。それでも優斗は、遺品から証拠になる様な物が出る事を祈ってしまう。

優斗は今すぐユーシアに向かいたいと言う衝動を抑え、フレイと言う道連れが居る以上、危ない橋は避けるべきだと判断し、予定の変更はしない事に決める。

「あーっと、すいません。お待たせしました」

「おう」

「うん」

「おかえりなさい」

三者三様の返事と共に送られてくる説明を求める視線に晒され、優斗は頭をかく。

そして少し考えてから、再び口を開く。

「ユーシアの新当主は、知人なんです」

「あぁ、やっぱりそうなのか」

ライガットの納得は、正確に言えば誤解なのだが、優斗はそれを訂正しない。

「彼女にも協力を依頼する予定ですので、こっちは利子代わりだと思って気楽にやってください」

「ふん。確かに貴族様に頼むなら、1人や2人増えても大差無いな」

「お父さん！　もう、そんな事言わないの。ちゃんとやるから心配しないで？」

はは、と小さく笑いながら、優斗は、わかってる、と返答する。

そうやっていつも通りの他愛のないやり取り交わす2人の傍らで、ライガットとフレイの視線がぶつかり、しばし見詰め合う。

優斗とユーリスがさらに一言ずつ口にした後、今まで黙っていたフレイが、少しだけ口を開いた。

「言うのはタダ、と言う言葉もあります」

フレイの言葉に、ライガットが破顔する。

その表情のまま優斗に向き直ると、突然発言したフレイに向いていた優斗の視線が、ライガットに移る。

「頼みがあります、わか、じゃない。優斗殿」

「急に畏まられても困るのですが」

「そうか。じゃあ、何と呼べばいい？」

「呼び捨てで構いません。口調も今まで通りでお願いします」
「じゃあ、優斗。提案がある」
「何でしょう」

自分の立てたプラン通りに全ての事が進むと思っていないし、それが常に最善であると考えるほど、優斗は傲慢ではない。
だからこそ、彼はライガットの言葉に真摯に耳を傾け、それに合わせてプランを変更、もしくは彼を説得する為に頭を動かす体勢に入る。

「ユーシアの当主に掛け合って、俺とユーリスに仕事を回してくれ。金はそれで返す」
「あー、なるほど」
優斗は、この提案は双方に利益がある、とすぐに気づき、考えていた再会プランを保留とし、思考を巡らせる。

優斗からすれば、お金が返って来る確率が上がり、なおかつ彼らの働き如何では、人手の足りないユーシアに恩を売る事が出来る。

一方、ライガット達は仕事にありつく事が出来るのは当然として、ユーシア関係者のコネを作る事が出来る。

「どんな扱いになるかまでは、保障出来ませんよ？
と言うか、実際に受け入れて貰えるかどうかも判りませんし」
「構わん」

今のユーシアに仕事が無い訳がない、故に大丈夫だと考えるライガット。
それはあくまで護衛、もしくは便利屋として仕事を請け負うと言うスタンスでの話だ。

それに対して、優斗は1つ勘違いをしていた。
優斗が考える、仕事を貰う、は請負でなく雇用。すなわち、2人に職を斡旋すると言う意味だ。

「もちろん、紹介状を書いてくれれば、それを持って自力で向かう」
「うーん」
「受けた恩はきっちり返す。お前さんの名に傷を付けたりはしないと約束するぞ」
「その辺は疑って無いんですが。フレイとユーリスはどう思う？」
話を振られた2人は、お互いに横目で視線を交わす。

一瞬で行われたアイコンタクトの結果は、2人の声がこの上なくきっちりとハモると言うものだった。

「「ぜひ、そうしましょう」」

その後、ユーシア家の家紋入り封筒に紹介状と手紙、その他諸々を入れ、きっちりと封をした物と、ユーシアまでの道のりで配って貰う紙を30枚ほど束にして渡すと共に、ギフトを介さない契約書に借金の額と支払方法を明記してお互いにサインをする。

こうして、支払いに関する話し合いは終了した。

出発を三日後と定めた優斗は、それまでにやるべき事をこなしてしまおうと、次の日から忙しく動き出した。

ユーリス達はしばらくここに滞在し、ライガットがある程度動け

るようになったら移動すると聞かされ、優斗は餞別代わりにここの滞在費を二か月分、族長に支払う事を決め、その際に荷馬車のスペースが2人分開いた穴埋めに商品を購入する事を告げ、代わりに滞在費を負けさせたり、シュイから聞いた祭り用にと小物を捌いたりした。

シャーリーには一年後に尋ねて来る事を告げ、その時にまだ見つかっていなければ同行して貰える様に約束を取り付け、追加で幾つかの質問にも答えを貰った。時間のズレについては、彼女も良く判らないが、時系列的には優斗の転移、すなわちシャーリーの死亡が最後だと教えられた。他の人が居る前では相変わらずだが、2人きりになった際は愛想よく親切かつ饒舌で、餞別だと様々な薬草を優斗に手渡した。優斗も薬代に一年後の手付も上乗せする形で代金を支払い、加えてミルク飴全てと蜂蜜飴を多めに渡した。

シュイ少年に紙の製法を尋ねにも行ったが、父親が将来の為にと行商人にお金を払って買ってくれたものだから、と返答を拒否された。これにより、製紙にギフト以外の何かが必要である事を確信した優斗は、一介の行商人が持っている程度の技術情報ならば大きな街で手に入るだろうと考え、それ以上の追及はしなかった。特定のギフトを持っていなければ役に立たない技術情報なので、安価で手に入る事は想像に難くない。

忙しく動く傍ら、キルン宛の手紙と共に、ユーシアへ送るクシャーナ宛の手紙も書いた。

内容を要約すると、元気です、腕の立つ護衛を送り込むから出来れば雇ってあげて下さい、協力して欲しい事があります、約束の期日までにはユーシアに向かいます、と言った感じだ。

出発の朝、優斗は見送りに来てくれたユーリスとフレイが話をしているの見ながら集落へ、そして山へと視線を向ける。
族長には先日、出発日を伝えて挨拶済み。シャーリーは朝一番で山小屋に戻って行く際に挨拶をした。

「優斗さんも元気でね」
「ありがとう。ユーシアに行ったら、クーナ、っいや、当主のクシャーナ様によろしく」
「はは。もちろん」
動き出した荷馬車に向けて大きく手を振るユーリスは、優斗達の姿が見えなくなるまで見送り、フレイも荷台後方のホロを開けてそれに答えた。

集落を出た優斗達は、ひさしぶりの2人旅を少し寂しく感じながらも、順調に街へ向かう。
夜は火の番がある為、優斗とフレイの生活時間帯はズレてしまうが、他に相手がいないので会話する時間はむしろ増え、主に別れた2人の話題で盛り上がった。

「そろそろ街に着く頃ですね」
「だね。
予定通り行けば2泊で出発かな」

街に到着すれば夜番も必要ないので、フレイは眠る事なく御者台に座り、予定通り昼過ぎに目的地に到着する。
荷馬車で軽く昼食を済ませていた優斗とフレイは、そのままシェーン商会へと向かうと道具を返し、約束通り村で仕入れた薬草の一部と、ついでに嵩張る品、日持ちしない品を買い取って貰い、予定ルート上で高く売れる品、途中で立ち寄る予定の小さな村落で重宝

される品々を買い揃える。

優斗の買付資金は、ハイル出発直後と比べれば、かなり目減りしている。

具体的には、ハイルで実際に仕入れに使用した金額が公国金貨２０数枚、予備の資金が金貨１０枚程度であったのに対し、現在の買付資金は２０枚程度で、予備資金はほとんどない。

しかし、総資産と言う観点から見た場合、馬が一頭増えている事もあり、そこまで目減りしている訳ではない。馬１頭とその馬具は、それなりに高価な品だ。

用事が終わるとそのまま早い夕食を摂り、昨夜からずっと起きているフレイは就寝、優斗は酒場が本格的に込み合う前に張り紙のお願いに回る。ほとんどの店主は邪魔になったらすぐはがすと言う条件で承諾し、多少しぶる者も見つかったら報奨金を出すと伝えると、張るだけならと承諾を得られた。そんな調子で数件回り終えると、優斗も宿に戻り、旅の疲れを癒す為に眠りについた。

「他に良い捜索方法ないかな？」

「いっその事、背中に張り紙を貼って歩きます？」

翌日、前日のうちに買っておいた朝食を食べながら、優斗はフレイに相談を持ちかけていた。

一面から見ればフレイの提案は広範囲に知らせるには有用ではあるのだが、別方向から見れば問題だらけの意見でもある。

「フレイがやってみる？」

「恥ずかしいです。もちろん、ご命令とあらばやりますが」
「一緒に歩いてる方も恥ずかしいから却下かな。それに、すれ違いざまになんて書いてあるか読めるか怪しいし」
「そう言えば、文字でしたね、これ」
「俺から見ると、こっちの文字の方が変な図柄にしか見えないんだけどね」
優斗は苦笑しながら、フレイの意見で有用な部分を抽出し、検討する。

張り紙は掲げても読めないので却下。
しかし自分、もしくは他の人間を看板にするのは有用。

「一目見て、同郷であると判ればいいのか」
「すると、肌の色でしょうか？」
「それも1つだけど、決め手にはちょっと足りないかな」
それで集まってくるのであれば、ユーシア当主クシャーナの噂で既に動き出しているだろう。

その可能性には既に気づいていた優斗は、街で出したクシャーナ宛の手紙で、訪ねて来たら張り紙とその裏に書いたメッセージを見せて欲しい旨を伝達済みだ。

「目立つ格好をして、注目を集めれば噂になりやすいはずです」
「なるほどね。で、目立つ格好って言うと？」
「そうですね」
視線を上向かせながら思考を始めるフレイに倣って、優斗も頭を回す。

そして思い付いたのが、自分がこの世界に持ち込んだ唯一の衣服であるスウェットだ。

しかし、スウェットは機能性においてこの世界の衣服に勝っても、目立つ服装ではない。

「ご主人様の故郷の服装はどうですか？」
「同じ事考えてた。でも、目立ちそうに無い」
「目立つ種類の服装は無いんですか？」
フレイの指摘に、優斗は自分の思い込みに気付く。

今、重要なのは目立つ事であり、一般的な服装である必要はない。そして無ければそれっぽく作れば良い。

「和服なら目立つかな」
「なんですか、それ」
「民族衣装、みたいなものかな」
フレイの質問に答えながら、優斗は思い付く限りの種類を列挙して行く。

「着物・浴衣・袴に甚平・作務衣。作務衣って甚平と何が違うんだっけ？」
「えっと」
「着物は無理として、浴衣か作務衣ならいけるかな？
袴は構造わかんないけど、道着なら。いや、セットでないと意味ないか」

優斗はぶつぶつと呟きながら、紙におおざっぱな図を書き込んで行く。
絵心は無い優斗だが、理系の人間らしく、製図の心得は多少あるので、見栄えするデザインと言う方面を無視すれば、浴衣や作務衣に見えなくはない絵が完成する。

「こんな感じ」
「ええっと、借りてもいいですか？」
優斗は頷くと、紙をもう1枚取り出し、ペンと共にフレイの前に移動させる。

優斗よりも早く、そして丁寧にこちらの文字が書けるフレイは、代筆をする事が多いのでペンを握る機会は多い。
今回、優斗の前ではほぼ初めて描く絵と言う分野においても、フレイは優斗以上に才能がある事が判明した。

「おぉ。でも、ここはこうかな」
優斗は線が真っ直ぐすぎてかくかくとしている部分を指差し、丸くなぞる。

それを見たフレイは、それがデザインでない事を理解し、身体のラインに順じた線を引いていく。

「こうですか。そうすると、ここにボタンが付くのでしょうか？」
「いや、ボタンは一切使わない」
「へ？」
「こっちのは浴衣って言って、腰に帯って言う長い布を巻くもの。こっちの作務衣は紐で止めるだけ」
「すぐ脱げてきそうですね」
「まぁ、浴衣は動く為の服装じゃないし。そうすると、袴の方がいいかな」

そう答えながら、優斗は思い出す。
クシャーナが来ていた矢絣の袴。あれも彼女の母親が日本人である可能性を補強する証拠であるが、同時にこの世界には既に袴の製法が存在すると言う事でもある。

現在、優斗達はユーシアから遠く離れた場所に居るので、それを知る事は出来ないが、再現する為の手がかりにはなる。

「フレイ」
「はい、なんですか？」
「前にクーナが来てた、紫の矢羽みたいな柄の服、覚えてる？」
「あの、見慣れない服ですか。あ、もしかして」
「そう。あれも俺の故郷の民族衣装。
上が真っ白で下が赤や紺なのもある」

女学生に巫女服、弓道等で用いられる袴姿。
あれならばまだ浴衣よりも動きやすいだろうと考え、優斗はフレイからペンを受け取ると、記憶を掘り起こしながら、構造の想像図を紙に書いていく。

「こんな感じだったと思うけど、あんまり当てにしないで書いて」
「えっと、うーん」
「自分で着た事もないし、見る機会もそうなかったからなぁ」
ペンを受け取ったフレイが、記憶を辿ってその外観図を書き、優斗の書いたものを参考に展開図を書いていく。

後は試して見るしかない、と言うところまで書き終えると、優斗とフレイは連れだって仕立て屋へと向かう。

しかし、街に1件しかない仕立て屋は、忙しいからと優斗達の持ち込んだ仕事を断った。
報酬が少し高額とは言え、一度きりの注文しか期待出来ない流れの行商人と、これまでも仕事を回し続けてくれている街の商会からの依頼では、比べるべくもない、と言う事だった。

「どうしますか？」
「そこそこ大きい街に着くまで保留しつつ、デザイン案を煮詰めるって事で」
その後、張り紙を頼んだ店を巡り、結果を聞いて回るも、１日程度で成果が出る訳も無く、収穫はゼロ。

本格的に捜索するのであれば、最低でも１週間程度滞在し、じっくりと情報を集めるくらいしなければ見落とす可能性の方が高いのだが、優斗はまずは広範囲にビラの噂を流す事を優先すると決めていた。シャーリーの協力を得られるまではこちらから見つけられる可能性は限りなく低く、向こうから見つけて貰う方式に徹する方が効率が良い踏んでの決断だ。

「予定通り、明日出発しようか」
「わかりました」
こうして、１回目の同郷探しは空振りに終わる。

それにも関わらず、妙に上機嫌な優斗の姿を疑問に思ったフレイは、率直にそれを尋ねる。

「んー、なんていうか。目的があるって言うのは良い事だなって」
「そんなものですか？」
「何をすればいいか判らないのは、思っていた以上にシンドイよ」
「そうですね。そうかもしれません」
フレイが思い出していたのは、キャリー商会に売られた後の事だ。

優斗に所有されている間は、彼に好かれる、役立つ行動をし続ける事、ひいては彼のお気に入りになると言う目的があったが、売りに出された後、ただひたすら買い手を待つ時間は、フレイにとって

苦痛でしかない時間だった。

「では、私も目的を持って行動する事にします」

「何か怖いけど、良い事だと思うよ」

「酷いです。私は何時でも、ご主人様の事を想っているのに」

軽口を叩きながら、フレイは移動中に聞かされた話を思い出していた。

クシャーナの母親が同郷である可能性が高い事。

優斗がクシャーナに甘かった理由がそれであれば、良い。しかし、優斗がそれに気づいたのはシャーリーの話を聞いてからだと言った。だから、クシャーナ個人を気に入りつつ、同郷の子である事が判明した事になる。ならば、優斗は今まで以上にクシャーナに甘く、優しく接する様になるのではないか、とフレイは考える。

そして、もし同郷の人間が見つかった際、それが優斗と同年代の女性である可能性もある。

フレイは考える。

自分は彼にとって、どんな存在になるべきなのだろうか、と。

気付けなかった事（後書き）

ばたばたしつつも行商が再開しました。

相変わらず目の前で観えて、集中している事以外には鈍い優斗くんでした。

早速の方針転換

予定通りに街を出発した優斗とフレイは、街道の途中に幾つかある小さな村落に立ち寄りながら海を目指していた。

「思った以上に時間かかるね、これ」

「そうですね」

ライガット達と別れてから約1か月、優斗達は小さな漁村まであと半日と言った距離まで来ていた。

1日か2日で次の村に到着し、聞き込みを含めて2泊3日で旅立つ、を繰り返した結果、彼らの旅路は真っ直ぐ向かった場合に比べて2倍以上の時間とかなりの金銭を消費していた。

「これはちょっと考え直さないと、きついかも」

「お金、大丈夫ですか？」

「今はまだいいけど、時間がかかり過ぎると積み込める商品の種類が」

優斗は手綱を握ったままの手で頭をかかえる。

商品の種類と言うのは、日持ちだけの問題ではない。

例えば、冬に必要な物を夏に届けても安く買い叩かれるのが目に見えている。それは極端だとしても、必要な時、必要な物を必要な場所に運び、売る事で利益を得るのは商売の基本であり、同業者よりも早くそれを成せば、より儲けを得られるのは明白だ。

優斗もその事は理解しており、故に手に入った2頭目の馬を売却する事なく、荷馬車を二頭立てにする事で移動速度が上がり、利益も上がる事を期待した。単純に移動時間が減るだけでもそれなりの

経費削減になる

「大きな街で長期滞在して、小さな村へ向かう行商人に依頼した方が安上がりで効率的かな、こりゃ」

「野宿の回数が減るのは、嬉しいですけど」

野宿が続けば疲れが貯まるが、かと言って人里に宿泊すればお金がかかる。

フレイの言う事は優斗も実感していたが、このペースでは約束の期限までにユーシアに到達できるかも怪しい事も含め、方針転換は確実に必要だと優斗は考える。

立ち寄る村を1つおきにする、街道から少しでも離れていたら寄らない、など、新たな方針を話し合う内に、目的の漁村に到着する。

「おー、海だー」

「初めて見ました」

フレイの住んでいたクロース領は、海に面していない。

それを地図で知っていた優斗は、感激するフレイを見つめながら、自然と笑みが零れる。

「宿は、なさそうだから村長の家を尋ねようか」

「はい」

心ここに非ず、と言った風情のフレイの返事に、優斗は再度口元を綻ばせる。

村長の家に向かうと、漁に出ていて不在だと言われ、それを告げた恰幅の良い中年女性――村長の娘らしい――に宿を探している旨を告げる。

「ん」
「へ？」
村長の娘が、右手を差し出す。
優斗はそれが何を求めているのか、判らなかった訳ではない。しかし、一度無知故に無駄に支払った経験から、隣のフレイに視線を向けてしまう。
「私がお出ししても？」
「あ、うん。頼む」
良く言えばチップ、悪く言えば賄賂。
優斗も山の麓の村で、塩を賄賂として贈った経験があるが、面と向かって、はっきりと求められたのは初めてだった。
もっとも、塩を贈った理由には、薬草販売の仲介と言う商売を横取りしてしまう事への補償と言う意味もあったので、あまり賄賂と言う意識はなかった。
「どうぞ、お納め下さい」
「あんがと。宿代は後でいいですよ」
そう言って歩き出す女性に案内されたのは、想像していたよりも良い家だった。
厩があり、そこには馬用の飼葉まで置かれている。
家の中もきちんと掃除され、薪もそれなりの量が準備されており、まるで来訪を予期していたようだ、と優斗は少し訝しむ。
「あぁ、言い忘れてたけど、あんまり長くは貸せませんから」
「どうしてですか？」

反射的にそう尋ねた優斗だが、元々ここに長居する気はない。

既に予想以上に時間が経っている事や、早く和服の制作に取り掛かりたい事もあり、海沿いに南下し、早めに次の目的地である都市へ辿り着きたいと考えていた。

「ここ、魚の買付にくる商人の人に貸す家なんで」

「近いうちにその方がやって来るんですか？」

「早くしないと魚が腐るでしょ？」

何を当たり前の事を、と言いたげな女性は、明らかに面倒臭そうな表情だ。

これ以上引き止めても、お互い不快になるだけだ。

そう判断した優斗がお礼を言うと、女性はさっさとその場を立ち去る。

「歓迎されてない感じかな」

「閉鎖的な村ではよくある事です」

「今まで、そんな事なかったんだけどなぁ」

「特定の行商路にしている人がいない村ばかりでしたから」

「偶然に？」

「いえ、街道に近い場所は比較的多数の行商人が寄って行きますので、特定の行商人が必要ないんです」

フレイの言葉に、優斗は、なるほど、と呟く。

フレイの説明を聞いた優斗は、利益が確実に出る場所にしか、特定の行商人は付かないと言う事を思い出す。

行った時に既に商品が無い可能性がある場所や、利益の出る商品の無い場所に通う意味は薄い。しかし、この村は漁村と言う特色があり、魚介類と言う特産物がある。

「ここでの買付は、期待しない方がいいかな」
「たくさん取れれば、少しくらいは分けて貰えるかもしれません」
「出来れば、食べる分くらいは売って欲しいところだけど」
それも漁の結果次第だろうと結論し、優斗はお湯を沸かす為に火を付ける。

お湯が沸くとお茶を淹れ、フレイと一服しながら、明日は海を見に行こうと決める。
相変わらず夜番をしていたフレイが床に入り、優斗が邪魔にならない様にと静かに地図を見ていると、唐突に入口の扉が開く。

「あんたら、悪いけど出てってくれる？」
「へ？　あの、何を」
「まだ貸してないもんね？　代金貰ってないし」
突然やって来た女性の言葉に、優斗は面食らう。

その後ろに男の姿を見つけた優斗は、反射的に立ち上がるとフレイが眠っている場所との間に立つ。

「すぐに入れるよう、急いで準備させますので、少々お待ち頂けますか？」
振り返った女性から甘ったるい声でそう告げられた男は、声を出さずに頷く

そのやり取りで彼が誰で、何故村長の娘が突然押しかけて来たのかを理解した優斗は、反論の言葉を口に出そうとして、止める。

目の前の女性の短絡的な行動から予想して、優斗が彼女を言い負かす事は不可能ではないと思える。だが、そうして勝ち取ったとし

ても、夜のうちに荷馬車を荒らされたり、最悪、直接危害を加えられる可能性がある。

そこまで考えた優斗は、少しぎこちないながらも何時もの営業スマイルを張り付けると、袋から質の悪い銅貨を1枚取り出し、女性に近づいてから男から死角になる様にそれを握らせる。

「判りました。すぐにでもここを出る準備を致します。しかし生憎、連れが眠っておりまして、起こして身支度をする間、少しだけ待って頂けませんか？」

「ふん。しょうがないね」

優斗に対しては態度の大きい女性は、銅貨を受け取ると再度甘ったるい声で後ろの男に声をかけ、扉の外へ出ていく。

賄賂のおかげと、ついでに寝起きの若い女を彼に見せたくないとでも思ったのだろう、女性があっさりといなくなった事に安堵しながら、優斗は出発の準備を整えようと振り返る。

「災難でしたね」

「ごめん、騒がした」

「いえ、仕方ないです」

「そんな訳で、もう出発しようかと思うんだけど」

「それがいいと思います。それと、使った薪と飼葉の代金は払った方がいいと思います」

「そう？」

「あまり遠くまでは行けないと思いますし、念の為」

優斗は大きなため息と共に頷くと、急いで荷物をまとめ、フレイの言葉通りに代金を準備する。

準備を終え、外に出るとそこには優斗の荷馬車があった。

厩を覗くと見知らぬ荷馬車があり、あれを入れる為に勝手に出したのだと言う事に気付き、次いで優斗の馬が何処にも繋がれていない事に気付く。

この仕打ちに、優斗は当然腹を立てた。しかしそれ以上に呆れてもいた。

「どうなの、これ」

「それよりも、荷物がきちんとあるか確認すべきだと思います」

「あ、そっか」

指摘したフレイが荷馬車に上がるのを補助し、荷物の確認をお願いすると、優斗は辺りを見回す。

目的の相手は既にこちらに向かって来ており、あっさりと発見する事が出来た。

2人がやって来るのを、優斗は再度顔面に営業スマイルを張り付けながら待つ。手渡された銅貨の質が悪かった事に腹を立てているのか、それとも別の理由か、女性はとても不機嫌だった。

「もういいかしら？」

「はい。

こちらは使わせて頂いた薪代と飼葉代です。お納めください」

当たり前だと言わんばかりに、女性は優斗の手からそれをぶんどる。

今回はその金額に満足したのだろう、手の中の銅貨を確認した女性は少しだけ愛想よく「また来てくださいね」と告げると、男と共に家に入っていく。

扉が閉まると共に素の表情に戻った優斗は、肩を落とし、がっく

りと項垂れる。そして次の瞬間には顔を上げ、拳をきつく握る。

「ご主人様、出発しましょう」

「あ、うん」

女性の態度を受け、怒りに震えていた優斗が御者台に飛び乗る。

優斗が手綱を握る間に、同じく御者台に飛び出してきたフレイは「大丈夫でした」と告げると、蜂蜜飴を取り出し、口の中に放り込む。

「残り少ないんだけど？」

「こんな気分の時こそ、甘いモノ、ですよ」

そう言って、フレイは優斗の口元にも1つ、それを差し出す。

優斗はそれを素直に受け入れ、口の中に広がる甘味に浸る。

「旅をしていれば、こういう事はまたあるはずです」

「だからあんまりかっかするな、と？」

「いえ。かっかしても、冷静でいて下さい、と言う事です。今回の様に」

今回、優斗が冷静に下せた判断は、実際のところほとんど無い。村長の娘と口論せず、あっさりと受けれたまでは良いが、その後すぐに村を出ようとしたのは、彼女の顔を見たくなかったからだ。他の宿を探す事なく、すでに夕方に近いこの時間に出発を強行したのは、冷静に判断すれば必ずしも良い事ではない。

フレイがそれを指摘しなかったのは、彼女も同じく腹を立て、あの女の顔は2度と見たくないと思っていたからだ。また、睡眠を邪魔された事も腹立たしく思っている。

「もう1ついかがですか？」
「自分が食べたいだけだろうに」
フレイは何も答えず、にこにこと微笑ながら2つ目の飴を差し出し続ける。

フレイと優斗が交わした約束。その中に、飴は1日1つ。ただし、一緒に食べる場合は優斗と同じ数まで食べて良い、と言うモノがある。

「口移しをご希望ですか？」
「フレイが口に入れた時点で、フレイの分に数えるから」
「だったら、ご主人様が口に入れた後に奪い取ればいいんですね？」
「今の無し。本気でやりそう」
優斗が、降参、とばかりに両手を上げる。

そんな優斗に、フレイは何も言わず飴を差し出し続ける。添えられた微笑みは、言葉以上に雄弁に、優斗が何をすべきかを語っている。
敗者にはそれに逆らう権利は無い。かと言って、優斗はそれを素直に受け入れ事を良しとしなかった。

「な、何するんですか！」
フレイが慌てて手を引っ込める前に、優斗がその手首を掴み、それを妨害する。

そして飴ごと咥えていた指に舌を這わせる。飴を掴んだせいで付着しているきなこを全て舐めとる為、優斗は抵抗するフレイの腕を更に引く。

「あ、ん。っう、くすぐったいです！」
「はい、お終い」
そう告げると共にあっさりと腕を解放した優斗は、手綱を握り直すと正面に向き直る。

わざとらしく視界からはずされたフレイは、咄嗟に反論、もしくは反撃できなかった事を悔しく思いながら、荷台から取り出した布で優斗の唾液でべとべとになった指を拭うと、自分の口にも飴を１つ追加する。

結果だけ見れば、飴を得る、と言う目的を果たしたフレイだが、最後に逆転負けを喫した様な気分で、少し不満だった。更に引っ繰り返す手段を思い浮かばなかった訳ではないのだが、一応、１６の乙女であり、断じて痴女などではないフレイにとって、その行為は羞恥心やその他諸々の理由で、実行に移す出来なかった。

最も、毎晩の様に優斗のベッドに潜り込んで誘惑し続けていた彼女が、痴女で無いかどうかは、議論の余地があるだろう。

「出発したばかりだけど、良い場所があったら野営の準備をした方がいいかな」
「いえ、薪と藁を頂戴して来ましたので、今日は暗くなり始めるまで進みましょう」
「……何時の間に」
「代金は払ってますから問題なしです。
それに、少しでも離れておく方が良いと思います。勘ですけど」

薪替わりの木切れを探す時間をある程度省略できれば、野営の準備が短縮出来る。
それを普段からしないのは、薪にかけるお金が勿体無いのと、荷

馬車にそれだけの量を積むと他の荷物を積むスペースが激減するからだ。もちろん、万が一の為に普段からいくらかは積んであるが、それを使用する事は稀だ。

「さすがに一晩中は無理ですので、少しは集める事になりますけどね」

「じゃあ、食事も簡単なのにしようか」

「干し肉を希望します」

「今夜は豪勢過ぎて、財布が軽くなりそうだ」

「だったら、がんばって薪を探してください」

結局、夕食はフレイの希望通りに干し肉と、お湯に麦と塩を放り込んで煮詰めると言う簡単なメニューとなった。

夜番は交代制と決め、まずフレイが眠り、深夜に目を覚ますと交代で優斗が眠った。

翌朝、何時もより少し遅い時間に目を覚ました優斗は、既に明るくなった日の下で朝食を摂り、荷台で眠るフレイと共に次の街へと出発する。

漁村を追い出されてからしばらく後、優斗は気が付くと地図を広げて考え事をする様になっていた。

「どうしたんですか？」

「んー？」

「何か気になる事でもあるんですか？」

重ねられた質問に、優斗は昼食後の薄茶を啜りながら、もやもやと考えていた事柄を言葉にしていく。

「いや、前の村の事で色々考えてさ」
「色々ですか？」
「例えば、食糧もお金も、何もかも尽きた村に辿り着いたどうなるのか、とか」
これまで優斗達が立ち寄った村は、程度の差はあれど彼らを歓迎した

それはお金を落とすと言う事と、外の物や情報が入って来る事で村に利益を与える事が理由であり、特に前者は、村が小さい程、その恩恵が大きい。
もし優斗がフレイを連れていなければ、貧しい者や小遣い稼ぎが目的の女が寄って来る事もあったはずだ。もっと閉鎖的な場所まで行けば、外部の血と村の収入と言う2つの目的から、半ば無理やり年頃の女が宛がわれる事もある。

「身ぐるみを剥がれて殺される、ですか？」
「そんなとこ。
だからこれからは、村の詳細情報、とまでは言わないけど、せめて飢えていないかくらいは調べてから行くべきかな、と」

優斗は、情報が重要であると言う事を理解しているが、それを実践するだけの経験が無い。
何よりも、生きる為に殺してでも奪い取ると言う感覚がなかった。そう言う事もあると聞いてはいたが、経験し、実感し、痛みを噛みしめてようやくそれがどう言った意味を持つのか、少しだけ理解した。

「喉元過ぎれば熱さ忘れる、か」
「何ですか、それ？」
「故郷のことわざ」

少しだけ昼休憩を延長する事を決めた優斗が、荷馬車からペンと紙を取り出す。

優斗は、ハイルで聞いた商隊参加者の積荷と、彼らが話してくれた話を思い出しながら、紙に細々とメモして行く。

「それは？」
「身の丈にあった商売はどの程度かなって言うメモ」
「えっと？」
「行商歴が1年にも満たない新米は、どんな商売をしてるのかな、と」
優斗の言葉に、フレイが首をかしげる。

何か変な事を言っただろうか、と思いながら、優斗は自分がこれまでに扱った荷物の買値と売値、運んだ距離と時間を長短のみで書き入れていく。

「ご主人様の実家は、商売人ではなかったのですか？」
「そうだけど、継ぐ気、無かったし」
「継ぐにせよ、継がないにせよ、手伝わされるのが普通ではないですか？」
フレイの指摘を受け、優斗はすぐにそれがこちらとあちらの差であり、説明が難しい事柄であると把握する。

こちらには義務教育は無く、子供も労働力と数えるのが一般的であり、何よりある種の特権階級である商人が、自分の息子をあえて農民として育てる事はほとんど無い。良くも悪くも特別な事情、例えば騎士をを目指させたり、妾腹であったりした場合は例外だが、フレイは聞いた話から、優斗がそう言った境遇にある訳ではない事は知っていた。

「あー、いやまぁ。簡単な店番くらいしかしてなかったから」
「放蕩息子だったんですね」
「否定はしないけどさぁ」
話の流れから、優斗は自分の様に放蕩でなく、勤勉で後を継ぐ事を熱望していた弟を思い出す。

しかし、これ以上の脱線話は移動中にすべきだと判断した優斗は、出かけた言葉を飲み込んで、強引に話題を修正する。

「まぁ、それはそれとして、新米で村を回る行商人はどんな具合なのかな、と思って」
「その考え方は、見当違いだと思います」
「え？」
きっぱりと言い切るフレイ。

優斗は自らの思索を見当違いだと告げられた優斗は、純粋に驚きと興味から、フレイに詰め寄る。

「どういう事？」
「その、近いです。それと、睨まないで下さい」
「あ、ごめん」
真剣な顔をして、睨んだと思われた事に少しだけショックを受けた優斗だが、それ以上にフレイが何を言うのかが気になり、身を引いてからフレイに先を促す。

全神経を集中する勢いで耳を傾ける優斗の姿勢に、フレイは迂闊に強い否定の言葉を吐いてしまった事に反省しつつ、緊張しながらそれに従う。

「えっと、その。
ご主人様が参考にすべきなのは、もっと上の方、中堅かベテランに近い商人の方だと思います」

そんなフレイの言葉を、優斗は誤解から来る過大評価だと受け取り、口を開きかける。
しかし、それを予想していたフレイは、優斗が否定と謙遜の言葉を吐く前に、続きを口にする。

「私が侍女をしている時に、行商人の方が行っていた事なのですが」
「うん」
「行商に重要なのは、品物選びなんだそうです」
「そりゃあそうだと思うけど」
「使える資金と乗せられる荷物量から、最大の利益を出す品物を仕入れるのが、良い行商人だ、と」
言葉にすれば当然の事と思えるフレイの言葉。

優斗はそれをゆっくりかみ砕きながら、フレイが何を伝えたいのか、解いていく。

「経験よりも、資産が近い人の話の方が参考になる、って事かな？」
「そうです。それです」
ふぅ、とため息を吐くフレイの姿に、優斗は苦笑する。

「いや、自分で行かないで村にあれを届けるには、どんな商人に頼むべきかあたりをを付けるべきか考えてたんだけど」
「え？」
「もちろん、自分の商売の参考にもするつもりではあったけど」
「うっ。でしゃばった上に余計な事を言ってすいません」

そう言って小さくなるフレイの反応は可愛いが、同時にこのまま見つめ続けるのは少しだけ可愛そうでもあると感じた優斗は、その姿を少しだけ見つめた後、出発の準備を始める。

フレイの可愛らしい反応を楽しんだ優斗は、フレイが出発と同時に夜番の為にもう少し眠ると言って逃げた事で1人になってしまう。

「リスクとリターンも考えないと、か」

聞き手のいない優斗の呟きは、荷馬車の進む音にかき消されながら風と共に後方へと流れていく。

フレイが指摘した通り、現在の優斗が買付金と設定している金額分を、小さな村1つで買い付ける事は難しい。

そしてそれ以上に、村や道中で略奪された場合のリスクと、村から得られるリターンが釣り合わない。整備された街道沿いと、村に向かう碌に整備もされていない道では、道中の安全度は様々な意味で段違いだ。

漁村での出来事を切っ掛けに始まった優斗の思索は、結局のところ、極力整備された街道沿いに進み、なるべく一定以上の規模を持つ街や都市、もしくは行商人が頻繁に利用する村だけを利用すると言う結果に落ち着いた。

早速の方針転換（後書き）

ひさしぶりの2人旅、その道中でした。

優斗くんが段々フレイさんの対応に慣れて来ています。

もちろん、その逆もまた然り。

貿易都市カクス

数日後、優斗達は目的の都市へと到着する。

貿易都市カクスは、主に帝国へ品物を輸出する事を目的として作られた港町だ。

ルナール公国の首都であるルナールを通る川の河口に作られたカクスは、首都に集まった品々を川を通じて運び込み、そこから更に海路で帝国へと運ぶ事が出来る。

もちろん、帝国由来の品も集まってくる為、それらは船と共に首都へ運ぶ必要があり、その為の立派な街道が川沿いには通っている。

それらの機能は、カクスの川を挟んで北側に存在する。逆に南側には漁港を中心とした漁師の街がある。

「大きな街ですね」

「今まで見た中で、一番大きいかも」

「アロエナよりも大きそうです」

市壁が無い為、優斗達は荷馬車を止める事無く宿探しを開始する。

実際のところ、カクスは公国内ではアロエナに次ぐ規模の都市だ。ただし、それは北側の都市部分の話であり、川を挟んで南側の街は含まない。アロエナと違って市壁が無い事から、都市の外に住みながらその恩恵を得る事が出来るので、ごく近距離に街が出来た、と言うのが公国の公式な見解であり、税や自治、警備は名目上では別々だ。

故に、正確に言えば南側の漁師街はカクスではないのだが、ほと

んどの人間はそれを知らず、どちらもカクスと呼んでいるし、カクスだと思っている。

「んー。どの辺に宿を取るべきか」
「色町の近くはどうですか？」
「高い、怖い」
「誰が怖いのか、是非教えて下さい」
軽口を交わし合いながらも、2人はこの街で果たすべき目的と、その為に便利な位置を考え始める。

「酒場の多いところがいいんじゃないでしょうか」
「治安悪そうじゃない？」
「人探しは捗ると思います」
「別に聞いて回る訳じゃないし」
「そうすると、商会付近ですか？」
「そっちだって何度も足を運ばないと思う、と言うか行くなら荷馬車でだし。むしろ、職人街とかあるかな」
優斗の意図を、フレイはほぼ寸分違わず理解すると、辺りを見渡し始める。

何かを見つけたらしいフレイに手で制され、優斗は後続車がいない事を確認してから荷馬車を止める。

「場所を聞いてきます」
「はいはい」
優斗は銅貨を数枚取り出すと、差し出されたフレイの手に握らせる。

露店の商品を買うと共に、街の事を聞く。
それはよくある光景で、最低限の事を聞き出すのならば男性の、

どうでも良い事を含んででも色々知りたいのなら暇そうな女性の店員に声をかけるのが常だ。

「戻りました」
「どうだった？」
「ルナール経由で蜂蜜飴がやってきて、人気商品になっているそうです」
「いや、宿」
余計な、しかし重要で少し悔しい情報に、優斗は複雑な表情を浮かべる。

焦らず、欲を張らず、堅実に売り出していれば、優斗は今以上の資産を得て、上手く行けば店を持ち、どこかに定住していた事だろう。
その事に少なからず未練はあったが、振り切る様に、今は宿を探すべきだと切り替えると、優斗は大げさにため息を吐いて、先ほど買った果実を齧るフレイに視線を向ける。

「もう少し東の川沿いに、服飾関係の職人さんが多く集まる一角があるそうです」
「もしかして、行き過ぎた？」
「いえ、その付近には宿があまり無いそうなので、ここから川の近くまで行って、川沿いを西へ向った場所が最寄だそうです」
「確かに、言われて見れば職人街の近くに宿は少なそうだ」

職人が作った物を買うならば、商会へ行く必要がある。誰もが職人から直接買う様になると、商会の仕事が無くなってしまう為、それを防ぐためにこの街の商会にはそういった行為をした職人からは購入しないと言う規約が存在する。そうなるとよほど運が良くない限り、その職人は破産する事になる。

「で、宿の希望は？」
「おいしい魚料理を出す宿があるそうです」
「そう。
じゃあ、案内お願い」

優斗はフレイの抱える果実を1つ奪い取ってから、フレイの指示に従い、馬を進めていく。
先ほどよりも少し細い道を行き、幾つかの宿を見送りって到着したのは、街の中心部や繁華街にある一流所と比べればかなり見劣りするものの、それなりに良い宿だった。

多少、立地条件の悪さを感じながらも、優斗はそれを指摘する事をしなかった。

「すいませーん」
「いらっしゃいませー」
「部屋、空いてますか？」
荷馬車を降り、宿の扉を開けると、宿の人らしい若い女性の出迎えを受ける。

優斗は扉を大きく開け放し、外にある荷馬車を示しながら、言葉を続ける。

「どこに停めればいいですか？」
「荷馬車？　商人さんが来るなんて珍しいわ。うちは別料金だけどかまわないでしょうか？」
女性の言葉から、優斗はここが何時もの商人向けの宿とは違う場所だと言う事を理解する。

納屋、もしくは厩の使用が別料金である宿で、商人の利用が珍しく、魚料理が美味しいと評判。
以上の事柄から、優斗はここを、商人向けの安宿などではなく、裕福な旅人や観光客向けの宿であると判断する。

「連れが1人居るんですが、いくらですか？」
「1部屋ですか？　それとも2部屋の方が？」
「安い方で」
優斗の即答に、女性が苦笑する。

「2人部屋、朝夕食事に魚料理にぴったりなお酒も1瓶おまけして、銀貨2枚半でどうかしら？」
「2枚半、ですか」
「もちろん、納屋の使用料も、馬の餌代も込みです。他に必要な物があれば、そちらも出来る限り対応しますよ」
女性の提示した価格は、行商人が使う安宿とは比べるべくもないが、このレベルの宿としては、多少安い部類に入る。

優斗は安さの理由を、行商人にサービスしておけば、上手く行けばここに向かう人に宣伝して貰えるかも知れないと言う事と、旅の話、主に男女のソレを聞きたいのだと予想する。
その予想ははずれておらず、彼女の目は好奇心を隠しきれていない。

「7泊分、先払いしますので、15枚でどうですか？」
「7泊ですか！？」
「ちょっと長引きそうなもので」
優斗が何が長引くのかはっきりと告げなかった事には理由がある。

そして女性は優斗の意図通り、それが商売に関する事だと予想し

た。故に、ここで良い印象を与えて置けば、長引いた時には宿泊の延長を勧められるし、短い場合でも、先払いならば損にはならない、と考える。

「2人部屋の中でも、一番日当たりの良い場所を用意させますね」
「それも魅力的なお話ですが、私は商人ですので、どちらかと言えば静かな部屋がいいですね」
この宿の売りである魚料理を出す食堂は、日当たりの良い場所に面している。

そして2階建てのこの宿でもっとも日当たりの良い部屋は、その真上である事は間違いない。食事がメインとは言え、酒を出す場が賑やかである事も。

「では、そうですね」
まだ20代の女性は、この宿自慢の料理を作る旦那と共にこの宿を切り盛りしている。

若夫婦が、中心街から外れているとは言えこんな立派な宿を構えるまでには苦労の連続だった。そしてそれは今も借金と言う形で続いている。2人居る従業員にも給金を払わなければならない。だからこそ、値切られる事なく、しかし7泊すると言う上客を逃さない為にはどうすべきか、彼女は必死に頭を働かせる。

「連泊でしたら、昼食も準備させて頂きますね」
「食事、特に昼食は外で摂る事が多くなると思いますので。あぁ、材料の準備とかありますよね。不要な場合は何時までに伝えれば大丈夫ですか？」
「それは主人に確認して、後でお伝えしますね」
「お願いします」

優斗が言外に、食事が不要でもあの値段だと告げている事に気付いた女性が、その頻度が多いならばこの値段でも、と思い始めた頃、1人の男が現れる。

「朝食と昼食は前日の夕食前に、夕食は昼までに教えてくれればいい」

「わかりました」

唐突に割り込んで来た男性――厨房を取り仕切るこの宿の若旦那は、優斗よりも背が高く、体格も良い。

彼は少し顔を顰めると、妻である女性を一瞥し、その後少しだけ表情を緩めて優斗の顔を見る。

「お客さん、この宿は俺と女房がうまい飯をゆっくりと楽しんで貰いたくて作った宿だ。出来るだけ、食って行って欲しい」

「そうですか。それは失礼しました」

つい商談モードに入っていた優斗は、彼の言葉に少し反省する。

値切る事は、悪い事ではない。

とは言え、7日間も世話になる予定なのだから、引き際は重要だと言う事は優斗も理解しており、実際に無茶をする気はなかった。しかし、ここに来てから何でもありな商談を繰り返して来た癖で、引き合いに出すモノを間違えた。出してはいけないと言う程ではないが、あくまで優斗の心情的に、だ。

「美味しいと評判の料理、期待していますので」

「おう。朝早いなら、言ってくれ。それなりの物を準備する」

「ありがとうございます。

ですが、昼食はどうしても出先で頂く事が多いと思います」

宿の立地条件の悪さを自覚している男は、それには何も言わずに頷く。

その反応にほっとした優斗は、女性の方に視線を戻しながら、落としどころについて再度頭を巡らせる。

「ところで女将さん、腕の良い服飾職人の伝手とかありませんか？」

「服飾職人、ですか？」

「服を特注したいのですが、生憎この街に来るのは初めてでして」

「すいません。お力になれそうにないです」

その返答に「そうですか」と返しながら、優斗はまた別案を考える。

優斗はここの女将であると判明した女性の考えを、安く仕入れた品、もしくは元手のかからない手間を売るサービスを付ける事で価格を維持したいのだと考える。

それに沿い、かつ後はもう少しだけ条件を引き出す事を今回の妥協点と定めた優斗は、時間稼ぎも兼ねて荷馬車で待機するフレイに声をかける。

「ここに連泊でかまわない？」

「はい」

「本当に？」

優斗が時間を稼ぐ為に重ねた質問から、フレイは状況の一部を把握する。

それを受けたフレイが、少し考えた素振りを見せている間にも、優斗は思考を止める事なく、その姿を見つめる。

「強いて言うなら、洗濯用品の貸し出しがあるとありがたいです」

「だ、そうですけど、洗濯用品の貸し出しとか、出来ますか」
「もちろんです！」
洗濯用品とは、洗剤やたらい等の洗濯用品に加え、井戸や川の水の使用権も含まれる。

行商人は普通、洗濯用品を持ち歩かない。私物が増えて積荷が減り、それが利益減に直結する事を考えれば、多少の汚れは気にせず、大きな汚れは川や湖等で水洗いするくらいで十分だ。たらいに関しても、水を汲むだけなら鍋を使えば良い。

もちろんそれは商人としての感覚であり、年頃の乙女であるフレイは、常に身だしなみをきちんと整えたいと思っている。故に、洗濯が出来ない間に大きく汚してしまった場合、その部分を見せない様に工夫――ケープを重ねたり、リボンを巻いたり――していた。

「あぁ、それと、氷って手に入りますか？」
「大丈夫です。けど、何にお使いですか？」
女将が問い返したのは、興味本位等ではなく、使用目的によって手に入れる氷の質、すなわち値段が違うからだ。

優斗はそんな女将の意図など気づいた様子もなく、反射的に答える。

「飲み物を冷やそうかと」
「それなら、厨房で冷やしておこう。何が良い？」
「では、ワインと果実酒を。
ちなみに、食べられる氷はありますか？」

優斗の言葉に、宿の主人が一拍空け、考え始める。
この宿には、いわゆる氷冷蔵庫が置かれている。これは珍しい事

で、普通は貴族か大商人でもなければ、毎日氷を買い続ける事は難しい。

「暇な時で良ければ、作ろう」
「あぁ、大将のギフトは氷雪でしたか」
彼が若くして自分の宿を構える事が出来た理由の1つは、そこに起因する。

彼はかなり強いギフトの持ち主で、それで生活には困らない程だ。
そう言う人物は事業に失敗しても潰しが効く上に、奴隷にすればかなりの高価格が見込める。故に、己を担保にかなりの額を借り受ける事が可能だ。

「……大将？」
「あぁ、すいません。えっと、何とお呼びすれば？」
「それでいい」
大将はそう答えると、どこか楽しそうに口元を歪める。

一方優斗は、厨房を取り仕切る人間が暇になるのは、実際何時、どのくらいの時間なのかを考えていた。

「例えばですが、買い出しの際に荷馬車があれば、時間を短縮出来たりしますか？」
「買い出しの見習いが喜ぶだけだな」
「その分、厨房を手伝わせればどうでしょう？」
「そうだな。メニュー次第じゃ、ひたすら皮むきでもさせれば少しは手が空くな」
「ちょっと氷を使った食べ物を試作してみたいので、お時間を頂きたいんです」
そう言って、優斗は銀貨を1枚ずつカウンターへ乗せていく。

大将と女将が見守る中、１０枚、１１枚目まで置くと、次を手の中で弄びながら、口を開く。

「製法を隠す気はありませんので、良いところがあれば真似てかまいません」

「異国の料理か」

優斗の髪と肌に視線が突き刺さる。

優斗はそれを極力気にしない様にしながら、手の中の一枚と、更にもう1枚、カウンターに積み上げる。

「料理、と言う感じではないですけどね」

「そうか」

「興味がおありでしたら、故郷の料理を幾つか紹介しますよ？」

大将の目が見開かれ、優斗と視線が合う。

優斗はにっこりと笑みを返しながら、更に3枚の銀貨を順に並べていく。

「今回の滞在では、待ち時間が多くなりそうですし」

「そうか。なら、うちにある材料を提供しよう。

もちろん、営業に差し支えない範囲で、になるが」

その言葉と同時に、優斗は最後の一枚を乗せ、今まで話していた大将から、視線を女将に戻す。

「その条件で7泊8日を公国銀貨１７枚でどうですか？」

「はい、よろこんで」

こうして優斗達は、ここを当面の寝床に決めたのだった。

部屋に荷物を運びこんだ優斗は、まずはキャリー商会に向かう事に決め、宿を出る。

フレイは洗濯用品を早速準備されてしまい、私も手伝うから、むしろ私がやっておくからと妙に意気込んでいる女将さんを無視して出かけるのも悪いかなと言う事になり、現在洗濯中だ。

この街は大きく、主要な交易路であるので、当然奴隷管理局が存在する。奴隷商であるキャリー商会もまた然り。

優斗は、奴隷商と言う相手と親交がある事に抵抗が無い訳ではないが、最近ではその商売を否定する事自体にも疑問を感じ始めていた。

奴隷が酷い扱いを受けている事。首輪を付けて家畜扱いを受けている事。そして自分がフレイを所有している事も含め、それらに対し、優斗は基本的に否定的だった。

しかし、旅を続け、色々な話を聞き、経験を積んだ。

例えば、北方のある地域では、まともに食糧が取れない為、糧を得る為に子を産んで売る。そうしなければ、全員が飢えて死ぬからだ。

例えば、凶作で食糧が無く、その購入資金を捻出する為に、村人が売られていく。もしくは、疫病が蔓延した為、薬を買う為に。

奴隷商が居るから、そう言った商売があるからこそ、生き延びる事が出来ている人々に、それは良くない事だから止めろと言うのは、死ね、と言う事と同義だ。

キャリー商会カクス支店までまだ優斗の情報が届いていない事を確認した後、優斗は女性店員に胡散臭そうに見つめられながら商会を後にし、幾つかの果実や蜂蜜等の食糧と飲み物を少しだけ買うと宿へと戻る。

「あ、おかえりなさい」
「ただいま。手伝おうか？」
「いえ。むしろ見ないでください」
優斗がノックをせずに入った部屋では、フレイが洗濯物を干している。

全自動でない洗濯にはとても時間がかかる事を学んでいた優斗は、無人だと思っていた部屋にフレイが居た事に驚きながらも表情には出さず、あえてフレイの作業を見続ける。

「……なんで見てるんですか？」
「むしろ、なんでこっち向いてないのに見てるのが判るのか不思議なんだけど」
「気づかない訳がありません」
「そうかな？」
「女は、いやらしい視線には敏感なんですよ、ご主人様？」
部屋の隅に貼ったロープに、白い布に見える物がかけられていく。

フレイは口を動かしながらも手際よく、白い布をかけたロープの手前に外套をひっかける。
優斗にとって、フレイが宿で洗濯を終えた後で良く見る光景が現れ、その奥にかけられた白い布が見えなくなった事に気付いた優斗は、ようやくフレイの言葉の真意に気付く。

「あー、もしかしなくても、何時も隠してた？」
「……知っていて近づかなかった訳じゃないんですね」
フレイが、はぁ、とため息を吐く。

フレイが隠した白い布の正体。それは、彼女の下着だ。
優斗は未だにドロワーズを下着だと瞬時に判断出来ない。慣れるほどお目にかかる事がないと言う事もあるが、それ以上に本人が心のどこかであれを下着だと認めていないからと言う理由も存在する。

「覗かないでくださいよ？」
「そんな趣味はないって」
「干すところをじろじろと見られました」
「いや、それは」
それに続く言葉を、優斗は口にする事を躊躇する。

原因は照れ。口にしなかった言葉は「家事をしてるフレイの後ろ姿が可愛かったから」だ。

「それはそれとして、明日の予定だけど」
「話を逸らしましたね」
「海沿いの商会に行こうと思う」
「やはり疾しい事を考えていたんですね？」
「かまわない？」
「もちろんです。私は奴隷ですから、ご主人様のご要望には何でも従います」
フレイが微笑を浮かべ、それを見た優斗は苦笑する。

負けた気がした優斗は、こんな風に無理やりでなく、もっとスマートに話題を逸らせるように考えよう。その日、評判通りに美味な魚料理を前に、そんな事を考えた。

美味しい料理に冷えた果実酒を頂いた2人は、満腹感と疲労感、
そして少しの酔いによってあっさりとベッドに吸い込まれ、夢の中
へと誘われた。

貿易都市カクス（後書き）

ひさしぶりに大きな都市に到着しました。

この街では、何が彼らを待ち受けているのでしょうか。

長期的商談

翌日、久しぶりのベッドで良く眠り、気持ちよく朝を迎えた優斗は、美味しい朝食を摂ってから物価と通貨の調査を行うべく、フレイと市場を歩いていた。

通貨の両替価格は誤差の範囲内で、以前の感覚で7泊分の宿代を支払ってしまった事に問題は生じなかったが、変動があった可能性を考えれば迂闊な行為だったと反省する事になる。特にカクスの様に交易が盛んな都市は、何か切っ掛けがあればすぐに価値が変動してしまう。

「で、こっちは変動ありか」

「値上り傾向、だそうです」

売り払う商品以外にも、服を作る前に布と糸の価格も重点的に調査して置こうと言いだしたのはフレイ。

その結果は、どちらも値上りしており、複数の店で問うたところ、少しずつ市場に出回る量が減り、徐々に値上りしている、との事だった。

今日の昼食を宿の食堂で摂る事に決めていた2人は、並んで歩きながらお互いに成果を報告しあい、話し合っている。

「予想どうり、かな」

「何故ですか？

あの件が原因なら、値下がるはずですよね？」

フレイの言う、あの件、とは、ロード商会及び、ユーシアでの機織り機改革による増産の事だ。

布の供給量が増えれば、値崩れが起こり、暴落する事を利用して

稼ぐと言っていた事を、フレイはきちんと覚えていた。

「それはその通りなんだけど」

「では、何故？」

優斗は、街中で話して良い内容だろうか、と一瞬迷う。

しかし、初めて来た見知らぬ街で自分たちの話が聞かれていると思うのは自意識過剰であり、何より移動しながら会話をしているのだからと思い直す。それでも念の為、周りを見渡してから口を開いた。

「ロード商会が買い占め、とまではいかない程度に集めて、そう見せかけてるんだと思う」

「確かに値上りした方が、利益は出ますけど」

納得いかない、と言う表情のフレイ。

手元にある布を売り払う際の値上り分が買占めの為の資金よりも高くなるのならば、この手法で利益が増える事になる。フレイはそんな風に考えながら、優斗に視線を向け、説明の続きを要求する。

優斗はそれを受け、どこまで説明すべきか悩みながら口を開く。

「それもあるけど、値下がっているところに大量の売りがあったら、買取拒否もあり得るから」

「買取拒否ですか？」

「それが原因で更に値下がる可能性があるし、何より値下がっている品を買い取る事自体、損する危険性がある」

「なるほど」

「値上り傾向が続いてる時なら、ここが最高値だと判断して売りに入ったと思わせられるし。ある程度の買い占めも、値上りきってから売る為にやっていたと思われればバレにくいしね」

何がバレにくいのかはあえて確認することなく、優斗が説明を終える。
フレイはそれに満足したのか、もしくは宿が見えてきたからか、更なる説明を求める事無く、優斗の隣を歩く。

「午後は酒場巡りですよね？」
「うん。そんなに多くは回らない予定だけど。どうせ全部は無理だから」
「では、午後も別行動ですね」
「いや、説明もあるし一緒で。
って言うか、朝からやけに働くね？」

午前中の情報の大半を持って帰って来たのはフレイだ。
更に、朝も早くから馬や荷馬車の手入れをしていた事を、優斗は宿の女将さんに聞いて知っていた。

「ええっと、その」
「言い難いなら言わなくていいけど？」
「そう言う訳では」
そう言いつつも逡巡するフレイから、優斗は視線を外して前を向く。

同じくきちんと前を向いて歩き始めたフレイは、一瞬だけ横目で優斗を見て、前を向いている事を確認すると、おずおずと理由を口にする。

「実はあの宿、ほとんど冗談で提案したんです」
その言葉に、優斗は何時もよりもかなり多く支払った宿代を思い出す。

何時も利用する様な宿ならば、フレイを奴隷と申告すれば銀貨1枚で1日の食事代まで賄える。その事を思えば、ここでの滞在には普段の2倍以上も経費が掛かっている事になる。

それは宿がいつもよりも高級である事に加え、フレイが魚料理目当てで選んだ宿で、奴隷料金では料理に差が出る事を回避する為に優斗があえて正規料金を支払った事も原因の1つだ。

無論、優斗はフレイがそんな事を気にするのではと言う事を、欠片も考えていなかった。

「確かに高かったけど。別に気にしなくていいのに」

「そう言う訳にもいきません。

朝食の付く宿なんて、私、初めてみました」

基本的に1日2食なこの国の宿は、夕食付か素泊まりか、と言う2択がポピュラーだ。連泊なら昼食付きがある宿も存在するが、朝食まで付くのは、朝食を摂る習慣のあるお金持ち向けの、いわゆる高級な宿である証拠だ。

実際には、2人の止まる宿はそう言った層向けの高級宿ではなく、高級宿を模倣した、それっぽい、たまには贅沢して見ようかと言う小金持ちや観光客向けの宿だ。

「ですからせめて、少しでも働こうと」

「うーん」

フレイの真剣な表情に、優斗はそれを解消する方法を考え始める。

気にしない様に説得する、と言う方法を取らないのは、その方が手間が多い事を、今までの経験でなんとなく知っていたからだ。

しかし、適当な頼み事をするのが最善か、と考えていた優斗は、フレイの次の言葉でそれを考える気力を失う事になる。

「そうしないと気になって、蜂蜜飴を心置きなく食べられないじゃないですか」

「……そーかい」

優斗は脱力しながら、宿の扉を開ける。

そこそこに込んでいる食堂で昼食を摂った2人が、食休みの為に部屋に戻ってしばらくすると、部屋にノックの音が鳴り響いた。

「はい、なんでしょうか」

「ユート様にお客様です」

「お客、ですか？」

扉の向こうから聞こえる女将さんの声に、優斗はこの街で尋ねて来る可能性がある人物を思い浮べる。

優斗はカクスに来るのは初めてであり、宿泊場所を教えた相手もいない。故に、尋ねて来る相手には心当たりがないとまで考えると、フレイに目配せをする。

フレイが緩めていた首元のリボンを結び直し、首輪がきちんと隠れた事を確認すると、優斗は扉の前まで移動し「今開けます」と言ってから外向きの扉を開く。

「下ですか？」

「はい」

「ありがとうございます」

女将さんは微笑みを浮かべると、回れ右をして階下へ向かって歩き出す。

優斗もそれに続き、部屋の鍵を閉めたフレイが、少し遅れる形で後を追う。

「いやー、どうも。昨日はすいませんでした」
「貴方は確か」
「えぇ、そうです」
食堂に入ると、席に座っていた女性が1人、立ち上がる。

立ち上がった恰幅の良い中年女性の隣には、黒色の肌を持つ女性が1人、座っており、その首には優斗にとって見慣れた物が巻かれている。優斗がそちらに視線を向けると、中年女性はにこりと優斗に笑いかける。

「改めてご挨拶させて頂きます。私はキャリー商会のカクス支店長を任されております、アイタナと申します」
「はい。先日はどうも」
「本日はその件でお話がありまして。マイア！」
マイアと呼ばれた女性は、アイタナの声にびくりとしながら立ち上がると、優斗と目を合わせる事なく、唐突に頭を下げた。

何事か、と優斗が戸惑う隙に、マイアはそのままの姿勢で言葉を発する。

「申し訳ありませんでした」
「えっと、これは何事ですか」
「それは私が説明致します」
アイタナが申し訳なさそうな表情で、優斗に着席を促す。

優斗が戸惑いながらも着席すると、アイタナも同じく席に座るが、

マイアは変わらず頭を下げたままだ。

「実は、この子には商会の仕事を手伝わせておりまして」

「はぁ」

「先日、ルナール方面から来た荷物の整理中、こちらを紛失していまして」

差し出された封の切られた手紙に、優斗は遠慮がちに手を伸ばす。

視界の端でフレイが隣のテーブルに着いた事を確認しながら、優斗はアイタナの許可を取ってから手紙に目を通す。

「なるほど。それで？」

「昨日のご無礼に対する謝罪と、改めてご挨拶をしたいと思いまして。不躾かと思いましたが、こうしてやって来た次第です」

にこりと笑うアイタナと、その隣でまだ頭を下げ続けているマイア。

その光景に頭を痛めながら、優斗は手紙に再度目を落とす。

そこに書かれている文章は簡潔で、ユートと言う行商人が来たら持て成せ。商会にとって大事なお客様だ、と言う内容にキャリスのサインが添えられているだけのものだ。

「判りました。ところでマイアさん、そろそろ顔を上げて下さい」

「当商会の奴隷に敬語は不要ですので、どうか優斗様もその様に。マイア、顔を上げなさい」

はい、と小さく呟いたマイアが顔を上げる。

黒い肌、薄いブラウンの瞳にメリハリのある体。特に大き目の胸とくびれが出来そうな程に細い腰に、優斗の目が引き付けられる。

「気付けなかった私にも責任はあります。申し訳御座いませんでした」
「あー、はい」
「お詫びと言ってはなんですが、この街に居る間、私どもに出来る事があれば、何でも協力させて頂きます」
そこでようやく、優斗はわざわざ訪ねてきた相手の意図を知る。
そして同時に、ある疑惑も生まれる。
本当にマイアと言う奴隷の失態で、手紙が開封されていなかったのか。もしかすると、彼女は。
優斗の思考は的を射ていたが、最後までたどり着く事を妨害するかのように、アイタナが口を開く。
「慣れない街で、不便も多いでしょう？」
「それはお詫びをするからキャリスさんには黙っていて欲しい、と。そう言う事ですか？」
「いえいえ、そんな。私はただ、商会の代表として優斗様を持て成したいと、そう考えているだけです」
前日にあっさりと追い出された優斗としては、態度の豹変ぶりにただ呆れ、同時に関心する。
とは言え、折角優位を得たのだからと、優斗はここで何を引き出すべきか考える為、その候補を幾つか列挙して行く。
服飾職人への伝手。運んで来た荷物の売り先斡旋。同胞調査の協力等。
「今回の事で、優斗様は不当な扱いを受け、不愉快な思いをされたと思います」
「そうなるかな」

「優斗様は近い将来、人の上に立たれるお方。そうですよね」
「いや、そんな事は」
「ですが、優斗様はお若い。失礼ですが、人を扱う事に慣れていない様に見えます」
優斗の言葉を無視し、アイタナはしゃべり続ける。
そんな態度を訝しみながらも、優斗は口を挟むタイミングを見計らいながら、その言葉に耳を傾ける。

「ですからどうでしょう。この際、優斗様がご自分で罰を与えてみませんか？」
「はぁ。それはどういう？」
「失態を犯したマイアに、優斗様が罰を与えるのですよ。幸い、優斗様は奴隷を引き連れていらっしゃいますので、その扱いには慣れているはずですよね？」

アイタナはそう言って、隣のテーブルへ視線を向ける。
そこで冷えた果汁を啜っていたフレイは、素知らぬ顔で店員におかわりを頼んでいる。

「町娘に扮する技術１つとっても、素晴らしい調教具合が伺えます」
「調教、ねぇ」
「それを是非、マイアにも。優斗様が何をしても、当商会は一切関知致しません。何でしたら、一筆書いてもかまいません」

優斗はこの国の一般的な基準で言えば、１０代の若造に見える外見をしている。それ故に侮られる事は、これまでもあった事だ。
アイタナも多聞に漏れず、女、もしくは金や栄誉で釣れると判断した。その為に準備されたのが、マイアと言う女性奴隷、と言う訳だ。

「優斗様の所有する奴隷は、些か幼いご様子」
「そんな事はないと思いますけどね」
「もちろん、優斗様のご趣味を否定する訳ではありません。ただ、こう言った女を知る事も、上に立つ者として重要だと思うのです」
アイタナの視線を受け、マイアが胸を強調する様に腕で自分を抱く。

その姿に、優斗の心臓がどきりと反応しなかった訳ではないが、冷静さを失う程ではない。主に、隣の席から手の中の果汁よりも冷えた視線を送って来る存在のおかげで。

「残念ながら、私は一介の行商人であり、人の上に立つ様な器ではありません」
「ご謙遜を」
「一介の行商人としては、むしろ商売の資金を貸して頂ける方が、嬉しく思うのですが」
優斗の提案に、アイタナは表情を変えず、内心でほくそ笑む。

最悪、お金を支払う事も視野に入れていた彼女にとって、貸して、と言う提案は想定の中でも良い部類に入る。
そんなアイタナの内心にある程度気づいている優斗は、あえてその想像に沿うような態度を取り、侮らせると言う手を取る事に決める。

「2~3か月後になると思いますが、もし、私がお金を貸してほしいとお願いしたら、どのくらい用立てて頂けますか？」
「そうですね。公国金貨で５０~６０枚でしたら、すぐにでも準備させて頂きます」
提案された額面を、優斗は高いのか安いのか判断出来なかった。

行商人と言う身分では、明日にでも旅路で死ぬ可能性すらある。そう言う意味では、金貨５０枚を貸し出すリスクは、果てしなく高い。

逆に、商会の代表が身元を保証する相手に貸し付けるには、少し安い額であるとも感じられる。

優斗がざっくりと計算した彼の総資産額は公国金貨にして６０枚前後だ。

内訳は、馬が各金貨１０枚程度、ホロ付き荷馬車は１０枚を超える。買付資金と荷台の品を合わせれば金貨２０枚を超え、その他、保管用の宝石等がある。

これには生活必需品や衣服などの私物に相当する物は含まれておらず、蜂蜜飴などの嗜好品も計算されていない。

しかしながら、公国金貨６０枚と言うのはあくまで買い集めるのにかかる、いわゆる市場価格での計算結果であり、実際に売るとなればかなり目減りする事になる。

「準備期間を頂けるとの事ですので、もう少し準備出来るかと思います」

「と、言うと？」

「私共も商売がありますので、ご期待に応えられる額になるかは判りませんが。

お手持ちの奴隷以外にも、担保となる高額な品があるのでしたら、どこかから引っ張って来る事も可能なのですが」

優斗はその言葉を聞いて、金を貸すなら奴隷、すなわちフレイを担保に入れる事が前提になっている事を知る。

それをする気のない優斗は、アイタナに納屋へ移動する事を提案

し、奴隷でなく、荷馬車と馬を担保にした場合どのくらい貸付が可能かを問う。

「立派な荷馬車ですね」

「カートン家の次期当主様から譲って頂いた品です」

少しでも箔を付けようと、優斗が軽い気持ちで発した言葉に、アイタナは目を見開いて驚く。

カートン家は侯爵家。

それは公国内でかなり高い地位を持っていると言う事であり、そんな相手から物を譲られると言うのは、それなりのコネがあると言う事に他ならない。それが例え、商取引であっても。

「優斗様は侯爵家と懇意なのですね」

「あー、いや。どっちかと言うとユーシア家の方の」

「っっっ！？」

更に飛び出した貴族の家名に、アイタナは言葉を失う。

権力からすれば、領主であるユーシアは、同じ貴族とは言え侯爵家よりもかなり格下だ。

しかし、商人としては、商売の土壌である領地を持つ領主の方が、販路や利権等の関係上、有益な相手である。

思いがけず知った相手の素性に、アイタナが思い出したのは、自分の失態と優斗の態度。そして、貸付資金として提示した金貨の枚数。

実際のところ、キャリー商会程の規模で、カクスの様な交易の起点にある支店であれば、もっと多額の融資が可能だ。先ほど上げた額は、年若い行商人ならば破格、ベテランであってもそれなりに色を付けた額だったが、貴族と縁続きの大商人相手であれば、出せる

桁が１つ変わる。

アイタナは、目の前の若い商人が、不当な扱いに実は内心で怒り狂って居るのではないかと恐る恐る表情を伺う。

しかし、その反応を、貴族と関係があると言う発言を疑われているのでは、と感じた優斗は、それを証明すべく、１枚の封筒を取り出す。

「ユーシアの家紋入りの封筒です」

「確かに」

優斗の行動は、アイタナにとって威圧以外の何物にも感じられなかった。

これ以上の失態を犯せないアイタナは、優斗が望むものが何か、必死に思考を巡らせる。

一方優斗は、権力を盾に融資の増額を迫っている形になっている事に気付いたが、特に問題は無いか、と楽観的な結論に達し、目の前の女性の言葉を待つ。

「額面が決まってからの準備期間を１０日程頂けるのであれば、１００枚まで準備致します」

「荷馬車と馬を担保に、と言う事でしょうか？」

「はい。更に奴隷も担保にし、貴族様に何らかの口利きを約束して頂けるのでしたら、２００枚までならば出せるのではないかと思います」

「ほぉ。さすがキャリー商会ですね」

優斗が漏らした感嘆の言葉を、アイタナは先ほどの５０枚に対する嫌味だと解釈し、首を竦める。

優斗が借金の算段を付けているのは、もちろん理由がある。
借りる必要が無ければ一番だが、取れる手段が増えれば、それだけ商談の幅も広がる。それにより、成功率も上がると言うモノだ。

「必要ないかもしれませんが、もしもの時はよろしくお願いします」
「もちろんでございます」
「これで用事は終わり、と言う事でよろしいですか？」
「そう、ですね」
「では、私はこれで失礼させて頂きますね」
「はい。……いえ、お待ちください」
「なんでしょう？」
納屋を出ようとしている優斗の背中にかけられた焦った様な声。

優斗が立ち止まり、振り返ると、アイタナがマイアの腕を掴みながらまくしたてる。

「優斗様はキャリー商会の大事なお客人です。不自由の無い様、この子をお付け致しますのでどうか使ってやってください」
「結構です」
即答した優斗だが、内心では少し惜しくも感じていた。

マイアは驚く程の美人ではないが、スタイルは良い。こういう交渉を仕掛けて来ると言う事から、慣れているだろう事も想像できる。それは全て、フレイにはないモノだ。

「この子がお気に召さないのであれば、他の子を用意致しますので、是非」
「今のところ、特に不自由していないですし」
「そうおっしゃらずに」
「宿住まいですから、人が増えると色々と迷惑がかかりますので」

優斗の上げた理由は、そのほとんどが嘘だ。

初めてくる街で不便は多いし、借りた奴隷をずっと宿の逗留させる必要はない。

とは言え、真実の理由を口にする事はない。何故ならば、そんな事をしたらフレイが怖いから、と言うのが彼の本音だからだ。

「では、こうしましょう。

必要な時にお願いに伺いますので、その時はご協力をお願いします」

「……判りました」

優斗の提案に、しぶしぶ、と言った体で同意したアイタナは、丁寧に挨拶をすると商会へと戻って行く。

意地でも自分の存在を売り込もうとするアイタナの態度に、優斗は安易に貴族との関係を仄めかすべきではないと学び、その件をフレイに注意されながら、午後の予定を消化する事になる。

カクス滞在3日目、優斗達はようやく荷物を売り払うべく、動き出した。

向かう商会の名はキカロ商会と言う商会だ。国中に支店を持つ大規模商会程ではないが、それなりの資本を持つ、大きな商会だ。

キカロ商会は海路を主とする商会で、ここに決めた理由は、キャリー商会からの紹介、もしくは後ろ盾の効果が大きい中で、最も大きな商会だからだ。

海沿いに建てられた商会に向かう道すがら、優斗はある事に気付

く。

それは、首輪を付けた黒人の数が、他の街に比べて多い、と言う事だ。その理由を思い付かないまま、優斗の駆る荷馬車は、目的地であるキカロ商会へと到着する。

「いらっしゃいませ。買取をご希望ですか？」

「はい。ですが、少しだけ、特殊な買取を希望していまして」

出迎えた男にそう告げると、彼は奥に声をかける。

その声に応えて出て来たのは、この場所の責任者なのだろう、そこそこ身なりの良い商人だ。

「初めまして、私の名はシュタンとお申します。以後、お見知りおきを」

「行商人の優斗です。よろしくお願いします」

「立ち話もなんですので、こちらへ」

シュタンと名乗った男の先導で、優斗は応接間らしき場所へと案内される。

彼の後姿を見ながら、優斗は今朝、マイアが持って来た手紙の内容を思い出す。

差出人は、キャリー商会の主であるキャリス。内容は、ロード商会の動向について。

「すぐにお茶をお持ちいたしますので」

「おかまいなく」

「そう言う訳にもいきません。よろしければ、奴隷のお嬢さんもおかけください」

その言葉を受け、フレイは優斗に確認の視線を送り、頷くと、お礼の言葉を口にして、ソファーに腰かける。

そのやり取りを黙って見つめていたシュタンは、少し楽しそうにフレイに視線を向けて観察している。

「躾のしっかりとした奴隷ですね。羨ましい限りです」

「それはどうも」

「礼節も学ばせたのでしょう？　座る仕草1つとっても、品がありますね」

シュタンの言う通り、フレイの振る舞いは奴隷としてどころか、平民や商人と比べても遜色ない。

貴族と共に教育を受けていたのだから当然と言えば当然だが、教育を施すにもお金がかかるのも事実。そして、それを見抜けるシュタンと言う男が、同じくそれを学ぶ事が出来るほど裕福な家庭で育ったことが判る。

「うちの奴隷なんて、ほら。お茶を運ぶ事すらまともに出来ません」

シュタンの視線の先には、鑑札の付けられた首輪を持つ奴隷が1人。彼女もまた、黒い肌をした帝国人だ。

シュタンの指摘は、彼女がカップをテーブルに置く際、かちゃりと小さな音がした事を差している。完全に音を鳴らさずと言うのは、貴族に対する際の作法であり、この場で咎められるほどの不作法ではない。この事から、彼は暗にフレイが貴族教育を受けている事を見抜いているのだと示している。

「ところで、本日はどの様なご用件で？」

「実は、多量の絹を買って頂きたいのです」

「ほう」

シュタンの反応に、優斗はここにも例の話が来ている可能性が高

い事を見抜く。

話、とは、ロード商会、もしくはその系列の商会からの絹の大量買取の打診だ。

今朝届いたキャリスの手紙には、ロード商会に縁のある商会から、絹の買取を打診され、知り合いの商会が幾つか、それに乗ったと言う内容が書かれていた。契約内容は、今から2か月後に、指定した数の絹を納品するので、この額面を支払う、と言うものだ。

「実は、ある商会から多量に買い取ったのですが、別件で資金が必要になりまして」

「ほう。それで？」

「資金が必要になるのが2か月後。それまでに絹を準備致しますので、買い取って頂きたいのです」

「それならば、2か月後に改めていらっしゃっては？」

シュタンのもっともな指摘に、優斗は困り顔を作る。

困り顔を伏せ、悩んでいる演技をしながら、優斗は内心苦笑する。いつの間にか、嘘を吐く事にも、演技をする事にも慣れてきた自分に。

「先ほど、買い取ったといいましたが、正確には買い取る契約をしたのです」

「そうでしたか」

「すぐに売れる様、そして必要な額面を準備出来る様、手配しておかなければなりません。どうか、お願い出来ませんか？」

「我が商会でお手伝い出来る事であれば」

「是非、お願いします」

頭を下げながら、優斗は昨夜計算した数字を頭に思い浮かべる。

下限はキャリー商会から融資可能額の金貨１００枚を絹の価格で割った数字。上限はもちろん、金貨２００枚の場合。理想としては、その半ば程だと目標を定め、商談を再開する。

「絹の量はこの程度なのですが、いか程になりますか？」

「どの程度の額が必要なのか、と聞くのは無粋と言うモノですね」

優斗の差し出した紙に目を落としながらも、シュタンは優斗の様子を伺い続ける。

望む額を与えつつ、出来るだけ安く買取たいと考えるシュタンは、値上り続けている絹の価格変動と、２か月後の予測値をはじき出す。値上がりによる売り浴びせで一時的に価格が下がる事も考えられるが、ユーシアに関するある出来事の影響もあり、絹を大量に在庫している商会は少ない。むしろ今以上に値上がる可能性が高いと踏んでいた。

ユーシアに関するある出来事の事は、もちろん優斗も把握している。

１つは戦争により、生産数が落ち込んでいる事。

もう１つ、これは今朝知った事だが、３か月後にクシャーナ・ユーシアの正式な領主任命の宴が開かれる為、ドレス等の注文で絹の需要が増えていると言う事だ。

「しかし、この商売を手放すと言う事は、よっぽどの緊急事態か、もっと良い儲け話があるのでしょうね」

「はは。それは秘密ですよ」

シュタンの言葉に、優斗はキカロ商会が予想通りの契約を結んでいるか、そうでなくとも話を持ちかけられている事を確信する。

優斗が提案している契約。それは今、ロード商会が公国と帝国の

各地で行っているモノと同じだ。いつも通りに事が進めば、これは双方に利益をもたらす、良い話になるはずだ。もちろん、優斗はそうならない事を知っている。

宴に参加する貴族達が、一斉に3か月後の納品依頼をすれば、職人達は大忙しで、休む暇も無くなるだろう。そして市場の高級な宝石や絹等の布も、無くなっていく。暇も物も無ければ、安い物を探す手間を惜しんで高い値段のついた品であっても買わざるを得ない。買い手は貴族なので、金に糸目を付ける事もない。

そして権力者と言うモノは、気まぐれで、我儘で、メンツを大事にする意地っ張りの集団でもある。そんな彼らが、敵対する、もしくはよく思っていない相手が自分よりも良いモノを仕立てていたら、どうするか。きっと、それ以上のものを仕立てろと命ずるに違いない。

宴の1か月前。

ほぼその時期に再注文や追加注文がある事と、その時には市場に出ている品や職人がため込んだ物が尽きている事は、何時もの事であり、そうなる事は明白だ。あり得ない程大量の供給でもない限り。

「この件では大きく儲けられませんが、堅実に稼がせて貰えると、私は信じています」

「どことは申しませんが、さる大商会の様に、ですか？」

「えぇ」

優斗とシュタンは、笑いあいながらお互いの腹を探り合う。

大資本を持つ大商会は、堅実な稼ぎ方でも大きな利益を出す事が出来る。逆に言えば、よっぽど事が無ければ、堅実な手を使った方が良いと言う事でもある。

さらに言えば、今回の件で最大の利益を出す為には、絹を欲しが

る職人、１人１人と交渉する必要があり、その手間は莫大だ。それが、首都付近でなく、北をメインに商売をしている商会ならば、猶更だ。故に、この件でかの紹介の行動を不信に思う商人は、多くない。

「買い取り額は、公国金貨で１２０枚程でどうですか？」

「１２０ですか？」

「現在の相場よりは安くなりますが、どうなってもうちは資金を用立てておく必要がありますので」

シュタンが回りくどく指摘した内容を、優斗は予想範囲内だと、考えていた対処法を思い浮べる。

彼の指摘は、もし絹が届かなかった場合、買取資金とそれに売る際に掛かる人手の準備が無駄になる事を差している。この世界では、事故や人災で荷物が届かないと言う事は、よくある事だ。そしてそれによる減額に対する対処法は。

「届かなかった場合は、違約金をお支払します」

「ほう」

「持ち込んだ荷物を引渡しますので、それを違約金代わりにすると言う事でどうでしょうか？」

「届いた場合は？」

「その場合は、支払いに上乗せと言う事で」

優斗の荷物の総額は、大分目減りしていて公国金貨にして１３枚程度。

減った金貨７枚分は、買付資金として手元に存在する。小さな村で荷を売った為、そのほとんどが銀貨や銅貨となっており、そのせいで優斗は現在、公国銀貨を２００枚以上保持しており、財布がとても重い。

「荷物の査定を確認しますので、少々お待ちを」
「どうぞ」
シュタンが、コンコン、とテーブルを叩くと、扉の前で待機していたらしい、先ほどお茶を配っていた女性が入って来る。
シュタンは彼女から紙を受け取ると、少し悩んでから持ち場に戻るように指示し、優斗に向き直る。
「絹の買取が１２５枚、荷物の査定が２０枚の合計１４５枚で如何でしょうか？」
「うーん。悪くは無いのですが」
荷物の買取価格が異常に高い事に驚いた優斗だが、当然の様にそれを顔に出す事はない。
目標値にほぼ等しい数字まで持ってきた事に満足した優斗は、今までと違い、商談を追えたらさよならではなく、２か月先まで関係が続く事も考慮し、ここを妥協点と決める。
「そうですね。仮にこの額として、まず他の点を決めてしまいましょう」
「判りました」
「こちらの希望は、今日から６０日後から７０日後までの間に持ち込んだ絹を、指定の価格で買い取って頂く、と言う内容です。
そして違約金の先払い額を金貨２０枚とし、取引が成立した場合は、支払いにそれを上乗せする形でお願いします。
これならば、不成立の場合でも、わざわざ管理局に出向いて頂く必要もありません。どうでしょうか？」
その他の細々とした条件やキカロ商会が資金を準備出来ていなかった場合の事を決めると、正式な契約書の作成に入る。

結局、取引額が金貨１４５枚のまま、契約が行われる事になった。

長期的商談（後書き）

ひさしぶりの大きな商談話でした。

情報を握っているので強気ですが、失敗した場合は巨額の借金が舞い込む危険も孕んでいます。

その割に、優斗くんはのんきです。

キカロ商会との契約を終えた優斗は、その足で市場へと向かい、いくつかの果物を購入すると、前日に頼んで置いた品を受け取り、宿へ戻る。

夕食を終え、部屋で一休みした後、厨房を尋ねると皿洗いと掃除を手伝う。提案をした際、女将さんは恐縮していたが、時間を作って貰う立場としては、当然の事だと優斗は考えていた。

「で、何を作る気だ？」
「頼んで置いた物はどうなりましたか？」
「あん中だ」
そう言って大将が取り出したのは、果汁を煮詰めて、冷やしたものだ。

煮詰めた事で多少、甘味が増しているが、砂糖が無い為、そこまでの甘さはない。
それに加え、優斗が買って来た果物も冷やされており、シロップもどきと共に取り出される。

「これをどうするんだ？」
「その前に、氷をください」
「おう」
頼んだ通りに四角く作られた氷を受け取り、優斗は準備して来たモノにそれを放り込む。

器をセットし、しゃりしゃりと氷が削られて行く。
削られた氷の上にシロップをかければ、少々荒いが、夏の定番・

かき氷の完成だ。

「氷を食うのか？」

「暑い日に食べるとおいしいですよ。女将さんもどうぞ」

氷を取り替えながら、かき氷を6杯作り終えた優斗は、匙と共にそれを配っていく。

見学していた従業員2人は、大将に睨まれてびくりとしながらも、優斗がそれを宥めた事でかき氷を受け取った。

「では、どうぞ」

優斗の言葉で、全員が一斉にかき氷を口にする。

砂糖の入っていない、甘さの足りないシロップに物足りなさを感じている優斗とは違い、他の5人は驚き、ある者は勢いよく食べて頭を押さえ、またある者は興味深げにそれを観察している。

「早く食べないと溶けますよ。氷ですし」

「おお、そうだな」

誰よりもじっくりと観察していた大将が、食を再開する。

その後、細かく削る為にかき氷器の刃の角度を調整しながら追加を作り、忘れていた果物を添えて見栄えを良くしたりしながら、2杯目を楽しんだ。

さすがに3杯目はお腹を壊すからと終了を宣言すると、少し不満そうながらお開きとなり、かき氷器は次の料理の準備依頼と引き換えに、大将に進呈される事になった。

女将さんが他の仕事があると退席し、従業員の2人もいなくなった後、優斗と大将は、まだ食堂に残っていた。

「次のアレは、最近流行ってるあれだな？」
「ご名答。さすがです、大将」
最近流行ってるアレ、とは蜂蜜を使った菓子の事だ。

次回の事、旅の話、料理の話にくだらない世間話。
酒を飲みかわしながらの会話は、舌も良く回る。酌をしてくれる、若い女性が居るのであれば、猶更だ。

「お前、ロード商会の関係者か？」
「違いますよ」
「なら、なんで知ってる？」
「あれ、俺の故郷の菓子なんですよ」
優斗の言葉に、大将は驚くのではなく、豪快に笑った。

一頻り笑った後、酒を一気に煽ると、即座に差し出された瓶にコップを向け「悪い」とフレイに告げ、注がれた酒をまた飲み干す。

「気にはなるが、細かい事はいい。教えて貰うんだからな」
「ついでに、作り方の出先も伏せといてくれると嬉しいです」
「どちらにしても、そのうち作り方は出回るだろうさ」

品物が出回れば、複製して売る為にレシピを解析する人間は必ず存在する。また、解析を待たず、内部から漏れる可能性もある。
今回に限っては、きな粉と言う素材が見抜けるかと言う問題があり、情報漏洩もその一点を注意していれば良い事から、しばらく時間がかかる事が予想される。

優斗がそれを待たず、広めようとしている理由は悔しさからの嫌がらせ半分、低価格化すれば作る手間が省ける事が半分と言ったと

ころだ。それによって蜂蜜の価格が一時的に高騰する可能性については、あまり深く考えていない。

「それはどうでしょうねぇ」

「なんだ。何か特殊な製法でも使うのか？」

「それはまたのお楽しみで。だから粉ひき小屋の紹介、よろしくお願いします」

「おう」

更に飲み続ける事３０分、明日の仕事に差障らない様にと、酒盛りはあっさりとお開きになった。

カクス滞在４日目、優斗はこれからについて思考を巡らせていた。

服飾職人の元に訪れる予定だったのだが、今、服を作るのはどうだろうかと、優斗は考える。

優斗の持つ情報によれば、３か月以内に絹が値下がる。その後、麻や綿などの布も同じ様に値下がる事は予想に難くない。何故なら、革新的な機織り機で折れるのは、絹だけではないのだから。

更に、２か月後の契約を交わしてしまったので、行商に出るとしてもそれまでに帰って来る必要がある。

それらを踏まえ、優斗は予定通りこの街で7泊しつつ、その間に１か月程かけられる商売を探す事に決める。

予定が無くなり、暇が出来てしまった優斗は、木切れと紙、ペン、ナイフを出して加工を開始する。ナイフでの木工細工は、ライガットの見様見真似で始めたもので、悪戦苦闘する優斗に見かねた彼の助言もあって、簡単な物ならそれなりに作成可能な程に上達してい

た。

まず、紙の表に9×9の、裏側に8×8の罫線を引くと、木切れの加工を始める。途中から、洗濯等の雑務を終えたフレイの手伝いもあり、それは予想より早く完成する。

「で、これは何ですか？」

「オセロと将棋」

片面を黒く塗りつぶした円形の木片と、四角い木片から角を2か所、大きく切り取ったものに、字がかかれているもの。

フレイは興味深げにそれらを観察した後、優斗からオセロのルール説明を受け、ゲームを開始する。

最初の数回は、当然の様に優斗の圧勝。角と端の優位を説明した後も、多少差は詰まったがまだ優斗が優勢だった。それが覆ったのは、優斗の一言が切っ掛けだ。

「自分が多く取れるところじゃなく、相手が嫌がる位置に置くのがコツかな」

相手が嫌がる。言い換えれば、相手がしたい事をさせない。

フレイはその手の、相手の心理を想像する事が得意であり、対戦を重ねる毎に盤面でなく優斗の反応から、どういう時に嫌そうな反応をするのか、情報を蓄積して行く。その結果、盤面にはほとんど見向きもせず、優斗を見つめながらプレイするフレイのプレッシャーも相まって、優斗は負けが込み始める。

「あのー、フレイさん。こっちばっかり見てないで、盤面の方を見ません？」

「私、こう見えて負けず嫌いなんです」
こう見えても何も、と思いながら、優斗はもう一方のゲームである将棋への変更を提案する。

フレイはルールの覚えも早く、駒の動かし方を確認する事は少なかったが、こちらは優斗が終了を宣言するまで、1度も勝利を掴む事はなかった。

「もう夕食だし、今日は終わり」
「では、夕食後に」
「今日は終わりだって。また明日、時間があったら」
「勝ち逃げは、ズルいです」
定跡も知らないフレイが勝てないのは、仕方のない事だ。

オセロで勝てなくなっていた優斗は、少しの優越感と共に、数が多くて面倒だからと言い訳してそれを説明しなかった事への後ろめたさも感じていた。
そして、他にも再現できるゲームがあるのではないかと考えながら、その日は床に就いた。

カクス滞在5日目、延々と遊び続けた4日目に引き続き、優斗は今日も部屋に居た。

今日の予定をかけて3回勝負のオセロでほぼ敗北が確定しつつある優斗は、再び他のゲームについて考えを巡らせていた。
トランプを正確に手作りする事は難しく、チェスや囲碁は正確なルールを覚えていない。トランプ以外のカードゲームやボードゲームは作るのが面倒なので、気が向いたら双六が関の山。

そう考えた結果、正確にトランプの裏面を印刷できる技術を探してみる、がバリエーションとコストの関係上、最も有効だと、敗北の決定と共に結論する。

「私、船に乗ってみたいです」

「船か。船酔いとかなかったら、船での商売も視野に入れられるし、試しに行って見るか」

勝者であるフレイの提案で、優斗達は海沿いへと向かう。

遊覧船が存在するのかは不明だが、とりあえず港に停泊している船に交渉を持ちかけようと、直接そちらに向かった優斗達は、人が妙に集まっている場所を見つけ、自然とそちらに足が向く。

「あれは何だろ？」

「漁師が魚を売り込みに来ているのでは？」

フレイが指摘した通り、船からは箱に入れられた魚が運び出されている。

船を見上げる見物人の視線の先には、厳つい男と商人風の優男が、困り顔で顔を合わせている。

商談が煮詰まっているのだろうかと言う優斗の想像は的外れな物で、２人の視線は足元に向かっている。

「女の子ですね。真っ白な」

「俺には白い塊にしか見えないんだけど。相変わらず、目、いいね」

「普通です。ご主人様が悪いだけだと思います」

優斗は、普通の視力のハードルの高さに苦笑しながら、白い塊を見据える。

船にかなり近づいた頃、優斗はようやくソレがフレイの言葉通り、

真っ白な人間である事を把握する事が出来た。

白い髪に白い肌、そして白い服の少女。

白い肌は見慣れてきた優斗だが、光の加減で銀糸にも見える白い髪が、少女がしゃがみこんでいるせいで地面に広がっている光景はどこか神秘的で、少し見惚れてしまう。

「王国人かな？」

「かもしれません」

優斗がそう考えた理由は、彼らの国民性に関係する。

何故、王国人が帝国人を差別するのか。その原因を調べた優斗が辿り着いた答えは、彼らの文化、もしくは信仰だと言うものだった。

具体的には、王国人は色素が薄ければ薄いほど素晴らしい者である、と言う傾向がある。故に、色素が極端に濃い帝国人は、彼らにとって劣った人間で、一部の王国人は、生物的に劣っている、すなわち人間でなく、家畜だとさえ思っている。

「何か言ってるね。聞き取れる？」

「すいません。何を言っているのか、さっぱり判りません」

そうか、と相槌を打ってから、優斗は気づく。

優斗は、周りの声や潮風に煽られて言葉を聞き取る事が出来なかった。しかし、フレイの方は聞こえたが理解出来なかったようだ、と。

人としての基本スペックが違いすぎる点に、優斗はあたまをかかりとかくきながら、こっそりとため息を吐く。色々と思うところはあったが、あえて言葉にせず、声が届く場所まで近づこうと、歩みを進める。

「Ｈｅｌｐ.　Ｈｅｌｐ　ｍｅ……」
「ずっとこんなだ。俺にゃどうしようもないんでな、何とか引き取ってくれ」
「奴隷でもない人間を、本人の意思が判らず買い取るのは……」
耳に飛び込んで来た音に、優斗はまた驚く。

静かにすすり泣き、呻く様に声を絞り出している少女の口から零れ落ちる音の羅列を、優斗は知っている。それは紛れもなく、英語だ。
優斗は今まで深く考えず、単純に、この世界では日本語が使える、と考えていた。しかし、目の前の光景に、２つの仮定が頭に浮かぶ。

１つは、優斗の世界で使われている言語である英語を話していると言う事は、船上で泣いている少女は、優斗と同じく異世界人であると言う可能性。
もう１つは、この世界にも複数の言語があり、英語と同じ言葉をしゃべる国があり、少女はそこ出身の異国人であるという可能性。

前者である可能性は低いが、零ではない。
故に優斗は、この件に介入する事を決め、まるで関係者であるかの様に堂々と船上へと上がる。フレイにも、すれ違う荷下ろし中の人間にも止められる事は無く3人の前まで到着すると、男2人を無視し、少女に声をかける。

「エクスキューズミー」
授業で習う以外に英語に触れる機会の少ない優斗にネイティブな発音など出来るはずもなく、カタカナ英語丸出しの発音だった。

それでも意味は通じたのか、少女は顔を上げる。その手前では、男2人は見知らぬ男の登場に眉を潜め、不審な眼で優斗を見つめて

いる。

３人の視線に晒され、優斗は緊張しながら、アジア圏の言葉の方が聞く回数の多かったから、英語より聞きなれているのに、でも、そっちは知っている単語が偏ってるから英語の方が、などと少しの混乱と共に逸れていく思考を軌道修正しながら、身振り手振りを交えての会話を試みる。

「メイアイヘルプユー？」

「Ｕｈ……Ａｈ！」

「あいきゃんすぴーくイングリッシュ。ジャストアリトル」

少女の瞳に涙がいっそう浮かび上がり、優斗は焦る。

慰めの言葉をかけるにも、適切な単語が思い浮かばなかった優斗が、困り顔で次の言葉を考えていると、今度は少女の方から意味のある言葉が返って来る。

「Ｙｅｓ！　ｐｌｅａｓｅ　ｈｅｌｐ　ｍｅ．」

「あー、っと。プリーズウェイト。リトルモーメント」

ｍｏｍｅｎｔにＬｉｔｔｌｅはいらないかな、と思いながらも、優斗はどう訂正して良いか判らなかったので、流す事にする。

そして、目の前の男２人が英語を理解していない事を把握すると、財布代わりの袋から、銀貨を１枚、取り出す。

「すいません、私はこの子の知り合いなんですが」

「お、おう。見たいだな」

「ご迷惑をおかけした様で。これは、お礼です」

そう言って、優斗は漁師の方に銀貨を１枚乗せた掌を差し出す。

漁師は一瞬面食らった様だが、すぐににやりと笑みを浮かべ、それを手に取ると、品定めをするように観察する。
優斗はそんな姿を視界の端に捕えながらフレイに視線を向け、少女の保護を依頼し、頷いた事を確認すると漁師に視線を戻す。

「おー、悪いな」
「いえいえ。ところで、この子を何処で？」
「南の方で拾った」
優斗が探る目的でぼかして告げた質問に、漁師は銀貨を観察しながらおざなりに返答する。

その言葉から、漂流したのだろうとあたりを付け、ならば自分が出資者、彼女が請け負った船の家族と言う設定を頭に思い浮かべながら、優斗は次の質問をぶつける。

「他に何かありませんでしたか？」
「積荷か？　全部捨てたんじゃないか？」
「何もなかった、と？」
「船を軽くする為に、よくある事だ」
嫌そうにそう告げる漁師の表情から、何かを隠しているのだろう、と優斗は想像する。

しかし、それをこの場で追及しても意味が無い。そう判断した優斗は、銀貨を追加で2枚、袋から出すと2枚をぶつけて音を出しながら、唇の端を釣り上げ、不敵に笑う。

「漁の途中に、漂流物を拾いませんでしたか？」
「しつこいな。仮にあったとして、なんだってんだ？」
優斗の手元の銀貨を目で追っている漁師は、優斗が何を言いたいのかわかっていない。

遠まわしな表現や行動は通じない。漁師の挙動からそう考えた優斗は、直接的かつ、相手の機嫌を損ねない言葉を探す。

「いえ、何も。
そうだ、魚以外に売りたい物とかあれば、見せて貰えませんか？
出どころに関係なく、高く買いますよ」

その言葉で、漁師はようやく優斗の告げんとする事を理解する。
漁師が何かを取り出している間、話に置いて行かれている商人を放置し続けてはまずいと判断した優斗は、何時もの営業スマイルを彼に向ける。

「この件はどうか内密にお願いします」
「そう言う訳にもいかんでしょ」
「では、漁師の方と不正な可能性のある人身売買をされますか？」
優斗の言葉に、商人が、うっ、と呻く。

この場所は彼の所属する商会が取引を行っている場所であり、そこに踏み込んだ優斗の行動は責められるべき事柄だ。
だが、それと同時に厄介な話を収束させてくれた相手でもあり、優斗の乱入が無ければ彼は今も困っていた事だろう。素気無く断れば漁師との間に禍根が残り、かと言って奴隷でない、しかも言葉の通じない人間を売買するのはリスクが大きすぎる。

「貴方はいつも通り仕事をこなした。それでいいじゃないですか」
「横から口を出されて、それで納得する訳ないだろうが！」
「そうですか。では、取引は中断させて頂く事にします」
「おい！」
小箱とペンダントを持った漁師が、商人を睨む。

優斗は漁師をやんわりと止めると、再び商人に向き直り、頭を下げる。

「取引の邪魔をしてしまい、申し訳ありませんでした」
「わかればいい」
「はい。今日のところは帰る事にします。漁師さん」
「あんだよ」
「船で送って貰えませんか？　終わるまで待ってますので」
優斗の言葉に、まず商人が歯噛みする。続いて漁師が気づき、にやつく。

「おう、いいぜ。おい、荷下ろし終わったみたいだぞ」
「あ、あぁ。これが代金だ。それと、その子の事だが」
「いやぁ、無理言って悪かったな。忘れてくれ。本人の意思を無視して売るなんて、やっぱり良くないな。そうだろ？」
「うぐ……」
「じゃああんた、送ってやるからその辺に座っとけ」
「はい。ありがとうございます」
そう告げながら、優斗はフレイと少女に視線を向ける。

疲れからか、少女はいつの間にかフレイの腕の中で眠っている。フレイは自分の服が汚れる事も気にせず、ぼろぼろの少女を抱き留めており、優斗はその光景に頬を綻ばせる。

船が出港すると、約束通り優斗は漁師から2つの品を買い取る事になった。
小箱の中身は手紙、と言うか書簡の様だった。既に開封されている為、中身を確認したが、文字は未知の物で解読不能だったが、。
ペンダントも鑑定眼を持たない優斗にとって、小箱と同じく価値

の判らない物だが、はめ込まれた石に刻まれた紋様は、中々精緻な物だった。

交渉の結果、少女の救助費用と小箱、ペンダントに宿の付近までの移動費を含め、合計銀貨１０枚を支払う事になる。既に1枚支払っているので、優斗は船を降りる際に銀貨を9枚手渡すと、漁師は上機嫌に去って行った。

宿に戻ると、女将さんに事情を話して、フレイと2人で少女の身を清め、着替えさせて貰う。海水に濡れた後、着たまま乾いた様子の服も、何日か遭難していたらしい少女自身も、かなりの異臭を放っていたのだが、2人によって清められた事で、かなりましになった。

その間、部屋を追い出されていた優斗は、女将さんに渡すチップを準備しながら、この街で既に使用した金額を数え、浪費しすぎだと反省していた。仕方のない部分は多いが、同じくらい節約出来た部分もあったはずだ。

入室許可が下りて部屋に戻ると、優斗は少女の意識が戻るまでの間にと、ノートパソコンを起動させて英文の作成を開始する。

幸い、辞書機能は無事なので、聞きたい事を予め文章化しておいたり、答えに出てくる可能性の高い単語を予測し、紙に書き込んだ。久しぶりに触れる英語に、こちらの言葉に変換する余裕もなく、アルファベットで書き込んだ事により暗号文化したそれを何枚も生産していると、フレイがお盆を持って部屋に戻ってくる。

「お茶はいりませんか？」

「欲しい」

フレイが手際よくお茶を準備し終えると、机の上に優斗の分がやってくる。フレイはお盆をベッドのサイドテーブルに置き、カップを手に持つと優斗に視線を向けながら隣にある椅子へと腰かける。

優斗が作業を中断し、お茶を口に含む。そして、自分に向けられた視線の意味が判らず、少女の件で何か責められるのだろうかと思い、少し困った顔を作ってフレイを見返す。

「顔に何かついてる？」

「いえ。少々お聞きしたい事があるのですが、かまいませんか？」

「応えられる範囲なら」

優斗は、一体どんな恐ろしい疑問が飛び出すのかと、内心で戦々恐々としながら、自分の行動と言動を振りかえる。

そう言えば、少女に声をかけた理由を説明していない、とか、この子に対して既にかなりのお金がかかっている、とか、約束したのにフレイのリクエストをこなしていない、とか。

「この子は、しゃべっていたんですよね？」

「あー、うん。しゃべってたね」

実際に飛び出した質問に、今度は優斗がフレイを見つめる事になる。

少女が言葉を発し、優斗と会話していた場面をフレイは目撃している。それにも関わらず、その様な質問をすると言う事は、他の意図があるはずだと、優斗は考える。

「あれは、何なのですか？」

「何って、何が？」

「あの子とご主人様がしゃべった言葉です」

「あれは、俺の故郷にある別の国の言葉で、英語って言うモノ」
「英語、ですか？」
不思議そうな顔をするフレイ。

部屋を追い出されている間に、ある事を思い出し、気づいていた優斗は不思議そうな顔で思い出す。
フレイは何度か、いわゆる和製英語や日本語化したカタカナ英語を話していた。だから、優斗の話す言葉の様に、この世界には英語に順ずる言語が存在するはずなのだ。

「初めて聞きました」
「名前は違うだろうけど、少しは知ってると思うけど」
「え？」
「サービス、とか使ってた記憶があるんだけど」
フレイが使っていた横文字で、最初に思い出したのがソレだと言う事に、優斗は少しだけ落ち込む。

フレイはそんな優斗の反応を気にする事なく、合点がいったと言う顔をした。

「王国新語の事ですね」
「王国新語？」
「最近、流行ってる、新しく出来た言葉だそうです。旅の商人や護衛、奉公していた家に尋ねて来る若い王国貴族様から聞きました」

フレイの言葉を受け、優斗はまたある事に気付く。
国を跨いで活動する機会が多いのは、行商人とその護衛だ。ならば、お金に関する言葉か、女に関する下卑た言葉が伝わりやすいのは通りであり、サービスなどの言葉はその分類に入るだろう、と。

「最近って、ここ数年とか？」
「さすがにそこまでは。すいません」
「謝る事は無いけど、今度調べるから手伝ってくれる？」
「はい」
英語、フレイの言うところの王国新語が発生した理由を、優斗は幾つか思い浮べる。

まず、英語を話す異世界人の出現。次に、海外から異国の進出。
少女の身元と同じく、前者の可能性は限りなく低く、後者の可能性が高い。どちらにしても、少女が目を覚まして確認すれば、事実関係がはっきりする可能性が高い、と優斗は判断し、この件は保留と決める。

「身元を引き取ったからには、この子の知り合いが居る所までは送ろうと思うんだけど、どう？」
「誠実な判断ではないかと思います」
フレイの言葉選びに少し引っかかるところを感じながらも、優斗は苦笑でそれを流す。

お茶を飲み干した後、英語の羅列を作る事に飽きた優斗は、フレイとオセロや将棋をしながら、少女の目覚めを待つ事にした。

可能性の細い糸（後書き）

英語をしゃべる少女を拾う話でした。

余談ですが、次回からは英語での会話を書く事はしない予定です。
英文では読む方も手間だと思いますので、別の表記方法を取らせて頂きます。

迷子の白い小鶏

夕方になり、優斗がそろそろ追加で準備して貰った部屋に移ろうかと考え始めた頃、少女に目覚めの兆候が見られた。

「フレイ、貰って来てくれる？」

「判りました」

事前に病人食と、蜂蜜を入れたホットミルクを準備して貰う様、大将にお願いしてあり、フレイはそれを受け取る為に部屋を出る。

優斗はベッドサイドの水差しとコップを横目で確認しながら、椅子を準備してあった台の前に移動させ、少女の目覚めを待つ。

『ん……』

目を覚ました少女が、身体を起こして周りを見渡す。

しばらくぼぅっとしている様子を観察していた優斗は、その目が自分を捉えたのを確認すると、なるべく柔和な笑顔を作りながらも、かなり緊張しながら声をかける。

『おはよう』

『おはようございます。ここはどこですか？』

『ルナールの国、カクスの街』

優斗が単語を並べただけの不恰好な英語でそう答えると、少女は理解出来ないと言う表情を浮かべる。

言葉が通じていないのか、もしくは内容が理解出来ないのか判断し兼ねた優斗は、余計な事を言わず、少女の反応を待つ事にする。

『貴方は？』
『俺の名前？』
『そう』
『優斗』
シンプルにそう答えながら、行商人の、と言う形容詞を調べ忘れていた事を思い出す。

身分は告げるべきだろう、と判断した優斗は、少女から見えない様に覆ったノートパソコンのキーボードを叩き、辞書で単語を調べ始める。
それを調べ終わるよりも早く、優斗が唐突に俯いた事に慌てた少女は、自分も自己紹介をしなければと焦って、しかし落ち着いた表情を取り繕いながら口を開く。

『私はシャオジーと言います。ズウェイバー連邦の皇女です』
『ズウェイバー連邦？』
聞きなれない単語の全てを聞き取る事の出来なかった優斗は、聞き取れた部分をオウム返しにする。

それを勘違いした少女、シャオジーは寝起きの頭を無理やり働かせながら、説明を口にする。

『連邦は、たくさんの国が集まったものです』
『あー。ちょっと待って』
シャオジーにそう告げた優斗は、口頭で聞いた単語の文頭を、辞書に放り込む。

数十秒で、連邦、と言う結果に辿り着くと、シャオジーの言葉を思い出し、納得する。

『ごめん。難しい言葉、判らない。早い言葉、理解出来ない』
『……なるほど、わかりました』
自分は異国に居る、と言う事を思い出し、同時に実感しながらシャオジーは神妙な顔で言葉を探す。

同時に、優斗も作ってあったメモに目を落とし、質問すべき内容を吟味し始める。
しかし、2人がそれを口に出す前に部屋の扉が開いた。

「お待たせしました」
「ありがと。とりあえず、渡してあげて」
「はい」
お盆を手にフレイが近づくと、少女は少し警戒した表情を見せる。

優斗はその姿に苦笑しながら、シャオジーの警戒を解くべく、再度柔和な表情を作り、声をかける。

『ホットミルクと食事。食べて』
『へ？』
優斗の顔とお盆を交互に見ながら、シャオジーは少し間を開けて言葉の意味を理解する。

布団から出て、ベッドの外へ足を出して腰かけたシャオジーは、一瞬だけ自分の服装を見下ろして眉を潜めたが、すぐに姿勢を正してお盆を持つフレイを見据える。

『ありがとうございます』
『あー、その子は英語が解らない』
優斗の言葉に、フレイにお礼を言ったシャオジーはきょとんとした表情を見せる。

起きてまともに話を始めてからの彼女は、寝起きであるにも関わらず、優斗の感覚で１２、３歳くらいと言う見た目に不釣り合いな、落ち着いた雰囲気を醸し出していた。それが眠っている時と同じ、年相応な表情を浮かべた事で、優斗の笑みは少しだけ自然なモノへと変わる。

『英語、とは何ですか？』

「へ？　あ、あぁ。そっか」

思わず日本語で呟きながら、優斗は自分のミスに気付く。

ここは地球ではない。故に英国は存在せず、英国語も存在しない。正確に言えばＥｎｇｌａｎｄが存在しない為、Ｅｎｇｌｉｓｈも存在しないと言う事だ。

他に考える事も多く、港で否定されなかったせいで気づかなかった優斗だが、その事実に、日本語がこの地で何と呼ばれる言語なのかを知らない事にも気づく。同時に、目の前の少女が異世界人ではなく、異国人であると言う事にも。

『どうしましたか？』

『英語は、私の国の言葉で、この言語の事』

ややこしい説明だな、と思った優斗だが、シャオジーが納得した様な反応を見せた事を確認してほっとする。

そして、一先ず食事を、と勧めると、シャオジーは少しだけ逡巡した後、ホットミルクに口を付ける。

『甘くておいしいです』

『それはよかった』

『これは砂糖じゃないですよね？』

『はい。蜂蜜です』
「ご主人様、そんな風に女性の食事風景を眺めているのは、些か趣味が悪いのではないと思いますが」
何かがひっかかっている優斗の思考を、フレイの言葉が中断する。
とは言え、隣に見知らぬ男が居ては食事をし辛いであろう事は想像に難くないし、フレイの言うような悪趣味な行為を働く気も無い優斗としては、シャオジーにまで余計な誤解を受けない為にも一時的に部屋を出る事を決める。

『少し出ます。用事があったらこのベルを鳴らして』
『えっと、でも』
『食事をしたら休んで下さい。後で来ます』
シャオジーが少し悩んだ後、首を縦に振った事を確認すると、優斗はノートパソコンを手に持ち、フレイを引き連れて部屋を出る。

優斗は扉を閉めると、開いたら音が鳴るようにドアノブに鐘をひっかける。それは既にかなりの出費をした相手から、最低限の話も聞けずに逃げられる事を警戒すると共に、あの状態の彼女が無理をして1人で手洗い等に出た事に気付けなければ、色々な不都合が生じるだろうと判断したからだ。
そのまま追加で手配して貰った隣の部屋へと入ると、フレイが音が聞こえ易い様、扉の近くに椅子を移動させて腰かけ、優斗はベッドに腰を下ろす。

「不思議ですね」
「何が？」
「あれで意思疎通が成されている事が、です」
英語を聞きなれないフレイから見れば、優斗とシャオジーの会話は意味不明どころか、怪しくさえ聞こえる。

フレイは優斗から、英語が三国以外の国で使われている言語である、と言う説明を受けている。説明の際、同郷出身である可能性があると言う事には言及しなかったが優斗だが、違う可能性がほぼ確実になった事もあり、軽々しくそれを口にしなかった判断に、内心で安堵する。

「俺は言葉より、あの真っ白な容姿の方が不思議、と言うか驚きかな」

「確かに、髪まで真っ白な人は初めて見ました」

優斗はシーツから覗く同色の手足を、フレイは着替えの際に見た肌を思い出す。

2人にとって、シャオジーの第一印象は、ただひたすら白だった。次に目が行ったのは、その肌と髪の白に映える1対の淡い赤茶と、薄い唇。

「ちなみに、シャオジーって言う名前らしい」

「自己紹介、したんですね」

「名乗らない訳にもいかないしね」

「その割に、私の紹介は無かったような気がするのですが。気のせいでしょうか？」

優斗のぎくりとした反応に、フレイは唇の端を大げさに持ち上げ、笑みを作る。

結果的に今日の約束を反故にしてしまったと言う負い目がある優斗は強く言い返す事が出来ず、続くフレイの言葉に白旗を上げ、彼女に甘いモノを差し出す約束をさせられる。

遅い昼食を摂った後、隣の部屋のシャオジーが眠っている事を確

認すると、フレイと優斗は前日に倣ってオセロと将棋をして過ごす。

疲れていたのだろう、シャオジーはそのまま起きる気配もなく、故に部屋とドアの鐘が鳴る事は無く、夕方になる。

女将さんに事情を話し、部屋で夕食を摂った2人は、フレイが食器を下げると、オセロを再開する。

「ところでご主人様」

「ん？」

ひさしぶりに先に角を取った優斗が、視線を上げる。

フレイの見つめる視線対策として、優斗は逆に盤面を見続ける事で俯き気味になり表情を隠しかつ、ポーカーフェイスを実践している。

「今日はこの部屋で寝るんですか？」

「そうなるかな」

フレイがあっさり次の手を差し、優斗は一度上げた視線をまた伏せる。

今日の優斗は漫然と打っている訳ではなく、長考をしながら1手1手確実に打っている。

最初はセオリーを守りつつ、後は適当に打てば勝っていた優斗が真面目に打ち始めたのは、悔しさ以上に、久しぶりの娯楽に時間差で熱中し始めたからだ。

「ここって、1人部屋ですよね」

「あ」

部屋にあるのはシングルサイズのベッドが1つきり。

優斗が宿を取る際、ほとんどの場合で奴隷付きで1人部屋と言う事で、大き目の、いわゆるダブル、もしくはセミダブルサイズのベッドが設置されている部屋に通される。
さすがにシングルサイズのベッドに2人は狭いと判断した優斗は、シャオジー眠る隣の部屋にある、もう1つのベッドを思い浮べる。

「じゃあ、フレイはあっちで」
「見知らぬ、言葉の通じない相手と2人部屋ですか？」
「その言い草はどうかと思うけど、確かにどっちにとってもアレか」
別の理由で優斗が隣で眠ると言う選択肢はありえない。

シャオジーが起きれば部屋を移動して貰う事も可能だが、そうならなければこの部屋の床で眠る事も考慮しなければと考えながら、優斗は盤面に1手を落とす。

「1つのベッドはひさしぶりですね」
「いやいや、それは無い。狭いし」
その言葉を予想していたフレイは、しかし心底驚いたと言う表情を作る。

そして優斗が自分の方を見た瞬間、フレイは顎を少し引き、口元に手を当て、少し潤ませた瞳で上目使いに見つめる。

「いや、ですか？」
「いやいや」
「嫌なんですね……」
語尾を弱め、目を伏せたフレイに、優斗は彼女の思惑通り狼狽する。

こう言った状況にも少しだけ耐性が付き始めている優斗は、これ

は演技だと自分に言い聞かせ、何とか心臓の鼓動を押さえようと試みるが、落ち着くまで悠長に待ってくれる程、フレイは甘くない。

「では、こうしましょう。
この勝負の勝者が、今夜の寝床を決めるんです。いいですよね？」

伏せていた視線を上げたフレイが、今度は小首をかしげる。
少しだけ見える角度が変わっただけにも関わらず、優斗にはフレイが何割か魅力的に見え、その言葉を無条件に肯定してあげたい衝動に駆られる。

優斗は冷静に考えよう、と思いながら、冷静でないまま思考する。
現在、盤面の半分以上が優斗の陣地であり、角も1つ確保している。端的に言えば、有利な状況であるように見える。これならば、勝負を受けても問題ないのではないか、と思える程度には。

その思考自体がフレイの狙い通りだとは知らず、優斗は盤面を分析し、数手先までの予測を行う。

「どうしようかな」
「別に何かしようと言う訳ではないですよ？　隣に子供が居る訳ですし。
単純に、何かが掛かっている方が熱が入るかなと思ったんです」

優斗はここで、なら別の物をかけよう、と言う言葉を思い付くのではなく、勝てば気兼ねなくフレイにベッドを使わせる事が出来ると考えてしまった。

更なる押し問答を交わし、結局勝負に合意した優斗は、あっさりと敗北を喫し、その夜、ぴたりとくっつくフレイの感触と共に、子

供が隣に居ると言う言霊の強さを実感する事になる。

カクスに到着して6日目の朝を迎え、少々寝不足な優斗は、手早く朝食を終えるとシャオジーの部屋の扉を叩く。

『優斗です』

『どうぞ』

返事と共に扉を開けると、優斗は『おはよう』と声をかけてからノートパソコンを設置する準備を始める。

優斗が不思議そうなシャオジーの視線に晒されながら設置をしている間、同時に入室していたフレイが、食事を乗せたお盆をサイドテーブルへと置く。

『食べられる？』

『いただきます』

シャオジーと端的な言葉で会話しながら設置を終えると、優斗は椅子に腰かける。

シャオジーのそれは難しい言葉や早い口調は理解出来ないと言った優斗に合わせ、ゆっくりと、そしてはっきりとしていて昨日よりも聞き取りやすい。

『体は平気？』

『平気です』

『朝食を食べたら話をしましょう』

『はい』

パソコンが起動し、辞書機能を開くとほぼ同時にフレイが優斗の

背後に立った。

バッテリーの残量が減り始めている事を確認した優斗は、後で充電を頼もうと考えながら、背後のフレイが差し出した物を受け取る。

1人だけ食べているのは気まずいだろうと言う配慮から準備したお茶を口にしながら、優斗は聞くべき内容を確認して行く。

『ごちそうさまでした』

『足りましたか？』

『はい。ありがとうございます』

「フレイ、片付けお願い」

優斗の言葉に呼応して、フレイが食器を下げる為、部屋を出る。

その間、沈黙を守っていた優斗は、シャオジーが困っている様に感じ、自分から口火を切る事にする。

『話を聞かせて貰えますか？』

『はい』

『とりあえず、自己紹介の続き。俺は行商人の優斗です。よろしく』

『ズウェイバー連邦の皇女で、シャオジーです』

覚えたての単語を口にした優斗は、昨日は聞き流してしまった言葉を、今日は聞き取る事に成功する。

そしてそれが予想外の言葉である事に驚く。

『姫、ですか』

『いえ、皇女です』

その差がよく判らない優斗は、キーボードを叩く。

調べた結果を確認しながら、優斗は更にそれが正しいのか確認す

る為、口を開く。

『皇帝の娘、と言う事？』

『はい。

ズウェイバー皇国が、連邦政府を担っています』

シャオジーの言葉を聞いて、優斗は合点がいく。

歴史で習ったソビエト連邦と、その後継とも言えるロシア連邦。

優斗はその2つを思い浮べ、専門外の乏しい知識で、連邦制の概要を思い出して行く。

『ズウェイバー連邦はズウェイバー皇国が中心で、貴方はそこの皇帝の娘』

『その通りです。私は連邦の代表として、オルド王国との親交を深める為にやってきました』

オルド王国、と聞いて優斗は一瞬だけ悩んでしまう。

しかし、すぐにあの王国である事を思い出した優斗は、頭の中に地図を浮かべる。

地図にかかれた大陸の形と、優斗が一瞬だけ見たこの惑星の模型らしき物。それに彼女が海で遭難していた事実を加えれば、自ずとシャオジーの国がどこにあるのか、想像がつく。

『東の国から海を越えて来たのですか』

『はい。その途中で他の船とはぐれてしまいました』

優斗が思い浮べたのは、嵐に遭遇した船団が散り散りになったり、転覆したりする様子だ。

それはほぼ事実と相違なかったが、優斗にはシャオジーの顔が心なしか青ざめて見えたため、それ以上の追及も確認もする事は出

来なかった。

『体の調子はどう?』

『おかげさまで、かなり回復しました』

『無理はしないように』

『はい』

会話が途切れ、優斗がノートパソコンに視線を落とす。

期待した、同郷の人間ではなかったシャオジー。しかし、遭難し、かなりの数の知り合い失ったであろう少女に対し、違ったからはいさようなら、と言う選択肢を取れる優斗ではない。

故に、これからどうすべきか、悩む。

『あの、優斗さん』

『何?』

優斗は、皇女様にナチュラルにさん付された、と思いながら、気が付けば様付で呼ばれていた現ユーシア領主を思い出す。

子供を守るのは大人の役割だ。一度関わったからには、彼女の知り合いが居る所までは送っていく事にしよう。そう結論した優斗は、先ほど思い出していた少女よりも少しだけ年上に見える目の前の少女に、言葉を選びながら質問を再開する。

『シャオジー皇女殿下は何歳ですか?』

『12です。あと、シャオジーとだけお呼び下さい』

頑張って調べた単語を却下されて寂しいのが半分、面倒な敬称を呼ぶ必要が無く助かると言う思いが半分で、優斗は首肯する。

12歳、と告げられた優斗が最初に思ったのは、予想通りと言うモノだった。

しかし、フレイと出会った頃の見た目が、この国では１２～１３歳程度に見える事を思い出し、シャオジーへと視線を向け、観察する様にじっと見つめる。

『何でしょうか？』

『あ、いや。年の割に大人びているな、と』

『そうですか？　幼く見られる事が多いんですけど』

少し嬉しそうなシャオジーの反応に、優斗は、やはり、と言う感想を抱く。

多少とは言え、英語を口にする事にも慣れてきた優斗は、緊張で無意識に強張っていた顔を綻ばせ、笑顔を作る。

『俺は２１歳。君と同じで若く見られる事が多い』

『２１！？』

共通点を提示し、友好を図ろうと言う優斗の目論見は、そのインパクトに負けてしまった様で、シャオジーは目を見開く。

そこまで驚く事だろうか、と思いながら、優斗は立ち上がり、袋から１つ、飴を取り出す。

『嘘じゃないですよ？』

『……信じられません』

『これを食べて、落ち着いて』

シャオジーは優斗が差し出した飴を、少し警戒してから口に含む。

その甘さに表情が緩んで行く光景に苦笑しながら、優斗は元の位置に戻り、椅子に腰かけると自分の口にも１つ放り込む。

『甘くておいしいです』

『蜂蜜菓子です』
『砂糖とは違った甘さですね』
その言葉に、優斗は昨日ひっかかった内容が何か、気づく。

聞いた話では、公国・王国・帝国の3国では、砂糖は流通していないと言う。むしろ、調査した街では砂糖と言う言葉すら通じなかった。

しかし、シャオジーは砂糖――ｓｕｇａｒの存在を知っているどころか、食べた事があると言う。

『シャオジーの国では、砂糖は簡単に手に入るんですか?』
『はい。でも、高価な物だと聞いています』

シャオジーが皇族であれば、高級品を口にする機会も多いのだろう、と優斗は考える。

しかし、高級品では、お菓子を作ったり、紅茶に入れる為に大量輸入する訳にもいかないと肩を落としそうになりながら、優斗は質問を重ねる。

『どのくらい高価なのですか?』
『どのくらい、と言われても』
『庶民の口に入る程度ですか?』
『はい。記念日やお祭りに食べる高級菓子に使ったりします』
シャオジーの言葉に、優斗はふむと考えながら口元に右手をやる。

技術革新、もしくは農法改革を行えば、もっと大量生産し、値段を下げられるかもしれない。

しかし、その為には危険な船旅をした上で、英語圏に行ってそれを行う必要があると言う事がネックだなと考え、一先ずそれ以上考える事を止める。

『お砂糖が欲しいのですか？』
『そうですね』
『あの、その』
『何ですか？』
『えっと、あのですね。
私を送って頂けるのでしたら、砂糖が手に入るよう、手配しますので』

遠慮がちに口にしたシャオジーの言葉が何を意味するのか、優斗はきちんと把握する事が出来た。

言葉の通じない異国に、1人放り出される不安。その一端を、シャオジーは漁師の船で体験している。
更に、行商人と名乗った事で、様々な意味で売られてしまうのでは無いか、と言う恐怖も感じている。

自分の身柄を確保し、この宿を手配した上で、十分な食事と清潔な環境を与える為に、それなりのお金が必要になる事を、シャオジーはきちんと把握していた。それが、自分が皇女であると告げる前に行われた事と、扉の仕掛け。それらの事柄を加味し、かかった費用を回収する為にどうするつもりだったのか、と昨晩考えていたシャオジー。そんな彼女が、優斗が商人であると知ってそう疑うのは、仕方のない事だ。

『国まで送って欲しい？』
『いえ。王国まで連れて行って頂ければ、他の船に乗っていた者が到着しているのではないか、と』
それは希望的観測だ、と優斗は感じた。

使者達の構成は不明だが、親交を図る為の皇女が乗る船が最も良い船であった可能性はかなり高い。

ならば、他の船も転覆している可能性が高く、そうでなくとも無事に王国に辿り着いている可能性は低いだろうと言う事は、優斗にも予想出来る。

『王国に誰か居るんですか？』

『いえ。ですが、王国に保護を申し出れば、少なくとも次の船には乗れると思います』

その言葉に、優斗は小箱に入った手紙の存在を思い出す。

身分を証明できる物はある。しかし、それで信用して貰えるのか、そもそも相手にして貰えるのかと言う問題点に加え、その場合にどうやって報酬を出す気なのか、と言う疑問もあったが、優斗はあえてそれを指摘しなかった。

何故なら、それを指摘すると言う事は、彼女の船団が全滅していると言う前提で話をする事を意味しているからだ。

優斗自身、甘い判断だと思った。しかし、突然、見知らぬ土地に1人で放り出される辛さの一端を知る者としての同情が勝った。

「何時、と、何で、が問題か」

『？』

優斗の口から漏れ出た独り言に、シャオジーは不思議そうな表情を浮かべる。

その反応に、優斗は少し悩んでから、必要最低限の確認はしておくべきだと判断し、シャオジーに向き直る。

『体が良くならないと移動出来ない』

『私は大丈夫です』
『それと、船は大丈夫？』
身体の調子は様子を見て決めようと流した優斗が次いで投げかけた質問に、シャオジーは見て判る程に青ざめた表情になる。

嵐に会い、遭難し、救出された後は言葉も通じず、下手をすれば船倉に放り込まれていたかもしれないシャオジーが、船に忌避感を覚えているのでは、と言う優斗の予想は当たっていた。
海路であれば、王国に到着するまでの数日を船上で生活する事になる。それは体調が万全でないシャオジーにとっては、辛い事だろう。加えて船に対する忌避感があるのであれば、それは酷と言っていい程だ。

しかし、陸路であれば良いと言うモノではない。
陸路であれば、移動にかかる日数が増え、負担もその分増加するし、何より野宿は辛い。優斗は船で眠った事は無いが、野宿よりはましだろうと考えていた。
更に、幾つもの街や関を超える必要があり、その容貌から目立つシャオジーは何かとトラブルに巻き込まれる可能性が高い。トラブルの可能性、これは船でもある事だが、関わる人数等の問題で後者の方がましだ。

『大丈夫です。すぐにでも出発出来ます』
『無理はダメ』
『でも、それではご迷惑が。それに、お金の問題も……』
商人が金勘定に煩いのは万国共通だ。

その商人からお金と借りを享受し続ける状況にも、シャオジーは不安と恐怖を覚えている。
そんな事に気付いていない優斗は、笑顔を作り、気楽な声で返答

する。

『子供はそんな事を気にしなくて良い』

『子供、ですか？』

『しかも迷子』

迷子、と聞いてシャオジーがショックを受ける。

この歳で迷子、と呟きながら落ち込むシャオジーを見ながら優斗が苦笑していると、部屋の扉が叩かれる。

フレイだろうと思い、優斗が無造作に「はい」と答えると、予想通りの顔が扉から覗く。

「フレイ、この子の服を調達して貰える？　そこそこ良いヤツ」

「わかりました。同行すればいいんですね」

「いや、1着適当に買ってきて。追加が必要ならその時は一緒に行って」

そう言って優斗は、近づいてきたフレイの手に銀貨を落とす。

お釣りで好きな物を買って良いと告げると、少しだけ頬を緩めるが、すぐに真顔に戻り、優斗の隣に立つ。

隣のフレイがシャオジーに視線を向け、次に自分を見て、を2度繰り返す姿を不思議に思いながら、優斗はシャオジーに視線を戻す。

「ご主人様」

「ん？　何」

「買う服の大体の大きさを調べたいんですが」

言葉の意味を瞬時に理解した優斗は、ノートパソコンを閉じて手に持つと、颯爽と部屋を出ようとして、失敗する。

優斗を阻んだフレイの手を一瞥し、そのまま顔に向けると、フレ

イは怒った様な、呆れた様な顔で優斗を睨みつけていた。

「急にいなくなったら、びっくりするでしょう」

「あ、そうか」

「それと、言葉が通じないんですから、説明して貰わないと私も困ります」

「あー、そうだね」

納得した優斗は踵を返し、シャオジーに一歩近づくと説明を口にする。

シャオジーがそれに対し、悩みながらも『判りました』と返答すると部屋を退出する。

隣の部屋に戻ると、シャオジーとフレイが2人きりの時用に、意思疎通用のカードを作るべきかな、と考え、後で絵心のあるフレイに書いて貰おうと必要なカードの種類を列挙する為、メモ用紙準備し、候補を書き連ねて行く。

その後、物を書き始めたついでに今後の予定と資金について考えていた優斗は、必要な情報のピックアップを行いながら、尋ねるべき場所と人物について思いを巡らせた。

迷子の白い小鶏（後書き）

色々あって、目的地が変更されました。

基本的にシャオジーの言葉を疑っていない優斗くんは、相変わらずな感じです。

オルドへの筋道

シャオジーを拾ってからの数日間、優斗は彼女の話し相手やフレイとゲームをする合間に、製紙について調べていた。

まず、木をチップ状にしてよく煮詰める。それを水にさらし、紙の元を取り出して薄く広げれば完成、と言う工程のうち、紙の元、すなわち木の繊維を取り出す部分でギフトが利用される。

特定物質のみの移動と言う能力により、同時にごみなどの余計なも取り除かれる為、主に紙の質を決定するのは水分を絞り、乾燥させる技術と、均等にプレスする技術が影響するらしい。

来歴に関しては不明だが、少なくとも最近になって流出した技術で無い事が判った為、同郷が広めた技術であったとしても既に故人であるだろうと考え、優斗は仮にと言う前提で頭の中で数字を1つ引きながら、これ以上の調査を打ち切る事に決める。

それ以外にも、宿の大将に優斗の故郷の料理を教えて再現を試みたりもしていたが、大半が調味料や材料が不明、もしくは手に入らずに調理にすら至らなかった。

しかし料理人である大将には収穫があった様で、近々新メニューの試食会をするからと、招待を受けた。

『あの、優斗さん』

『何？』

寝間着の白いネグリジェからフレイの調達してきた服に着替えたシャオジーが、ベッドの端に腰かけながら控えめに優斗の顔を覗き込む。

フレイが選んだのは、シャオジーが着ていたシンプルな白とはまったく違う、真っ黒なワンピースだ。
適度なレースとフリルに彩られたそれは、シャオジーの真っ白な肌と髪が映え、更には華奢な手足が更に細く見える為、西洋人形の様な雰囲気を醸し出している。

続く、今日は別件で出かける事を告げに来た優斗に対するシャオジーの返答は、優斗にとって予想の範囲内の内容のものだった。

『私も付いて行きたいです』
『いいけど、平気？』
『はい』
数日でかなり回復したとは言え、病み上がりであるシャオジーの足取りが、優斗には危なっかしく感じて仕様が無い。

優斗の外出にシャオジーが同行を願い出たのは、本日の要件が彼女に関する事柄だからだ。
もう大丈夫だと言うシャオジーの主張により、すぐにでも船便を探して王国へ向かう約束をしてしまった優斗の本日の予定は、キャリー商会に荷馬車を預け、同時に船便の紹介をして貰う事だ。

『体調が思わしくなかったら、用事を済ます前でも引き返すからね』
『はい、わかりました』
真剣な表情で返答するシャオジーの様子に、優斗から苦笑が零れる。

自分の立場をきちんと理解し、優斗の機嫌を気にかけ、損ねない様にと言う振舞いは、シャオジーの体調が回復するにしたがって更に顕著になって来た。それに対して優斗は、聡明な子だと思う反面、もう少しリラックスして欲しいとも思っていた。

『優斗さんはとても上手くなりましたね』
『何が？』
『言葉です』
『まぁ、ねぇ』
得意ではないが、優斗の英語の成績は平均点以上を取れる程度にはあった。

その基礎力に実践経験が加えられ、現在の優斗は発音を除けばかなりしゃべれると言っていい状態にまでなっている。
原因はもちろん、シャオジーとの会話だ。ここ数日、連邦の情報を聞き出す事と、ベッドの上で退屈するシャオジーと唯一会話が交わせる存在として暇つぶしに付き合っていたせいで行った会話の量はかなりのものだ。不明な単語もノートパソコンのおかげで即座に調べられる為、語彙も僅かに増加傾向となっている。

『準備出来たら隣に来てくれる？』
『判りました』
タイミングを逸してしまい、優斗はまだペンダントと手紙の入った小箱を渡していない。

故に、着ていた服以外の荷物のないシャオジーは、優斗から見ればそのまま出発可能な状態に見えるが、様々な経験から、女の子が出かける際には準備の時間を与えるべきだと学習していた優斗は、フレイへの報告も兼ねて部屋に戻る。

フレイは部屋で将棋の研究をしており、シャオジーが一緒に外出するので留守番が不要だと告げても、予定通り同行はしないと告げるとまた研究に戻った。内心では、別支店とは言え自分が売られた商会に積極的には関わりたく無いと思っていたのだが口に出す事は

せず、代わりにシャオジーの髪を隠す事が出来る外套の購入を勧めた。

真っ白な髪は公国ではもちろん、王国でも目立つと言う。

目立ってトラブルに巻き込まれる事を嫌う優斗は、当然二つ返事で了解し、直後に扉を叩いたシャオジーと共に外に出る。

まず向かったのは、フレイに勧められた外套を買う為の店。

優斗がシャオジーの外套を買うと告げると、当初は『申し訳ないです』とか『お金が……』と渋っていたのだが、使用目的と理由を説明するとあっさり納得した。

『これはどうでしょう？』

『似合ってる。けど、また真っ白だね』

『白は私の色ですから』

年頃の女の子らしく、楽しそうに外套を選ぶ姿は微笑ましく、優斗は頬を緩ませてその光景を見ている。

白系の外套をとっかえひっかえする事３０分弱、シャオジーが選んだのは大き目のフード付きで、ところどころ赤いリボンと黒のレースで飾られた一品だ。

選ぶのが楽しかったのか、少し興奮した様子のシャオジーは、外套を優斗に手渡さず、直接店員の方へと向かって行く。

『これ、いくらですか』

「え？　あの、えぇっと。この外套が欲しいのかな？」

『あ』

「それが欲しいのですが」

優斗が隣に現れ、シャオジーがほっとした表情を浮かべ、しかしすぐにばつが悪そうな顔になる。

買い物に夢中になってしまった事を恥じ、謝罪の言葉を口にしようとしたシャオジーだが、それは優斗によって遮られる。
優斗は『ちょっと待ってて』とシャオジーに耳打ちすると、何時もの営業スマイルを浮かべ、店員へと向き直る。

「おいくらですか？」
「そうですね。公国銀貨で6枚でどうでしょうか」
「ふむ。さすが、高いですね」
演技でなく、本気でそう返しながら、優斗はその理由を考える。

子供用で質が良い、白の外套。
子供用では端が草臥れても詰められる回数が少ない上に、白は汚れが目立つ。大人よりも汚す確率の高い子供用でこの白さを維持していると言う事は、まだ新しいか、そうでなければよっぽど綺麗に、そして大切に着ていた事が判る。

「確かにこちらの商品はお値段が張りますが、それだけの価値がある一品です」
「そうですね。実は私達は船に乗る予定なのですが、他に必要な物ってありますか？」
優斗の言葉に、店員が笑みを浮かべ、左手方向を示す。

つられて優斗が視線を向けると、そこには丸く穴の開いた、優斗の記憶では顔出しニット帽と呼ばれている物が置かれている。

「特に北へ向かうのであれば、必須だと思います」
「なるほど。ちなみに、合せておいくらでしょうか？」
「物にもよりますが、お嬢様の外套と合わせまして、大体銀貨8枚と言ったところでしょうか」

「1つ銀貨2枚ですかぁ」
示された品に優斗が見出した価値は、防寒ではない。

これから向かう王国では、自分の黒髪が不利に働く可能性を、優斗はきちんと把握していた。その対策としていくつか考えていた事の1つの、髪を隠すを実行する為に、このニット帽は便利な品だ。染髪すると言う手もあるが、滞在期間によっては何度も染髪する必要がある事と、単純に染髪の経験が無い事、この国で使われている染粉が健康に影響を与える心配等から、出来れば他の手を、と考えていた。

ちなみに、これを発見するまでは、坊主にして帽子を被る、が最有力候補だった。

「3人分買うと6枚か」
店員にぎりぎり聞こえる、しかし不自然でない程度の小声でそう独り言をつぶやいた優斗は、少し迷う振りをした。

そして、示された品を1つ手に取ると、再度悩む仕草を見せてから、店員へと手渡す。

「それとこれ、合せておいくらですか？」
「こちらの品ですと、そうですね。本来であれば銀貨9枚と言ったところなのですが」
愛想は良く、しかしどこか上の空な店員の言葉を聞きながら、優斗は残念そうな表情でニット帽のある一角を横目に見る。

その仕草に店員は、買う気はあるが予算が厳しい、と判断していた。そして、多少利益を削っても売上を伸ばす、この場合は優斗が呟いた3人分のニット帽を売る為にはどの金額を提示すれば良いか

を考える。出来る限り利益を減らさず、出来れば他の品も買おうかと思われれば、なお良い。

「お嬢様の外套が銀貨6枚としまして、合せて銀貨7枚と半分でいかがでしょうか」

「ほう。ちなみに、他の帽子はどのくらいの値段なのでしょうか？」

優斗が適当に取った帽子は、髪の色が目立ちにくい様、黒を選んだだけであり、特にこだわりはない。

店員も、優斗が帽子に関しては質よりも値段を優先している事と、外套の方に言及しない事から、自分にはお金をかけず、連れの女の子には惜しまず使う事を理解した。

ならば、と安い帽子は利益を度外視し、高価な物で利益を取るべきと判断すると、高い物はそのまま告げ、安い方の値段は普段よりも数割安く提示していく。

「じゃあ、少し小さめ、と言うかこの子と、もう1つ16歳くらいの金髪の女の子に似合いそうな物はありますか？」

「お任せください」

店員は、思惑通りに事が進んだ事に、心の中でほくそ笑む。

質の良い、故に当然値段の張る、品々を紹介している間、優斗が値段を気にする事なく「これはシャオジーに似合いそう」とか、「こっちはフレイにいいかも」と呟くのが聞こえ、説明の声にも熱が入る。

「種類が多すぎて、選びきれない程ですね」

「ありがとうございます」

「ひとまず、これとこれだけお願いします。おいくらでしたか？」

そう言って優斗が示したのは、白い外套と黒いニット帽だ。

ニット帽の質はそれなりで、値段は銀貨1枚と銅貨20枚と言っていた事を、優斗はきっちりと覚えている。もちろん、外套が銀貨6枚である事も。

「以上の2点でよろしかったですか？」

「はい。そろそろ怒られそうなので、とりあえず着せておこうかと」

優斗の苦笑に、店員は不安げに下を向くシャオジーに視線を向ける。

表情が伺えない為、店員はそれを、買い物が長くて飽きてきた子供の反応、と判断した。そして、そんな理由で複数買いによる値切りの好機を逃す優斗を、与し易い客だとも。

「それは申し訳ない事をしましたね。では、手早く済ませる為にも、きりの良いところで銀貨7枚にさせて頂きますね」

「ありがとうございます。ほら、シャオジー」

銀貨を支払うと、優斗は受け取った外套を広げ、シャオジーに着せる。

そして自分用のニット帽も受け取った優斗は、嬉しそうなシャオジーをしばらく眺め、タイミングを見計らって彼女に近づくと、店員に話しかける。

「やっぱり、自分の着る物は自分で選ぶのが一番ですね」

「はい。良くお似合いです」

「今度はもう1人も連れてきますね」

「はい。またの来店をお待ちしております」

店員が反射的にそう答えてしまった時には、優斗はもう店の外へ出る寸前だった。

こうして、外套とニット帽を購入した優斗は、予定通りキャリー商会へと向かう。
商会へ到着すると、支店長のアイタナに出迎えられ、応接室に通される。

「そんな訳で、王国行きの船便を手配出来ませんか？」
「王国行きの船ですか。商船でもかまわないのであれば、すぐに手配できると思いますよ」
「では、それを出来るだけ早く3人分、お願いします」
「わかりました」
そう答えたアイタナが、何かを思い出して立ち上がる。

訝しがる優斗に「少々お待ちを」と告げると、棚から紙束を取り出し、その中から一枚だけ抜き出すと、元の場所へと腰かける。

「優斗様にお願い、と言いますか提案があるのですが」
「何でしょう？」
「王国に向かうのであれば、身元を証明する事が出来た方が、何かと便利ですよね」
そう言ってアイタナは、シャオジーに視線を向け、次いで優斗の髪を見る。

王国で最も上等とされる、色素の薄い白を持つ人間であるシャオジーと、髪だけとは言え、最も下等とされる色素の濃い黒を持つ優斗。
2人は別の意味で目立ち、目立つからこそ様々なトラブルに巻き込まれやすい。

「私もそう思います。で、提案と言うのは？」

「船代の代わりに、我が商会の荷物を、王国へと売り込む代理人になって頂けませんか？」

キャリー商会カクス支店の主な取引は、北、すなわち帝国から仕入れた奴隷を公国や王国に売捌く事だ。

その事実にすぐに思い当たった優斗は、断るべきかと考えた。しかし、現在の手持ち資金が乏しい事もあり、その提案に惹かれているのも事実だ。

「積荷の内容と、私がすべき事をお聞きしても？」

「もちろんです。

積荷は全て嗜好品です。ほとんどが茶葉や豆類ですね。

今回の目玉は、現在王国で人気急上昇中の茶葉です。薄めに抽出しても良い味がしっかりと出ると評判です」

予想外の答えに、優斗は一瞬だけ反応が遅れたが、すぐに何時もの笑みを浮かべる。

その隣では、言葉が通じないはずのシャオジーが楽しそうに優斗の様子を見ている。

「それを売った代金でこちらの商品を仕入れて来て頂きたいのです」

「なるほど。それで？」

相槌を打ちながら、優斗は提示された紙に目を通す。

買付けリストの上位にあるのは宝石類で、次に農作物。前者は例のクシャーナに関する式典狙いで、後者は単純に空いた船倉の大きさに対し、残りの資金で最大の利益を詰め込むのが目的だ。

王国では労働奴隷による大規模農園が存在する為、農作物の価格が公国よりもかなり安い。関税を幾重にも取られる陸路であればそれほどでもないが、海路を使う船で大量に運び込めば、利益率がか

なり良い品だ。

「一定以上の利益を出して頂けた場合、船代はこちら持ちとさせて頂きます。
そうそう、残った資金で買い付ける品はお任せしますので、どうぞ色々とご利用ください」

アイタナの言葉を受け、優斗は考える。
良い話ではあるが、幾つか確認しておくべき点がある事を思い付いた優斗は、それを吟味し、アイタナに質問を浴びせる。

「損失が出た場合はどうされるつもりですか？」
「そんな事はないと信じておりますが、万が一の場合はお預かりする荷馬車を担保とさせて頂ければと思います」
「それ以上は請求しないと言うのであれば、かまいません」
「もちろんです」
「船上で私達に与えられるスペースはどの程度でしょうか？」
「広めの船室を1つ、になると思います。お連れ様の分の食事と水は持ち込んで頂けると助かります」
「出港日と、向こうで仕入れた荷物の輸送についてはどうなっていますか？」
「出港は5日後で、帰りの積荷は船長が責任を持ってお預かりします。もちろん、一緒に戻って来て貰っても構いません」
その分は利益から差し引きさせて頂きます、と口にせず、アイタナが笑みを浮かべる。

この中年女性は、商人と言う人種とは違う意味で、中々に口が達者だと感じながら、優斗は引き出した情報を吟味する。

まず、積荷の内容が奴隷でなかった事は朗報だ、と優斗は思った。

さすがに人身売買に積極的に関わる程、優斗は吹っ切れていない。

条件面では、残った資金を自由に使えると言う点が魅力的だ。
その資金を自由に使えると言う事は、自分の買付資金で物を安く仕入れる為に利用する事が出来ると言う事だ。滞在が長引かなければ帰りの便まである事も重要だ。

優斗は隣のシャオジーに視線をやる。
優斗の横顔を見つめていたシャオジーと目が合い、お互いににこりと笑いあうと、優斗はまたアイタナと向き合う。

「王国にはどの程度の期間、停泊予定なのでしょうか」
「長引けば停泊料も嵩張りますので、大体3日から6日程度だと想定しています」
「その間に取引を行えば言い訳ですね」
「はい。取引先の候補は2、3準備しておりますので、後で資料をお渡しします」
「お願いします。で、契約書の条文ですが」

優斗とアイタナは30分程かけて話し合い、条文を決定すると正式な契約を交わす。
基本条項は変わらず、解約事項や、もしもの場合の対処等を追加された契約書を受け取ると、荷馬車を引き取る為の人員を引き連れ、宿へと戻る。

宿に戻った優斗は、シャオジーと他愛のない雑談を交わしながら、フレイの事を考えていた。

シャオジーとフレイは、会話による意思疎通が出来ない。カード

を使って意思を使える事は出来るが、それも最低限であり、とても会話とは言えない。

ちなみにカードはフレイ謹製の品で、判りやすいイラストが描かれており、裏にはシャオジーによってその内容が連邦で使われている文字で書かれている。優斗はこっそりと、それを参考にした文字の対照表を作成中だ。

自然、優斗は同じ境遇であり、病人でもあったシャオジーと会話する機会が増え、フレイと話す機会が減っている。

もちろん、全く話をしない訳ではない。

夜になれば同じ部屋で過ごし、暇があればオセロや将棋をして遊んでいる。しかし、シャオジーの面倒を見る為にと、どちらかが留守番をしていた為、ここ数日一緒に出掛けた記憶はなかった。

優斗はユーシア滞在中の事を思い出す。

仕事や研究、クシャーナの相手に忙しく、フレイと話す時間が減り、表面上は変わりないにも関わらず、どこか刺々しい時期があった。それに気づいてから、ご機嫌取りの為に支払った気苦労と資金を思い出し、苦笑する。

『優斗さん？』

『あ、ごめん。何だった？』

優斗の言語能力は、雑談に乗れる程度であっても、考え事をしながら会話が出来るほどではない。相槌を打つにしても、まず言葉を理解する必要があるからだ。

シャオジーが優斗に語りかけていたのは、今後の予定についてだ。

大まかには、５日間後に出港し、約１０日かけて王国に到着。そこから２、３日で優斗が仕事を済ませ、残りの３日ほどでシャオジ

ーの知り合いを探す事になっている。

『船団の者が到着しているといいんですけど、いなかった場合は』
『港町の責任者に会える様、手配すればいいんだよね？』
『はい。言葉が私の証明になると思います』
身分の証明、と聞いて優斗は思い出す。

この話の流れなら、と優斗はシャオジーに『少し待ってて』と告げると、隣の部屋へ小箱とペンダントを取りに行く。
不思議そうにしていたシャオジーも、優斗が手に持っている品を見て、驚いた顔になる。

『そ、それは』
『シャオジーの持ち物、だと思うんだけど、どう？』
尋ねるまでも無く、そう確信していた優斗だが、あえて言葉にしながら2つの品をシャオジーに差し出す。

シャオジーはペンダントを手に取ると胸に抱き、涙を流し始める。
その光景に優斗は酷く狼狽した。だが、声をかけるのも無粋と感じ、椅子に腰かけ、ひたすらシャオジーの反応を待つ。

『ありがとう、ございます』
長い時間、そうしていたシャオジーが、涙声でそう告げる。

優斗は立ち上がると、彼女の頭を優しく撫でる。
撫でられながら涙を拭いたシャオジーは、優斗に見える様にペンダントを掲げ、少しだけ口元に笑みを浮かべる。

『なくしちゃったのかと思ってたので、本当に嬉しいです』
『それはよかった。大事な物だったんだね』

『はい。お母さんのペンダントなんです』
昂ぶった感情を抑えきれないシャオジーが、熱っぽく、そしていつも以上に饒舌に語る。

『お母さんがお父さんから貰って、ずっと肌身離さず付けてて、私にもあんまり触らせてくれなくて』
声にまた涙が混じって来たせいで、シャオジーが何を言っているのか、優斗には聞き取れなくなって来た。

優斗が判るのは、目の前で小さな女の子が泣いていると言う事だけ。
理解出来なくとも、ただひたすら話に耳を傾ける優斗に、シャオジーはひたすら何かを話し続け、最終的には泣き出した。優斗の胸で眠りこけるまで、ずっと。

シャオジーが優斗の胸の中で目を覚ましたのは数時間後で、そろそろ夕食の時間が迫りつつある頃合いだった。

『ふぇ？　お父さん？』
『残念ながら、俺はお父さんでも皇帝でもないなぁ』
『んん……。
はふ。おはよーございます』
『おはよう、シャオジー』

寝ぼけ眼のシャオジーに、優斗の目じりが下がる。
この子は守るべき対象だと再度実感した優斗は、なんとしてでも彼女を仲間のところへ送り届けようと決意を新たにしながら、頭を撫でていた手を離す。

『良く眠れた？』
『うん。って、あれ？』
眠そうに目を擦り、ようやく意識がはっきりとしてきたシャオジーは、声も無く驚く。
そして自分の行動を思い出し、恥じ、顔を真っ赤に染めると、凄い勢いで優斗から距離を取る。
『ごごごめんなさい、それに、あ、あぁ！？』
『とりあえず落ち着いて』
優斗の反応に、シャオジーは落ち着くどころか、更に慌てた様子で言葉を続ける。
『その、そう。実は私、市井で育ったんです』
『へ？』
シャオジーの唐突な告白に、優斗は唖然とする。
その為、シャオジーの言葉を遮る者は無く、彼女は一方的にしゃべりを続ける。
『お母さんは身分が低くて、だから私も皇女の中で一番下で、だからこの役割を与えられてこっちへ来る事になったんです！』
『あー、そうなんだ』
シャオジーが話す内容を、優斗は完全に聞き取る事は出来なかった。
しかし、聞き取れた内容に、優斗の疑問を解消できる情報が含まれていた事で、思考がそちらに寄って行く。
優斗が抱いていた疑問とは、皇女と言う重要な存在が、海を越え

なければならない、危険な役割を担っている理由。
国としては、重要な、正確に言えば相手から重要と思える人間を遣わせる事で信頼を得られる。だが、本当に重要な人物を送り込むのは、リスキーだ。
その点、親族と言う重要に見える立場でかつ、跡継ぎに関係しない人間と言うのは、この条件に相応しい。

優斗はそこまで考えてから、もう1つ、確認すべき品があった事を思い出す。

『ちなみにこっちは見覚えある？』
『な、なんでしょう』
勢いよくしゃべり続けたせいで肩で息をしているシャオジーの姿に苦笑しながら、優斗は小箱を取り出す。

それを見たシャオジーの反応は、なにこれ、とでも言いたげなものだった。優斗はその反応に対して何を言う事もなく、中から手紙を取り出し、文面が見える様にシャオジーに差し出す。

『こ、これは』
『多分、手紙だと思うんだけど』
赤みを帯びていたシャオジーの顔色が、目に見えて青ざめていく。

その反応を不思議に思いながら、優斗は紙に書かれたものを思い出す。
シャオジーが意思疎通用のカードに書いた文字と同じであると思われる言葉でかかれた手紙の内容は、優斗には解読出来なかった。より正確に言えば、一部の文字や単語は判るのだが、崩し字で達筆すぎる文字列を、完全に解読する事は不可能だった。

『それがあれば身分の証明も出来るんじゃないかな』
優斗があのタイミングでこれを出して来た理由が、それだ。

優斗の言葉にシャオジーは、顔を伏せた状態でびくりと肩を動かす。それを訝しんだ優斗が覗き込むと、更に青ざめた顔で、瞳には怯えの色が見える。
さすがにおかしすぎると、優斗はシャオジーの肩に手を置き、伏せていた顔を上げさせ、目を合わせる。

『どうしたの!?』
『ごめんなさいごめんなさい』
『大丈夫だから、落ち着いて』
優斗と目が合ったシャオジーが『ひっ』と喉を鳴らして悲鳴を上げる。

シャオジーが歯をカタカタと鳴らし始めた頃、ようやく自分の存在が恐れられているらしいと気づいた優斗は、隣に居るはずのフレイに助けを求める為、部屋を飛び出した。

オルドへの筋道（後書き）

シャオジーの為にあれこれと動き回る話でした。

ひとまずこれからの行動に目途がたった優斗くんですが、問題はまだ山積みと言ったところでしょうか。

想いのベクトル

翌朝、目を覚ましてからもずっと悩み続けていた優斗は、シャオジーに食事を届けると言う名目でようやく動き出した。

昨晩の内に、布団に潜り込んで出て来ない、と言う報告をフレイから受けていた優斗は、寝る前での間も自分の何が悪かったのか、どうすれば出て来てくれるのかと考え続けていた。

可能性としてまず考えたのが、手紙の内容に関する事。

優斗は解読出来た単語から、それを委任状の様な物だと推測している。

理解不能、もしくは解読不能な部分を無視し、『国』『代理』『権利』『取引』と言う言葉の位置や流れから全体を予想した結果、シャオジーに交易、ないしそれに関する条約を締結する権利を委任すると言う内容であると予測し、優斗はそれを身分証明に使えるだろうと考えた。

以上の考察から、優斗はシャオジーが怯えた表情を見せた理由を推測する。

『シャオジー、朝食を持ってきた。入って良い？』

『……どうぞ』

部屋の中からくぐもった声で許可を貰った優斗は、ゆっくりと扉を開ける。

そのまま足を踏み入れる事に躊躇した優斗は、視線だけを動かして部屋を覗き込むと、予想通り布団に包まった姿のシャオジーが見えた。

フレイの報告とは違い、座り込んだ姿勢のシャオジーは、頭から目までが布団からはみ出ており、優斗を観察している。

『いや、なんというか。ごめん』

『……ひぇ？』

『手紙、封が開いててぼろぼろじゃ、使い物にならないよね。きっと』

優斗の言葉に、シャオジーはまともな返答が出来ない程驚いている。

優斗が今、口にした事が一晩考えた末に彼がたどり着いたシャオジーが取り乱した可能性の１つだ。

他にも、優斗を見て更に青ざめた事から異性関係のトラウマが再発した言う可能性も考えたが、その場合は男である優斗がその話題に触れる事はむしろ逆効果であり、ひたすら謝り倒す事で自分に敵意も害意も無い事を印象付ける方が得策だと判断した。

『ホントごめん。王国で身分を証明する方法、なんとか考えるから』

『っ！？』

呆けていたシャオジーの表情が歪む。

その反応に、やはり原因は手紙に関する事であると確信した優斗は、申し訳なさそうな表情を作りながら部屋に入ると、サイドテーブルに朝食を置いてから背筋を伸ばし、頭を下げる。

『どうか、許して欲しい』

『あの、その。私を、王国に、連れて行ってくれるん、ですか？』

『そう言う約束でしょ？』

当然だと言う優斗の反応に、シャオジーがはっとする。

同時に、優斗は委任状の内容に彼を害するであろう内容が含まれている可能性に思い至る。
優斗が瞬時に思い付いたのは、戦争だ。王国への援助、もしくは逆に連邦の軍が公国等を攻める為の補給の確約等。

『読まなかったんですか？』
『読めなかったんだよ』
さも面目ないと言った態度で、優斗は頭をかき、視線を逸らす。

それを聞いたシャオジーの表情が、少しだけほっとしている様に見えた優斗は、自分の判断が間違っていなかった事を確信すると共に、出来れば手紙の内容を確認すべきだとも考える。

『あの、優斗さん』
『何？』
『昨日は取り乱してしまって、申し訳ありませんでした』
『こっちこそ、ごめんなさい。それより、冷める前にどうぞ』
何か言いたげな、そして少し罪悪感を覚えている様子のシャオジーの表情に気付かない振りをして、優斗は朝食を勧める。

優斗の性格と賢さをある程度知っているシャオジーは、彼が自分の手紙を勝手に開ける事は無いと確信していた。
きちんと封印されている手紙と言うモノの価値は、開封した時点で激減する。中身が入れ替えられる可能性はもちろん、内容によっては機密性が損なわれる事で損失を受ける可能性がある。

今回で言えば、身元不明の相手の手紙を開けるよりも、まず身元を確認して中身を推測するべきであり、シャオジーが名乗った内容から考えれば、開封するなど愚の骨頂だ。

それに気づきながら、しかしシャオジーはそれについて言及する事なく、優斗の好意に甘えて食事に手を伸ばす。

『今日はどうするんですか？』

『買い出しと、ちょっとした用事に出かける予定』

『ついて行ってもいいですか？』

『いいけど、一緒に来ても面白くない用事もあるよ？』

シャオジーがそんな理由で引く事は無く、優斗は食事を終えたら一緒に出掛ける事を約束する事になる。

食事を終えたら着替えて来る様に告げた優斗は、縋る様な瞳のシャオジーを残し、部屋を出る。

シャオジーは捨てられる事に怯えている。その瞳からそういった雰囲気感じとった優斗は、彼女をそこまで追い詰めた手紙の内容を推測しながらフレイの待つ部屋へと戻る。

「どうでしたか？」

「なんとか大丈夫だった。この後、一緒に買い物に行く予定」

「謝っていたようですけど、やっぱり、ご主人様が何かしたせいだったんですか？」

「やっぱりってなんだ、やっぱりって」

ため息を吐きながら、優斗はフレイに飴を１つ手渡す。

受け取ったフレイがそれを口に入れる姿を横目で確認しながら、優斗は彼女にどこまで説明しておくべきか、考える。

現在、フレイに伝えてある事はシャオジーの名前と、王国に向かう船が難破して、流れ着いたらしいと言う事のみで、身分等の情報は伝えていない。理由としては、勝手に話しても良いか判断し兼ねた事と、そんな余裕がなかった事だ。

そしてこの機会にと考えた結果、優斗はシャオジーに関してフレイには最低限以外の情報を与えない事を決め、本題に入る。

「買い出し頼んでもいい？」
「もちろんです」
「１０日分の食糧と水、って言うか飲み物。あと、あの子の生活用品に消耗品」
「そんなに持ちきれません」
「キャリー商会に荷馬車が預けてあるから、そっちに送って貰って」
「わかりました」
「ついでに、安くて良い毛布があったらそれも。お金、多めに渡しとくから」
「他にも何か良い物があったら買っていい、ですか？」
「そうそう」
単独行動が可能になって以来、フレイが１人で買い物に行く事は珍しくない。

だが、それはあくまで少量の消耗品や彼女の為の品であり、大量に買い出しを行う場合は、値切り交渉等の為に優斗が同行する。
今回、優斗がそれをしない事には２つの意図があり、その１つがフレイに経験を積ませると言うモノだ。

正式に優斗の物になってからのフレイは、これまで口にしなかった、疑問を口にする、と言う行動をする様になり、商売についても好奇心からか色々な事を聞き、覚え、それを実践する事で優斗の手伝いをしてきた。
オセロと将棋を作るまでは、フレイ相手に優斗が教師の真似事をして暇を潰していた事も多く、掛け算や割り算から商売に関する事まで、色々と教えている。今の優斗は、生徒に課題を与える教師の様な心境、と言う訳だ。

「はい、これ」
「多すぎませんか？」
「そう？　じゃあ少しだけ減らすけど、基本的には残ったら返して貰うって事で」

そう言ってフレイに財布を渡し直した優斗に、シャオジーも自分の物は自分で選びたいのではないだろうか、と言う疑問が浮かぶ。
ならばと優斗はフレイに、午前中に消耗品や個人の嗜好とあまり関係しない品の購入をし、一緒に昼食を摂ってからシャオジーの日用品を購入するよう、提案する。

「良いと思います」
「じゃあ、そうしようか」
合流後に食糧と水の買い出しに行くのであれば、同行して後ろで見守ろうと優斗が考えていると、部屋の扉を叩かれる。

扉を叩いたのはシャオジーだった。急いで準備したのだろう、髪が少し跳ねている姿に、優斗はフレイと顔を見合わせて苦笑する。

『ここ座って』
『はい』
優斗の指示に素直に従い、シャオジーが椅子に腰かける。

じゃあ後はよろしく、とフレイに任せようとした優斗が彼女を振り返ると、そこには櫛とリボンが差し出されており、反射的にそれを受け取ってしまう。

「これは？」
「前から思っていたんですが、ご主人様って女の子の髪を触るの上

手ですよね」
触る、と言う言葉と、上手、と言う言葉の並びに、優斗が眉を潜める。

それが、整える、的な意味である事に優斗が気付いた時には目の前にフレイの笑顔があり、その勘違いにばつの悪そうな表情を浮かべると、誤魔化す為に体ごとフレイから視線をそらすと、椅子に座るシャオジーに向き直り、髪に櫛を通して行く。

「他に必要な物はありますか？」
『あの、優斗さん？』
同時に別の言語で話しかけられ、優斗はどちらに返答すべきか困る。

困りながらも考えた結果、突然髪を触られた形になるシャオジーを無視すると、また悲鳴を上げられかねないと、遅くなったが許可を求める為に声をかける。

『髪、整えていい？』
『え？』
『嫌ならそこの女の子に頼むけど』
『大丈夫です。私の髪でよければ、どうぞ』
何かニュアンスがおかしいと感じた優斗だが、正確に訂正できるほど語彙に自信が無い事もあり、断念する。

後ろからの視線を気にしながら、優斗はシャオジーの長い髪を梳いていく。
一瞬、右と左に分けて大きな三つ編みを1つずつ作りたい衝動に駆られるが、フレイに怒られそうだと判断した優斗は、高い位置に髪を集め、いわゆるポニーテールを形作る。それだけでは寂しいの

でで、フレイから飾り付きのピン借りて前髪に留めると、完成とばかりにシャオジーの頭をぽんと叩く。

本人は無自覚だが、優斗は髪に触れる事を好む傾向がある。

それは、頭を、そして髪を撫でられるのが好きで、転じて彼に髪を梳られるのが大好きだった幼馴染が原因であり、優斗が簡単な髪結いの技術を持っている事も、そこに起因する。

『完成』

『はい』

「フレイ、鏡」

「はい、どうぞ」

差し出された鏡を受け取ったシャオジーの顔に笑みが浮かぶ。

頬りに感謝された優斗は、隣で何か言いたげなフレイの視線に気づかない振りをしながら出発を告げると、フレイもしぶしぶながら出発の準備を整え、同時に部屋を出る。

フレイと宿の前で別れた優斗は、そのまま中心街の方へと向かい、アクセサリーが売っている店を巡る。

優斗は女の子らしく、綺麗なアクセサリーに目を輝かせるシャオジーを微笑ましく眺めながら目的の物を買うと、食べ物の露店が並ぶ場所へと移動する。

優斗はここでもまた、様々な料理に目移りしているシャオジーを微笑ましく見守りつつ、折角だからと幾つか食べ物と飲み物を購入し、2人で分け合う。

未だ彼女が取り乱した原因が判らない優斗が、再発防止策として出来るだけ打ち解けてられる様にと計画した食べ歩きを、シャオジ

ーは自国の料理と比較したりしながら楽しそう堪能した。

次に優斗達が向かったのは、キャリー商会だ。

昨夜、荷主が王国内で付き合いのある商会の名前と詳細、尋ねる場合の紹介状等が各荷主から回収し終えたと連絡があり、それらをまとめて綴じた資料を店先に居たマイアから受け取った。優斗にとって、今回の依頼主はキャリー商会だが、船便の性質上、実際の荷主は複数存在する。

船には多量の荷物を積む事が出来る。しかし、沈没等の事故や持ち逃げ等の理由で全てが失われる危険性が高い為、個人ないし単一商会で船倉の全てを埋めてしまうと、もしもの場合の損失が大きくなり、小さな商会はそれが原因で潰れてしまう事もある。だからこそ、大商会が相手でもなければリスク分散の為に荷主が多数いる事が普通であり、今回も多聞に漏れない。

資料を受け取った優斗は、お昼に間に合わせる為に急ぎ次の目的地である奴隷管理局へと向かう。

目的は、フレイが破り捨ててしまった奴隷解放の書類を再度発行して貰う為だ。

『シャオジー、悪いけど少し待ってて』

『はい、判りました』

聞き分け良く付いて来るシャオジーに、優斗は飲み物を買い与えてから、管理局へと入っていく。

管理局の内部はどこも似たような構造であり、優斗は前回来た時と同じ様に入口付近にある窓口へと向かい、職員に声をかける。

「すいません、奴隷解放の手続き用紙が欲しいんですけど」

「っは！　は、はいただいますぐにお任せください」
「お願いします」
居眠りをしていたらしい職員の対応に一抹の不安を覚えながら、優斗は備え付けの椅子に腰かける。

慌ただしく動いている職員から目を離すと、優斗は先ほど受け取った資料に目を通そうと考え、綴じられた紙束を1枚めくる。
最初のページには、荷主の名前一覧。続いて、王国にある商会、数か所の情報がかかれた頁が続く。

書類を何度か捲り、次項に移るタイミングで優斗は伏せていた視線を上げる。
上げた先では、管理局の職員がカウンターに書類を乗せているのが見えた。優斗はここで自分の記載する部分だけでも記入して行こうと席を立ち、そちらに近づいていく。

「ここに名前を書けばいいんですよね？」
「はい、そうです」
優斗は、まだ完全には慣れていない文字で自分の名前を書いていく。

書き終えると、空になった杯を手に持ち、雛鳥のごとく後ろについてきているシャオジーへと振り返り、その光景に頬が緩む。
後はフレイの署名があれば、と考えながら改めて書類を見た優斗は、違和感を覚える。

「では、そちらのお嬢さんの署名をこちらに。字が書けなければ拇印だけでも結構ですよ」
「待て。いや、待ってください」
一度見た事のある書類の、書いた事のある欄に無造作に名前を書

いた優斗。

しかし、それは奴隷の解放手続きの書類ではなく、契約の書類だった。優斗はどちらも過去に一度きり書いたのみで、詳しい書式などをきちんと記憶していなかった。

「俺が頼んだのは、奴隷の解放手続きなんですけど」
「あれ？　でも、その子、奴隷じゃないですよね？」
「この子は単なる付添い。って、こら、シャオジー」
『え、書くんじゃないんですか？』
優斗は書類にサインしようとしているシャオジーの手を掴んで、ペンを取り上げる。

その強引な行動に、怒られると感じたシャオジーが身を竦めるのを見て、優斗も失敗した、と表情をひきつらせる。

「とにかく、解放手続きの書類をお願いします」
「わかりました。それで、こちらの書類は？」
「処分しておいてください」
優斗の言葉に、職員は少し不満そうにしながら、新たな紙を取り出して行く。

優斗がシャオジーに怒っていない事を説明している間に準備は終わり、まずきちんと書類を確認してからサインしなければ危ないと反省した優斗が、シャオジーに『時間がかかるから』と説明すると、彼女は少し外に行ってくると告げて管理局を出ていく。

優斗はそれに対して、手洗いだろうか、と考え、それは半分正解だった。

書類に目を通し終え、必要な部分の記入を終えた優斗が、用紙を受け取り、手数料を払おうとした時、彼女は現れた。

「これは奴隷契約書、ですよね？」

「……なんでフレイがここに」

ジト目で睨まれた優斗は、焦りを表情に出さない様に務めながら、視線を横にずらす。

そこにシャオジーの姿がある事を確認し、どうやら彼女を見つけ、合流したらしいと理解した優斗は、隠す事は無駄だと悟る。

「シャオジーさんも奴隷にするつもりだったんですか？」

「それは誤解だ」

職員の怠慢により、カウンターの上には、まだ奴隷契約の書類が残されている。

手数料の支払いを待っている職員に横目で恨みがましい視線を送りながら、優斗は先ほど受け取り、仕舞い込んだ書類を取り出し、カウンターへと置く。

「それは間違い。こっちが本当の目的」

「本当ですか？　じゃあなんでこちらにまで署名を？」

「違う書類だと気づかなかっただけ」

「こちらの欄もですか？」

「そう」

フレイが指差したのは、シャオジーが書きかけた奴隷契約者の署名欄だ。

目を細め、険しい表情をしている反面、フレイは優斗の弁解に対してそれ以上の追及をして来ない。

優斗はそれを、時間稼ぎに追及していただけなのだと考え、続くであろう本当に言いたい言及の言葉に備え、心を落ち着ける。

「では、こちらの書類は？」

「奴隷の解放を認める書類だけど？」

「それは見ればわかります」

フレイが署名と拇印があれば完成する書類を、彼女は険しい表情のまま睨みつける。

優斗がこのタイミングでフレイを奴隷身分から解放しようとした理由は、幾つか存在する。

王国では、公国よりも奴隷の扱いが厳しいと聞いた事。黒髪の優斗は劣等とされ、様々な不便が予想されるので奴隷でなくなったフレイが居る事で行動し易くなる事。そして奴隷と言う、一方的に言う事を聞かせる事の出来る身分にフレイが居る事で、優斗が困ると言う事。

しかしそのどれもが、一番の理由を後押しする為のものでしかない。

「新しい奴隷が手に入ったから、私は捨てられるんですね」

「いやいや、違う違う」

「でも、私がそれを何度も拒否しているのを、覚えてますよね？」

「それは、まぁ」

「むぅ」

子供っぽく頬を膨らませると言う、珍しい表情を見せたフレイが可愛く見え、優斗は頬をゆるめる。

そんな優斗の態度が気に入らなかったフレイが、憮然とした表情を見せた事に、優斗は慌てて弁解する。

「フレイに断りも入れずに来た事は謝るから」
「そう言う事じゃないんです」
2人のやりとりに、管理局の職員は迷惑そうに顔を顰め、シャオジーはおろおろとしている。

ひとまずこの場をなんとかしなければと考えた優斗は、フレイに向き直ると、場所を変える為に次の行動を提案する。

「フレイ、先にお昼を――」
「私の事よりお昼ご飯が大事なんですか？」
「あー、いや。詳しい話は落ち着いてしたいな、と。だから、とりあえず移動しない？」
「では、そう命令して下さい」
それは、極力命令はしない様に心がけている優斗に対する、フレイのささやかな仕返しだった。

少しだけ困った顔をしてくれたら、大人しく引き下がろうと考えていたフレイの予定は、しかしながらシャオジーによって阻まれる。

『喧嘩はダメです』
『大丈夫。ちょっと意見が違っただけ』
『じゃあ、仲直りして下さい』
そう言ってシャオジーは、優斗の手を握る。

それは、仲直りの握手をする様、優斗の手をフレイの方へと誘導する為の行為。しかし、自分に秘密で奴隷解放を進めていた優斗に対して、まだささくれた感情を持て余していたフレイにとっては、自分を無視したあげく、仲よく手をついないで居ると言う光景にしか見えない。しかも、言葉が通じない為、密談めいてさえ見える。

「この件については後で埋め合わせするから、とりあえず今はお願い」
「判りました」
フレイは意識して無表情を作ると、備え付けのペンを手に取る。
丁寧な文字で奴隷解放の書類に署名し、拇印を押したフレイは、それを職員へと突き出す。
その光景を唖然としながら見つめていた優斗は、我に返るとそれを止めるべきか一瞬だけ迷ったが、誤解は後で解けば良いと考え、あえて動く事はなく、ポケットに忍ばせた品の感触を確かめながらその光景を見守る。
「では、解放手続きと首輪の開錠を行いますので、こちらへどうぞ」
職員に導かれ、優斗とフレイは管理局の奥にある部屋へと通される。
まず、優斗の名前が入った鑑札があっさりと取られ、続いて首輪が外される。
久方ぶりに首に巻くものが無くなったフレイは、頻りに首筋に触れ、そこに首輪が無い事を確認している。
それを見つめる優斗は、首輪の下から現れた真っ白な首筋にどきりとし、魅入っている。
「これで終わりです」
「あ、っと。いくらでしょう」
我に返った優斗は、慌てて視線を逸らすと、用紙代、手続き代等をまとめて職員に支払う。

その隙にフレイが部屋を出てしまい、それに気づいた優斗が慌てて追い掛け、ロビーへ到着した時、フレイは入口を出ようとしているところだった。

「フレイ！」

優斗が声をかけても、フレイは振り返らなかったが、その場に立ちどまる。

続く言葉が、おめでとうで良いのか、と優斗が悩んでいる隙に、フレイの言葉が先んじる。

「少し1人にさせて下さい」

フレイはそれだけ告げると、優斗の返事を待たず、管理局を走り去る。

すぐさま追いかけようとした優斗だが、同行者であるシャオジーの存在を思い出し、この場に放置する訳にはいかないとそれを断念する。

解放手続きにはそれなりに時間がかかった為、少し退屈そうに椅子に腰かけていたシャオジーは、叫び声に驚き、それを発した優斗の方を見つめている。

「……一度宿へ帰ろうか」

『へ？』

『ごめん。一度宿へ帰ろう』

優斗は、シャオジーには申し訳ないが、宿にフレイが居なかったら置いて探しに行こう、と考えながら、共に管理局を出る。

シャオジーと並んで歩きながら、優斗はポケットの中の感触を確かめ、この後の事について考えを巡らせる。

奴隷解放後に手渡すつもりで購入した、フレイへの贈り物であるアクセサリ。予定は多少狂ったとは言え、結果として望んだ状況を手に入れた優斗は、どうすればフレイを見つけ出し、可能であれば雰囲気の良い場所で2人きりになり、贈り物と共に大切な言葉を伝える事が出来るのか、必死に思考する。

優斗が奴隷解放を望んだ一番の理由。

それは、フレイに自分と共に歩んで欲しいと告げる為。優斗はそれを、プロポーズと言うよりはお付き合いの申し込みをするのだと考えていた。

その為にはまず、フレイを優斗の言葉に逆らう事の出来ない奴隷と言う身分から脱却させ、対等な関係になる事が必要不可欠であり、本人の意思を無視して良い返事をさせない為にも、それまでは口にすべきではないと考えた。そして、受け入れられた時には、本当の意味で、ポケットの中のアクセサリ――指輪――を受け取って貰いたいとも思っていた。

一方、フレイはその言葉のみによって、奴隷から解放される事を望んでいた。

ずっと一緒に居るだけなら、奴隷のままでも出来る。だからこそ、自分が欲しいのだと、言葉にして欲しいと望んだ。そして、それ以外の自分を奴隷身分から解放する理由は全て言い訳だと感じ、口にされる事を拒んだ。

こうして決して噛み合う事の無いすれ違いを残したまま、優斗とフレイの関係は急激な変化を迎える事となった。

想いのベクトル（後書き）

フレイさんが奴隷でなくなる話でした。

それにより、２人は繋がりの名前と理由を１つ失いました。

エゴと想いの境界

翌朝、優斗は未だフレイの戻らない部屋で目を覚ました。

あれから日が沈むまで町中を探し回った後、灯りの確保と既に戻っていないかの確認の為に宿へ戻った優斗は、少し休憩を取っている間に眠ってしまった。

前日はシャオジーの件もあり、寝不足であったとは言え、自分の不覚に優斗は歯噛みする。

「戻ってないか」

荷物を確認し、まだ眠っているシャオジーの部屋にもその姿が無い事を確認すると、優斗は階段を下りて食堂へと向かい、朝食の準備をしている大将に声をかける。

「すいません。フレイは戻ってきませんでしたか？」

「どうした？」

「その、ちょっと」

「俺は見てないが、どうした。喧嘩でもしたのか？」

「そんなところです」

優斗は内心の焦りを極力表に出さない様に気を付けながら、同じ質問を通りかかった女将にもぶつけるが結果は同じ。

２人にお礼を告げ、背後からかけられる声を無視して優斗はまた街へと繰り出す。

数時間、当てもなく探し続けた優斗だが、結果は芳しくない。

この世界には写真と言うモノが存在しない為、聞き込みを行う事が格段に難しく、その上フレイの持つ金髪碧眼はありふれ過ぎてい

る。美人等の目立つ容姿ならば別だが、ごく一般的か、それよりも少し良い程度の容姿を持つフレイの特徴と言えば、幼く見える容貌くらいだ。それも、実年齢を知らなければ判りえない。

優斗は既に何度か訪れている奴隷管理局へと向かい、別れてからの足取りを再度追い始める。

聞き込みにより、フレイはここから宿のある方面へと走って行った事が判っている。他にも、何度か利用している露店の店主や雑貨屋の店員から情報を得ているが、見た時間の情報が曖昧で、逃げ出す前の事なのか、後の事なのか判断が難しい。

優斗は全ての情報を整理し、フレイの行動順を予想しながら、捜索を続ける。

宿の方に向かったが、宿には戻っていない。宿までの道程には大通りを横切る場所もあり、クシャーナの式典関係で宝石の買付やドレスの注文をする為に普段よりも馬車が多いと聞いていたので、念の為事故がなかったかも確認したが、該当するモノは存在せず、ほっとしたと同時に、手がかりがなかった事にため息を吐く。

フレイが行きそうな場所に加え、いかないであろう場所も回っている優斗は、その足で最も行きそうにない場所の筆頭へと、足を向ける。

「すいません」

「はい、いらっしゃいませ、って、これはこれは」

「突然押しかけて、申し訳ないんですが」

「いえいえ。要件は大体把握しておりますので、こちらへどうぞ」

楽しそうな中年女性――アイタナに促され、優斗はキャリー商会の応接室へと通される。

アイタナは優斗を部屋に入れると「少々お待ちを」と告げて部屋出て行き、代わりにお茶を持ったマイアが現れる。

「こちらは、優斗様にお預けする予定の茶葉と同じものです」
「あぁ。どうも」
「お隣、よろしいでしょうか？」
「へ？」
前に見たおどおどとした印象から一変し、強引に隣に腰かけるマイアに、優斗は慌てる。

一先ずお茶を飲んで落ち着こうと杯に手を伸ばそうとする寸前、マイアは優斗に身を寄せ、その身体を押し当てる。

「あー、マイア？」
「なんでしょうか、優斗様」
「急ぎの用があるんだけど、アイタナさんは？」
「アイタナ様はすぐに戻られます。その間、どうぞ」
マイアが視線をお茶へと向け、優斗もそれに釣られて視線を動かす。

その隙を狙ったかの様に、マイアは優斗の左腕を絡め捕り、豊満な胸に埋める様に押し当てる。
その行為に優斗の心拍数が跳ね上がる。しかし、何時もよりかなり鈍った思考回路でその意図を察した優斗は、呆れ顔で天を仰ぐ。

「商魂逞しいと言うか」
ふぅとため息を吐く優斗の態度を気にした様子も無く、マイアは優斗にかける体重を増やして行く。

そして、どう引きはがそうかと考えている優斗の手首を取り、足

の間へと誘導して挟み込んでしまう。
この行動に驚いた優斗が左腕を引くが、しっかりと絡みつき、しがみ付いているマイアを振りほどくには至らない。

「ちょ、マイア！」
「嫌、ですか？」
上目使いに、艶っぽい声で告げられたそれに、優斗は更なる焦りに襲われる。

そのタイミングを見計らっていたのか、静かに扉が開き、アイタナが姿を現す。
彼女はわざとらしく驚いた表情を浮かべ、次ににやけ顔で優斗に問いかける。

「あら、お楽しみでしたか。私は少し席を外しましょう」
「必要ありません。それより、どうにかして下さい」
「私に言わずとも、マイア本人に命ずれば良いではないですか」
そうしなかった理由は、明白だと言う態度のアイタナ。

マイアには優斗の命令を厳守する様に言いつけてある。そんなアイタナの言葉を思い出しながら、優斗は頭が急速に冷えていく事を自覚する。
同時に、先ほどまでマイアの感触をある意味で好ましく思い、振りほどきづらいと感じていた事も自覚し、そんな自分を嫌悪する。

優斗は、自分は何のためにここに来て、今はどういう状況なのかきちんと考えろ、と自らに命じ、続いて隣のマイアを睨むような目つきで見下ろす。

「マイア、離れろ」

「かしこまりました」
優斗の命令を受け、マイアはさっと離れ、いつの間にか優斗の正面に座っていたアイタナの後ろへと着く。

少し乱れた服を直す事なく立ち続けるマイアを視界から外した優斗は、何時もの営業スマイルを作る事なく、半ば睨むようにアイタナへと視線を向ける。

「奴隷に逃げられたそうですね」
「耳が早いですね。でも、話が早くて助かります」
優斗の態度に動じる事なく、アイタナはにこりと笑う。

聞くべき事を聞いたらすぐに出て行こうと考えた優斗の思考を読んだのか、アイタナが優斗に先んじて口を開く。

「いくつか質問させて頂いてもよろしいですか？」
「は？」
「我が商会でお買い上げ頂いた奴隷の事ですので」
「なるほど。しかし――」
「何かお手伝い出来る事があるかもしませんよ」
アイタナの言葉に、言いかけた言葉を遮られた優斗は、気を悪くする事なく、その提案を吟味する。

1人で探し始めて、既に丸1日近い時間が経過している。これ以上、歩き回っても見つかる可能性が高いとは言えず、アイタナの提案は渡りに船とも言えるものだ。しかも、目の前の2人はフレイの顔を知っている。

優斗はお茶を口に含むと、その味を確かめるようにゆっくりと嚥下すると、アイタナと視線を交わし、首肯する。

「ありがとうございます。では、まず確認ですが、奴隷を解放されたと言う事でよろしいですか？」
「はい」
「その時、お金はいか程持たせておりました？」
「お金、ですか？」
訝しげな表情を浮かべる優斗。

そんな優斗の反応に、アイタナは苦笑いを浮かべながら、ぺこりと頭を下げる。

「懐事情を探る様な質問で申し訳ありません」
「いえ。それよりも、それにどんな意味が？」
「十分な逃走資金を持っていたかの確認です」
逃走資金、と言う言葉の意味を、優斗はすぐに理解出来なかった。

優斗が唖然としている間にも、その反応から十分な資金を与えていた事を確認したアイタナの言葉は続く。

「優斗様がお買い上げになった奴隷。
恐らくですが、昨今の凶作が原因で売り出された娘でしょう？」

優斗が思わず首肯すると、アイタナは満足げに微笑む。

「そして優斗様は彼女の出身地を知らない」
「何故、それを？」
「出身地が判っているならば、恐らく逃げる事はなかったからです」
知らないが、調べる事は出来るはずだと反論しかけた優斗だが、それが難しい事に気付き、口を閉ざす。

優斗は一度、フレイの故郷に荷物を送っている。しかし、その記録を調べる為には現在身を隠している相手に会う必要があり、実行する為にクリアすべき問題が多すぎる。

「何故、ですか？」

「それにお答えするには、まず私どもが扱う奴隷について話す必要がありまして」

時間は大丈夫かと言う無言の問いに、優斗はまた首肯のみで答える。

アイタナは話の主導権を握った事に満足し、真面目な、しかし少し楽しそうな表情で語り始める。

「我が商会、特にこのカクス支店では帝国人奴隷を多数扱っております。

当然ながら仕入れは帝国から行っておりますが、そのほとんどが土地の痩せた寒村からなのです」

奴隷が売れなければ飢えて死ぬしかない土地もある。

優斗は誰かが言った、その言葉を思い出す。

「仮に、村から出た奴隷が脱走した場合、どうなると思います？」

「……村にも責任がある、と仕入れ値が下げられる、ですか？」

「惜しいです。優斗様は優し過ぎますね。

仕入れる村などいくらでもある、と買付を止めるのです」

アイタナの言葉に、優斗が思い浮べたのは、見せしめ、と言う言葉だった。

奴隷が売れなければ村は飢えて潰れる。しかし、本当の意味で全滅する前に、頼れる親類等が居る少数が他の村へ移り住む可能性は

高いので、噂としてそれが実行される事は伝わるはずだ。そうなれば村人は売られる者に対し、売られた先でもきちんとした行動を取り、逃げ出さない様にきちんと言い含める事が予想出来る。更に逃げ出して戻って来た者をかくまう可能性も、激減する。

優斗はそれに対し、効率的だ、と思ってしまった。

上手くやれば、潰れた村の村人をほとんど資金なしに奴隷化できる可能性すらある。優良な奴隷にはそれなりの値を付け、出荷した村も優遇し、そうでない者はかなり厳しく査定を行うなどすれば、自主的に奴隷の質を上げて来る事も予想出来、良い事づくめに思える。

「自分の行動に故郷の命運がかかっていると知れば、軽々しく逃げ出す奴隷はいません。

実は、奴隷解放された時には商会に戻らなければ同じ様に買付を止めると言う取り決めもしているのですよ。

我が商会の買い付けた奴隷は、一生奴隷のままであり、平民になる事すらない。すなわち、余計な事をせず、ただ命令を聞く、本当の意味での奴隷だと言う事です」

自慢げに語るアイタナの言葉を聞きながら、優斗はフレイの事を考えていた。

仮に、フレイが逃げたのだとしたら。

資金は買付の為に大量に渡していたので、十分にある。

出身不明の為、逃げ出しても故郷に迷惑をかける可能性は低い。

逃げる意図があったのだとすれば、目撃証言が極端に少ない理由も頷ける。

そこまで考えて、優斗はある事を思い出し、口を開く。

「でも、フレイは一度奴隷解放を断っています」
「そうなのですか？」
「資金的な問題はあったと思いますけど、それはどうにでもなるはず、ですよね？」
「そうですね。特に若い女性であれば、どうにでもなりますね」
「でしょう？」
「そうですね。それ以外の理由ですと、市壁の有無はどうでしょうか？」
「あ」
「この街には市壁がありません。
ですが、市壁がある街であれば、こうやって探された場合、逃げ切るのが難しいでしょう」

街の外に出るには市壁を通る必要があると言う事は、現在位置が割りやすいと言う事であり、捜索範囲を絞れると言う事だ。資金を持たない状態であれば、その不利は大きい。

「彼女は頭が回る様でしたし、万全を期したかったのではないでしょうか」
「でも、まさか」
「彼女は優しくしてくれた？　それとも、ずっと一緒に居てくれると約束した、でしょうか」
意地悪く笑うアイタナを、優斗が睨む。

しかしそれも、アイタナが次の言葉を告げる事で、絶望へと変わる。

「奴隷が主人の望む事をするのは、当然です」

愕然とした優斗は、何も言い返す事が出来ず俯き、フレイと共に過ごした日々を思い出す。

常に侍り、口は悪くとも優斗を助けてくれた。最初は主従と言う関係、態度に固執していたが、最近では1人の人間同士として接してくれる様になり始めていた、と優斗は感じていた。しかしそれら全ては優斗が望み、フレイは奴隷として主人の望むままに行動していたのだ、と言われれば、反論出来ない。むしろ、納得できる部分も多い。

アイタナは優斗が顔を上げるまで何も言う事なく待ち続け、意思の炎が消えかかった瞳が自分を捉えると同時に、手元に置かれた小さな鐘を鳴らす。すると、扉が開いて5人の女性が部屋へと入って来る。その首には全て、奴隷の証である首輪が付けられている。

「優斗様はまだお若く、経験も少ない。失敗する事もありましょう。ですから今度は間違う事なく、きちんとやれば良いのです」

優斗はアイタナの言葉を否定する事も、肯定する事もなく目の前の情景をただ見つめる。

そんな優斗の態度を気にする事なく、アイタナは奴隷たちに挨拶をするよう、促す。

「初めまして、優斗様。どうか私をここから連れ出して下さい」
「優斗様の為なら何でもします。どうか私選んで下さい」
「私は、優斗様の命令ならなんでも聞く、っあ、違う。何でも喜んで聞きます」
「どうか、私を救って下さい」
「お願いします」

最初に挨拶をしたのは、フレイを意識したのだろう、最低限の礼

儀作法が躾けられている風に見える金髪に碧眼を持つ女性だ。
帝国奴隷を主に扱っていると言うだけあって、続く2人の女性の肌は黒く、片方は細身で、もう片方は布を押し上げて主張する双丘が目立つ。
残る2人はまだ幼く、シャオジーと同じか少し下に見える帝国人と公国人で、後者は容貌と身長に似合わない程の発育が見て取れる。

「我が商会の取り扱う奴隷の中でも、最高峰の物を用意させて頂きました。
容姿はもちろん、能力も厳選しております。身の回りの世話をする者がいなくては不便でしょう？」

アイタナの言う通り、5人の奴隷は全員が全員、一定水準を超える容姿の持ち主だ。
一定水準と言うのはもちろんアイタナの主観であるが、それは優斗が以前所有していた奴隷、すなわちフレイが基準となっている。

顔を上げ、奴隷たちの姿を一瞥した優斗の感想は、馬鹿にしている、と言うモノだった。
優斗が欲しているのは、女と言う記号でも、身の回りの世話をしてくれる相手でもない。そして、まだ逃げたとも、死んだとも判らない間に他の女性を隣に置く程、節操なしでも無い。

「折角のご提案ですが」
「そうおっしゃらず。
見つかるまでの間、代わりが必要でしょう？」

強引に品物を売りつける様な態度に、優斗は多少の怒りを込めて反論を口にしようとした。しかし、アイタナの言葉が何を意味するのかに気づき、思考する。

アイタナはこう言っているのだ。捜索を手伝う代わりに奴隷を買って行け、と。

優斗が捜索を行う場合、個人では限界があり、かと言って人を雇えばそれなりの額が必要になる。しかし、商会を切り盛りするアイタナであれば、安く人手を確保したり、何かのついでに調査をして貰う事が可能であり、情報を集めるにも既に伝手が存在する。相手が元奴隷と言う条件も、奴隷商人であるキャリー商会の網にひっかかる可能性が高い。

様々な理由から、本気でフレイの捜索を行うのであれば、この話に乗るべきだと、優斗は結論する。

話に乗らずとも、協力を要請すれば引き受けてくれるだろう。しかし、その場合は料金をきっちりと取られ、総合的に損となる公算が大きい。

優斗が最も得をする方法は、奴隷を買って捜索に協力して貰った上で、フレイが見つかり次第、奴隷を売り払う事。

アイタナの狙いは、上質な奴隷を売り、その魅力で次の購入を促す事。優斗がそれなりのお金とコネを持つ大商人の縁者だと予想しているアイタナにとって、逃走資金を持たせたまま解放を行った優斗は、奴隷の色仕掛けに嵌った騙しやすい若者でしかない。

「私は今、奴隷を買うほどの手持ちがありません」

「ご謙遜を。ですが、そう言う事でしたら仕事の追加報酬と言う事でお安くさせて頂きますよ」

アイタナの提案を、優斗は深呼吸をしてから吟味する。

現在、優斗の手持ちは公国金貨が3枚と公国銀貨が１８０枚弱。現在の相場で公国金貨に換算すると、約8枚半と言ったところだ。

現在の商売が上手く行っても、収入があるのは2か月先であり、今後の生活費も考えれば無駄遣いは出来ない。王国に長期滞在した場合に備えて帰りの船賃も確保する必要があり、捜索に使える資金を捻出できなくはないが、今後の商売には差し支える可能性がある。

「少し、考える時間を頂いても？」

「構いません。

ただし、捜索は時間が経てば発つほど難しくなる事をお忘れなく」

アイタナの言葉に、優斗はすぐに発ちあがり、この場を立ち去る事が出来なくなる。

体は今すぐにでもフレイを探すべきだと主張し、立ち上がろうとしているのだが、頭のどこか冷静な部分が、闇雲に探しても無駄だ、と告げている。

迷うだけ時間が無駄になって行く。

時間をかけてそれに気づいた優斗は、己の事など、そしてお金の事など二の次だと、今必要な事だけを見て、どうすべきかを考える。

現在、最も憂慮すべき点。それはフレイが何か事故や問題に巻き込まれている可能性があり、助けを必要としているかもしれないと言う事だ。

「アイタナさん、フレイの捜索をお願いしてもかまいませんか？」

「もちろんです。奴隷の方はどうされますか？」

「今は1秒でも早く探しに行きたい。

ですので、その話は後で構いませんか？」

優斗の提案に、アイタナは彼の評価を少しだけ上方修正する。

切羽詰まった状況で、良い提案とその対となる二択を示されて、それ以外の答えを出すと言うのは、アイタナにとって予想外の展開

だった。ただ自己中心的で我儘なだけだと言えばそれまでだが、思考を誘導された先で、すぐさまそれが出来ると言う事だけでも十分に評価する程度には、優斗の評価が低かったとも言える。

「では、請求は後でさせて頂きますね」
「そうして頂けると助かります」
何の請求であるのか、額はどの程度なのかと言う事にお互い触れる事は無い。

奴隷の売買に関する事であったならば、その時に決まるので問題はない。
捜索の話であれば、捜索に普通にかかるであろう請求額でも、キャリー商会にとっては十分な利益となる。

それは、現在契約を交わしている相手に無茶な要求はしないと、お互いに判っているからこその曖昧な言葉による約束だった。

「何かあったら宿へ行けばよろしいですか？」
「はい。宿の人間に伝言をお願いします」
「判りました。すぐにでも手配させて頂きます」
「よろしくお願いします」
立ち上がり、頭を下げると優斗は退室し、商会の建物を飛び出す。

一日中フレイを探し続けた優斗は、灯りの灯されたキャリー商会の一角で報告を聞き終え、宿へと向かっていた。

結局、フレイが見つかる事はなく、手がかりもあまり見つからなかった。
アイタナ曰く、顔を隠していても徒歩で出たのならば目撃証言が

見つかる可能性もあるが、乗合馬車で街を出た場合、御者が戻ってくるまで事実確認をする事が難しい上、彼らが以前の客を覚えている可能性はあまり高くないだろうと言う事だった。目立つ客ならば別だが、逃走中に目立つ事をするはずがない。

そして街中に潜伏しているのであれば協力者がいる可能性が高い。それは優斗から逃げ出す手引きをしていると言う事であり、フレイは優斗から本気で逃げ出したいと以前から、少なくともこの街に来てから計画していた事になる。

遠まわしに、これ以上探しても見つかる可能性が低い、と告げるアイタナの言葉の中で優斗にとって重要だった部分は、捕まえた場合の処置についてだった。

奴隷に戻したいのであれば、優斗のお金を持って出て行った事を言及し、罪に問われると脅した上で、あれは貸しただけであり、返せないのであればその身で、と奴隷身分に戻すのが良いと提案された。

それを聞き、逃げるフレイを追う理由が、自分にあるのだろうかと優斗は自問自答する。優斗はフレイが自由になる為に奴隷解放を行った。故に逃げ出すのも自由であり、自分の隣に侍る事を強制すると言う事は、間違っているのではないか。

ならば優斗がすべき事は、捜索などではなく、フレイの判断を受け入れる事なのではないか。

そう考えた結果、事故や事件に巻き込まれている可能性の方を重点的に調べ、強制的に呼び戻す必要はないのでもし見つかったのであれば、現在どこで何をしているのかだけを調べて欲しいと告げた優斗に、アイタナは憐れむような視線で宿で休むように告げ、今に至る。

「あ」
宿に戻り、部屋に入ると、そこにはシャオジーの姿があった。

そして優斗は、今日一日、自分が食事を摂っていない事に気付く。宿に戻っても女将に伝言が無いか聞いてすぐ飛び出していた為、部屋にも戻っておらず、当然ながらシャオジーに食事を届けてもいない。

『おかえりなさい』
『あー、ごめん』
『何が、ですか？』
それを本気で口にしているのか、気遣いから出た言葉なのか、優斗には判らない。

一日中歩き回り、疲れ切っていた優斗は、それを言葉通りに受け取ると、急いで階下で食事を受け取り、シャオジーと共に食べ始める。

『もう用事は良いんですか？』
『あー、うん。もうちょっとかな』
『そうですか。お仕事頑張ってください』

そう言って食事を続けるシャオジーを眺めながら、優斗は2つの事を考えていた。

1つは、王国へ行かなければならないと言う事。
シャオジーを送ると約束した件はもちろん、キャリー商会との契約を反故にすれば、商人としての再起が不可能になる。解約するにも、違約金として荷馬車を持っていかれてはやはり行商が続けられ

ず、商会からの信用を失えば2か月後の取引の為の資金借りられる可能性も低くなり、高確率で路頭に迷う事になる。

もう1つは、奴隷の購入を勧められた事。

シャオジーの身体は順調に回復しており、元気になっているとは言え、まだ療養中の身だ。フレイが居ない今、優斗が不在の間に彼女の面倒を見る女手は、あるに越した事はない。結局奴隷を買う事になるのであれば、早く話を進めるべきかもしれない。

考え事をしながらも食事を平らげた優斗は、今さらながらある事に気付く。

『シャオジーはなんでこっちの部屋に?』

『優斗さんの帰りを待ってました』

その答えに、優斗は嬉しさと罪悪感がこみ上げる。

フレイに逃げられた優斗にとって、自分を必要としてくれる言葉は普段以上に甘く響く。それに彼女の事を忘れ、食事すら届けなかったと言う後ろめたさが相まって、目の前の少女に縋りたい衝動に駆られる。

『それで、その。優斗さん』

『何?』

『今日は一緒の部屋で寝てもいいですか?』

予想外の言葉に、優斗は返答に詰まる。

膝に置かれた手は、良く見れば小刻みに震えている。俯き、上目使いになった表情からは怯えの色も見える。

そんなシャオジーの仕草に、優斗は自分の行動が彼女を不安にさせたのだと、反省する。

捨てられるかもしれない。それはこの異国の地で優斗以外に頼る者がないシャオジーにとって、これ以上ない恐怖だ。

『それはダメ』

『そう、ですか』

しゅんとするシャオジーに、優斗の心がちくりと痛む。

フレイが居なくなり、落ち込んでいた優斗は、俺もそれどころじゃないんだけどなぁ、と苦笑しながら、シャオジーの頭を撫でる。

『ひぇ？』

『ちゃんと自分の部屋で寝て、出発に備えるように』

『あ……はい！』

安堵した、そして嬉しそうな表情のシャオジーに部屋に戻るように促すと、優斗は食器を片づけてベッドに横になる。

疲れからすぐに睡魔に襲われながらも、眠りにつくまでの短い間に、優斗はこれからの事を考えていた。

もし、王国への出発日までにフレイが見つからなかったら、どうすべきなのだろうか、と。

エゴと想いの境界（後書き）

フレイさんが行方不明になる話でした。

優斗に拾われ、恩を受け、共に過ごしてきた彼女は今、どこで何を考えているのでしょうか。

水繰る妖精の欠片

出発の日になっても、フレイは帰ってこなかった。

キャリー商会による調査でも彼女の足取りは捕まえる事は出来ず、何件か発生していた事故の調査も、結果は芳しくない。最近、馬車の行き来の増加に従って事故件数も増えている為、全てを調査出来ているのかは不明だが、ほぼ全ての被害者と加害者を確認する事が出来た。しかし、その中にフレイの名前も、似た姿の女性も存在しなかった。

その結果を受け、玄人が最高の手際で、証拠も残さず誘拐して行った可能性はあるが、状況からして自主的に逃げ出した線が濃厚だ、と言うのがアイタナの言葉だ。

2日間悩みぬき、最後の一押しとしてアイタナの報告を聞いた優斗は、捜索の打ち切りを決断する。

もしフレイの気が変わって優斗の行方を尋ねてきた場合に備えてキャリー商会に金貨を1枚預け、捜索にかかった費用を支払うと、アイタナは訝しげな表情をしていた。それが奴隷を購入しなかった為なのか、フレイを探す事を諦めた事に由来するのか、優斗にはわからなかった。

優斗は朝早くに宿を引き払うと、シャオジーを連れてキャリー商会へと向かい、荷馬車と共に大半の野宿用の荷物やフレイの着替え等の持っていかない物をキャリー商会に預けると、アイタナの案内で自分たちが乗船する船へと向かう。

「こちらになります」

「結構、大きな船ですね」
「はい。優斗様の荷物は既に船室へと運ばせて頂きました」
優斗の荷物と言うのは、主に食糧と飲み物、着替えや防寒着だ。

人を呼びに行くとアイタナがその場を離れると、優斗は隣のシャオジーへと視線を向ける。
髪を隠すためにフードを目深にかぶったシャオジーは、視線を察知して優斗を見上げると、にこりと微笑む。フレイ不在の旅を不安に思いながらも、守るべき存在を確認した優斗は、その心の内を悟られぬ様、同じ様に笑い返す。

「お待たせしました。優斗様、こちらがこの船の船長です。船長、我が商会の代理人の優斗様です」
「よろしくお願いします」
「あぁ」
ぶっきらぼうな返答が、優斗の想像する船長像と少しだけ被り、苦笑する。

そんな優斗の態度を不真面目だと感じた船長は、少しむっとした表情で鼻を鳴らす。

「ふんっ。
先に言っとくが、船の上で俺の指示に従わないなら海に放り出すぞ」
「せ、船長！
すいません、優斗様」

慌てるアイタナの姿と、頑固な船乗り、と言うイメージにぴったりと合う船長の言動に、優斗は下を向いて笑いを堪える。
しかし、このままでは自分の印象が悪化する一方だと判断した優

斗は、改めて挨拶をする際に酒の小樽でも差し入れようと考えながら、出来るだけ真剣な表情を取り繕う。

「肝に銘じておきます」
「殊勝なのが口だけじゃなきゃーいいがな」
「気を付けます」
営業スマイルを浮かべる優斗。

その後、出港の準備があると船長が船に戻ると、アイタナが申し訳なさそうに言い繕い、優斗がそれを笑って流すと言う一幕を終えると、優斗は船長がよこしたと言う若い船乗りに案内され、宛がわれた船室へと向かう。その際に優斗は、アイタナに二か月後の資金貸し出しの件について念を押す事も忘れない。

船室に到着すると、若い船乗りは扉を指差して「あそこだ」と告げると、優斗がお礼を告げる暇も無く姿を消した。
きっと出港準備で忙しいのだろうと好意的に解釈した優斗は、扉を開け、シャオジーと共に船室へと入る。

『荷物が一杯です』
『だね。幾らか船倉に預けられないかな』
船室に備え付けられているのは、ベッドが2つのみ。

しかし天井が低く、一般的な宿と比べれば手狭であり、現在は寝るスペース以外は荷物置き場になっている状態だ。荷物置き場も手狭で、荷物を退けたとしても通路程度のスペースしか確保出来そうにない。
しかもベッドは小さめで、シャオジーなら問題無く手足が伸ばせるが、優斗は出来そうにない。

『出港までに荷物を整理しようか』
『お手伝いしますね』
そう言ってシャオジーは、フード付きの外套を脱ぎ去ると畳んでベッドの上へと置く。

今日のシャオジーは後ろで括っただけと言うシンプルな髪形をしている。括ったのはもちろん優斗だ。

使用頻度の低い物をまとめてベッドの下へと仕舞い込みながら、隣のベッドで同じように荷物をまとめ直しているシャオジーを見て、優斗はようやく同室で問題無いか問うていない事に気付く。その質問を口にしようとして、否と返されても対処できない事に気付く。正確に言えば頼む事だけなら出来なくはないが、いきなり我儘を言って船長の印象を悪くするのは得策ではない。

考え事をしながらも荷物の整理は進んでいく。シャオジーは優斗が予想していたよりも手際よく荷物を分別しており、負けじと優斗も手を動かす。

『あ、出港する見たいです』
『お、ホントだ』
乗客に何も告げず出港するのはどうなんだろうと思いながら、優斗は1つしかない窓から離れて行く陸地を眺める。

ふと、優斗は隣で同じ様に外を見つめているシャオジーの目が不規則に揺れている事に気付く。良く見れば、指先も少し震えている。
シャオジーが最近、船で事故にあった事を失念していた事に気付いた優斗は、咄嗟に心の中で自分自身の事で手一杯だったからと言い訳してしまい、その不甲斐なさに自己嫌悪に陥りながらも、彼女の気を少しでも逸らそうと、頭に手をやる。

『何ですか？』
『何でもない』
『そうですか』
シャオジーの視線が優斗に向かい、少しだけ揺れが治まった事を確認すると、優斗は果汁を入れた皮袋を取り出す。

それをシャオジーに手渡すと、自分は水の入った皮袋を手に持ち、一口だけ口に含む。シャオジーもそれに続き、少しだけ口を付けると皮袋を優斗に返そうと、差し出す。

『持っていていいよ』
『えっと。いいんですか？』
『むしろ腐る前に全部飲んで』
水を先ほどよりも多めに口に含み、喉を潤しながら優斗は整理した荷物の中身を思い出す。

優斗は食糧として保存食を主に約１５日分準備した。到着が平均で１０日だと聞いているが、実際には航海の状況を確認しつつ食べる量を調整する予定だ。
次に飲み物として、大量の葡萄酒と少しの水と果汁。後者が少量なのはそれらが腐る物であり、腐った物を口にすると腹を下す可能性があると言う事だ。しかし、１２歳の子供に酒を飲ませる訳にはいかない。

『シャオジー』
『はい、なんでしょう』
『少し出てくるけど、どうする？』
『どこへ行くんですか？』
その質問に、優斗は少しだけ間を置き、口にすべき内容とすべき

でない内容を取捨選択する。

その間を不自然にしない為に、優斗は先ほど荷物から避けて置いた小樽に手を置くと、人差し指でその上部をこんこんと叩く。

『船長さんに挨拶とお願いをしに』

『どんなお願いですか？』

『航海の間、水を分けて欲しいって』

優斗は安易に、船乗り達が飲む少量の水は煮沸するなどして確保しているはずだと考えていた。

しかし、実際には船上、しかもそれなりに長居航海中にそんな無駄な事が出来る訳がない。シャオジーの飲み物を確保する為と言えば、弱い酒でも飲ませとけ、と言われるのが関の山だ。

優斗のそんな失態は、シャオジーの予想外の言葉により、気づかれる事なく過ぎ去る事となる。

『水でしたら私が』

『へ？』

『海から水を汲んで貰えれば大丈夫です。あ、いらない、目の細かい布も欲しいです』

『いやいや、海水はそんなくらいじゃ飲めないよ』

『えっと、説明するより見せた方が早いと思うので』

お願いできませんか、と小首をかしげて問われると、優斗は頷くしかなかった。

優斗は準備をしておくと言うシャオジーを残して甲板に向かうと、暇そうにしている船員に声をかける。

「あの、海水を汲みたいんですけど」

「あ？　じゃあ、これ使え」
船員が足元にあったロープ付きのバケツを蹴り寄越す。

これまた海の男らしい、雑な行動だと妙な感心をしながら、優斗は礼を言ってバケツを海に放り込み、少量の海水を汲む。
それを持参した小ぶりな鍋に移すと、船員に再度礼を告げ、船室へと戻る。

『おかえりなさい』
『ただいま。これでいい？』
『はい』
優斗が鍋を手渡すと、シャオジーがそれをゆるく布をかけた杯へと注いでいく。1杯終えるとまた次の杯に同じ様に注ぐ。

布を通した事で不純物が減り、ほぼ海水だけが入った杯をシャオジーが持ち上げた時、優斗はそれを口にしないかハラハラしながらも黙って見つめる。

そして次の瞬間、優斗の目の前で驚くべき事象が発生する。

『はい、出来ました』
『いや、それ、あ、そうか』
『はい。これが私のギフトです』
呼び名は連邦でも同じなんだな、と思いながら、優斗は今起こった現象を心の中で反芻する。

シャオジーが海水の入った杯を傾け、それを自分の手の上に流し込んだ。すると、水がその下に配置してあった鍋に向かって落ちて行く。それだけならば普通の光景だが、シャオジーの手の中に白い塊――優斗には結晶化した塩に見える物――が残された。

『塩を取り出すギフト？』
『いえ。水を動かすギフトです』
水を動かす。すなわち、特定の物質を移動させるギフトだと言う事だ。

優斗はそれを聞き、初めて行った街で会った服飾店の女性店員を思い出す。
紙の上にある炭だけを動かし、文字と図を完成させた女性。シャオジーも同じ様に、海水から水だけを動かしたのだろうか、と優斗は考える。

『塩も食べられますよ』
『あぁ、だから先に布を』
『その通りです』
海水に含まれるゴミなどを取り除いておけば、塩が綺麗な状態で取り出される。

そして水分を操作出来るのであれば、色々と応用が効きそうだと考えた優斗は、ある事に気付く。

『もしかして、服とか乾かせる？』
『はい。でも、あんまりやると眠くなります』
やはりある程度の代償は必要なのだな、と考えた優斗は、そうは見えなかったフレイを思い出してしまい、その思考を振り切る様に首を左右に振る。

優斗は思考を切り替え、残りの海水も真水に変えているシャオジーの姿を見つめながら、先ほど気づいた事に思いを馳せる。

船で漂流した際、シャオジーだけが生き残れた理由。
それは海水から水と塩を別々に確保出来た事で飢えと乾きを回避出来た事と、濡れた服を乾かせる事で寒さをある程度緩和出来た事にあるのではないか、と。

とは言え、それを直接確認する訳にもいかず、優斗は話題をそのまま続行して行く。

『他には何が出来るの？』
『水の流れを少しだけ変えられます』
『便利そうだ。ちなみに、人間から水分を吸ったりは？』
『水分、ですか？』
不思議そうな反応に、優斗は一瞬だけ考えてから自分の口を指差す。

そして少しだけ口元を開くと、舌先を露出させ、シャオジーが理解した様な表情を浮かべるとすぐにひっこめる。

『多分、出来ると思います』
『じゃあ、血とかは？』
『血は血ですよね？』
『やった事はない？』
『無いですけど、出来ないと思います』
出来る事がなんとなく、本能的に理解出来るギフトにおいて、その感覚は重要だ。

優斗はそれを知らないが、あまり深くつっこまない方が良いと判断した。
詳しい原理は不明だが、せめて発現する事象の情報だけでも整理しておこうと、優斗は聞いた内容とそこから推測した部分を再度頭

に浮かべる。

『水だけを動かすギフトで、海水とか泥水から綺麗な水を出して飲める。あと、乾かすのにも使える、でありてる？』

『はい。乾かす時は手で全体を伸ばす感じで、水を集めるんです。こうやって』

シャオジーはそう言って、シーツの皺を伸ばす仕草で実演する。

能力の概要を把握した優斗に、もう一点納得する点が生まれる。

この世界で塩が他の調味料より安い理由。それは、海水からすぐに塩が調達できるからなのだろう。

優斗の常識では、塩と言えばほぼ岩塩であり、海水から塩を取り出す為には塩田で長い時間をかけて結晶化するか、何かしらの機械が必要になる。しかしこちらでは、ギフト持ちが居れば一定の生産が確保出来るのだ。ギフトの詳しい希少度は不明だが、それなりの人数、水を操作するギフトを持つ者がいると予想される。

『まぁ、とりあえず水に困る事は無い訳だ』

『はい』

『塩は食事にでも使おうか』

『はい』

その後、上機嫌なシャオジーの提案により今日、明日分の水を確保する事になった優斗は、船員に訝しがられながらもう一度甲板に足を運び、海水を汲んだ。

海水の真水化を終えたシャオジーは、ギフトの連続使用や朝早くからの準備に重い荷物を持っての移動、そしてその片付けによる疲れにより、ベッドの上で船をこぎ始める。

そんな光景を微笑ましいと感じながら、自分が居ては眠りにくいかもしれないと考えた優斗は、葡萄酒の入った小樽を抱えて立ち上がる。

『船長さんに挨拶して来るから、待っててて』
『は、はい！』
『眠かったら寝てていいよ』
声をかけられて驚くシャオジーを置いて、優斗は部屋を出る。

途中で会った船員に船長の居場所を聞き、今は部屋で休んでいる事を知った優斗は、面倒臭そうな船員から船長室の場所を聞き出してそちらへと向かうと、部屋の扉を叩く。

「ぎょ、いや。商人の優斗です」
「おう、入れ」
特に指摘された訳ではないが、キャリー商会の代理人として便乗している以上、行商人と名乗るのはマズのではないだろうか。

そんな風に考えて言い直した優斗は、そこそこ重い小樽を運んでいるせいで塞がっている両手のうち、右だけをなんとか解放して扉を開ける。

「何かようか、客人」
「船長さんに改めて挨拶をと思いまして。先ほどは慌ただしかったですので」
「律儀なこった。で、それはなんだ？」
小樽の存在を忌々しそうに見る船長に、優斗は少し不思議そうな表情を浮かべながら部屋へと入る。

優斗は、自分の姿から要件が察せそうなものなのに、と考えなが

ら、狭い、それでも優斗とシャオジーの部屋よりも広い船長室の机に小樽を置く。船長は相変わらずの嫌そうな表情を優斗に向けると、崩して座っていた姿勢から足を机に乗せる事で更に横柄な格好となる。

「１０日間、お世話になります。これ、よければ召し上がってください」

「……は？」

「差し入れです。そんなに良い物ではありませんが、薄めたりしていない、中々いける葡萄酒です」

唖然とする船長と、反応の意味が判らず営業スマイルのまま固まる優斗。

その均衡を破ったのは船長だ。

くつくつと笑い始めたかと思えば、声を張り上げて爆笑しており、優斗の困惑は深まるばかりだ。

「あー、なんつーか、お前、珍しい商人だな」

「そうですか？」

「船乗りなんてしょせん、荒くれ者の集まりだからな。商人は近づかないか、そうでなきゃ金を搾り取りに来るくらいだ」

それは地位的な問題だろうか、と優斗は考える。

商人は曲がりなりにも特権階級扱いだ。船便で荷物を出せる商人となれば金を持っている中規模でも大きな部類に入る商会以上に限定され、自動的に同乗者もそこに連なる人物ばかりになる。

しかもこの船は王国行き。信用の出来る、すなわち商会に深く関わっている人物が任される可能性が高く、そうなれば居丈高である事にも頷ける。そう言った意味では、行商人の優斗がここに居るのは場違いと言うか、例外と言う事になる。

「単なる賄賂かもしれませんよ？」
「俺らに取り入って、なんか良い事あんのか？」
「……今後、船が手配し易くなる、とか」
「んなもん、そん時にわたしゃいいだろう。貰って、飲んだらんなこたぁ忘れるっつーの」
段々と口が悪くなる船長に、あれでも丁寧にしゃべっていたんだな、と思わず優斗の思考が関係の無い事に方向へと逸れる。

まだ笑い続けている船長の対応に困った優斗は、樽の詮を抜き、船長へと差し出す。
漂う酒の香りに誘われるように船長の顔が近づき、まだ笑みを形作っている顔でにやりと笑うと、手近にあった杯を2つ手に取り、その片方を優斗に差し出す。

「今日は気分が良い。客人、一杯だけどうだ？」
「是非」
「がはは。男はそうでなきゃな！」
また笑う船長の杯に、優斗は樽を持ち上げて葡萄酒を満たすと、自分の杯にも同じように注ぐ。

中身が零れるほどの豪快な乾杯をしてから飲んだ葡萄酒を、ひさしぶりに美味しいと感じながら、優斗は杯を大きく傾けて飲み干す。

「無事に着いたらまた持ってきますので、海に投げ出したりしないで下さいね」
「そりゃ、ますます無事にサリスに送り届けにゃならんな」
サリス、とは目的地である王国の港町の名前だ。

カクスから言えば最寄りの港ではないのだが、王国の首都が最も

近い港町である為、公国から出るほとんどの船がそこへと向かう。

「俺ぁ波が穏やかな間に寝るんでな。悪いが続きはまたな」
「そうでしたか。すいません、お邪魔して」
「気にすんな。良い寝酒も貰ったしな」
「はは。では、失礼しますね」
「あぁ、また後でな」
予想外に気さくな船長の性格に面食らいながら、優斗は船長室を後にする。

そのまま自分達に宛がわれた船室に戻ると、シャオジーは既に眠っていた。
起こしてしまうのも可愛そうだと思った優斗は、貰ったまま碌に目を通していない資料を取り出すと、船室を出て適当な場所を探そうと歩き回る。

船室から上へと向かい、甲板へと出るまでの間にスペースを見つけられなかった優斗は、風が弱いから大丈夫だろうと判断し、先ほど海水を汲む道具を貸してくれた船員に挨拶をすると、甲板の風の当たりにくい場所を選び、木箱の上に腰かける。

資料の読んでいない部分に目を通す為、既読の部分をめくって行く。
読み進め、最後に商品の目録へとたどり着く。その中に名前の様なモノを幾つか発見してどきりとしたが、茶葉の名称や産地だと記述されている物を幾つか見つけ、そう言う事からと納得する。

全て目を通し終え、幾つかの商品に書かれていた、商品を確認、や、商品に説明あり、の部分を確認しておこうと、優斗は船倉へと向かう。

船倉は優斗達の船室よりも下の階層にあり、下へ降りるたびに薄暗くなっていく。その薄闇に少しだけ恐怖心を煽られた優斗が、許可なく入れるモノなのかと気づいた時、小さくない物音が廊下まで聞こえ、続いて男の怒声が響く。

「ちっ。くそっ、静かにしやがれ」
「あーあ。だから止めとけって言ったのに」
「うっせー。おら、奴隷ども。俺に怪我させたらどうなるか、わかってんだろな」
見つかるとマズイ。直感的にそう判断した優斗は、音を立てない様に気を付けながら壁際に張り付く。

無意識に状況を確認する為に声が聞き取りやすいく、見つかり辛い位置に移動した優斗は、息を殺してその場に潜む。

「そっちの男、ちゃんと押さえとけよ！」
「へいへい。いくら溜まってるからって、積荷に手ぇ出すのはどうかと思うぞ、俺は」
「てめぇも乗り気だっただろーが」
「そりゃ、こんなそそる女を抱ける機会はそう無いからな」
「なら、黙って協力しろ！」
「見つかっても責任はお前持ちだって、忘れんな？　自分が騙されたからって俺まで騙すなよ」
「わかってるよ。クソ。あの女、今度見かけたらただじゃおかねぇ」

男達の会話から、優斗は状況をこう予想した。
まず、航海中の船には基本的に女がいない。だからこそ、陸に上がったら娼館などで女を買うのだろう。だが、あの男は買い損ねたか、買った後に何もできずお金だけ持ち逃げでもされたのだろう。
そしてその鬱憤を積荷で晴らそうとしている。

「おい、てめぇ。さっさと股開け！」
「嫌がる女を無理やり、か。悪くねぇな」
「うっせーぞ」
「わりぃわりぃ。リーチェちゃん、だっけ？　ホント良い身体してっからさ、つい、な」
男の下卑た笑い声と共に聞こえてきた名前に、優斗は覚えがあった。

先ほど確認した商品目録。その最終ページにあった茶葉らしき銘柄の一覧の末尾にあった名前だ。正確には末尾はチェーゼとなっており、その上にリーチェと書かれていたのだと思い出した優斗は、現状に関して2つの疑問を抱いた。

1つは、何故自分が預かった荷物に奴隷が混ざっているのかと言う事。
もう1つは、この状況、すなわち預かった積荷が荒らされている状況で、自分はどう動くべきなのかと言う事。

「へへ。確かに良い身体してっよな」
「だろ。だからさっさと済ませて、俺に変われ」
「わかってるよ。誰か来る前にやり終えねぇとだしな」
体が床で擦れる音と共に、小さく女の声が漏れ聞こえる。

そんな中、優斗は行動を起こす事なく思考を続ける。
前者の疑問に関しては、実際的な問題点は存在しない。何故なら、奴隷売買に直接関わりたくないと言うのは優斗の心情であり、奴隷商であるキャリー商会にとっては通常業務でしかない。強いて言うならば、フレイ探しに没頭し、積荷と目録の確認を怠った優斗の責任だ。

そして後者に関しては、積荷が最も高く売れる為に最大限の努力をしなければならない、と言う契約書の条文を思い出す事で、成すべき事を把握する。しかし、それが実行できるのか、行動力すると言うハードルの他にも、弱い優斗が海の男2人を相手にどうにかできるのか、と言う問題がある。

「とりあえず、全部脱がしちまうか。こんな汚ねぇ服、ちっとくらい汚してもわかんねーとは思うが」

「おーおー、やれやれ」

迷っている間にも、状況はどんどんと進んでいく。

腕力で叶う訳は無く、助けを呼ぼうにも周りは彼らの仲間である船員しかいない。大声を出したとしても、船員側の落ち度を認める可能性以上に、優斗を暴力で脅して口止めする可能性がある。

だから、逃げると言う選択肢も視野に入れるべきだ。そう考えながら、優斗は壁から背を離し、一歩踏み出した。

水繰る妖精の欠片（後書き）

王国に向けて出港する話でした。

二度目となるフレイさん不在の旅ですが、果たしてこの先どうなる事か。

積荷達の来歴

壁から離れた優斗は、高まった緊張感と共に生唾を飲み下しながら、扉の前へと立つ。

優斗はまず左右を念入りに見渡して、逃げ道を確認する。そして危ないと感じたら即逃げるのだと改めて決意すると、これは商品を守る為の行動であり、商人としてしなければならない事でもあり、故に自分は正しい事をしようとしているのだと論理武装を施してから隙間の空いた扉をコツコツと叩き、その勢いで開ける。

「誰だ!?」

「あーあ、見つかっちまった」

「くそっ。いや、見ない顔だ。密航者じゃないか?」

「どうも初めまして、今回の船の出資者代理で、商人の優斗と申します」

優斗の自己紹介に、船員2人が顔を見合わせる。

その隙に優斗は船倉の中を見える範囲で見回し、状況把握に努める。

まず、若い船員が裸の女の子を押し倒している。船員は女の子の股を無理やり開く様に足の間に膝を入れているが、ズボンはまだ履いたままだ。もう1人の少し年上らしい船員は自分よりも大きな男の前に立ちふさがっている。

優斗は目を凝らし、女の子と大男の姿を捉え、そのどちらも肌が黒く、首には見慣れた首輪が付けられている事を確認する。そこに鑑札は付いていない。

「おうおう坊ちゃん、悪いが取り込み中でね。何も見なかった事にして部屋に帰んな」
「おい、さすがにヤバいだろ」
「ちょっと殴って脅しゃ平気だろ」
女の子の上から退いた船員が、ゆっくりと優斗に向かって歩いてくる。

その光景に優斗は恐怖を覚え、逃げ出したくなる。だが、いざとなると足は動かない。
逃走と言う選択肢を選び損ねた優斗の胸倉を、船員が掴みあげる。そして優斗の顔に浮かんだ営業スマイルを見て、船員は苛立たしく声を荒げる。

「黙って部屋で寝てろ。で、保護者にでも泣きついてろ」
「いや、そっちが保護者だったはずだぞ」
「え、マジでか？」
後ろから告げられた言葉に、若い船員から怒気が消え、代わりに驚愕が浮かぶ。

海路による交易で得られる利益が多い事は、船乗りで無くとも知っている。そんな大役を、子供にしか見えない優斗が任されている事は、驚くべき事だ。事実、若い船員は優斗の事を、正式な商人ではなく、弟子か見習いだと考えていた。

「だからやべーっつったろーが」
「あーいや、でも、脅せばイケるんじゃねぇ？」
「その状況で笑ってるヤツ相手にか？」
自然と浮かび続ける表情に助けられながら、優斗は会話に入る隙を探す。

すぐさま殴られる可能性が減ったおかげで幾分か冷静になった優斗は、同時に最も効果のありそうな言葉を探す為、必死に頭を巡らせる。

「お、そうだ。なら、お前も一緒にどうだ？」
「折角の申し出ですが、謹んで遠慮させて頂きます」
「んだと！」
「まぁ、落ち着け。俺に任せてみろ」
年上の船員に宥められ、若い船員が不満そうにしながらも優斗から手を離す。

年上の船員は裸の女の子を指差し、口元を下卑た愉悦に歪めながら、優斗に向けて言葉を続ける。

「商人さんよ、こいつが今まで何処にいたか、知ってっか？」
「いえ、知りませんが」
「こいつは元々、盗賊だか野盗に飼われてたらしくてな。今さら1人2人ヤッた男が増えても、価値は大差ねぇんだよ」
飼われていた、と言う言葉を理解するのに少しだけ時間をかけながら、優斗は内容を正確に理解しようと、頭の中で反芻する。

「そーでなきゃ、さすがの俺でも止める。もし生娘なんて襲っちまったら、一発でバレちまうだろ？」
「確かに、それは」
「売値が変わらねぇなら、持ってる間に出来るだけ楽しんだ方がお得ってもんだ。違うか？」
「それはちょっと、マズいと言うか」
優斗の反応の悪さに、年上の船員の表情も険しい物になっていく。

そこでようやく、ナニかされても平気な奴隷を選んで乗せたのだ

ろうと理解する。そうでなければ、何らかの形で優斗に気を付ける様、注意が為されたはずだ。

しかし、当初の決意に反して、とっさに、それは目の前の女の子を見捨てて良い理由にならない、と判断した優斗は、営業スマイルを崩さないまま出来るだけ申し訳なさそうな表情を顔に張り付けると、頭の後ろをかいて言い訳する。

「品物に手を出したと知れたら、私の首が飛んでしまいます。人生をかけてまで、と言うのはちょっと。貴方も船長に知れたら、どうですか？」

「そりゃーやべーなぁ」

「だなぁ」

しみじみと納得する2人に、攻めるならここだと判断した優斗は、船倉の中へと一歩ずつ踏み出す。

船長と酒を飲み交わした事を告げれば大人しく退散してくれるだろうか。むしろ、口封じの為に何か行動に出るのでは。そんな風に思考をぐるぐると回しながらも、周りを観察する事は忘れない。

「今なら、見なかった事にしますので」

「だってよ、どうする？」

「うぅ、そうだなぁ」

一転、優位に立った事に、優斗は胸をなでおろす。

しかし、緊張を解くのが早すぎた優斗のそれは油断となり、致命的ともいえるミスを犯す事態となる。

「もちろん、今後は同じ様な事をしないと約束して頂ければ、ですが」

「まぁ、そーなるわな」

「言いたい事は判るけどな。なんか上から目線でムカつかね？」
「ガキに言われ放題なのが気に食わないってか。若いね。気持ちは判っけど止めとけ。後腐れるぞ」
「やっぱ殴っとくか？」
目の前で繰り広げられる物騒な相談に、優斗はまたも一瞬で形勢が逆転してしまった事を悟り、焦る。

もう謝罪して、何か賄賂でも送るしかないかと考えていた優斗は、先ほどからこちらを見ている男の奴隷が何かを訴えているのだと言う事に気づく。
薄暗い中、帝国人の黒い肌は目立たないが、彼の口が動いている事を確認した優斗は、年上の船員よりもかなり背の高い男奴隷の口元を、見上げる様に凝視する。

「何処見てんだ、おい」
「いや、その。その荷物は今、本来の所有者から委託され、暫定的に私が所有者と言う事になっているんでしたね」
「さっきからややこしい言葉ばっか使いやがって。馬鹿にしてんのか？　それとも、煙に巻こうってか」
「いえいえ。そうではなく」
やたらと絡んで来る若い方の船乗りの行動に、優斗は彼が本格的に脅しに入った雰囲気を感じて、ポケットの中の硬貨を探る。

それと同時に、男奴隷が何を言っているのか、その唇の形から理解出来ていた優斗は、その判断が果たして正しいのか迷いながら、しかし藁にも縋る思いでそれを口にする。

「今の持ち主としての命令します。２人を止めてください」
「何いってんだ、おい」
「やばっ、おい、逃げるぞ」

「だからなんだよ、って、うお」
優斗の言葉を待ちかねていたかの様に、瞬時に動き出していた男奴隷によって、若い船員は後ろ首を掴んで持ち上げられ、扉の方へと投げ捨てられる。

その光景に優斗が、すごい腕力だ、と感心している内にもう一方の船員は扉まで逃げており、そのまま逃げるかと思いきや若い船員を引きずっていった。

残された優斗は、見上げるほど大きな奴隷の男が、船室付近よりも低い天井が邪魔で首を少し曲げ気味に立っている事に気付き、苦笑する。
次いで押し倒されていた女の子へと視線を向けると、裸に剥かれ、押し倒され姿のまま虚空を見つめていた。当然、若い船員が割り開いた足は、広げたままで。

「と、とりあえず服を着て！」
「……はい」
一拍遅れて返事があり、更に一拍を空けてから女の子はのろのろと布きれと大差ない服を体に巻いていく。

優斗はその光景から目を逸らす事を忘れ、見つめてしまう。
女の子は特別美人でないどころか、普通を下回る程度の容姿でしかない。だが、船員たちが言っていた通り、必要な場所には脂肪が集中しており、その癖不要な場所には最低限しかついていない。そして優斗は少し離れた位置に居るにも関わらず、何か誘われるような良い香りを感じていた。薄暗いせいで視覚が制限されており、嗅覚が多少敏感になっている優斗は、それを意識しながらも、頭のどこか冷静な部分でそれを分析する。

フレイが技術で色と艶に緩急をつけて攻める技巧派だとすれば、目の前の女の子はそこに居るだけでそれを振りまく力押し。文字通り、色香の漂っている状態なのだ、と。

「アイツを抱きたいなら、そう命令すれば良いだろ」
「へ？」
優斗は声をかけられ、ようやく女の子の着替えを凝視すると言う失態を犯している事に気付き、慌てて目を逸らす。

逸らした視線を声をかけてきた男奴隷に向けると、彼の言葉の意図を探るべく、言葉を返す。

「チェーゼ、だっけ？」
「そうだ」
「意味がわからないんだけど」
「俺たちは奴隷で、お前は持ち主だ、って事だ」
無愛想に優斗を見下ろすチェーゼ。

彼は優斗からそう言った意図を読み取れない事を不思議に思いながら、煽るように言葉を続ける。

「具合が良いのは俺が保障するぞ」
「……それは実体験から？」
「もちろん」
見上げる優斗の視線が険しい物へと変わる。

奴隷は主人に害を為す事が出来ない。そして基本的に主人の命令なしに他人に害を為す事も禁止されている。奴隷相手でも同じだが、それは他人の所有物を害する行為の禁止に抵触するからだ。そこから優斗が導き出した答えは、盗賊達に飼われていた、すなわち誰の

所有でもない奴隷であった時の彼女相手ならばそれも可能なのでは、と言う推論だ。

「それは、同意なしに？」
「ドウイ？」
「無理やりだったのか？」
「もちろんだ」
その言葉に偽りは無いと感じた優斗の視線が更に険しくなり、少しの侮蔑が混ざる。

奴隷の売買に抵抗のある優斗だが、この男であれば売る事の罪悪感も少しは薄れそうだと考えながら、服を着終わってぼうっとしてる女奴隷へと視線を向ける。

こちらに来てから優斗が出会った女性、その中でも特に市井の人達は基本的に肌の露出が少ない恰好をしていた。しかし目の前の女の子は、布きれ一枚と言う露出度が高く、煽情的な格好だ。

「俺は優斗。リーチャ、でよかったかな？」
リーチャは上目使いに優斗を見上げると、その様子を伺いながら首肯する。

首肯を終え、再度見上げる視線に晒された時、優斗は自分の心臓が大きく拍動した事に、動揺する。
先ほどよりも大きく首が曲げられ、優斗はリーチャの無防備な胸元を見下ろす事が出来た。一瞬だけ凝視してしまった優斗が慌てて一歩離れると、今度は短い裾から見える太ももが見え、逃げ場を求める様に視線を上向ける。それよりも更に短いミニスカートを見た事のある優斗だが、下に何もはいていない事を知っている為、緊張と様々な意味での危険度は比ではない。

「あー、とりあえず前の人から何か受け取って無い？　もしくは伝言」

優斗が自分の気を逸らす為に、元々の目的を進める事にする。

商品リストにあった、詳しくは現品参照と言う文字。それはチェーゼやリーチャの欄にも書かれていた。

「これだ」

「ん、あぁ。ども」

ひさしぶりで素でしゃべれるな、と思いながら優斗はチェーゼからメモを受け取る。

しかし、夜目の効かない優斗にとって、薄暗い船倉で文字を読む事は難しい。出来なくはないのだが、無理をするよりも部屋に戻ってから確認すべきだろうと判断した優斗は、それをポケットに仕舞うと商品目録を開き、品物の確認を始める。

放置された奴隷2人の視線に晒されながら、優斗は目を凝らして目録と商品を確認して行く。

荷物は山ほどあり、時間もまだまだある事から今すぐに全てを確認する必要は無い為、優斗は焦る事なく、別の事を考えながら作業を進めていく。

別の事。すなわち2人の奴隷をどう扱うべきかと言う問題。

一番面倒が無いのは、売る寸前まで関わらない事。この場合でも、優斗は値段よりも待遇の良さそうな売り先を探す、くらいはしてしまうだろう。

「ああいう事はよくある事？」

優斗の問いに答える者はいない。

常にフレイが侍っていた頃であれば、間違いなく答えかヒントが帰って来ていただろう事を思い、優斗は少し気分が落ち込む。

目録2枚分だけ確認を終えた優斗は、先ほど考えた今後の事を頭に思い浮かべながら、奴隷2人へと振りかえる。

チェーゼの警戒した、リーチャの濡れた視線を真正面から受けながら、優斗は契約の条文を思い返す。

契約者は商品を出来る限り高価に売る努力をする事、と言う条文を。

「とりあえず、ついて来て」

「はい」

リーチャの返事を受け、優斗は船倉の扉を潜り、外へ出る。

そのまま少し歩くと、優斗は2人が着いて来ているのか確認する為に振り返る。そして少し離れたところを歩くリーチャを見つけると、彼女が追い付いて来るまでの間、その場に立ちどまる。

「チェーゼは？」

「え？」

リーチェの反応に、優斗は自分のミスに気付く。

船倉に押し込まれていた奴隷を部屋に連れ込む。その行動から、部屋で何かさせる、もしくはする事が目的であると連想するのは普通の事だ。だとすればリーチェ、すなわち女だけ付いて来る様に命じたのだと勘違いしても仕方がない。

優斗はため息を吐くと船倉の方へと戻り、中に向けて声をかける。

「チェーゼも」
「……俺もか？」
それは薄闇で表情を読み取る事が出来なかった優斗にも、嫌そうな顔をしている事が判る声色だった。

反抗的だと殴られる可能性がありそうなチェーゼの態度に、優斗が思った事は、もしかしてバイだと勘違いされているのでは、と言う事だった。
誤解されていても後で解けばいい。そう考えて歩き出した優斗は、無言で2人の奴隷を引き連れたまま部屋へと向かう。

時間をかけず客室へと到着し、扉に手をかけた優斗は、ある事を思い出す。中ではシャオジーが眠っているのだ。

「あー、どうしよ」
優斗の独り言に答える者はいない。

とりあえず中を確認しようと、優斗が手をかけた瞬間、扉に何かがぶつかった音が聞こえる。

『どちらさまですか』
『あ、起きてたんだ』
『優斗さんでしたか。どうぞ』
開いた扉の先には、不安そうな表情のシャオジーが立っていた。

船の上でいなくなる訳がないのに、と思いながら、同時に、そう言う理屈の問題じゃないのかな、と思い直した優斗は、笑みを浮かべると、シャオジーの頭に手を置き、撫でる。

『ちょっと用事で出てた。ごめん』
『そうでしたか。出来れば私も連れて行って欲しかったです』
『ごめん、良く寝てたから』
『何かあったら、怖いです』
俯き気味に表情を隠したシャオジーから発せられた言葉を、優斗は誤解しながら納得した。

優斗は、シャオジーが遭ったであろう、海難事故を連想した。
対してシャオジーの真意は、粗野な船員達の中に1人取り残された不安に関してだ。

『それより、そちらの方達は？』
『あー、なんていうか。少し身なりを整えて貰おうかと』
シャオジーは子供である、と優斗は判断している。優斗はそんな彼女の情操教育上、奴隷と言うモノにどう言った説明を加えるべきなのかと、悩む。

優斗が彼らを連れ出した理由は、その言葉通りに身なりを整えさせる事も含まれる。見栄えがよくなれば高く売れる可能性も上がる為、これも仕事の内だと優斗は自分に言い訳した。それ以外にも、メモ以外の商品情報を得る為、話を聞くと言う目的も存在する。

『もしかして、商品の手入れですか』
『そんな感じ』
『なるほど』
言いよどむ優斗に先んじたシャオジーは、部屋の中へと戻って行く。

優斗は理解不能な会話が繰り広げられている様に唖然とする2人を横目で確認しながら、リーチャだけを部屋の中へと促す。

部屋の中ではシャオジーが使い古しの布と水を準備しており、その手際の良さに驚きながら、優斗は指示を出す。

「身体拭いて、着替えて貰うから」
「はい」
『身体拭いたら、適当な服を渡しておいて』
『わかりました』
少し意外そうに、されどあっさりと承諾された事にほっとしながら、優斗は扉を閉める。

外に残されたチェーゼは、訝しげな表情で優斗を見つめている。その視線の意味を理解していた優斗は、しかしその疑問に答えるつもりはなく、部屋の中から声をかけられるまでの間、無言を貫いた。

その後、同じ様にチェーゼも身体を拭き、着替えさせる。リーチャと違い、それは短時間かつ大雑把に行われたが、最低限の身綺麗さは確保出来た。

『そう言えば、どうして奴隷を部屋に連れてきたんですか？』
『ちょっと話がしたくて』
船倉での立ち話は、メモの確認も含めて面倒が多い。

優斗の返答に満足したのか、お仕事の邪魔はしません、と大人しく隣に座るシャオジーに、優斗は改めて謝罪とお礼を告げ、残り少なくなって来た飴を彼女に差し出す。シャオジーがそれを嬉しそうに受け取り、口に放り込んだのを確認すると、優斗は隣のベッドに腰掛ける奴隷2人に向き直る。

「生い立ちはこれに書いてある通りであってる？」

そう言って彼らの略歴のかかれたメモを向けるが、リーチャは返答に困っており、チェーゼは憮然としている。

一応とは言え、今は主人相当である優斗の質問に、奴隷である２人が返答をしないのは妙だ。優斗はそんな風に考えながら、同じ質問を重ねる。

「これが本当か、確認して」
「俺らは字なんて読めねぇよ」
「すいません」
２人の言葉に、その可能性を考慮していなかった優斗は、自分の迂闊さを反省する事になる。

優斗がこれまで深く関わって来た人間のほとんどは商人で、最低限の読み書きは当然出来た。それ以外の人間も、貴族かそれに連なる者が多く、最低限の教養を持つ者ばかり。しかし、この国でそれは少数派だ。旅の途中で何度も取引をした、小さな村の住人達の様に。

「チェーゼ」
「なんだ？」
「帝国の寒村で生まれ、子供の頃に公国へ奴隷として奉公に出される。しかし、奉公先である地主が事業に失敗し、手放す。その後、商品奴隷として輸送中に荷馬車が襲われ、盗賊の手に渡り、彼らの元で兵士として過ごす。盗賊団が壊滅した際、一時的に公国の所有とされたが、元の持ち主からの訴えにより戻される。年齢は約２７歳」

優斗は、中々激動の人生だな、と文字通り他人事な感想を抱きながら、頷くチェーゼを見る。

あまり食糧が与えられなかったせいか一見細身に見えるチェーゼは、しかしガタイはそれなりに良く筋肉質で長身だ。帝国人なので肌は黒く、背の高さもあり、あちらでも普通より外国人に慣れていたはずの優斗だが、目の前に立っていた時は威圧感に圧倒された。そして座っている今でも、それなりの威圧感を感じていたが、シャオジーの前と言う事もあり、表面上は平静を保っている。

「これを読む限り、元盗賊で人も殺した事がある、と思っていいのかな？」
「そうだな」
「腕に自信は？」
「銅の武器があれば、そこらのヤツには負けない」
銅の武器と聞いて優斗が連想したのは、フレイ用に作らせた銅の棒だった。

邪魔にはなるが、護身用になるかもしれないと積み込み用の荷物と共に預けてあったそれは、現在床に置かれている。
優斗はそれを持ち上げると、短く握ってチェーゼに向ける。

「こんなのでもいける？」
「あぁ」
そう言って受け取ったチェーゼは、銅の棒を手の甲に乗せると、器用にバランスを取った。

狭い部屋の中央で棒を横向きに持っていれば、邪魔で仕様がない。そう感じた優斗が、一旦床に置くように指摘しようとした瞬間、チェーゼが掌を返す。しかし、手の甲に張り付いたままの棒が落下する気配はない。

「それは？」
「銅を動かすギフトだ」
メモのギフト欄を思い出しながら、優斗はその光景を観察する。
メモには単に、鉱物操作、銅と素っ気なく書かれていた為、優斗が想像したのはやはりある服飾店の店員だった。しかし、目の前の光景に加え、現在チェーゼの口からされている説明をまとめると、直接肌に触れている部分限定だが、自分の意思で一定の力を銅にかけ、移動させる事が出来るらしい。
チェーゼ曰く、自分の筋力だけでは持ち上げる事も出来ない大重量の銅武器を振り回したり、小さい物なら触れるだけで飛ばす事も可能だと言う事だ。
「便利っぽい」
「押す、引く、固定するくらいしか出来ないぞ」
心なしかチェーゼの態度が柔らかくなっている事を感じ、優斗の言動も砕けたモノになっていく。
もちろん、暫定とは言え主人相当の立場である優斗は、砕けた口調どころか、怒鳴りつけても、命令しても良い立場であるのだが、そう言った態度を取る気はない。
「で、リーチャの方も似たような境遇な訳だ」
「はい」
「最初の奉公先では、侍女として仕えてたんだ」
「はい」
視線は優斗を捉えているが、焦点は合っていないのではと優斗は感じていた。

女性奴隷と言う特性上、メモにはチェーゼになかった情報も書かれている。優斗がそれを口に出して確認する事を躊躇い、止めておこうかと考えた瞬間、リーチャの隣に座るチェーゼが口を開く。

「最初の地主は、家畜に手ぇ出すなんて汚らわしい。女は女で買うって男だったからな。盗賊どもに浚われた時がこいつの――」

「わかった。もういい」

チェーゼの発言を中断させた優斗は、メモに書かれている胸糞悪い情報が真実だと言う事を知る。

リーチャの補足情報に書かれたいた内容はこうだ。

現在１８歳。１５の時に身柄を奪われてから約２年、盗賊団に飼われ、盗賊達の世話をしていた。その際にきちんと躾けられており、従順で、奉仕能力も高い。

「とりあえず、面倒臭い」

優斗の独り言に反応する者は今回もいなかった。

資料と今の情報、今までの知識から導き出される答えに、自分の道徳観念を加えて吟味しながら、優斗は腕を組んで悩み始める。

普通に考えれば、チェーゼは資料にあった奴隷剣闘士も扱っていると言う商会に売るのが妥当だ。名前からして、闘技場か何かで奴隷同士を戦わせるのだろうと予想され、武器を扱う事に長けた彼を売り込むにはぴったりの場所だ。

リーチャの方は、娼館に売り込めば、高値が期待出来る。その来歴も好む人間は好みそうであり、何より適正が高いらしい。

多少は薄れたとはいえ、今でも人身売買自体には抵抗のある優斗は、自分がそれを実行しなければいけないと言う事実にため息が零

れる。優斗にとって、人の命も、貞操も、本人たちの意思を無視してお金にするのは、忌避すべき事柄だ。

「そういや、ギフトについて書いてないな。どんなの？」

「私のギフトは、天の妖精の欠片と言うそうです」

そう言ってリーチャは、優斗に向かって手を出し出す。

優斗が一瞬だけ迷ってからその手を取ると、リーチャは両手で包み込む様にそれを包み込む。

その行動にドギマギしながらも、やはり表面上は冷静を装っていた優斗は、握られた手に感じる変化に驚きの表情を浮かべる。

「これは？」

「身体を冷たくしたり、熱くしたりしただけです」

熱操作ならば利用価値は高いのではないかと考えた優斗の思惑は、続くリーチャの、自分だけですけど、と言う言葉で体温操作なのだと判り、霧散する。

こうして2人の大まかな情報を得た優斗は、ひとまず彼らをどこに置くべきかと考えながら、シャオジーへと視線を向ける。

大人しく優斗の隣に収まっていたシャオジーは、優斗の視線を受けてにこりと笑う。

「とりあえず、船長に交渉かなぁ」

3度目の独り言にもやはり返答は無く、優斗はため息を吐く。

とりあえず寝ると言っていた船長と話が出来るまで、時間を潰そう。

優斗はそう決めると持ち込んだ暇つぶしを取り出し、まずどれをやろうか考えるべく、思考を切り替えた。

積荷達の来歴（後書き）

優斗くんが相変わらずの甘さとお人よしっぷりを発揮する話でした。

どうあがいても売られてしまう事が決まっている2人を、優斗くんはどうするつもりなのでしょうか。

数時間後にようやく会えた船長の反応は、優斗にとって思わしくないものだった。

食事を摂っている彼を捕まえ、酒の小瓶で釣った優斗が船長に依頼したのは、積荷の保護に関する事柄だ。いくらかの手間賃で積荷に手を出さない様に通達して貰うつもりだった優斗は、船長が親切心で告げた言葉に頭を抱える事になる。

曰く、積荷が多少零れたり、零れたモノがどこかに行ってしまったとしても、目録に掛かれた品目が揃っていれば問題ないと言うのが暗黙の了承である。もし、完全な状態でと言うのであれば、積み込みから見張りまで、そちらで人員を準備して貰わなければならない。その場合、当然ながら一定以上の人数は乗船料を別途支払う事になる。

船長は直接口に出さなかったが、船員の行動まで完全に御するのは不可能だと言うのが最大の原因だ。実際、目録には何が入った箱が幾つで袋が幾つと書かれているだけで重量等の表記は無く、よほど大きく目減りしていなければ気づく事が出来ない。そして今回の様に、目に見えて減らないモノについても証拠が残りにくい為、そう言った事が起こる可能性はそれなりにある。

呆れ顔の船長と別れた優斗は、奴隷2人をどう扱うべきか悩みながら、3人の待つ部屋へと向かう。

言葉は通じずとも、数時間とは言え優斗が用意していたトランプやダーツ等で遊んで交流を深めたせいか、シャオジーは優斗への同伴を申し出ず、逆に留守番を買って出た。単純に遊んでいたかった

だけと言う可能性は高いが、彼らが居れば1人で行動出来ると言う事は、優斗にとって良い事であり、同時に他の人間との交流はシャオジーにとって良い事だとも優斗は感じていた。

シャオジー1人を置いて行った事に関しては、この数時間で2人が彼女を傷つける様な事はしないだろうと判った事に加え、チェーゼがリーチャに向ける視線から、まるで妹を心配し、見守る兄の様な態度だと感じとった事も理由だ。リーチェを無理やり、と言う話で信用出来ないと感じていた優斗だが、何か事情があったのかもしれない、と思える程度には警戒を緩めていた。

『ただいま』

『おかえりなさい』

優斗の想像していた以上に揺れる船内で出来る暇つぶしは多くない。

優斗が部屋に入った時に行われていたのは、出て行った時と同じくダーツだった。部屋が狭い為、ベッドの上に座ったまま壁にたてかけた的に向かって投げる形を取っている。

木彫りの的に金属製の矢、そのどちらも元々はフレイと遊ぶ為に、トランプのカード部分等と共にカクスの街でオーダーメイドした品だ。ちなみにトランプは、絵柄を書き込んで貰う予定だったフレイが居なくなった為、出発の直前に優斗の手で仕上げられた。

トランプにはまだ少ししか手をつけておらず、現在、延々と行われ続けているダーツの腕前は、上から順にチェーゼ・リーチャ・優斗・シャオジーと言った具合だ。

チェーゼは普通に投げるとイマイチだが、銅製の矢でギフトを使うと精度が異常に高い。

次ぐリーチャは、機械の様に正確に動作を繰り返し、全て似たような場所へと投げ込むが刺さったり刺さらなかったりする。
優斗に関してはそれなりに的にあてるが、力を込めると外し、狙い過ぎると木で出来た的には刺さらない為、的中率は低めだ。
延々とダーツを続けている原因であるシャオジーは、最初は床や壁に穴を空けていたが、今は保護の為にひかれたボロ布と言う名の元・服にしか被害が行かない程度には上達している。

全員が徐々に上手くなってはいるが、木の的に穴が開き過ぎたせいで的に当たっても弾かれたり、刺さらない事が多くなっている。

『続き、やりましょう』
『その前に休憩。何か飲もう』
ダーツを通じて実は負けず嫌いだと判明したシャオジーは、不満そうにしながらもしぶしぶと頷く。

水の心配が無くなった事で果汁が腐るぎりぎりまで保持し続ける理由が無くなり、優斗は早々に消費してしまおうと、杯に果汁を注ぐ。元々、優斗とシャオジーの分しか準備していなかった為、先ほど手渡したままの皮袋を取り出すシャオジーを横目に、杯は奴隷２人に差し出す。

「……飲んでもいいの？」
「ん？　もちろんいいけど、果汁は苦手だった？」
「いえ、その」
「奴隷にこんな高いもん飲ませるのか？」
「高い？」
果汁は一般に流通している物であり、平民でも手を出せる安い飲み物だ。

しかし水しか与えられないのが彼らにとって普通の感覚であり、優斗の感覚では安い物であっても、お金がかかる物を奴隷に与える場合、なんらかの意図がある事が多い。

その最たるモノがフレイの様に連れ回す、いわゆる愛玩用や連れ合い替わりに使う事だ。一緒に食事をする為に作法を教え、味を覚えさせ、見栄えを整える為に栄養を取らせる。

病気等で栄養が必要な場合にも与えられる事があるが、それはまた例外的な話だ。

「リーチャ、さっさと飲んどけ」

「うん」

優斗の不思議がる表情から、金持ちの道楽だと判断したチェーゼは、リーチャにそう促すと気が変わらない内にと杯の中身を一気に飲み干した。

休憩が終わるとまたダーツを再開する事になり、その後も食事と睡眠、暇つぶしとしてダーツやトランプ、揺れが少ない時にはオセロをやったり、会話するくらいしかない旅路が6日目を迎える頃、4人それぞれの立ち位置も定まり始めていた。

優斗はシャオジーと唯一話せる人間として会話相手になりつつ、こちらの言葉を教え始めた。奴隷2人には思うところもあり、積極的に干渉しない。

シャオジーは優斗から言葉を学んだり、誰かとゲームしたりしながらのんびりと過ごしている。

リーチャはシャオジーの身の回りの世話と遊び相手を行い、自分から優斗には近づく事はない。

チェーゼは優斗を警戒しつつ、しかし当初とは打って変わって不

興を買わない様に大人しく、従順にしており、よく見張りと称して部屋の前で1人になっている。

優斗にとってこの生活で一番の問題は、夜だ。

チェーゼは見張りをするのだと主張して銅の棒と共に扉の外で眠っているのだが、リーチェはシャオジーの寝台で眠っている。もちろん、どちらも船長の許可は得ており、主にリーチェを部屋に置く事に下世話な笑みで了承した。

リーチェとずっと同じ部屋で過ごしているだけでも、彼女の色香にどきりとする事のある優斗にとって、無防備に眠る姿は目に毒だ。きっと何をしても抵抗らしい抵抗はないだろうと言う予想も含めて、優斗は悶々とした夜を過ごしている。眠る時間をずらすか、船倉に返すと言う案も思い浮かんだ優斗だが、一緒に寝る人がいると安心すると言うシャオジーから彼女を取り上げる事も、自分が代わりに抱きになる事も出来ず、１０日間の辛抱だと耐え忍んでいるのが現状だ。

『今日は揺れがすごいですね』

『だね』

揺れが大きすぎればゲームは難しく、必然的に会話か勉強の時間になる。

しかし、今までにない大きな揺れ方に不安を感じた優斗は、同じくそれを感じ取っており、自分以上に恐れているであろうシャオジーの為に船長を尋ねる事を決める。

「おう、客人。今忙し、いや、あんた、あれもってねぇか」

「あれ、ですか？」

何人かの船員に囲まれた船長に、まるで祈りを捧げられる教祖様

のようだと言う感想を抱きながら、優斗は退いてくれた船員に軽くお礼を告げると、輪に割って入る。

何が起こっているのかと船長の手元に視線を向けると、そこには方位磁石が吊るされた紐が握られていた。

「この揺れで方角が調べらんねーんだよ。あぁ、心配せんでも漂流するこたぁねぇぞ。根性でなんとかする」

「根性って」

苦笑する優斗の頭に思い浮かんでいたのは、羅針盤と言う言葉だった。

優斗の専門ではないが、むこうで船に乗った時に運転席にあった巨大な物を見た事があり、彼の弟の要望で受けた説明を大雑把に解釈すると、密封した液体の中に磁石が入っており、それを吊るす事で揺れから守っている、と言う事だった。液体はアルコールと水を混ぜて粘度調整をしている、と言うところまでは思い出したが、さすがに細かいところまでは記憶していない。

「部屋にあるので取ってきます」

「おう、わりぃな」

部屋に戻り、シャオジーを安心させてから方位磁石を持って再度船長の元へと向かう間、優斗の頭の中では様々な事が渦巻いていた。

まず、羅針盤の構造を少しでも思い出そうとし、同時に羅針盤が開発出来れば得られる利益についても考える。そしてこの船になくともこちらで羅針盤が開発されている可能性はあると考え、ひとまずシャオジーとチェーゼ、リーチャは知らない事を確認する。

「どうぞ」

「おう、助かる」
「いえいえ。ところで、船の上でもっと便利に使える物とか、ないんですか？」
笑顔を浮かべながらも手に汗を握る程緊張しながら問うた優斗に、船長が顔ごと視線を向ける。
そしてにかっと表情を崩すと、声を上げて笑う。
「んなもんあったら、とっくの昔に買っとるわ」
「ですよねー」
優斗は笑顔を返しながら、拳を握る。
陸に到着するまでの残り4日間にやるべき事を手にした優斗は、苦心して方位の確認を終えた船長から磁石を受け取ると、足早に部屋に戻るのだった。

到着予定日を少し過ぎた頃、船長から明日には到着するだろうと伝えられた優斗は、部屋に戻ると扉の前に立つチェーゼを見つけた。
「また見張り？」
「着替えるから外に出ていろと言われた」
チェーゼの言葉を受け、自分も入室する訳にはいかない事を知った優斗は、彼の隣に立ち、壁に背を預ける。

奴隷2人は十数日の間に少し血色がよくなり、服も彼らに合わせてありものを繕った為、以前よりも見栄えする姿になった。
元々、安く買い酷使される肉体労働系の奴隷であるチェーゼは働く事が無いにも関わらず十分な食料を与えられたおかげで心なしか肉が付いた様に見え、リーチャの方は髪の艶が良くなり、梳かして

まとめている為、以前よりも小奇麗に見える。

「そういえば」

「なんだ？」

「リーチャとはどんな仲なの？」

間を持たせると言う意味合いの強い優斗の質問に、チェーゼは訝しげな表情を浮かべる。

奴隷の人間関係を知ろうと言う人間がいない訳ではない。だが、そう言った人間は総じて自分達が楽しむ事が目的であり、詮索される当人にとって好ましくない事態に発展する事が多い。チェーゼ自身、それによって迷惑を被った経験のある人間であり、自然と警戒してしまう。

「同じ場所に居た。それだけだ」

「それだけにしては仲が良い、って訳じゃないけど、なんか兄妹見たいって言うか」

優斗の告げた感想に、チェーゼは、ふっ、と鼻で笑う。

仮とは言え持ち主に対してそんな態度を取れば、罰を与えられる事は想像に難くない。それを身を持って知っていたチェーゼは、しまったと言う表情を浮かべ、ここ数日で緊張と警戒が緩んでしまった事を自覚する。

もちろんその程度で優斗が彼を罰する事は無く、彼もそれを知っていたが、売られていく身としては今後に関わる事なので、危機感を持って反省する。

「兄が妹を犯すか？」

「それ、何か事情がありそうな気がするなと」

根掘り葉掘り聞かれれば、正確に言えば言えと命じられれば拒否

権の無いチェーゼが優斗を煽る様な事を言ったのには理由がある。

優斗と言う名の商人は甘い人間であり、同時に職務を異常なまでの真面目さで全うしようとする人間でもある、とチェーゼは考えていた。ならば同情を買い、上手く立ち回れば同じ場所に売るくらいの融通は利かせてくれるのでは、と彼は目論んだ。

優斗の方はと言うと、特に深く考えずに発言していた。人身売買と言う己の倫理観に反する行為を積極的に行う必要がある事に加え、フレイの件もあり、奴隷については考えない様にしていると言うのが正確だ。とは言え、忌避感は既にかなり擦れて薄れ始めている。

「兄妹、と言ったな」
「うん。そう見える」
「俺にそんな資格はない」
「理由を聞いても？」
「持ち主の言葉に逆らう程、俺はばかじゃない」
優斗が無理に言う必要が無い事を伝えるよりも早く、チェーゼは同情を買えそうな事実を選んで口にしていく。

奴隷として初めて売られた場所では、顔を知っている程度だった事。
盗賊に囚われ、余興として何度か交わる事を強要された事。
それが切っ掛けで共に過ごす時間に話をする様になり、情が移った事。

「アイツと一緒に居る為なら、俺は何でもする」
チェーゼの言葉は半ば本心から出たモノでもあったが、打算も含まれていた。

盗賊に囚われている時に聞いた、あいつは女を出汁にすれば働くから扱い易い、と言う陰口。それが事実ならば、優斗がセットで売り込む為の口実になり、共にいられる可能性が上がる。逆にそこに付け込まれて引き離される可能性もあるが、チェーゼは優斗の甘さならばその可能性は低いだろうと予想していた。売られた後の事に関しては、売り先の相手を見てから対処するしかない。

「はぁ。良い話だけど、面倒が増えたと言うか」

「そうか？」

チェーゼは自分の策略が上手く行っている事を確信し、内心でほくそ笑む。

会話はついでに体を拭いていたと言う女2人の、もういいよ、と言う声で終了となり、男2人が中に入ると同時に優斗の退室で中断したゲームを再開する事になる。

予定よりも数日遅れで王国へと到着した優斗は、酒と女を浴びるほど食らうと宣言して出て行った船長を見送ると、資料にあった商会の1つへと向かう。

荷物の運び出しは明日の昼以降で頼むと船長に頼まれていたが、中を見せる許可は得ているので問題ない。

『じゃあ、行こうか』

『はい』

シャオジーに声をかけ、優斗がまず向かったのはコルト商会と言う、大商会だ。

最近、珍しく、目新しい品を取り扱い始め、羽振りが良くなっていると言う情報から、連邦と関係する情報が聞けるのでは、と考え

ての行動で、シャオジーの同行はその為だ。
コルト商会は港近くにあり、徒歩で向かった2人は長く歩く事なく、目的地に到着する。

「すいません。ちょっとよろしいでしょうか」
「はい、なんでしょう」
「私は公国からやって来た商人で、優斗と言います」
優斗の自己紹介に、店先を掃いていた小僧は優斗と同種の笑みを浮かべる。

反応を見る為に敢えて黒髪を隠さずにやって来た優斗は、それを見ても笑みを崩さない事に、さすが大商会、と感心しながら、少し早口で目的を告げる。

「荷物の買取、と言うか査定をお願いしたいのですが」
「荷物はどこにありますか？」
「船の中に」
優斗がそう告げると、小僧は不思議そうな表情を浮かべた後、少々お待ちください、とだけ言って店内へと消える。

そして戻って来た時には先ほどよりも少しだけ緊張した面持ちで優斗を応接室へと案内する。

「どうも、ようこそおいで下さいました。私はここの支部長を務めております、タガルと言います」
「商人の優斗です。お見知りおきを」
タガルは隣のシャオジーに気付くと眉を潜め、フードを取ると一瞬だけ驚いた表情を浮かべたが、すぐに商談用の笑みを張り付けると、2人をソファーへと促す。

タガルは３０前後と言った風体で、大商会の支部長と言う大任を任されている事から、そこそこ若くともやり手の商人なのだろう事が伺える。

そのタガルの指示で3人分のお茶と、シャオジーにだけ高そうな菓子を出され、配り終えた女性が部屋から出たタイミングを見計らって、優斗が口を開く。

「今回、査定して頂きたい品は公国産の茶葉や食材です」

「それはありがたい。是非とも買わせて頂きたいのですが、その前にお聞きしたい事があるのです。よろしいですか？」

「もちろんです」

こちらも聞きたい事がある、と告げるべきか悩んだ優斗だが、話を聞いてからの方が優位に進められるだろうと判断し、口を噤む。

目録すら見ていない状態で問われる質問について幾つかの予想を立てながら、優斗はお茶を手に取ると一口だけ含み、唇を濡らす。

「船で来られたにも関わらず、何故我が商会に足を運んで下さったのですか？」

「それはもちろん、査定をして頂く為です」

「それだけでしたら、こちらが出向くのを待っていれば良いはずです」

タガルの言葉に、優斗は内心で焦り、しかし表情は変えない。

船で物を運び、売る場合の常識を、優斗は知らない。誰も教えてくれなかったし、調べる余裕もなかった。

そして優斗は、この失敗が招く事態を想像する。

まず、自分が不慣れな、付け込みやすい商人と思われ、侮られる可能性。見た目からしても十分にあり得る事だが、これならばやり

方次第で実害は最小限で済む。
そして、商品に問題があるのではと考えられる可能性。査定に出向くと言う事は、直接品物を見て貰えると言う事であり、それを避ける事は品質に自信が無いと勘違いされても仕方がない。

しかし優斗の目の前にいる商人はそのどちらとも違う想像をし、提示した。

「間違っていたらすいません。もしや、そちらのお嬢さんに関する事柄ではないでしょうか」
「……何故、お分かりに？」
「我が商会は王国最高を自負しております。一度でも取引した相手の訛りや口調はもちろん、聞きなれぬ言葉であってもある程度は覚えております」
その言葉、と言う指摘に優斗はシャオジーへと振り向く。

彼女がここに入ってから口にした言葉は、Ｏｈ、とか、ｎｉｃｅ、等の呟きのみ。そのどちらもお茶とお菓子への感想だ。

「きっとこれは私達を試す為に設けられた場で、貴方は公国ではなく、連邦の方。違いますか？」
「あー、いや。その」
自信満々に言い放つタガルに、優斗は返答に窮する。

それを早くも図星をつかれたから困っているのだと解釈したタガルは、得意げに自分の予想とその根拠を並べ立てる。

「現在、専属契約を話し合っている商会がどの程度なのか調べようと言うお考えだったのでしょう。しかし、この大陸の常識に疎い事が裏目に出ましたね。

さらに言えば、お連れのお嬢様の持つ真っ白な御髪。我が国にこの様に神々しい姿の少女が居たのであれば、間違いなくどこかの貴族様に召し上げられます。国王に献上される可能性すらあるでしょう」

矢継ぎ早な言葉に、優斗はどう言いつくろうべきか悩む。

しかしある意味好都合だと考え、どうすべきか判断の参考にしようと、シャオジーに声をかける。

『ここの商会、連邦の商会と話し合い中なんだって』

『本当ですか！？』

『うん』

タガルを無視しての会話となるが、彼はそんな事を気にするどころか、やはり、と嬉しそうに、自慢げな笑みを浮かべている。

密談めいた行動にタガルが気を悪くしていない事を確認した優斗が、この後の事についてシャオジーに尋ねようとした瞬間、扉を叩く音が応接間に響いた。

「今は大事な来客中だ。朕がなっておらず、申し訳御座いません、優斗様」

「いえ」

「すいません、ですが、その、例の方々がお付きになりました」

「おぉ、そうか。では、こちらに通せ」

商談中に別の客を同じ部屋に通す、と言う行動に驚いた優斗がその理由を問うよりも早く、タガルが口を開く。

「同僚方もお付きになりました。我々は取引相手として合格点だと告げて頂けると嬉しいのですが、どうでしょうか」

「いや、それは誤解で」
「あぁ、もしや貴方様の立場が悪くなってしまう事を懸念しておられるのでしょうか。もしそうなったとしても大丈夫です。我が商会にて相応の地位を準備させて頂きます」
「ですからそうでなく」
「当方でも両方の言葉をつかえる人間を育成してはおりますが、やはり仲立ちして下さる方がいないと捗らないのが現状でして。むしろ是非我が商会に入って頂けませんか？」

優斗が否定し、タガルが的外れな事を言う。
そんなやり取りを数度交わした頃、扉が静かに開くと2人の男が応接間へと入って来る。

1人は中年の男。それに続いてもう1人、若い男。
若い男は中年の男の従者か弟子なのだろう、付き従うように後ろに張り付いたまま部屋の中へと入って来る。

「どうも、ようこそおいで下さいました」
『おう、今日はよろしく頼む』
「ヨロシク頼ム、との事です」
3人のやり取りから、優斗は若い男が通訳である事を理解する。

同時に優斗は、彼らからはソファーの背もたれによって死角になっているだろうシャオジーの肩がびくりと揺れた事に気付く。
どうしたのだろうと表情を覗けば、シャオジーはどうすればいいのか困り、焦った表情を浮かべている。

『どうも初めまして、ズウェイバー連邦の商人の方ですね』
『おぉ、既にこちらの言葉をしゃべる男を準備しているとは、王国の商人も中々やるな』

中年商人が楽しそうに笑い、言葉を理解出来ないタガルも上機嫌に笑う。

座ったままでは失礼だと立ち上がった優斗に、中年商人は無遠慮な視線を向けて観察しながら自己紹介を始める。

『俺はシーイ。知っての通り連邦の商人で、今回の商談相手だ』

『私は優斗と言います。そちらの御姫様を連れてきた、この商会とは関係のない、単なる商人です』

優斗は、姫じゃなくて皇女だったか、と思いながら彼女を見下ろす。

優斗の視線の先では、何か決意を固めた様な表情のシャオジーが拳を握っていた。そして優斗の視線に気づくと、一瞬だけ泣きそうな表情を浮かべた後、一転して堂々とした態度で立ち上がる。

『シーイ、久しぶり』

『は？　何故貴方がここに!?』

『それはどうでも良い事でしょう。それよりも、今、どうなっているのか教えて』

シーイと呼ばれた中年商人が、シャオジーの言葉に動揺する。

その姿を見て優斗は、悪代官と言う言葉を連想した。

偉い人間がいなくなり、好き勝手やっていた人間が真打登場で手打ちとなる、と言うのはよくある筋書だ。

そんなシーイはすぐに表情を取り繕うと、強気な笑みを浮かべ、シャオジーへと言葉を返す。

『すいません、お嬢様。部外者に機密を漏らす訳にはいかないので

すよ』

『私が部外者、ですか？』

『私は商会に仕えているのであって、貴方に仕えている訳ではありません。商会の主であるヂィも公私混同はしないはず』

うっ、とシャオジーが小さく呻く声が聞こえ、優斗は援護射撃すべきか頭を働かせる。

結果、事情が分からない人間が口を出すのは、かえって迷惑がかかる可能性が高いと考え、故に優斗はどんな要件ならこちらに話を振って来るか、と言う予想をし、その対処法についても考えて置く事を決める。

『お連れの男に見覚えは無いので、我が商会の者ではありませんね？』

『この方は私を助けてくれた、隣国の商人です』

『そうでしたか。ところで、お嬢様だけしかいない理由をお聞きしても？』

シャオジーが歯を食いしばり、首を横に振る。

それは拒否ではなく、既に他の人間は全て亡くなったと言う意思表示だ。シーイはそれを受け、残念そうな表情を浮かべながら、歪む口元を隠すべく、手で覆う。

『それは残念な事に。お嬢様だけでも無事でよかった』

『だからと言って商会を乗っ取れると思ったら大間違いです』

今までに見た事の無い凛々しさと力強さを見せるシャオジーに、優斗は無言で感嘆する。

同時に、判明している事柄から現在の構図を確認する為に情報の整理も行う。

シャオジーの船に乗っていたギィと言う名の商会主。彼が行方不明である事を良い事に、シーイと言う中年商人が商会の乗っ取りを目論んでいる。そしてシャオジーはそれを好ましく思っておらず、なんとか阻止しようとしている。優斗は大雑把にそう理解した。

それは大筋において正しく、しかし致命的な間違いを孕んでいた。

『お父さんの商会は私が継ぎます！』

『なりません。商会の利益を考えれば、商会主の娘だからと言って安易に継がせる訳にはいきません。きっと貴方のお父様も同じ事を言うはずです』

優斗はシャオジーの叫んだ言葉の意味を、瞬時には理解出来なかった。

シャオジーは皇女であり、父親は皇帝その人だと優斗は聞かされていた。しかし今、シャオジーの口から漏れ出た言葉が真実ならば、彼女は商会主の娘だと言う事になる。

『皇帝からの委任を受けたのは貴方のお父様ではなく、我が商会なのです。無様な結果を出せば存続にも関わりましょう』

『それはっ！？』

言葉に詰まったシャオジーが、無意識に優斗の方に視線を向ける。

シャオジーが声にして助けを求める事はせず、しかし縋る様な、それでいて申し訳なさそうな表情を浮かべた事で、優斗は確信した。

彼女は嘘を吐いていたのだ、と。

海路の先に（後書き）

少女が異国の地で吐いた嘘が露呈する話でした。

そして傷心の優斗くんが色々な人に翻弄される話でもあります。

騙されていた事に気付いた優斗がまずとった行動は、その場の収集を付ける事だった。

『一度仕切り直しませんか？』

『悪いが、部外者は黙っていてくれ』

『私は構わないのですが、このまま続けると取引先に悪い印象を与えてしまいますよ？』

優斗の指摘に、シーイがはっとしてタガルを見る。

言葉が通じないとは言え、険悪な雰囲気を感じ取ったタガルがげげんな顔をしている事に、しまった、と言う表情を浮かべたシーイを見て、優斗は外堀を埋めに行く。

「すいません、タガルさん。ちょっとした行き違いがありまして」

「は、はぁ。そうですか」

「コルト商会様と禍根を残す事なく契約を交わす為にも、一度出直そうと思うのですが。もちろん、私としてはこの商会の良いところを余すことなく伝えるつもりです」

「そう言う事でしたら、仕方がありませんね」

土壇場で反故にされた形であるにも関わらず、不満な顔を見せる事なくそう告げるタガル。

優斗がそれを通訳されているシーイに視線を送ると、しぶしぶと言った体で頷くのを確認してから、極力シャオジーの方を見ない様に彼らに退室を促す。

商会を出ると彼らの馬車が停まっており、乗り込んでいく2人に

後日優斗達の方から訪ねる約束を交わして逗留先を尋ねてから、優斗達は宿を探した。そして高すぎず、しかし正面通りに面した安全そうな宿に部屋を取ってしばらく休んだ頃、優斗はようやくシャオジーを正面から見据えた。

『とりあえず、ワケを聞いてもいい？』

『……何かあったらそう名乗れって、お父さんとお母さんが』

俯き気味になりながらそう告げたシャオジーの手は膝に置かれており、僅かに震えている。

優斗は消えそうな表情を営業スマイルを浮かべる事で誤魔化し、なんとか取り繕いながら続く言葉を待つ。

『売るより送り届けて褒美を貰う方が良いと思わせれば無下に扱われる事も、無体な事をされる事ないだろう、って。礼金くらいいくらでもなんとかしてやるから、って』

それは彼女を心配する親の愛情であり、同時に彼女にとっては遺言でもある。

そんなか細い少女の弁明に、普段の優斗であれば同情し、優しい言葉をかけて手を差し伸べたはずだ。しかし、仕方がないと思いつつも、無意識ではフレイに裏切られたと感じていた優斗は、身代わりの様に縋り、守っていた相手が自分を欺いていた事を簡単に許し、受け入れる事が出来なかった。

『俺は信用されてなかった訳だ』

『そんな！　こと、は』

迷い込んだ異国の地で初対面の男を信用しろ、と言うのは無茶な話だと優斗は理解している。

そして自分が全面的に信用し、彼女の事を最優先に行動していたからと言って、相手にも同じ事を求める愚かさも知っているつもりだったが、静かに湧き出し続ける感情が理性的な思考を阻害し、それが正しいのだから仕方がないと納得する事が出来ない。

『商会を乗っ取られたみたいだけど、約束の物はどうするつもり？』

『それは、その』

段々と涙声になって行くシャオジーに、子供を嬲っている状態であると気づいた優斗は、少しだけ冷静さを取り戻す。

優斗は感情に流されてきつい態度でシャオジーを責めてしまった事を反省する。しかし彼女を許し、受け入れると言う選択も出来ず、ならば自分はどう言ったスタンスを取るべきかと考えるが、良い案は浮かばない。

『その、実は提案、と言うかお願いがあるんです』

『ん、何？』

優斗から責める様な雰囲気が消えた事を敏感に察知したシャオジーは、今が好機と提案を口にしようとするが、自分の言葉が怒りの再燃を招くのではと恐れ、逡巡する。

しかし言わなければ始まらない。そう考えると意を決して立ち上がり、恐る恐るそれを口にする。

『商会を取り戻すのを手伝って欲しいんです』

『お礼が欲しければ手伝え、って事？』

『そうじゃないです！　いえ、そうなんですけど……』

胸元で指をこねくり回すシャオジーの仕草を見ながら、優斗は己の発言がまたきつすぎた事を反省する。

そして申し訳なさそうな泣き顔から一転、何故か恥じらうような仕草で顔を赤くすると言う豹変ぶりの意味と意図が掴めず、真意を探ろうと目を細める。

『私は商会主の娘ですから、一応、跡を継ぐ権利があるはずなんです』

『そうなんだ』

『でも、仮に私が跡を継いだとしても、私はまだ商いの事に詳しくないので、結局は実権をシーイに握られてしまうと思うんです』

優斗は想像する。

シーイが連邦に戻った時に商会主が死んだので跡を継ぎましたと伝えれば、不信感を買う可能性は高い。商会主の娘であるシャオジーが存命であるならおさらだろう。ならば間をおいて冷静になったシーイがシャオジーをお飾りの商会主としようと考える可能性は、低くない。それが嫌ならば、シャオジーが国に戻れない様に仕向けるか、彼女を養子にする等によって縁続きになると言う方法もある。年齢差を無視するなら婚姻でも良い。

『だから私に、優秀な商人の伴侶が居れば解決するんじゃないかな、って』

『なるほど』

優斗は、道理だ、と考え、想像を続ける。

シーイと言う中年商人は、シャオジーの能力の低さを理由に跡を継ぐことを拒否した。それを覆す良い手ではあるが、逆に厄介な相手と謀殺される可能性も孕む、危険な方法でもある。それは現在でもあり得る可能性であり、今日、彼らに付いていかなかった理由の1つだ。

そこまで考えながら、優斗は彼女の真意に辿り着く事はなく、次

の言葉を聞き、驚く。

『だから、その』

上目使いで見つめるシャオジーと優斗の視線が交錯する。

しかしそれは一瞬の事で、すぐにシャオジーが俯き、目を逸らすが、何かを決意してまたすぐに顔を上げ、真っ直ぐに優斗を見据える。

『私を貰ってください』

『は？』

虚を付かれて間抜けな表情を浮かべた優斗だが、それでも思考は止まらない。

シャオジーが望む伴侶は腕利きの商人であり、彼女から見て大量の荷物の販売を委託されている優斗がそれに該当する人物であると誤解していてもおかしくない。更に言えば、この地の人間で両方の言葉を話す事が出来る優斗は、この地に販路を作ろうとしている商会にとってはとても都合の良い人間だ。

優斗がその可能性に思い当たらなかったのは、自分が商会を経営できるだけの手腕がある優秀な商人だとは露程にも考えていなかったからだ。

『お礼の代わり、と言うだけじゃないです。その、ですから全部優斗さんの好きに。もちろん、取り戻した商会も』

『いや、ちょっと待って』

『何でも、聞きます。優斗さんの言う事、何でも。ですから、お願いです』

シャオジーの懇願に、優斗の感情が少しだけシャオジーに傾く。

優斗は自分の右手が無意識に内にシャオジーの頭を撫でようとした事に気付き、はっとする。
そして先ほどまでとは真逆の感情に流されそうになった事に歯噛みしながら、シャオジーの提案を冷静に判断すべきだと考えた優斗は、感情的な部分を極力排し、事実だけを抽出し始める。

『他に条件は？』
冷静に、事実だけで判断する方法として、優斗は無意識に慣れた手法を採用する。

昨今の優斗にとって最も馴染み深い手法。すなわち、商取引における利益と損益による判断。
故にまずは全条件を聞き出すべきと考えた優斗の反応に、受け入れてくれるのでは感じたシャオジーは、嬉しそうに、それでも真面目な声色で質問の答えを口にする。

『私の子供に跡を継がせてくれれば、それ以外は何も』
『それはまぁ、何というか』
シャオジーの出した条件は、それ以外は何も、言う言葉とは裏腹に簡単なモノではない。

シャオジーは全てを優斗の好きにして良いと言ったにも関わらず、それらに制限をかけた形になる。商会を売り払う事は出来ず、シャオジーに子を産ませなければならない。誰との、と言う指定はなかったが、優斗が商会を経営するのであればそれは明白だ。

『どうでしょうか？』
シャオジーの不安げに揺れる瞳を覗き込んだ優斗は、その視線を下側へとスライドさせると、舐める様な視線で彼女の身体を観察す

る。

わざと下品に振舞った優斗の行動に、シャオジーは嫌悪感を抱く事もなく恥ずかしそうに目を伏せ、むしろ小振りな胸を両腕で寄せて強調すると、優斗に差し出すかの様に突き出す。

シャオジーの年齢は１２歳と優斗よりも９つも年下だ。容姿はそれなりに良く、今はまだ全体的に小さくて幼いが、将来有望である事はほぼ間違いない。とびきりの美人になるかは不明だが、一定水準以上の良い女になる事は確実だ。

シャオジーは勘違いと思い違いにより、優斗に好意を持ち、最善の相手だと思い込んでいるのだ、と優斗は判断する。見知らぬ異国の地で唯一言葉が通じる相手に優しくされれば好意を持つのは不自然ではない。優斗の特殊な立場から、その能力を大きく見積もり過ぎてしまった事も。それらは優斗にとって優位に働く誤解だ。

しかし、実際に商会を経営する能力が無い以上、報酬である大規模な商会の主と言う立場は、魅力的なモノではない。それどころか突然割って入った事で不評を買い、己の身を危険に晒す可能性がある。

『悪いけど、その提案には乗れない』

『私の事、嫌いですか？　嘘を吐いていたからですか？　それとも――』

シャオジーが早口で捲し立てるが、言葉が乱れたせいもあり、優斗にはその半分も理解出来なかった。ただ、必死な形相と縋る様な視線から、内容を想像する事は難しくない。

返答の来ない問いを続けていたシャオジーが、がっくりと項垂れてベッドに横たわる姿を視界の端に捉えながら、優斗は別の事を考えていた。

シャオジーが優斗を欺いていたと知ってから、頭の隅でずっと考えていた事。それは生きる為の道標にして、拠り所について。

真っ先に思い浮かんだのは、一番多くの時間を過ごした、最も大切な女性。

優斗は、アイツへの思いだけを抱いているべきだったのではないか、と自問する。だがすぐにそれは、フレイと言う存在によりあっさりと揺れた弱いモノであり、実現できたとは思えないと自答する。そしてそんな自分には既にそんな資格はないのではないだろうか、とも。

次に思い浮かんだのが、この地において帰る場所をくれた少女。しかし、最大の拠り所だと感じていた相手が去り、女性、むしろこちらの人間全般を不信気味の優斗には、利用価値があったからこその言葉ではと言う疑心が拭えない。屈託なく笑った彼女がそんな人間でないと理性は訴えているが、今はまだ恐れの感情が強い。

『シャオジー』

『なんでしょうか！？』

声かけられたシャオジーが、もしや気が変わったのではと期待を抱いて顔を跳ね上げる。

しかし、優斗の心が自分を欺いていたと感じているシャオジーと、心の底では彼の元から逃げてしまったと感じているフレイに本当の意味で寄りかかる事はない。

『提案がある』

『はい！』

弾むシャオジーの声に、優斗は少しだけ罪悪感が浮かぶが、無視

する。

裏切られる前に裏切ろう、と決意するには優斗は善良過ぎ、騙されても信じ続ける程強くもなかった。

そんな彼が選んだ心の寄る辺にして支えとは、先ほど無意識に選び取った行動でもある、商売、と言うモノだった。すなわち、利益と損益を比較し、利が大きくなる様な判断を行う。己の倫理観を完全に捨て去れるとは考えていないが、その比率を出来うる限り前者へと傾ける。

そしてそれを実行するべく、優しい表情と声色でか弱い少女の心に這い寄る。

『シャオジーが商会を取り戻すのに協力する代わりに、お礼を上乗せして貰う、でどうかな？』

『是非！』

甘い甘い優斗の甘言に、シャオジーは一瞬の躊躇もなく飛びつく。

優斗は優しい笑みの裏側で、交わすべき条件について思考する。そして連邦との取引を行う好機があればと、念の為準備していた用語メモを取り出して目を向ける。

『じゃあまず、商会を取り戻す、の定義をしよう』

『えっと、どういう事でしょうか』

『例えば、取り戻すのが商会の名前だけなら、あちらに別の名前を名乗るように交渉するだけで済む』

優斗の例えに、シャオジーは首を横に振って否定する。

商会を取り戻す、の定義。それは優斗にとって、クリア条件の設定に他ならない。

優斗としてはこれを定めないと、シャオジーが納得するまで付き合う事が必要になり、彼女のさじ加減によっては終わりが無くなってしまう。

『全部、取り返します』

『そう。それなら手伝えない』

決意を込めて言葉を発したシャオジーに対し、優斗は協力すると言う宣言をあっさりと覆す。

それを受けて青ざめる彼女に対し、優斗は柔和に微笑みかけながら、その手を頭の上に乗せ、優しく撫でる。

『目標が無いと取り掛かれないでしょ？』

『あ、そ、そうですよね！』

『最終的にどうしたいのか、ゆっくりでいいから考えてみて』

優斗の言葉から即座に協力を拒否された訳ではない事を読み取ったシャオジーは、優斗がまたそれを口にする前にと急ぎ、焦りながら思考する。

優斗の方は相手の余裕を奪い、冷静さと慎重さを削ぎ取った上で都合の良い方向へ思考を誘導する為に次なる手を打つ。

『考えてる間に、お礼について話そうか』

『はい！』

シャオジーは優斗の提案を、考える時間が稼げると考えて即答で肯定する。

一度は全てを捧げる覚悟を決めたシャオジーにとって、優斗がどんな条件を出そうとも――商会の存続を脅かさない限り――肯定する以外の選択肢は存在しない。故に基本的に思考の片手間で済む、

と言う彼女の考えは、当然ながら優斗も判っている。そしてそんな事を許す優斗ではない。

『最初の条件通り、とりあえず砂糖が欲しいんだけど』
『それはもちろん大丈夫です』
『商会がこの大陸へ持ち込む砂糖を全部、って言っても？』
それはいわゆる、独占契約と言うモノだとシャオジーは把握する。

商家の娘であるシャオジーは、それが大きな利益を生む事を知っている。しかし同時に、独占で主に不利益を被るのはそこから買う側であり、優斗に売る側の商会は、利益が減る事はあっても損をする可能性は低い。故に彼女は、買取価格に関する条件がなければ、一品程度なら問題ないはずだ、と考える。

『独占契約と言う事で良いんですよね？』
『そう考えて貰って構わない。平気？』
『もちろんです』
上手くやればお互いに利益を得られる条件の提示に、シャオジーは優斗の事を、やっぱり優しい人だ、と心の中で評した。

そして、シャオジーが取り戻すべきモノを考える為、完全に思考をそちらに向けようとした瞬間を狙い、優斗はその条件に一言追加する。

『後はシャオジーの条件次第で品目を増やす』
『え？』
『協力内容とお礼は釣り合う様にすべきでしょ？』
その言葉を受け、シャオジーは片っ端から上げていた取り返すべきモノについて、再度検討を行う事となる。

砂糖が欲しい、と言う条件は半ば以上、王国までの送迎で達成されている。

故に、シャオジーはこう考えた。この後出す取り戻したいモノ1つにつき、1品目ずつ増えて行けば、この地では優斗としか商売が出来なくなる可能性がある、と。

『細かい事は、取り返すモノと、その方法を考えてから話し合うと言う事で良い？』

『……はい』

今のシャオジーに選択の余地はなく、迷いながらも肯定する。

そして、まずは取り戻したいモノを優斗に告げ、難易度とそれに伴う品目の増加数を確認してからでも取捨選択を行うのは遅くないと考え、それらを口にしていく。

『いいですか？』

『どうぞ』

『まず、商会の経営を取り戻したいです』

『それは大事だね』

それに対する難易度や方策について口にする事なく、優斗は無言で先を促す。

その行動にシャオジーは、判断を後回しにしてひとまず次を伝えてみようと考え、次々とそれらを列挙していく。

『従業員の人や、船、商品も取り戻したいです』

『それは全員？』

『もちろんです』

『シーイって商人も？』

『あ』

優斗がそう指摘すると、シャオジーはようやく全て取り返すと言う言葉の曖昧さに気付く。

その反応に、そもそも経営者たる彼女の父親が居ない時点で元通りにする事は不可能だ、と考えた優斗だが、それを口にする事はしない。

『1つずつ確認するよ』

『はい。すいません』

『うん。じゃあ、まずズウェイバー連邦にある本店と、あるなら支店と交易ルート、と言うか商圏かな。ついでに資産全般はまだシーイの管轄に入っていないと考えて良い？』

『多分、はい』

『じゃあ、あっちに残った従業員も同じとして、こっちに付いてきた従業員と持ってきた品物は取り戻す？』

『はい』

『既にシーイの息がかかった相手だとしても？』

優斗の指摘に、シャオジーはまた頭を悩ませる。

そして優斗の言葉を、シーイを追い出した後の事まで考えてくれているのだと考えたシャオジーから自然と笑みが零れる。

実際に優斗は、商会のその後についても考えているが、その理由の大半が、シャオジーの権力が強い方が取引相手として有利だろうと言う公算から来ている。

こうして優斗の思惑など知るはずのないシャオジーが、彼への好感度と信頼度を上げた結果、シャオジーは優斗の思惑通り、彼に助言を求めると言う行動に出た。

『元通り、商売を続けられる様にしたいんです』

『そう。それなら、シーイより先に国へ戻って、連邦の本店で後を継いだって宣言すると言う手もあるけど、あっちに信頼できる人は居る？』
『います、けど。でも、そうするとシーイはそのまま？』
『そうなるね。でも、今まで通りの商売は出来るはず。大きな商会が、１つの取引に全てを投じているとは思えない』
『でも、それは……』
『商会を乗っ取られない様にするには、最善の方法だと思う』

今回の事態の発端は事故であり、ならば商会主であるシャオジーの父親がその対策をしている可能性は高いだろうと優斗は考えていた。むしろしばらく国を離れる上、ある程度危険の付きまとう長い船旅をするのだから、当然の備えだと言える。

故に優斗にとってこの手は、シャオジーが商会主にならずとも彼女の父親の遺志に沿う事が出来る為、シャオジーが納得し易く、解決だけを望むなら労力が少なく済む良い手だ。

もちろん、労力が少ない分だけ見返りが少なくなる可能性も高い。特に前商会主を含むシャオジー一家を良く思わない人間に経営権が渡れば、砂糖の件すら反故にされる可能性がある。

『でも、あれはお父さんの物です』
シャオジーは散々迷ってから、絞り出すように言い放つ。

今回のシャオジーの言葉は、感情的な部分から発せられている。シャオジーは子供ではあるが、聡い。だから優斗が最善と告げた事をある程度理解した上で、捨てられない、ではなく、捨てたくない、と言っているのだろうと優斗は考える。

感情論を理路整然と是正する事は難しい。感情論を覆す事が出来るのは、さらに大きな、もしくは強い感情である、と考える優斗は、

己が望む状況を作り出す為に考え、言葉を探す。

『商売と言うのは、究極的にはお金だ』

『だったら、あれにかかったお金は！』

『うん。だから、お金は取戻しつつ、あちらを切り捨てる、と言う事でどうかな？』

優斗の提案に、シャオジーは縋るように先を求める。

その後、優斗が畳み掛ける様に口にしたプランの全てを理解出来なかったシャオジーだが、それにも関わらず頷き、この件の全てを優斗に託す事となった。

シャオジーとの話し合いが終わった優斗は、絶対に部屋から出ない様に、そして誰も部屋に入れない様に厳命すると、彼女を残してコルト商会へと向かった。

理由はもちろん、船の積み荷を売る為だ。

「おや、優斗様。話し合いの方はよろしいのですか？」

「どうでしょう。私は参加できる立場にありませんので」

「またまた、ご謙遜を

それで、今回はどの様なご用件で？」

タガルとあいさつを交わした優斗は、応接室の机に積荷の一覧を乗せる。そして少し困った顔をすると、紙の上から指先で机を叩く。

「もちろん、商談に」

「それはそれは。ありがとうございます」

「実はこれらの商品、実際に仕入れた物でして」

「あぁ、なるほど」

タガルはにやりと笑い、優斗もそれに倣う。

タガルは未だに、優斗の事を連邦の人間だと勘違いしている。両方の言葉を話せる人間が王国に数えるほどしかいない以上、その誤解はある程度仕方のない事だ。

そしてタガルは、優斗がコルト商会の見極め役だとも誤解しているが、優斗はそれをあえて訂正しておらず、故にタガルは実際に積荷まで準備するほどの徹底ぶりにも関わらず、それを見破る事が出来たのだと言う自負を持っている。そう推測した優斗は、それを利用して彼に、ここで優斗に恩を売っておくべきだと判断させるよう、仕向けた。

「これが商品の目録と証明書です」

「中々良い買い物をされたようですね」

「この国では隣国の品が流行していると小耳にはさみましたので」

「その通りです」

優斗の持つ情報は、全て資料の受け売りだ。

奴隷による大規模農園が存在する王国では、貴族達がそれを下賤な庶民の食べ物だと揶揄し、主に平民が農業に従事している公国の品を好む傾向がある。昨今ではそれに拍車がかかり、奴隷の手を介さない品物を競って購入する風潮が現れ、公国品の人気と価格が上がっている。

「ほとんどの仕入れは行商人からで、積み込みや荷下ろしは船員が請け負う予定です」

「なるほど。優斗様は商売がお上手だ」

奴隷の手を介さない、と言うのは勿論輸送も含まれる。

これに実際に介していないかと言う点は重要ではなく、それを保

障するモノが存在する事こそが売り先である貴族達には重要だ。
タガルは優斗が差し出した証明文書に目を通しつつ、普段の買取許容額を思い浮べ、その最大値を口にする。更に上乗せしなかったのは、不自然過ぎる価格設定で逆に不信感を与えたり、侮られたりしない様にと言う配慮であり、最大値を選んだのは優斗の誘導通り、恩を売っておくべきだと判断したからだ。

優斗はその結果に満足し、表面上はそれが当然だと言わんばかりの態度で交渉成立を宣言する。

「荷物の引き取りは明日の午後以降で構いませんか？」
「えぇ、もちろんです。優斗様のご都合の良い時間を指定して頂いても構いません」
「いえ、その条件で日時はお任せします。その時に品物の確認をして頂き、再度詳細な交渉を行うと言う事で」
「それには及びません」
タガルの言葉に、優斗は少し驚く。

目録と現品の差異や、品質の確認は重要な事だ。
優斗は品物を見て指摘を行いつつも値引かない事でさらなる恩を売って来るだろうと考えていたが、その予想ははずれた。

「品質に関しましては、優斗様を信用しております。明後日の早朝に荷馬車を港へ向かわせますので、そちらに積み込みをお願いできますか？」
「わかりました」
「支払いもその時にさせて頂く、と言う事でよろしいでしょうか？」
「では、荷馬車と共にこちらに伺わせて頂きます」
一瞬、現金でなく引き換えに特産品を、と告げようとした優斗だが、なんとか踏みとどまる。

優斗がこのままコルト商会で取引をする場合、タガルの勧めるモノは連邦で売れる品物に偏る事になる。そして、それ以上に厄介なのが、勘違いを指摘しないまま商談を行う必要があるので、リスクが高い。

公国へ帰る船の積み荷の買付も任されていると言う事実を告げても良いのだが、話が大きくなればなる程シーイの方に話が漏れる可能性も高くなり、別の意味で嘘が露呈する可能性も高くなる。

「では、また明後日に」

「はい。よろしくお願いします」

こうして無事に交渉を終えた優斗は、タガルにこの件は他言無用だと告げると、席を立つ

その言葉に、更なる恩が売れたと内心でほくそ笑んだタガルに見送られて商会を後にすると、優斗は港へと向かう。そして船に乗り込み、割り当てられていた船室へと入る。

「2人とも、宿に移動するから準備して」

「はい」

返事をしたリーチャと無言で準備を始めたチェーゼを横目に、優斗は自分の荷物を全て持ち出す為の準備を始める。

優斗は当初、自分とシャオジーだけが街の宿に移り、2人にこの部屋を使わせる予定だった。

それは折角整えた外見を、納屋や厩で過ごさせて汚される事も、奴隷2人分の宿代を支払うのもどうだろうと考えた結果だ。

「ちょっと事情が変わったから、2人にはシャオジーの世話を頼みたい」

「わかりました」
「あぁ」
優斗はこの2人をコルト商会に売る際に、品目から外していた。

理由は幾つかある。
例えば、彼らの口から自分の本当の身の上がバレる事を懸念した、とか、奴隷を介さないと言いつつ奴隷を取り扱っていれば、手伝わせたと思われるのでは無いかと考えた、とか。

その中で最も大きなモノは、シャオジーの護衛だ。
シーイからすればシャオジーは邪魔者以外の何者でもない。彼がどう言った人間か知らない優斗だが、強硬手段にでる可能性を考慮しない訳にはいかないのだ。何せ、こちらから事を構えるつもりなのだから。

「準備出来た？」
「はい」
「あぁ」
忘れ物が無いか確認した優斗は、荷物を持つと言うチェーゼの言葉を受けて全て手渡すと、手ぶらで船室を後にする。

2人を先導して宿に向かいながら、優斗は今後の予定について頭を巡らせる。
考えているプランは大まかに3つ。本命はもちろん、予備の2つの内容、そして移行する場合の手法、予想される問題点とその解決策を考えながら、宿に到着して2人にシャオジーを任せたらすぐにでも行動を開始しようと考え、足を速めた。

選択の道標（後書き）

優斗くんが決意する話でした。

利益優先と言う理論武装しながらもやはりどこか甘い彼は、どれだけの利益を掴み取る事が出来るのでしょうか。

商いの境界

翌日の午前中一杯をかけて、優斗はを羅針盤を試作した。

用意した材料は銅と磁石になるべく透明な硝子、赤ワイン、そして方角を書き記した、コンパスカードと呼ばれる物。

まず、赤ワインを蒸留して不純物を取り除いた優斗は、精製された液体をシャオジーのギフトで水とエタノールに分離すると、それらを割合を変えて混ぜた物を幾つか作成する。そしてそれぞれで検証実験を行った結果、水が少し多めの物を採用する。

次に、職人に依頼して銅で器を作らせ、磁石とコンパスカードを配置出来る様に手を加えると先ほど作った液体で内部を満たし、硝子で作った蓋で密封できる様に微調整を行う。

最後に安定を保つために銅で大きな輪とU字型に土台を付けた物を1つずつ作り、先ほど完成した本体の両端に可動部兼接続部を設置して両脇から吊るすように配置すれば完成だ。

前日に大まかな材料と加工の手配をしてあったとは言え、正確な製法も、構造の詳細も知らない優斗によりたった半日で作り出された試作型羅針盤は、接合部の滑りの悪さもあり揺れを軽減出来る程度も低く、まだまだ改良の余地もあるのだが、今の優斗にはこれで十分だった。

ちなみに、急な金属加工の依頼であった為、実作業は工房で弟子として下働きをしている人間が行った。そのせいか表面の処理が甘く、全体的に少し粗が目立つ。

船上で使える羅針盤と言う物は、一見して多大な利益を生み出す様に見えるが実際にはその扱いはとても難しい。

まず、１つ手に入れれば構造を知る事が容易いと言う問題がある。製法を秘匿出来ないと言う事は独占が出来ないと言う事であり、大きな商会が量産を行えば、価格の面で勝つことが難しい。

かと言って、公国や王国の商会に高価格で製法を売る事も難しい。新型の羅針盤は船に１つ欲しい物ではあるが、なくても問題ない物でもある。公国や王国で船便と言えばそのほぼ全てが帝国を含む三国間を結ぶモノであり、近海での航行ならば陸を基準にすると言う手もある。漁師には陸を離れて漁業を行う者も多く居るが、彼らにはそこまでの支払い能力は無い。

優斗は三国の航海事情を知っていた訳ではないが、それでも独占が出来なければ個人で得られる利益が少ない事は理解していた。優斗はその問題をクリアする術を持っていないが、その代りにこれの価値を最も見出してくれる相手に心当たりがあった。

宿に戻ってシャオジー達と遅めの昼食を摂った優斗は、１人でその心当たりへと向かう。

『どうも、シーイさん、でよろしかったでしょうか？』
『あぁ、好き呼べ。で、お嬢様はどうした？』
『置いてきました』
予想外にあっさりと通された優斗を待ち受けていたのは、昨日コルト商会で会ったシーイだ。

優斗はシーイについて、シャオジーから大まかな人となりを聞き出していた。
シャオジーの説明を優斗なりにまとめると、こうなる。良く言えば上昇志向が強く、悪く言えば欲深い人間であり、即物的。商人としてはそれなりに優秀なので商会でもそこそこの地位に付いている。

今回の商談は長期に渡って連邦を離れる為、シャオジーの父親が信用している大半の者は国内に残っており、それ以外の者はシャオジーと同じ船に乗り込んでいた。そして彼にとっては運よく、シャオジーにとっては運悪く、シーイは生き残りの船団の中では最も地位が高い。

『実はシーイさんと内密にお話したい事がありまして』
『俺も暇じゃないんだが、お嬢様のを連れて来てくれた恩人を無碍に扱う訳にもいかんからな。話くらいは聞こう』
『ありがとうございます』
丁寧に腰を折って礼を告げる優斗の態度に、シーイは満足そうに首を縦に振る。

シーイのご機嫌取りに成功した優斗は、営業スマイルから一転、少し困り顔を浮かべると、考えていたプランを実行する為、口火を切る言葉を紡ぐ。

『実は、彼女を送り届けたお礼の件なのですが』
『ん、あぁ。なるほど、そう言う事か』
その言葉を聞き、シーイは優斗の訪問を、あてが外れたのでこちらに集りに来たと判断し、ならば扱い易い相手だと考え、にやりと笑う。

金で動く相手ならば、幾らか掴ませて説得役を任せる事も可能だ。優斗の見た目からそこまで歳の差も無いだろうと予測出したので、くっつけて彼女がこちらに永住する様に仕向けると言う手も考えられる。それならば現地の商会と縁を結ぶ為と言う言い訳も出来るので、手を汚す事なくシャオジーを排除する事が出来る。

『何が望みだ？』

『約束したのは、連邦との取引における砂糖の独占契約でした』
『おいおい、それはさすがに』
シーイは優斗の馬鹿げた発言に苦笑する。

彼らが現在手掛けている商売は、国と国が行う貿易の代理に近く――たった1品であったとしても――一個人同士の約束で独占を行うなどと言う事は不可能だ。シャオジーはこの取引を、商会と優斗と言う個人の取引だと考え、受け入れたのだが、例えば王国が直接連邦に要請し、許諾されれば代理人である商会との独占契約など意味を持たない。逆らえば代理の地位を失い、下手をすれば営業停止。従えば契約違反で、商会の存続が危ぶまれる。

『当然、子供相手に無茶を言って見ただけです』
『まぁ、そうだろうな。俺ならそんな契約、絶対交わせん』
『私も、反故前提の契約を交わす気はありません』
そう言って2人が笑いあっていると、扉が叩かれる。

入って来たのは若い男で、シーイと同じく優斗がコルト商会で見た顔だ。
彼は手際よくお茶を机に置くと、無言で退室して行く。

『そこで、提案があるのですが』
『なんだ?』
『実は私、王国の隣国に当たるルナール公国の領主様と懇意にして頂いております』
優斗がそれを口にしただけで、シーイは優斗が何を言いたいのかを理解する。

それがもたらす利益と、手間を考えた結果、シーイは提案には乗るべきではない、と判断するが、続く優斗の言葉でその考えを改め

る。

『ユーシア領はここから北の、海に面した場所にあります』

『なるほど、そう言う事か』

シーイは、王国内を経由して公国に直接品物を売る事に関して、今の状態では手間と利益が釣り合わないと判断した。王国の港を使う以上、そちらの信用と義理もある。

しかし、優斗のもたらした追加情報が真実で、直接船で乗り込める場所であるのならば一考の余地がある。売り先が多ければ、そしてその両方が欲しがるのであれば、値段は容易に釣りあがる。

『王国の地図はお持ちですか？』

『海沿いだけな』

シーイの返答に、優斗は地形の情報を売れなかった事を残念に思いながら、準備していた地図を取り出す。

サリスよりやや南から帝国までの海岸線付近を書き写した地図には、サリスとオルド王国の首都、そしてユーシアの位置が書き込まれている。

『連邦からならば、距離は対して変わらないと思うのですが』

『確かにな』

シーイの返答に、優斗は内心でこっそりと安堵する。彼は連邦の大まかな位置すら知らないので、今の発言は完全にカマかけだ。

地図を見ながら、シーイは悩んでいる風を装う。実際に考えてはいるのだが、そのポーズの目的は優斗から自分の都合の良い条件を引き出す事だ。

『もちろん、独占などと言う気は御座いません。是非王国とも良い取引を続けて下さい』
『そりゃーそれはな』
『我々は連邦から買い取りたい物があります。そしてその代りとして、こちらの品物は勿論、それ以外にも技術を提供したいと考えています』
優斗はその言葉と同時に、机の上に試作型羅針盤を置く。

袋から取り出したそれを不思議そうに観察するシーイが、これは何だと視線を投げかけて来るまで優斗は無言を貫いた。

『これは？』
『これは羅針盤です』
『羅針盤？』
『船の上でも使える方位磁石ですね。最も、これは私の手作りですが』
手作りと言う言葉に、シーイはまた視線で疑問を投げかける。

それを待っていた優斗は、周りを見渡し、誰も居ない事を確認するジェスチャーをした後、声を潜め、重大な秘密を明かすようにそれを口にする。

『これはまだ秘密の技術なので、王国には持ち込めないんですよ』
『ほう』
『幸い、私は製法を知っていましたので、簡易ですが再現しました。机を揺らして頂ければ、性能は一目瞭然です』
優斗の言葉に促され、シーイが机を揺らす。

しかし、自分で机を揺らし、同時に羅針盤の表記を見ようと思えば、思い切り揺らしているつもりでも観察できる程度には緩くなら

ざるを得ない。実際の船上ではもっと揺れが激しいので乱れる可能性が高いが、この程度であれば試作型羅針盤でも余裕を持って受け流す事が出来る。

『確かに揺れの中でも使えるな』

『でしょう？　正式な物ならもっと性能が良くなります』

『そうか。だが、それがどうした？』

シーイの言葉に、優斗は驚く。

予想していた反応の1つではあったのだが、外海へと商売をの手を広げている商会を乗っ取ろうとしている人間が、この技術の重要性に気付かない訳がないとも思っていた。

とは言え、対策と説明の準備はしてあった優斗にとって、驚きはしても慌てる展開ではない。

『常に正確な方角が判れば、遭難は減るはずです。今回、シャオジーさんが遭遇した様なモノは、特に』

『陸地や空を見れば方角は判る。それに、嵐に合えば操舵が効かないのだから同じだろう？』

『いや、それはそうですが』

優斗は呆れながらも次なる説明を頭に思い浮かべる。

同時に、目の前の男は商会に所属する一商人としてはそれなりに優秀でも、それ以外の事はイマイチなのだろうとも考える。分業による個々の得意分野を生かした効率化は、優斗にとって馴染みの深い事柄だ。

『磁石が使えないのは時化や嵐の時です。そうなれば、太陽も星も見えません』

『なら、地図と陸地を見比べればいい』

『陸の付近ならそれで良いと思います。でも、連邦からこちらまで来る時も、ずっと陸が見えていた訳ではないのではないですか？』

『あぁ、そういえばそうだな』

呑気な言葉に、優斗は自分で説明する事自体が無駄であると考え始めていた。

もちろんその場合の手段も考えてある。

例えば、彼と共にやってきた連邦の船乗りを連れて来て貰えば、羅針盤は大絶賛されるだろう。羅針盤によって買える安全を考えれば、得られる利益以上の絶賛をし、買い取る様に示唆してくれる可能性は高い。

『まぁ、別に買い取ってもいいが』

たかがそんな物かと言いたげなシーイに専門の人間を呼んで欲しいと伝えると、彼はしぶしぶながら先ほどの男を呼び、伝言する。

呼び出した人間が来るまでの間、次善の品を出しておこうかと考えた優斗だが、あまり無駄に手札を晒したくないと考え、しかし時間を無駄にするのは勿体無いと、世間話でもするかのようにそれを口にする。

『そう言えば、蒸気機関と言うモノをご存知ですか？』

『いや、なんだそれは』

『蒸気の力で歯車を回し、船に取り付けた外輪や車の車輪を回す装置の事です』

説明をしながら、しかし優斗はそれが彼に理解される事を期待していなかった。

ただ、優斗が彼らとは違う体系の技術を有しているのだと、それ

を知ってもらう為だけに、実機の準備すらしていない蒸気機関について口にした。

『蒸気と言うと、水を火にかけた時にでるあれか？』

『その通りです』

『あれで歯車が回せるのか？』

『水は水車を回します。それに火の力が加われば、そのくらいは造作もないと思いませんか？』

優斗には液体と気体が相互に変化する際に云々と言う説明をする気は無く、曖昧に問い返すにとどまる。

しかしその説明の何処かがシーイの琴線に触れていまい、予想外にも食いついて来る。

『その、蒸気機関とやらはここにはないのか？』

『すいません。残念ながらまだ試作段階の物でして。簡単な実証実験くらいしか出来ません』

『それでいい。見てみたい』

優斗にとって、中年の男が目を輝かせて迫ってくるのは、嬉しくないどころか気持ち悪くすらある。

仕方なく、優斗は水の入った薬缶と火に布、そして何か細い管状になっている物を準備して欲しいと告げると、シーイは自らそれらを探しに出て行ってしまう。

十数分後、シーイが優斗の依頼した品を携えて戻って来ると、薬缶の口に管を宛がい、蒸気が逃げ出さない様に布で厳重にぐるぐる巻きにするとそれに火にかけ、シーイが不在の間に不要な紙で折っておいた折り紙の風車を手に持つ。

『ほうほう、それで？』

『沸騰するまで待って下さい』
『わかった』
『シーイさんは、こう言った技術がお好きなんですか？』
優斗が漏らした疑問に、シーイがにかっと笑う。

そして懐から時計を取り出すと、ぜんまいを回してから優斗に見える様、掲げる。

『ばね仕掛けの時計だ。こんなもの、見た事がないだろう？』
『は、はぁ』
『ん？　もしや王国にはないが、そちらの国にはあったりするのか？』
優斗が頷くと、シーイは少し残念そうに懐中時計をしまう。

その反応に、優斗は2つの意味で失敗した事に気付く。
1つ目は、公国で見た時計は柱時計や時計塔の様な建物に付属した物ばかりで、懐中時計の様な小さなものを見た記憶はない事。
もう一方は、シーイの機嫌を取る為にも驚き、褒め、煽てておくべきだったのでは、と言う事だ。

『お、湯が沸いたようだぞ』
『そろそろですね』
優斗は風車を管の先端に配置し、余った布を逆の手に持って薬缶の蓋を押さえると、管から蒸気が噴き出し、風車が回る。

その光景はシーイもある程度予想していた様で、優斗に向けられた視線から次に何が起こるのか期待しているのが判るが、優斗にそれ以上の準備は無く、この先は口頭のみでの説明となる。

『これをもっと大きな装置で行い、風車の代わりにシリンダーと言

う機械を取り付けます』
『シリンダー？』
『はい。それが噴き出す蒸気の風を歯車の回転に変えるのです』
ここからは機密ですので、と誤魔化した優斗に、シーイは期待外れだと言わんばかりの視線を投げかける。

優斗はそれに怯む事なく、言葉を続ける。その態度には、蒸気機関に関してわざと間違った説明をしている事への気負いは見られない。

『他にも我々は様々な技術を持っています。連邦の方々より進んでいる、とは言い難いですが、方向性の違う技術は色々と役立つはずです』
『俺は自動的に動く物は好きだが、研究者じゃないんでその辺はどうでもいい』
『お金にならないから、ですか？』
『そうだ』

優斗が次の話をどう切り出すか考えていると、部屋の扉が叩かれ、シーイの返事で初老の男が入って来る。
男はシーイよりもかなり年上の様に見え、背も高く体格が良い。

『呼んだか、シーイ』
『おう、船長。おせーぞ』
『娘の土産を買いに出るっつっただろーが。戻って来ただけでもありがたく思えや』
ぞんざいでもそこそこ丁寧にしゃべるシーイと違い、船長と呼ばれた男の言葉遣いは荒々しく、優斗には完全に聞き取る事が出来なかった。

それでも、彼が誰で、どういう目的でここにやって来たかは判っているので問題は無い。

『お前に見て欲しいもんがあるんだとよ』
『なんだそりゃ？　俺は目利きなんてできんぞ』
『そんなもん、お前には期待してねーよ。おい』
『はい。船長さん、こちらです』
優斗が羅針盤を差し出すと、船長はまず外側の輪を指先でなぞり、次に爪で硝子面を覗く。

そしてそこが方位磁石となっている事に気付くと、指を差して問う。

『で、これはどんな磁石なんだ？』
『時化や嵐の中でも正確な方角を調べられる、羅針盤と言う物です』
『そりゃまた、胡散臭いもんだな。おい、シーイ。実際んとこどうなんだ？』
『こんな感じだ』
シーイは船長を机の前へと移動する様に促すと、先ほどと同じ様に羅針盤を揺らす。

机は先ほどよりも強く揺れており、優斗は、表面上は営業スマイルを浮かべつつも試作型羅針盤は大丈夫だろうかとはらはらしながらその光景を見つめる。
検証が始まって数分、揺らしても安定し続ける試作型羅針盤の指し示す方角が実際に正しい事を確認した船長は、優斗が予想した通り興奮気味にシーイ詰め寄る。

『おい、シーイ。これは絶対買え！』
『なんだ、そんなに良い物なのか、これは？』

『良い悪いじゃねぇ。これがありゃ、確実に航海の時間が短くなる。遭難だって減るぞ！』
『……そんな都合の良いもんなのか？』
『あぁ、ここと連邦を何度も往復してる俺が言うんだから間違いねぇ。陸も空も見えなくても方角がわかるんだぞ！？』
『そ、それはそんなに凄い事なのか？』
興奮しすぎて顔を真っ赤にする船長に、シーイは若干引きつつも頭をかく。

先ほど、こんなものと馬鹿にした品がここまで絶賛されている事に、シーイはどう対応すべきか悩む。
優斗の目の前で船長に羅針盤を見せた事も迂闊だった、とシーイは考えたが、そこまで重要な品なら借りて行く事も出来なかったので結果は同じかと開き直り、優斗に向き直る。

『何が望みだ？』
『私とシーイさんが、最大の利益を得る事です』
そのまま持ち帰ってしまいそうな船長からやんわりと羅針盤を奪い返すと、優斗はそれを袋に仕舞う。

そして一旦シーイから視線を逸らすと、名残惜しそうな船長に向かい、言葉をかける。

『すいません。これは私が即興で再現した粗悪品なので、あまりみられると恥ずかしんです』
『あれが粗悪品だと！？』
『正式な作り方をすれば、嵐の中でも確認できるくらいの精度になります』
『おぉ』
優斗の言葉は真実ではあるが、正式な作り方を知る方法は無いの

で、騙しても居る状態だ。

そんな状況でも優斗は変わらず営業スマイルを浮かべ、本題とも言うべき交渉を始める為、シーイに向き直る。

『この地で白い肌と髪が尊ばれている事は知っていますか？』

『あぁ、まぁ。うちの商会が選ばれた理由の1つらしいからな』

『シャオジーが一家で来た理由、と言う訳ですね』

『そうなるな』

優斗の唐突な話題転換に、シーイは不思議そうにしながらもしっかりと返答する。

余計な茶々を入れられなかった事で、優斗の口は滑らかに嘘の事柄を口にし続ける。

『実は領主様がシャオジーさんの外見をとても気に入りまして。是非彼女の商会と取引がしたいと』

『あぁ、なるほど。お前は領主のお抱えだったのか』

『ご想像にお任せします』

シーイの少し脱線気味の指摘を受け流しながら、優斗の心臓は彼の予想に反して静かに脈打っている。

それを自覚した優斗は、嘘を付き、相手を騙して利益を貪ると言う行為に自分が緊張していないのだと判断し、意外な一面を発見した気分になる。

『ですからこの技術は、既にシャオジーさんの経営する商会に渡す事になっているのです』

『だから手を引け、って訳か？』

『いえいえ。ここからは私の独断なのですが、聞いて頂けますか？』

『聞くだけ聞いてやろう』
『ありがとうございます。
では、シーイさん。この地で商会を開きませんか？』

優斗の突飛とも言える提案に、シーイは唖然とする。
そして彼が立ち直るのを待つ事無く、優斗はその詳細な内容について説明して行く。

『シャオジーが商会主になるように計らい、その交換条件として投資させるんです。そして王国に入って来る連邦の品を一手に引き受ける。
連邦に残った方々を相手取って商会を乗っ取るより、安全で確実な上、利益を自分の懐に入れる事も容易いですよ？』

シーイの心が揺れている事は、優斗の言葉に反応する1つ1つの挙動から容易く把握出来た。
故に優斗は、攻めすぎは疑いを濃くする可能性があると、少し緩急をつける為に軽い口調で次の言葉を口にする。

『もちろんそれはあくまで王国内の話で、公国の方は私が窓口です。どうです？　お互い、お金になる話でしょう？』

優斗がにんまりと笑うと、シーイも引きつり気味ではあるが口元が笑みを形作る。話が思いもよらぬ大きさに膨れ上がった事に驚いているのだろう。その反応から、優斗はもう1押しだと考え、言葉を続ける。

『もし、未開の異国で商会を発足させ、成功を収めれば歴史書に名が載るかもしれませんね。仮に大成功をおさめ、王国での影響が強くなり、連邦にとって有利な取引を行えるようになれば、英雄、と

すら呼ばれる事もあり得るかもしれません』

金と名誉。

これ以上に魅力的な物は少なく、今、手を伸ばせばそれを得られるかもしれない。しかも、失敗しても出資相手は海の向こう。捕まる前に金を持って逃げ出す事も可能だ。シーイはそう考え、生唾を飲み込む。

『提案は魅力的だ。だがな、お嬢様が俺に投資をするとは思えないのだが？』

シーイの指摘は、もっともな事だ。

例えそれまで信用していた相手であっても、シェアを奪う形で商会から独立する人間に対して積極的に投資を行う者は少ない。そしてシーイは、どう見ても彼女に好かれていない。

『シャオジーにはもう話がつけてあります』

『本当か！？』

『はい。

人員は必要最低限だけ、出向と言う形でシーイさんの方に。そして積荷の半分を投資と言う形で引き渡す、と言う事でどうでしょうか』

シーイは優斗の言葉を口の中で反芻し、何処か穴が無いか、騙されているのではないかと思案しているが、興奮しきった頭は相手の気が変わる前に早く頷けと急かしている。

そんな状態のシーイが変更を指摘した点は、たった1点だけだった。

『投資じゃダメだな』

『何故です？　失敗しても全額を返済する必要が無い、シーイさんに優位な条件だと思うのですが』
『成功は大前提だ。だからこそ、成功した後に口出しされる方が問題だろう？』
『なるほど、そう言う考え方もありますね』
『俺は商会を持ってまで便利な請負をやる気はねぇんだ。だから金は借りる』
『失敗した時は考えない、と言う事ですか？』
『心配すんな。すぐに返してやる』
興奮気味に自信満々なシーイに内心で呆れながら、優斗は考える。

シーイの読み通り、彼の立ち上げた商会を投資金を盾にシャオジーが連邦から連れてくる信用できる人間をねじ込んで子会社化してしまおう、と言うのが優斗の考えていた一番理想的なパターンだ。
それを外される形になり、どれを次善の手に据えるべきか決めると、優斗は再度笑顔を張り付ける。

『では、私が資金を準備し、お貸しする形でよろしいですか？』
『は？　積荷の半分じゃなかったのか？』
『実は、シーイさんの信用出来る者を何名か商会に残す事でご指摘の点は解決できると考えていました』
『おいおい、まさか投資でなけりゃ金は出せないとか言うんじゃないだろうな』
『私は言いませんが、シャオジーは言うかもしれません』
『話は付けてあるって言ったよな？』
『はい。ですから気が変わる前に話を付けたいところなのですが』
優斗が困り顔で告げた言葉に、シーイの表情に少しだけ焦りの色が浮かぶ。

そして焦ったシーイは、優斗が誘導する前に彼が求めていた言葉

を口にする。

『まぁ、金の出どころはどこでもいい。だからお前から借りる事でかまわん。ちなみに、どっから出すつもりだ？』

『私がシーイさんに貸したと言う証明書を商会に譲渡する形を取りたいと思っています。私に貸すのだと言う建前であれば、シャオジーも説得しやすいと思いますので』

『あぁ、なるほどな。それならお前が間に入るだけで、最終的には商会から借りるのと同じ訳だ』

『えぇ。ですからそのつもりで契約内容を決めて貰えますか？』

『そうだな』

『私としましては、前金と引き換えに船と積み荷を引き取った後、売り払ったお金で残りを支払おうを考えております』

『妥当だとは思うが、前金は準備出来るのか？』

『もちろんです。むしろ、その程度準備出来ない様では、信用して頂けませんでしょう？』

『ふ。確かにな』

話がまとまる方向に流れ始め、優斗はこれ以上の長居は無用と考え、一旦ここで話を切るべく立ち上がる。

まだ詳細を詰めていない上に正式な契約書の作成は現金を準備してからだと考えながらも、優斗は一旦的な交渉の成立の意思表示として手を差出し、シーイがそれに応える様に握り返す事で握手を交わす。

握手を交わしながら、シーイは先ほど見た蒸気機関の事を思い出していた。そして羅針盤と言うあれ程の絶賛を受ける物を作成した技術力を持つ相手ならば、本当に優斗の言う通りに実現するのではと思え、どうにかそれを手に入れたい、と言う思いが浮かんでくる。

『ところで、羅針盤と蒸気機関の事なんだが』
『申し訳ありませんが、羅針盤は先約がありますので”直接取引をする事”は不可能です。そして蒸気機関は、こちらはすいません。まだ開発中の物なので』
『そう言うな。あぁ、もちろん羅針盤はそれで構わない。だが、蒸気機関をどうにか頼む。完成したら、で構わない。金はちゃんと払う。どうだ?』
『そう言われましても、私の判断では』
『完成したら優先的に買付をすると言う契約するだけだ。代わりに、借用契約書をこの場で作っても良い』
『は、はぁ』
『お嬢様の説得が楽になるだろう?』
シーイの提案を、優斗は頭の中で吟味する。

現金の借用契約は基本的に、幾ら貸して、何時までに幾ら返すと言う事を明記するのが基本だ。とは言え、契約書である為ある程度の条件付けが可能であり、何時何処で幾ら渡し、それをどのような形で返すか、と言う方式を取る事も出来る。もちろん後者の場合、貸付をしなかった時には貸す側、今回で言えば優斗の契約違反となる。

それらを加味して考えた結果、優斗はこれが自分にとって一方的に有利なものだと判断する。ユーシアで蒸気機関の開発を行っていると言うのは嘘であり、開発をしていない技術が完成する事は無い。故に、優斗が開発の途中経過報告、技術供与等を条件に盛り込ませず、ただの優先買付契約として締結する事が出来れば、空手形となる。

『こちらにも条件があります』
『なんだ?』

『契約書類は2言語分、同じ内容のモノを準備し、2通に大きな差異があった場合は無効と言う文章を添えて下さい』

『良いだろう。我々は対等であるべきだからな』

大まかな部分の交渉が成立し、優斗とシーイは細かい条件を詰め始める。

譲渡前提の借用契約書と、優斗の所属内で蒸気機関が開発された場合の優先買付契約の書類が各2枚ずつ作られた頃には、辺りは既に暗くなり始めていた。

商いの境界（後書き）

優斗くんがシーイと商談する話でした。

これにより誰にどんな利益、ないし不利益が発生して最終的に誰が一番儲ける結果になるのでしょうか。

虚言の向かう先

疲れ切った優斗はすっかり暗くなった道を歩いて宿に戻ると、まずはシャオジーに軽く報告を入れておこうと考え、彼女とリーチェの部屋に向かい、扉をノックする。

『ひゃあい！？』

『遅くなってごめん。夕食、ど、うえい！？』

シャオジーの返答が聞こえると同時に優斗が扉を開けると、そこには半裸のシャオジーが立っていた。

着替える途中だったのだろう、上半身には何も付けておらず、その手にはリボンが握られている。優斗がノックする直前に無精して両方同時に脱いだ服は、スリップと二重に重ねられた状態でベッドの上に投げ捨てられており、リボンは服を脱ぐ際にひっかかり、解けた物だ。

解けた白い髪のかかる白い肌に、優斗はどきりとする。そしてその光景から目を離せずに居ると、自らの身体を隠す為にシャオジーの両腕が動く寸前、優斗から死角になって居た場所から飛び出した黒い影が優斗の視界を遮る。

視界からシャオジーの半裸が消えた優斗が冷静さを取り戻す暇もなく、次に飛び込んで来たのは同じく着替え中のリーチェだった。

優斗から色々な意味でシャオジーを守るように命じられた彼女は、仮の主人である優斗に危害を加える事はもちろん、押しのける等の妨害行為を行う事も出来ず、しかし命令は実行しなければならないと言う状態に陥った結果、両腕を大きく広げ、その身を盾に優斗の視線を遮ると言う行動に出た。

その結果、リーチェの行動に驚いたシャオジーは悲鳴を上げるタイミングを逸し、リーチェ自身は優斗に対して妨害行動が出来ないと言う理由で退室を要請する事も悲鳴を上げる事も無く、沈黙と静寂が場に流れる。

そして冷静さを取り戻す、もしくは我に返って慌てて扉を閉めると言う行動の切っ掛けを失った優斗は、今度は自らの裸体を誇示する様に立つリーチェの行動に驚き、固まる。

現在リーチェには、普段着用のワンピースと寝巻用の長袖キャミソールが与えられている。どちらも1枚で首から踝のやや上まで覆う服装であり、そして元々ボロ布寸前の衣服しかもっていなかった彼女は、当然ながら自分の下着など所持していない。

彼女は文字通り、全裸で優斗の間に立ちはだかっているのだ。

『あの、優斗さん』

『ご、ごめん！』

数秒かけてようやく立ち直ったシャオジーが遠慮がちに名前を呼んだ事で、優斗は我に返り、ずっと手にかけたままだった扉を勢いよく閉める。

そのまま扉に背を預け、ずるずると床に座り込んだ優斗は、今日一日の疲れが噴き出してくるのを実感しながら、自分の迂闊な行動を反省する。

そして反省しながらも、直前に見た光景を思い出す。

優斗も一応は若い男であり、魅力的な女性の裸体を見れば雄としての本能は否応が無しに発現する。それを無秩序に暴走させない程

度の理性はあるが、欲望自体が無くなる訳ではない。
節操無しではないと自負している優斗には、フレイ相手に数か月間耐え凌いだ実績もある。だがしかし、今後も同じ様に出来るのかと言うのは別の話である。

そういった行動を取らない為にも、優斗はそれを否定する理由を思い浮べる。
商品に手を出すのはダメ。不特定多数とシテいる相手では病気の恐れがある。身体は良いが、顔はイマイチだし。

そんな葛藤とも言える思考が行きついた先は、煩悩を退散させるどころか、事故で見てしまうくらいは仕方ない、と言う本能に忠実な結論だった。

「いやいやいやいや」
優斗はこれでは何の解決にもならないと激しく頭を振り、振り解く様に煩悩と共にリーチェの事自体を頭から放り出す。

想像してしまったリーチェの艶姿を問題ごと頭から追い出した結果、次に優斗の思考に浮かび上がって来たのはその前に見た白い肌だった。すぐに黒い影によって隠されてしまったとは言え、優斗はその光景をしっかりと覚えている。

出会った頃に比べて格段に艶やかな白い髪の垂れかかった肌は更に白い。普段は服の下に隠されている程度ではあるが、それでも確実に女性として丸く、柔らかく発育している身体は、同時にまだまだ子供らしい細く角張って見える部分もあり、その対比が女性の部分を際立たせる。

その光景を思い出し、同時にそれを見た瞬間に心臓が跳ねた意味

を考えてしまった優斗は、先ほどのリーチェ相手とは違う意味で葛藤する。

シャオジーは12歳。優斗から見れば9つ下で、小学生ないし中学生にあたる年齢だ。女性の好みは一般的で普通であり、断じて幼女趣味ではないと主張した事もある優斗にとって、その推測が正しいのであれば由々しき事態だ。

『優斗さん、どうぞ』

「はい！？」

背を預けている扉から聞こえた声に、優斗は立ち上がって部屋の扉に手をかける。

そして少し迷いながらも扉を開けると、いつも通りのリーチェと、頬を赤らめながらやや俯き気味に椅子に腰かけるシャオジーに出迎えられ、勧められるままに腰かける。

相対した事で視界に入ったその姿と先ほどの半裸姿が重なり、優斗は狼狽する。そしてそれを敏感に察知したシャオジーが恥ずかしそうに更に俯く。

「ごめんなさい」

『ごめんなさい、は確か、謝罪の言葉、でしたよね？』

シャオジーの指摘に、優斗は自分が彼女とは違う言葉を使っていた事に気付き、己の狼狽ぶりに頭をかかえる。

『ごめん。そういえば、寝るところだったの？』

『はい。明日は早いんですよね？』

『そうだね。じゃあ、夕食はもう？』

『すませました』

遅くなりそうな上に明日は早いので、夕食は優斗を待つ必要はない。優斗は自分がそう告げていた事を今さらながらに思い出す。

そして鼓動が早くなっている心臓をなんとか抑えながら、なんとかいつも通りに近い態度で立ち上がる。

『とりあえず今日のところは上手く交渉が進んだから、明日は朝から付添いよろしく。じゃあ、おやすみ』

『はい』

そのまま優斗は自分とチェーゼに割り当てられた部屋へと駆け込み、ベッドに飛び込んで頭から布団を被る。

奴隷料金故にベッドが無く、優斗が配分した布団1枚で床に雑魚寝しているチェーゼはそんな優斗に一瞥するが、声をかける事はしない。

ベッドに潜り込んだ優斗は、目下最大の問題である、発見してしまったかもしれない自分の性癖についてあれこれと頭を悩ませる。

優斗は当然、これまでに女性の裸を見た事がある。

一番多く見たであろう、幼馴染のアイツ。不可抗力の事故で視界に入ったアイツの後輩。こちらに来てからならばフレイに先ほどのリーチェ。

そして現在、優斗にとって問題となっているのはそこにシャオジーが足されてしまうかもしれない事だ。

断じて幼女趣味ではないと思っている優斗の感覚で言えば、12歳のシャオジーはその数に入ってはならない。彼女は女性でなく女の子であり、性的な対象ではない。明るい場所で隠すものの無い身体を見た時に特に何も感じなかったクシャーナ・ユーシアの様に。

シャオジーとクシャーナ。優斗は自分が正常である事を確かめる為に、この2人の違いについて考える。

まず、年齢が2つ違う。これが原因であった場合、単に優斗の守備範囲が中学生以上であったと言う凄惨な結果になる。

次に、発育。クシャーナはぺったんこだが、シャオジーは多少成長している。こちらならば優斗はある程度膨らんでいれば良いと言う、結局危険な結論が出る。

そして、反応。クシャーナからは余り恥じらいが感じられず、堂々としている様に見えたが、シャオジーは恥じらっていた様に見えた。これならば、その反応に釣られただけと言い訳出来る。

理由と言い訳を考えている時点でダメなのだと気づかない優斗は、そこまで考えてから、比較の為とは言え年端もいかない少女2人の裸体を交互に思い出していると言う状況に気付き、その行為を客観的に見た場合の変態性に耐えきれなくなり、不毛な思考を止める為に無理やり眠る事に決め、無心で目を瞑った。

翌日の早朝、優斗はシャオジーと2人で港に向かい、予定通り船の積み荷を引き渡す作業に立ち会っていた。

一晩経ち、優斗は何時も通りの冷静さを取り戻しており、時折、昨日の事を思い出してか恥ずかしそうなシャオジーの反応に対しても余裕を持って対応出来る様になっていた。優斗が落ち着く事が出来た理由にして言い訳である、あれは直前の商談が上手く行って興奮していたのと混同したせいなのだ、と言う事が真実であれば、概ね問題のない状況だった。

『この後の話し合いに同席して貰うから。言葉も判らないし、暇だろうけど』
『はい、大丈夫です』
「ちょっといいか？」
荷馬車と共にコルト商会に向かう準備をしながら会話する2人の元に、船長が1人の男を連れて現れる。

キャリー商会に優斗の助言役を頼まれたと言う男は、優斗が既に積荷の売り先が決まっている事と、その金額を説明すると、自分が口を出す必要はなさそうだと呟いて挨拶だけしてその場を去った。
優斗は彼の後姿を見送りながら、マイアが重要で金額の大きすぎる仕事を、商会主の紹介とはいえたかが一行商人風情に依頼出来た理由を理解する。そして彼が助言役と言う名の監視役であると言う事も。

男と別れた2人は、予定通りコルト商会へと向かう。
昨日、2度訪れている応接室に通された優斗がシャオジーと共にソファーに腰かけると、前回同様人数分のお茶と、シャオジーの前にだけ多めのお茶菓子が準備される。

「ようこそおいで下さいました優斗様。お嬢様。今回は良い買い物をさせて頂きました」
「それはよかった」
「はい。更に良い関係を築く為にも、連邦から持ち込んで頂いた品も同じ様に良い値段で取り扱わせて頂ければと思っております」
「今日はその件についてもお話したいと思っています」
優斗が視線を送り、それを受けたシャオジーが事前の打ち合わせ通りにゆっくりと頷く。

2人が何かを交わし合っている風に見える光景に、タガルの緊張

が高まる。

「次期商会主である彼女、シャオジーの代理人として、私は王国最高の商会であるコルト商会様との商談の席に付きたいと考えております。よろしいですか？」

「もちろん、私に異存はありません」

互いに営業用の中でも最上級のスマイルと浮かべる優斗とタガルの視線が交差する。

優斗が代理人と言う好条件に、タガルは裏に何かあるのではと警戒を強める。元々、連邦側の通訳を介しての交渉を予定していた為、意図的な誤訳等による不利な条件を看破出来る人材をまだ準備出来ていない王国側は、交渉のテーブルに着いた時点で不利な状況であった。しかし同じ言葉をしゃべる事の出来る優斗が相手ならば、通訳の誤訳と言う言い訳は通じない。

それでも何らかの手段を講じて来る可能性は高いが、それはどんな交渉でも同じ事であり、タガルの対処出来ない言語の壁により第三者を通さなければならないと言う問題に比べれば些末な事だ。

「私は腹の探り合いと言うのが苦手ですので、正直に申し上げます」

優斗のありがちな切り出しに、タガルはそんな訳があるかと心の中で毒づく。

しかしそれは優斗にとって事実である。もちろん、この世界で渡り合ってきた商人達と比較しての話ではあるが。

「先日は、お恥ずかしい光景をお見せしてしまった事と思います」

「何の事でしょうか？」

「ご配慮感謝します。ここまで来てはっきり口にしないのは逆に恥知らずですね。先日の件とは、シーイとお嬢様の対立についてです」

「……ずいぶんと実直ですね」
「私は個人的にも、コルト商会様とは良い取引が出来る事を望んでいます。もちろん、シャオジーも」
「判りました。ですが、我が商会としては出来る範囲でしか協力する事は出来ませんので、それはご了承ください」
「もちろんです」
タガルが戸惑うのも当然で、商会内部のいざこざを取引先に教えるなどと言うのは非常識な事だ。

それは弱みを見せる行為であり、それを切っ掛けに不利な交渉を強いられる危険性を孕んでいる。

「何故シーイが場を取り仕切っていたかはご存じで？」
「商会主のヂィ様と言う方の船が到着するまでの代理だと聞いております」
「それは彼女の父親の事ですね」
「やはり商会主様のご息女様であられましたか。通りで躾の行き届いた、品の良い方だと思っておりました」
「えぇ。私も鼻が高いです」
まるで自分が褒められたかのような優斗の態度に、タガルは想像する。

商会主の娘と現場の臨時責任者が対立している状況で、娘が全幅の信頼を置いて代理を任せられる相手とはどんな関係であるか。もちろん、野暮な憶測付きで。
その想像の結果、自分がどちらに付くべきか、タガルは考え始める。

「苦言を呈する相手が近くにいないと、調子に乗る輩はどこにでもいます」

「シーイ様がそれにあたる、と？」
「えぇ。ですからこの機会に、不穏分子を一掃して置こうと考えました。しかし本土から離れた我々に、そんな余力は存在しません」
その発想の不自然さに、タガルは眉を潜める。
まず、不穏分子とまで呼ぶ相手に、一端とは言え大きな商売を任せる理由が不明だ。商会主との意思の食い違いと言う可能性はあるが、そうであれば逆に優斗達の方が不穏分子であるとも言える。
タガルがそれに答えを出す前に、優斗はその答えとなるべき言葉を口にする。
「私とシャオジーは海難事故に遭いました。幸い、私達は生き残りましたが今回の交渉担当者が亡くなりまして」
「交渉担当者ですか？」
「えぇ。そして商会主の娘である彼女が今回の代表です」
「は、はぁ」
「あぁ、もしかすると、王国では代表本人が交渉を行うモノなのでしょうか？」
「いえ、そう言った場合もありますが、特にどちらが普通と言う事はありません」
貴族の子息等が家の代表として出席し、実務面はお抱えの商人に任せて商取引を行うと言うのは、よくある光景だ。
一応、筋は通っているように見えるが、どこか違和感を感じたタガルは、これまでの説明を反芻する。優斗の言葉は流暢であるが、まだ覚えたばかりであると思っているタガルは、その不慣れが原因で発生している可能性も考慮し、固執しない様にしながらも違和感の正体を探る事は止めない。
「それは良かった。それで、シーイの件なのですが」

「えぇ。どうされるおつもりですか？」
「現地で商会を設立させ、次回のコルト商会様との交渉を任せようかと」
「ちょっと待って下さい」
優斗はシーイを切り捨てる算段をしている、とタガルは理解していた。

しかし今、優斗が発した言葉の内容はその逆だ。異国の地に置き去りにすると言う意味では切り捨てでないとは言い切れないが、王国と連邦の貿易は、まだ限定的であっても多大な利益を生み出している。それが本格化すれば更に大きな利益を得られるはずであり、普通に考えればそんな大きな商売を切り捨てる理由はない。

「優斗様、まさか」
「別に戦争を仕掛ける予定がある訳ではありませんよ？」
その反応を予期していた優斗の言葉に、タガルの視線に目に見えるレベルで不審と警戒が現れる。

莫大な利益を生む貿易を捨て、切り捨てる相手を放置した場所。そこに戦争を仕掛ければ彼らごと街を焼き払い、領土や上納金を得る事が出来る。それは上手く立ち回れば、邪魔者を抹殺しつつ貿易を行う以上の利益を出す事が可能である事を意味する。

「私も、私の故郷も王国と争うつもりはありません。何なら、一筆書いても構いません」
「いえ、優斗様を信用しておりますので、それには及びません」
国家間貿易の代理と言う大事業を国から任されているコルト商会としては、相手の許可があろうとも、露骨に疑うような行動を取る訳にはいかない。

優斗はもちろん、求められれば一筆書く事も、それを正式な契約とする事も異存なかった。何故なら彼の故郷は遠い異世界にあり、王国と戦争を行う事など出来ないからだ。仮にそうでなくとも、優斗の故郷自体、根本的に戦争と言う行為を許されていない国だ。

「話を戻します。シーイが商会を設立する為の資金は私が貸し出します。これがその借用契約書です」

「……ますます意味が判らないのですが」

そう口にしながらも、タガルは1つの言葉を思い浮べていた。

それは、手切れ金と言う言葉だ。

内部の不穏分子を抉り出す為の必要経費と割り切れば、お金自体が戻ってくるこの状況はあり得ない話ではない。ただし今回に関しては、それによって生じる損益――正確に言えば得られるはずが得られなくなる利益の額が多すぎて、ありえない話だ。

「これは内密な話なのですが、シャオジーは今回の商売が成功した暁には、連邦に戻って商会を継ぐ予定です」

「なっ！？」

「彼女は見た目通り幼いですが、現商会主は彼女と彼女を慕う商人達が居れば問題無いと判断したようです」

優斗の言葉は、もちろん口から出まかせだ。

しかしそれが真実ならば、船団に信用できない人間が混ざっている理由も、幼子が親から離れて遠い異国の地にいる事に対する理由も説明出来る。

タガルは想像する。これは商会主の娘と、彼女の連れ合いである若い商人を試す為の試験なのだろう。そして合格した暁には目の前の2人が商会の中枢となり、現在自分はそんな彼らに恩を売れる立場にある。それはコルト商会に多大な利益をもたらすかも知れない。

タガルはそれをしっくりと来る話であると感じる反面、用意された言い訳であるようにも感じていた。何より、話が良すぎて逆に疑わしい。

「ですからこれを、コルト商会様に買って頂きたいのです」

「それは……。申し訳ありませんが、私の一存では回答し兼ねます」

タガルの中では、まだ捨てていない戦争を仕掛けられる可能性が増して行く。

商会とは基本的に損得勘定で動くものであり、その点を利用してシーイの思考を、まさか金を貸している相手を焼き払いはしないだろうと言う方向へ誘導する。そしてそれを現地の商会に売れば、資金を回収しつつ邪魔者の排除が可能だ。

「連邦から王国に物を売る際には、全て新設したシーイの商会を利用する予定です」

「いえ、しかし」

「コルト商会様ならば、この借用契約書を盾に品物を適正価格で独占買付したり、シーイの商会自体を乗っ取り、下請け化させる事も可能でしょう。

上手くやれば、以前私に要望された連邦の言葉を教える講師も確保出来るかもしれませんよ？」

優斗の提案は魅力的であり、コルト商会にとって好条件であるように見える。しかしそれ故にタガルの中で戦争の可能性が増大する一方だ。

「コルト商会様ならば、この借用契約書に額面以上の価値を見い出してくれるはずだ、と私は考えています」

「確かに、って、あ」
ある事に気づいたタガルが、交渉の真っ最中であるにも関わらず声を漏らす。

連邦に本気で開戦するつもりがあれば、こんな場所でその可能性を匂わせる商談をする事はほぼ無いと言える。仮に開戦するつもりであったとして、王国が負ければコルト商会が存続出来ない事はほぼ確実であり、ならば連邦の人間と言う情報源を得て、そこから得た情報を王に届けると言う手は有効だ。褒章と実際に支払う金額の差異で赤字は確実だが、無防備な王国と心中するよりはましな選択と言える。

以上の事からこの借用契約書は、開戦しなければ商会に様々な利益をもたらし、逆に開戦した場合にも情報を得る事で逃げ出すなり報告して王から褒章を得るなりする事が出来る。
すなわち、どちらに転んでも買い取っている方が良い結果に繋がると言う訳だ。

「買い取って頂けるのであれば、今回の積荷も全てこちらで買い取って頂こうと思っています。そして帰りの積荷の仕入れも」
タガルの反応に上手く行った事を確信しながら、優斗はなおも相手にとって好条件となる提案をし続ける。

何故ならばその提案は全て、優斗にも利益をもたらす可能性が高いからだ。

「優斗様がそこまでおっしゃるのであれば、購入を前向きに検討致します」
「本当ですか？　でしたらこれをご覧ください。準備して頂く代金についてなのですが――」

そう言って優斗が差し出した紙を指差すと、タガルもまたそちらに視線を向ける。

優斗が提示するのは支払に関する条件と今後の流れ。タガルは熱心にそれに耳を傾け、自分が取るべき行動を模索する。

「まず支払いですが、本日持ち込んだ商品の代金と同額。いえ、それプラス王国金貨２０枚分にあたる量の仕入れをお願いしたい。これは主にルナール公国で販売する品でお願いします」

「公国、ですか？」

半ば理由を察しながら疑問を発したタガルに、優斗が嘘を吐く理由は無い。

ちなみに、出発前のカクスでは、王国金貨１枚は公国銀貨約１０枚分であり、公国金貨ならば三分の一に少し満たない程度だった。

「実は、公国への帰りの積荷を仕入れる契約もしていまして」

「なるほど」

特に疑わしい要素も無く、タガルはあっさりと頷く。

そして優斗が今日引き渡した品物の代金は現金で持ちかえると告げると、タガルは借用契約書の内容を思い出しながらこくこくと頷く。

「そしてシーイへの支払い分の残りと、連邦までの航海に必要な様々な小物と消耗品、あと、現金で受け取る予定の金貨３枚と銀貨３０枚を除く全てを船の積荷の仕入れに当てようと思っています」

「なるほど。では、品目等はどうされますか？」

「後で人をやりますので、彼らがどの品を買い取るか判断します。良い品を勧めて下さい。今回の値付けは全面的にそちらにお任せま

す。信用していますので」
「光栄ですが、これは責任重大ですね」
冗談めかしてそう口にするタガルに、優斗は交渉成立を告げて詳細条件を詰め始める。

普段の優斗ならば自分で価格交渉を行うところだが、長引いてボロが出たらと言う不安と、長い付き合いの最初に無用な波風は立てないだろうと言う理由などから、ほぼ全てを別の人間に委託すると言う判断を下した。品目をコルト商会に任せず連邦の人間を派遣する理由は、何が連邦で珍しい物なのかを判断させる為だ。

その後、正式な契約を後日交わす事で合意した優斗は、シャオジーと共にコルト商会を後にするとそのままシーイの元へと向かい、金の引き渡しと共に船へと案内させ、シャオジー自身が船で待機していた商会の全ての者に両親の訃報とシーイの独立を告げ、どちらに付くかの選択を迫った。シーイに付いて行くと表明したのは事前にシャオジーが予想していた通り彼の子飼いとも言える数人のみで、ほとんどが残る事になった。商会主が亡くなったとは言え、突然故郷を捨てる判断を出来る人間は少なく、ある意味当然の結果と言える。

シーイはこれを受けて人が足りないと判断して優斗に相談した為、斡旋してくれるところを紹介する事になった。もちろん優斗は、きちんと掌握して貰う為にもコルト商会を推す予定だ。

涙ぐむシャオジーが商会主であった彼女の父親を慕っていた商人達に囲まれて、その死を悼んでいる光景を眺めながら、優斗はまだ全てが終わっていないにも関わらず少しの達成感を感じていた。同時に罪悪感からバツの悪さも感じていた優斗は、自分の逗留先を手近にいた男に伝えると、無言でその場を去った。

虚言の向かう先（後書き）

優斗くんが自分有利な交渉を展開する話でした。

今回は交渉相手が全員集まって事実確認を行うと全て破綻する程の虚実が織り交ぜられていますが、果たしてぼろが出る事なく全てを終える事が出来るのでしょうか。

互いの船出

優斗は、シャオジーの商会を取り戻すと言う依頼を完遂する過程で、各方面に様々な影響を与えた。

王国側はシーイと言う情報源を得たコルト商会を通じて、連邦の内情を多少なりとも知る事が出来るだろう。そして言語習得も促進される事が予想される。これは今までの不利を覆す程では無いにせよ、対連邦の交渉で取るべき手段が増す事は確実であり、多少の優位を獲得できるかもしれない。

貿易に関しては優斗――と言うよりはむしろと公国――と言う競争相手が出来る為、やや不利益を与えた形になる。タガルには完全な独占貿易であるかの様に説明したが、実際には王国内の独占のみを謳っているので、高値がつかなければ船は公国へと流れてしまうだろう。

そして連邦側にはかなりの不利益を与えている。

少数とは言え知識の有る人民の流出。それに伴う情報の漏えい。優位な交渉体勢の瓦解。それらに伴い、将来的に得られるはずだった利益を全て失った事になる。もしシーイが借金の不利を跳ね除けて優斗の誘い文句通りに台頭すれば別だが、何かの間違いでも起きない限りその可能性は低い。

優斗個人として得たモノは多い。

状況に乗じてキャリー商会の依頼を良い条件でまとめた事で、信用を勝ち取る事になるだろう。

そしてシャオジーとの約束通り、売り込み用のサンプルとして積み込まれていた麻袋1袋程ではあるが、積荷から砂糖を引き取った。さすがに独占契約はしていないが、連邦との交易を行う契約と、そ

れを円滑に熟す為のコネクションも得ている。

優斗はそれらを、シャオジーの依頼で取り戻した商会を切り売りして得たモノだと自覚していた。

しかしシャオジーはそれを危険な部位を切除して商会を救ってくれたと勘違いしている。しかも切除した上でその部分を王国に売りつける事で損を取り戻してくれたとさえ思っており、それは優斗が誘導し、誤解させた結果だ。

実際には優斗の行った行動は目の前の収支をプラスにする為に未来を削り取る行為に他ならず、最終的に連邦の不利益になる事ばかりである。それは連邦の判断次第で貿易を委託されている商会の名誉を傷つけ、将来的な利益を削り取る可能性がある。

しかしそれによって貿易が別の商会取って代わると困る優斗は、試作型羅針盤をシャオジーに譲り、量産する権利を製法と共に譲渡した。もちろん対価に関しては契約に盛り込まれており、次回以降の貿易で羅針盤で得た利益の何割かを連邦の品で受け取る事になっている。

全ての取引と契約を終えた後、早々に王国を立ち去ろうと考えていた優斗の予定は大きく狂い、既に２０日以上が経過していた。

長引いている理由は、王国の外交官に会って欲しいと言うコルト商会の要請を受け入れたシャオジーが優斗に同席を求め、それを断りきれなかったからだ。

タガルの話によればサリスから王国首都まで早馬の手紙が届くのに約三日かかり、それからその外交官がこちらに向かって来るのに更にその倍以上の時間が必要になる。それはあくまで旅が順調であった場合であり、有力者である外交官が地方領主に乞われて晩餐等

に参加する等によって遅れが出る可能性があり、そもそも準備やすぐに手が離せない用事等があり、それらに時間がかかれば更に伸びる。

そして優斗達の航海と同じだけの日数をかけてやって来た外交官との会食を終え、ようやくシャオジー達が連邦に向けて出港する日がやって来た時には既にそれだけの時間が経過していた。

もちろん待っている間、優斗も遊んでいた訳ではない。

例えば、コルト商会から買い取った荷物を積んだ公国行きの船に手紙と砂糖を預けて送り出したり、連邦の人々とコミュニケーションを取って英語力を磨きつつコネクションの拡大を図ったりしていた。

ちなみに滞在費と公国への船便の手配はコルト商会持ちと言う事になっており、逗留先は商会が懇意にしている宿へと移っている。

宿はコルト商会が妙な気を回したせいで４人部屋となっており、優斗とシャオジー、リーチェ・チェーゼの４人共が同室だ。部屋には扉で隔てられた寝室が併設されており、そちらを女性部屋にする事で特に問題無く過ごしている。

奴隷２人に関しては現在、優斗の提案でシャオジーが買取り、正式な持ち主となった。

シャオジーに２人を売った際、正直に理由を、連邦までの護衛と身の回りの世話をする為だ、と説明してあるが、これに対して大きな反発はなかった。それは今回の航海に参加していた女性はほぼ全てシャオジーと同じ船に乗って居た為、帰りの船に乗り込むのはシャオジー以外全て男性である事が原因だ。もちろん譲渡の際には王国の奴隷を管理する組織を利用し、現在２人の首輪にはシャオジーの名前が刻まれた鑑札が下げられている。

『あの、どうしてもだめですか？』
『悪いけど、まだ終わってない契約もあるから』
出港当日の今日まで、幾度となく繰り返されたやり取りに、優斗は苦笑する。

不安なので連邦まで着いて来てほしいと言うシャオジーに、仕事があるからと断る優斗。最終的に、出来るだけ損益を補てんするからと縋り付かれた時にはかなり困ってしまった優斗だが、さすがのシャオジーも既に半分以上諦めており、今やこのやり取りは意味のない物になっている。

『そうそう、これ、餞別』
『これは……飴ですか！？』
『正解』
父親の部下たちと再会してから、少しずつ子供っぽい反応もする様になったシャオジーが、袋を受け取ると中身を1つ口に入れる。

氷と厨房をこっそりと手配して手作りした飴は、砂糖菓子の存在する連邦で育ったシャオジーからすればさほど珍しいものではない。しかしそれ故に、連邦を旅立ってからほとんど甘味を口にしていなかった反動が来ているらしい。

『これは嬉しいけど、でも、着いて来てくれないんですよね？』
『その代り、約束はちゃんと守るから』
『はい！』
約束、とは優斗が実利的な意味で提案した再会の約束だ。

シャオジーの商会は皇帝からの親書が使い物にならなくなった為、当初の目的であると言う王への目通りを延期する事となった。しか

しそれ自体を中止する訳にはいかず、一度連邦に戻って仕切り直し、再度親書を認めて王に謁見する予定だ。
本来ならばそれは彼女の父親の役目であったが、跡を継ぐのであればそれはシャオジーの仕事であり、ならばついでに王国首都で落ち合おう、と言うのが優斗の提案だ。

『落ち合う方法、忘れないようにね』
『ちゃんとメモしましたから大丈夫です』
『予定通りいけば、再会は2か月後くらいかな』
『そうですね』
2か月と言うのは連邦からこの地までの予想往復時間だ。

優斗はその間に為すべき事を為し、王国首都へと向かう予定だ。
王国内を移動するにあたって、優斗の黒髪は不利に働く為、タガルが身分証明を準備してくれた。それがあれば主要都市と商会の影響が強い場所では問題無いが、間違っても辺境の村へは立ち寄るべきではないと、タガルは優斗に説明した。逆に言えば、主要な街道を通り、首都へ向かう程度であれば危険度は低い。問題は国境越えとそれに伴う関の通過だと言う事なので、優斗はそれをクリア出来れば陸路を、出来なければ再度海路を使って王国首都を目指す予定だ。

『それまでにこっちも話を通しておくから』
『私も、カリアさんに相談してみます』
カリアさん、とはシャオジー曰く、商会の中で最も信頼できる人、だ。

優斗はその、カリアさん、が信頼できるのか判断する術を持たないが、話を聞く限りシャオジーの父親も信頼して連邦国内の仕切りを任せて来たと言う事なので、心配はないだろうと考えていた。む

しろ優斗が心配しているのは、実質商会の実務面を仕切る事になるであろう人物が、公国との貿易に反対しないか、と言う点だ。

そのまま他愛のない会話を交わす間に時間は過ぎ、シャオジーは迎えに来た船員と共に、出港準備の為に宿を出る。チェーゼが荷物持ち兼護衛としてそれに付き、部屋には優斗とリーチャが残された。

「リーチャはまだ行かないの？」
「はい」
優斗とリーチェが向かい合い、お互いに何も言わず見詰め合う。

出港までまだ数時間あるとはいえ、ここに留まるリーチェの行動に疑問を持ちながらも、優斗はそれを問いかける事に躊躇してしまう。

優斗は、初めて積極的に行った、人を売る、と言う行為に罪悪感を感じていない自分に嫌悪感を抱いていた。しかも、売り先は言葉も通じぬ異国の商人であり、かの国でその黒い肌珍しく、そのせいで見世物にされる可能性は十分にある。だからこそ、2人には恨まれても仕方がない、と考えていた。

しかしそれは、次に発せられたリーチェの言葉で杞憂に終わる。

「ありがとうございます」
「へ？」
「またチェーゼと一緒で、嬉しいです」
予想外の言葉に、優斗はこれから彼女たちに起こり得る境遇を口に仕掛けて、止める。

罵られる覚悟はあっても、自発的にそうなる趣味は無く、何よりあえて絶望的な可能性を伝える必要もない、と判断したからだ。

しかしリーチェは優斗の思考を察したのか、口元に微笑を浮かべながら優斗をフォローする様な言葉を口にする。

「言葉も少し教えて貰いました」
「挨拶とか、最低限だけだけどね」
「チェーゼも感謝してます。ですから、お礼をさせて下さい」
優斗は苦笑しながら、彼女が何故ここに残ったのか、察し始める。

しかしその洞察はまだ浅く、リーチェの次の言葉に驚く事になる。

「出港まで、私の身体を好きに使って下さい」
「そんなのいい、って、えぇぇ!?」
予想していなかった言葉に、優斗は思わず叫び声をあげる。

王国でも奴隷は私財の保有を許可されていない為、彼女が出来るお礼は限られてくる。それが優斗に喜ばれるであろう事も、優斗からふとした瞬間に感じる視線から理解していた。

優斗は叫びながらも、彼女の言動を、その中で一番手っ取り早く、喜ばれるであろう方法を取っただけなのだろうと考えた。しかし、優斗には彼女がそこまでする理由が判らなかった。

「いや、なんで?」
「お礼です。シャオジー様の許可は取っています」
「そうじゃなくて、って、何の許可を取ったって!?」
よもや12歳の子供に、お礼として身体を差し出してもいいかと尋ねたのではと優斗はリーチェに詰め寄る。

しかしリーチェは表情1つ変えず、詰め寄る優斗を見つめ続ける。

「これまでのお礼に、まっさーじ、をする許可をチェーゼが」
リーチェの言葉に、優斗は脱力する。

主人を騙すな、とか、そんな言葉、誰が教えた、とか言いたい事はたくさんあったが、優斗はそれらを全て飲み込んで、最も重要な事だけを伝える事にする。

「いい。いらない。気持ちだけ貰っとく」
「してくれないんですか？」
「何でちょっと残念そう？」
上目使いに見つめて来るリーチェに、優斗はどきりとする。

そして自分から踏み込んだ距離を更に詰められ、それに怯んだ優斗が2歩下がる。

理性はダメだと告げ、本能は沸き立つ女の香に熱されてそれを否定する。そんな優斗を追いながら、リーチェはさり気無い仕草で胸元を緩める。

「優しくしてください」
「いや、だから」
「私の身体、ギフトのおかげもあって具合が良いと評判なんです」
あけた距離を再度詰められ、優斗はどんどんを追い詰められて行く。

優斗はリーチェが距離を詰める際、ベッドのある方へ誘導している事に気付き、慌てて角度を逸らす。リーチェはそれを意に介す事なく、更に追いすがる。

「いやいや、なんで？」

「優しくしてくれそうですし、その細い指で触れられたら気持ちよさそうだな、って」
「何か、急に印象と言うか性格が変わってない？」
「しおらしい方が受けがいいんです」
「それでいいのか」
「そっちの方が痛くされにくいですから」
少し俯いて告げられた言葉に、優斗は彼女の境遇を思い出す。

そうならざるを得なかったのか。もしくは、そうなるように仕向けられたのか。どちらにしても胸糞悪い事だと優斗は奥歯を噛みしめる。

リーチェはその隙を付いて優斗に抱き着くと身体を押し付け、主にその立派に膨らんだ胸部を押し付ける。

「あー、ごめん」
「……意外と冷静ですね」
「ん？」
「乙女心が傷つきます」
「あー。それもごめん」
乙女心と言うフレーズに思うところのあった優斗だが、口には出さず、飲み込む。

その間にもリーチェは腰をくねらせ、身体を押し付ける事で己をアピールするが、優斗はそれをやんわりと制し、その代わりに片手で後頭部を押さえる様に抱き寄せる。そして見下ろす位置にある頭頂部に逆の手を乗せると、子供をあやす様に優しく撫でる。

「ん。えっと、あの？」
「細い指で優しくして欲しい、だっけ？」
「言いましたけど」

「これで我慢して」
「……はぁ」
リーチェは大きなため息を吐き、不満そうな顔をする。

少しの間リーチェの頭を撫で続けながら、優斗は倫理観と価値観と言うモノについて考えていた。

優斗が奴隷に非道を行わないのは、相手が嫌がる事を強制したくないと考えたからだ。それは優斗がされたら嫌な事をしないと言う意味でもある。ならば、目の前に優斗が否定するモノをむしろ望んでいるならば、それは非道の内に入らない。

もちろん、だからと言って相手が望めば何をシテも良い訳ではない。その場合、優斗は善悪と言う判断基準でもって行動を御する事になる。

暴行は悪。強姦も悪。しかし、同意の上ならばどうか。前者は優斗の感覚で言えば悪だが、ＳＭと言うモノも存在する。後者を否定すると、生物としての根本を１つ否定する事になる。

そこまで考えて、そもそも奴隷というモノ自体が悪なのだと言う前提を思い出し、しかしそれは優斗が生まれた場所での話であると気づく。

優斗の父親が輸入交渉の為に現地に行く際の注意の中に、郷に入れば郷に従え、と言う言葉があった。一時の滞在とは言え、相手の文化を尊重してこそ、良い取引が出来るのだ、と。そして今、優斗は奴隷が当然の様に跋扈する世界に、一時的でない滞在をしている。

そんな風にぐちゃぐちゃと纏まりのない思考では結論の出なかった優斗は、次に奴隷と関わるまでの考えておこうと、この場ではこれ以上考える事を止める。

「そろそろ船に向かおうか？」
優斗は不満そうながらもされるがままリーチェの頭から手を退ける。

ここで名残惜しそうな仕草や声を上げてくれればやり遂げた気分になれるのに、と思いながら、相変わらず不満げなリーチェと距離を取って向かい合う。その際、優斗は柔らかな感触が離れた事で無意識に名残惜しそうな表情を浮かべてしまい、それを見たリーチェはつい悪戯っぽい笑みを浮かべる。

優斗はリーチェの反応で自分の失態に気付き、誤魔化す様に早口で捲し立てる。

「奴隷として売り払っておいてこう言うのもなんだけど、元気で」
「はい」
「あと、シャオジーの前では色々と自重する様に」
「じゃあ、今度はチェーゼの前にします」
「それもほどほどにね」
「言葉の通じない相手と、と言うのは、どんな感じなんでしょうね？」
「おい」
からかうようにそう言うと、リーチェは口元に笑みを浮かべたまま、逃げる様に部屋を飛び出した。

その後を追いかけた優斗が、既に船に積み込まれたリーチェに会う事はなかった。

リーチェを追って船に到着した優斗は、見送りに来たタガルに挨

拶をしているシャオジーを見つけた。

『もうお帰りになるそうです』

『じゃあ、ありがとうございました、お元気で、と伝えて下さい」

『わかりました』

挨拶を終えたタガルが優斗の方へと向かって来た為、軽く頭を下げ合ってすれ違う。

優斗は、自分の存在に気付いて手を小さく振っているシャオジーのところまでゆっくりと歩いて進むと、目の前で立ち止まる。その時点で既に隣に居た通訳の男はおらず、その場には優斗とシャオジー、そして護衛として少し離れて立っているチェーゼだけとなった。

『遅いです』

『ごめんごめん』

優斗は非難されながら、離れた場所に立つチェーゼに視線を向ける。

帰って来た視線はシャオジーとは逆に、早かったな、と告げている様だった。事実、コトがあったにしては早すぎるので、チェーゼは何もなかったのだろうと考えていた。

『出港までまだ時間はあるでしょ?』

『ありましたけど、全員揃ったら出港しようか、って話になって』

『あぁ、もしかしてリーチェ待ちだった?』

『いえ、タガルさんからの餞別を取りに行っていた人が、今さっき帰って来たばかりです』

『もしかして、グッドタイミング?』

おどけた口調の優斗に、シャオジーは頬を膨らませる。

優斗がその仕草に、白い頬が膨らんで団子か大福みたいだ、と苦笑すると、シャオジーは優斗が遅かったせいで一緒に過ごせる最後の時間が減った事を非難する。

そんな風に残り僅かな別れの時間を、惜しむ様に過ごしている内に出港となる。

『じゃあ、また』

『はい。また、すぐに』

こうして優斗は、偶然が重なって関わりあう事となった少女と別れの言葉を交わした。

優斗は船が見えなくなるまでシャオジーを見送り、シャオジーもまた優斗が確認出来る間ずっと、手を振っていた。

シャオジーと別れてから3日後、優斗は公国行の船に乗り込んだ。船は公国のある港を経由してカクスに向かう便で、貴族も利用する様な豪華な客船だった。それなりに豪華な部屋であるにも関わらず、優斗が平民である為、等級はかなり低い部屋でもある。

経由した港は公国領の、山と海に囲まれた辺鄙な場所だ。

そんな辺鄙な場所に港があるのは、そこが貴族の別荘地だからだ。貴族達は療養や休養などにこの場所を利用している。

しかしそれは表向きの話であり、世間から隔離されたような位置にあるせいで公国はもとより、一部王国の貴族も世間の目から隠したい人間や秘密の妾、その子供などを住まわせる屋敷が公然と建っている。ここと似たような場所は幾つかあるが、船を手配するか山越えをしなければ出られない地形から、監視対象等を軟禁するのにも利用されている。

それらの理由から、一度船を降りると再乗船の際に厳しいチェックがある為、優斗は停泊中もずっと船の中で過ごし、何事も無く船旅は続行された。

それは航海中も同じで、優斗は船で過ごすほとんどの時間を連邦の文字の習得と必要そうな単語の翻訳に費やした。翻訳に使ったノートパソコンのバッテリーは完全に空になり、フレイのいない今、充電する事も出来ないのでジュラルミンケースの中に封印されている。

そして他の港を経由する関係上、船が陸の近くを通ったおかげで、優斗は白地図では判らなかった、公国と王国の間に山脈があると言う事実を知る事が出来た。

特に大きな問題が起こる事もない順調な船旅は、経由地まで9日かけて到着し、3日停泊した後、1日半かけて無事カクスへと到着する。

今さら急いで下船する理由もなく、優斗は混雑を嫌ってのんびりと準備を終えてから船を下りる。

そしてカクスの地に足をおろし、周りを見渡すと、港の風景に違和感を覚える。

「どうかしたか、兄ちゃん」

「へ？　あぁ、なんか人が少ないなと」

「そういやそうだな」

船の前で見張りをしている船員と言葉を交わした優斗は、少し足を速める。

そしてあえて港の中を横切るように抜けた頃には、その違和感の

正体に気付く。
約2か月弱前に出発した時に比べて、停泊している船の数が多いのだ。

違和感の正体が判って満足した優斗は、そのままキャリー商会へと向かう。
本来であればまず宿を探すところだが、優斗がキカロ商会と契約を交わしてから既に60日近く経過しており、すぐにでも資金を調達し、数日の内には絹の買付を完了させる必要があると言う焦りから優先順位を入れ替えた。

「すいません」
「はい。あ、優斗様」
「アイタナさんはいらっしゃいますか？」
店先に居たマイアに声をかけた優斗が辺りを見回すが、その姿は見当たらない。

マイアは少々お待ちくださいと告げると、店が空になる事も気にせず奥に入って良く。
そしてすぐにアイタナの後ろに付き従う形で戻ってくる。

「優斗様。無事に戻られてなによりです」
「アイタナさんもお元気そうで」
「はい。おかげさまで良い商売をさせて頂きました」
「それはよかった」
優斗はにやりと笑うアイタナの表情から、何か言いたそうにしている事を察する。

そして優斗は、その内容を半ば予想出来ていた。

「優斗様が王国から戻ってくるまでの間に、市場が動きました」
「絹、ですね？」
「やはりご存じでしたか」
「えぇ、まぁ」
優斗は出発前に、戻って来たらお金を貸してほしいと頼んでおいた。そしてその期限に起こった暴落。その２つを結び付けて考えるのは、当然の事だ。

「詳しい話を聞かせて下さいますか？」
「その前に、詳しい状況が知りたいです」
優斗の言葉に、アイタナは仰々しく頷くと優斗を奥の応接室へと誘い、マイアにお茶の準備を命じて自分もそちらに向かう。

優斗は状況が予想通りである事を願いながら、アイタナの後ろを歩き、応接室へと入って行った。

互いの船出（後書き）

シャオジーが連邦へ帰る話でした。

そしてちょっとだけ本性を垣間見せたリーチェと、それを後押しするチェーゼの奴隷コンビが異国に売られていく話でもありました。

道標の向かう果て

この1か月間、公国では多くの商会が多大な被害を被った。それにより利益を貪っているのはもちろんロード商会だ。

ロード商会はまず、優斗が改造した新型機織り機を導入した工場で絹の大量生産を開始した。技術漏洩対策として奴隷を労働力として行われたそれは、ほぼ24時間体制で稼働している。そして原料となる絹糸の買付は公国内だけに留まらず、王国・帝国で品薄が発生する程の規模で行われ、絹の布地の備蓄量が過去にない速度で増加した。

次に、流通量を調整し、絹の布地の価格を普段よりも若干の高値を維持させる。そこにクシャーナ・ユーシアの領主任命式典の開催が決まり、ドレスやタキシード等の大量発注を予想した公国中の商会は、こぞって絹を買い集めた。

ロード商会はこのタイミングで、他の商会よりも多少高値で絹を買取つつ、一定規模以上かつ自分達と直接の繋がりの無い商会ほぼ全てに、ある契約を持ちかけた。それは数か月後に大量の絹を現在よりも少し高い相場で売ると言う契約だ。数か月後、と言うのは式典の1か月と少し前に設定されており、毎回その時期には手直しや追加の注文が殺到する為、その時点でほぼ使い切られている絹が高騰を起こすのが通例だ。何故なら、式典出席者が他の貴族の準備した物に触発され、負けじと更に凝った注文をするからだ。

故にほとんどの商会がロード商会の提示する契約書にサインをした。その時点でロード商会が絹糸の大量買い付けと布地の生産を行っている事実は知られていたが、工場の数を大きく増やした訳では

ないので、どの商会も生産数は例年よりも多少増程度の認識だった。

当然その読みは外れ、契約通り絹と金貨を取引した時には価格が暴落していた。

理由はもちろん、ロード商会がため込んだ絹を全て放出したからだ。

その時の相場からすればかなり安い、しかし普通よりは高い額の絹を、仕立ての依頼を受けている全ての職人に直接、そして大量に売り込んだのだ。その安さから、職人達は大量に買い込んだ。今まで不足気味だった事、経験上、この後も必要になる事などから、値上がる前に出来るだけ多く仕入れ、残っても他に融通すれば良いと考えたのだ。他の者も同じ様に考え、購入している事に気付くには彼らは忙し過ぎた。

職人達に十分すぎる量の絹を売りつけると同時に、ロード商会は行商人を使って大量の絹を他の商会へと持ち込ませ始める。

最初は喜んで買い取っていた者達も、あまりに大量に出回り始めてようやく違和感に気付き、仕立ての為にずっと引きこもっている職人を尋ねる事で状況を把握した。しかし時すでに遅く、既に彼らが予想していた絹糸を布地に出来る上限数を軽く上回る量が市場に溢れていた。需要と供給のバランスが崩れれば、価格と言うモノは安易に崩壊する。

かくして、ロード商会は大暴落を起こした絹を大量に買付け、それを契約通り暴落前よりもやや高値でそれぞれの商会に引き取らせた。

一通りの状況を確認した優斗は、自分の安易な行動が発端である

この件の多大な影響に呆れながらも、質問を口にする。

「ここまで酷いと、潰れた商会もあるのでは？」

「はい。路頭に迷っている者も多く、職を失うのはまだましで、行商人の中には莫大な借金を背負った者もいるとか」

「うわ……」

予想以上の惨事に、優斗は素の声で驚きを漏らす。

呆けているのもつかの間、優斗は重要な事に気付き、慌ててアイタナに確認を行う。

「キカロ商会は無事ですか？」

「無事です。全ての職員に暇を出し、支店内の商品を全て換金して何とか耐え凌ぎました。我が商会とも縁がありますので、奴隷の買取等を引き受けました」

アイタナの返答に、優斗は胸を撫で下ろす。

基本的にロード商会と同じ様な契約を交わしている優斗だが、相手が既にいなくては利益を得るどころか、前金分、損をしてしまう。

その状況を生み出した原因の1人である優斗は、それによって様々な被害が出ている事に関して、反省する。

それは被害に遭った人々に対してではなく、安易に新技術を提供した結果、経済を混乱させてしまった事に関してだ。路頭に迷ったり、潰れたりと言う被害はあくまで商取引の結果であり、直接優斗には関係ないと割り切っている。正確には、展開を予想した時点で割り切ると決めていた。

「ところで、お金を借りたいと言う件なのですが」

「はい。公国金貨３００枚分の資金を準備させて頂きました」

提示された額に、優斗は自分の評価が上がっている事に複雑な気持ちになる。

当たり前の事だが、結果を出していない人間と、出した人間の評価は違ってくる。しかし、結果を出す為には資金が必要な訳であり、しかも今さら額面が増えてもこの件での利益は大差ない。

優斗はそれを予想して契約を結ぶべきだったのだろうかと考えながら、ある違和感に気付く。

「公国金貨３００枚、分？」

「はい。公国金貨が余り出回っておらず、値上りしておりますので、王国金貨や帝国金貨、公国銀貨等で同等額を準備させて頂きました」

優斗はその言葉から湧き出た疑問を、率直にアイタナに問う。

優斗の問いに、アイタナは金貨が値上りした理由を判りやすく説明する。それは国内の金貨をロード商会がため込んでいるせいだ、と。

職人が衣服を作る際、それが貴族の依頼で、かつ高級な物であれば絹以外の物、例えば宝石なども必要になる。そして彼らはそれを購入する為に、貴族から受け取った前金を使う。

普通であれば、貴族から職人、次に商会に金貨が渡り、巡り巡って税として国に納められる事になる。

しかし現在、ロード商会の系列以外の商会から、絹と引き換えに大量の金貨が失われている。それは当然、最終的にロード商会へと流れている。

公国金貨は三国の中で最も価値の高い金貨だ。それが使われない

と言う事は、支払われたお金を移動させる為にいつも以上のコストがかかると言う事である。それが削減できるのであれば、支払額が多少増えてでも金貨での支払いを望むのが普通だ。特に、積載量が利益に直結する行商人ならば、猶更だ。

結果、ロード商会は金貨を持っていると言う事実と金貨を出し渋ると言う形で商談に優位を保つ事が出来る様になり、それに伴う供給不足が更に利益を生む。

「ロード商会、かなり儲けてるみたいですね」
「えぇ、本当に」
他に自分に優位なカードは存在しないのかな、と考えながら優斗は用意されたお茶を口に含む。

しかし少し考えただけでそれが思い浮かぶ訳もなく、優斗は中断されていた話題を再開する為に、アイタナと向き合う。

「絹の布地をすぐに手配出来る様にして欲しいんですが。量はこの程度で」
「この程度でしたらすぐにでも手配出来ますが」
「正確には何日でですか？　それと、どこから仕入れるのか、予約と言う形は可能か、可能なら不要の場合、罰則があるのか」
「えぇと、優斗様が必要だとおっしゃるのでしたら今すぐにでも確認しますが、たぶん即日どころか即決で手に入ると思いますよ？」
「そうなんですか？」
「絹の布地はどこも大量に抱えていますから。倉庫代がかかるくらいなら、安く買い叩かれてもいいと思っている商会は多いかと」
「あー、なるほど。じゃあ――」

優斗が思い付いたプランを実行する為の根回しを依頼すると、ア

イタナは快く引き受け、その返答を聞いた優斗はお茶を飲み干すと席を立つ。

もう少し話をしないかと誘うアイタナに、宿を探す必要があるからと断ると、荷馬車と荷物はまだしばらく預かってほしいと告げ、商会を後にする。

荷物のほとんどをキャリー商会に預けてある荷馬車と、貴重品入れに放り込んだ優斗は、ひっそりした宿で隠れるように数日を過ごした。

優斗が次に動き出したのは、契約から67日目の夕方だ。

手持ちの中で最も上等な服を身に纏い、念入りに身支度をして向かう先は、もちろんキケロ商会カクス支店だ。

優斗は商会の中に入ると、そこには誰もおらず、思わず辺りを見渡す。

ロード商会の策略に嵌り、痛手を負いながらもなんとか営業を続けている様だがその爪痕は深く、店内に並べられた商品は前回訪れた時よりもかなり少ない。そして調度品はほぼ全て失われている。

優斗が奥を覗いてみようと踏み出した瞬間、そこから1人の少年が現れる。

「あー、すいません。お待たせしました。本日はどのようなご用件でしょうか」

「私は商人の優斗と申します。シュタンさんはいらっしゃいますか？」

「シュタンは今、外に出ております」

「そうですか。では、待たせて頂いてもよろしいですか？」

「もちろんです」
少年はたどたどしく言葉を紡ぎながら軽く頭を下げると、再度奥へと入って行く。

すぐに戻って来た少年は机に座って書き物を始め、少し経つと少年に良く似た顔の少女がお茶を運んでくる。前回来た時にお茶を出してくれた女性とは別人だ、と思いながら優斗は笑顔で礼を告げる。
少女からお茶を受け取った優斗は、味がイマイチだと感じた事で、この商会がやはり窮している事と、自分がお茶の味を判る事に気付き、どんな表情を浮かべるか悩む。

「ちち、いえ、シュタンが戻った様です」
少年の声が優斗の思考を中断する。

優斗は立ち上がると振り返り、扉を閉めているシュタンに体ごと視線を向ける。
そしていつも通りの営業スマイルを浮かべると、優斗に気付いたシュタンの頬がひきつる。

「どうもお久しぶりです、シュタンさん」
「おひさしぶりです。優斗様。いえ、優斗さん、で構いませんか」
「構いません」
「本日はどう言ったご用件でしたか？」
前に会った時よりも数段やつれているシュタンから発せられる声は、少しだけ投げやりだ。

その反応の意味するところを、優斗は理解出来なかった。
もっと劇的な反応を予想していた優斗は、拍子抜けしながらもその理由を探ろうと、あえて本題を避けて話を続ける。

「本日は、キケロ商会様の様子を確認しに来ました」
「はは。ごらんのとおり、売れる物は全て売り払ってお金を作りましたよ。妻や娘を質に入れずに済んだ事だけが救いですね」
書き物をしていた少年――彼の息子だろう――がシュタンを軽く睨みつける。

それは、何故自分が入っていないのかと言う抗議なのか、冗談でもそんな事を言うなと言う非難なのか、優斗には判別出来なかった。
もう少し時間を稼ぐ必要がある優斗は、世間話でもするように、しかし少しだけ本題に近づいた質問を投げかける。

「立て直しには時間がかかりそうですか？」
「少なくとも、新しい支店長が送り込まれる前には立て直さないと、大変な事になりますね」
現在、公国に幾つか存在するキケロ商会の支店のほぼ全てが同じような窮地に立たされている。

普段であればこんな失態を犯せばすぐに後任が送り込まれて支店長の座を追われ、最悪、商会自体を首になり出した損益に応じた損害賠償を請求される可能性すらある。しかしまだ断罪の手が届いていない事から、今回の影響でキケロ商会全体が混乱しており、後任を送り込む余力さえ無いのだと推測出来る。

だからこそ、状況確認に誰かが訪れる前にある程度立て直せば、その手腕により降格を免れる可能性がある。最悪でも、首にならなければシュタンは家族を守りきる事が出来る。ほとんどの支店長が似たような損失を出している今、全てを降格させ、後任を立てられない程度に人材不足であれば、前者の可能性も十分にある。

「幸い、僅かですが商売の元手も目途が付きました」

「それを聞いて安心しました」
「安心、ですか。あぁ、失礼。来客の様だ」
「あぁ、私の使いです」
挨拶も無く商会の扉を開けて中に入って来たのは、優斗がお使いを頼んだ少年だ。

彼は指示通りある場所で受け取った手紙を優斗に手渡すと、駄賃を受け取ってそそくさとその場を去って行く。

「そう言えば先ほどお茶を出して下さったのは娘さんでしょうか」
「えぇ。家内でなければ多分そうでしょう」
「可愛らしい娘さんですね。お茶も美味しくいただきました」
「安茶しか準備出来ず、面目ない」
「いえいえ。高価な物より可愛らしい娘さんの淹れたお茶の方が美味しく感じる事もあります」
「そう言って頂ければ、娘も喜ぶでしょう」
他愛のない会話を交わしながら、優斗は先ほど届いた手紙に目を通す。

そこに書かれていたのは上手く行ったと言うアイタナからの連絡で、更にもう1枚はその詳細が記された書類だ。
優斗はその内容に沿って、今から行う商談で使う手段を吟味し、最大の利益を得る為に同情と罪悪感を抑え込みながらそれを口にしていく。

「ところでシュタンさん。こちらで私と交わした契約は覚えていらっしゃいますよね？」
「は？　いや、まぁ、覚えていますが。おかげさまでこんな状態になっている訳ですし」
「それでしたら話は早い。早速取引の日時を決めましょう」

「ちょ、ちょっと待て！」
シュタンが立ち上がり、優斗に掌を向けて言葉を制す。
優斗は律儀にそれに従い、何故シュタンが落ち着いていたのか、今になって慌てるのかと言う疑問を解消する為に、あえて疑問符が伝わる様な表情を作る。

「絹の取引の件は、既に終わった話でしょう！？」
「……それはどういう意味でしょうか？」
「優斗さん達が様々な言い分で絹の売買契約を交わして、それを依頼主であるロード商会がまとめて我が商会に請求して来たじゃないですか！？
代金は何とか期日までに支払いました。ですからその契約は――」
「いや、大変申し訳ないのですが、私はロード商会の手の者ではないんです」
優斗に言葉を遮られたシュタンは、その内容に唖然とし、口を半開きにしたまま固まる。

とりあえず誤解の元が何か把握した優斗は、誤解を解きつつ現状を伝えるべく、言葉を続ける。

「私は私の判断でキケロ商会様と契約を交わしました。そしてこれがその証拠です」
優斗が差し出したのは、2か月前にシュタンと交わした契約の書類だ。

ギフトにより内容を保障されているそれは、調べれば契約がまだ生きている事、すなわち取引がまだ終わっていない事が判るはずだ。

「いや、そんな。でも、ありえ」

「契約内容は持ち込んだ絹と金貨１４５枚の取引です。何時までに準備出来ますか？」
「で、でででで、で」
シュタンの顔が興奮で真っ赤に染まって行く。

そのまま怒鳴りつけられるかと優斗は身を固くして身構えるが、予想ははずれ、シュタンは崩れ落ちる様に席に着くと、ギリギリ聞き取れる程度の音量で呟く。

「出来る訳、ない……」
「では、違約事項に則って違約金と補償をお願いします」
その言葉に、シュタンの顔色が蒼白になる。

契約に置いて、何かあった場合の違約事項を入れるのは、もしもの時に契約の権利を失わない為の知恵だ。

今回、違約事項として記載された条文は、優斗が絹を持ち込めなかった場合、先払いの担保がキケロ商会の物となる事。
そしてキケロ商会が持ち込んだにも関わらず買取をしなかった場合、先払い金を返却すると共に、別の売り先を斡旋する事になっている。これに期限は設けないが、契約から７０日以上経過した場合、１日に付き金貨１枚の倉庫料兼補償を支払う。

倉庫料は法外だが、それでもキケロ商会が健在であれば痛くもかゆくもない条件だ。しかし現在のキケロ商会ではそうはいかない。
シュタンが直ぐにでも現金化出来そうな物を全て思い浮べ、支店を立て直す為に準備した私財も含めて全て足した結果、どうあがいても足りないと言う結論に達する。そして何より、この供給過多な市場で大量の絹を全て捌く事など、不可能に近い。

「これがロード商会のやり方か……」
「いや、違いますよ？　むしろロード商会とは敵対関係にあります。あ、それなら評判が落ちるのは良い事なのか、な？」
　目の前で打ちのめされているシュタンの姿に罪悪感を覚えた優斗は、それを誤魔化す為にどうでも良い事を口にする。
　彼は優斗の軽口を欠片も信じておらず、この件をロード商会が公国に勢力を伸ばす為に打った一手であり、邪魔な商会の力を削ぐために支店を潰して回っているのだと解釈していた。
　そして反応すら示さなくなったシュタンに、優斗は漫画か小説家等で見た悪役の台詞を引用し、注意を引くと共に遠まわしに脅しをかける。
「可愛い娘さんでしたね」
「！？」
　効果は劇的で、シュタンは体ごと跳ね上がる勢いで顔を上げる。
　怒りと絶望をない交ぜにした表情で睨まれた優斗は、なんとか営業スマイルを維持し、余裕ぶってみせているが、内心では逃げ出したい衝動に駆られていた。
「失礼しました。今のは誤解されても仕方のない失言ですね」
「何が言いたい！」
「いえいえ。シュタンさんにはまだ、商会の建物に倉庫もあります。倉庫には大量の在庫もあると聞いています」
「それを売れと言うのなら無理だ。商会も倉庫も任されているだけで俺の物じゃない。住んでいた家はとっくに売り払って支払いにあてた」
「でしたら、在庫の方は？」

「先ほどようやく買い取り手が現れたが、額面は微々たるものだ。ようやく買い取り手が見つかって、それを元手に立て直そうと思っていたのに……」
「アイタナさん、やっぱり安く買い叩いたんですか？」
「あぁ。うちは倉庫を持っているから維持費がほとんどかからないとは言え、邪魔である事は確かだし、お金になるならそれにこし、って。は？　いや、まさか」
「契約書に、どこで仕入れるかなんて書いてありませんから」
膝から崩れ落ち、地面に手を付いたシュタンが、優斗に聞こえない声量で、悪魔め、と呟いた。

シュタンが知った優斗の計画。それは、取引に必要な絹を、キケロ商会で仕入れると言うモノだ。
この計画の素晴らしい点は、２つの契約が成立すれば輸送費用を一切かけずに引き渡せる事だ。それは取引相手から見れば、シュタンの言う通りまさに悪魔の所業である。

「……何が望みだ」
「私が望むのは、キケロ商会様と契約通りの取引を行う事ですよ」
「頼む。それだけは勘弁してくれ」
「勘弁してくれ、と言われましても契約は既に交わしています」
「言いたい事は判る。だが、家内と子供達を差し出すくらいなら、俺は商会を敵に回してでも逃げるぞ」
シュタンの様な雇われ者が支店長として全てを任される場合、いわゆる雇用契約をギフトを用いて結ぶのが通例だ。

それは、逃げたり裏切ったりすればシュタンの契約権が失われ、商人として再起できなくなる事を示す。

彼がそんな発言をしたのは、キャリー商会の繋がりに優斗の脅し

文句を合わせて考えた結果、家族、その中でも女性である妻と娘を商会に売り渡せと暗に告げていると解釈したからだ。例え優斗がそれを実際に行う気が無いのだとしても、脅しとしては効果覿面だった。

「それは困りますね」

「だろう？　だから1年。いや、半年待ってくれ。半年で支店を立て直し、少しずつ返済する」

「期限は設けていませんから、幾らでも待ちますよ。ただ、補償は定期的に支払って頂きますけど」

「いや、そうじゃない。新しく契約を交わし、その代わりにこの契約を取り下げて欲しい」

シュタンが地面に頭を付けて懇願する姿は優斗が押さえている心を動かすが、それにもなんとか耐え凌ぐ。

仮に現在の契約を完了する事なく半年待てば、優斗は先払い分以外に金貨１５０枚以上を得る事が出来る。１年であれば、その倍。更に時間が経過すれば、支払額は膨れ上がり続ける。

故に優斗には現在の契約を取り下げて、新しい契約を結ぶ理由はない。ここに留まり続けるのであれば条件を付けて様々な融通を聞かせると言う手もあるが、優斗は既に東のルナールへ向かう事を決めている。だからこそ、買付資金のほぼ全てをこの契約に費やしている優斗は、まともに商売が続けられなくなると言う意味でもこの条件に乗る事は出来ない。

「それはさすがに虫が良すぎませんか？」

「判っている。だから出来る限り他の条件をのむ。何でもとは言えないが、俺に出来る事ならなんでもする。だから、どうか頼む」

「そう言われましても、私も手持ちの絹が売れないと色々と困ってしまう訳で」

その、色々、に保管する倉庫代も含まれている事を察したシュタンは、言い返したい言葉と共に奥歯を噛みしめる。

数秒の沈黙の中、優斗は憎悪と懇願のない交ぜになった表情で睨まれながら、己が取るべき手段を幾つか思い浮べる。

シュタンの提案を受け入れ、新しい契約の交渉で最大の利益を出す努力をする方法。

何が何でも支払えと押切り、彼ら一家を含む建物内の全てを売り払って、利益を出す方法。

そしてそのどちらでもない方法。

「シュタンさんはキケロ商会の名誉に傷を付けない様に、そして支店を守る為に私財を投げ打ってまでロード商会に支払いを行ったんですよね？」

「あ？　あぁ、その通りだ」

虚を突かれて驚きながらも、シュタンは力強く頷く。

優斗は手の中で契約書を反転させ、シュタンによく見える様に一点を指さすと、これは正当な商談であると自分に言い聞かせながら条件を付きつける。

「キャリー商会からお金を借りられるように口利きしてあげますから、契約書通りに取引を行いましょう。

そうすればキケロ商会の名誉も守れますし、全て丸く収まると思いませんか？」

あっさりとそう告げる優斗の営業スマイルが、シュタンには悪魔

の微笑みに見えた。
家族を盾に、女性奴隷専門の商会からお金を借りる事を迫られていると言う状況は、支払いが滞ればすぐにでも嫁と娘を売れと詰め寄られる可能性を孕んでおり、シュタンにとってはそれだけは譲る訳にはいかない一線だ。

故にシュタンは、これは結局、嫁と娘を売れと言う事なのだと解釈し、優斗を睨みつける。
しかし優斗はそれを意に介す事なく、説明を続ける。

「借りる額は金貨２００枚か、もう少し多いくらいにして、残りを使って支店を立て直す、と言うのはどうですか？」
「そ、そんな事が出来るのか！？　あ、いや。可能なのですか！？」
優斗の提案が、僅かにシュタン有利な物に変化する。

現在、ロード商会の強引な行動でどこもかしこも似たような状況に陥っており、既に潰れている商会もある中、落ち目の支店長であるシュタンにお金を貸してくれるものはいない。ここよりも返済出来る見込みのある、同じ境遇の商会は幾らでもあるからだ。よしんば居たとしても、その額は微々たるものだ。
彼は既に商売の元手を得る為に東奔西走し、借金を断られた身だ。もちろん、キャリー商会にも足を運んだが、返事は芳しくなかった。

「色々と条件は付くと思いますけど、その辺りはアイタナさんと直接話して貰う方が良いかと」
「是非！　今すぐにでも！」
「基本的に、土地と建物を抵当に入れる事になりますが、よろしいですね？」
「なっ！？　それは」
土地と建物は、もちろん彼の所有ではなく、キケロ商会の所有物

だ。

そしてそこまで大きな決断を下す場合、支店長であるシュタン１人の判断で無く、商会の本店とも言える場所に許可を求める必要がある。そうしなければ独断と判断され、失敗した時の損害を彼が一手に引き受ける事になってしまう。

「ダメですか？」

「当たり前だ！」

「何でもする、と言いましたよね？」

「結果的に同じ事になったら意味がない！」

最終的に、家族を守れないのであればシュタンにとっては意味がない。

優斗は彼にとって家族を守る事が第一である、と言う点を把握し、その言葉が向かう方向も理解した上で、なるべく悪役っぽい笑みを浮かべて、選択を迫る。

「出来ないと言うのであれば仕方ありません。別の方法で支払って頂ける様、アイタナさんと相談します。

さぁ、どうしますか？

今ここで全てを失うか、守るべき者の為に失敗できない賭けに出るか。好きな方を選んで下さい」

そう言って優斗は立ち上がると、扉に向かって歩き出す。

シュタンはそれを引き留める言葉を探すが、何も思い付かない。

「では、明日にはお返事をお願いします」

「あ、あの」

「ん？」

目の前の相手に集中していた優斗は、声をかけられた事でようやく店内に人が増えていた事に気付く。

そこには書き物をしていた少年に加え、先ほどお茶を出してくれた少女が並んでこちらを伺っている。

「あの、私が着いていけば、いいんですか？」

「なっ！？」

「あー」

少年が少女の襟首を掴み上げる。

家族一丸となって商会を立て直そうとして、ようやく光明が見えてきた瞬間に、絶望を叩きつけたのは自分だと自覚している優斗は、罰の悪さに顔を顰める。しかも、その光明さえ優斗の生み出した蜃気楼に過ぎない。

「ふざけんな！　絶対に俺が許さないからな！」

「でも、でもお兄ちゃん。このままじゃ、家族みんなが」

「俺がなんとかする！　それに、父さんや母さんだっている！」

目の前で繰り広げられるやり取りに、優斗の良心が熱を持ち、ズキズキと痛む。

優斗は目の前の兄妹に優しい言葉をかけ、視界の隅に居る商人と新たな契約を結ぶ事で、利益が目減りしてでも助けると言う手段に出たい衝動に駆られる。

しかし、商売を、最大の利益を上げる事を優先すると決めたのだと、それを押さえつけ、その為にも目の前のソレを止めるべく、口を開く。

「あー、お嬢さん。申し訳ないけど、君1人が身売りしてどうにか

なる額じゃないから」
「そ、そうなんですか……」
「それと、安易に身体を売って、返済の足しにしようとか考えない様にね？　そんな事すると、その最終手段も使えなくなるし」
「へ？　え？」
「それに大丈夫。君たちのお父さんが商売を成功させればいいんだから」
「父さんが無理だって言ったのに、お前はそれでもやれって言うのか！？」
喰らいついて来る少年に、これは止めるより逃げる方が得策だと判断した優斗は、反転すると扉に手をかける。
そしてシュタンに視線を送ってから扉を潜り、半歩だけ商会の外に出てから優斗は再度振り返って兄妹に向き直る。
「君たちのお父さんがそこまで無能なら、私は契約を完遂する為に全てを売り払って貰う事にします」
彼らの反論を待たず扉を閉めると、優斗は逃げる様に商会の前から立ち去った。
アイタナと合流する約束も忘れて宿に戻った優斗は、緊張の糸が切れた事でどっと沸き出た疲れによる眠気に耐えきれず、そのままベッドに倒れ込んだ。

道標の向かう果て（後書き）

後味の悪い商談を行う話でした。

今までだだ甘だった優斗くんには、優位にも関わらず精神的にキツイ交渉でした。

商談の行きつく先と、それに伴う一家の今後や如何に。

向き不向き

次の日、優斗は朝からキャリー商会に足を運ぶと前日の約束を破った事をアイタナに謝罪し、2人揃ってキケロ商会へと向かった。重い足取りの優斗に対して、アイタナの足取りは軽い。

商会前に到着すると、アイタナに外で待っている様に頼んで店内に入った優斗を待ち構えていたのは、覚悟を決めた目をしたシュタンだった。

「優斗さん。お願いがあります」
「何でしょうか？」
「昨日のお話、受けさせて頂きたいと思います」
「では、土地と建物を担保にしても良いのですね」
「えぇ。その代り、お願いがあるのです」

シュタンの迫力に気圧された優斗は、思わず首を縦に振ってしまう。

しかし契約に関する事まで押し切られる訳にはいかないと、優斗は顎を引き、迎撃態勢を取る。

「私の家族。いえ、私の元・家族には手を出さないで頂きたい」
「……は？」
「家内とは昨晩話をし、今朝一番で離縁しました。子供は全て、家内が、いえ、別れた家内が引き取ります」
「……で？」
「私が成功しても失敗しても、優斗さんは利益を得られるはずです。ですから、家族だけはどうか」

シュタンの目は血走っており、優斗は構えていたにも関わらず、また怯んでしまう。

それと同時に、覚悟を決めた男の姿に、そしてこの一家を最悪な形で別れさせなくても良い状況に、優斗は心惹かれる。

「確かに、私としては特に問題ありませんが」
「では！？」
「お子さんたちはどう生活するおつもりなんですか？」
「息子が奉公に出る予定です。妻も何か職が無いか探して貰う事になるでしょう」
そう答えるシュタンから優斗は鬼気迫る雰囲気を感じ、気圧されながらも思考する。

断れば何をされるか判らない。そして優斗がこの提案を受けても、彼は不利にならないどころか、気休め程度でも精神的に楽になるので、断る理由はどこにも見当たらない。例えそれが、目の前の男の思惑通りであったとしても。

「判りました。では、今からここにアイタナさんを呼ぼうと思います」
「はい」
「契約を交わすにあたって私は必要ありませんので、その間、お子さん達と話をしたいのですが」
「は？」
優斗の提案に、シュタンは迷う素振りを見せた。

覚悟を決めたシュタンだが、愛しい家族と目の前の信用ならない男を会わせるのには抵抗がある。昨日のやり取りを見ていたのだから、猶更だ。しかし、立場的に逆らう訳にもいかない。

「……わかりました。家内も同席させてよろしいですか？」

「もちろんです」
その返事を受け、優斗はアイタナを店内へと招き入れると、シュタンの呼んだ彼の息子に案内されて奥に通される。
そして、アイタナとシュタンが契約を結ぶ間に、優斗は自分の精神的負担を更に軽くする為の提案を3人にしたのだった。
取引から数日後、出発を明日に控えた優斗は、荷馬車を引き取る為にキャリー商会へと来ていた。
今回の絹取引で優斗は、公国金貨１５０枚を得た。
当初より増えている理由は、キャリー商会にお金を借りる際の仲介料と契約書を無くしていた事が理由で上積みされた。契約書はロード商会との取引時に代金と共に突き返した物に混ざっていたらしく、既に手元にはないそうだ。
公国金貨１５０枚と言うのは大金だ。そして優斗が得た利益は、彼が予想していたものよりも大きい。
まず、金貨の値上りで価値が1．2倍程になっており、以前に比べてそれだけ多くの仕入れが可能だ。これは、優斗の予想して居なかった事で、嬉しい誤算だった。
本来であればここから絹代が引かれるのだが、今回はその代金が他から出る事になっている。
「そうそう、優斗様」
「何ですか？」
「優斗様のお言葉に甘えて、荷馬車の中身を貸して頂いた際、奴隷がこのような物を見つけまして」
アイタナが差し出したのは、フレイと共に書き上げた、何枚もの

衣服の絵だ。

優斗は出発の際、荷馬車の荷物は預け賃代わりに好きに使って良いと伝えてあった。触れられたくない物は別にして預けてあるとは言え、アイタナにとってこれは嬉しい提案だった。それは道具を借りられる事に対してではなく、荷物から何か恩を売る為の材料が得られるかもしれないと考えたからだ。

「これを見た元お針子の奴隷が、是非作ってみたいと言ったので、作らせました」

「……作ったんですか」

絵を描いた紙はフレイに預けてあった。そして優斗はフレイの荷物に触れていない。

故に荷馬車に残っていたのだろうと考えた優斗が次に思い出したのは、後半、目立てば現代服でも良いのではと描き始めた制服、いわゆる学ランやブレザー、セーラーにミニスカート等の洋服だ。主に優斗とその幼馴染が着ていた物を参考に書かれた服は、それ自体を見られる事で困る事は無いのだが、問題はそのスカート丈ではドロワーズが見えると指摘されて軽く説明した下着だ。優斗は何故かそれに興味を示したフレイが幾つかを絵にしていた記憶があった。

「はい。あれは素晴らしいですね」

「……は、はぁ」

「大暴落もあって全て絹で作らせてみたのですが、特にあの下着の履き心地が素晴らしい」

中年女性にパンツの良さを力説され、優斗は戸惑う。そして履いている姿を想像してしまい、げんなりする。

女性の下着事情など知る由もない優斗と、あのデザインを持って

いたのだから商売にする気であり、詳しいはずだと考えるアイタナの会話は、当然ながら噛み合わないがそれでも会話は恙無く進む。

「ですから、あれをキケロ商会で売らせようと思っているのですが、どうでしょう？」

「あー、いいんじゃないですか？」

スカートが捲れてもドロワーズ、と言う環境に不満のある優斗は、むしろ強く推奨したいと思いながらも平静を保つ。

そしてそれこそが、優斗の口利きとは言えアイタナがキケロ商会に大金を出資する理由だ。

女性奴隷専門を謳うキャリー商会では、あまり大々的に他の品を扱う訳にはいかない。もちろん、商会主であるキャリスの許可があれば別だ。

しかしアイタナは色々な事に手を出す傾向にある。王国との交易も、女性奴隷１人だけがキャリー商会の積荷で、それ以外の委託品は輸送及び売買代理の手数料を貰って稼いだらしい。名目は、船倉に余裕があるので他の積荷を募集した、だ。

今回のキケロ商会の件で、アイタナは借金と言う盾を持って自分がやりたい商売を代行させる相手を得た事になる。しかも優斗がこの件に一枚噛んでいる為、その商売の候補である女性用下着に関する助言を得る事が出来るだろうとも考えていた。

「だったらあれです。式典の服と一緒に、今の流行だって貴族に渡して貰うのはどうですか？」

「……なるほど。上顧客を得る為の投資と言う訳ですね」

「そんなところです。他の事は任せますので、出来るだけ低価格で、庶民にも出回るようにしてくれると嬉しいです」

優斗の正直な言葉に、アイタナはにやりと笑う。

それは下世話な意味と共に、ならば商品の販売権は安く済むだろうと言う意味も含んでいた。ちなみにその予想ははずれ、アイタナは後に、キケロ商会で売るならば不要であると優斗から伝えられて驚く事になる。

「他の衣服も再現可能な物は作らせました。
お急ぎでなければ衣服の出来を見て下さいませんか？」

優斗が首肯で答えると、アイタナは何種類かの衣服を机の上に出した。

出て来たのは初期にデザインした甚平や作務衣、巫女服に矢絣の入っていない矢絣袴などの和服だった。

「男性用か女性用かが判らない物に関しては、大小二着ずつ作ってあります。どうですか？」

「中々素晴らしい出来ですね」

「はい。幸い、これらは似たような服に関する情報がありましたので」

「やはりそうですか」

その情報は、優斗が予想した通りユーシア発の物だ。

巫女服や矢絣袴は着る人間が居なくなってしまったが、優斗は甚平と作務衣が手に入った事を喜び、早速これを寝間着にしようと心に決める。

そして着方を教えて欲しいと言うアイタナに応え、作務衣を身に着けると、違和感を感じた。

「んー。あぁ、そうか」

「どうかしましたか？」
「いや、私が前に着た作務衣は、麻だったので。絹の方が着心地はいいですね」
少しごわごわとした独特の着心地も悪くなかったと思い出しながら、優斗は甚平にも袖を通すが、同様の感想を持ったのみで、特に指摘する点は見つからなかった。

その後も優斗達が書いた順番に沿うように、浴衣、着物モドキにふにゃりとした学ランもどき、セーラー服、ブレザー等が次々と出され、気が付いた時には部屋に居た女性奴隷――例の元お針子だ――から幾つもの質問を受け、いつの間にかそれに応える事になっていた。

「いや、半襦袢は下着だからその下に下着はつけないんじゃなかったかな」
「それだと、めくれたら大変な事に」
「確か、浴衣とかで下着を履くと下着のラインが見えるから、らしい」
「でも、それは付けない理由であって、めくれたら、はまた別の話ですよね」
「浴衣とか着物とか、基本的に激しく動かない事前提の服だから」
「では、巫女服は？」
「あれ、実は股の下が縫ってあるんでめくれないんです」
「おぉー。なるほど」
「そう言うのもあるってだけですけどね。と言うか、あれは下着透けないんじゃないかな」
「そういえばそうですね。赤ですし」

そんな風に受け答えする優斗は、表面上は平静を保ちながらも、内心では頭を抱えていた。

特に、女性用の下着を目の前に突き出され、それについてあれこれと聞かれるのは羞恥もあってどぎまぎしてしまう。その上、詳細を答えられるほど詳しくない事から言葉は詰まり気味になり、それが隠し事をしている様に見え、それでも聞き出そうとお針子に実物を鼻先にまで突きつけられて質問をされると言う負のスパイラルが発生する場面もあった。

最終的に、着用した状態でおかしい点が無いか見て欲しいと言われ、下着に関しては全力で拒否した代償として、優斗はそれ以外の衣服――特に浴衣等の和装――の着方を説明し、下着以外全ての着用状態での問題点を指摘する羽目に陥った。モデルに可愛い娘や、スタイルの良い娘が居て役得で眼福だったが、それ以上に指摘するとその場で確認しようと捲ったり脱がせたりしようとするお針子さんのせいで、色々と目のやり場に困る事の方が多かった。それが下着で行われたらと思えば、優斗は自分の判断は英断であったと確信出来た。

「疲れた……」
「お疲れ様です。お茶を用意しておきましたので」
「ありがとうございます」
「ところで、どうでしたか？」
「えーっと、何がでしょうか？」
「我が商会の誇る、奴隷たちです」
その言葉で優斗はアイタナの策謀に気付き、さすがだ、と言う感想が浮かぶ。

服や下着の完成度を上げる事は、キケロ商会に委託する商売の成功に必要な事だ。その為に優斗の指導を仰ぐ事も。そしてその過程で奴隷を見せる様に仕向ければ、自動的に奴隷たちは優斗に目通りできると言う寸法だ。しかも、優斗が持っていた衣服の案であれば、

ある程度は優斗の趣味が入っている可能性が高く、購買意欲を誘う事が出来る。

事実、優斗は懐かしさを感じる部分もあり、少しも心が揺るがなかったとは断言できない。

「魅力的ではありましたが、今回は遠慮しておきます」
「そうですか。残念です。
試作品に手を加えたモノですが、服は是非お持ちください」
「では、お言葉に甘えて」
あっさりと引き下がった事に疑問を持った優斗は、警戒をしながら他愛もない雑談を交わした後、アイタナから紹介状を受け取り、キャリー商会を後にする。

その足で優斗が向かった先は、キケロ商会だ。
キケロ商会の荷受け場に付くと荷馬車を降り、しばらく待っていると1人の少年が駆け寄ってくる。

「いらっしゃいませ、って、優斗さん！」
「よう、元気？」
「もちろん！」
「そっか。じゃあ、荷馬車、頼んでいい？」
「はい！」
元気一杯の少年に馬を預けると、優斗は商会の中へと入って行く。

荷受け場から店に繋がる通路を歩いていると、今度はエプロン姿で桶を抱えた少女が現れる。

「あ、優斗さん。本日は何の御用でしょうか」
「明日出発だから挨拶して置こうかと思ってね」

「そうなんですか」
「うん。またこっちに来たら寄るから」
「はい！」
今から掃除をするのだと言う、やはり元気いっぱいな少女と別れ、優斗は店へと入って行く。

店の中ではシュタンとその元妻が仲睦まじく並んでいた。どうやらシュタンが何かを教えているようだ。
2人は優斗が店内に入った事に気付いて振り返り、その顔を見るとシュタンは複雑そうな、その妻は零れる様な笑みで迎えてくれた。

「明日、街を発つのでご挨拶をと思いまして」
「そうでしたか。この度は、色々とお世話になりました」
「いえいえ」
元凶はあらゆる意味で優斗にある事から、その対応に優斗は複雑な表情を浮かべる。

むしろ優斗には、隣でどんな表情で対応すべきか困っているシュタンの方がやりやすく、ついそちらに視線を向けてしまう。

「今回の件、家族と過ごせるように手を回してくれた事には感謝しています」
「えぇ。私は利益を、貴方は家族を守れた。それだけです」
優斗がシュタンの別れた妻とその子供たちにした提案は、彼らの為と言うよりは己の心の平穏を守る為だった。

優斗の提案。
それは、3人が商会の余っている部屋を借り、住み込みで働くと言うモノだった。

もちろんそんな事をすれば、失敗した際にシュタンの家族が巻き込まれる恐れがある。優斗はそれを回避する為に、彼ら3人を雇い入れ、派遣、すなわち貸出しと言う名目で送り込む契約を結んだ。こうすれば仮にシュタンが失敗しても、3人の身柄を優斗の許可なしにどうこうする事は出来ない。

そして優斗はこの地を離れるからと1年分の給金を前払いし、それを受け取った3人はその資金で商会の部屋を借り上げ、シュタンは1年分の人材貸出費用を優斗に支払った。

これにより、シュタンの失敗が3人に降りかかる可能性が完全に無くなった訳ではないが、少なくともキャリー商会が手を出す事は無い。何故なら、優斗が不在の場合、代理人が3人を優斗の元へ送り届ける事になっているからだ。

とは言え、優斗はこれによりアイタナからは折角とれる人質を逃がす判断にさり気無く苦言を呈された。優斗はそれを失敗した時の算段よりも成功率を上げる為だと言い張って何とかやり過ごした。

「守れたと言えるのか、微妙なところだがな」

家族に被害を及ぼさない為にも、しばらくは他の街で暮らさせるつもりだったシュタンにとって、優斗の提案はある種の救いであると同時に、自分の決断に対する当てつけとも感じていた。

支店を任される程度にはベテランで優秀な商人であるシュタンは、頭を冷やして冷静に考えた事で、これは自分の判断ミスが招いた事態であり、全責任が優斗にあると責めるのは間違っている上に意味が無い事だと判っている。それでも感情が、悪辣な取引で大金を掠め取られた相手を拒否する事を止められず、積極的に感謝する筋合いはない、と考えていた。

一方優斗は、今回の商談を通して自分にはこの様な、根こそぎ奪

い取るスタイルは向いていないと実感した。出来ないと言うほどではないが、利益に対する精神疲労が釣り合わない。

もし、キャリー商会の助けが無ければ、優斗はこの商談で相手の手持ちを全て売らせると言う手段を取る事になった可能性が高い。そうなればこの一家は散り散りに売り飛ばされ、精神疲労は現在の比では無かっただろう。優斗にはそれに耐えられる自信はなかった。

優斗はこれまで、一か所に留まる、もしくは同じ場所を巡るなら互いに得をする商売を心がけるべきだが、そうでない、一期一会の商談は、出来る限り利益を得るべきだと言うスタンスを取っていた。二度と会わない相手の心証を良くしても、意味は無いと考えていたからだ。

しかし今回の事で、いかに二度と会わない相手でも、後味の悪い商談は控えようと考え直した。

「もう、あなたったら。すいません、主人も本当に感謝しているんですよ？」

「一応、離縁してる事になっているんですから、主人と呼ぶのは控えて頂けると」

「あら、そうだったわね。えっと、シュタンさん、でいいのかしら」

「……なんだか照れるな」

「そう？　新鮮でいいじゃない」

新婚か、と心の中でつっこみを入れながら、優斗は顔を僅かにひきつらせてその光景を見守る。

今回、３人を貸し出す契約をするにあたって、その特性上、優斗が中間マージンを得る額面に調整されている。それは不自然すぎる契約内容を、更に不自然にしない為の工夫であり、実際に優斗はこれにより利益を得ている。

シュタンはそれを家族と暮らせるのならばとそれを受け入れた。
支払いは現金でなく現物で行われ、旅に必要な食料などの消耗品で受け取った分以外は、絹の支払いにあてられた。それにより、キケロ商会は仕入れと売値の差額だけ損を免れた事になる。

「そう言えば、1つ気になっていた事があるんですが、聞いても構いませんか？」
「ん？　あぁ、答えられる事なら答えよう」
「2人はどんな理由で離縁した事になっているんですか？」
この世界で結婚をする際にどの様な儀式が行われるのか、優斗はある理由で知っていた。

優斗が調べた内容が正しければ、結婚する2人が竜神様に結婚を報告し、愛の言葉とその証を交換して共に助け合って暮らす事を誓うのだが、離婚する際は竜神様にその理由を告げる事になっている。もちろん、実際に竜神様の前に立つ訳ではなく、神官か神父の様な役割を持つ人達が、その代理を務めるのだが、理由がなかったり、彼らが納得しない理由であった場合は離婚が成立しない事もある。

「あー、いや」
「うふふふ」
「えーっと、参考までに聞きたいのであって、別に無理に言わなくても結構ですよ？」
「いいえ。聞いてください。
実はこの人、倉庫で女の人と密会していたんですよ」

くすくすと笑う妻を横目で睨みながら、シュタンは誤魔化す様に咳払いをする。
それはもしかすると、アイタナさんとの商談の事ですか、と聞けなかった優斗は、代わりに別の言葉を口にする事と、そろそろ商会

を後にする事を決める。

「じゃあ、私も結婚した暁には気を付けないといけませんね」
「えぇ。是非そうして下さい」
「教えて頂き、ありがとうございました。では、私はこれで失礼します」
夫妻に見送られ、優斗はまた彼らの子供2人とすれ違い、お礼を言われながら商会の建物から出ると荷馬車に乗り込む。

そして今度は川沿いに西へと馬を進め、目的地であり、本日の宿になる予定でもある場所へと向かう。

「お久しぶりです、女将さん」
「あ……」
女将は優斗の顔を見るなり、身をひるがえして厨房へと逃げて行く。

優斗はそれを不思議に思いながらも、逃げられる心当たりが見つからず、しかし待っているのも手持無沙汰だった為、後を追うように厨房へ向かう。

「すいません、荷馬車、勝手に納屋に入れたんですけど、よかったですか？」
優斗が言葉をかけても、厨房からは何の返事も無い。

仕方なく厨房の扉を開け、中へと入ると、そこには宿の大将と女将が並んで立っていた。

「ごめんなさい」
「へ？」

突然、頭を下げて謝る女将の行動に、優斗は意味が判らず大将に視線を向ける事で、説明を求める。

しかし大将が口を開く事はなく、ただ真剣な眼差しで優斗を見つめている。

そして数秒間見詰め合った後、唐突に視線を、頭を下げ続けている女将に向ける。優斗も釣られて視線を向けるが、頭頂部とそのやや前方が見えるだけだった。

「あの？」

優斗が声に出して返答を求めるが、やはりどちらも無反応だ。

優斗は仕方なく、女将が謝罪している理由と、大将が視線が何を示すのかを考え始める。

考えながら2人を観察して居ると、ふと気づく。女将の頭に乱雑に巻かれているリボンに、見覚えがあると言う事に。

優斗は思い出す。

先ほど、厨房に駆け込む前の女将は何も付けていなかった。ここに滞在中、女将が頭に付けていたのは埃よけ、もしくは髪を束ねる為にしていた三角筋以外、記憶にない。

そこまで考えて、優斗はようやくそのリボンに何故見覚えがあったのか、思い出す。

それはフレイが頭に付けていた物と同色で、巻き方も乱雑ではあるが酷似している。それに気づいた優斗がはっとして顔を上げると、大将はゆっくりと頷く。

「大将、もしかして」

「悪いが何も言えない。行け」

そう言って大将はわざわざ右手で左手側の壁を指差した。

出て行けと言うのであれば、厨房の扉か入口の方向を指すものだ。ならば今差した方向には別の意味があるのだろうと、優斗はその方角を確認する。

厨房正面は食堂で、それは建物の中でも特に日当たりの良い南側に位置している。そして厨房の扉を入った優斗は、食堂を背にして立っている。そんな優斗と正面から対峙している大将の左手側は、東だ。

「以前はお世話になりました。明日、出発しようと思っています」

「あぁ」

優斗は素っ気ない態度の大将に頭を下げてから踵を返し、厨房の扉に手をかける。

そして彼らが直接それを教えてくれない事にはなにか意味があるのだろうと考え、あえてそれ以上は何も聞かず、外に出る。

荷馬車を納屋から出し、馬を走らせながら優斗は2人の行動が示す事柄について考えた。

女将が不自然にしていたリボンがフレイの存在を意味すると仮定するならば、謝罪は彼女に関する事である。

フレイの関する事で謝罪していたのだと言う仮定が正しいのであれば、大将の指差した方角は彼女の行先を意味する可能性が高い。

そして彼らがそれを直接口に出来ない理由が、何らかの方法で口止めされているのだと仮定すれば、わざわざ行先を告げる事はしないだろうと予想出来る。

その予想が正しいと仮定するならば、一目見れば、最低でも話をすれば行先が判る相手であったと推測される。

以上の事から、フレイは誰か行先の判りやすい相手と同伴で宿を訪れ、東へ向かったと考えられる。そして優斗が思い付いた、一目見て東へ行くと判る人間は、式典に関係する者達だった。

例えば、商売を目論む商人。職人の仕立てた衣服を届ける配達人。式典に直接参加する貴族や、従者等のそれに連なる者達。

仮定に仮定を重ねた推論である上に、該当範囲が広すぎるとは言え、この事で優斗は1つの確信を得ていた。

それは、フレイが無事である可能性が高いと言う事。

裏切られたと感じていた優斗は、同時に彼女の身を案じても居た。だからそれは喜ばしい事であり、あわよくば再会して話をしたいと考えた。たとえ、自分の元に戻ってこないのであっても。

こうして心残りが1つ解消された優斗は、2人に対する感謝の言葉を心の中で紡ぎながら、手綱をひいて荷馬車の速度を上げた。

向き不向き（後書き）

カクスでの商談を終える話でした。

次回は、優斗くん初の1人行商が始まる、かもしれません。

行商と言うモノ

早朝にカクスを出発した優斗は、約3か月ぶりの陸路を1人で進んでいた。

荷馬車にはアイタナから受け取った衣服や食糧等の他に、カクスで仕入れた品々が積まれている。

今回、優斗は利益の大半を宝石等の嵩張らない物にかえてジュラルミンケースと皮袋に分けて保管している。そしてその残りであまり重くない品物を仕入れた。品目は一部は道中で食べ、残りは中継地の商会で売る予定の干物や乾物、アクセサリだけでなく薬にもなると言う琥珀、そして加工された革製品だ。積荷に軽い物を選んだ最大の理由は、荷馬車を軽くして移動速度を上げる事だ。

小休止と昼休憩を挟む以外は延々と進み続けた優斗は、初めての1人野宿と言う事で何時もより早い時間に荷馬車を止めると、手綱を手近な木に括りつけて火を起こす準備を始める。

荷馬車を離れるのは不用心だと思った優斗は、見える範囲で薪代わりの枝を拾うと、足りない分を荷馬車に積んでおいた薪で補う事を決め、食事の準備をする為に調理器具と食材を取り出す。

調理と言っても、お湯を沸かして簡単なスープを作り、たき火で干物を炙る程度で後は保存食とパンで済ませたのだが、思ったよりも時間がかかってしまい、夕食を終えた時には既に日が沈んでいた。その為、優斗は日の沈んだ暗い川で水を汲み、食器と調理器具を洗う羽目になった。

焚き火で沸かしたお湯を火から下ろして埃が入らない様に布を被

せると、優斗は睡魔に襲われて眠りにつく。しかし火が消えてしばらくすると目が覚め、火を継ぎ足すとまた眠るを朝まで繰り返した。

次の日も同じ様に街道を進む。

そしてやはり早めに野宿の準備を始めるが、火が中々点かず、夕食を終える前に日が沈んでしまい、優斗は仕方なく片付けを翌朝に行う事にしてそのまま就寝。

更に次の日の朝食は、昨晩の片付けを終えると面倒になり、保存食をおざなりに齧るだけに留めて出発する。

日中はひたすら荷馬車を進め、昨日よりも更に早い時間に夕食の準備を始めよう決めていた優斗だが、午後から雨が降り出したせいで結局は荷馬車の中で保存食を食べる羽目に陥った。

夜も火が熾せず、ホロを叩く雨の音を聞きながら毛布に包まる。

寒さで中々眠れない優斗は、暖を取る為に何かないか探して、フレイの外套を見つけると毛布の上から身体にかける。2か月以上使われていないにも関わらず、かすかにフレイの香りを感じた気がした優斗は、フレイが居た時に遭遇した雨の日には、湯たんぽ代わりだと言って同じ毛布に包まったな、と思い出しながら眠りにつく。

4日目の朝は生憎の雨模様で、水しぶきを受けながらも優斗は荷馬車を進める。

午前中の道程が問題無く進み、昼休憩に荷台で食事を摂り終えて出発する頃には雨も上がっていた。しかし午後の休憩を取って居る時に疲れが吹き出し、気が付けば舟をこいでいた。結局、午後はあまり進む事無く荷馬車を止め、かなり早めに野宿の準備を始めるも雨の影響で火が中々点かず、干物や干し肉を火で炙って食事とした。その後、明日以降の水を煮沸すると暖を取る為に湯を飲んで、更に熱いままの鍋を荷馬車に置いて、濡れた地面を避ける為に荷台で眠

った。

5日目の朝は既に日が昇っている時間に目が覚めた。
寝坊してしまった優斗は、その焦りから朝食を諦めてすぐに準備をして出発する。
足取りが順調だったのは早めの昼食前までで、昼食後は明らかに馬の進む速さが落ちている事に気付いた優斗だが、午後の小休止までその原因に気付かなかった。遅れた分を少しでも取り戻したいと言う焦りから午前の小休止をせず、昼食を急いでかきこんだ優斗は、馬に水を与える事を忘れていたのだ。
結局、優斗はその場で野宿をする事に決める。馬がいつも以上にくたびれて見えた優斗は、話し相手がいない寂しさを誤魔化す様に、返事の無い馬相手に何度も謝罪を繰り返した。

6日目。
普通であれば目的の街に到着するのに十分な時間が経過したにも関わらず、優斗はまだ道程の3分の2を超えた程度しか進んでいない。
しかし疲労は順調に蓄積しており、この日はほとんど進む事なく、昼食を終えた優斗は疲労回復の為にとその場で休憩と睡眠を取る事に決める。

その夜、昼寝の影響で眠れずにいた優斗は、遠吠えが聞こえた事で身を震わせる。
それは野犬、もしくは狼が遠吠えの届く範囲に生息していると言う事であり、そんな場所で1人、火も焚かずに眠っている事への不用心さとそれに伴う恐怖が増した。

そして恐怖で深く眠れない夜と、舟をこぎながらの危なっかしい移動により、疲労困憊の優斗は出発9日目にして目的地へと到着す

る。

目的地へと到着した優斗は、とにかく安全なところで眠りたい、と表通りの適当な宿を取ると、朦朧とする意識でなんとか貴重品だけを持ち出し、ようやくたどり着いたベッドに倒れ込んだ。

到着した日の午後から次の昼まで眠り続けた優斗は、自分が何故こんな場所にいるのか判らず、寝ぼけ眼で辺りを見回す。

何とか落ち着き、温かい食事を摂って身を清める事でようやくいつも通りに近い状態に戻る事が出来た優斗は、自分の旅に対する認識に甘さを実感していた。

「出来る事と実践は違う、か」

ここ3日、特に増加傾向にある独り言を呟きながら、優斗は反省する。

優斗はユーシアで、サバイバルに必要な火の熾し方や野外調理等の技術をマスターしたつもりだった。しかし、万全の状態で出来る事であっても、何日も荷馬車の手綱を握り続けた後に出来るとは限らない、と言う当然の事を、優斗は判っているつもりで理解出来ていなかった。

食事を摂る際に宿の人間に指摘された、馬の毛艶が悪いと言う点も問題の1つだ。優斗は馬の手入れを怠るどころか、しなければならない事自体を失念していた。毛並の手入れは定期的にしなければならないと習っていたにも関わらず、だ。

それ以外にも至らない点が多いどころか、問題の無かった部分の

方が少なかった旅路に、優斗は自分が如何にフレイに依存して旅をしていたのかを痛感する。

「どうするかなぁ」

反省し、気づいたところで問題が解決する訳ではない。

そこで優斗は、それらの解決策として3つの案を準備した。

まず1つ目は商隊への参加。もう1つは、人を雇う事。最後に、スキルの向上。

最後の1つは一朝一夕に解決できる問題ではないので、少しずつ慣れるしかない。そしてそれ以外を実践するならば、どちらにしても情報収集をしなければならないと考えた優斗は、大き目の鞄に干物と乾物を詰め込んで背負うと、幾つかの琥珀を腰にぶら下げた袋に入れて宿を出る。荷物は軽い為、荷馬車を使うほどではないと言う事もあるが、この行動はむしろ馬に休息を、と優斗が考えた結果だ。

優斗が向かったのは、適度に大きな商会だった。

現在の状況を鑑みて、優斗はあえて人気が少なそうな、しかしそれなりの規模を誇る商会を選び、店内に足を踏み入れると、中年の男が振り返り、にかっ、と笑う。

「らっしゃい。買取か？」

「はい。カクスから干物と乾物を持ってきました。後、琥珀も少し」

「おう、見せてみな」

妙に張り切ってるなと思いながら、優斗は素直に鞄を下ろす。

その中身を確認している間に琥珀を取り出し、それらを合わせた額を提示された瞬間、反射的に商談を開始しようとして、優斗はあ

る事に気づく。一体これは、幾らくらいで売るべきなのか、と。
目の前の男は優斗の表情からそれを察したのか、にやりと笑ってソロバンを取り出す。

「多分、お前の仕入れはこのくらいだろう？」
「え、えぇ。まぁ」
実際には男が指摘した額よりも安く仕入れているのだが、その誤解は有利に働くと条件反射的に考えた優斗は、肯定する。

そんな優斗の反応に満足した男は、優斗の肩を勢いよく叩きながら、豪快に笑う。

「正直すぎるぞ、若造」
「った、って、いや、そう言う訳では」
「お前さん、見たところ駆け出しだろう？　行商を始めて1年経ってない。違うか？」
「その通りです、けど」
まだ行商歴1年どころか半年も経っていない優斗は、今度は正直にそれを認める。

するとまた男は豪快に笑い、ソロバンを弾く。

「この額で買い取ってやる。代わりに1つ頼まれてくれないか？」
「何でしょう？」
提示された額が先ほどよりもそれなりに高い事もあり、優斗はつい肯定的な返答をしてしまう。

優斗の事を、駆け出しのひよっこだと言う間違っていない勘違いをしている男が、一番致命的に勘違いしている事は優斗が貧乏であると言う事だ。身を清めたとは言え、この旅の間に服はかなりくた

びれてしまっているせいでボロく見え、大きな背負い鞄で持ってきたせいで徒歩の行商だと勘違いされた。

もちろん優斗はそれなりに裕福であり、服がくたびれているのは洗濯を力任せに行ったせいと、何度も着替えずに眠ってしまったせいであり、背負い鞄なのも別の理由がある。

「うちで仕入れして、北西の村でそれを売って来い」
「北西の村、ですか？」
「あぁ。ちょいと前に色々とあってな。それ以外にも色々あって、物が足りてねぇ」
「色々、ですか？」
「あぁ。火事とかそんなんだ」
その言葉に、優斗は何か隠し事をしている事に気付くが、言及はしない事にする。

物資が不足している場所、言うなれば稼げる場所を教えてくれている男に対し、優斗は不信感を持ちながらもその理由を探す。文字通り火事場の商売で稼ごうと言う人間がいない事は不自然だ。
ならばきっと、地元の人間が近づかないだけの理由があり、しかしそれは優斗に任せても問題はない程度だと言う事なのだろ、と予想するが、それははずれている。

「いいんですか？」
「あぁ。むしろ助かるくらいだ」
優斗はその言葉と現状を突き合わせ、自分に仕事が回って来た理由をもう1つ思い付く。

現在、経済の混乱で小規模の商会や行商人の一部が廃業に追いやられている。中規模の商会の中にも、商売の縮小をした所がある、

とも聞いている。
それはもちろん、ロード商会が荒稼ぎをしたせいであり、その結果、あえてリスクの高い場所へ行く人間が減っている。もしくは、根本的に人手が足りていない。

実際には、件の村はこの商会の仕入れルートの1つであり、他の誰かに奪われるならば行商人を介してでも関わっておきたいと言うのが男の本音だ。

そして優斗は、この提案を吟味し、自分に必要な技能を得る為に有用な事だと判断していた。

優斗は前回の商談で、今後はただ利益の大きさだけを追求した商談をしない事を決めていた。しかし、それを決意した優斗には、どこからが暴利で、どこまで適正なのかを測る物差しが存在しない。

それは利益計算と言う商人にはごく基本的な技術であるにも関わらず、優斗はこれまでにそれを行った経験が無い。

「是非、お願いします」
「おう、じゃあ仕入れ商品はこんなのでどうだ」
提示された生活用品や食糧を見分しながら、優斗は考える。

まず、最低限必要なモノとして、優斗の食費と滞在費。これは往復の時間によって変動する。輸送の手間賃等の自分の懐に入る利益はどの程度が適正なのかをこれまでの商売経験から推測し、その他様々な要因を出来る限り思い浮べる。

「ちなみに村までどのくらいの距離ですか？」
「荷馬車なら1日飛ばせば余裕だな。歩きだと2～3日ってとこか」

その数字を元に、優斗は思い浮かんだ要素を加味しつつ、目の前の商品の嵩張り具合から買取価格にいくら加算して売るべきかを考える。

実際には移動中に関や市壁があれば税が掛かり、荷馬車やその他生活用品は消費せずとも劣化するので購入費用の償却も計算する必要がある。何より毎回商売が成功する訳ではないのだから、ある程度の失敗や損失が出た場合の補てんも考えなければならない。

しかし優斗はそこまで考える事なく、ざっくりといくら程で売れば経費が賄えるのかだけを考えながら購入品目を決めて行く。

「じゃあ、これとこれを」

「おうよ。

あっちじゃ物が足りないんだ、多少高くても売れる。で、高く売れば売るだけお前の儲けになる」

男の言う事は正しいが、高く吹っかけすぎれば村人の印象は悪くなる。逆に、安く売捌ければ好印象を与え、運が良ければ村の復興に関する物の仕入れも頼まれるかもしれないし、そのまま村の専属行商人の座さえ手に入るかもしれない。優斗にとってそれはあまり価値の無い事だが、駆け出しの行商人であれば安定した行商路は喉から手が出るほど欲しいモノだ。そしてそうなればこの商会を懇意にする可能性が高いので、ある意味男の思惑通りと言える。

しかし男は、目の前の駆け出しがどの様な結果を持ち帰ろうと構わなかった。成功すれば村との繋がりが維持できる。失敗しても、村に行商人を送ったと言う事実から、一時的にでも繋がりが維持していると相手に思わせる事が出来る。

「紹介状書いてやるから持ってけ」

「ありがたく頂いて行きます」
そしてその為には、優斗を送り出した人間が誰であるか示す必要がある。

それは優斗の身分をある程度証明する事にもなる為、見知らぬ村で商売をするよりはやりやすいはずだ。もっとも、物資が不足している現在では、紹介などなくとも村は大歓迎する事が安易に予想出来る。

「じゃあな。道中気を付けろよ」
「ありがとうございます」
なるべく重くない、しかし生活に重要な品を優先して選んだ優斗は、男に見送られて商会を出ると、自分が重要な事を忘れていた事に気付く。

優斗が慌てて振り返ると、男は不思議そうな顔をしながら、優斗の出方を伺う。

「すいません。商隊に参加したいんですけど、この辺ではどこにいけば参加出来ますか？」
「ん？　あぁ、普段ならその辺の酒場で募集してる事もあるだろうが、今は式典があるからな」
そう前置きした男は、優斗に現在は商隊を探すのも募集するのも厳しいと告げる。

いわく、ルナールまで荷馬車で3日と言う距離を商隊を組んで進む価値は少なく、更に現在は式典向けの商品を運んでいる者が多いので、ルナール方面行きには素早く動ける事を重視して単独行動する者が多い。離れて行く者は好敵手の減った場所へ向かう者がほとんどであり、人数が増える事を望まない、と言う事だ。

「だから商隊に参加したいなら、式典が終わった後のルナール辺りがお勧めだな」
「そうですか。ありがとうございます」
お礼を言いながら今度こそ本当に商会を去る優斗の背中を見送りながら、男はほくそ笑む。

買い取った品でどれだけの利益を上げるべきか計算した優斗は、慎重に仕入れの品を選んだ為、上手く立ち回ればその中で考えられる最大の利益が得られるだろう。
しかし、旅の疲れが残っており、思考が鈍っていた優斗は、そちらばかりに気を取られ、買い取る品の値切りと、その代金として支払った品物に対しての利益計算を怠った。その結果、相手の言い値で取引してしまった事に、優斗は最後まで気づいていなかった。

優斗は一旦宿に戻って荷物を荷馬車へと積み込むと、商隊に参加出来ないのであれば次善の手を打つ必要があると考え、キャリー商会の支店へと向かう。

街を歩きながら、優斗は昨日まったく見る余裕が無かった町並みを眺める為に少しだけ歩みを緩める。

ここはカクスとルナールを繋ぐ街道と、公国北部へ伸びている街道が合流する位置にある街で、バイスと言う名で呼ばれている中継の街だ。

バイスはその位置関係上、物がたくさん通過する。しかし、ルナールやカクスで売る品がただ通過するだけと言う事も多い。それでも首都に店を構えられない商会が、集まる品々と水路による物流の

恩恵に預かろうと店を連ねている。ここから水路でカクスに送る便を手配できなかった商人がこの街で取引を済ませる、と言うのは良く見られる光景だ。

そんな中、中心部から少し離れた位置にあるやや大き目の建物に目的地の名前が書かれた看板を見つけた優斗は、早速中へと入って行く。

「すいません」
「はーい、お客さん？」
「いえ、紹介状を持ってきたんですが」
「はいはーい。って、あたしが見てもええんかなぁ」
そう言いながらも、店員は優斗に詰め寄ると紹介状を奪う様に受け取り、封を切る。

そしてその中身を読み終えると、優斗の顔をじろじろと観察し始める。
優斗はその行動に、アイタナさんは一体何を書いたんだと呆れながら、要件を切り出す。

「実は、人手を融通して貰いたいのですが」
「どないな子が欲しいん？」
「えーっと、身の回りの世話をしてくれる人で、旅が苦にならない人。それと」
「ここに来るくるんやから、荷馬車でやんね？」
「はい」
「ちょいまってて」
優斗は勢いに負け、最初の間違いに訂正を入れる事も出来ずに居ると、店員の女性は奥へと消えて行く。

優斗は女性に対し、年の頃は自分と同じか、少し上だろうと予測しながら、押しの強い女性店員に対抗する術を考える。それと同時に、なんで似非関西弁だと言う疑問を浮かぶが、今は捨て置く。

しばらく考えるも、本当の目的を告げる以外に有効な方法を思い浮かばなかった優斗は、大人しく女性が戻るのを待つ。

「お待たせ。こっちの人やけど」

「いや、そうじゃなく」

「質問は後で聞いたる。とりま説明。ええな？」

「……はい」

今度は正面切って押し切られた優斗は、仕方なく女性の差す奴隷に視線を向ける。

店員の女性が最初に指差したのは、見た目から３０代後半以上と予想される女性だ。

顔は不細工ではないが、この世界の年相応に老けている事も含め、美しいとは言えない。体型は恰幅が良いと言うより、腹が出っ張っている印象だ。

「家事もお世話もばっちしやし、ギフトで火も起こせるんでおすすめやね。注文されたんだけなら、やけど。やっぱ若いんがええん？」

「いや、別にそう言う訳では」

「そう？　んなら候補１やね。次ん子はこっち」

次に指差した相手は、１０歳そこそこの少女だった。

何かに怯える様に肩を窄めており、心なしか肩が震えているようにも見える。そのせいでそ元から小さく痩せた身体が更に小さく見え、先ほどの奴隷と比較する事で不憫とさえ感じてしまった優斗は、その同情の行き場に迷い、視線をそむける。

「家事はぼちぼち。やけど、他ん子と比べてすんごい安いんよ。ギフトが天の光やさかい護身にも、って、護身にもならん、痺れるくらいやて書いてある。やから安いんか」
　1人で納得する女性の手元には、いつの間にか3枚の紙が握られている。

　優斗が、把握してないのか、と苦笑していると、女性は3人目を指差す。
　3人目は十代後半の帝国人女性で、際立って胸が大きい。

「おっぱい大きいんは男の浪漫やろ？　一番おっきいん選んできたわ。顔は並みで、家事は教えれば出来るかも？　程度やけどある意味お世話は得意なんちゃう」
「店員さん、なんか色々それでいいんですか？」
「いや、ここん店、ほとんどルナール店の倉庫代わりなんよ。売れんでも別に怒られへんし」
「おいおい」
　軽いなぁ、と思いながら、優斗は今が誤解を解く好機だと口を開きかける。

　しかしそこから言葉が発せられる前に、女性はまたしゃべり始める。

「あ、そういや自己紹介してへんな。
　あたしん事はアニーって呼んでや」
「……行商人の優斗です」
「知っとる。ほんまに21なん？」
「あぁ、アイタナさんか。年はもちろん21。いや、もう少しで22か」
「そりゃ、皆そうやろ。ちなみにあたしは23。あたしのがお姉さ

んやね。ちゃんと敬ってそう呼ぶんやで？」
「じゃあ、アニーお姉さん」
「ヤメテ。ゆーといてなんやけど、やっぱお姉さんはやめといて」
「じゃあ、アニーさん」
「ユウちゃんはいけずやなぁ。アニーって呼べゆーたやん」
「店員さん、真面目に商売して下さい」
「ちぇっ」

優斗は内容も意味も無い会話を交わしながら、懐かしい感覚を思い出していた。
それは、放課後に仲間とくだらないおしゃべりをしているような気安さ。知り合いの知り合い程度であっても気兼ねなく言葉を交わせた、一種独特の空間だ。

優斗はそんな生ぬるい空気に身を浸す事で、旅で溜まっていた精神的な疲労が少しだけ抜け落ちて行くのを感じていた。

「で、ユウちゃん」
「ユウちゃんは止めてください、店員さん」
「やったら、ユウちゃんも店員さん禁止やで」
「はいはい。アニーさん」
「やからアニーでええて。ユウちゃん」
「だからユウちゃんは」
「アニーさん言うの止めたらたらやめたるわ」
「……アニー」
「そうそう。んじゃ、優斗君でええか？」
「えぇ」
満足げなアニーの姿に、優斗は思わず苦笑する。

勝ち誇ったようなアニーは、今、しゃべるのを止めている。

これは再び誤解を解くチャンスが巡って来たのだと判断した優斗は、少しだけ真面目な表情を作ると、今度は出足を挫かれない様にと急いで説明を開始する。

「アニー、私は奴隷を買いに来たのではないんです」
「へ？　やけどさっき、人手がほしーて」
「人を雇いたいんです」
「一緒ちゃうん？」
「買うんじゃなく、雇うんです」
「なるほどなぁ。やけど、そんならなんでうちに来たん？」
それはもっともな疑問だ、と優斗は誤解を招いた自分の行動に苦笑する。

奴隷商に人手が欲しいと言えば、奴隷を融通して欲しいと言っていると判断されて当然だ。
それにも関わらず優斗がここに来たのは、単純に頼れる場所がここ以外存在しなかったからだ。

「他で探して、わざわざアイタナさんの顔を潰す事もないかな、と」
「あー、確かにあのおばちゃん、そういうん根にもちそうやね」
「いや、そう言う意味では無く」
「まあ、それはええやん」
良くは無いとは思いながらも、優斗は反論しない。

話しているのは楽しいが、話がまったく進まないのは困るからだ。
とりあえず無駄話は用事が終わってからにしようと考えた優斗は、先ほど告げられなかった詳細な条件を伝えるべく、口を開く。

「行商人に同行出来る人で、給金は要相談。最低限の衣食住は保障します。って言っても住むところはないですけど」

「仕事ん内容は？」
「旅、と言うか野宿でする事全般と、商売の手助け、になるかな」
「んー。てーと、弟子が欲しいみたいな感じなん？」
「弟子、ですか」
「身の回りの世話と商売の手伝いやろ？　その辺の農民で出来るとは思えへんのやけど」
アニーの言う通り、優斗のそれはこの国では高望みと言えるレベルだ。

前者はまだしも、後者の商売の手伝いと言えば、文字や計算が必要だと考えるのが普通だ。そして一般の農民はそれが出来る程の教育を受けていない。運よく教育を受けている人材を見つけたとしても、身の回りの世話が問題だ。アニーが考える、わざわざ手配時に注文する程の商売の手伝いを熟せる人間、ならそんな事を了承するとは思えない。
もちろん優斗はそこまで考えておらず、ただ単純に出来る範囲で手伝って欲しいと言う意味での条件提示だ。

「ちなみにどこ行くん？」
「一応予定では、ルナール経由で王国へ行く予定です」
「……それやと難しいかもしれへんな」
アニーの視線が優斗の頭に向き、次に彼女よりも少し黄色っぽい肌に落ちる。

帝国人の特徴を持つ優斗と共に王国へと向かう。それを許諾する者はいても、読み書き、もしくは計算が出来る、すなわちそこそこ学がある人間はいないだろう、とアニーは考える。彼らはそれが危険である事を知っているし、危険を冒さずとも働き口は存在するからだ。

「なぁなぁ、優斗君」
「なんですか」
「丁度、どこぞの潰れた商会の娘が入荷したばっかなんやけど、なんならこうてく？」
「いや、奴隷はちょっと」

アニーの提案は至極まともなものだ。ただし、この世界の常識なら、と言う冠詞が付く。

人手が欲しい時に奴隷を買い、不要になったら売る。それはまとまったお金があるのなら良い方法だ。
もちろん、奴隷は高価なので売買の差額でそれなりの損は出るが、普通に人を雇えば給金が掛かるし、関や市壁の通過にも奴隷より高い税が必要になる。

更に女奴隷なら、もう1つ損を消す事も出来る。奴隷に相手をさせる事で娼館に行く費用が浮くのだ。故に、生娘でない、技能やギフトが汎用的で有用な者を買って使い、不要になったら売るのが最もコストパフォーマンスが高いと言える。

もっとも、世の行商人にそんな事をする者はほとんどいない。
何故なら、身の回りの世話をさせる奴隷を買うくらいなら、その分の金貨で積荷を買い、少しでも多く稼ぐ方が重要だからだ。

「奴隷が嫌やったら解放せやええやん。奴隷なりたてやし、感謝されるしでお得やで」
「それだと逃げられませんか？」
そう問いかけながら、優斗は胸の奥がちりちりとするのを感じていた。

苦い思い出を胸の奥に仕舞い込みながら、優斗は売らなくても良いと言いつつ、売込みをかけてくるアニーの行動に、呆れると共に感心していた。

「一家離散して身寄りもあれへんし、弟子にしたるって契約交わせばええやん」
「なるほど。そんな手が」
「っし。やったらいっぺん連れて来たろか？　生娘や無いから負けとくで」
「んー。ちょっと考えさせてください」
「ほな、あたしは店番しとるさかいに、気が向いた声かけたって」
「はい、ありがとうございます」
「ええて。と言うか、そろそろ敬語やめへん？」
「了解」
その後、優斗は椅子を勧められ、アニーが3人を奥へ連れて行くのを見送りながらそれに腰かける。

優斗は腕組みをし、改めて人を雇うと言う事について考える。
この国で優斗は、既に何人かの人を雇っているが、誰もがその土地に残る形で行われている為、直接使うのは初めての事となる。

それを踏まえて、どんな人が良いと考える以前に、一か所に留まらない商売に同行出来ると言う条件の厳しさに気付く。しかも優斗の旅は、当面の目的地以外、何処に向かうか判らない旅だ。

例えその条件で人を雇ったとして、農民や乞食の類であれば、契約を交わしても反故にされる可能性がある。それだけならば良いが、誰も居ない街道のど真ん中で見知らぬ他人と2人きりなのだ。荷物を奪われたり、最悪命も取られる可能性すらある。優斗は彼らが契約権を失う事に躊躇しない可能性に気付いた事で、そんな最悪の展

開すら思い浮かんでしまう。

人を雇うリスクと、雇うまでの労力。それと比較して、奴隷は絶対服従で、購入は容易だ。

自分の思考が段々とこちらに染まりつつある事を自覚しながら、優斗は己の倫理観について何度目かの思考を行う。そして、奴隷の購入を全否定はしないが、まずは人を雇う方向で行動して見ようと結論する。

それを店番中のアニー伝えるべく、優斗が腰を浮かせた瞬間、キャリー商会の正面扉が乱暴に開かれた。

行商と言うモノ（後書き）

優斗くんが本当の意味での行商を初めて行う話でした。

ついでに、フレイさんの偉大さを再認識する話でもあります。

さて、彼はこのまま行商を続ける事が出来るのでしょうか。

横入り交渉

キャリー商会の正面扉が開かれ、そこから2人の男が入って来る。

それに続いて、小汚い布の塊が入って来る姿を目撃した優斗はぎょっとし、同時に吹いた風の匂いに顔を顰めた。それも一瞬の事で、すぐに真面目な顔を作った優斗は、一先ず様子を見る為に浮かせかけた腰を落ち着けると、状況を観察し始める。

「おい、奴隷の買取はここでいいのか」
「あっとるよ」
「急いでるんだ。さっさとしてくれ」
居丈高な男が、布の塊を指差す。

もちろんそれがただ布である訳が無く、頭からつま先まで大きなフード付きボロ外套に包まれた人間だった。
大きさとキャリー商会に持ち込まれ事からきっと年頃の少女なのだろうと考えながら、優斗は他人の商談を横で見ると言う機会に恵まれた事に気付き、今後の参考になるかもしれないと考え、静観する。

「あんたら字ぃ読める？」
「読めねぇよ。それがどうした」
「んじゃあ、あたしが読むから答えてってぇな」
「はぁ！？」
居丈高な男は怒鳴り散らすような大声でアニーに詰め寄り、睨みつける。

少女らしい売り物の隣に居る青年はそれに驚いてびくりと肩を跳

ね上げるが、当のアニーは涼しい顔だ。

「聞かな値段決めれへんやろ」

「知るか。俺は急いでんだよ。さっさとしろ」

「はいはい。じゃあ、１つ目――」

「んな事より、いくらだ」

男の言葉に、アニーの視線から温度が消える。

優斗の方は、商談として参考にならないが、こんな買取客も居ると言う意味では勉強になるかな、と考え直しながらその光景を見つめている。

そしてアニーに対して本格的に危害を加える様なら男を突き飛ばすくらいは出来るかな、とも考えて再度僅かに腰を浮かせる。

「あーそー。そんじゃ、公国金貨１枚ね」

「はぁ！？　ふざけんな！　女奴隷の相場は調べてあんだぞ！」

「金貨１枚」

「１５枚だ！」

２人の提示した金額に、優斗は吹き出すのを堪えていた。

確かに女性奴隷の相場は、金貨１５枚くらい、だった。しかしそれは、容姿が並み以上の十代の生娘で、更に売りになる点があると言う最良条件での場合だ。ついでに言えば、男の提示した額は売値であり、仕入れ相場はもっと低い。条件をほとんど満たすフレイですら金貨１０枚程度の評価だった事を考えれば、目の前の薄汚れた少女に金貨１５枚はありえない。

アニーの方は、持ち込んだ少女の年齢も容姿も、そして男性経験の有無も不明でかなり小汚いとは言え、金貨１枚は極端だと優斗は考えた。しかし実際のところ、買付先で足元を見て、その程度で買

い取ると言う事は良く見られる光景だ。

「そもそもそん子、奴隷になる事、承諾してるん？」

「当たり前だ。なぁ？」

外套のフードが縦に動き、肯定を示す。

優斗は勝ち誇ったような男と呆れ顔のアニーから目を離し、少女だと思われる外套とその傍らの青年に視線を向ける。

青年はこの件に乗り気でないのか、浮かない顔だ。少女自身に思い入れがあるのか、人身売買に抵抗があるのか不明だが、優斗はその姿に共感を覚える。

少女は変わらずその場に在るだけだが、ボロボロで汚れの目立つ外套姿からは、僅かにゴミの様な匂いが発せられている。匂いはそこまで酷くないが、場所柄、女性奴隷に施された香水や果物等の匂いが漂っているせいで際立っている。

「じゃあ、２枚」

「おい！」

「あんなぁ、お客さん。そもそもその相場自体が間違ってんねんで」

「はぁ！？　俺はちゃんと確認したぞ！」

「それ、店で売っとる子やろ？　あんた、こうた値段で売るアホがおるとでも思とるん？」

「そ、それでも1枚は安すぎだろうが！」

「仕入れた後、身なりととえたり、躾もせなあかんねんで？

相場はええとこ8枚くらいのもんや。それも、最高の状態で、や」

男が「うっ」とうめき声を上げ、勢いが消えた事で場の主導権が完全にアニーの支配下に落ちる。

優斗はここからが見どころだ、と思いながら、後で参考にする為

に聞き逃すまいと耳を澄ませる。

「で、金貨の相場変動があったせーで今は高く見積もって7枚。なんもわからんから、そこから全部引いたら1枚や」

「おい、さっき2枚って」

「聞きや。

7枚から生娘やないなら1枚。字が読めへんなら1枚。書けへんなら1枚。見てくれが悪うて2枚。体型が悪うて1枚引いた訳や。

確認せぇへんと即決するっちゅうんはそう言う事や。判ったか？」

アニーが示した減算方式の価格はあまりに適当な内容だが、商売と言うモノに疎い男をたじろがせるには十分で、その姿を見たアニーはため息を吐く。

こう言った手合いは、どこにでも一定数存在する。その中で、直接暴力を振るわない男はまだ善良な方なのだが、優斗にはこれ以上ない最悪な客を黙らせたように見え、心の中でアニーを称賛していた。

「わかったんなら1個ずつ聞いてくで」

「ちっ。わかったよ」

「とりあえず外套脱いで、顔見て、体型は触らせて貰うでな。んで、そっちん子にもあたしの質問に答えてもらうけど、ええな？」

「わかったから早くしろ」

男が促し、少女が一歩前に出る。

その瞬間、優斗は状況を観察しながら思い付いた、ある事を実行する事を決断する。

そして決意と同時に行動も開始した優斗は、立ち上がるとアニーに近づいて耳打ちする。

「俺も質問していい？」
「ヤダ」
「そこを何とか」
「キャリー商会に男店員がおるなんて広まったら大変やん」
「あー、そっか。じゃあ」
優斗は目標を変え、質の良い銅貨を手探りで1枚取り出しながら男に歩み寄る。

そして男の手を強引に取ると、銅貨を握らせながら営業スマイルを浮かべた。

「私はこの商会に買付にきた商人なのですが、良い商品が無く、困っていたのです」
「お、おう？」
手の中に押し付けられた銅貨を意識している男からは、生返事しか返ってこない。

優斗はまだ手を固定しており、男はその中身が確認出来ない。それに加えて唐突な行動に男が驚いている隙に、優斗は捲し立てる。

「彼女に触れないと誓います。ですから、少し質問をさせて頂いてもよろしいですか？」
「あ、あぁ」
「ありがとうございます。良き商品であれば、是非お願いします」
お願いしますと言う言葉を、驚きから解放された男は買取希望なのだと判断した。

それにより、無茶な値付けを防げると共に、手の中のお金が手に入ると考えた男は、にやりと笑う。そして優斗が離れた事で確認した銅貨が質の良い物である事を確認すると、再度口元を歪ませる。

「勿体無いなぁ」
「ちょっと考えてる事があって」
「商売の邪魔される気がするわ」
事実、状況次第では横取りを考えている優斗は苦笑いで返答する。

しかし、ある程度安全に試せる機会に色々と試しておきたい優斗は、説得の為に少し声のトーンを落としてアニーに囁きかける。

「後でお詫び、しますから」
「詫び？」
「もちろん、手伝ってくれるならお礼も」
その言葉に何か反論しようとしたアニーが、何かに気付いたのか、言葉を飲み込む。

そしてにやりと笑い、横目で2人の客を確認すると、優斗の耳の近くに口を寄せ、囁き返す。

「ほんなら、ご飯奢ってや」
「お安い御用です」
「ちっと値ぇ張る、えぇとこがあるんよ。今夜、空けといてな？」
「了解です」
交渉が成立し、優斗とアニーが揃って少女の前に並ぶ。

そしてお互いに見詰め合う。賄賂を払ってまで優斗が問いたい質問が何なのか興味を持ったアニーが、視線で先手を譲る事を伝えると、優斗はそれに応えて頷く。

「貴方はどうして奴隷になる事を良しとしたんですか？」
優斗の質問は、奴隷商人にとってもある程度重要なモノで、優斗

が聞かずともアニーが問うた可能性は高い質問だった。

平凡でアニーにとっては詰まらない質問ではあったが、まだそれだけで評価を決めるのは早計だと考えたアニーは、少女の答えを待つ優斗から視線を外し、自身も少女に視線を向ける。

「村の為」

素っ気なく答えた声は少ししゃがれていた。

女性にしては低めで、しかし十分に少女らしい声色の返答に、優斗は喉でも傷めているのかと考えながら、足りない情報を追加で問う。

「凶作の影響で？」

「違う」

「では、何でしょう？」

「盗賊」

少女の端的で装飾ない返答に、優斗は元来寡黙なのか、それとも喉を傷めている影響なのかと考える。

そして帰って来た答えを受け、次は隣に居る大人しそうな青年に視線を向ける。

「あ、いや。その、盗賊が来て、村を荒らして行ったせいで、何も無くなったんです」

「もしかして、火事があったと言う件ですか？」

「あぁ、そうだ。いや、そうです」

「じゃあ、何故貴方何ですか？」

視線を戻して優斗が問うと、少女は一瞬も躊躇う事なく、理由を

口にする。

「お父さんが守った村だから」

「……詳しい説明を聞いても？」

「私も守る」

「……すいません、説明して貰ってもいいですか？」

優斗は同じ内容の台詞を、今度は男達に向けて発する。

それを受けた男達は嫌そうな顔をしたが、お互いに顔を見合わせるとしぶしぶ口を開く。

優斗の隣では、アニーが面倒な事を代わりに聞いてくれたと、内心喜んでいた。

「村が盗賊に襲われたんだ。で、ルーツさんが退治してくれた」

「その時に盗賊が村に火を付けたせいでたくさんの建物が焼けてしまったんです。

その時、倉庫にあった貯えも全部……」

「で、村が飢え無い為には金がいる」

ルーツと言うのはきっと少女の父親の名前なのだろうと考えながら、優斗は眉を潜める。

彼らの言う事は、一見筋が通っている。

しかしそこに感情論を少しだけ挟む事により、大きな違和感が発生する事は明らかだ。優斗はその疑問を解消すべく、男達に質問を続ける。

「この子の父親は？」

「その時の傷で死んだ」

「うちの妹も、危ないところを助けて貰ったのに……」

2人が何かを思い出して遠い目をしている光景に、優斗の違和感は膨れ上がる一方だ。

優斗はその確信に触れるべく、少し多めに息を吸い込むと、視線を尖らせて2人を見据える。

「では何故、村を救った人の娘を奴隷に？」

「……」

「……」

返って来た沈黙に、優斗は続く言葉を発するべきか、悩む。

悩んでいる優斗。黙り続けている2人。

そんな沈黙の空間を破ったのは、静観していたアニーだった。

「まぁ？　親無しっちゅうんは後腐れないしな？」

「あぁ、なるほど」

「ちがっ！　いや、違わない。けど、違うんだ！　そう、仕方が無かったんだ！」

「何がでしょうか？」

大人しかった青年の激昂に、優斗は内心で驚きながらも静かに問い返す。

優斗の対応が冷静であったせいか、青年の勢いはすぐに窄み気味になり、しかし言葉は惰性の様な勢いで続く。

「うちの村は小さいから、売れるような娘は俺の妹か、この人の娘くらいしか……」

その言葉で、優斗とアニーは大まかな状況を理解する。

お金を得る為に人を売ると考えた時の候補を消去法で考えると、

まず復興に必要な男手が外され、値の安い割に一部の頃柄に置いて非常に役立つ老人も外れる。残るのは、女・子供だ。
そこから更に、なるべく高く売れて一番移動の手間がかからないと言う条件が付属すれば、やはり若い女性が売られるがセオリーだ。フレイの村がそうであったように。

「なるほど」
「仕方なかったんだ！　俺だってルーツさんには感謝してるし、娘さんに申し訳ないとも思ってる！　でも！」
「まぁ、落ち着け。なぁ、商人さんよ。俺らはさっさと売って金が欲しいんだ。もうこの辺でいいだろう？」
「失礼しました。では、次の質問をさせて頂きます」
今まで居丈高だった男からの静かな言葉に、優斗はまた少女に向き直る。

そしてその様子から、男も今の状況にもろ手を挙げて賛成していないのだろうと、優斗は考えた。
もしかすると、ある程度の値で売れなければ、次は娘や妹を売ると脅されてここに来ているのでは、とも考えて、優斗には盗賊に襲われた事も含め、彼らに対する同情が生まれていた。

「家事、身の回りの世話、火の準備は出来ますか」
少女がこくりと首肯するが、優斗はどれに対する返答なのか迷い、迂闊な質問方法に反省する事になる。

優斗は同じ質問を重ねる事を嫌い、あえて何も言わないのであればきっと全て大丈夫なんだろうと解釈した。
次の質問はと口を開こうした優斗だが、それをまだ思い浮かんでいなかった為、ならばそれを考えている間にアニーと交代する方が効率的だと考え、提案する。

「アニー、一度交代しよう」
「はいはい。じゃあ、とりあえず外套脱いでくれる？」
首肯した少女はもぞもぞと動くと、外套を脱ぎ捨てる。

外套が床に落ちた後に現れたのは、ぼさぼさの長い髪を携えた少女だった。
光の加減でアッシュブロンドにも見える淡い金色の髪は色あせ気味な上に汚れており、顔を半分以上隠している。隠れている顔も、そして服も汚く、全体的に薄汚れている印象だ。しかもその顔には、あざが出来ている。

「ん？　その顔どうしたん？」
「殴られた」
「ち、違うぞ」
アニーが視線を投げかけると、男2人が狼狽える。

それはきっと、盗賊の仕業なんだろうと考えたのは優斗と同じで、アニーはそこからもう1つの可能性を思い付いていた。

「あんた、男と寝た事ある？」
「お父さんと」
「あー、そやな。盗賊に乱暴されへんかった？」
「殴られた」
「だけ？」
「手を押さえられたから、蹴って逃げた」
珍しく長い言葉で行われた少女の説明に、アニーと優斗が顔を見合わせる。

少女は小さく、優斗の首か顎あたりまでしかない。そんな小さな

少女が、盗賊を蹴り飛ばし、逃亡を図ったと言うのだ。

アニーはそれを信じられなかったが、その真偽を確認する意味はなく、最終的には別の方法でアニーの問うた事柄は確認する事になると結論すると、次の質問に移る。

「ほなら、歳は？」
「判らない」
「は？　親から聞いてないん？」
「お父さんも知らなかった」
拾われた子なのだろうかと考えながら、アニーは仕方なく外見から年齢を推測する。

年齢と言うのは、若い女性を買っていく客にとってそれなりに重要な事だ。
極端な話、年齢不詳で売っている場合、若く見える年寄と言う可能性もある。そうなれば使える期間も違えば、体力の衰える時期も違うので、どうしても価格の基本が悪い方を前提となってしまう。

「２０超えてる事はあらへん？」
「……判らない」
「収穫の回数とかで数えてへんかった？」
「してない」
これはお手上げだ、とアニーは頭をかく。

見た目から１０代半ばから後半と予想される少女。
アニーが質問を続ける中、優斗はそんな少女を観察し、どの程度自分の望む条件に沿っているのか確認して行く。

優斗が今、欲しているのは人手だ。

しかし、優斗の提示する労働条件は、アニーからその条件ならば奴隷を買う方がと指摘された程であり、普通の求人方法では人員確保が難しいと判断していた。ならば、奴隷になるしかない相手ならば良い返事を貰えるのでは、と優斗は考えた。

目の前の少女は、優斗の望む最低限の能力を有すると自称している。そして何より、村の為に身を投げ出せる人間だ。きちんと恩を売れば、裏切られても根こそぎやられる可能性は低いと考えられる。条件としては上々だ。

「ちょっと触るで」
「うん」
「……ん？」
体型を確認する為に少女の身体を上から順に撫でていたアニーの手が、途中で止まる。

しかしそれも一瞬の事で、何事も無かったかの様に鳩尾の上辺りで止まった手が再び動き出し、手のひらが足先までを撫でて行く。
服の上からとは言え、少女はそれに対して少しだけ顔を顰めている。

優斗の方は、なぞられた体型が痩せ型、しかしいわゆるスレンダーなものではなく、むしろ幼児体型に近いモノである事を確認しながら、無意識に少女の胸へと視線を向ける。
アニーがなぞった事で一瞬だけ確認出来た、フレイよりも、そして下手をすればシャオジーよりも小さいのでは思える程の胸。今は厚手の服で判りづらいが、引っ掛かりも無く撫で続けていた事からも、膨らみらしい膨らみはないのだろうと優斗は予想していた。

優斗がそんな事を考えていたのは、セクハラ目的と言う訳ではな

い。

もちろん、若い男である優斗にそう言った思考が欠片も存在しなかった訳ではないが、主な理由は彼女の女性的な魅力についての考察だ。それはアニーの値付けを予想をする為であり、同時に自分が雇う場合のあれこれを考える為の1要素としてだ。

「まぁ、大体金貨2枚くらいやね。それでえぇなら、奥で色々確認させて貰うわ」

「2枚、って、おい。安すぎるだろうが」

「そんな事あらへんで。

年齢不詳、目元がきつい以外はこれといって特徴のあらへん娘やし、何よりめっちゃ汚いやん」

「それはそうだが……」

「文字も数字も出来へんみたいやし、化粧の仕方も知らんとか、教える事多すぎやわ」

キャリー商会では、奴隷に最低限の教育を施してから売り出す事が多い。

直ぐに使うならもちろん、何かを仕込むつもりでも基本的な知識や、奴隷としての基本的な振る舞いを教えて置く事は重要だ。

奴隷契約時にある程度の基礎知識は覚える事になるが、それでも不足する部分と言うのは多い。

「それは困る！」

「やったら他行きや。まぁ、えぇとこ1枚半やと思うけど。

一応、色は付けたったんやで？」

男はまたアニーに詰め寄り、青年は顔面蒼白で立ちすくんでいる。

優斗はその光景に、やはり人質を取られているのだろうかと考えながら、アニーから解放された少女と再度相対する。

「幾ら必要か知ってる？」
「判らない」
「じゃあ、逃げる気はない？」
優斗の爆弾発言に、静かだった場が、一瞬だけ更に静寂を深める。

男は唖然としており、青年は質問を受けた少女に視線を向けている。アニーはと言うと、聞いた瞬間は驚いていたが、今は口元に愉悦を浮かべて優斗を観察している。
優斗はそれぞれ別の意図を持った視線を全員分向けられながら、それを気にする事なく、続きを口にする。

「逃げる気があるなら手伝うけど」
「ざけんなっ！？」
アニーとの交渉を中断していた男が、我に返った瞬間に頭を沸騰させ、優斗に掴みかかる。

アニーはそれに対して何か行動を起こす事はせず、相変わらず興味深そうに2人を見つめ、青年は真剣な面持ちで少女の方を見つめている。
しかし優斗は気にすることなく、身をねじると首から上を少女に向け、その姿を見据える。

「話を聞く限り、今の君には村を救う義理は無いと思うんだけど、どうかな？」
「黙れ！　部外者は黙ってろ！」
激昂する男が腕を振り上げ、優斗は身を固くする。

しかし、やり過ぎたかと反省する優斗にその腕が振り下ろされる事は無なかった。

何故なら、ずっと隣に居た少女が、男の服の裾を掴み、それを止めたからだ。

少女は首を横に振る事で否定を示し、それを見た男はしぶしぶ手を離す。

優斗の方は、手を離されて一瞬よろけたがなんとか立て直し、営業スマイルを浮かべると懲りずに再度少女に向き直る。

「お父さんが守った村だから？」

「そう」

「それだけ？」

「……違う」

「理由を聞いても？」

「そう、教えられた」

相変わらずシンプルな回答を完全に理解した訳ではなかったが、優斗は十分だと満足して少女に礼を告げる。

少女が小さく頷いた事を確認した優斗は、今度は男に向かい、質問を口にする。

「お金、どの程度必要なんですか？」

「は？」

「まず、荷馬車一杯の食糧です」

「おい！？」

横から口を出した青年に男が抗議するが、青年はそれを無視し、優斗から視線を外す事はない。

優斗も見返す事で見詰め合う形になり、お互いの思惑の欠片を視線で交換する。

青年から見れば、優斗は普通より安く奴隷を仕入れようと、奴隷

商を介さずに買い物をしようとしている商人に見えていた。故に青年は、アニーの提示額以上であっても買い取ってくれるだろうと予想した。そして商人であれば買い取り交渉にも心得があると考え、ならば現金で無く現物であれば、多少吹っかけても乗って来るのではないかと言う思い付きを実行した。

それを何となく把握した優斗は、彼らの望む最低限を把握した上で、それ以外に何が必要なのかを知る必要があると考えた。しかし、あまり乗り気である事をおおっぴらにするのは良くない、とも考えて遠まわしに質問を重ねて行く。

「それなら金貨2枚で十分過ぎるのでは？」
「焼けたり、壊れたりした家を再建する為に釘や道具を買いたいんです」
「他には？」
「生活用品もかなり焼けてしまったので……」
「具体的には？」
「ぐたいてき？」
「何が欲しいんですか？」
「あぁ、えっと。鍋などの銅製品です」
「そうですか。ちなみに村の粉ひき小屋は？」
「へ？」
「無事ですか？」
「は、はい。村から離れたところにあったので」
「判りました。ありがとうございます」
優斗がお礼を告げ、身体ごと視線を逸らした事で、青年は肩を落とす。

口を挟むタイミングが見つからず、結果無視された形になっていた男が青年に文句を言う為に詰め寄り、アニーだけが動向を見守る

中、優斗は少女の前に立つ。

優斗はこれから行う交渉について思いを馳せながら、改めて目の前の少女を観察する。

一見ではお世辞にも可愛いとは言えない薄汚れた格好で、臭って来る程に不潔。別の意味で、綺麗ではない。

そこだけ見れば良くない事だらけだが、そんな状態でも最低限とは言えきっちりと受け答えが出来、その上で村の為に身を投げ出す覚悟がある。そう言った精神的な意味では、優斗にとっては十分に掘り出し者だった。外見については、手を入れる事である程度整える事が可能だ。

「荷馬車一杯の食糧と生活用品や再建用品を積んだ荷馬車を村に送り込む費用、約金貨3枚分を私から借りる気はありませんか？」

優斗と正対する少女は、その言葉が理解出来ないのか、少しだけ眉を潜める。

優斗の方は、金貨3枚は妥当なのだろうかと考えていた為、そんな少女の態度に気付かず、そのままの勢いで条件提示を開始する。

「もちろん、タダで貸す訳でなく、代わりに私の元で働いて貰います」

「……？」

少女は僅かに首をかしげるが、優斗の説明はまだ終わらず、言葉が続いて行く。

「仕事の内容は基本的に私の身の回りの世話です。料理洗濯等の家事はもちろん、火の番もして貰う事になると思います。それ以外にも色々ありますが、その辺りは要相談で」

「……」

少女は優斗の発する言葉を出来る範囲で聞き取り、把握する為に真っ直ぐ優斗を見つめている。

それを、理解しているのだ、と判断した優斗は、最後まで一気に説明してしまおうと、次の言葉を発する。

その間も男が青年に詰め寄っている為、２人はまだ気づいておらず、唯一気づいているアニーは、相変わらず楽しそうにその光景を観察していた。

「契約期間は借金返済までです。あ、そういえば契約権はありますか？」

「契約権？」

「判らないなら後で確認すると言う事で。月給は公国銀貨１枚でどうですか？」

その発言に最も驚いたのはアニーだった。

それは奴隷寸前の、言い換えれば行くあての無い、稼ぐ技能も無いであろう人間に提示するにはあまりに高額だったからだ。

優斗がその額を提示した理由は、昔、ユーシアの使用人がその額で働いていると聞いたからだ。

更に言えば、平素であれば金貨１枚の相場は銀貨３３枚～３５枚の範囲であり、この額ならば昇給を含めても十分な雇用契約期間を確保出来ると判断したからでもある。

これは奴隷を買う事に類似する行為であるが、決定的に違うのは、逃げ出す事が出来ると言う点だ。

契約権を失っても農民として過ごす分には困る事は少なく、嫁に

行くのであればほとんど問題がないと言っても過言ではない。それは普通ならば看過できない問題点だが、優斗にとっては自分の行動に対する指標兼免罪符となる。

「奴隷になるよりは良いと思いますよ」

優斗はそう呟くと、最後の説明をする為に小さく息を吸った。

それはアニーに人を雇うに当たって最大の難関だと指摘された事柄だ。

「私は旅の行商人ですので、この地を離れる事になります。基本的な衣食住はこちらで準備するつもりですが、住む場所は固定されません。

移動は荷馬車なので、馬や荷馬車の手入れも覚えて貰う事になると思います」

それに対する少女の反応は、優斗が予想した通りこれまでで最大の反応を引き出す結果となる。具体的には、目を見開いて優斗を見つめている。

そして最後に嫌な点を前面に押し出す事で、後々のトラブルを避けようとした優斗の条件提示順は、別の意味で成功する事となった。

「その条件で、私に雇われませんか？」

「うん」

悩む事なく即答された以外、予想通りだった優斗は、首肯していた少女の頭から視線を外すと、そのまま体ごと振り返る。

そしていつの間にか優斗達のやり取りを見ていた男2人に向き直ると、営業スマイルで結果だけを告げる。

「お望みの物は明日買い付けます。
ちなみに、荷馬車には乗れますか？」

優斗の質問に、状況を把握出来ていない２人はただ首を縦に振って首肯する。
その反応に満足した優斗は、アニーに視線を向けると、声に出さず口の動きだけで、おねがい、と告げる。

アニーはそれに、指を一本立てる事で答えて了承すると、優斗がその意図を理解する前に行動を開始する。

「今日はもう店じまいや。やから明日また来てや」
「いや、まだ買取が」
「本人か保護者の承諾があらへん奴隷は買い取り出来やんの」
「承諾していると言っただろう！？」
アニーと彼女に詰め寄ろうとする男との間に、優斗が体を入れてそれを防ぐ。

男はその行動に驚いている間に、最悪でも標的を自分にかえなければと考えた優斗は、少しだけ真面目な表情を作って、男に告げる。

「今、本人がそれを取り消しました」
「何！？」
「彼女は私が雇う事になりましたので」

混乱する男と青年。
そんな２人に事情を説明し、納得させる為に優斗とアニーはそれなりに長い時間を費やした。そして本当に支払われるのかと言う疑いの視線を残し、２人がしぶしぶと立ち去るのを見送ると、優斗はまず、アニーへと視線を向ける。

「ありがとう」
「かまへんかまへん。お安い御用や」
「じゃあついでに、この子を綺麗にしといて貰える？」
「はぁ！？」
「協力、してくれるんでしょ？」
優斗の言葉に、アニーは考える。

そしてこの状況は自分に都合の良い展開を導く為に使えると思い付いたアニーは、にこりと笑うと少女の肩に手を置き、了承した旨を口にする。

「ついでに、今晩はうちで預かるわ」
「助かるけど、いいの？」
「もち。
何なら最低限の躾もしょーか？　安くしとくで」

優斗はそれを冗談だと考え、ほどほどによろしく、と告げると少女に笑いかける。
そしてまだ名前も聞いていないと気づいた優斗がそれを問う寸前、アニーによってそれが妨害されてしまう。

「やったら、いっぺん宿に戻りや」
「ん？　食事、奢る約束だし、このまま」
「もうちょいましな格好して来い、ちゅー事や」
「なるほど」
優斗はそれを、高級店に行く為に、と言う意味で受け取り、素直に頷く。

その後、待ち合わせ場所と時間を決めると、促されるままに宿に

戻った優斗は、公式な場に相応しい格好と言うモノを知らない事に気付き、仕方なくそれなりに見栄えする格好を吟味して待ち合わせ場所に向かう事となった。

横入り交渉（後書き）

優斗くんが人を雇おうと試みる話でした。

とは言え、名前すら確認していない辺りは、相変わらずな主人公なのでした。

準備と順番

集合場所である店内で1人待っていたアニーと合流した優斗は、着飾った姿を一頻り褒めると出された食事に舌鼓を打った。

着飾った女性を褒めるのは男の義務だと言う幼馴染の言葉を思い出しながらの言葉に、アニーは上機嫌だ。

「おいしい」
「やろ？　やろ？」
「うん。
そう言えば話は変わるけど、あの子は？」

優斗の問いに、アニーの目元が吊り上り、機嫌と共に眦が少しだけ傾く。
直後、可愛らしく頬を膨らませると、私は怒ってます、と主張する視線で優斗を見つめる。

その視線を受け、何か間違いを犯してしまったのかと焦っている優斗の姿に、アニーが噴き出す。

「優斗くん、かわえぇわ」
「え、いや、何？」
「お姉さんがえぇ事教えたる。
逢引の最中に他の女の話はご法度やで」

逢引、と言う言葉をデートに変換するのに2秒を要した優斗が時間差で驚く姿に、アニーがまた笑う。
一方、食事を奢ると言う事にそんな意図を感じていなかったどこ

ろか、何故あの少女が同伴していないのか疑問に思っていた優斗は、慣れない状況にまた焦る。

「あたし、あんな仕事しとるやん？　中々えぇ男との出会いが無いんよ」

「そうなの？」

言外に、そんな事ないでしょ、と告げる優斗の言葉に、アニーの表情が真剣なものとなる。

とは言えそれは本気で真剣な話をしようと言う訳ではなく、そう言う体裁を取りますと言うポーズの意味合いが強い。

「奴隷を買おうやなんて言うんは、大抵お金持ちなんよ」

「まぁ、そりゃそうか」

「年上過ぎるんは好みやないし」

「若いお金持ちも居るでしょ？」

「優斗くんも行商人なら判るやろ？」

そう問われた優斗は、アニーの言葉の意味を瞬時に察する事が出来た。

奴隷を買って出費を増やすような行商人は、幾らお金があっても下の下だ。本当の意味でお金持ちかつ優秀な行商人なら、奴隷を買う資金で荷物を仕入れ、利益を上げる。

ならば街商人を狙えば良い事なのだが、それが出来るならばこんな話にはならない。状況から鑑みるに、若い街商人や、将来有望な職人等はこの街にいないのだろうと優斗は予測した。少なくとも、アニーのお眼鏡に叶う相手が居ないのは確実だ。

「そうなると、俺もダメなんじゃ？」

「優斗くんはもう店持てるくらい稼いどるやん？　って言うか、店

構える為に店員候補探ししとったんちゃうん？」
虚を突かれた優斗の思考が、指摘された点へと向かう。

優斗の資金は、現在公国金貨にして１５０枚前後。それに加えて、２頭立ての荷馬車が１つと積荷が少々。
流通品の相場はある程度覚えたが、まだ物件の購入や賃貸の相場までは知らない優斗が参考に出来る数字はと考えて思い付いたのが、月給銀貨１枚と言うモノだった。仮にこれで１か月生活できるとすれば、優斗は既に一生分以上の生活費どころか、何回か人生をやり直せるくらいの額を確保出来ている事になる。

そんな事実に改めて気づいた優斗は、今後の身の振り方についてもっと真剣に考えるべきなのではと考え込んでしまう。

「ゆ・う・と・くん？」
「あ、ごめん」
「逢引中に他の事考えて、女の子んこと放っとくのもご法度やよ」
「はは、ほんとごめん」
乾いた笑いを浮かべながらも、優斗の思考はついつい自分の資産の方に流れて行く。

それを堰き止めようとする過程で、優斗は気づく。
きっとアニーは、自分の事を好いた訳ではなく、資産目的、とまでは言わないが、偶々条件に合う男が居たからモーションをかけているだけなのだろう、と。

「とりあえず俺は、王国首都とユーシアに用事があるんで、ここに定住する気はないけど？」
「じゃあじゃ、戻ってくる気は？」
「アニーなら、それまでにいい男見つけてそう」

「出会いがあればぇぇんやけどねぇ。奴隷買いに来るんは下心丸出しの男ばっかやからなぁ」

遠い目をするアニーを見て、優斗の表情が苦笑へと変わる。

優斗の感覚ではまだかなり若い年齢である22歳も、この国の女性であれば結婚を焦るどころか、地域によっては行き遅れだ。そこそこ大きな街で働いている分だけアニーはましな方だが、寒村なら早く子をもうけて、働き手にするなり売るなりする事は女性の重要な役割であり、それが出来ない女はどこかに欠陥があると思われても仕方がない。

「生憎、紹介できる男に心当たりがないなぁ」

「えぇてえぇて。優斗くんが迎えに来てくれれば」

そんな風に他愛のない会話を交わし合い、お互いに葡萄酒がほどよく回り始めた頃にお開きとなる。

飲み食いの代金はそれなりだったが、商談を除けば久しく会話らしい会話をしていなかった優斗にとっては、アニー過ごした時間はこの上ない癒しとなった。

翌日、優斗は荷馬車でキャリー商会へと向かっていた。

本日の優斗は、村の男2人と、必要な物の買い出しを行う予定だ。荷馬車ごとやって来たのは、既に仕入れた品をその計算の中に入れる為と言う理由もあるが、ついでに少女に服を届けて置こうとも考えたからだ。

キャリー商会に到着すると、優斗はカクスで受け取った女物の服が入った袋と、フレイの着ていた服の一部を入れた箱を持って中へ

と入る。

「いらっしゃい、って、優斗くんやん」
「おはよ、アニー」
「まだあの2人は来てへんよ。で、それは？」
「服」
優斗は袋を開け、むこうのデザインで作られた服を幾つか取り出す。

アニーは女性らしく目を輝かせて見つめており、優斗はその姿を可愛い反応だなと思いながら、手に取った服を差し出す。

「あの子に着せる用にと思って」
「えぇ！？　これ絹やん？」
「でもまぁ、貰いものだし」
色々な思惑や意図があったとはいえ、結果だけを見れば確かにこれらは貰った物だ。

そんな風に考えながら、優斗は袋から次々と服を取り出して行く。
そしてアニーの懇願する様な視線に苦笑しながらも軽く頷くと、選んだ1着を持って店の奥に消えて行くのを見送り、出した服を再度袋の中へと戻して行く。

アニーが店に戻って来たのは十分近く経った後で、扉の隙間から顔だけを出した状態だった。

「優斗くん、これどうやって着るん？」
「んー。羽織って、前合わせて胴部分、と言うか腰を帯で止める」
「帯て？」
「服に付いてた長い紐」

「あれ、服の一部やったん？　てっきりまとめる為の紐やと」
どたばたと音がして、アニーがまた奥へと戻って行く。

しかし今回は時間をかけず、すぐに戻って来る。
アニーは先ほど持って行った浴衣の合わせを右手で止めながら優斗の前に立つと、にっこりと笑って空いた左手で帯を突きつける。
優斗は思わずそれを受け取ると、アニーの顔に視線を向ける。

「着せて？」
「あー、いいですけど、その前に合わせる方向が逆なんで、直してきて下さい」
左前になっている浴衣を思わず敬語で指摘する優斗の言葉に、アニーは合わせ目に視線を落とす。

そして顔を上げると悪戯っぽく笑い、優斗からソレが見えない様に背中を向け、ゆっくりと合わせ目を開き、やはりゆっくりと右前に閉じて行く。
その光景にどきりとした優斗だが、何とか生唾を飲み込む様な失態を犯す事はせず、先ほど受け取った帯を広げ、中腰になるとアニーの腰に巻いていく。細い腰に手を回し、しかしなるべく触れない様に帯を締めて行くのは難儀な事この上なく、心臓に悪いなと思いながら、優斗は結び目を落ちない、されど多少緩めに締め付ける。

浴衣と言っても祭等で着る様な本格的な物ではなく、旅館にある様な簡素な物で、帯の結び目もかなり適当だ。しかも、アニーはそれなりに分厚い肌着や下着、と言うかドロワーズを履いているので、正直見栄えは良くない。

「なんか変やない？」
「肌着と言うか下着も専用の物があるから、このままだとねぇ」

「そうなん？」
「これ」
そう言って予め袋の上の方に出しておいた襦袢を差し出すと、アニーは不思議そうな顔をする。

この国の人間の感覚からすれば、それは肌着や下着ではなく、真っ白な服にしか見えない。それを肌着兼下着だと言われても、納得できる人間の方が少数だろう。

優斗がその説明をどうすべきか悩んでいると、商会の正面扉が開かれ、昨日の男2人が入って来る。
2人はアニーの珍妙な格好にげげんな顔をするが、優斗が村に必要な物の買い出しに行くから付いて来る事、そして荷馬車を借りるからそれに荷物を積み込んで持って行く様に告げると、頻りに頭を下げて優斗に感謝した。

優斗はアニーに服を預け、少女に好きな物を選ばせるように頼んでから2人を引き連れて食料品と建材、日用品を買い求める為に街へと繰り出した。
午前中一杯を費やして買い物を終えると、どちらにしても野宿だからと言う2人に、荷馬車は後でちゃんと返す様にと念を押すと送り出し、昼過ぎに商会へと戻る。

優斗が商会に到着し、仕入れた荷物を荷馬車に積み込んでから店内へと入って行くと、そこには相変わらずアニーが1人で居た。

「あ、おかえり優斗くん」
「ただいま。あ、借りた荷馬車、もう出発したから」
「そっか。急いどるんやね」

アニーが感心した様に感嘆する姿を見ながら、優斗は1度だけ大きく呼吸する。

昨日の夜に改めて気づき、ここに戻って来るまでにずっと考えていた事に、優斗はまた思いを馳せる。

自分の所持金は、一生暮らせるほどに多い。そんな大金の前であれば、よほど善良な人間でなければ、魔がさす事くらいはあるだろう。ならば、少女とは言え、見知らぬ他人と旅をすると言うリスクは、どの程度のものだろうか、と。

「あの子は？」
「奥におるよ」
「会っても？」
「もちろんええよ。っていうか、あたしの許可なんていらんやろ？」
「あぁ、そういえば。じゃあ、入っても？」
「やからええて」
苦笑するアニーに背中を見送られ、優斗は示された部屋――商談用の応接室――へと足を踏み入れる。

部屋の中には少女が1人。
扉側のソファーに座っている為顔を見る事は出来ないが、アッシュブロンドにも見えるくたびれた淡い金髪の頭が見えた。

少女は誰かが入って来た事に気付くと、ゆっくりとした動作で立ち上がり、優斗を振り返る。髪はまだ手入れされておらず、伸びっぱなしでぼさぼさだが、汚れは落とされている。もちろん、服も肌も清潔だ。

優斗は一旦視線を逸らし、少女を視界に入れないままに向かいの

ソファーへと腰かける。
そして、改めて見た少女の恰好は、優斗にとって予想外なモノだった。

少女が身に着けているスカートは短く、太ももが半分程見えている。ロングスカートが主流、と言うかミニスカートなど存在すらしないこの国で、絶対に選ばれる事がないと思っていた優斗にとって、これは誤算――しかも嬉しい誤算かもしれない――だった。

次に、スカートの終わりから見えている生足。
これがおかしい理由もスカートと同じで、この国で一般的な下着を履いていれば、制服にジャージ下、もしくはハーフパンツを履いた女子学生の様な姿になるはずだ。それにも関わらず、少女の腿にはそれが見られない。

最後に、胸部。
シンプルなシャツを押し出す大き目の膨らみは、昨日優斗が見た時には無かった物だ。偽物と言う可能性もあるが、それを確認する勇気は、優斗にはない。

シンプルな白系のシャツに渋いグリーン系のミニスカート、しかも生足――と言うか、裸足――と言う出で立ちの少女につい不躾な視線をぶつけてしまった優斗は、それに気づくと慌てて視線をその双眸へと向ける。

見上げる事で髪の合間から垣間見えた鋭い目つき。それは釣り目気味で、表情の堅さと相まって厳しい印象を受ける。

「えっと、取り合えず自己紹介かな。私は行商人の優斗と言います」
「……ヴィス」

「ヴィスさんね」
「ヴィスは愛称」
少女改めヴィスの返答に、優斗は一瞬だけ考え、それが敬称が不要であると言う意味だと理解する。

雇い、雇われの関係とは言え、四六時中共にいる相手と堅苦し過ぎるのはどうかと考えた優斗は、少しだけ残っている気恥しさと言う名の感情を乗り越え、同時に敬語もある程度消して行く事を決める。

「じゃあヴィス。俺の事は優斗でいいから」
「わかった」
変に改まってはいないが、相変わらず寡黙気味なヴィスの返答は端的だ。

声からにごりが消えている事から、優斗はそれを生来の物なのだろうと考えると、あえて指摘する事はしなかった。
聞けば必要な情報は返って来る。ならばそれで十分だ、と考えたのだ。

「とりあえず座って」
「うん」
ヴィスが、どん、と勢いよくソファーに腰かけると、空気を孕んだスカートが遅れてその大腿部へと落ちる。

その瞬間、優斗の視線はつい膨らんだスカートと脚の間へと向かい、その奥の闇を除いてしまう。
無防備だな、と思いながら、優斗はある重要な事に気付く。それは、果たして彼女は、下着を履いているのだろうか、と言う疑問だ。

この世界の下着は、基本的に紐で止めるタイプだ。そしてその技術力に合わせて、優斗がフレイに説明した下着は、いわゆる紐パンと言う部類の物だった。あれを一見して下着だと考えるのは、中々に難しい。

「あー、ヴィス」
「なに？」
「うん。いや。その服、どう？」
優斗が十代半ばから十代後半と言う年頃の娘さんに、下着履いてるの？　などと率直に聞けるはずもない。と言うか、聞いたらただの変態だ。

ならばなるべくさりげなく聞き出せるような状況を作らなければと、優斗は会話の道筋を必死に思索する。
優斗の予定では、この後ヴィスの日用品などを買いに行く事になっており、当然ヴィスを連れて行くつもりだ。ならばこれは、確認しておかなければ惨事を引き起こしかねない問題だ、と優斗は真剣に考えていた。

「着安い」
「そりゃよかった。でも、寒くない？」
「大丈夫」
「他の、街の子達と同じ様な服もあったけど、そっちはどうだった？」
「ひらひらして動きにくい」
ひらひら、と言われて優斗が思いついたのは、ゴシックロリータだった。

しかしすぐに、あれはひらひらと言うよりふりふりだと考え直し、余計な思考をしてしまったと思考の軌道修正を行う。

「それも結構、ひらひらしない？」
「する」
「いいの？」
「邪魔じゃない」
優斗の頭に思い浮かんだのは、ロングスカートで器用に走るフレイの姿だった。

確かに、ロングスカートは足を大きく広げにくい等の、動きを妨害する事がそれなりにある。しかし、ミニスカートでは別の意味で広げにくいのでは、と考えた優斗は、何重にも遠まわしにしてそれを口にしようとするが、良い言葉が思い付かず、結局率直に口にしてしまう。

「捲れたら大変じゃない？」
「……？」
その視線が、それは長くても同じだと告げている気がして、優斗は返答に窮する。

そんな優斗が思考する為に視線を宙に舞わせる。そしてそこでようやく、ソファーの隣に預けてあった袋と箱がある事に気付く。そしてそれならば確認する方法があると思い付き、それを実行すべく、静かに立ち上がると袋を手に持ち、中身を改める。
結果、カクスで受け取った下着は全てその中に納まっていた。それが意味する事は、すなわち。

「ちょ、待って待って」
「なに？」
「これ、下着。付け方、判る？」
首を横に振って否定するヴィスに、優斗は羞恥心を感じる余裕す

らなく、必死に履く方法の説明を行う。

兎にも角にも、下着を履かせなければと焦る優斗の説明を、ヴィスは不思議そうにしながらもきちんと聞いて、その使い方を覚えて行く。

説明を終えた優斗がそれを履くように告げると、ヴィスは彼の存在を気にする事なくスカートに手をかける。もちろん優斗は慌てて身体ごと視線を逸らし、着替えを見ない様に後ろを向いた。衣擦れの音が聞こえる中、優斗にはもしかして肌着も付けていないのではと言う疑惑が思い浮かんでいたが、今は実害がないのでそれは買い与える事で解決しようと決め、疲れ切った優斗は肩を落としながら商会を出る事になり、アニーに心配されてしまう。

そんなアニーに借りたぶかぶかの靴を履いたヴィスを引き連れた優斗達が、まず向かったのは服飾店だ。

目的は肌着と靴下、そして外套だ。

まずは靴下をと考えていた優斗だったが、ここまでの道のりでヴィスが注目を集めていた理由の1つである、足が丸出しであると言う点を解決すべきと考えた結果、購入したのは何時かフレイに買い与えたのと同じ、オーバーニーソックスとガーターベルトだった。

これにより、パッと見では太ももの露出は無くなったが、スカートが短いと言う理由は健在の為、大きな動きがあればガーターと白い脚がちらりが覗く事に変わりは無い。

そして肌着も何枚か購入すると、外套も適当な物をチョイスする。

次に向かったのは靴屋だ。

丈夫な編み上げブーツを購入したのだが、アニーがそれを履く為に床に座り込んでしまい、優斗は店員と顔を合わせて苦笑する事に

なる。そして履き終えると立ち上がり、床から脱いだ靴を持ち上げる為にヴィスが無防備にしゃがみ込んだ。後ろ側に優斗が居るにも関わらず、だ。当然、短いスカートの裾が持ち上がり、その中身が露わになる。優斗が目を逸らす暇もなく晒された白い下着は、靴屋の床に座り込んだ事で、尻の部分が汚れていた。

それを見た優斗が最初に思った事は、外套がない場所では下着で地面に座る事になるのでは、と言うものだった。

そんな思考の結果、優斗はもう一度服飾店に戻り、茶色のケープと、その下からマントの様な形で布を垂らす事で座る際に下敷きに出来る、と言う構造の服をヴィスに買い与えた。

そこまでした後に、優斗は、それならロングスカートかズボンを履かせればいいのでは、と気づく。

同時に、折角の目の保養なのだから、と思い浮かび、積極的に今の状況を受け入れている事に気づいた優斗は、自分がエロおやじ化しているのでは、とショックを受ける。

ショックを受けつつも思案した結果、嫌がってないどころか自分で選んだ物だし、色々な意味で手を出している訳ではないのだから問題になる点は1つも無い、と言う、天使と悪魔の例に倣えば、きっと悪魔が勝ったんだろうなと思える結論に落ち着いた。その時、あれを着ていると後ろからはもう見えないな、と自分が無意識に思っていた事を、優斗は気づかなかった。

一通りの買い物を終えた優斗達は、商会に戻らず、宿の方へと向かう。

優斗はヴィスを部屋に通すと、荷物を置いてから改めてその全身に視線を滑らせる。

シンプルだった服装は少しだけアクセントが付いたとは言え、胸元の膨らみを除けば華やかさは微々たるものだ。
それで十分だと言われればそれまでだが、優斗はもう少し何か欲しいな、と思い、だがまずはこちらを、と短剣を取り出すと、ヴィスを備え付けの椅子へ座るように促す。

「自分で切る？」
「やって」
買い物の時も変わらなかった端的な返答に、優斗はヴィスに宿で借りた大きな布を巻き付けると、戻って来る際中に話した、髪を切ると言う行動を開始する。

後ろは毛先を揃える程度。横はそれなり。前は眉のあたりまでナイフで髪を切り落として行く。優斗は慎重に、少しずつ切り落としては整えるを繰り返し、なんとかましな見栄えに整えると、布を取り払う。

「これでどう？」
「……」
鏡を見せると、沈黙の後、首肯が返ってきた事で優斗は安堵する。

そして安堵と共に、先ほど購入したばかりの櫛を取り出して髪を梳いていく。
ヴィスはそれに抵抗する事なく、優斗がリボンで髪を後ろで一括りにまとめるまで、大人しくしていた。

「一本、ケープの繋ぎ目にでも飾っとく？」
そう言って優斗が予備のリボンを差し出すと、ヴィスはこくりと頷いてケープを留めるボタンを隠す様に、リボンを飾って行く。

優斗はその仕草に目を引かれ、じっとヴィスの胸元を見つめる。しばらく見つめていた優斗は、それが別の意味で捉えられる可能性に気付くと、慌てて視線を逸らす。

「なに？」
「いやいや」
「……？」
「あー、うん」

ずっと気になって居る疑問のある優斗だが、結局はそれを問う事は出来ず、仕方なく次のやるべき事をこなす為に机の横へと移動する。

机の上から財布代わりの皮袋を持ち上げると、優斗はその中から銅貨を２０枚程取り出し、ヴィスに差し出す。

「準備金。必要な物があったら買っておいて」
「いいの？」
「うん。でも、明日は早朝出発だから、早めに戻って寝ておいて」

優斗の返答に、ヴィスは納得していなさそうな表情を浮かべているが、素直に肯定する。

その姿に声をかけるべきか悩んだ優斗だが、必要なら聞いて来るだろうと考え、あえて触れる事なく部屋のあちこちを指差して部屋の説明を始める。

「これ飲み水。こっちは燭台。油は有料だから必要なら声かけて。で、俺は隣の部屋だから。質問は？」
「ない」
「そう。あぁ、そう言えば夕食どうしよう？」

優斗の質問に、ヴィスが首をかしげる。

彼女は寡黙で無表情気味ではあるが、感情が乏しい訳ではない。優斗はそれを今日の買い物で理解し始めていたが、それが何を示すものなのか、まではまだ判らない。

そして判らなければ、問うしかない。

「大きな声じゃ言えないけど、この宿の食事はあんまり美味しくなかったから」

「そう」

「外食か、買って来るか、どっちがいい？」

「どっちでも」

「じゃあ、今から用事があるから、日が沈むまでには買って来る。待っててくれる？」

「わかった」

荷物の大部分を手に取ると、優斗は部屋を辞し、隣の部屋へと入る。そして荷物を大雑把に放り出すと、再び宿を出てキャリー商会へと向かう。

キャリー商会でアニーに挨拶を済ませ、惜しまれながら明日の早朝に出発する事を告げると、宿に荷馬車を戻し、また出かける。その足で夕食と朝食用のパンを買うと、ヴィスの部屋へと戻る。

「ただいま」

「おかえり」

挨拶を交わすと、それ以外は一言の会話も交わす事なく、食事の準備が進められる。

優斗が部屋に残して行った鞄から食器を取り出す間に、ヴィスは備え付けの水差しから杯に水を注ぐ。そしてベッドに近づけた机に

食事を乗せると、優斗が椅子に、ヴィスがベッドに座って食事が始まる。

優斗はそれを、懐かしいな、と感じながら、静かに食事を摂る。ヴィスの方は多少行儀悪く、がつがつと形容される勢いで食事をかき込んでいる。

「焦らなくても、まだあるから」

はしたないな、と思いながら、優斗は苦笑する。

食事の作法、とまではいかずとも、行儀くらいは業務命令で直すべきかなと考えつつ、優斗は自分用に買ってきた分をさりげなくヴィスの方へと移動させると、食事を続ける。

夕食を終えると、ごちそうさま、と呟く優斗に、ヴィスが不思議そうな表情を向けるが、優斗はそれを無視して片づけを開始する。

片付け終える頃には完全に日も沈んでおり、優斗はもう眠るようにヴィスに告げると、自分もまた部屋に戻り、床に就いた。

準備と順番（後書き）

アニーと会食し、ヴィスと買い物をする話でした。

優斗くんにとっての散財の激しい2日間が終わり、彼らは次なる目的地へと向かいます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5248s/

異世界行商譚

2012年1月1日00時28分発行